

大宰府政庁周辺官衙跡 V

— 不丁地区 遺物編 2 —

2014

九州歴史資料館



(1) 付札木簡



(2) 習書木簡他



(1) 墨書土器 ①



(2) 墨書土器 ②



(1) 碗各種・水滴



(2) 腰 帶



(1) 漆付着土器・濾布



(2) 鍛冶・鑄造関連遺物

序

九州歴史資料館では、平成13年度より『大宰府政庁跡』、『観世音寺』、『水城跡』と、大宰府史跡の発掘調査の正式報告書を刊行してまいりました。そして、平成21年度からは『大宰府政庁周辺官衙跡』の正式報告書の刊行を開始しております。

大宰府政庁周辺官衙跡は、古代律令国家における西海道統治の拠点であった官司大宰府の中心施設である、大宰府政庁の周辺に配置された官衙の遺跡です。この大宰府政庁跡をとりまく官衙遺跡は、現在9地区に分かれることが確認されており、大宰府政庁と共に大宰府機構を担った重要な役所であったと考えられています。

本報告書は、政庁周辺官衙跡の中でも政庁正面の西側に位置する不丁地区の正式報告書『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅴ－遺物編2－』です。これまで、『遺構編』、『遺物編1』と刊行してまいりましたが、この報告書はその続きとなるものです。

不丁地区の発掘調査では、8～9世紀代を中心とする大型掘立柱建物群が検出され、様々な遺構からは多数の遺物が出土しています。特に官衙に限る東の溝からは土器や瓦のほか、「紫草」や西海道各地の地名が記された木簡などが出土しており、大宰府と西海道諸国の繋がりを考える上でも注目されてきました。本書の発刊により、当該地区の歴史的重要性が地域住民や研究者に対して、さらに広く知っていただくこととなれば望外の喜びでございます。

最後になりましたが、大宰府史跡の発掘調査ならびに保存・整備に際しましては、日頃より大宰府史跡調査研究指導委員会をはじめ、文化庁・大宰府市教育委員会や地元の関係者各位から、多大の御指導と御協力をいただいております。ここに記して、深く感謝申し上げます。

平成26年3月31日

九州歴史資料館長 荒巻 俊彦

例 言

- 1 本書は、昭和46年度（1971）から福岡県が国庫補助を受け、福岡県教育委員会及び九州歴史資料館が発掘調査を実施した、大宰府政庁周辺官衙跡・不丁地区遺物編の正式報告書であり、大宰府政庁周辺官衙跡発掘調査報告書の第5集にあたる。
- 2 本書には、大宰府政庁周辺官衙跡の解明及び整備にかかる資料を得ることを目的として発掘調査を実施した大宰府史跡第14次・17次・76次・83次・84次・85次・87次・90次・98次・104次・110次・124次・129次・147次・187次・192次調査の成果を掲載した。
なお、図版編は次年度刊行の予定である。
- 3 発掘調査は、大宰府史跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに実施し、検出遺構及び出土遺物については各指導委員の御指導と御教示を得た。
- 4 本書掲載の遺物実測図は、各概報作成時の調査担当者及び補助員が実測したもののほか、新たに小田和利・杉原敏之・下原幸裕・岡田諭・小嶋篤・佐々木華子が実測したものである。木簡の釈読は、倉住靖彦（故人）、松川博一、酒井芳司（九州国立博物館展示課）が行った。
- 5 本書掲載の写真は、石丸洋・北岡伸一が撮影したものである。
- 6 出土遺物の整理・復原は、調査概要報告時の調査員及び補助員、ならびに次頁に示した平成25年度の調査組織の中に記した人員で行った。
- 7 図面の浄書は、高田いく子が行った。
- 8 目次と要旨の英訳は、西谷彰氏にお願いした。
- 9 本書の執筆分担は、以下のとおりである。

第Ⅲ章	(1)	1)	松川
		2)～4)	小田
	(2)	1)・2)	小田
	(3)	1)・2)・5)	小田
		3)	小嶋
		4)	岡田
第Ⅳ章	(1)		下原
	(2)	1)	下原
		2)	小嶋
		3)	杉原
第Ⅴ章	(1)		比佐陽一郎（福岡市経済観光文化局文化財部）
	(2)		大澤正己（株式会社 九州テクノロジー）
第Ⅵ章	(1)	1)・4)	小田
		2)・3)	杉原
	(2)	1)	下原
		2)	杉原
		3)	小嶋・小田
		4)	酒井
第Ⅶ章			小田
- 10 本書の編集は、調査研究班員の協力のもと杉原が行った。

〈平成25年度報告書作成関係者〉

九州歴史資料館

総括	館長	荒巻 俊彦
	副館長	篠田 隆行
庶務	総務室長	圓城寺紀子
	企画主査	長野 良博
	事務主査	青木 三保
	同	南里 成子
	主事	三好 洸一
報告	学芸調査室長	小田 和利
	調査研究班長	杉原 敏之
	学芸研究班長	松川 博一
	主任技師	下原 幸裕
		岡田 諭
		小嶋 篤
整理	整理補助員	高田いく子
	整理作業員	市川千香枝 中田千枝子 堤 直美
保存処理	文化財調査室	
	保存管理班長	加藤 和歳
	主任技師	小林 啓

不丁地区の発掘調査関係者については、『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅲ』に掲載している。

なお、『遺物編1』でも触れたとおり、不丁地区の報告に関わる調査区のうち14次・14次補足・76次・110次・104次調査については、調査区が今後正式報告書を刊行する予定の大楠地区に跨っている。そのため、二つの地区にわたって遺物の出土がみられるが、本書では原則的に不丁地区に属する遺構からの出土資料について報告を行うため、大楠地区に属する遺構の出土資料については掲載予定遺物の抽出にとどめた。ただし、14次・14次補足調査に関しては、大楠地区部分の調査が小面積で遺構もほとんどないことから、不丁地区に一括して整理を行っている。

これらの調査区の遺構配置と所属地区については、本書のFig.1と第Ⅵ章、『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅲ』を参照していただきたい。

〈遺物編1目次〉

	頁
第I章 緒言	1
(1) 報告書作成の経過	1
(2) 調査組織	1
(3) 報告書刊行計画	2
(4) 遺物の記録・整理方法	4
第II章 出土遺物	5
(1) 瓦塼類	5
1) 軒先瓦	5
2) 道具瓦類	25
3) 文字瓦	31
4) 丸・平瓦	38
(2) 土器・陶磁器類	44
1) 掘立柱建物	44
2) 柵	62
3) 溝	64
4) 井戸	152
5) 土坑	155
6) その他の遺構・層位	192
(3) 木製品	218
1) 漆製品	218
2) 容器	219
3) 食膳具	223
4) 武器	223
5) 農工具	225
6) 奢侈品	226
7) 履物	226
8) 祭祀具	227
9) 部材	230
10) 用途不明品	232
(4) 金属製品	233
1) 鉄製品	233
2) 銅製品	239
(5) 土製品	242
(6) 石製品	247
1) 滑石製品	247
2) 砥石	247
3) 五輪塔	252
4) 地覆石	252
5) 碁石	253
6) 水晶	256
7) 石器類	256
英文目次	257
英文要旨	258

目 次

	頁
第三章 特殊遺物	1
(1) 文字関連資料	1
1) 木 簡	1
2) 墨書土器	25
3) 刻書土器	51
4) 陶 硯	56
(2) 服飾品・ガラス製品	88
1) 腰 帯	88
2) ガラス製品	88
(3) 生産関連遺物	90
1) 製塩土器	90
2) 漆付着土器	105
3) 鍛冶・鋳造関連遺物	124
4) 白色物付着土器	152
5) 須恵器挿鉢	155
第四章 遺構・遺物の補遺 資料	157
(1) 遺構の補遺	157
(2) 遺物の補遺	159
1) 瓦埴類	159
2) 金属製品	166
3) 層位出土土器	167
第五章 理化学的分析調査	190
(1) 大宰府史跡187次調査及び鴻臚館跡から出土したガラス製品の材質調査	190
(2) 大宰府史跡不丁地区出土鍛冶・銅鋳造関連遺物の金属学的調査	193
第六章 遺構と遺物の検討	221
(1) 遺構とその変遷	221
1) 建物の配置と変遷	221
2) 区画施設	235
3) その他の遺構	241
4) 官衙の変遷	247
(2) 出土遺物からみた不丁官衙の特質	253
1) 瓦埴類	253
2) 土 器	261
3) 生産関連遺物	269
4) 出土文字資料	277
第七章 総 括	285
(1) はじめに	285
(2) 検出遺構	285
(3) 出土遺物	287
(4) おわりに	290
英文目次	291
英文要旨	292

Fig. 目 次

	頁
Fig. 1 不丁地区主要遺構配置図(1/600)	折込
Fig. 2 木簡実測図① (1/2)	3
Fig. 3 木簡実測図② (1/2)	7
Fig. 4 木簡実測図③ (1/2)	11
Fig. 5 木簡実測図④ (1/2)	15
Fig. 6 木簡実測図⑤ (1/2)	19
Fig. 7 木簡実測図⑥ (1/2)	23
Fig. 8 墨書土器実測図① (1/3)	26
Fig. 9 墨書土器実測図② (1/3)	28
Fig.10 墨書土器実測図③ (1/3)	30
Fig.11 墨書土器実測図④ (1/3)	32
Fig.12 墨書土器実測図⑤ (1/3)	34
Fig.13 墨書土器実測図⑥ (1/3)	36
Fig.14 墨書土器実測図⑦ (1/3)	38
Fig.15 墨書土器実測図⑧ (1/3)	39
Fig.16 墨書土器実測図⑨ (1/3)	41
Fig.17 墨書土器実測図⑩ (1/3)	43
Fig.18 墨書土器実測図⑪ (1/3)	45
Fig.19 墨書土器実測図⑫ (1/3)	47
Fig.20 刻書土器実測図① (1/3)	52
Fig.21 刻書土器実測図② (1/3)	53
Fig.22 定形硯分類図(1/6)	56
Fig.23 定形硯実測図① (1/3)	58
Fig.24 定形硯実測図② (1/3)	59
Fig.25 定形硯実測図③ (1/3)	61
Fig.26 定形硯実測図④ (1/3)	62
Fig.27 定形硯実測図⑤ (1/3)	63
Fig.28 定形硯実測図⑥ (1/3)	65
Fig.29 転用硯実測図① (1/3)	69
Fig.30 転用硯実測図② (1/3)	70
Fig.31 転用硯実測図③ (1/3)	71
Fig.32 転用硯実測図④ (1/3)	73
Fig.33 転用硯実測図⑤ (1/3)	74
Fig.34 転用硯実測図⑥ (1/3)	76
Fig.35 転用硯実測図⑦ (1/3)	77

Fig.36	転用硯実測図⑧ (1/3)	78
Fig.37	腰帯・ガラス製品実測図(2/3)	89
Fig.38	製塩土器分類図(1/6)	90
Fig.39	製塩土器実測図① (1/3)	92
Fig.40	製塩土器実測図② (1/3)	93
Fig.41	製塩土器実測図③ (1/3)	94
Fig.42	製塩土器実測図④ (1/3)	96
Fig.43	製塩土器実測図⑤ (1/3)	97
Fig.44	漆付着土器分類図(1/6)	105
Fig.45	漆付着土器実測図① (1/3)	107
Fig.46	漆付着土器実測図② (1/3)	108
Fig.47	漆付着土器実測図③ (1/3)	110
Fig.48	漆付着土器実測図④ (1/3)	112
Fig.49	漆付着土器実測図⑤ (1/3)	113
Fig.50	漆付着土器実測図⑥ (1/3)	114
Fig.51	漆付着土器実測図⑦ (1/3)	116
Fig.52	鍛冶・鋳造関連遺物実測図① (1/2)	125
Fig.53	鍛冶・鋳造関連遺物実測図② (1/2)	126
Fig.54	鍛冶・鋳造関連遺物実測図③ (1/2)	127
Fig.55	鍛冶・鋳造関連遺物実測図④ (1/2)	129
Fig.56	鍛冶・鋳造関連遺物実測図⑤ (1/2)	130
Fig.57	鍛冶・鋳造関連遺物実測図⑥ (1/2)	132
Fig.58	鍛冶・鋳造関連遺物実測図⑦ (1/2・1/3)	133
Fig.59	鍛冶・鋳造関連遺物実測図⑧ (1/2)	134
Fig.60	鍛冶・鋳造関連遺物実測図⑨ (1/2)	136
Fig.61	鍛冶・鋳造関連遺物実測図⑩ (1/2・1/3)	137
Fig.62	鍛冶・鋳造関連遺物実測図⑪ (1/3)	139
Fig.63	鍛冶・鋳造関連遺物実測図⑫ (1/3)	140
Fig.64	鍛冶・鋳造関連遺物実測図⑬ (1/3)	142
Fig.65	鍛冶・鋳造関連遺物実測図⑭ (1/2)	143
Fig.66	鍛冶・鋳造関連遺物実測図⑮ (1/2)	145
Fig.67	鍛冶・鋳造関連遺物実測図⑯ (1/2)	147
Fig.68	鍛冶・鋳造関連遺物実測図⑰ (1/2)	149
Fig.69	鍛冶・鋳造関連遺物実測図⑱ (1/3)	150
Fig.70	鍛冶・鋳造関連遺物実測図⑲ (1/3)	151
Fig.71	白色物付着土器実測図① (1/3)	153
Fig.72	白色物付着土器実測図② (1/3)	154
Fig.73	須恵器挿鉢実測図(1/3)	156

Fig.74	遺構実測図補遺(1/60)	158
Fig.75	軒平瓦実測図① (1/4)	161
Fig.76	軒平瓦実測図② (1/4)	162
Fig.77	無文磚実測図(1/4).....	165
Fig.78	金属製品実測図補遺(1/2).....	166
Fig.79	84次茶褐色土出土土器実測図(1/3)	168
Fig.80	84次灰褐色土・黒色粘質土出土土器実測図 (1/3)	170
Fig.81	84次灰褐色土出土陶磁器類実測図 (1/3)	171
Fig.82	85次暗褐色土出土土器実測図(1/3)	173
Fig.83	85次茶褐色土・98次黒茶色土出土土器実測図(1/3)	175
Fig.84	147次暗褐色土出土土器実測図① (1/3)	177
Fig.85	147次暗褐色土出土土器実測図② (1/3)	178
Fig.86	147次茶褐色土下層出土土器実測図① (1/3)	180
Fig.87	147次茶褐色土下層出土土器実測図② (1/3)	181
Fig.88	147次茶褐色土下層・茶褐色土出土土器実測図(1/3).....	182
Fig.89	187次黒色土・暗褐色土・その他の層出土土器実測図(1/3).....	184
Fig.90	不丁地区北半層位出土土器・陶磁器実測図(1/3).....	186
Fig.91	不丁地区南半層位出土土器・陶磁器実測図(1/3).....	188
Fig.92	大宰府・鴻臚館跡出土ガラス分析図	192
Fig.93	Fe-O系平衡状態図及び鍛造剥片3層分離型模式図.....	202
Fig.94	顕微鏡組織 ①.....	206
Fig.95	顕微鏡組織 ②.....	207
Fig.96	顕微鏡組織 ③.....	208
Fig.97	顕微鏡組織 ④.....	209
Fig.98	顕微鏡組織 ⑤.....	210
Fig.99	顕微鏡組織 ⑥.....	211
Fig.100	マクロ組織 ①.....	212
Fig.101	マクロ組織 ②.....	213
Fig.102	EPMA調査 ①.....	214
Fig.103	EPMA調査 ②.....	215
Fig.104	EPMA調査 ③.....	216
Fig.105	EPMA調査 ④.....	217
Fig.106	EPMA調査 ⑤.....	218
Fig.107	EPMA調査 ⑥.....	219
Fig.108	鉄滓中に酸化鉄(Wüstite:FeO) 存在理由模式図 (サンプル: 6AYM-B-9) ...	220
Fig.109	北区域の建物配置図(1/1,000)	223
Fig.110	中央区域の建物配置図(1/1,000)	226
Fig.111	南区域の建物配置図(1/1,000)	229

Fig.112	建物配列図(1/400)	231
Fig.113	不丁地区の位置と規模(1/2,000)	236
Fig.114	不丁地区諸遺構の動向(1/1,500)	242
Fig.115	不丁地区官衙の変遷図①	249
Fig.116	不丁地区官衙の変遷図②	251
Fig.117	SD2340出土瓦の様相(1/4・1/8)	256
Fig.118	SD2340出土土器群(1/6)	262
Fig.119	その他の基準土器群(1/6)	264
Fig.120	不丁地区土器期別変遷図(1/8)	267
Fig.121	不丁地区鍛冶・関連遺物分布図(1/1,000)	271
Fig.122	不丁地区製塩土器分布図(1/1,000)	274
Fig.123	不丁地区漆付着土器分布図(1/1,000)	276
Fig.124	不丁地区出土文字資料と分布図	278

Tab. 目 次

	頁	
Tab. 1	墨書土器一覧表	48
Tab. 2	刻書土器一覧表	55
Tab. 3	定形硯一覧表	66
Tab. 4	転用硯一覧表	80
Tab. 5	製塩土器出土遺構一覧表	98
Tab. 6	漆付着土器一覧表	117
Tab. 7	軒平瓦出土点数表	163
Tab. 8	供試材の履歴と調査項目	203
Tab. 9	供試材の組成	204
Tab.10	出土遺物の調査結果のまとめ	205
Tab.11	不丁地区建物・柵一覧表	232
Tab.12	不丁地区区画施設(溝)一覧表	239
Tab.13	その他遺構一覧表	245
Tab.14	SD2340出土瓦一覧 ①	255
Tab.15	SD2340出土瓦一覧 ②	258
Tab.16	SD2340層位と出土木簡相関表	263

PL. 目次

- 巻頭PL. 1 (1) 付札木簡 (2) 習書木簡他
巻頭PL. 2 (1) 墨書土器① (2) 墨書土器②
巻頭PL. 3 (1) 硯各種・水滴 (2) 腰帶
巻頭PL. 4 (1) 漆付着土器・濾布 (2) 鍛冶・鑄造関連遺物

〈表・図版編〉

- PL. 1 軒丸瓦
PL. 2 軒平瓦
PL. 3 道具瓦(鬼・塙・熨斗・面戸)
PL. 4 文字瓦
PL. 5 丸瓦
PL. 6 平瓦
PL. 7 建物出土土器
PL. 8 建物・柵出土土器
PL. 9 境界溝出土土器① (SD320)
PL.10 境界溝出土土器② (SD320)
PL.11 境界溝出土土器③ (SD320)
PL.12 境界溝出土土器④ (SD320)
PL.13 境界溝出土土器⑤ (SD2340)
PL.14 境界溝出土土器⑥ (SD2340)
PL.15 境界溝出土土器⑦ (SD2340)
PL.16 区画溝出土土器① (SD2335・2015)
PL.17 区画溝出土土器② (SD2015)
PL.18 区画溝出土土器③ (SD4037・4038)
PL.19 その他の溝出土土器(SD4566・4567他)
PL.20 その他の溝・井戸出土土器
PL.21 土坑出土土器① (SK388)
PL.22 土坑出土土器② (SK388・2007)
PL.23 土坑出土土器③ (SK2623～4573)
PL.24 土坑出土土器④ (SK4573・4575・4576)
PL.25 暗渠・瓦敷遺構・流路出土土器(SX2485・2532・2480)
PL.26 流路出土土器(SX2480・4050)
PL.27 溜り・その他出土土器(SX3838・4060・4065)
PL.28 その他出土土器(SX3838・4060・4065)
PL.29 木製品①(漆容器・容器)

- PL.30 木製品② (容器・食膳具)
- PL.31 木製品③ (武器・農工具)
- PL.32 木製品④ (奢侈物・履物・祭祀具)
- PL.33 木製品⑤ (祭祀具・部材・用途不明品)
- PL.34 木製品⑥ (用途不明品)
- PL.35 金属製品
- PL.36 土製品・滑石製品
- PL.37 石製品
- PL.38 木簡①
- PL.39 木簡②
- PL.40 木簡③
- PL.41 木簡④
- PL.42 木簡⑤
- PL.43 木簡⑥
- PL.44 墨書土器①
- PL.45 墨書土器②
- PL.46 墨書土器③
- PL.47 墨書・刻書土器
- PL.48 硯・転用硯①
- PL.49 硯・転用硯②
- PL.50 硯・転用硯③
- PL.51 硯・転用硯・腰帶・ガラス製品
- PL.52 製塩土器①
- PL.53 製塩土器②
- PL.54 製塩土器③
- PL.55 漆付着土器①
- PL.56 漆付着土器②
- PL.57 漆付着土器③
- PL.58 鍛冶・製鉄関連遺物
- PL.59 漆付着土器・白色物付着土器・播鉢
- PL.60 追補遺物
- PL.61 層位・出土遺物①
- PL.62 層位・出土遺物②

凡 例

- 1 本書掲載の遺構配置図は、国土調査法第Ⅱ座標系をもとに基準点を設け作成している。
- 2 遺構番号の頭に付した記号は、以下の遺構を示す。
SA：柵，SB：建物・門，SD：溝，SK：土坑，SX：その他
- 3 掲載図面中、土器の断面を黒塗りしたものは須恵器，網かけしたものは瓦器であることを示す。
- 4 土師器・陶磁器・瓦等の報告においては、以下の文献の型式分類・名称等に準じる。
 - ・土 師 器：九州歴史資料館 1981『大宰府史跡 昭和55年度発掘調査概報』
 - ・黒色土器：田中 琢 1967「古代・中世における手工業生産の発達（4）畿内」『日本の考古学』Ⅳ
 - ・陶 磁 器：森田勉・横田賢次郎 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心にして一」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館（文中では当分類を基本とし、補足的に以下の分類を使用する）
太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV』（文中では太宰府市分類と表記）
 - ・古 代 瓦：九州歴史資料館 2000『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』
高橋 章 2007「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧」の追加資料について『観世音寺一遺物編2一』九州歴史資料館（新型式の追加）
九州歴史資料館 2009『水城跡一下巻一』（新型式の追加）
九州歴史資料館 2011『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅱ一日吉地区一』（新型式の追加）
 - ・鬼 瓦：毛利光俊彦 1980「日本古代の鬼面文鬼瓦」『研究論集Ⅳ』奈良国立文化財研究所学報38冊

第三章 特殊遺物

(1) 文字関連資料

1) 木簡 (Fig.2~7, PL.38~43)

不丁地区調査では、当地区の東限の南北溝SD2340より、83・84・85・87・90・98・124次の7次にわたる調査で合計186点の木簡が出土した。その主要なものはすでに『大宰府史跡出土木簡概報(二)』(以下、『木簡概報2』)においてまとめられており、その後のものは各年度の『大宰府史跡発掘調査概報』(以下、『概報』)で逐次報告されている。『木簡概報2』においては、調査次數順ではなく内容別に分類し掲載している。本来、調査次數順ごとに掲載すべきところではあるが、木簡の出土が同一遺構であることや説明の重複を避け簡潔な解説を付すこと、『木簡概報2』との照合をしやすくすることなどを考慮し、『木簡概報2』の掲載順に従うことにした。『木簡概報2』後に出土および報告した木簡は、不丁地区出土木簡として通し番号とした。実測図は文字が判読可能なものや形状等が特徴的なものを中心に掲載した。なお、判読が不能な木簡や墨痕が確認できない木簡の写真は、省略したものがある。

以下、不丁地区出土木簡のうち、その約半数にあたる97点の木簡について釈文を示しつつ解説を加える。今回、釈文を掲載するに際してその再検討を行った。再検討にあたっては、これまでにあった指摘のほか、赤外線スキャナ・カメラ等の釈文判読に関わる機器の性能の向上や全国の木簡の出土例の飛躍的な増加によって、明らかに読み改めるべきと判断されるもの以外、『木簡概報2』や当該年度の『概報』掲載の釈文を尊重した。なお、釈文を改めたものや新たに判読できたものについては、木簡の個別解説の中で断るようになっている。

なお、記載内容は以下のとおりとした。木簡番号、釈文、大宰府史跡調査次数、概報木簡番号、法量(長さ・幅・厚さ、単位mm)、型式番号、解説である。概報の略称については、『大宰府史跡出土木簡概報(二)』を「木概2」とし、『大宰府史跡発掘調査概報』については、例えば『平成2年大宰府史跡調査概報』を「概H2」と表記している。

1 ・兵士合五十九人 □ □二人 兵士□三人
定役五十四 ^(筑前) □□兵士卅一
筑後兵士廿三

・天平六年四月廿一日 85次 木概2-148 270・40・4 6011

折損はみられるがほぼ完形品である。表面の墨はほとんど消失しており、その跡が盛り上がりがあるので文字を判読することができる。内容としては、兵士に関するものである。「五十九人」は特定の兵士の総人数にあたり、その割書の「□二人」「兵士□三人」「定役五十四」は59人の内訳、さらに割書の^(筑前)「□□兵士卅一」「筑後兵士廿三」は「定役五十四」の内訳と判断される。おそらく、「定役」の語もあることから大宰府に上番した兵士の内訳を記したものと考えられる。大宰府が所在する筑前だけではなく筑後からも兵士が上番していた可能性を示す⁽¹⁾。表面に対して裏面の墨の残りがよく、はっきりと「天平六年四月廿一日」の年月日が判読できる。天平6年は734年にあたり、『続日本紀』によれば、この日、天平4年8月に配置された西海道などの節度使が廃止されている。しかし、この木簡の内容との直接的な関わりは不明である。

2 ・三團兵士轆轤役宗形マ刀良早マ赤猪

・^[并カ]□二人^[卷カ]□ □ 90次 木概2-149 228・36・9 6011

右辺上部に若干損傷は見られるが、完形とみなしてよい。上半部の墨はうすく、肉眼による判読は容易ではない。「三團」は三つの軍団もしくは第3番目の軍団の意味と考えられる。前者であれば、筑前をはじめとした大宰府管内に所在した3軍団のことを指すと考えられるが、それが一国内の軍団なのか、それとも複数国の軍団を指すのかは不明である。後者の場合は平城宮跡出土の題籤軸に「肥後国第三益城軍団養老七年兵士歴名帳」と書かれた例もあることから第3番目の軍団を意味する可能性もある。今回、判読できていなかった5字目以下の3文字について、正倉院文書の「轆轤工」の文字と比較検討し「轆轤役」と判読した。「轆轤役」とは軍団兵士が従事した役務を指すと考えられる。天平10年(738)の『筑後国正税帳』に「造轆轤工」3人が大宰府へ上番している記事が見られ、木器等の製造に関わる工人と推定されている。軍団兵士が大宰府や国府において兵役以外の雑役に従事していたことは、『類聚三代格』天長3年(826)11月3日太政官符にみえる「名是兵士,実同役夫」や「飼丁草丁,貢上染物所,作紙所,大野城修理等,旧例皆以兵士充」などからも窺うことができる。

「宗形マ」はもともと筑前国宗像郡を本拠とする一族であるが、大宝2年(702)の西海道戸籍をみると、筑前国嶋郡川辺里や豊前国仲津郡丁里にも同氏が散見するほか、筑前国御笠郡大領に宗形部堅牛の名が見え、少なくとも北部九州に広く分布していたことが知られる。さらに「日下部」については全国的に広く分布しており、両名の氏の名から国や軍団を特定することは難しい。3団とありながら2名の兵士の名前しか確認できず、さらに裏面に「并二人」とあることから後者の第3番目の軍団の可能性が高いと考えられる。大宰府に上番していた兵士は、筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後の6国の軍団兵士であった可能性が指摘されている。ちなみに、この6国のうちで3団以上ある国は、筑前・筑後・肥前・肥後の4国である。

3 上日六十^[二カ]□ □ 90次 木概2-150 (142)・37・5 6019

上半部を欠き、損傷・腐食が著しく、これ以外の文字は確認できない。上日つまり勤務日数を記したものと考えられるが、いかなる職種の人物のものかは明らかでない。禄令給季禄条に「凡在京文武職事,及大宰・壱岐・対馬,皆依官位給禄,自八月至正月,上日一百廿日以上者,給春夏禄(下略)」とある。半年間で勤務日数120日が季禄支給要件の下限とすれば、62日は3ヶ月程度の上日数を集計したものであろうか。

4 ・ □本□

□ 十一月 日田山□□人
木工^[秦人マ山カ]□□□□孔館仕五日 九年
並月八
□□^[木工カ]秦人マ 遠雲館仕七日

・ 天平八年十一月 ※文字は表裏 天地 逆転

十一^[日カ]□□□□十二月

□□ □ 90次 木概2-151 (114)・(30)・4 6019

上端部を欠損するなど、損傷が著しい。表裏で天地が逆転しており、両者の筆致は異なっているが、表面第2行目の筆致は裏面のそれに近似している。内容としては、秦人部山孔と同じ

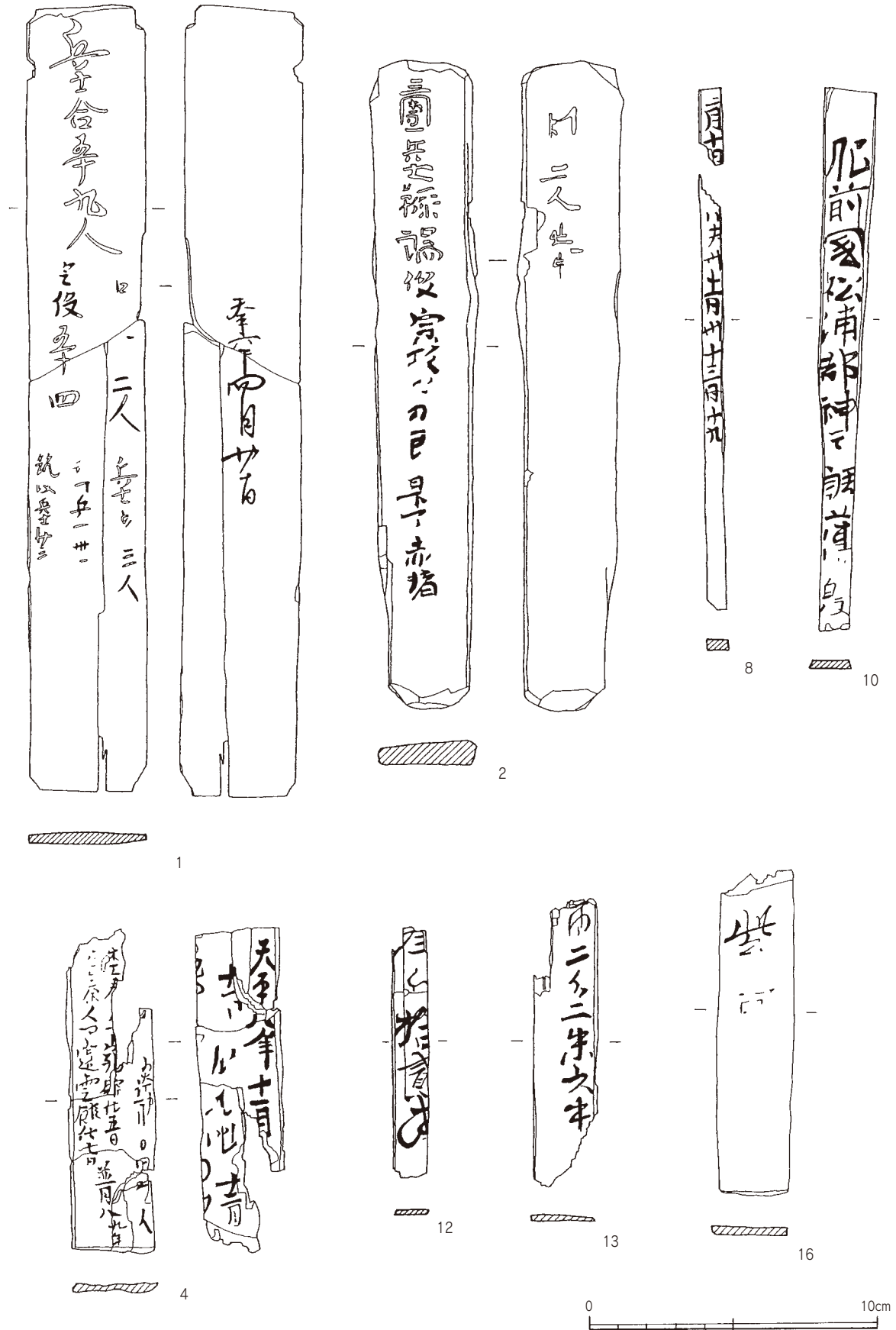


Fig.2 木簡実測図① (1/2)

く木工の秦人部遠雲の上番日数を記したものであろう。西海道において豊前国に秦部の分布が確認できるが、秦人部についてはあまり知られていない。「山孔」と「遠雲」も人名と判断したが、一般的にある名前ではない。「館仕」は、筑紫館（のちの鴻臚館）をはじめとした客館のほか、『菅家後集』にみえる「府の南館」のような大宰府官人の館舎などの可能性が想定されるが、木簡の断片的な内容から特定することは難しい。「九年」は裏面の「天平八年十一月」や1の「天平六年」の紀年銘から天平9年の蓋然性が高い。裏面の天平8年は736年にあたり、これも上日に関するものと推定されるが、腐蝕や損傷などのために第2行目が判読できず、詳細は不明である。

5 ・^(上カ)□一月 □田山□□
□□

・十 十一月□ ※文字は天地 逆転 90次 木概2-152 (65)・(20)・3 6081

断簡であり、具体的な内容は明らかでないが、記載内容や「田山」の字など、4と共通する点も多く、これも上日に関する木簡の可能性が考えられる。文字は表裏 天地 逆転である。

6 ・^(下カ)□神マ足嶋米

神マ□□□□

・□月廿六日 □ 87次 木概2-153 (90)・(24)・3 6081

上下両端を欠損し、全体的に黒ずんでいるため、肉眼ではほとんど判別できない。「下」が下神部というような氏姓の一部をなすのか、あるいは、たとえば「従五位下」の「下」のような位階の下階を示す文字であるのかは判断しがたい。かりに前者とすれば、下神氏については『新撰姓氏録』未定雑姓の摂津国の部に「葛木襲津彦命男、腰褌宿祢之後也」と見えるが、下神部については明らかでない。裏面の第1字目も欠損部にかかっているが、「六」ないしは「九」のいずれかの文字が考えられる。

7 ・
廿二 宿奈
受 吳マ廣野
瓦工
受 使部三家連安
□ 受使マ他田^(入脱カ)舎千依
□ 料受□師伊福マ□□
□ 遠賀郡子弟名

・四月三日休□花百廿把 85次 木概2-154 (58)・(243)・4 6081

ここで表とした面は横材に利用しているが、最上段の墨書文字の位置からみて、現状ではきれいに成形されている。上段も二次的に切断されていると考えられる。第1行目の「遠賀郡」の上位には「筑前国」と記されていたのだろうが、現状では確認できない。第2行目の「□師」は「算師」などの専門業務に関わる官人が想起される。「伊福部」は美濃・因幡・出雲などにみられる氏名であるが、西海道ではあまり見られない。第3行目の「他田舎」は他田舎人部の意味であろう。第4行目の「三家連」は「三宅連」とも表記し、もともとは屯倉の管掌者であったことに由来する氏名で郡領級の地方豪族に多く見られる。西海道では筑前国早良郡に多く分布し、早良郡大領として三宅連黄金の名が確認できる。第4行目が他行と墨の濃さが異なっているが、これがいかなる理由か不明である。第5行目の「瓦工」は他行と書式を異にし、次行

の呉部広野にかかるものであろうか。第6行目の「吳」は「呉」の異体字であり、「呉部」である。第7行目の「廿二」と「宿奈」は1行として書かれているが、間が空いているので、本来は無関係かもしれない。「宿奈」は「宿奈麻呂」などの人名を指す可能性もあるが定かでない。内容的には遠賀郡（現福岡県遠賀郡）の出身者とくに郡司の子弟で大宰府の使部などになっている者の歴名であろう。これに見える四氏の氏名はいずれも周知のものであるが、彼らが遠賀郡を本貫としていたとすれば、その点でこの木簡は初見史料と言える。人名等の上の「受」の字が何を意味するかは不明である。なお、遠賀郡については、49・50に「岡郡」、51～53に「岡賀郡」と見える。裏面の9文字以下は今回「百廿把」と判読した。裏面は縦方向に墨書され、表面とは異筆であるが、両者がいかなる関係にあるのかは明らかでない。

8 二月十日……□夫卅十一日卅十三日廿九

85次 木概2-155 (26+145)・(7)・5 6081

4片に分かれて出土した。第2片以下は完全に接続するが、第1片は接続しない。形状的にも近似し同筆とみられるので同一個体と考えられる。ある年の2月における日ごとの何らかの集計であろうが、単位も記されていないので、具体的には明らかでない。「□夫」が何を指すのかも不明である。

9 ^(額)□田ア□

□

90次 木概2-156 (184)・25・5 6019

下端部の欠損は明らかであるが、上端については確認できず、一応原状を保つと判断した。「額」は「額」に通じるので、これは額田郡の意味であろうが、他の文字は判読できず、具体的なことは明らかでない。なお、西海道における額田部については、大宝2年の筑前国嶋郡川辺里の戸籍に額田部乎太売などの名が見えるし、また『和名抄』には筑前国早良郡額田部郷も見える。

10 肥前国松浦郡神戸調薄鰻

85次 木概2-157 (187)・(18)・3 6081

下端は折れ、左右両辺はともに二次的に切断されているが、上端は原形を保つようである。肥前国松浦郡は現在の佐賀県北部から長崎県北部を経て五島列島に至る地域に当たる。肥前国の神戸については、『新抄格勅符抄』所載の大同元年(806)牒に大宰神封として「田嶋神十六戸肥前国」が見える。田嶋神社は松浦郡（現佐賀県唐津市呼子町加部島）に鎮座する延喜式内の名神大社である。この木簡に見える神戸がその封戸であったという確証はないが、その可能性が大きいように思われる。なお、神祇令神戸条に見られるように、神戸の調庸は封主である神社に納め、その用途に充てられるのが原則であり、これに見える薄鰻も大宰府に貢進されたものではないだろう。また、この木簡の原形は明らかでないが、その内容から見てこれは文書的なものであり、おそらくは神祇令の前掲条にいう「国司檢校、申送所司」にかかわるようなものであったのではないだろうか。大宰府管内の鰻は「筑紫鰻」と呼ばれ、筑前・肥前・肥後・豊後・日向の5ヶ国から調・庸・中男作物として大宰府に納められた。とりわけ筑前国と肥前国は全国的にみても突出した生産量と加工品の種類の多さを誇った。

11 十七大□□

90次 木概2-158 (176)・(22)・6 6081

左右両辺の上部は原状を留めているが、各辺の損傷が著しい。「十七大」と「□□」は異筆

かとも考えられる。

- | | | | | | |
|----|--------------------------|-----|---------|--------------|------|
| 12 | □□拾貳□ | 85次 | 木概2-159 | (87)・(12)・2 | 6081 |
| 13 | 兩二分二朱 ^{〔之カ〕} □□ | 90次 | 木概2-160 | (101)・(22)・2 | 6081 |
| 14 | □ ^{〔四カ〕} 斗一升 | 85次 | 木概2-161 | (94)・20・4 | 6081 |
| 15 | □筒 | 90次 | 木概2-162 | (95)・21・3 | 6081 |

12は上下両端が折れ、左右両辺とも二次的に切断されている。13の左辺は原状をとどめるが他辺はいずれも損傷している。14の上端を除く3辺はほぼ原形を留める。裏面は平らではなく、若干丸みを持っている。15は上半部を欠損している。これらはいずれも何かの数量を記したものであるが、欠損のためそれが何であるかは明らかでない。また、原形の復元も難しい。

- | | | | | | |
|----|----|-----|---------|------------|------|
| 16 | 紫□ | 87次 | 木概2-163 | (114)・26・3 | 6081 |
|----|----|-----|---------|------------|------|

上半部が欠けている。赤外線画像によれば、第2字は「草」のようにも見えるが、極めて薄く、ごく部分的に墨痕が見られるのみであるので、断定はできない。紫草に関するものかとも考えられるが、詳細については明らかでない。

- | | | | | | |
|----|------|-----|---------|-------------|------|
| 17 | □祭祀□ | 85次 | 木概2-164 | (74)・(18)・3 | 6081 |
|----|------|-----|---------|-------------|------|

上下を欠く断簡であるので、具体的なことは明らかでないが、大宰府の祭祀に関わるものであろう。

- | | | | | | |
|----|----|-----|---------|-----------|------|
| 18 | 薄鯪 | 85次 | 木概2-165 | (53)・29・4 | 6081 |
|----|----|-----|---------|-----------|------|

上下を欠損しており、薄鯪は10にも見える。『延喜式』主計上によれば、それは筑前・肥前・豊後・日向など4国の調庸および壱岐島の調とされている。断簡であるので、この木簡の具体的な性格などは明らかでない。

- | | | | | | |
|----|-----|-----|---------|-------------|------|
| 19 | □□七 | 90次 | 木概2-166 | (55)・(15)・1 | 6081 |
|----|-----|-----|---------|-------------|------|

左辺は原状を保つが、他辺はいずれも損傷である。上位2字は判読できないので、詳細なことは明らかでない。

- | | | | | | |
|----|----------------------------------|--|--|--|--|
| 20 | ・□
□□□ ^{〔目カ〕} □
□ | | | | |
|----|----------------------------------|--|--|--|--|

- | | | | | |
|----|-----|---------|-------------|------|
| ・□ | 85次 | 木概2-167 | (80)・(16)・3 | 6081 |
|----|-----|---------|-------------|------|

表面2行目の第2・3字は推定できるが、他は欠損のために判読できない。また運筆から見れば、表裏両面では天地が逆転しているようでもあるが、部分的にしか残存していないので、断定はできない。

- | | | | | | |
|----|---------------|--|--|--|--|
| 21 | ・□
豊前国豊代□□ | | | | |
|----|---------------|--|--|--|--|

- | | | | | |
|---------|-----|---------|--------------|------|
| ・果安安安如如 | 85次 | 木概2-168 | (250)・(28)・2 | 6081 |
|---------|-----|---------|--------------|------|

上端と右辺は原状を留めているが、左辺はかなり薄い。左右2辺に切断されている。「豊前国」の国名が確認できるが、「豊代」の意味は明らかでない。地名かとも考えられるが、現在までのところ郡郷名をはじめ古代の地名としては知られていない。「前」の字の右側に墨痕が確認できるが、判読は難しく削り残しの可能性が高く、この点からも習書の可能性がある。裏面の「果安」は人名の可能性も皆無とはいえないが、その後の文字の重複や第3字以下が左に半角ほど

ずれている点も含めて、おそらくは表裏ともに習書と考えられる。

22 豊□ 90次 木概2-169 321・23・3 6081

原形は明らかでないが、墨書の位置から見れば、6065型式とみなすべきかもしれない。第2字は大部分を削り取られているが、第1字やかすかに残る字形などから推せば、「前」かとも考えられる。

23 豊□□

□

87次 木概2-170 (102)・(25)・4～9 6081

右辺は原状を保つと考えられるが、他は確認できない。表面はかなり削られており、上下両端では厚さが異なる。残存字形からは「豊前国」云々と記されているようにも考えられるが、現状では確認できず、それはあくまでも一つの推測にすぎない。

24 ・喚喚喚喚喚喚喚喚

喚^[取]取□

喚 取

・□喚喚□喚喚喚件

※文字は表裏 天地 逆転

府□仍附仍附附府府喚 85次 木概2-171 (243)・(31)・3 6081

上端の損傷を除けば、左辺を除く3辺はいずれもきれいに切断されている。これが本来の姿かは明らかではない。あるいは何かの材の転用であろうか。内容的には習書であり、表裏の判別は容易でない。削り残しの墨痕を除き、府・仍・附・喚・件・取(最)など6種29文字が記されている。あるいはいわゆる召喚状を意識したものであろうか。表裏では文字の天地が逆転している。裏面に数か所削り残しが確認できる。

25 三^[取]麦□三麦

83次 木概2-172 (190)・(20)・4 6081

左半部を欠いているが、「三麦」が繰り返されていることから見て、習書であろう。

26 ・□□□□□□ □

□^[取]

・□□□□□□□

85次 木概2-173 (240)・(20)・3 6081

上下両端ともに折損し、左辺も二次的に切断された可能性がある。両面とも墨が薄く、しかも半截されているので、文字の判読は容易でない。表面の第1・2字は「君」のようにも見えるが、旁部を欠失している可能性も考えられ、その場合には「郡」などの文字が想定される。表面も同じ文字の繰り返しかえしと判断されるので、内容的には両面とも習書とみなしてよいだろう。

27 □ 尊者上座者火急殿門進上宜 須良状 85次 木概2-174 (342)・31・2 6041

下端部の両端が細くなっており、長方形の材で羽子板状の柄をもつ封緘木簡の形態に近似している。紐をかけるための切り欠き部などは確認できないが、封緘木簡と考えられる。このことから第1字は「以」のようにも見えるが、第2字以下に比してかなり小さく、封に関わる記載の可能性はある。目上の人物に対して至急の書状に用いた封緘木簡で、差出人は「須良」と考えられている⁽²⁾。各文字は明瞭であり、「尊者の上座は、火急に殿門に進上す宜し。須良状す。」と読み下すことができ、日本語の語順、つまり和文表記が確認できる⁽³⁾。封緘木簡は本来、2枚の板で文書を挟むが、その対になるものは見つかっていない。ただし、封緘木簡のなかには、

1枚の板の側面Y字形の割り込みの間に文書を挟んで封緘し、封緘を解く際に2片に折るといような利用法もあったようである。本木簡の下端部を観察すると、分離する際に割けたような跡が認められる。SD2340出土の木簡の中では特異なものである。

28 ・造廳造造造廳造□廳□

・□□ 「大豆五斗」造造廳大 85次 木概2-175 (348)・43・5 6081

上下両端は折れているので、その原形は明らかではないが、本来は6011型式であったのだろう。内容的には習書であるが、「大豆五斗」は明らかに異筆であり、また削りの状況から見れば、この4文字は他に先行するものようである。とすれば、用済み後に転用され、そして習書されたのであろうが、この部分だけが削り残された理由は明らかでない。なお、この大豆がいかなる性格のものかも明らかではないが、仮に調庸制にかかわるものとした場合、『延喜式』主計上によれば、西海道では壱岐島の調として見える。賦役令義倉条では稲とほぼ同等に扱われ、また粟一斗に対して大豆二斗とされている。

29 □□□□ 87次 木概2-176 (84)・26・2 6081

赤外線画像によれば、5字以上の文字が認められるが、いずれも偏部を欠いているので、判読できない。

30 ・□□□□□

・合 □^(一) 87次 木概2-177 (92)・23・5 6081

左右2片に切断された状態で見つかった。表面では5文字確認できるが、判読は難しい。また、裏面下端の文字が左に片寄っており、「一」と断定するのは難しい。

31 ・ □□
之□
勤梨梨□□

・□□
□□ 87次 木概2-178 (155)・(19)・4 6081

各辺とも損傷している。裏面は文字が重複しているために判読できないが、両面ともに習書であろう。

32 ・□□ □ □ □

・□ □ 85次 木概2-179 (123)・(12)・3 6081

右辺は原状を保つようであるが、上端は明らかでなく、左辺と下端は二次的に切断されているようである。墨痕は両面に見られ、特に表面の第3字以下はかなり肉太の文字であり、上段2字とは性格を異にするようである。第1字は「白」、第2字は草冠の文字かと推定されるが、左半分を欠くので、詳細なことは明らかでない。裏面はかすかな墨痕が確認できるが判読は難しく、2字を想定しているが4字の可能性もある。

33 □□ □ □ 85次 木概2-180 (99)・(10)・3 6081

第一字は「屋」であろうか。

34 □□□ 90次 木概2-181 (69)・(10)・3 6081

3～4字分の墨痕が認められるが、いずれも左半部を欠いているので、文字は判読できない。

35 申申申 85次 木概2-182 (56)・(17)・2 6081

各辺とも損傷しているが、断面が右辺側だけが薄くなる三角形を呈しており、削り屑の一種

とみなすべきであろう。「申」の文字は政庁東北隅における第26次調査出土の木簡にも多く見られたように（『大宰府政庁跡』No.62～65木簡）、解文の事書にかかわる習書であろう。

36 更更 87次 木概2-183 (50)・(11)・2 6081

各辺ともに損傷している。現状から「更」の習書と推定したが、左辺が切断されていることからすれば、「便」のような「更」を旁とする文字の可能性も考えられる。しかし、その場合も習書であろう。

37 □□ 85次 木概2-184 73・17・5 6065

各辺はきれいに整形されている。左辺の切り込みは明らかに人工によるものであるが、いかなる木製品であるのかは明らかでない。墨書はこれの性格に関係するものであろうか。

38 □□^[鳥鳥カ] 90次 木概2-185 (132)・(44)・8 6081

各辺の損傷がひどい。現状では2字が見られるが、かなり左辺に片寄っている。面はかなり黒ずんでおり、判読は容易ではない。「鳥鳥」と推定されるが、左辺が現状を保つかどうか確認できず、「嶋」などのような「鳥」を旁とする文字の可能性も考えられる。習書とみられる。

39 □ □□

□□□□□□□□□□□□□□ 90次 木概2-186 (195)・(49)・6 6081

下端は原状を留めるが、他辺は損傷が著しい。これも肉眼では墨をほとんど判別できないが、赤外線画像では、2行にわたって墨痕が認められる。しかし、腐蝕が著しいため、それらはいずれも断片的であり、具体的には判読できない。

40 ・□□

・□□ 90次 木概2-187 (128)・37・5 6081

腐蝕が著しいため、肉眼では墨痕をほとんど判別できないが、赤外線画像では両面に認められる。しかし、いずれも断片的な墨痕であるので、具体的な文字は想定できない。

41 及 充 牛 百 □^分
西 □ □ □ 廿 西 門

90次 木概2-188 (37)・(152)・8 6081

横材に使用し、界線を刻んでいる。各辺は損傷している。上端でのその間隔は、右から29・20・29・30・36mmであり、必ずしも一定していない。上下両端を欠いているので、詳細なことは明らかではないが、何らかのテキストに基づいた習書の可能性も考えられる。なお、同時に出土した木簡の中にはこれと同質・同材と推定されるものが見られるが、現状での両辺は接続しない。

42 怡土郡紫草廿根 87次 木概2-189 110・21・4 6032

43 怡土郡紫草廿 87次 木概2-190 (102)・23・3 6039

42はほぼ完形、43は下半部を欠いている。両者とも表面はかなり黒ずんでおり、上半部に文字が認められるほかは判別しがたいが、赤外線画像ではほぼ完全に判読できる。他の例からみても、両者はもともと同文かつ同性格のものであったと考えられ、下半部を欠失している。

43の原形も本来は6032型式であったのであろう。怡土郡は筑前国のうちで、現在の福岡県糸島市の南半部に当たるが、歴史的には、3世紀代の伊都国（『魏志倭人伝』）、あるいは伊観県（『日本書紀』仲哀8年正月壬午条）などの故地として知られる。なお、観世音寺第45次調



Fig.4 木簡実測図③ (1/2)

査区からは、同種の木簡「^{〔郡カ〕}□□紫□甘根」が出土しており、大宰府から観世音寺に紫草の根がもたらされ、染料として使用されたと考えられており、近くに工房があったとされている⁽⁴⁾。

44 ・ 怡土郡□

・ □ 87次 木概2-191 (45)・(9)・4 6039

肉眼ではほとんど判別できないが、赤外線画像によれば、両面に墨書が認められる。他の例を参照すれば、第4字は「紫」の上端部かとも考えられるが、ごく小さな墨痕にすぎないので、断定はできない。裏面の文字は「良」を旁とするので、「根」の可能性も考えられるが、これの上位に墨痕は認められず、なお問題が残る。また、SD2340出土の紫草関係木簡のうち、原形の明らかでない69を除けば、表裏両面に記載されている例は他に見られず、この点からもこれが紫草に関するものかどうか検討を要するに思う。

45 糟屋郡紫草甘根 85次 木概2-192 138・27・4 6032

46 糟屋郡紫草甘根 87次 木概2-193 128・22・5 6032

ともに損傷は見られるが、原形を保ち、完形とみなしてよいだろう。46の墨は完全に消失しているが、その痕跡は明瞭であり、それによって十分に判読できる。「糟」に見られるように、両者の全体的な筆跡は似ているように思われるが、46の細部には不分明な点もあり、いまだ断定できないので、ここではその可能性が存することを指摘するにとどめる。なお、46の頸部に見える痕跡は結えつけられた紐の跡であろう。

47 屋^{〔郡カ〕}□伊賀^{〔黒米カ〕}□□ 87次 木概2-194 (146)・25・2 6081

上下両端部を欠損し、2片に折れ、腐蝕も著しい。両片の筆跡は近似しているので、もともと同一個体であり、木目などから両片は接続すると判断したが、腐蝕しているために断定はできない。記載内容からみれば、これは再考すべきかもしれないが、今は接続するものとみなしておく。西海道において「某屋郡」と称するのは筑前国糟屋郡だけである。「伊賀」がこの糟屋郡に続くことから推せば、これは地名の可能性があり、現福岡県粕屋郡町戸原地区の小字名に「伊賀」が見られるが、『和名抄』に記された同郡の郷名には見えない。下端の2字が「黒米」とすれば、いわゆる玄米の意味であるが、これがいかなる性格のものかは明らかでない。

48 ・ 筑紫^{〔滓カ〕} □屋^{〔郡カ〕} □

□□□□□^{〔前牛カ〕}

・ □□□□□

□□ 90次 木概2-195 (191)・(24)・6 6081

上端を欠損し、左辺も二次的に切断されているが、右辺と下端は原状をとどめているようである。47でも述べたように、西海道において「某屋郡」と称するのは筑前国糟屋郡だけであるが、第3字を「糟」とみなすことはできない。残存字形や意味が「糟」に通じることなどからそれを「滓」と推定したが、その墨痕は不鮮明であるため断定できないし、「滓屋郡」という用例についてもいまだ確認していない。第2・3字の間に墨痕は認められないが、筑紫が滓屋郡に対する国名を意識したものとすれば、この木簡は筑紫国が前後に分割された7世紀末ないしそれからさほど経ていない頃を下限とする時期のものである可能性も考えられる。しかし他に傍証史料は見られず、さらにはこれ自体が下半部からは一種の習書である可能性もあり、にわかには断じがたい。

49 ・岡郡全
 ・一編^{十根} 87次 木概2-196 91・18・3 6032

50 ・岡郡□□
 ・一編^十 87次 木概2-197 101・19・2 6032

49は上端の右辺、50は上端の両辺に欠損がみられるが、ほぼ原形を保っている。両者の墨書内容は若干異なり、また異筆のようでもあるが、内容的にはほぼ同質であろう。一編は十根からなるという意味であろうし、その物品名は記されていないが、単位の一つが根であることや66を参照すれば、これらも紫草に関するものと考えられる。岡郡は筑前国遠賀郡のことであるが、同郡については51～53に「岡賀」、7に「遠賀」が見える。このうち「岡」が最も古い表記であろうし、郡名表記法の1字から2字への改制が和銅6年(713)前後とすれば、この木簡の下限時期もある程度比定できるだろう。

51 岡賀郡紫草□□ 85次 木概2-198 137・21・4 6032

52 岡賀郡紫^{〔草カ〕}□□ 85次 木概2-199 116・23・4 6032

53 岡賀郡紫 85次 木概2-200 (85)・18・5 6039

それぞれに若干の損傷は見られるが完形に近いものであり、三者は同文・同型式のものであろう。前述のように、岡賀郡は筑前国遠賀郡のことであり、52は他の2点に比べてやや柁目が粗い。

54 加麻郡^{〔紫カ〕}□□ 85次 木概2-201 120・20・5 6032

左辺の頂部を若干欠いているが、ほぼ完形である。第4字は上端の一部が見える程度であるが、他の例から見て「紫」と推定できる。加麻郡は筑前国嘉麻郡であり、『日本書紀』には「鎌屯倉」が見える(安閑2年5月甲寅条)。現在の福岡県嘉穂郡東部に当たる。

55 ・夜須郡苦壹張
 ・調長大神マ道祖 85次 木概2-202 144・24・4 6032

完形品である。裏面の「大神マ道祖」は異筆であろう。苦は賦役令では調の副物として7丁で1張と見えるが、『延喜式』主計上では中男作物として2人で1枚とされている。養老元年(717)に調の副物と中男の調を廃し、中男作物を課すように改制されているので(『続日本紀』養老元年11月戊午条)、この苦が調の副物として納められたのであれば、木簡の下限時期もその前後に比定できるだろう。夜須郡は筑前国に属し、現在の福岡県朝倉郡西部に当たる。調長は観世音寺東辺築地東面部SK1285における第45次調査出土の8世紀中頃の須恵器皿の底部外面にも「調長」の墨書が見える⁽⁵⁾。また、『類聚三代格』弘仁13年(822)閏9月20日付の太政官符には、郡雑任と呼ばれる郡の下級官人として「調長二人」とある。筑前国の大神部としては大宝2年(702)の筑前国嶋郡川辺里戸籍にも「戸主大神部荒人」と見えるが、夜須郡のそれについては他に所見がない。大神部道祖の本貫が夜須郡であったとすれば、延喜式内社でもある同郡の於保奈牟智神社(福岡県朝倉郡筑前町弥永に鎮座、元大己貴神社)との関係が想起される。同社は『釈日本紀』所引の筑前国風土記逸文などに見える大三輪社に比定され、『新抄格勅符抄』所載の大同元年(806)牒では大神神として封戸62戸が充てられている。この封戸の施入の時期は史料等で明らかではなく、大神部道祖がその神戸であったとは断定できないにしてもその氏名からしても何らかの関係を有していたと考えてよいのではないだろうか。

56 夜須郡^{天平六年} 87次 木概2-203 98・18・2 6032

第6字は今回残存字画から「六」と判読した。他には記載されていないので、これの具体的な内容については明らかでない。天平6年は734年あたるとする。この型式で年紀が記されているのはこれと58だけであり、荷札であった可能性も考えられる。なお、55の木簡との関連性は不明である。

57 三井郡庸米六斗 87次 木概2-204 112・21・5 6011

とくに損傷らしいものは見えないので、一応6011型式に分類したが、記載内容からすれば、さらに検討を要する。三井郡は筑後国のうちで、現在の福岡県三井郡大刀洗町から久留米市にかけての地域に当たるが、『延喜式』民部上には「御井」郡と見える。また、『延喜式』主計上によれば、庸米は正丁一人に三斗とされている。

58 ・豊前^{〔国京都カ〕}□□□□
・□平八^{〔月カ〕}□九□ 87次 木概2-205 (76)・22・7 6039

腐蝕が著しく、肉眼ではほとんど判読できない。表面の第3～5字は、残存字形や「豊前」に続くことなどから、「国京都」と推定されるが、決め手に欠ける。豊前国京都郡とすれば、現在の福岡県京都郡地方に当たる。裏面はおそらく「天平8年9月」の意味であろう。天平8年は736年にあたる。56とともに荷札の可能性も考えられる。

59 進上豊後国海部郡真紫草^{〔斤カ〕}…□□□□ 90次 木概2-206 (70)・(14)・2,(25)・(15)・2 6081

両片はほぼ接続するようであるが、完全ではなく、断定はできない。他の紫草関係の木簡とは書式が異なっており、平城京二条大路出土の紫草の付札木簡と内容や形態が近似している。平城京のものは「進上」の前に「筑紫大宰」が付く。真紫草は紫草の一種ないしその状態を示すものであろうが、具体的には明らかでない。下片の第2字を「斤」とすれば、他の木簡に見える紫草が「斤」を指しているのと同じように、これはすでに染料に精製されたものを指しているのかもしれない。豊後国海部郡は大分県の南北海部郡に当たる。平城京二条大路出土木簡には、筑前国穂波・嘉麻郡、肥後国託麻郡、薩麻国からの紫草貢進木簡がみえる。いずれも同じ形態で紫草の種子を貢上した際の付札木簡もある。

60 大野加海マ郡 87次 木概2-207 96・23・5 6032

頂部はごくわずかな損傷が見られるが、ほぼ完形である。「加」をいかに解するか問題であるが、おそらくは大野郡と海部郡という意味であろう。とすれば、両郡とも豊後国のうちであり、隣接している。郡名だけであるので、具体的な内容などは明らかでない。

61 大野□ 87次 木概2-208 (52)・24・2 6039

上端の左右両辺および下半部を欠く。「大野」は豊後国大野郡を指すのであろうが、具体的なことは明らかでない。

62 大野郡黒葛 85次 木概2-209 (46)・19・2 6081

上半部を欠失し、下端部も若干の朽損がみられるが、上端以外は原状をとどめている。第1字は上半部を欠いているが、豊後国大野郡と判断した。黒葛は、賦役令では調の副物とされているが、『延喜式』主計上では中男作物として見え、西海道では豊前・豊後・肥後の3国に課されている。また、弘仁13年(822)閏9月20日付の太政官符には「採黒葛丁国別二人」と

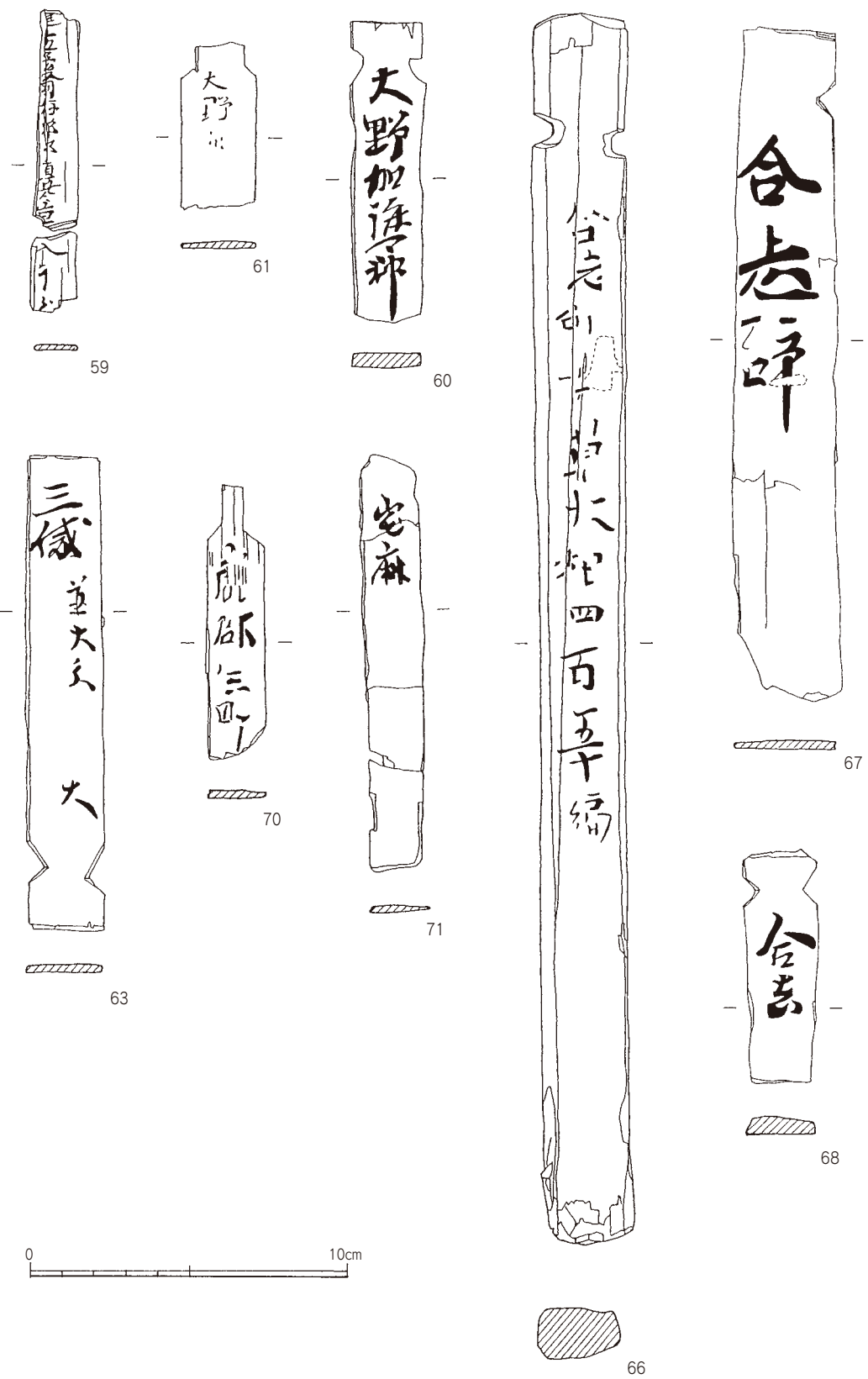


Fig.5 木簡実測図④ (1/2)

見える。

63 三袋^{並大分} 大 87次 木概2-210 151・25・3 6032

下端は原状をとどめているが、上半部はかなり腐蝕している。大宰府史跡出土の木簡では初見の型式であるが、本来は6031型式であったかもしれない。65を参照すれば、「大分」は豊後国大分郡の意味であろうが、「郡」が記されるべき位置の面は削り取られているので、それが記されていたかどうかは判別できない。また、「大」の位置は「三袋」および「並大分」のいずれからみてもずれているが、その意味は明らかでない。

64 ^[六袋カ] □□並□□ 87次 木概2-211 (156)・24・6 6081

上端部を欠き、かなり腐蝕しているため、肉眼ではほとんど判読できない。63と同質のものであろう。第4・5字目はわずかに墨痕が確認できるが、郡名と思われるが断定できない。

65 三袋^{並合志郡} 大 87次 木概2-212 (178)・29・4 6081

上端部かなり腐蝕している。第1字は「二」のようにも見えるが、その上にかすかな墨痕が認められるので、「三」と判読した。また第2字も損傷のため判読しがたいが、63から推せば、「袋」と断定してよいだろう。合志郡は肥後国のうちで、現在の熊本県菊池郡地方に当たる。63のような下端部近くの左右の切込みが見られるかは、有無を確認できない。

66 合志郡紫草大根四百五十編 87次 木概2-213 392・31・16 6032

棒状を呈し、中央部付近から上部には漆が付着しているが、わざわざ塗付したとは考えられないので、木簡としての用済み後に、漆を用いた何らかの作業の用具として再利用されたのであろう。紫草大根の例は他に見られないが、紫草のうちでも根の大きいものを指すのであろうか。49・50を参照すれば、450編は4500根ということになり、前掲のように、20根が紫草を整理する際の標準的な1単位とすれば、これはかなりの数量になる。この木簡の形状も特異であるが、それはかかる紫草の質や数量とも無関係ではないだろう。

67 合志□ 90次 木概2-214 (215)・(32)・3 6039

左辺は二次的に切断されており、本来は左辺にも切り込みが入れられていたのであろう。下端も二次的切断の可能性もある。第3字の旁は「平」のようにも見えるが、その上に小さな横棒があり、「平」と断定するには問題が残る。しかしそれは「郡」の旁ではなく、むしろかかる字形からは「評」の可能性が考えられるが、断定はできない。「評」とすれば、木簡の年代や溝への廃棄時期がかなり遡ることになるので慎重を要する。

68 合志 87次 木概2-215 74・24・6 6032

損傷らしきものはほとんどなく完形である。『和名抄』によれば、「合志」は肥後国合志郡のほか薩摩国高城郡の郷名としても見えるが、国郡名を省略し、郷名のみを記したと考えるのは不自然であり、やはり肥後国合志郡を指すとみなすべきであろう。

69 ・山鹿郡紫草

・ 託□ 大根 90次 木概2-216 (232)・(12)・6 6081

各辺ともに損傷している。「山鹿郡」は比較的明瞭であるが、「紫草」の墨はうすく、「草」には墨が付いている。裏面は判別が容易でない。第2字は「广」が見えるだけであるが、第1字を考慮すれば「麻」であろうか。とすれば、肥後国託麻郡の意味であろうし、それは現在の熊本県飽託郡に当たる。大根は66に見えるような紫草大根に関するものであろうか。

- 70 ^{〔山鹿カ〕} □□郡□□ 87次 木概2-217 (89)・18・3 6039
 上端左右・下半部の損傷や全面的な腐蝕などのために、肉眼では「郡」を推定できるだけで、ほとんど判読できない。赤外線画像によれば、「郡」を確認できるほか、第1・2字はその残存字形から「山」と推定される。山鹿郡は肥後国に属し、現在の熊本県鹿本郡・山鹿市付近に当たる。
- 71 宅麻 90次 木概2-218 (133)・19・2 6081
 下端は原状を留めているようであるが、他辺はいずれも腐蝕しており、原状を保つか確認できない。肥後国託麻郡を指すのであろうが、具体的なことは明らかでない。
- 72 薩麻國枯根 87次 木概2-219 259・44・6 6032
 下端に若干の損傷はみられるが、完形である。この種の木簡としてはかなり大きいですが、そのわりに文字は少なく、右辺の切り込みの入れ方も特徴的である。枯根が特定の植物を指すのか、あるいは植物の根の枯れたものを指すのかは明らかでない。
- 73 覺嶋六十四斗 87次 木概2-220 (184)・18・3 6081
 肉眼による判読は容易でなく、赤外線画像でもかなり不鮮明である。覺嶋は薩摩国鹿児島郡の意味であろうし、『続日本紀』天平宝字8年(764)12月是月条には「覺嶋信尔」と見える。
- 74 薩麻穎娃 87次 木概2-221 (88)・15・3 6081
 2片に折れ、上端を欠損しているが、左右両辺と下端は原状を保っている。薩摩郡穎娃郡の意味であろうが、国・郡が省略されている理由については明らかでない。『続日本紀』文武天皇4年(700)6月庚辰条には「衣評」が見える。現在は鹿児島県南九州市の旧穎娃町にあたる。
- 75 桑原郡 87次 木概2-222 102・18・3 6032
 右辺は小さな損傷が見られるがほぼ完形である。「桑」には異体字を用いている。桑原郡は大隅国のうちで、現在の鹿児島県始良郡の北部地域に当たる。これの史料的初見は『日本後紀』の延暦23年(804)3月庚子条であるが、大隅国では天平勝宝7年(755)5月に菱刈郡が建置されているので(『続日本紀』同月丁丑条)、桑原郡もこの間に建置されたとも言われている(『国史大辞典』桑原郡条)。しかし、桑原郡自体の建置を示す史料は見られず、共伴遺物などから見たSD2340の存続時期や同時に出土した木簡に天平年間の年紀が見られることなどから推せば、桑原郡はすでに天平年間には存在していたと考えられる。
- 76 大隅郡 87次 木概2-223 105・15・4 6032
 下端部表面に損傷がみられるが、全体的にはほぼ原形を保っている。大隅郡は大隅国のうちで、和銅6年(713)4月の大隅国の建置に際して他の3郡とともに日向国から分割された。現在の鹿児島県鹿屋市から肝属郡にかけての地域に当たる。
- 77 掩美嶋 90次 木概2-224 (50)・19・3 6039
 下半部を欠いているが、頂部および左右両辺は原状を留める。「掩美」は「あまみ」と読み、大きくは奄美諸島を指すとも考えられるが、やはりその中でも奄美大島を指すとみなした方が妥当であろう。掩美嶋については、『日本書紀』齊明天皇3年(657)7月己丑条に「海見嶋」や天武天皇11年(682)7月壬子条に「阿麻弥人」など見え、また『続日本紀』文武天皇3年(699)7月辛未条では「菴美」や和銅7年(714)12月戊丑条の「奄美」など見える。この木簡は大宰府と奄美島などのいわゆる南島との関係を考える上において注目されるが、他の部分を欠失しているので、具体的なことは明らかでない。

78 伊藍嶋竹^(五カ)□ 90次 木概2-225 (77)・18・4 6039

頭部右辺と下半部を欠損するが、頂部および左右両辺は原状を留める。全体的な筆跡は77によく似ている。伊藍島については他に所見史料がなく、その訓も明らかでない。77から推せば、これも南島の一島と考えられるが、具体的には比定できない。とくに、奄美諸島の一つである沖永良部島に比定する見解もあるが⁽⁶⁾、いまだ確認していない。今回新たに第4字以下を「竹五」と判読した。第5字目は下部を欠損しているため、「貢」の可能性も考える必要がある。南島から赤木だけでなく、竹が運ばれていたことを示す⁽⁷⁾。

79 毛郡三斤八両 87次 木概2-226 (168)・20・5 6081

第1字は上半部を書いているが、残存字形および西海道の郡名であることから「毛」と判断した。西海道において「某毛郡」と称するのは、筑後国三毛郡、豊前国上毛郡、同じく下毛郡、多嶺島(大隅国)熊毛郡の四郡であるが、これがそのいずれであるかは判断できない。この数量から推せば、何らかの調庸物に関するものであろう。

80 □□郡一^(題カ)□ 87次 木概2-227 (121)・37・5 6039

損傷がひどく、また面もかなり腐蝕している。第1・2字はわずかな墨痕が残るのみであるため、西海道の郡名であることを考慮しても、具体的な文字が想定できない。第5字は「籠」とみられるが、郡名と数量だけで物品名を欠くことになり、理解が難しい。

81 □□^(郡カ)□□ 85次 木概2-228 (99)・(13)・5 6039

第3字は「郡」と推定されるが、その名称は判読できない。

82 □□□□□ 85次 木概2-229 (87)・16・6 6039

第1字は「女」、第5字は「器」に近似するようにも見えるが、断定はできない。

83 ・鹿^(六カ)□□□

・斗

90次 木概2-230 (94)・19・3 6039

表面の第2字には墨がついているが、この文字を抹消しようとしたものではないだろう。

84 為班給筑前筑後肥等国遣基肆城稻穀隨^{大監正六上田中朝臣}□

98次 概61-1 264・34・6 6011

部分的には若干の損傷がみられるが、それは投棄後に受けたもののようであり、全体的には完形とみなしてよいだろう。「朝」字の下端部以下の面が二次的に削り取られているが、いかなる理由によるのかは明らかでない。頂部を円く整形し、さらに若干ながら裾窄みに作っていることからすれば、笏の可能性も指摘されているが、笏にしては短い。平城宮跡出土の3570号木簡のように、普通の木簡でも頂部を円く整形している例がみられるので、その一例かもしれない。墨の残存状況はいずれも良好である。まず、削り取られた部分には「臣」字以下の2～4文字が存したのであろうし、それは田中朝臣の名であったと考えられる。天平6年以前とされる播磨国郡稲帳(『大日本古文書』巻二―150頁)に「大宰府少監正六位上田中朝臣三上」がみえるが、「肥」は筑前、筑後両国ともに国名であるので、本来ならば、肥前ないし肥後と記すべきであるが、これがいかなる理由によるのかは明らかでない。内容は「筑前・筑後・肥等の国に班給せむがために、基肆城の稻穀を遣わして、大監正六(位)上田中(名欠)に隨はしむ」と読み下すことができる。大宰府が基肆城に貯蓄している稻穀を管内諸国に班給したことを示す文書木簡と考えられる。

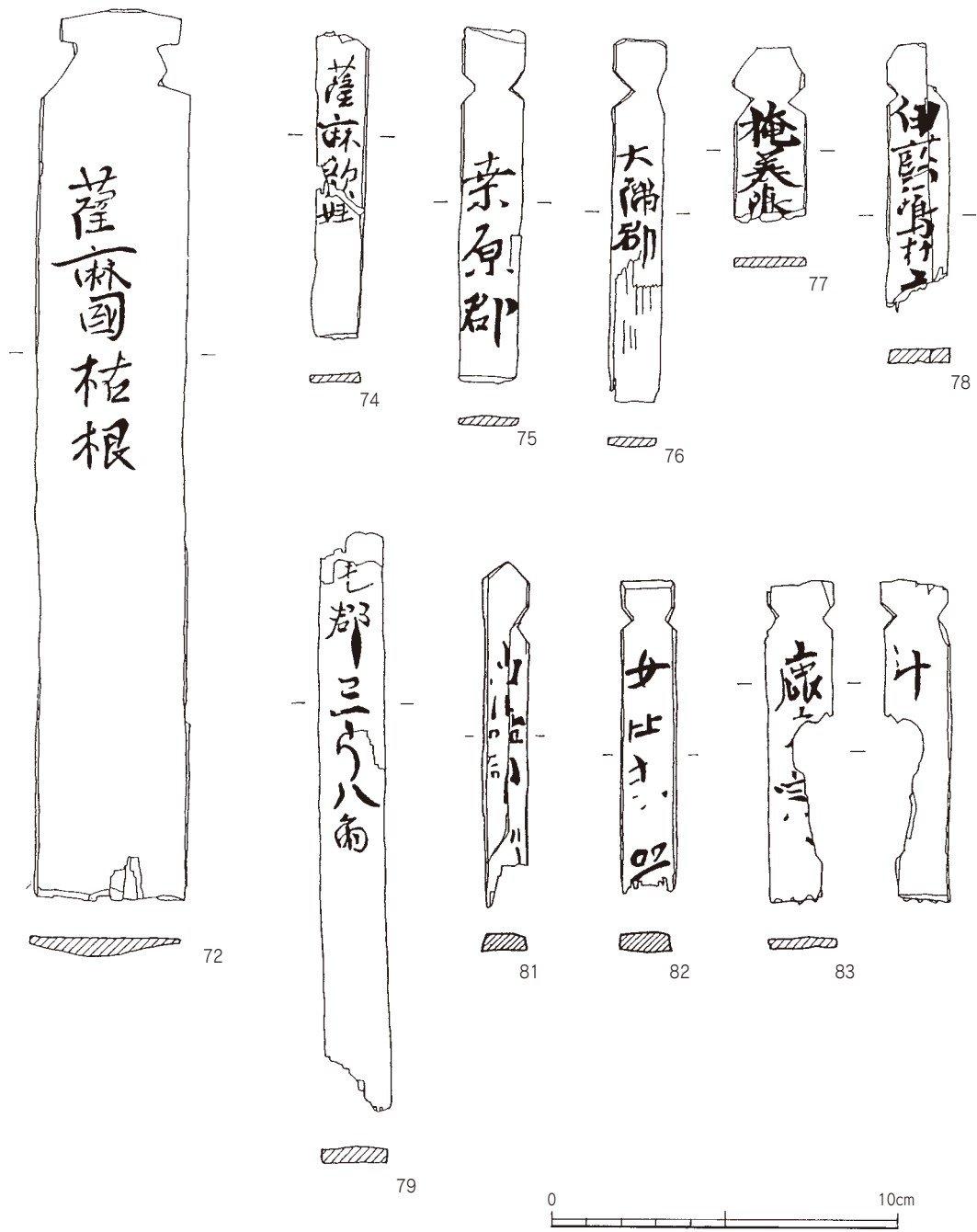


Fig.6 木簡実測図⑤ (1/2)

85 □一石五□

98次 概61-2 (65)・26・5 6039

頂部の右端が欠失し、下端の右半部は人工的に切断され、墨も薄くなっているため、その判別は容易でないが、赤外線画像により第1字は「葦」字に近似するが、最終画が直線ではなく、若干波うったようになっていて、あるいは他字とすべきかもしれない。第4字は下端部を欠くが、数字の可能性が大きいので、「五」と判断した。これの下位にもかすかな墨痕がみられ、字形をなさないが、文意からすれば、「斗」字かとも考えられる。

86 □□一斗

98次 概61-3 (116)・26・4 6081

上下両端を欠失しているが、記載内容から推せば、原形は付札的なものであろうか。第1字は「魚」あるいは魚偏の字のいずれとも判断できない。第2字は墨が不鮮明で、肉眼ではほとんど判断できないが、赤外線画像により「腊」字の可能性が考えられる。ちなみに、腊は魚肉の干物である。

87 肥後□廿

98次 概61-4 214・21・6 6032

左肩部から縦に割れて2片になっているが、4辺はなお原状をとどめていとみなすことができるので、一応6032型式と判断した。墨は比較的薄いですが、ほぼ中央部に4文字を確認できる。「肥後」の次の字は「国」字の可能性も考えられる。第4字は「十」字のようでもあるが、縦棒の左側にかすかながら墨痕がみられるので、「廿」と判断した。型式からみて、これの下位には単位を示す文字が記されると考えられるが、そこには墨痕は認められない。

88 ・ □□□七□□□九□□

・ □□□□ □

98次 概61-5 (207)・24・4 6081

上下両端を欠失し、さらに上下2片に折れている。左右両辺にも部分的に損傷がみられるが、これはいまだ原状をとどめていとみなしてよいだろう。表面ではほぼ全面にわたって墨痕が見られるが、腐蝕などのため不鮮明である。2文字を除いて具体的な文字の想定は困難である。第1字や「七」字などの大きさからみて、文字数は10字程度かと推定されるが、確認はできない。裏面にもかなりの墨痕がみられるが、表面以上に断片的であり、いずれも字形をなさず、文字数も推定できない。

89 □
八五□

十□^[長み]
十三□
三三八
□□人十三尺
□八□□□三
二□□□
七□□
八□
□

98次 概61-6 (56)・(118)・6 6081(6065の可能性あり)

横材に用い、左右両辺は原状をとどめているが、上辺は二次的に切断され、下辺は割れている。材の中央部で6行にわたって墨書されているが、面が若干腐蝕していることもあって、判読は容易でない。数字を連ねただけでいかなる意味をもつのかは明らかでない。

90 ・ マ豊田

□^[下カ]神マ津田良

□□^[マカ]廣磨 □乃牟

・ 十人

98次 概61-7 (117)・36・4 6081

上半部を欠失し、下端部にも若干の損傷が見られるが、これは原状をとどめているとみなしてよいだろう。また、左右両辺も原状を保っていると判断される。両面に墨書され、表面はそれほどでもないが、裏面の墨はきわめて薄く、かろうじて判断できる程度である。「^[下カ]□神マ」については6でも見られたが、この木簡も上半部を欠失しているので、詳細は知りえない。これは一種の歴名と推定される。裏面の「十人」はその総数を示したものであろうか。

91 ・ □□□□□□□□□□
 ・ □□□□□□□□

124次 概H2-1 (147)・28・3 6081(6019の可能性あり)

上半部を欠き、残存部はさらに半截されているが、それ以外は比較的丁寧に成形されている。表裏ともほぼ全面に墨書されているが、各文字は不鮮明である。いわゆる習書の可能性が考えられる。

92 □□□ 124次 概H-2-2 (65)・17・5 6081

上下両端を欠き、左右両辺も二次的に截断されていると判断される。3文字分の墨書が見え、かすかな墨痕にすぎない第2字はともかく、第1字は「月」あるいは「貝」、第3字は「毎」に近似するようでもあるが、截断されている可能性を考慮すれば、断定はできない。

93 肥後国飽田^[郡調綿カ]□□□^[伯屯カ]壹^[養老カ]□□ □□□□

124次 概H2-3 (237)・34・7 6039

表面がかなり腐蝕しているため、肉眼では「国」の一部が見えるだけであるが、赤外線画像では「肥後国」と「田」の輪郭をほぼたどることができ、「飽」は偏が判明し、その位置から肥後国の郡名を示すと考えられるので、飽田と判断した。第6字は不連続の墨痕が見える程度であるが、上位の文言から「郡」と推定され、残存字形もそれと矛盾しない。また、第9字については残存字形から「壹」と判断される。第7・8字は、「調綿」、第9・10字は「伯屯」である可能性を想定できる。この直下では損傷のため墨痕を確認することはできないが、その下には小書きされた4文字程度の墨痕が見られる。新たに第1・2文字が「養老」と判読できた。大宰府から肥後国に貢進された際の調綿木簡である。記載内容は平城宮跡出土木簡と同じであるが、上部に切込みの入れ方や樹種が異なる。大宰府のものは針葉樹で三角の切り込みがあるが、平城宮のものは広葉樹で台形の切り込みである。

94 □□□□五斤 124次 概H2-4 131・29・4 6032

頭部の左右両端を欠いているが、それ以外は原形をとどめている。全体的に不鮮明であるために文字の判読が難しい。辛うじて第6字は「斤」、第5字は数字とすれば「五」が考えられる。

95 乾^[年カ]□魚七斤 124次 概H2-5 142・23・3 6032

上端部は右辺を欠損し、しかもその表面ははぎ取られたようになっているが、左辺上端には切り込みの痕跡が認められるので、6032型式と判断した。『延喜式』主計上に中男作物として「火乾年魚」や「煮乾年魚」が見えることを考慮すれば、この木簡の場合は「乾」の上に「火」あるいは「煮」のいずれかの文字が存したのであろう。なお、同式では国ごとに輸すべき品目を列記しているが、西海道諸国のそれにはこの両者とも見えない。

96 ・ 石□□□□
 ・ 一^[匱カ]□

124次 概H2-6 (95)・31・6 6032

木肌が黒ずんでいるので、判読は容易でなく、肉眼では表裏とも第1字は判別できるが、他は墨痕がみえる程度にすぎない。赤外線画像などを参照すれば、表面の第2字は旁が「頁」であり、字形的には「瀬」が想定されるが、偏部が不鮮明であるため断定はできない。かりに「石瀬」と判読できるとすれば、第3字の偏は「馬」のようにも見えるので、『延喜式』に見える石瀬駅との関連性も考えられる。

97 □□□七斤 124次 概H2-7 222・28・5 6032

頭部の左右両辺を欠き、下半部で2片に折れているが、ほぼ完全に接合するので、全体的には原形を保っているときみなしうる。木肌が黒ずみ、肉眼では断片的な墨痕がかすかに見える程度にすぎない。第3字については、一般的な例や「七斤」に続くことなどから、「鮑」や「鰻」、あるいは「鮓」などの文字である可能性が考えられるが、上の文字が明らかでないので、これ以上の特定はできない。

なお、大楠地区ではあるが、不丁地区の西限の南北溝にあたるSD320からも、14・17次の2次にわたる調査で計26点の木簡が出土している。以下、それらの木簡の解説を付す。

98 ・忌忌忌□□□

□頓首^(啓)啓^(啓)啓^(啓)啓^(啓)白

□^(正)正正月 正月月月月月

・僞僞僞僞僞僞僞僞僞僞

頓頓頓頓頓^(浄浄浄カ) □□□□□

14次 木概1-6 (204)・37・4 6081

上下両端を折損している。習書であり、啓は「啓」の異体字である。

99 □□ □ □□十一年料 14次 木概2-231 272・20・6 6032

ほぼ完形である。「十一年」の上は年号と考えられ、残存の字形からは「延暦」の可能性はあるが、断定は難しい。延暦11年は792年に当たる。年号以下は割書となっている。

100 ・□□□□□東瀬^(瀬)瀬^(瀬)瀬^(瀬)

・□□□□□□□□□□月□ □□

□□□□□□□□ □ 14次 木概2-233 (262)・(19)・3 6081

左辺は二次的に切断され、右辺および上下両端も原形を保つか不明である。習書と考えられる。瀬は「頭がかしいで正しくない」という字義であるが、瀬は他例がなく字義は不明である。

101 ・□五 九斤二兩二分四^(鉄カ) □

□烏賊 □

□^(大カ)

・□□ 荒□七□ 14次 木概2-234 (96)・(20)・3 6081

右辺は上半部の欠損を除いて原形を留めているようであるが、左辺は二次的に切断され、上下両端は欠損している。表面の1行目と2行目の筆跡は異なっている。習書も含めて2度使用された可能性が高い。

102 ・遠遠遠□

・君 君 76次 木概2-235 (72)・(14)・2 6081

上下両端が折損しているため原形は明らかではない。表面は「遠」の習書と推定され、裏面は「君」としているが、右に部首がくる可能性も考えられる。

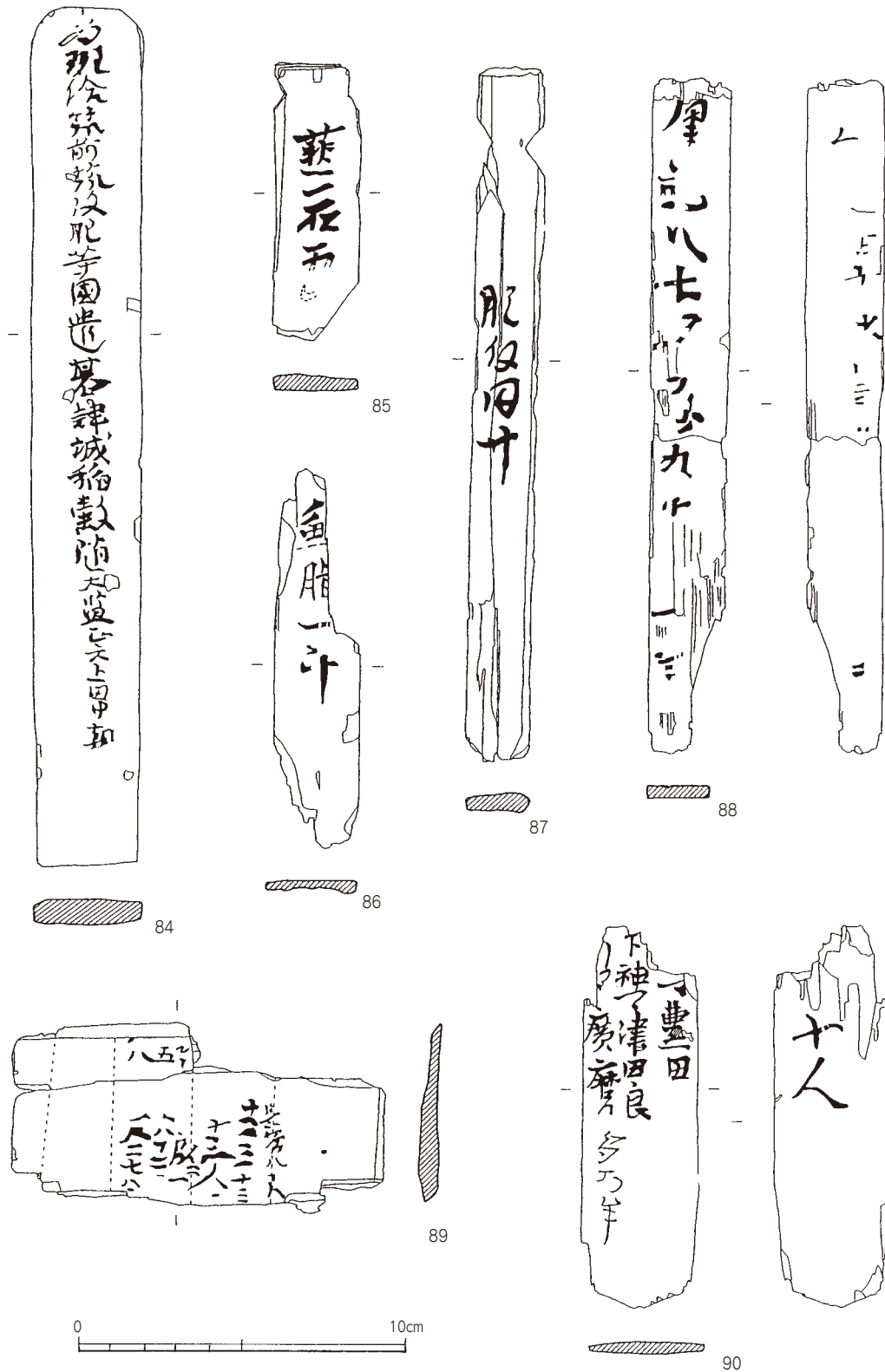


Fig.7 木簡実測図⑥ (1/2)

103 日置マカ良 14次 木概2-237 (107)・18・4 6081
 左右両辺については確認できないが、上下両端ともに折損している。日置部力(刀)良という人物がいかなる人物か不詳であるが、日置の地名は『和名抄』によれば、肥後国玉名郡日置郷、薩摩国日置郡、同国薩摩郡日置郷が見える。

104 ・□□□□^(後カ)
 ・□ 76次 木概2-239 (91)・24・3 6081
 上端は欠損しているが、他の3辺はほぼ原状を保つと考えられる。墨痕が不鮮明なために判読できず、内容も不明である。

105 ・□
 ・□□ 76次 木概2-240 (61)・(17)・4 6065
 半円形をなす。現存の円弧から半径3.6cmの正円に復元することができる。その用途は不明である。墨痕は表裏両面に認められるが、両面とも墨が薄くなっており、また欠損部にかかるため、具体的な文字は想定できない。

106 佐□ 76次 木概2-241 (350)・19・2 6061
 2枚の長方形の材を樹皮で綴じ合わせており、本来は曲物の側板の一部と推定される。

107 ・□ 上□□□
 ・□ □ 14次 概S59-7 (151)・(11)・6 6081
 各辺とも損傷している。腐蝕と損傷により断片的な墨痕が見られるのみで、「上」以外は判読しがたく、他例から「上日」(勤務日数)にかかる可能性もある。

註

- (1) 松川博一「大宰府の軍制の特質と展開—大宰府常備軍を中心に—」『九州歴史資料館研究論集』37, 2012年
- (2) 佐藤信「封緘木簡考」『日本古代の宮都と木簡』吉川弘文館, 1997年
- (3) 東野治之「長屋王家木簡の文体と用語」『長屋王家木簡の研究』塙書房, 1996年
- (4) 酒井芳司「観世音寺出土文字資料について」『観世音寺 考察編』九州歴史資料館, 2007年
- (5) (4)に同じ
- (6) 鈴木靖民「大宰府の木簡」『歴史読本』1985年3月号
- (7) 田中史生「7～11世紀の奄美・沖縄諸島と国際交易」『国際交易と古代日本』吉川弘文館, 2012年

2) 墨書土器 (Fig. 8～19, PL.44～46, Tab.1)

不丁地区官衙跡においては183点の墨書土器を確認し、判読可能なものを中心に160点を掲載した。表記内容的には、数字（「二」・「六」・「十」・「廿」等）、干支（「戊寅」・「申」）時期（「五月」）、方角（「南」）、人名（「勝万呂」・「子人」・「果安」）、官職名（「主典」）、施設名（「匠司」・「大城」・「門」・「厨」・「寺」・「政所」）、地名（「上毛田」・「杉寺」）、用途を示すもの（「高杯」・「杯」・「那ツ支」・「酒」）及び人面墨書・禁厭、記号（「卍」・「〇」・らせん状）、習書（「男男男」）等様々で、特定の文字が多いというわけではない。

出土遺構ごとみにみるとSD320-45点（24.6%）、SD2340-30点（16.4%）、SD2015-12点（6.6%）、SD2419-10点（5.5%）、SD4570-5点（2.7%）、SK2007-6点（3.3%）であり、SD320とSD2340が主体を占める。器種的には須恵器が123点で、内訳は坏51点（27.9%）、蓋48点（26.2%）、皿16点（8.7%）の順で、土師器は坏28点（15.3%）、皿9点（4.9%）、椀7点（3.8%）であった。なお、墨書土器としたものの中には転用硯も含まれており、墨書を第一義として扱ったが、転用硯としてもカウントしている。

1はSB2380A柱掘方出土の須恵器坏蓋で、口唇部は鳥嘴状を呈する。天井は低く、摘みを欠損する。墨書は口縁部内面にあるがのたうっており、転用硯として使用していることから文字ではなく筆馴らしの可能性もある。残高1.4cm、復原口径13.8cmを測る。2はSB4035B出土の須恵器有高台坏で、底部の小破片である。高台は断面ハ字形を呈し、底部の端寄りに貼付している。高台径は6.6cmに復原した。墨書は高台内にあるが、判読不明。

3・4はSE2890で、4は下層から出土した。3は須恵器の有高台坏で、口縁端部を欠く。口縁部は直線的に立ち上がり、底部との境に稜を有する。高台は低く、断面方形を呈し、底部の端寄りに貼付する。墨書は高台内の中央にあり、「玉」と記している。また、内底面には数
「 玉 」
個の墨痕があり、筆馴らしとみられる。残高3.5cm、復原高台径7.6cmを測る。4は土師器坏の底部破片で、底部は平底をなす。内面ナデで、ヘラミガキが部分的にみられる。外面はヘラ切り後ナデによる。底径は6.7cmに復原した。墨書は底部外面に2文字あり、上は「八」と読めるが、下の文字は判読不可。なお、概報ではSE2850の出土としているが、SE2890の誤り。

5～9はSK2007から出土した。5・6は須恵器の有高台坏で、5は底部の破片。外側に稜を有し、低い断面方形の高台を底部端寄りに貼付する。6の口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸く納める。6の高台は細身で、内端部で接地する。器高は4.3cmで、口径が13.0cm、高台径は9.0cmに復原した。7は須恵器の口縁部小片であるが、有高台の坏になるか。墨書は5・6が高台内にあり、5は左側が弓偏と思われるが、右側の旁が欠損するため不明。6は高台寄りに「野」と記している。7の墨書は胴部外面にあり、「十」であろう。
「 野 」

8は土師器の底部破片で、坏若しくは皿になろう。底部外面は回転ヘラケズリによる。墨書は底部外面にあり、一筆書きで螺旋状の記号を付している。9は土師器坏の破片で、口縁端部
螺旋状の
記号
を欠く。底部は平底で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。外面はヘラケズリ後ミガキで、内面はナデ後ミガキを施す。砂粒を含むものの胎土は良く、橙灰色を呈する。墨書は底部外面にあり、周囲を欠損するが「十」と判読した。復原底径は9.0cmを測る。

10・11はSK2882から出土した。10は須恵器有高台坏で、口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がり、口唇部は丸く納める。高台は断面方形を呈し、底部端寄りに貼付する。胴部は内外

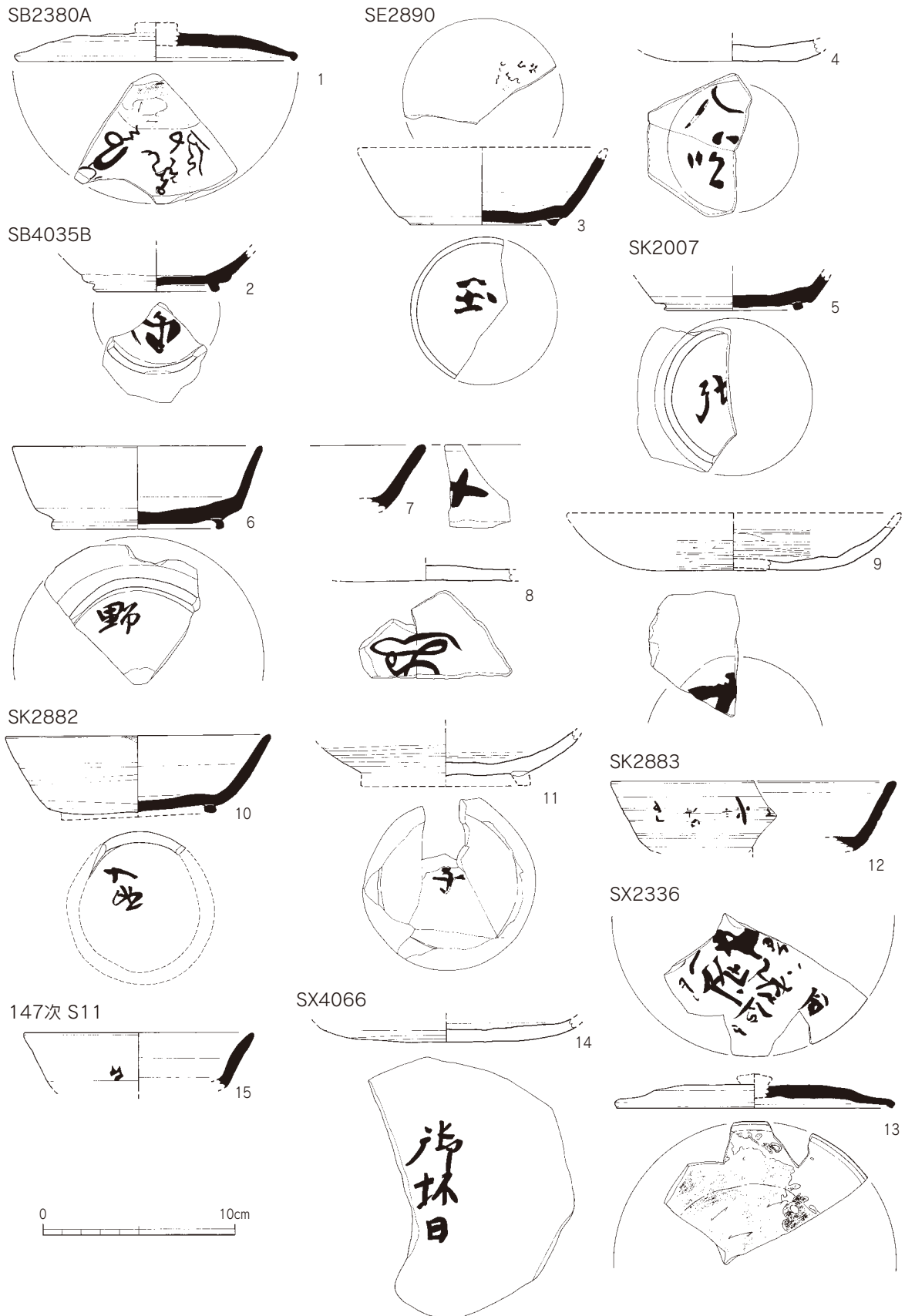


Fig.8 墨書土器実測図① (1/3)

面ともナデにより、胴部外面には2条のヘラ沈線を施している。墨書は高台内に2文字あり、上が「入」で、下の文字は「米」であろうか。「入米」（いるめ）で人名とみられる。口唇部には油煙が付着しており、灯火器として使用している。なお、概報（S61・第5図15）ではSD2340上層出土としているが、S6（SK2882）はSD2340に切り込む土坑であり、訂正しておきたい。11は土師器の胴部から底部にかけての破片で、椀にしては開いていることから台付皿になるか。高台は大半が剥離している。内外面ともミガキによる。墨書は高台内の中央にあり、「子」と判読したが、上部を欠損するためもう1字存在した可能性がある。

「入米」
人名か

12はSK2883出土の須恵器口縁部破片で、底部を欠損するが有高台の坏になろう。口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部は丸く納める。胴部外面にはヘラ沈線を4条施す。墨書は胴部外面にあり、4文字程みられる。横方向だと2番目の文字は「六」で、口縁部を下にすると↑偏とみられるが、判読不可。口径は14.8cmに復原した。

13はSX2336出土の須恵器坏蓋で、口唇部は小さく立ち、口縁端部に稜を有する。天井は低平で、摘みを欠損する。墨書は天井部外面にあり、数文字みられるが、「合」以外は判然とせず、習書であろう。また、天井部内面は転用硯として使用しており、墨痕は顕著で、研面は良く擦れている。口径は14.6cmに復原した。14はSX4066出土の土師器底部破片で、口縁部を欠くが坏とした。内外面ともヘラミガキによる。墨書は底部外面にあり、「御坏日」と記しているが意味は判らない。15は147次S11出土の須恵器坏で、底部を欠くが高台を有しよう。口縁部は外反気味に開き、口唇部は丸く納める。口径は12.0cmに復原した。墨書は胴部外面にあり、口縁部を下にして書かれており、「斤」と判読した。

習書

「御坏日」

16～51はSD320出土で、16～26が14・14次補足で、26は上層砂、16は砂層、17～19は中層腐植土、21は中層黒粘、23～25は中層粗砂、22は下層砂、20は灰白砂礫。16～19は須恵器坏蓋で、16は口縁部、17は天井部の小片で、16の口唇部は鳥嘴状を呈する。墨書は口縁部内面に2文字あり、上の文字は判読不可であるが、下は「人」とみられる。17は外面に3文字遺存し、左端は不明であるが、中の文字は「拜」、右端は「心」と読んでおく。18は摘みを欠き、19は口縁部を欠く。18の口唇部は鳥嘴状を呈し、端部に篋先による段を有する。19の摘みは扁平な釦形を呈する。墨書文字は18・19とも「家」であるが、18は外面に、19は内面に記している。

「家」

20は須恵器の有高台坏で、器高4.4cm、復原口径15.2cm、底径10.9cmを測る。口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部は丸く納める。高台は低く、底部端寄りに断面方形の高台を貼付する。墨書は外面に「也」、高台内に「那ツ支」と記しており、那ツ支（なつき）は菜坏で、菜を盛る器を意味すると考えられる。21は須恵器の台付皿で、皿に断面方形の高台を貼付したものであるが、内面にはヘラミガキがみられ、土師器台付皿の模倣品であろう。1/4程の破片で、器高2.4cm、復原口径22.4cm、復原高台径16.8cmを測る。墨書は底部外面中央に2文字あり、上の文字は不明、下の文字は「一」であろうか。

「那ツ支」

22～24は須恵器皿で、22・23は口縁部を欠く。22の底部外面は回転ヘラケズリによるが、板状圧痕がみられる。墨書は底部外面にあり、丁度左側半分を欠くが「五月」と読める。23の底部外面はヘラ切り後未調整。墨書は底部外面にあり、「典」の文字は横線が1本足りないが「主典」と記されている。「主典」（さかん）は令制の四等官の最下等官を表したものであろう。24

「主典」

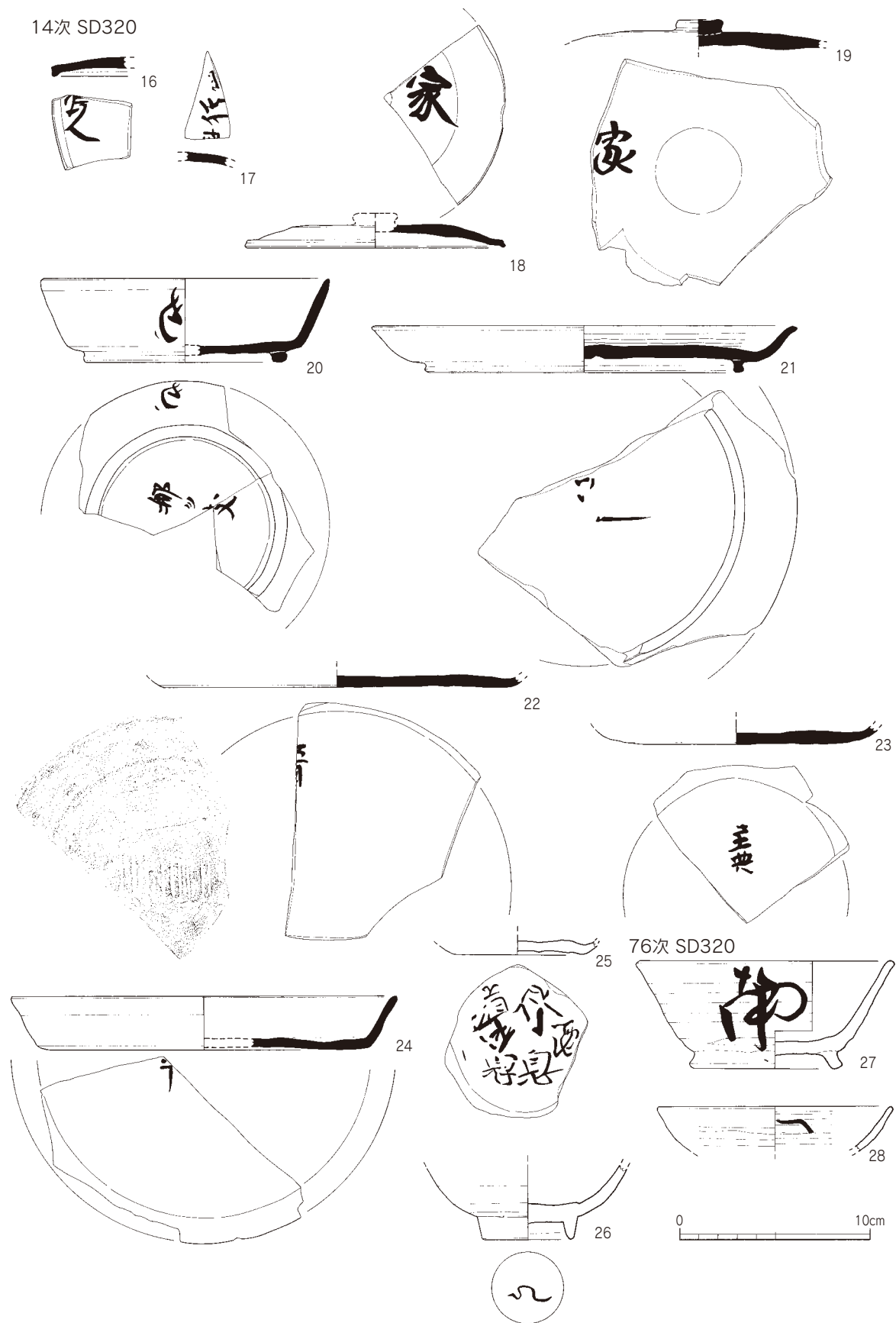


Fig.9 墨書土器実測図② (1/3)

は器高2.8cmで、口径は20.4cm、底径は17.4cmに復原した。口縁部は平底の底部から斜め上方に立ち上がり、端部は丸く納める。外面が黒っぽく、瓦質焼成的である。墨書は外面中央にあり、片仮名の「ヲ」字状を呈するが、判読不可。或いは記号か。

25は土師器杯の底部破片で、底部外面には板状圧痕がみられる。墨書は底部全体に6文字あり、右上から「令_カ酒息令_カ息_カ」と判読したが、「令」は定かではない。26は青磁碗で、上層(砂層)から出土しており、SD320の埋没に係る資料である。口縁端部を欠くが、内湾気味に立ち上がる。高台は高めで、高台径は4.8cmに復原した。外は回転ヘラケズリによる。胎土は灰白色を呈し、緑灰色の釉薬を掛けるが、高台以下は露胎。墨書は高台内にあり、「Ω」状を呈するが、記号であろう。

「令_カ酒息
令_カ息_カ」

27～51が76次調査で、28・33・36・40は腐植土、34・35・37・38・43・44・46は腐植土D、27・48は灰白砂礫、29～32・39・41・45は最下層砂から出土した。27は土師器碗で、口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がり、口唇部は小さく外方に突出する。高台は八字形を呈し、底部端に貼付している。外面は強いナデにより凹凸がみられる。器高5.8cmで、口径は13.6cm、高台径は8.0cmに復原した。墨書は胴部外面にあり、「南」と大きな文字を記している。28は内湾する杯の口縁部破片で、底部を欠損する。内外面ともヘラミガキによる。墨書は口縁部内面にあり、「く」字形を呈するが、記号であろう。口径は12.4cmに復原した。

「南」

29～36は須恵器の杯蓋で、29・31・35の口唇部は鳥嘴状を呈し、30・33の口唇部は丸く納める。32・34・36は天井部の小片である。また、29・30・33・35の器高は低く、29は擬宝珠形の摘みを貼付する。口径は29が15.2cm、30が18.0cm、33が13.2cm、35が19.0cmに復原した。29は口縁部内面に墨書がみられ、文字の下半分を欠損するが「在」であろう。ただ、1字であったかは不明。30は天井部外面に墨書があり、左半分を欠くが、「一」の下に「寸」があり、「一」が雁垂だとすると「厨」の可能性もある。31は口縁部内面に3文字あり、上2文字は「上毛」で、下は田偏或いは里偏で、「田」だとバランスが悪く、「里」だとしっくりくる。一応、「上毛里」としておこう。なお、上毛郡は古代においては豊前国に属し、山田・炊江・多布・上身郷の4郷からなり、現在の豊前市・吉富町・上毛町(旧大平村・新吉富村)にあたる。

「上毛里_カ」

32は天井部外面に墨書があるが、下半部を欠損する。田偏或いは里偏となろうが詳細不明。33も天井部外に墨書があり、「二」と判読できる。34は天井部外面に1文字墨書しているが、判読不明。35は天井部外面に一筆書きで○印を二つ書いているが、記号であろうか。36は口縁部内面に○印の墨書がみられる。

37～39は須恵器の有高台杯で、37は口縁部、38・39が底部破片である。37は薄手の作りで、口縁部は大きく外反する。墨書は口縁部内面に4字程あるが、口縁部を下にして書いており、最初の文字は不明だが、次は「肥」、3字目が「巳」で、4字目が「小」を三つ重ねているが、判読できない。38の高台は断面三角形を呈し、底部の端寄りに貼付する。墨書は高台内にあり、概報(S56・第88図46)では「甘」としていたが、今回は「廿」と判読した。また、内底面には墨痕があり、転用碗として使用しているが、器面の擦れ具合は僅かであり、使用頻度は低かったものと思われる。39は底部端に高台を貼付するが、高台は剥離している。高台内に墨書があるものの判読不明。

「廿」

40・41は須恵器杯で、40の口縁部は平底の底部から直線的に立ち上がる。胴部中位と底部

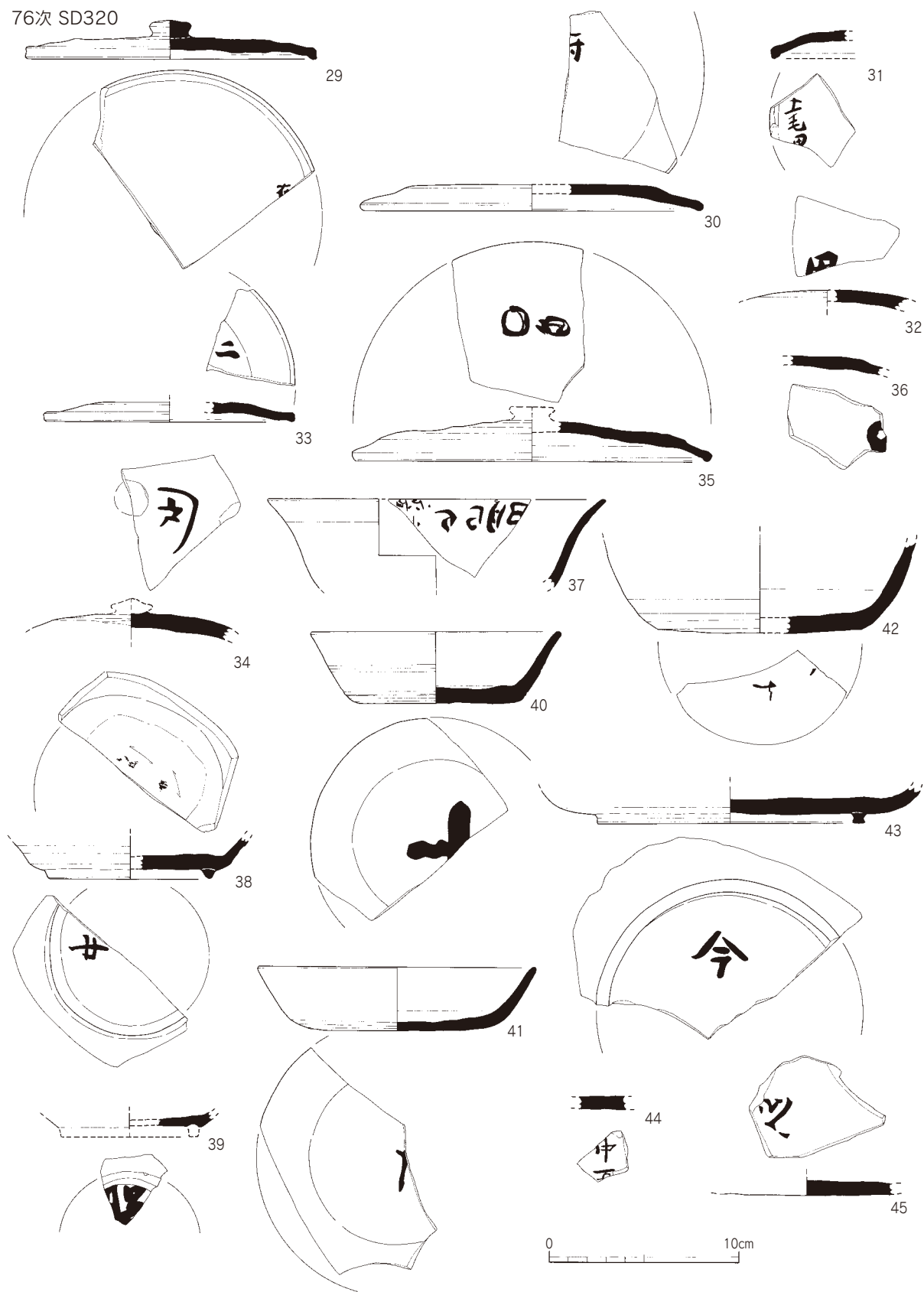


Fig.10 墨書土器実測図③ (1/3)

との境に2条のヘラ沈線を巡らす。41の口縁部は丸みを帯びた底部から立ち上がる。ともに底部外面に墨書があり、40が「十」、41も筆の運びから「十」と判断した。器高は40が3.7cm、41は3.3cmで、口径は40が13.2cm、41は14.6cm、底径は40が8.8cmに復原した。

42は胴下半部の破片で、底部は平底をなす。底径は10.6cmに復原した。胴部は丸みを帯びて立ち上がる。口縁部を欠くが平瓶になるか。外面は回転ヘラケズリの後ナデによる。墨書は底部外面に2文字あり、記号風のものを書いている。43は底部破片で、復原高台径が14.0cmを測り、台付皿或いは盤とすべきか。墨書は高台内にあり、「今」と記している。44は底部の小破片で、器種は不明。底部外面に墨書があり、上の文字は「中」で、下は欠損により不明。45も底部破片で、底部調整はヘラ切り後未調整であり、平らであることから皿になるか。墨書は内面にあるが判読不明。

46は土師器坏で、口縁部を欠くが、内湾気味に立ち上がる。内外面ともヘラミガキを施す。底径は6.8cmに復原した。底部外面中央に墨書があり、「千」と記している。47は土師器の椀で、高台は断面ハ字形を呈し、高台径は6.9cmに復原した。墨書は高台内にあり、「大」或いは「丈」になるか。48は台付皿で、浅い坏部に断面ハ字形の高めの高台を貼付する。器高2.1cmで、口径は13.7cm、高台径は8.6cmに復原した。墨書は口縁部に沿って4文字みられ、「开大□力」と記している。概報（S56・第86図7）では「大」の次の文字を「半」としているが、「半」とは読めず、今回は不明としておく。

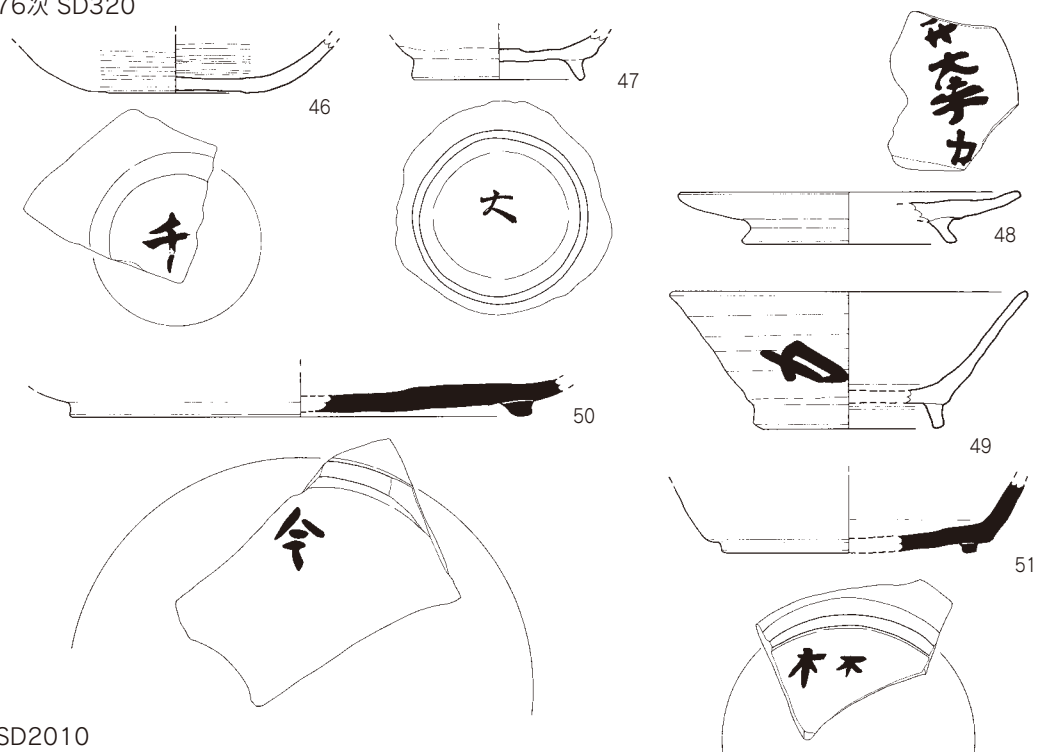
49～51はSD320の底面にある溝状の遺構から出土した資料である。49は土師器の椀で、器高5.5cm、復原口径14.4cm、復原高台径7.6cmを測る。口縁部は直線的に開き、口唇部を丸く納める。外面には指ナデによる凹凸を留める。高台は太く確りしており、底部端に貼付する。墨書は胴部外面にあり、「力」と記している。概報（S56・第87図25）では判読できないとしたが、今回は「力」と読んだ。50は須恵器の底部破片で、低いながら太めの高台を貼付する。高台径は18.4cmに復原した。43よりも高台は太く、高台径も大きいことから盤とした。墨書は高台内にあり、「今」と記している。字形も43と同じであることから同一人物によるものとみられる。51は須恵器の有高台坏の底部破片で、口縁部は直線的に立ち上がるようである。墨書は高台内にみられるが、極めて薄く輪郭は不確定ながらも「杯」と判読した。

52・53はSD2010の出土である。52は須恵器坏の胴下半部破片で、口縁部は直立気味に立ち上がる。高台は断面方形を呈し、高台径は9.3cmに復原した。墨書は高台内にあり、「寺」と判読した。53は鉢で、洗面器形を呈する。口縁部は水平に開き、端部を丸く納める。墨書は口縁部外面にあり、「一」を記しているが、この部分を硯面として使用しており、単なる筆の走りの可能性もある。鉢の胴部外面を転用硯としており非常に珍しいものである。

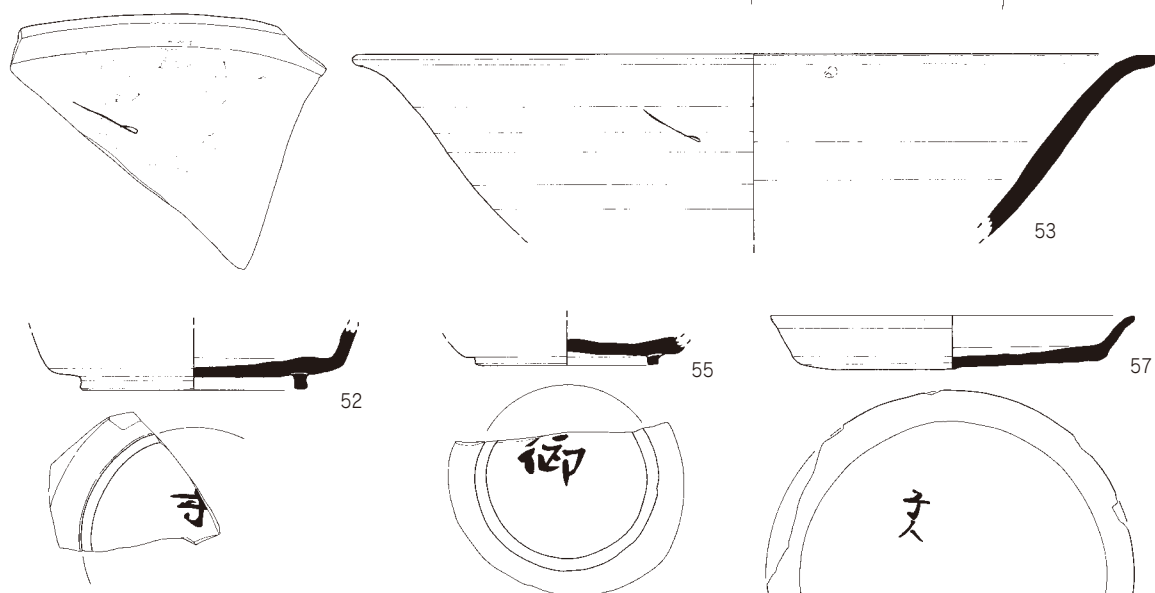
鉢全体の
転用硯

54～59はSD2015A（古期）、60～64はSD2015B（新期）の出土で、64が85次調査出土品ある以外はすべて76次調査出土資料。54～56は須恵器の有高台坏で、55・56は底部破片。54の口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、口唇部を丸く納める。高台は細めで、底部の端寄りに貼付する。器高4.3cmで、口径は13.0cm、高台径は8.4cmに復原した。墨書は高台内にあり、概報（S56・93図7）では「華」としているが、今回は「紫」と判読した。55は底部端に稜を持ち、断面方形の高台を底部端寄りに貼付する。墨書は高台内にあり、「御」と記している。56は断面台形の高台を貼付し、高台径は12.4cmに復原した。墨書は高台内にあり、「蔓」と判読

76次 SD320



SD2010



SD2015A

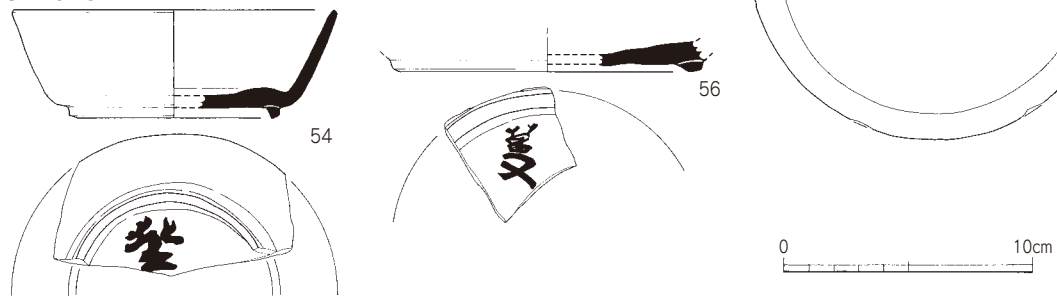


Fig.11 墨書土器実測図④ (1/3)

した。57は須恵器の小型皿で、口縁端部は外方に屈曲する。器高2.2cm、口径14.6cm、底径11.9cmを測る。墨書は底部外面にあり、「子人」と記されており、人名と思われる。

「子人」

58は土師器の底部小片であるが、坏になろう。墨書は底部内面にあり、概報（S56・図版89a）では「昨二」としているが、今回は「酢二」と読んだ。59は土師器皿の底部破片で、底部は平底をなす。底径は14.6cmに復原した。墨書は底部外面の中央に2文字あり、「人令」であろうか。60は土師器の椀で、口縁部は直線的に立ち上がる。高台は断面ハ字形を呈し、底部端に貼付している。胴部は内外面ともヘラミガキによる。器高6.1cm、口径16.4cm、高台径8.8cmを測る。墨書は高台内にあり、概報では判読不明としているが、今回は「瓦」とした。

「酢二」

「瓦」

61は土師器の底部破片で、皿になろう。外面ヘラケズリ、内面ナデによる。墨書は底部外面にあり、「大」と記している。また、内面には墨痕がみられる。62は土師器の小片で、内外面ともヘラミガキを施しており蓋になろう。墨書は天井部外面にあり、上は「真」であるが、下の文字は判読できない。また、その右側にも文字状のものがあるものの欠損しており、詳細不明。63は土師器の坏で、口縁部は丸みを帯びた底部から内湾気味に立ち上がる。胴部は内外面ともヘラミガキで、底部外面はヘラケズリによる。器高3.9cmで、口径は13.0cm、底径は6.6cmに復原した。墨書は胴部外面にあり、「孔」と記している。64は須恵器坏の底部破片で、平底をなす。底径は9.0cmに復原した。墨書は底部外面中央にみられるが、文字なのか記号なのかは判然としない。

「大」

「孔」

65～94はSD2340から出土した。65・66は83次調査資料。65は須恵器の坏蓋で、口縁部の立ち上がりは僅かである。天井は低く、扁平な擬宝珠形の摘みを貼付する。器高2.0cm、口径14.6cm、摘み径2.1cmを測る。墨書は天井部外面にあり、摘み寄りに「久女□」の3文字と口縁部側に2文字みられるが、口縁部側の文字は不明。また、墨書の反対側には墨痕が遺存している。なお、概報（S58・第11図7）では転用硯としているが、そうではない。66は小型の須恵器有高台坏で、口縁部は直線的に立ち上がる。底部端に稜を有し、断面台形の高台を貼付する。内外面ともナデによる。器高4.0cm、復原口径8.9cm、高台径5.7cmを測る。墨書は高台内に3字程あり、上の字は「可」と読めるが、他は不明。

「久女□」

67～70は85次調査で、何れもSD2340上層の出土。67は小型の須恵器坏蓋で、口唇部は鳥嘴状を呈する。天井部を欠くが、低平なもの。天井部外面はケズリの後ナデを施す。墨書は天井部外面にあり、「月」字状に見えるが、欠損により詳細不明。また、内面には墨痕が顕著にみられるものの全く擦れておらず、転用硯ではない。口径は12.6cmに復原した。68は須恵器の有高台坏で、1/2程の破片である。口縁部は斜め上方に立ち上がるが、口唇部付近を絞っている。高台は断面方形を呈し、底部の端寄りに貼付する。器高3.6cmで、口径は13.0cm、高台径は9.8cmに復原した。墨書は高台内にあるが、欠損により不明。なお、当該資料は遺物編1（IV・Fig.44-18）で掲載しているが、墨書の記述がなく、口径も1.8cm大きく実測しているので、今次報告分で訂正しておく。

69は須恵器皿で、1/3程を欠く。口縁部は外反気味に開き、口唇部は丸く収める。外底部はヘラ切り後未調整で、粘土紐痕跡を留める。器高3.1cm、口径19.8cm、底径15.3cmを測る。墨書は底部外面にあり、「大城」と記しており、大野城を表すものとみられるが、筑後国御井郡には大城郷があり、地名を記した可能性も有する。また、内面には墨痕が遺存しているが、器

「大城」

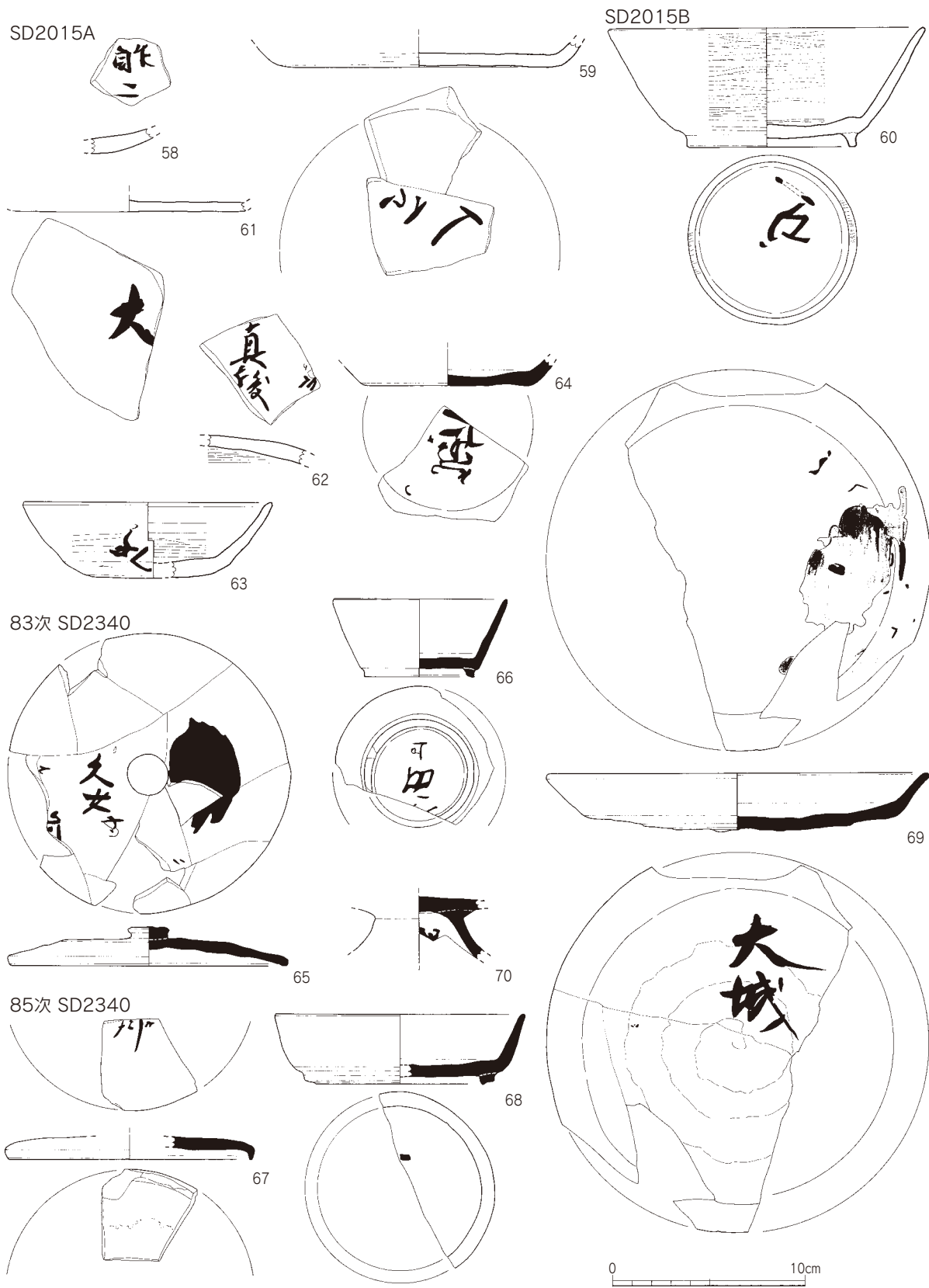


Fig.12 墨書土器実測図⑤ (1/3)

面は全く擦れておらず、硯として使用したものではない。70は須恵器高杯の杯部から脚部にかけての破片で、脚部は大きく開く。墨書は脚部内面にあり、「門」に縦棒を加えていることから「門」とみられる。

「 門 」

71～74は87次調査で、71は青灰砂質土、72～74は暗灰粘質土から出土した。71・72は須恵器坏蓋で、71の口唇部は鳥嘴状を呈し、立ち上がりも高い。端部の稜はシャープである。天井も高く、扁平な擬宝珠形の摘みを貼付する。口縁部ヨコナデ、外天井部回転ヘラケズリ、内面ナデによる。器高3.3cm、復原口径15.8cm、摘み径2.7cmを測る。墨書は天井部外面に2ヶ所あり、上の字の一部は「田」で、下の文字は「南」に似るが判読できない。72は天井部の小片で、外面に「兀」と「卍」を記している。上の字が兀（こつ）だとすると、高く突き出たさまの意となるが、「兀卍」で何を意味するか不明。なお、内面には墨痕が顕著にみられ、擦れていることから硯として使用している。

73・74は須恵器の有高台坏で、73は大振りの坏で、口縁の一部を欠く程度。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は小さく突出する、高台は断面ハ字形で、底部の端に貼付している。器高6.1cm、口径20.4cm、高台径12.8cmを測る。墨書は胴部外面と高台内にあり、胴部は「丨」縦棒、文字であるのか記号か判断がつかない。また、畳付から高台内にかけて墨痕がみられるが、転用硯ではない。74は底部の破片で、口縁部を欠く。高台は断面方形を呈し、底部の端寄りに貼付している。墨書は高台内中央にあり、「卍」の記号を書いている。高台径は11.6cmを測る。

「 卍 」

75～81は90次調査で、75が上層茶灰土、76・80は中層黒粘、77は下層茶褐砂、78・79・81は中層灰粘の出土である。75～77は須恵器坏蓋で、75の口縁部の立ち上がりは僅かであるが、76・77の口唇部は鳥嘴状を呈し、端部の稜もシャープである。また、75・77は摘みを欠くが、76は扁平な摘みを貼付する。76は大振りの蓋で、天井も高い。75・77は低平で、77は器壁が厚く重量感がある。墨書は何れも天井部外面にあり、75は摘み部を中心に墨書を配しているが、文字か記号か不明。或いは禁厭に関わるものか。76は「勝万呂」と人名を記している。77も数文字みられるが、中央は「男」であろうか。全体として判読不明。口径は75が14.4cm、77は15.0cmに復原した。76は器高3.1cm、口径20.4cm、摘み径3.0cmを測る。

「 勝万呂 」

78は須恵器の有高台坏で、口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇部を丸く収める。高台は断面方形を呈し、底部の端寄りに貼付する。器高4.0cm、口径14.2cm、高台径10.8cmを測る。墨書は高台内にあり、「杉寺」と判読した。「杉寺」がどこの寺を指すのか明らかではない。

「 杉寺 」

79は土師器蓋の天井部破片で、円柱状の摘みを貼付する。天井部外面は回転ヘラケズリ後ミガキ、内面はヘラミガキによる。墨書は摘みの上面にあり、「門」と記している。80は土師器の坏で、口縁部を欠損するが、内湾気味に立ち上がる。胴部外面はケズリ後ミガキ、内面は工具ナデ、底部外面は回転ヘラケズリによる。墨書は底部外面にあり、「政所」と記している。

「 門 」

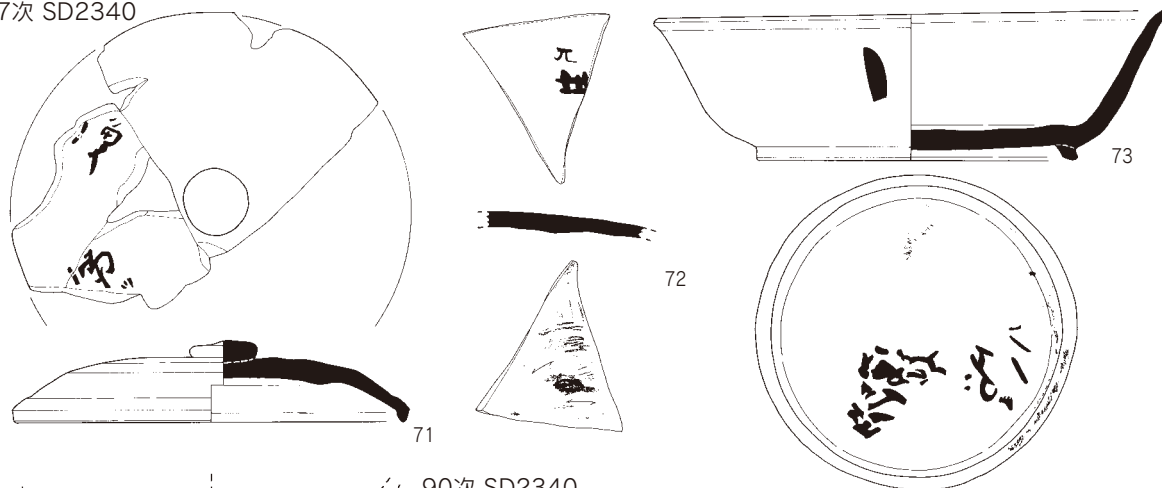
「 政所 」

81は土師器の皿で、口縁部は丸みを帯びた底部から立ち上がり、口唇部を丸く収める。口縁部ヨコナデ、外面ケズリ後ミガキ、内面工具ナデ後ヘラミガキを施す。底部外面中央に墨書文字と刻書文字がある。墨書は2文字あり、下は「夢」であろうか。刻書文字は針書で「十」と刻んでいる。器高は3.1cmで、口径は20.0cmに復原した。

82～91が98次調査で、82・85～87・90は上層、83・84・88は中層、91は下層から出土している。82・83は須恵器の蓋で、82は天井部の小破片。墨書は天井部外面にあり、「匠司」

「 匠司 」

87次 SD2340



90次 SD2340

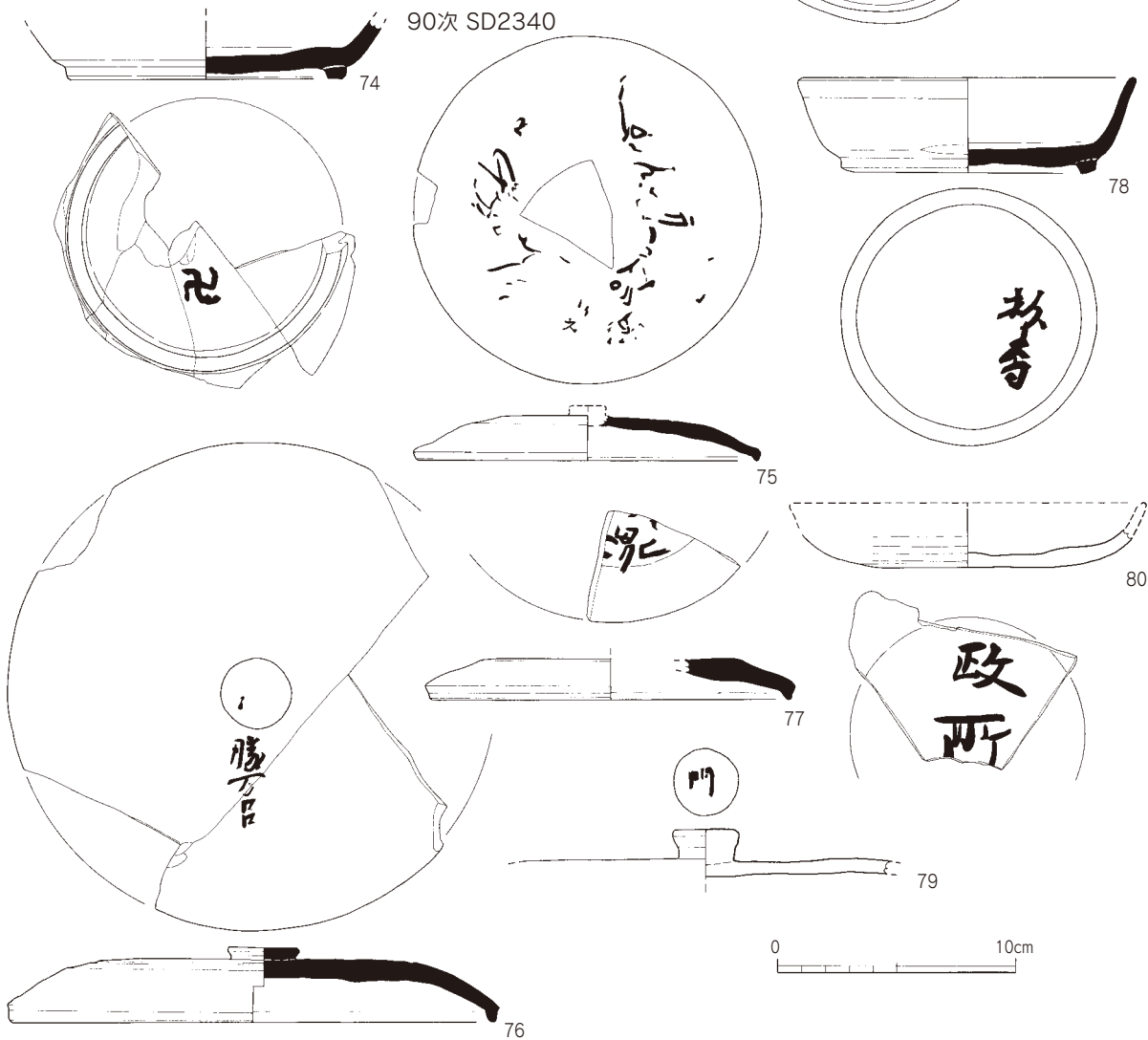


Fig.13 墨書土器実測図⑥ (1/3)

と判読している。「匠司」は大宰府の所司の一つである匠司を表すものと考えられる。83は口縁部から天井部にかけての破片で、摘み部付近を欠く。口唇部は鳥嘴状を呈し、外面には篋先による段を有する。焼き歪みにより天井部中央が窪む。器高1.7cm、復原口径20.4cmを測る。墨書は天井部外面にあり、5文字程みられる。「人足人足□」と判読したが習書であろうか。

内外面には墨痕が付着しているが、器面は全く擦れておらず転用硯ではない。

84～86は須恵器の有高台坏で、85は口縁端部を、86は口縁部を欠く。84の口縁部は内湾気味に立ち上がる。高台は断面台形を呈し、底部の端寄りに貼付している。器壁が厚く、野暮ったい印象を受ける。器高4.1cm、口径14.1cm、高台径10.0cmを測る。墨書は高台内に渦巻状の記号と口縁部内面に縦線がある。85の口縁部は直線的に立ち上がり、細身の高台を底部端寄りに貼付する。高台径は8.4cmに復原した。墨書は高台内にあり、概報（S61・第5図12）では「大□」としているが、今回は「六」或いは「丈」と判読した。その下にも墨痕があり、もう一字存在するが欠損により不明。また、墨書と重複して「コ」形の篋記号があるが、文字はその上から書かれている。86は断面方形の高台を底部の端寄りに貼付する。高台径は8.4cmを測る。墨書は高台内中央にあり、「井」と判読した。

「井」

87は須恵器有高台坏を模した土師器の有高台坏で、口縁端部を欠く。口縁部は内湾気味に立ち上がる。高台は断面靴形を呈し、底部端に貼付している。胴部は内外面ともナデで、底部外面はヘラケズリによる。墨書は底部外面中央に2文字みられるが、不明瞭であり判読不可。残高4.1cm、高台径11.5cmを測る。

88・89は須恵器の坏で、88は口縁部の一部を欠く程度の遺存状態。口縁部は平底の底部から直線的に立ち上がる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、底部外面はヘラ切り後ナデによる。器高3.1cm、口径13.4cm、底径10.4cmを測る。口縁部外面には重ね焼きによる黒変がみられる。墨書は底部外面にあり、「酒」の1文字を記している。89の口縁部は平底の底部から直線的に立ち上がり、口縁部直下を強く撫で付けて窪ませている。口縁部はヨコナデにより、底部外面はヘラ切りによる。器高5.1cm、口径17.6cm、底径11.8cmを測る。墨書は底部外面中央にあり、「中」と記している。

「酒」

「中」

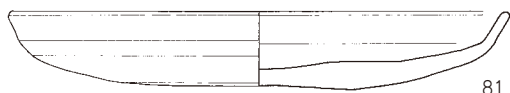
90は須恵器の底部破片で、外面はヘラ切り後ナデによる。皿になるか。墨書は底部外面に4文字程あり、概報（S61・第5図21）では「□成磨□」と判読したが、今回は「一成」の下は判読不明としておく。また、左側には「○」印を書いている。91は須恵器の甕で、口頸部は「く」字形を呈する。口唇部は丸く納め、直下にヘラ沈線を巡らす。口縁部ヨコナデ、外面平行タタキ目、内面平行当具による。口径は18.0cmに復原した。墨書は肩部外面にあり、木偏に「凡」で「楓」であろうか。なお、遺物編1（Fig.52-4）では、墨書土器として扱っていないので再掲した。

92～94が124次調査で、92が上層、94が下層、93が最下層から出土した。92・93は須恵器坏蓋で、口唇部は鳥嘴状を呈する。92の天井部は低く、扁平な擬宝珠形の摘みを貼付する。93は口縁部の小片で、焼け歪みのため天井部が窪む。口径は92が16.4cm、93は19.0cmに復原した。92は天井部外面に「十」の文字を記している。93は口縁部内面に「也」「母志」「七八七」等、外面にも判読不明の文字を書いているが、習書であろうか。また、内面及び断面にも墨痕が顕著にみられ、残存部位はあまり擦れていないが転用硯として使っている。なお、概報（H2・第59図1）ではよく擦れているとしているが、誤りなので訂正しておく。94は須恵器坏で、口縁部を欠が、平底の底部から直立気味に移行する。底部外面は手持ちヘラケズリによる。墨書は底部外面中央に1文字あるが、判読不明。

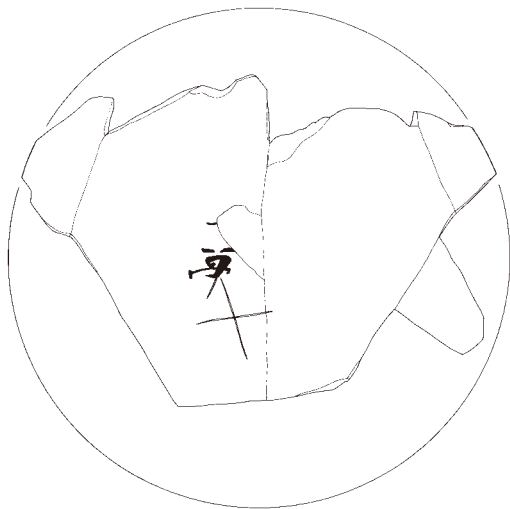
「十」

95はSD2396出土の土師器碗の底部破片である。口縁部を欠くが、内湾して立ち上がる。高

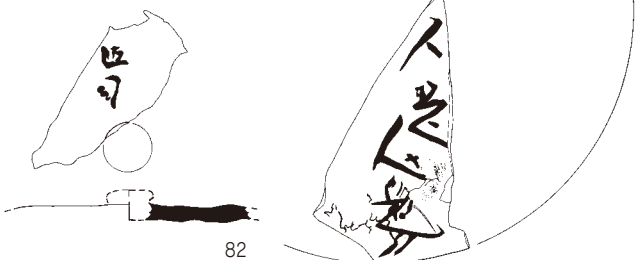
90次 SD2340



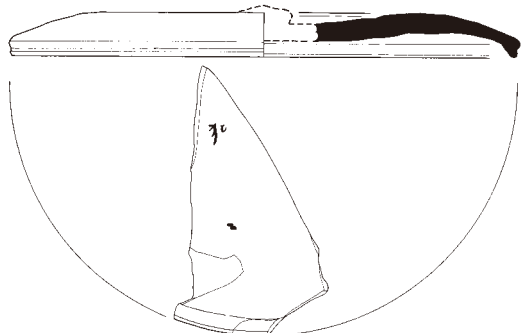
81



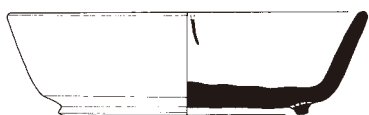
98次 SD2340



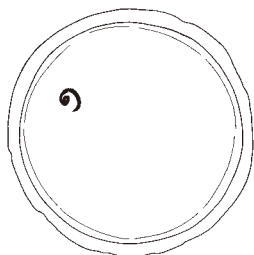
82



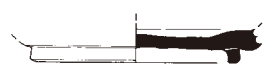
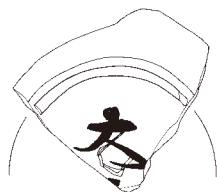
83



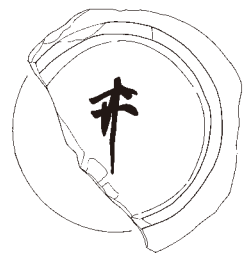
84



85



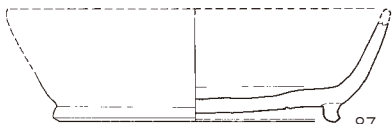
86



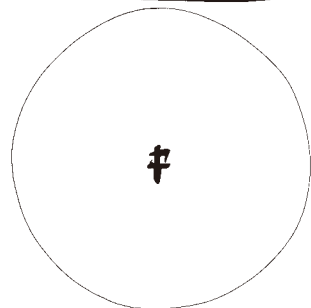
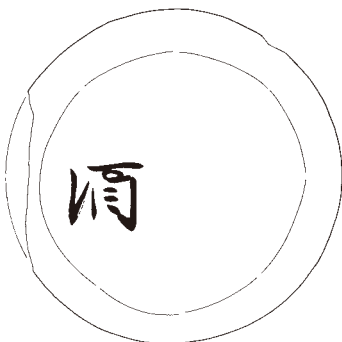
88



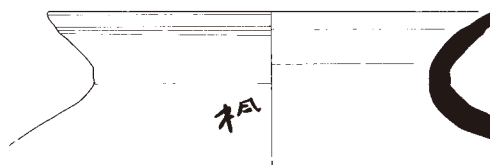
89



87



90



91

Fig.14 墨書土器実測図⑦ (1/3)

124次 SD2340

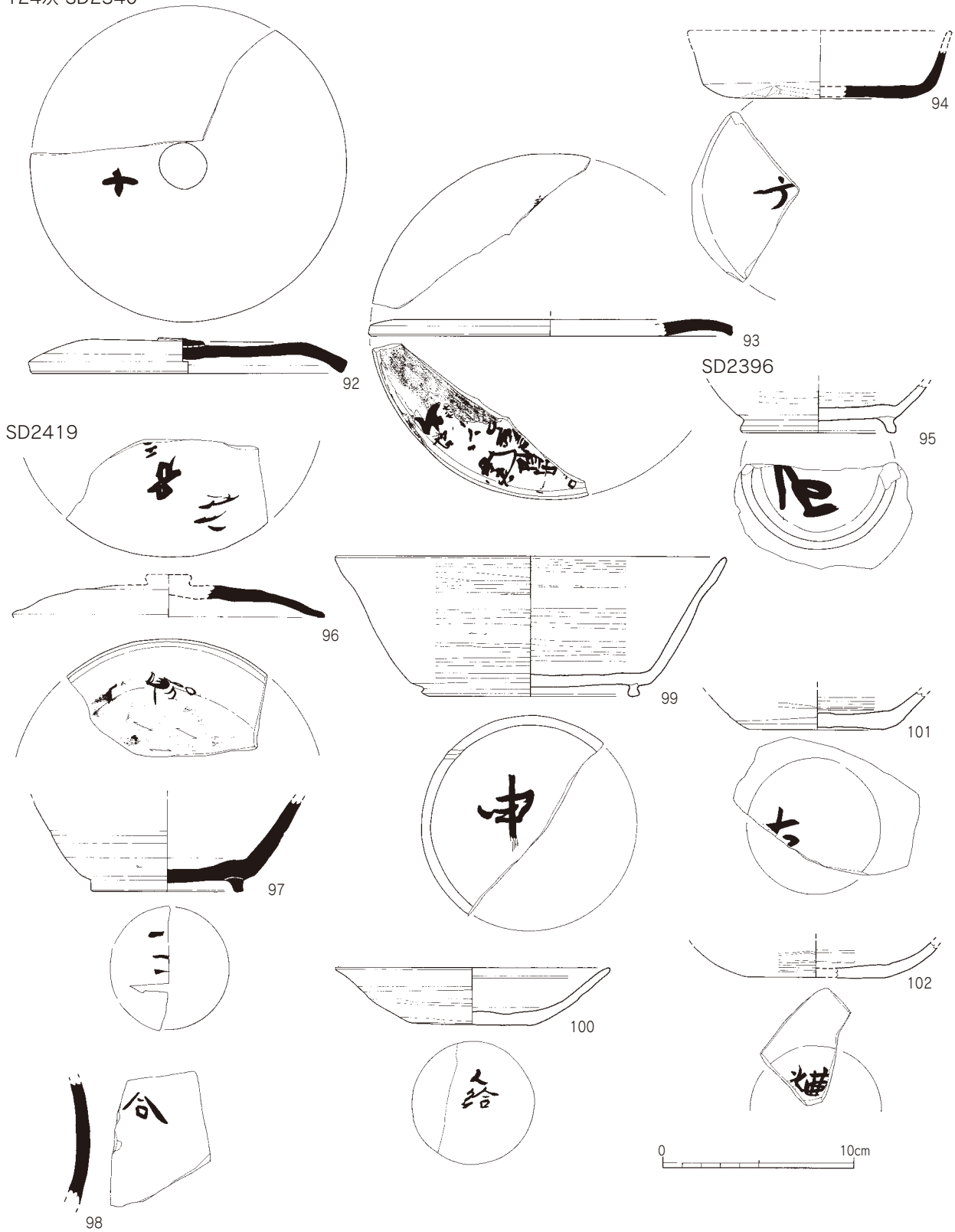


Fig.15 墨書土器実測図⑧ (1/3)

台は断面ハ字形を呈し、底部端に貼付している。高台径は8.2cmに復原した。外面はヘラケズリ後ミガキ、内面はヘラミガキによる。墨書は高台内にあり、曲線を一筆書きで書いているが、

記号であろうか。

96～105はSD2419の出土である。96は須恵器坏蓋の口縁部破片で、口唇部は丸く納める。天井部を欠くが、器高の低いものである。口縁部ヨコナデ、天井部外面ヘラ切り後ナデによる。墨書は天井部外面に3ヶ所あり、魚形、「8」字状を呈するが、魚形は筆馴らしであろう。また、天井部内面には墨痕が顕著にみられ、良く擦れており、硯として使用している。

97は須恵器の有高台坏で、口縁部を欠く。胴下半部は丸みを有し、底部端に断面方形の高台を貼付する。高台径は8.1cmに復原した。胴部中位には工具による強いナデを施す。墨書は高台内にあり、三本線を書いているが、文字ではなく筆馴らしであろうか

98は須恵器の胴部破片で、外面はケズリ後ナデ、内面はタタキをナデ消しており、壺になるか。墨書は胴部外面にあり、概報（S58・第18図14）では「介」としているが、山偏の下に横棒と「口」がみられることから、今回は「合」と判読した。

99は大振りの土師器椀で、口縁部は斜め上方に立ち上がるが、中程を若干窪ませている。高台は器の大きさに比して小さめで、断面靴形の高台を底部端寄りに貼付する。胴部外面はヘラ
「申」 ケズリの後ヘラミガキで、内面は工具ナデ後ヘラミガキを施す。墨書は高台内中央にあり、「申」と記している。器高7.3cmで、口径は20.6cm、底径は11.4cmに復原した。

100は土師器の坏としたが、底径の6.4cmに比して口径が14.2cmと大きいことから皿形をなす。口縁部は平底の底部から大きく開く。口縁部の内外面に篋先による沈線を施す。墨書は底
「人給」 部外面中央にあり、「人給」と記している。101・102は土師器坏の底部破片で、102の胴下半部は丸みを帯びる。101は直線的に開く。ともに内外面はミガキによる。墨書は底部外面にあり、
「槽」 か 何れも下半部を欠くが、101は「存」或いは「右」と思われる。102は「槽」になろう。103は土師器坏で、口縁部の一部を欠損するもののほぼ完形に近い。口縁部は平底の底部から直線的に開き、底部端に稜を有する。口縁部はヨコナデで、胴部はヘラミガキを施す。墨書は内外
「日・月」 面
「市」 以外は判然としない。内面には「日」・「月」かと思われる墨書もみられるが、これまた判然としない。禁厭に関わるものか。

104は土師器皿で、器高2.1cm、復原口径18.0cm、復原底径13.6cmを測る。口縁部は外反し、端部は丸く納める。内外面ともヘラミガキにより、底部外面はヘラケズリを施す。墨書は底部
「右」 の崩し字と思われる。105は土師器の底部破片であるが、皿になろう。
「戊寅」 外面はヘラケズリ後未調整。墨書は底部外面にあり、「戊寅」と干支を記しており、戊寅は西暦738年若しくは798年にあたるが、土器の特徴が8世紀末であることから798年を表すものと考えられる。

106はSD2464出土の須恵器有高台坏で、底部から内湾気味に立ち上がる。高台は細身で、
「御」 底部端に貼付する。高台径は8.0cmに復原した。墨書は高台内にあり、文字の下半部を欠くが「御」と判読した。

107はSD4037出土の須恵器有高台坏で、器高3.7cm、口径12.0cm、高台径6.8cmを測る。口縁部は直線的に開く。底部端に稜を有し、端寄りに断面方形の高台を貼付する。墨書は高台内にあり、概報（h5・第10図3）では「メ」としているが、今回は「又」と判読した。また、口唇部に油煙付着としているが、油煙ではなく焦げ茶色を呈する漆の誤りなので訂正しておく。

108～112はSD4570出土で、108がSD4570A B、109～112がSD4570B（新时期）。

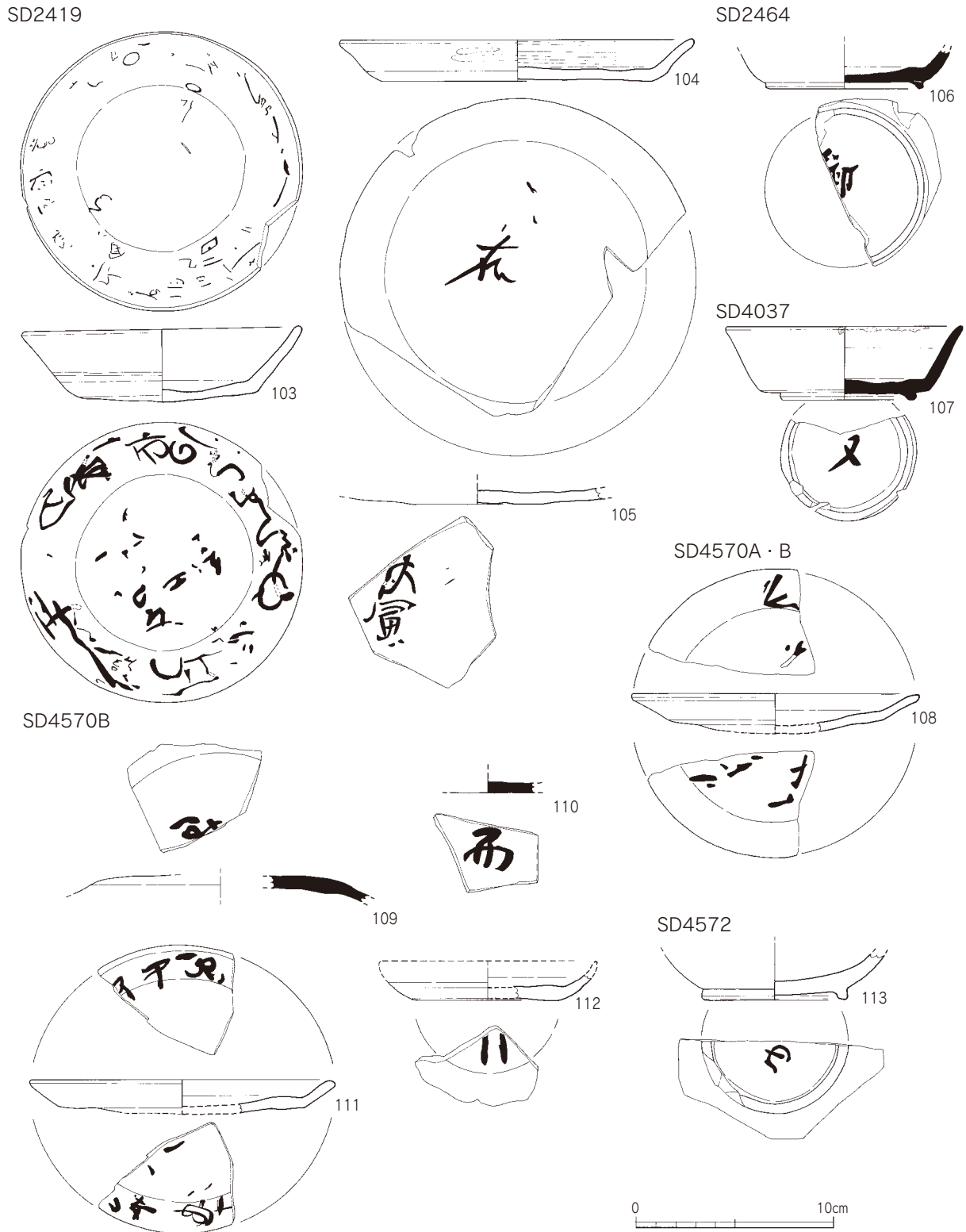


Fig.16 墨書土器実測図⑨ (1/3)

108・111は土師器皿で、底部は焼き歪みにより平らではない。口縁部はヨコナデによる。口径は108が14.6cm, 111は15.5cmに復原した。ともに墨書は内外面にあり、記号風の文字を書いているが、禁厭に関わるものであろう。109は須恵器坏蓋の天井部破片で、口縁部及び摘みを欠く。墨書は天井部外面にあり、眉と目を書いているようで、人面墨書としておく。110は人面墨書が須恵器の小片であるが、底面が平らであり、ヘラケズリを施していることから坏或いは皿にな

ろう。墨書は底部外面にあり、「而」と判読した。112は土師器皿で、口縁部を欠く。内外面ともナデによる。墨書は底部外面にあり、二本線を書いている。上部を欠き、詳細不明。

113はSD4572出土の灰釉陶器碗で、口縁部を欠損する。高台は断面方形を呈する。外面はケズリ後ナデで、内面はナデか。また、内面には灰白色の釉薬が掛かるが、外面は露胎である。

「 門 」 墨書は高台内の中央にあり、「門」とした。

114～160は各次調査の土層出土資料で、次数ごとに報告する。114は76次調査の茶灰土出土。土師器の小型坏で、口縁部は平底の底部から内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸く納める。胴部は内外面ともヘラミガキにより、底部外面はヘラケズリを施す。器高3.6cm、復原口径10.3cm、底径6.5cmを測る。墨書は底部外面全体にあり、「×」や「○」印がみられるものの文字か記号か判断がつかない。

115・116は83次調査で、115が灰褐色土、116は床土の出土。115は土師器の底部小片で、坏或いは皿になるか。底部はヘラ切りによる。墨書は底部内面に3文字あり、記号風の文字を記しているが、詳細不明。116は青磁碗の底部破片で、高台は断面方形を呈する。畳付は釉剥ぎで、3ヶ所に目砂を留める。墨書は高台内にあり、螺旋状の記号を書いている。

螺旋状の記号

117～136は84次調査で、117～125が茶褐色土、126・127は茶灰土、128は灰褐色土B、129～136は灰褐色土から出土した。117・118は須恵器蓋の天井部破片で、117は外面に不明文字の上に「卍」とある。また、内面には2文字あるが、上の文字は欠損により不明。下の文字は「金」と読めるが、「全」に「土」と書いており、字を知らない人の手によるものであろう。118は摘み部の破片で、摘みは欠損する。その周囲に墨書がみられるものの小片であり、詳細不明。

119は須恵器皿で、口縁部は外反気味に開く。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、底部外面ヘラ切り後ナデによる。器高2.0cmで、口径は15.3cm、底径は12.4cmに復原した。墨書は底部外面中央にあり、概報（S58・第22図17）では「三宅」としているが、「三」と「宅」の間に「女」の文字が入り「三女宅」と読めるものの字は極端に小さく、下の文字とで一字をなすか。

120・127は須恵器坏の底部破片で、ともに底部外面はヘラ切り後未調整。墨書は底部外面にあり、120が「宮」であろうか、127は「□朝」と判読した。また、両者とも内面に墨痕があり、120は転用硯として使用しているが、127はあまり擦れておらず、使用頻度が低かったか。

121・122は土師器坏で、口縁部を欠く。胴部外面はケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキで、底部外面は回転ヘラケズリによる。底径は121が9.2cm、122が8.2cmに復原した。墨書は底部外面にあり、121が「口」、122は「不」の文字を記している。

123は土師器碗の底部破片で、底部端に断面方形の高台を貼付する。外面ケズリの後ミガキ、
「 申 」 内面ヘラミガキによる。高台径は11.8cmに復原した。墨書は高台内にあり、「甲」の1字を記している。124・125は土師器の底部破片で、内面ナデ、外面ヘラケズリで、扁平であることから皿とした。墨書はともに底部外面にあり、124は判読不明であるが、125は「福万」と判読したが、上の文字は欠損するため確証はない。

126は土師器の小型碗で、器高3.8cm、口径は11.8cm、高台径は7.1cmに復原した。底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反し、端部を肥厚させる。高台は断面方形を呈し、底部

「 膳 」 端に貼付する。墨書は高台内に「膳」とあり、食物を入れる容器を意味するとみられる。

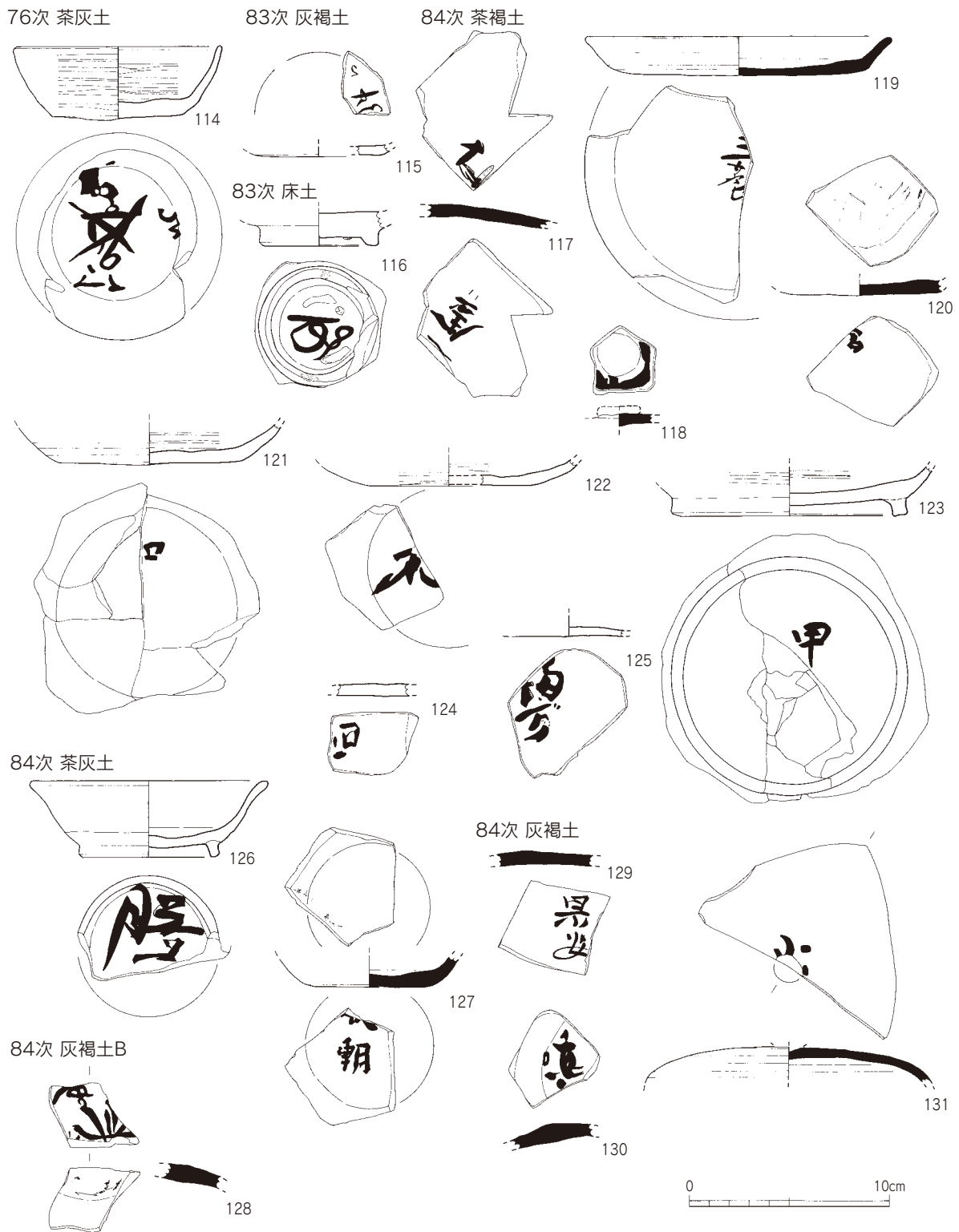


Fig.17 墨書土器実測図⑩ (1/3)

128・130・131は須恵器蓋で、128・130は天井部の小破片で、128は天井部外面に墨書がみられるものの記号であろうか。また、内面には墨痕があり、擦れていることから硯として使用している。130の墨書も天井部外面にあり、文字風にもみえるが、記号であろうか。131は天井部破片で、摘みと口縁部を欠く。天井は丸く、外面回転ヘラケズリ、内面ナデによる。

器壁が薄く、精良な作り。墨書は摘み部にあり、場所的に文字ではなく記号であろうか。

「果安」 129は須恵器皿の底部小片で、内外面ともナデによる。墨書は底部外面にあり、「果安」（はたやす）と判読したが人名とみられる。

132～134は須恵器の有高台坏で、132は口縁端部を、133は口縁部を欠く。132は直線的に開き、底部端に稜を有する。133・134は内湾気味に立ち上がる。高台は132が細身の断面方形、133が方形、134は断面ハ字形を呈し、133は底部端に貼付する。何れも胴部内外面はナデで、底部外面はケズリ後ナデによる。墨書は132・133が高台内にあり、132は「○」印、133は「V」形の記号を書いている。134は口縁部内面から底部にかけて「田」に「男」とみられる文字が無数にあり、「男」の文字を習書したものとみられる。また、内底面には墨痕が広がっているものの転用硯ではない。

「男」の習書

135は土師器坏で、口縁部を欠損する。口縁部は平底の底部から内湾気味に立ち上がる。外面ケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、底部外面ヘラケズリによる。墨書は底部外面にあり、「吉」と判読した。また、内底面には針書による「十」の刻書がある。

136は土師器高坏の脚柱部破片である。坏部側には径0.5cm程の棒状工具による穿孔を施している。墨書は外面に逆さ字で「高杯」と鮮明に記している。

「高杯」

137～141は85次調査で、137が茶褐土、138～141は暗褐土の出土。137は須恵器有高台坏の底部破片で、断面方形の高台を底部端に貼付する。墨書は高台内にあり、「庶」と判読した。138は須恵器の破片で、丸みを帯びることから蓋になろう。墨書は天井部外面にあり、「丸」と記している。上部を欠損するため1文字であったか不明。139は須恵器坏で、口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、口唇部を丸く納める。口縁部ヨコナデ、底部外面ヘラケズリで、底部との境にヘラ沈線を巡らす。墨書は胴部外面にあり、「□一」としたが詳細不明。140は須恵器底部の小片で、坏或いは皿になろう。内外面ともナデによる。墨書は底部外面にあるが、欠損により詳細不明。141は土師器坏で、口縁部を欠く。口縁部は平底の底部から内湾気味に立ち上がる。胴部は内外面ともナデによる。墨書は底部外面にあるが、判読不可。

「丸」

142は87次調査茶褐土出土の須恵器坏蓋で、摘み付近を欠損する。低平な器形で、口唇部の立ち上がりは弱く、外面には篋先による段を施す。墨書は天井部外面にあり、2文字程みられ、右側の文字は「兼」で、「承」の異体字か。左側の文字は「メ」であろうか。文字の意味するところは不明。なお、内面は硯として使用しており、墨痕も明瞭で、器面は擦り減っている。

143～145は何れも98次暗褐土下層からの出土である。143は須恵器有高台坏の底部破片で、断面方形の高台を底部の端寄りに貼付する。高台径は10.4cmに復原した。墨書は高台内にあり、「弁」と記している。144は須恵器坏の底部破片で、内湾気味に立ち上がる。底部外面はヘラ切り後ナデによる。復原底径は8.6cmを測る。墨書は底部外面にあり、「川」の字のようであるが、記号か。145は須恵器の皿で、口縁部は斜め外方に開き、口唇部はシャープである。口縁部の下位に篋先による細い沈線を巡らせている。口縁部ヨコナデ、内面ナデで、外底部はヘラ切り後未調整。墨書は底部外面にあり、文字なのか記号か判然としない。器高1.6cmで、口径は13.1cm、底径は9.6cmに復原した。

146・147はともに129次調査黒褐土の出土である。146は須恵器蓋の口縁部破片で、口唇部は鳥嘴状をなす。天井部を欠くが、低平なものになろう。口縁部内面に墨痕がみられるが、

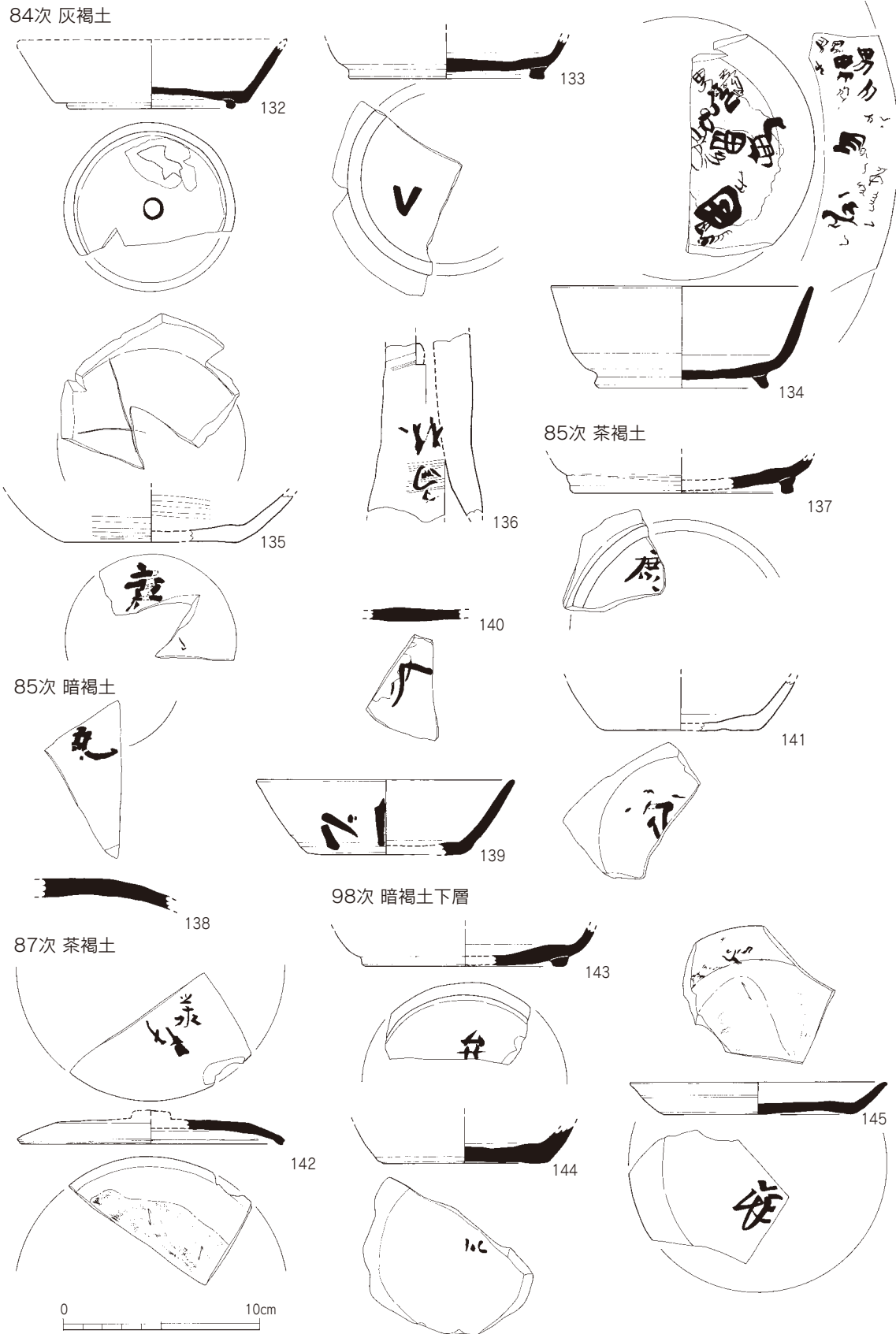


Fig.18 墨書土器実測図⑩ (1/3)

文字ではなく墨の滲みであろうか。口径は20.6cmに復原した。147は須恵器有高台坏の底部破片で、口縁部は直線的に立ち上がる。高台は断面台形を呈する細身のもので、底部の端寄りに貼付する。高台径は7.0cmに復原した。墨書は高台内にあるが、判読不明。

148～160は147次調査で、148は整地層、149～155は暗褐色土、156～160は茶褐色土層の出土である。148・149は須恵器蓋である。148は天井部破片で、口縁部及び摘みを欠く。

「乙」 外天井部は回転ヘラケズリによる。墨書は天井部外面にあり、「乙」と記している。149の口縁部は鳥嘴状を呈する。天井部は低平で、擬宝珠形の摘みを貼付する。口縁部ヨコナデ、外天井部ヘラ切り後ナデ、内面不整方向ナデによる。器高2.4cm、復原口径18.0cmを測る。天井部

「卅」 外面に墨書があり、「卅」と記している。

150・156は須恵器有高台坏の底部破片で、150は断面方形の高台を底部端に貼付し、156

「田井」 も断面方形の高台を底部端寄りに貼付する。墨書はともに底部外面にあり、150は「田井」、156は「一カ」と記している。

151は須恵器の皿で、口縁端部は外方に小さく突出する。口縁部ヨコナデ、外面回転ヘラケズリ、内面ナデによる。器高は2.2cmで、口径は12.4cm、底径は9.6cmに復原した。墨書は底

「○甜□」 部外面に3文字あり、左から「○」印、「甜」、「□」であるが、何を意味するのか不明。

152・153・157・158は底部小片であるが、一応皿とした。152の底部外面は回転ヘラケズリで、153はヘラ切り後未調整。墨書は底部外面にあり、152は「本」字状に見えるが確かではない。153は縦線を書いているが、文字であるか小片であるため不明。157は底部外面に2文字あり、上が「三」であるが下の文字は判読できない。また、内面には墨痕がみられるがあまり擦れていない。墨が特に濃いヶ所があり、筆馴らしであろうか。158の底部外面はヘラ

「木」 切り後未調整。墨書は底部外面にあり、「木」と判読できる。

154・159は土師器坏で、口縁部を欠く。何れも平底の底部から内湾気味に立ち上がる。内外面ともヘラミガキにより、底部外面はヘラケズリによる。154・159の墨書は底部外面中央

「浄」 にあり、154は概報（h5・第18図55）では「海」としているが、今回は「浄」と判読した。159は「不」と判読した。155は土師器碗の底部破片で、太めの高台を底部端に貼付する。復

「御」 原高台径は7.0cmを測る。高台内の中央に大きな文字で「御」と記している。

160は灰釉陶器の台付皿で、口縁部を欠く。高台は断面方形を呈し、底部端に貼付している。外面は回転ヘラケズリ後ミガキ、内面はミガキによる。内面の釉薬は殆ど剥落しており、外面は当初より露胎。墨書は高台内にあり、下半分を欠くため「大」、或いは「太」で、「丈」の可能性もある。

〔付記〕

墨書・刻書文字の判読には、宮崎産業経営大学柴田博子教授の御教示による。

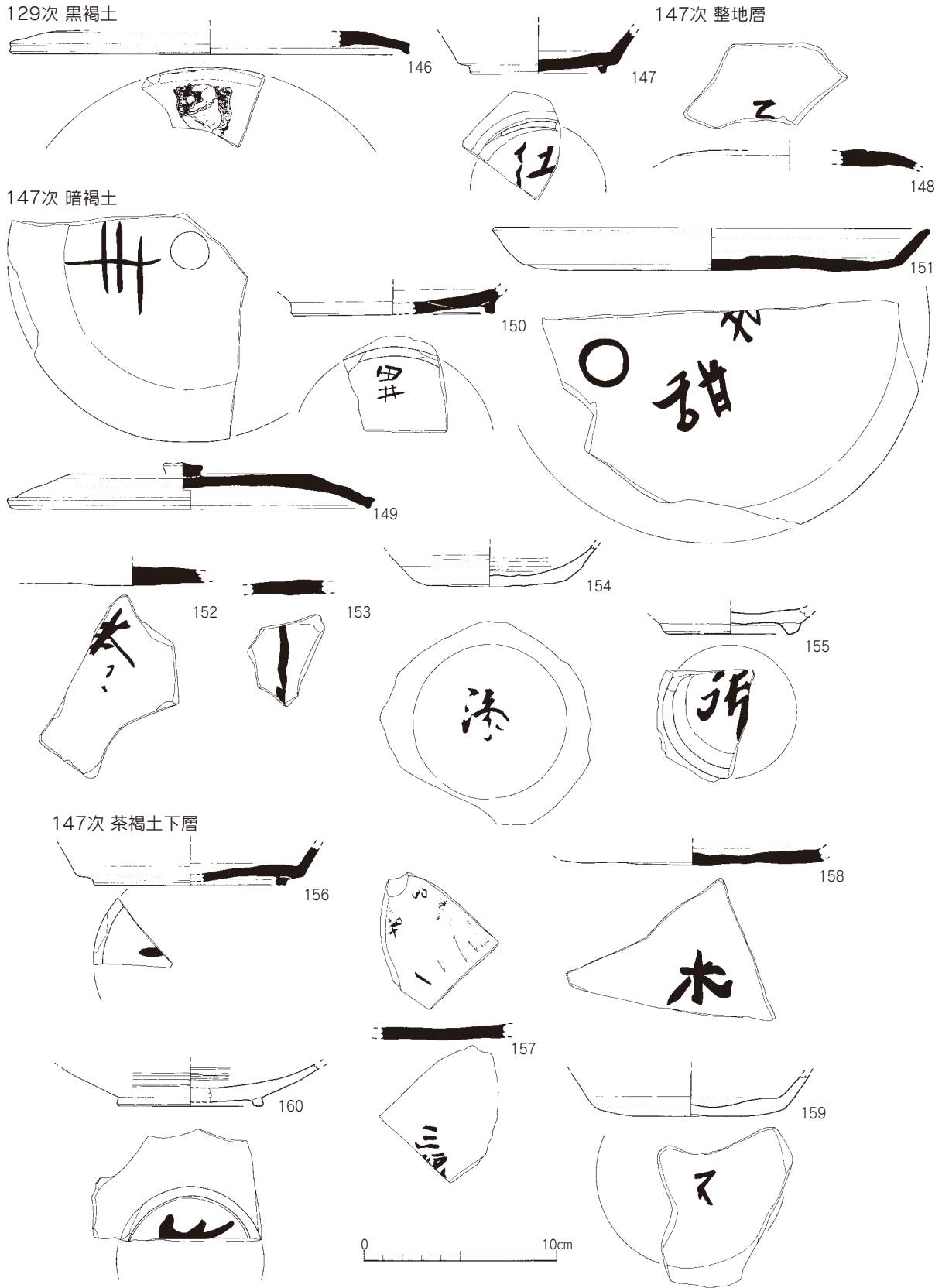


Fig.19 墨書土器実測図⑫ (1/3)

Tab.1 墨書土器一覽表

No.	次数	地区	遺構・土層	種別	器種	墨書部位	墨書内容	備考	Fig.	概報掲載No.	
1	14次	S4	SD320 灰白砂礫	須恵器	坏蓋	天井部内面	判読不明文字多数	転用硯, 習書			
2			SD320 灰白砂礫	"	坏	高台内/胴部	「那 _レ 支」, 「也」		9-20	S59-7-31	
3	14補	YL66	SD320(S10) 砂	青磁	碗	高台内	「□」	記号?	9-26		
4		YF66	SD320 中層 (S10 腐植土)	須恵器	坏蓋	天井部外面	「家」		9-18	S59 図 48-B	
5		YI67	SD320 中層 (S10 腐植土)	"	坏蓋	天井部内面	「家」		9-19	S59 図 48-C	
6		YI67	SD320 中層 (S10 腐植土)	"	坏蓋	天井部外面	「□ _レ 痒心」?		9-17	S59 図 48-E	
7		YH65	SD320 中層 (S10 粗砂)	"	皿	底部外面中央	「□」	記号?	9-24	S59 図 48-G	
8		YL65	SD320 中層 (S10 粗砂)	"	皿	底部外面中央	「主典」		9-23	S59 図 48-A	
9		YD65	SD320 中層 (S10 粗砂)	土師器	坏?	底部外面	「令 _レ 酒息息令 _レ 息 _レ 」		9-25	S59 図 48-H	
10		YG66	SD320 中層 (S10 黒粘)	"	台付皿	底部外面中央	「□-」		9-21	S59・11-86	
11		YH67	SD320 下層 (S10 砂)	須恵器	坏蓋	天井部内面	「□人」		9-16	S59 図 48-D	
12		YE66	SD320 下層 (S10 砂)	"	坏蓋	天井部内面	判読不明文字数個	転用硯		S59-7-19	
13		YD65	SD320 下層 (S10 砂)	"	皿	底部外面	「五月」?		9-22	S59 図 48-F	
14		YD65	SD320 下層 (S10 砂)	"	坏蓋	天井部内外面		墨痕			
15		17次	V-3	第1層 (下層)	"	坏	底部		墨痕		
16		76次	NC66	SD320(S10 灰白砂礫)	土師器	台付皿	内面	「开大□力」		11-48	S56-86-7
17	ND67		SD320(S10 灰白砂礫)	"	椀	外面	「南」		9-27	S56-86-18	
18	NB65		SD320(S10 腐植土)	須恵器	坏蓋	天井部外面	「二」		10-33	S56-86-2	
19	NB65		SD320(S10 腐植土)	"	坏	底部外面中央	「十」		10-40	S56-86-3	
20	ND65		SD320(S10 腐植土)	"	坏蓋	天井部外面	「□」				
21	ND67		SD320(S10 腐植土)	土師器	坏	口縁部内面	「□」	記号?	9-28		
22	NC66		SD320(S10 腐植土 D)	須恵器	坏	口縁部内面	「□肥巴□」		10-37		
23	ND65		SD320(S10 腐植土 D)	"	盤?	底部内面	「今」		10-43	S56-88-45	
24	ND65		SD320(S10 腐植土 D)	土師器	坏	底部	「□」				
25	ND66		SD320(S10 腐植土 D)	須恵器	坏蓋	天井部外面	○印 2 個		10-35	S56-88-40	
26	ND66		SD320(S10 腐植土 D)	"	坏	底部内面	「□」	記号?			
27	NE65		SD320(S10 腐植土 D)	"	坏蓋	天井部外面	「□」		10-34		
28	NE65		SD320(S10 腐植土 D)	"	坏蓋	口縁部内面	○印		10-36		
29	NE65		SD320(S10 腐植土 D)	"	坏	底部内面中央	「廿」	転用硯	10-38	S56-88-46	
30	NH67		SD320(S10 腐植土 D)	"	?	外面	「中□」		10-44		
31	NI65		SD320(S10 腐植土 D)	"	坏蓋	天井部内外面		墨痕			
32	NI65		SD320(S10 腐植土 D)	土師器	坏	底部外面中央	「千」		11-46	S56-89-54	
33	NI65		SD320(S10 下層腐植土)	須恵器	椀	胴部外面	「□」	記号?			
34	NC67		SD320(S10 最下砂)	"	皿?	底部内面	「□□」		10-45		
35	ND67		SD320(S10 最下砂)	"	坏蓋?	天井部外面	「□」		10-32		
36	NH65		SD320(S10 最下砂)	"	坏蓋	口縁部内面	「在」?		10-29		
37	NH65		SD320(S10 最下砂)	"	坏	底部外面中央	「十」?		10-41		
38	NI65		SD320(S10 最下砂)	"	坏蓋	口縁部内面	「上毛里 _レ 」		10-31	S56-88-54	
39	NI65		SD320(S10 最下砂)	"	坏蓋	天井部外面	「厨」?		10-30		
40	NI65		SD320(S10 最下砂)	"	坏	底部内面		墨痕			
41	NI67		SD320(S10 最下砂)	"	坏	底部外面	「□」		10-39		
42	NH66		SD320	"	平瓶?	胴~底部	「□□」		10-42		
43	NH66		SD320	土師器	椀	底部	「大 or 丈」		11-47	S56-86-19	
44	NC67		SD320 下層溝 (S11 腐植土)	須恵器	坏	底部	「杯」?		11-51		
45	NC66		SD320 下層溝 (S12)	土師器	椀	胴部外面	「力」		11-49	S56-87-25	
46	NB65		SD320 下層溝 (S13 腐植土)	須恵器	盤	底部外面	「今」		11-50	S56-87-32	
47	ND66		SD2010(S1)	"	坏	底部外面	「寺」?		11-52		
48	NF63		SD2010(S1 黒灰土)	"	鉢	口縁部外面	「□」	転用硯	11-53		
49	NH59		SD2015A(S5 灰色粘)	土師器	坏	底部内面	「酢二」		12-58	S56 図 89- a	
50	NH60		SD2015A(S5 灰色粘)	須恵器	坏蓋	天井部	「□」				
51	NH61		SD2015A(S5 灰色粘)	"	坏	底部外面中央	「御」		11-55	S56・93-2	
52	NI61		SD2015A(S5 灰色粘)	"	皿	底部外面	「子人」		11-57	S56・93-1	
53	NH59		SD2015A(S5 灰色砂)	"	坏	底部外面	「蔓」		11-56	S56 図 89- b	
54	NI61		SD2015A(S5 灰色砂)	"	坏	底部外面	「紫」		11-54	S56・93-7	
55	NH62		SD2015A(S5 下層)	土師器	皿?	底部外面	「大」	内面に墨痕	12-61		
56	NH58		SD2015 B (S5)	"	皿	底部外面	「人令」?		12-59		
57	NH60		SD2015 B (S5)	"	椀	底部外面	「瓦」?		12-60	S56・95-27	
58	NH60		SD2015 B (S5)	"	蓋?	天井部外面	「真□/□」		12-62	S56 図 91- b	
59	NH62		SD2015 B (S5)	"	坏	胴部外面	「孔」		12-63		
60	NH64		SK2007(S16)	須恵器	坏	胴部外面	「十」		8-7		
61	NH64		SK2007(S16)	須恵器	坏	底部外面	「野」		8-6	S56・97-5	
62	NH64		SK2007(S16)	"	坏	底部外面		墨痕			

No.	次数	地区	遺構・土層	種別	器種	墨書部位	墨書内容	備考	Fig.	概報掲載No.
63	76次	NH64	SK2007(S16)	土師器	坏 or 皿	底部外面中央	螺旋状の墨書		8-8	
64		NH64	SK2007(S16)	"	坏	底部外面	「十」?		8-9	
65		NH64	SK2007(S21)	須恵器	坏	底部外面中央	「□」		8-5	
66		NI60	茶灰土	土師器	坏	底部外面中央	「×」・「○」印	記号?	17-114	S56・99-8
67	83次	UJ58	SB2370(S80 柱穴)	須恵器	坏	底部外面中央		墨痕		
68		UE37	SD2340(S38 西)	"	坏蓋	天井部外面	「久女□/□/□/墨痕」		12-65	S58・11-7
69		UE37	SD2340(S38 西)	"	坏	底部外面中央	「可□」		12-66	S58・11-9
70		UB40	SX2336(S2)	"	蓋	天井部外面	「合/□/□」	転用硯, 習書	8-13	S58・12-1
71								欠番		
72		UI58	灰褐土	土師器	坏?	底部内面	「□□□」	記号風	17-115	
73		UC37	床土	青磁	碗	底部外面	「□」	螺旋状の記号	17-116	
74		SE42	SB2380A(S22 柱穴掘方)	須恵器	坏蓋	内面	筆馴らし?	転用硯	8-1	
75	SF45	SD2396(S46)	土師器	椀	底部外面中央	「□」	記号?	15-95	S58・図 50-12	
76	SB49	SD2419(炭中)	"	皿	底部外面中央	「右」?		16-104	S58・19-27	
77	SB49	SD2419(炭中)	"	坏	内外面	「□」	記号?	16-103	S58・19-22	
78	SB49	SD2419(炭中)	"	坏	底部外面	「槽」		15-102	S58・図 50-7	
79	SB49	SD2419(炭中)	"	坏	底部外面中央	「存 or 右」		15-101	S58・図 50-9	
80	SB49	SD2419(炭中)	"	皿?	底部外面	「戌寅」		16-105	S58・19-28	
81	SC47	SD2419(焼土中)	須恵器	壺	胴部外面	「合」		15-98	S58・18-14	
82	SC48	SD2419(焼土中)	"	蓋	天井部外面	魚形/□/□	転用硯	15-96	S58・18-6	
83	SC48	SD2419(焼土中)	"	坏	底部外面	「□」	筆馴らし?	15-97		
84	SH47	SD2419(焼土中)	土師器	椀	底部外面中央	「申」		15-99	S58・19-26	
85	SH47	SD2419(焼土中)	"	坏	底部外面中央	「人給」		15-100	S58・19-18	
86							欠番			
87	Z	SX2336	須恵器	坏	底部外面	「大□」				S58・図 50-4
88	SH40	(S15)	"	蓋?	天井部外面		墨痕			
89	SB47	灰褐土	"	坏	底部外面中央	「○」		18-132		
90	SC39	灰褐土	"	坏蓋	天井部外面	「□」	記号?	17-130		
91	SD45	灰褐土	"	坏	内面	「男男男」	習書	18-134	S58・25-24	
92	SE44	灰褐土	"	坏蓋	天井部外面	「□」	記号?	17-131	S58・図 50-6	
93	SF36	灰褐土	土師器	高坏	脚部外面	「高杯」		18-136	S58・27-52	
94	SG38	灰褐土	須恵器	皿	天井部外面		墨痕			
95	SH42	灰褐土	"	坏	底部外面中央	「V」	記号	18-133	S58・図 50-1	
96	SI33	灰褐土	"	坏蓋	天井部外面	「 」	転用硯			
97	SI44	灰褐土	土師器	坏	底部外面	「吉」?, 内面十の刻書		18-135	S58・図 50-10	
98	SK46	灰褐土	須恵器	皿	底部外面	「果安」		17-129	S58・25-26	
99	SI40	灰褐土 B	"	蓋?	天井部外面	「□」		17-128	S58・図 50-2	
100	SB45	茶褐土	"	蓋	天井部内外面	外「井」、内「金」		17-117	S58・図 50-5	
101	SB49	茶褐土	土師器	坏	底部外面	「不」		17-122	S58・図 50-8	
102	SB49	茶褐土	"	坏	底部外面	「口」		17-121		
103	SC49	茶褐土	"	皿?	底部外面	「福 _ろ 万」		17-125	S58・図 50-11	
104	SC50	茶褐土	"	椀	底部外面中央	「甲」		17-123	S58・23-36	
105	SC50	茶褐土	"	皿?	底部外面中央	「□」		17-124		
106	SD50	茶褐土	須恵器	皿	底部外面中央	「三女宅」?		17-119	S58・22-17	
107	SD50	茶褐土	青磁	碗	高台内	「□」				
108	SF49	茶褐土	須恵器	坏蓋	天井部外面	「□」	記号?	17-118		
109	SG48	茶褐土	"	坏	底部外面	「宮」?	転用硯	17-120		
110	SF35	茶灰土	"	坏	底部外面	「□朝」	転用硯	17-127	S58・図 50-3	
111	SI35	茶灰土	土師器	椀	底部外面	「膳」		17-126	S58・23-35	
112	SK49	暗褐土	白磁	皿	高台内	「□」				
113	QA46	SB2486(S46)	須恵器	坏蓋	天井部内面		墨痕			
114	QH47	SD2015B(S5 上層)	"	坏	底部外面	「□□」		12-64		
115	QJ37	SD2340(S50 上層)	"	坏蓋	天井部外面	「□」	内面に墨痕	12-67		
116	QL38	SD2340(S50 上層)	"	皿	底部外面	「大城」	内面に墨痕	12-69	S58・35-20	
117	QH37	SD2340(S50 下層)	"	高坏	脚部内面	「門」		12-70		
118	QL38	SD2340(S50 下層)	"	坏	底部外面	「□」	再掲	12-68	IV・Fig.44-18	
119	QD41	SD2464(S16)	"	坏	底部外面中央	「御」		16-106		
120	QH38	茶褐土	"	坏	底部外面	「庶」		18-137		
121	QB44	暗褐土	須恵器	皿?	底部外面	「□」		18-140		
122	QE46	暗褐土	"	坏	胴部外面	「□一」		18-139		
123	QG43	暗褐土	土師器	坏	底部外面中央	「□」		18-141		
124	QJ36	暗褐土	須恵器	蓋?	天井部外面	「丸」		18-138		

No.	次数	地区	遺構・土層	種別	器種	墨書部位	墨書内容	備考	Fig.	概報掲載No.
125	87次	VD37	SD2340(S50 青灰砂質土)	須恵器	坏蓋	天井部外面	「□/□」		13-71	
126		VD37	SD2340(S50 暗灰粘質土)	〃	坏蓋	天井部外面	「兀卅」	転用硯	13-72	
127		VE37	SD2340(S50 暗灰粘質土)	〃	坏	底部外面	「卍」		13-74	S59・35-60
128		VE37	SD2340(S50 暗灰粘質土)	〃	坏	胴・底部外面	「 」, 「□/□」	記号?	13-73	S59・35-69
129		VC37	茶褐土	〃	坏蓋	天井部外面	「兼□」	転用硯	18-142	S59・43-1
130	90次	VJ37	SD2340(S50 上層茶灰土)	〃	坏蓋	天井部外面	「□□□」		13-75	S59・32-11
131		VJ37	SD2340(S50 中層黒粘)	〃	蓋	天井部外面	「勝万呂」		13-76	S59・33-24
132		VK37	SD2340(S50 中層黒粘)	土師器	坏	底部外面	「政所」		13-80	S59・39-105
133		VI37	SD2340(S50 中層灰粘)	〃	皿	底部外面中央	「夢」?, 籠記号「十」		14-81	S59・39-107
134		VH37	SD2340(S50 中層灰粘)	〃	蓋	摘み上面	「門」		13-79	S59・39-101
135		VK37	SD2340(S50 中層灰粘)	須恵器	坏	底部外面	「杉寺」		13-78	S59・34-51
136		VL37	SD2340(S50 下層茶褐砂)	〃	坏蓋	天井部外面	「□男 _レ □」		13-77	S59・32-17
137		QS37	SD2340 上層	〃	坏蓋	天井部外面	「匠司」		14-82	S61・5-8
138	QS38	SD2340 上層	〃	坏	底部外面	「六 or 大」		14-85	S61・5-12	
139	QT37	SD2340 上層	〃	坏	底部外面	「井」		14-86	S61・図32-9	
140	QT38	SD2340 上層	土師器	坏	底部外面	「□□」		14-87		
141	QU38	SD2340 上層	須恵器	皿?	底部外面	「一成□□/○」		14-90	S61・5-21	
142	QT37	SD2340 中層	〃	蓋	天井部外面	「人足人足□」	習書?	14-83	S61・5-7	
143	QT38	SD2340 中層 (黒色土)	〃	坏	底部外面	「酒」		14-88	S61・6-24	
144	QT38	SD2340 中層 (黒色土)	〃	坏	底部外面	「の」形の記号		14-84	S61・5-16	
145	QU37	SD2340 下層 (砂)	〃	甕	片部外面	「楓」	再掲	14-91	IV・Fig.52-4	
146	98次	QU38	SD2340	〃	坏	底部外面	「中」		14-89	S61・6-31
147		QS42	SE2890(S50)	〃	坏	底部外面	外底:「玉」, 内底:墨痕		8-3	S61・7-2
148		QS42	SE2890(S50)	土師器	坏	底部外面	「八□」		8-4	S61・7-6
149		QT38	SK2882(S6)	須恵器	坏	底部外面	「入米 _レ 」		8-10	S61・5-15
150		QT38	SK2882(S6)	土師器	台付皿?	底部外面	「子」		8-11	
151		QU38	SK2883(S7)	須恵器	坏	胴部外面	「□□□□」		8-12	
152		QN37	SX2480	〃	坏蓋	天井部外面		墨痕		
153		QT38	暗褐土下層	〃	皿	底部外面	「□」	記号?	18-145	S61・16-5
154		QU38	暗褐土下層	〃	坏	底部外面	「□」		18-144	S61・16-6
155		QO39	暗褐土下層	〃	坏	底部外面	「弁」		18-143	S61・16-4
156	124次	QG37	SD2340 上層	〃	坏蓋	天井部外面	「十」		15-92	h2・61-33
157		QF37	SD2340 下層 (粘質砂)	〃	坏	底部外面	「□」		15-94	h2・60-22
158		QF37	SD2340 最下層 (砂質土)	〃	蓋	天井部内面	「也/母志/七八七」	転用硯	15-93	h2・59-1
159	129次	NP52	黒褐土下層	〃	蓋	口縁部内面		墨痕	19-146	
160		NQ54	黒褐土	〃	坏	底部外面	「□」		19-147	
161	147次	QH50	SD4037 (S15)	〃	坏	底部外面	「又」	灯火器	16-107	h5・10-3
162		QH49	SX4066 (S30)	土師器	坏	底部外面	「御坏日」		8-14	h5・14-17
163		QF51	S11	須恵器	坏	口縁部外面	「斤」		8-15	
164		QI54	SB4035B (S149)	〃	坏	底部外面	「□」		8-2	h5・12-3
165		QG48	整地	〃	坏	底部外面		墨痕		
166		QG48	整地	〃	蓋	天井部外面	「乙」		19-148	
167		QI48	茶褐土下層	〃	皿	底部外面	「木」		19-158	h5・21-38
168		QI50	茶褐土下層	〃	坏	底部外面	「一」?		19-156	
169		QI51	茶褐土下層	灰釉陶器	台付皿	底部外面	「大 or 太 or 丈」		19-160	h5・25-81
170		QJ50	茶褐土下層	土師器	坏	底部外面	「不」?		19-159	
171		QK48	茶褐土下層	須恵器	皿?	底部外面	「三□」	転用硯	19-157	h5・15-20
172		QF49	暗褐土	〃	蓋	天井部外面	「卅」		19-149	
173		QG50	暗褐土	〃	皿	底部外面	「□」		19-152	
174		QG50	暗褐土	〃	皿?	底部外面	「□」		19-153	
175		QH50	暗褐土	〃	坏	底部外面	「田井」		19-150	
176		QH52	暗褐土	土師器	坏	底部外面	「御」		19-155	h5・18-57
177		QH52	暗褐土	〃	坏	底部外面	「浄」		19-154	h5・18-55
178		QK47	暗褐土	須恵器	皿	底部外面	「○甜□」		19-151	h5・16-38
179	187次		SD4570B (10B 下層)	〃	蓋	天井部外面	人面墨書?		16-109	大II・52-1
180			SD4570B (10B 下層)	〃	皿?	底部外面	「面」		16-110	大II・52-2
181			SD4570B (10B 下層)	土師器	坏	底部外面	「 」		16-112	
182			SD4570B (10B 下層)	〃	皿	口縁部内外面	記号		16-111	大II・52-3
183			SD4570 (10AB 下層)	〃	皿	口縁部内面	記号		16-108	大II・52-4
184			SD4572 (S27)	灰釉陶器	碗	高台内	「門」		16-113	大II・49-18
185			E3	黄灰色土	須恵器	?		「□」		

・「□」は判読不明を表す

3) 刻書土器 (Fig.20・21, PL.47, Tab. 2)

不丁地区官衙跡においては、40点程の刻書土器が出土しているが、刻書には記号とみなされるもの(「イ」・「つ」・「T」・「△」・蜘蛛巣状・放射線等)があり、文字と認識できたのは24点であった。遺構的にはSD320-7点, SD2015-3点, SD2340-3点, SK2007-1点, SD2335-1点, SD3818-1点, SD4566-1点で、他は整地層及び包含層の出土である。185点確認された墨書土器に比して極端に少ない。また、刻まれている文字も様々で、特定の文字が多いというわけではない。

1~7はSD320で、1が腐植土B、2は腐植土D、3は腐植土A、4は中層黒粘、5~7は最下層砂から出土した。1は須恵器蓋の天井部小片で、外面に2文字焼成前に針書している。上の字は「三」で、下の字は「父」の下に「少」を組み合わせたような文字であるが、判読不明。2は須恵器の胴部破片で、外面工具ナデ、外面ナデによる。壺或いは鉢になるか。「日」の字を焼成前に篋先で刻書しているが、破片であるため1文字であったか不明。3は須恵器甕の口縁部破片で、口径は20.2cmに復原した。大きく外反し、端部は丸く収める。刻書は口縁部外面の直下にあるが、判読不明。記号であろうか。

4は土師器坏で、器高3.3cm、口径11.7cm、底径5.3cmを測る。口縁部は丸みを帯びる底部から直線的に立ち上がり、口唇部は丸く納める。焼成は良好で、内外面とも灰白色を呈する。文字は口を下にした状態で、口縁部外面に1文字針書しており、「今」と判読した。概報(S59第11図76)及び官衙IV(Fig.33-61)では刻書土器としていないため再掲した。5も土師器の坏で、口縁部は平底の底部から内湾して立ち上がる。外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、底部外面回転ヘラケズリによる。刻書は底部外面にあり、全面に「人」字を焼成前に針書している。概報(S56第90図80)及び官衙IV(Fig.37-28)では刻書土器としていないため再掲した。6は土師器皿の底部破片で、平底をなす。底部外面は回転ヘラケズリによる。底部外面に刻書があり、人偏の左側部分或いは「人」であろうか。焼成前に篋先で刻んでいる。7は土師器の移動式竈の鏝部分で、外面は粗いハケ目調整による。内外面とも煤が付着している。上部外面に「春岑」と人名を篋先で刻書しており、所有物であることを表している。

8~10はSD2015出土で、8・9がSD2015A(古期)、10がSD2015B(新期)である。8は土師器坏の底部破片で、やや上げ底をなす。底径は7.8cmに復原した。外面ヘラケズリ、内面ナデによる。刻書は底部内面にあり、現状で2文字みられる。一字目は「大」で、二文字目は火偏であるが、右半分を欠損するため判読不明。9は土師器の底部小片であるが、皿になるか。刻書は外面に1字あり、文字の上部を欠損するが「曲」であろう。10は土師器坏の底部破片で、平底をなす。底径は7.0cmを測る。内外面ともヘラミガキによる。刻書は底部外面にあり、「个(か)のようであるが、或いは記号か。

11はSD2335出土の土師器椀で、口縁部は直線的に開く。高台は断面方形を呈する。内外面ともヘラミガキにより、外面にはスリップを施し、赤橙色を呈する。器高7.6cm、口径18.1cm、高台径9.0cmを測る。刻書は高台内にあり、針書で「有」と刻んでいる。

12はSD3818出土の土師器小片であるが、坏の底部であろうか。内面に刻書文字があり、旁は「寸」とみられるが、偏は不明。

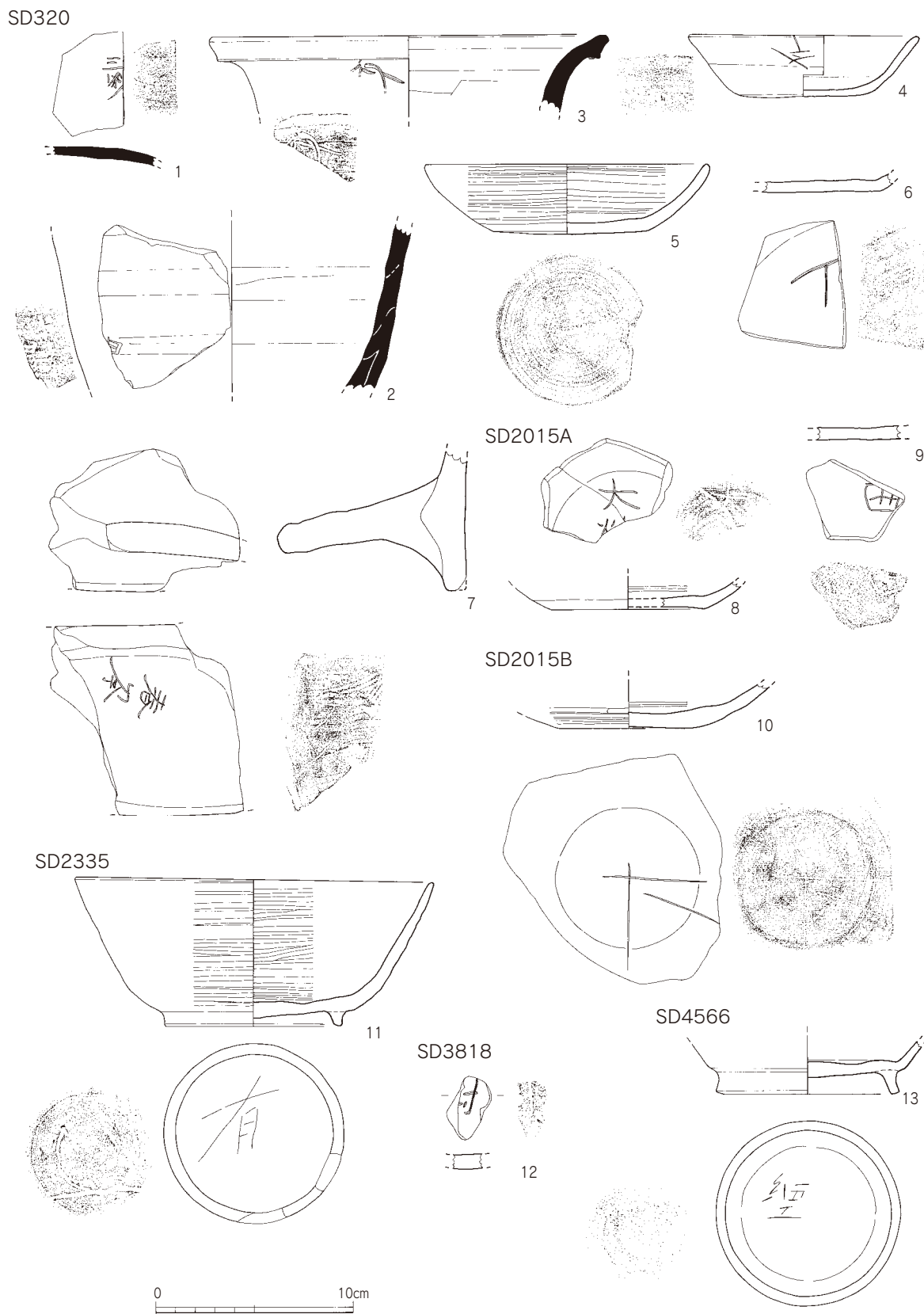


Fig.20 刻書土器実測図① (1/3)



Fig.21 刻書土器実測図② (1/3)

13はSD4566出土の土師器碗の底部破片で、やや高めの高台を底部端に貼付する。内外面ともナデ調整による。高台径は9.3cmを測る。刻書文字は高台内にあり、針書で「細工」と刻ま「細工」られている。細工所は平安時代以降、院や摂関家、国衙などに置かれ、調度類の細工物を製造した所で、細工の刻書が「細工所」を示すのであれば、大宰府の所司の一つとなろう。検討を要する資料である。

14～16はSD2340で、14が中層灰粘、15は下層茶褐砂、16は暗灰粘の出土である。14・

16は須恵器有高台の坏で、ともに断面方形の高台を底部端寄りに貼付している。14は底部の器厚が1.1cmと厚く、重量感がある。器高は14・16とも4.9cm、口径は14が14.2cm、16は18.0cm、高台径は14が9.7cm、16は12.5cmを測る。刻書は高台内にあり、14が中央に動物形の記号³を刻み、16は高台寄りに刻んでいるが、判読不明。15は須恵器甕の口頸部破片で、口唇部は上方に小さく立つ。口径は27.0cmに復原した。頸部外面に「宇治マ君□」と人名を刻んでいるが、破片であるため5文字で終わるのかは不明。

「宇治マ君
□」

17はSK2007出土の土師器坏で、器高3.7cm、口径16.5cm、底径8.8cmを測る。口唇部はシャープで、平底の底部から内湾気味に立ち上がる。外面はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキで、丁寧な作りである。刻書は底部外面中央にあり、焼成前に針書で「大」と刻まれている。5・10・17は器形、刻書方法が類似しており、同一工人によるものか。なお、概報（S56第98図22）及び官衙Ⅳ（Fig.84-30）では刻書土器としていないため再掲している。

「大」

18は17次第2層出土。須恵器の胴部小片であるが、甕になろう。外面はハケ目後ナデで、内面は工具によるナデ。焼成前に1文字針書しており、左半分を欠くが「分」であろうか。19は84次灰褐土出土の須恵器有高台の坏底部破片で、高台は断面沓形を呈するか。刻書は高台内にあり、焼成前に篋先で1文字刻んでいるが、「生」と判読した。

20は85次暗褐土出土の土師器底部小片で、坏であろうか。刻書は底部外面に2文字みられ、上は「三」で、下は「八」の下に「口」を刻んでおり、「公」になるか。21は87次茶褐土出土の土師器碗の底部破片で、断面ハ字形のシャープな高台を貼付する。高台径は7.4cmに復原した。

「人」

22・23は147次暗褐土出土で、22は須恵器坏の底部破片で、平底をなす。1/5程の破片で、底径は10.0cmに復原した。底部外面には「巾」の刻書と「之」³の墨書がある。23は土師器坏の底部破片で、底部は平底をなす。刻書は底部外面にあり、篋先で2文字刻んでいる。上の文字は欠損により不明であるが、下の字は「合」と読める。24は187次灰色土出土の須恵器蓋の天井部小片である。天井部外面に「土」偏状の刻書文字がみられるが、小破片なため詳細は不明。

「巾」の刻
書と「之」
の墨書

Tab.2 刻書土器一覧表

No.	次数	地区	遺構・土層	種別	器種	刻書部位	刻書内容	備考	Fig.	概報掲載No.
1	14補	YL76	SD320中層(S10黒粘)	土師器	坏	口縁部外面	「今」	再掲	20-4	S59・11-76
2	17次	T3	第2層	須恵器	甕	胴部外面	「分」?		21-18	
3		U3	第2層	〃	皿?	底部内面	「 」			
4	76次	NI67	SD320(S10腐植土A)	〃	甕	口縁部外面	「□」		20-3	S56・86-5
5		NE65	SD320(S10腐植土B)	〃	坏蓋	天井部外面	「三□」		20-1	
6		NI65	SD320(S10腐植土D木筒周辺)	〃	坏蓋	天井部外面	「つ」形の記号			
7		NI68	SD320(S10腐植土D木筒周辺)	〃	甕	胴部外面	「つ」形の記号			
8		NH65	SD320(S10腐植土D)	〃	壺?	胴部外面	「日」		20-2	
9		NI65	SD320(S10腐植土D)	土師器	坏	底部外面	放射状の記号			
10		NC67	SD320(S10最下砂)	〃	移動式竈	鏝部外面	「春岑」		20-7	S56・図88a
11		ND65	SD320(S10最下砂)	〃	皿	底部外面	「人」		20-6	
12		NH65	SD320(S10最下砂)	〃	坏	底部外面	「人」	再掲	20-5	S56・90-80
13		NH59	SD2015A(S5A灰色粘)	〃	蓋	口縁部内面	蜘蛛の巣状の記号			S56・93-3
14	NH59	SD2015A(S5A灰色粘)	〃	坏	底部外面	三角形の記号			S56・93-6	
15	NH60	SD2015A(S5A下層)	〃	皿?	底部外面	「曲」?		20-9		
16	NH59	SD2015B(S5灰色砂)	〃	坏	底部外面	「个」?	再掲	20-10	官衛IVfig.56-20	
17	NH62	SD2015A(S5灰色砂)	〃	坏	底部外面	「T」形の記号			S56・93-11	
18	NH60	SD2015B(S5)	〃	蓋	天井部内面	□の中に米形の記号			S56・95-25	
19	NH64	SK2007(S16)	〃	椀	底部外面	「人」字形の記号			S56・98-26	
20	NH64	SK2007(S16)	〃	坏	底部外面	「大」	再掲	21-17	S56・98-22	
21	NE68	茶灰土		黒色土器B	椀	底部内外面	網状の記号			S56・99-10
22	84次	SH47	SD2419(焼土中)	土師器	坏	口縁部外面・外底部	口:川,底:L形の記号			
23		SE33	灰褐土	須恵器	坏	底部外面	「生」?		21-19	
24	85次	QH46	SD2015A(S5)	土師器	坏	底部内面	「大□」		20-8	
25		QE45	暗褐土	〃	坏?	底部外面	「三公」?		21-20	
26		QE46	暗褐土	〃	坏?	底部外面				
27	87次	VD38	SD2340(S50暗灰粘)	須恵器	坏	底部外面	「□」		21-16	
28		VE43	茶褐土	土師器	椀	底部外面	「人」		21-21	
29	90次	VH37	SD2335(S70)	〃	椀	底部外面	「有」		20-11	S59・31-7
30		VK37	SD2340(S50中層灰粘)	須恵器	坏	底部外面	動物風の刻書		21-14	S59・34-47
31		VK37	SD2340(S50下層茶褐砂)	〃	甕	頸部外面	「宇治マ君□」		20-15	S59・38-95
32	129次	NP52	SD3818(S7)	土師器	坏?	底部内面	「□」		20-12	
33	147次	QE47	茶褐土下層	須恵器	蓋?	天井部内面	「V」形の記号			
34		QE52	茶褐土下層	〃	蓋	天井部内面	「□」	へラ記号?		
35		QG49	暗褐土	〃	坏	底部外面	刻書「巾」と墨書「之」?		21-22	h5・16-23
36		QH48	暗褐土	土師器	坏	底部外面	「□合」		21-23	h5・18-56
37	187次		SD4566(S4)	〃	椀	底部外面	「細工」		20-13	大II・52-5
38		E5	灰色土	須恵器	蓋	天井部外面	「□」		21-24	大II・52-6

・「□」は判読不明を表す

4) 陶 硯 (Fig.22 ~ 36, PL.48 ~ 51, Tab. 3・4)

形態分類

大宰府史跡からは種々な形態の陶硯が出土しており、以下の如く分類した。

- I 類：円面硯…硯面が円形をなし、その周囲に海部及び外堤を有するもので、脚部の形態により、蹄脚 (A)・獣脚 (B)・多足 (C)・圈足 (D)・低脚 (E) に細分できる。
- II 類：円形硯…硯面は円形を呈するが、海部が不明瞭なもの (A)、坏蓋形を呈するもの (坏蓋硯：B)、皿形の器形に脚を付した形態のもの (脚付円形硯：C)、亀頭形の取手を貼付したもの (特殊円形硯：D) がある。
- III 類：風字硯…平面形が「風」字の旁に似るもので、硯面が単面のもの (A) と二面のもの (B) がある。
- IV 類：方形硯…平面形が方形若しくは長方形を呈するもの。
- V 類：形象硯…動物・宝珠・花等を形取った形態をなすもの。
- VI 類：土器転用硯…蓋・坏・甕・鉢・壺等の土器を硯に転用したもので、猿面硯は転用硯の範疇に含めた。

概 要

不丁地区官衙跡においては、104点の定形硯と461点の転用硯を確認した。定形硯ではID類とした圈足円面硯が79点 (76.0%) の出土と断然多く、次いでⅢA類の単面風字硯 (10点・9.6%)、ⅢB類の二面風字硯 (6点・5.8%) と続くが、他は一二点の出土であった。遺構的には、SD320が29点 (27.9%) と最も多く、次いでSD2015とSD2340の4点 (3.8%) で、大半は整地層或いは包含層から出土している。

転用硯には
坏蓋を多用

転用硯では、坏蓋 (324点・70.3%) が多用され、次いで甕 (60点・13.0%)・皿 (31点・6.7%)・坏 (26点・5.6%)・壺 (13点・2.8%)・鉢 (3点・0.6%) の順となる。遺構では、定形硯同様、SD320が105点 (22.8%) と最も多く、次いでSD2340の76点 (16.5%) であり、両者からは木簡・墨書土器が多量に出土していることもあり、硯の出土点数は政庁周辺官衙の中では群を抜いて多い。他の遺構としては、SD2015-9点、SD2419-10点、SX2336-6点、SX4065-5点が出土している程度で、半数は整地層或いは包含層の出土である。

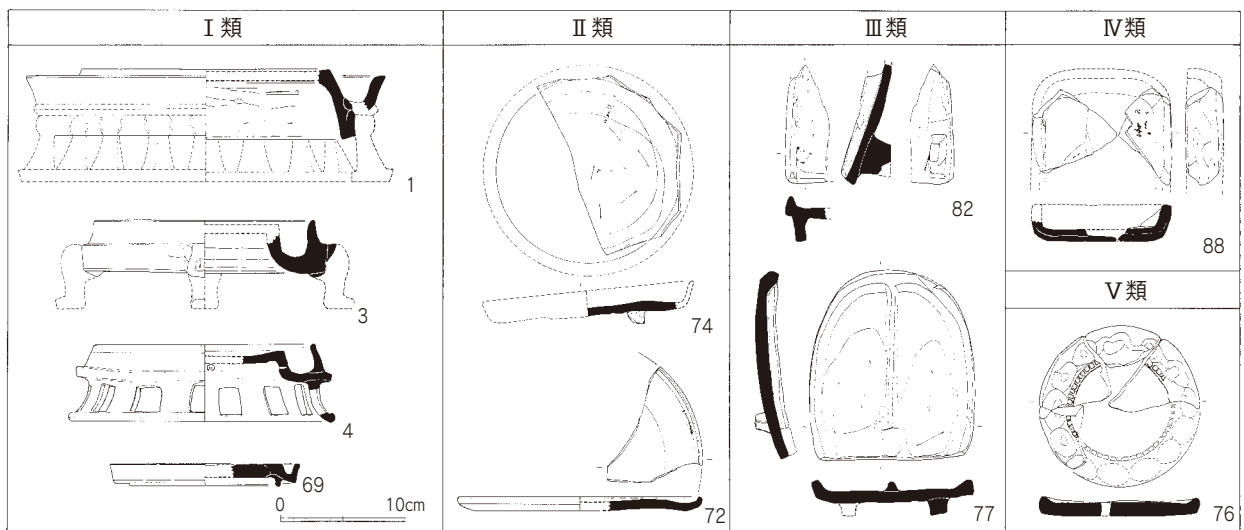


Fig.22 定形硯分類図 (1/6)

定形硯は89を除き何れも須恵質焼成で、ナデ調整を主体とする。胎土には砂粒を殆ど含まず、精良である。内面に灰を被っているものがあり、硯面を下にして焼成したことが判る。なお、不丁地区官衙跡からはⅣ類の方形硯は出土しておらず、空欄としている。詳細については、定形硯一覧表 (Tab. 3) を参照されたい。

I 類：円面硯 (1～69) 1～69は円面硯で、1・2が蹄脚円面硯 (IA類)、3が獣脚円面硯 (IB類)、4～68が圈足円面硯 (IC類)、69が低脚円面硯 (IE類) である。1は硯部と外堤部の破片で、両者は接合しないものの胎土・手法等から同一個体とみられる。硯部端には蹄脚貼付時のキザミ目を付しており、蹄脚は20個に復原できる。2は蹄脚の小片で、上部裏面と底部下面に剥離痕がみられる。断面三角形をなし、中央に細い突帯を貼付する。1が84次灰褐土及び85次茶褐土とSD2015の出土で、2はSD2340の下層茶褐土から出土した。3は海部から外堤にかけての破片で、脚部を欠損するが剥離痕跡から4個に復原できる。また、脚部は不明ながら獣脚を呈しよう。海部は深く、外堤は直立する。外堤径は17.6cmに復原した。内面は灰被りであり、硯面を下にして焼成したことが知られる。85次暗褐土から出土した。

4～68は圈足円面硯である。4～6は短脚の圈足で、シルクハット形を呈する硯部端の上面に外堤を、下面に脚台を貼付し、その中央部分を方形突帯とする。スカシ孔は方形を呈し、4が13個、5は14個、6は9個施している。また、4の硯部内面には径2mmの刺突孔がみられるが、その意図は明らかではない。器高は4が6.2cm、5は7.3cmで、陸部径は4が12.8cm、5は12.4cmに復原した。4は84次SD2419と147次SD4037が接合したもので、両者間は約20m程の距離を有する。5はSX2480、6はSD320の中層腐植土の出土である。

7は陸部から突帯にかけての破片で、外堤は内湾気味に立ち上がる。外堤のやや下位に断面方形の突帯を貼付する。外堤部外面には絞ったような痕がみられる。スカシ孔は長方形を呈し、14個に復原した。復原陸部径は10.6cmを測る。8・9は海部から突帯にかけての破片で、外堤直下に断面三角形の突帯を貼付する。ともに海部には墨痕がみられる。何れもSD320の出土で、7が中層粗砂、8・9は下層砂から出土した。10・11は陸部端から突帯にかけての破片であるが、10は元より突帯を貼付していない。11の突帯はシャープな断面三角形を呈する。スカシ孔は長方形を呈するが、10は幅3cm程の幅広のものである。陸部径は10が16.8cm、11は12.9cmに復原した。10はSX2480、11は187次攪乱土の出土。

12・15・17・18～24は陸部径が8cm程の小型の円面硯である。突帯は12・13・22が断面方形、14・16～20・23・24が断面三角形をなすが、15は突帯を貼付しないもの。スカシ孔は何れも長方形を呈するが、12～15・23は幅1cm程のもので、16・17は幅2cmと大きめのものである。また、15の陸部は外堤よりも高く、23は外堤が陸部より高いもので、12・18・19・22・24は陸部と外堤端の高さがほぼ等しい。16・21は外堤端を欠くが、海部が深いことから陸部が外堤より高いものになろう。17・19・20・22は硯部に粘土帯を貼付することにより陸部と海部を作り出している。なお、12・19の硯面は余り擦れていないが、墨痕は明瞭である。18の硯面は良く擦れ、海部にも墨痕が付着している。硯部内面には画数が足りないものの「集兵」の墨書がある。21・24の硯面は擦れておらず、墨痕も確認できないことから未使用品とみられる。また、12・19・21は内面に灰が被っており、硯面を逆さにして焼成している。

12は147次暗褐土、13は87次灰褐土、14はSD2015、15は147次茶褐土、16はSD3836、

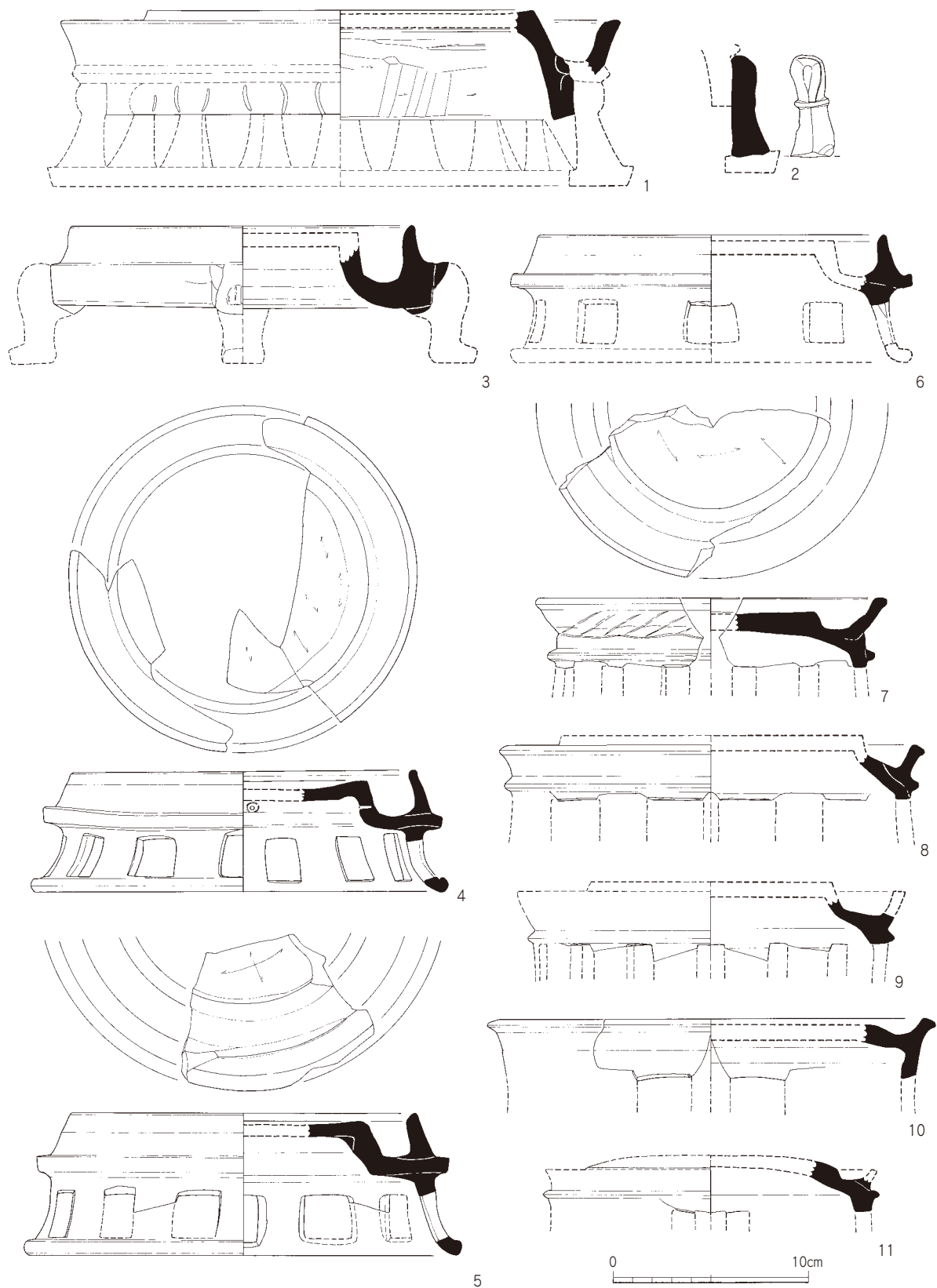


Fig.23 定形硯実測図① (1/3)

20・21・24は129次黒褐土，22は76次茶灰土，23はSK4574出土で，17～19はSD320の出土で，17・19が最上層，18は中層黒粘から出土した。

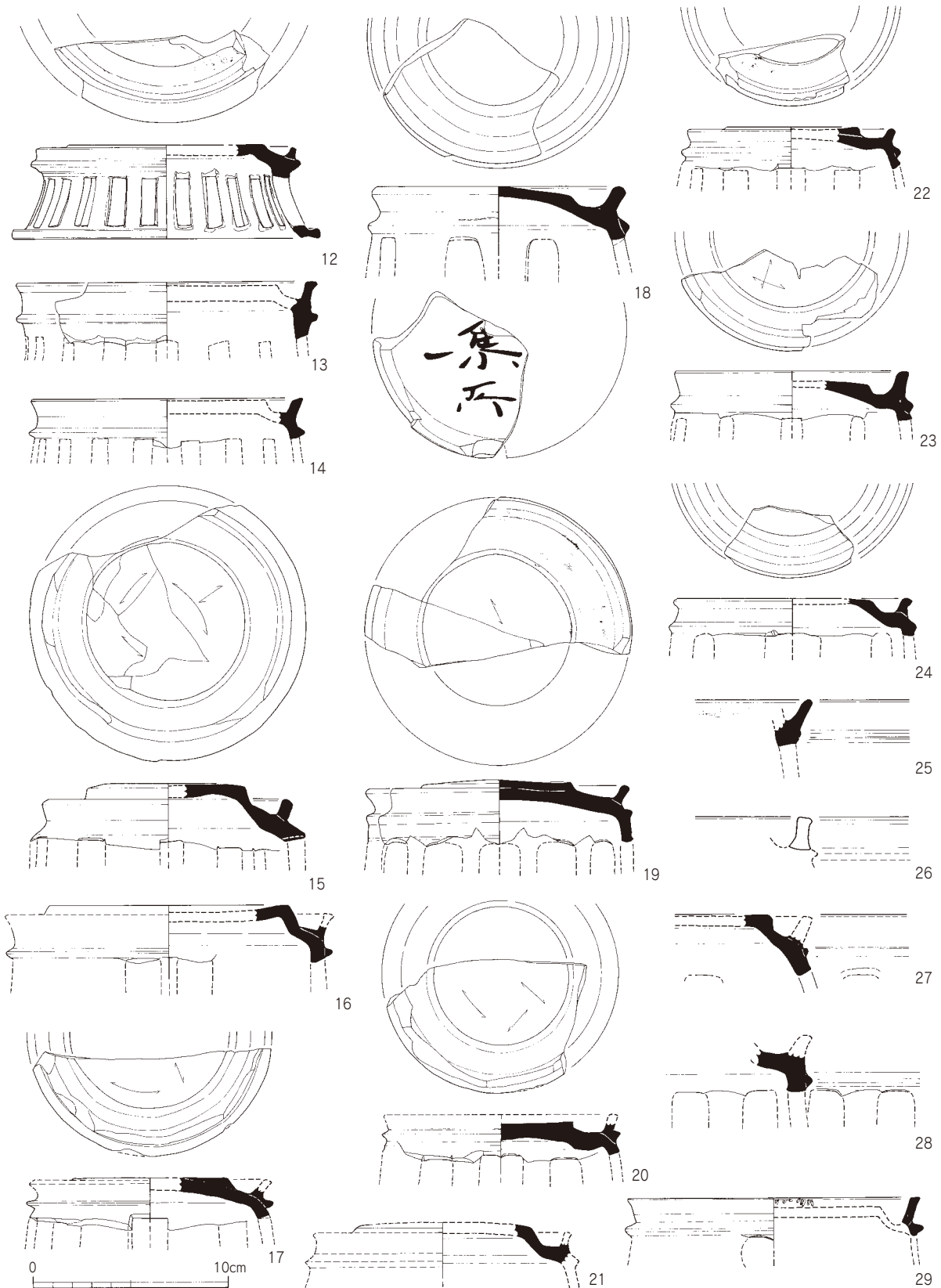


Fig.24 定形碗実測図② (1/3)

25・26・28・29～31は外堤部の小片で、25の突帯は細いものである。27～29は断面三角形を呈し、30は外堤と突帯が一体となっている。25・29の外堤部内面には墨痕がみられ、

筆ならし 29のそれは筋状に付くことから筆ならしによるものか。また、29のスカシ孔は丸みを帯び、長円形のスカシ孔になるか。25が147次茶褐色土、28は104次暗茶灰土、26・29・31はSD320の出土で、26・30が腐植土D、31が暗褐色土、29が下層砂の出土である。

32は脚裾部が接合しないものであるが、文様・色調・胎土から同一個体として実測した。硯部端に粘土帯を貼付し、先端を尖らせて三角突帯とし、その上部に外堤を貼付して海部を作っている。脚部は大きく開き、脚裾部は爪先立つ。スカシ孔は長円形を呈し、6ヶ所施しているが、スカシ孔間に縦位のヘラ沈線を3本描く。推定器高11.0cmで、陸部径は10.4cm、脚裾径19.3cmに復原した。SD2015の出土である。

33～35は陸部端から脚部にかけての破片で、33の脚部上位は丸みを帯びる。突帯は断面三角形を呈し、外堤と変わらない太めなものである。スカシ孔は隅丸方形状を呈するが、1/4にあたるヶ所にスカシ孔がみられないことから、2個であった可能性が高い。陸部径は5.8cmを測る。34は陸部が丸く、脚部が広がるものである。硯部端に外堤とシャープな三角突帯を貼付する。スカシ孔は長方形と十字形を呈し、それぞれ2箇所ずつ施している。35は有高台の坏を逆にした形状を呈し、器厚が1cmと通常の坏よりもかなり肉厚である。逆に外堤は細目で、坏の高台だとすると貧弱である。外堤部内側を強くナデつけ、若干窪ませることで海部として施している。突帯及びスカシ孔は施していない。また、外面には灰が被るが、海部から硯面には灰が掛かっていないことから蓋をして焼成したと考えられる。33が187次黄灰色土、34は76次暗茶土、35はSD320上層の出土である。36は突帯から脚部上位の破片で、突帯下部にはカキ目(7条/cm)を施している。突帯は断面方形を呈する。なお、残存部位にスカシ孔はみられないが、本来施さないタイプであろう。SD2010から出土した。

長方形と十字形のスカシ孔

37～44は陸部の破片で、陸径が10cm以下の小型のもの(43)、11～12cmのもの(37～39)、15～17cmのもの(41・42・44)、20cmを超える大型のもの(40)がある。陸径が12cm以下のものは圈足円面硯とみられるが、40・42は蹄脚硯の可能性を有する。また、41・42の硯面は中央が窪んでいる。37の硯面は擦れてはいないものの墨痕はみられない。38・44の硯面は擦れておらず、墨痕も付着していないことから未使用品と考えられる。39・40の硯面はあまり擦れておらず、墨痕もみられない。41の硯面はよく擦れており、墨痕がみられる。42・43は墨痕が認められるものの殆ど擦れていない。42は海部の器壁が3.5mmと薄い部分があるので、壺の底部とは考え難いことから円面硯とした。37が85次茶褐色土、38・40は76次暗灰土、39はSD3818、42は147次暗褐色土、43は84次SD2359の出土で、41・44がSD320で、44は腐植土から出した。

45～68は脚部及び脚端部の破片で、脚端部が爪先立つもの(45)、L字形を呈するもの(46～50・52)、緩やかに外反するもの(58～60)、小さく突出するもの(51・53～57・64)、先端が三角形を呈するもの(61・63・65～67)、端部を丸く納めるもの(62・68)がある。また、45・47～49・53～55・59・63・65～68は幅広の長方形スカシ孔を施し、60は細身の長方形スカシ孔を施している。脚部径は48が19.6cm、50は20.0cm、53は15.0cm、61は18.0cm、62は19.4cm、63は23.4cm、64は23.6cm、65は27.2cm、66は16.7cmに復原した。

62は83次灰褐色土、65は76次茶灰土、46・56・58・64は84次出土で、46・58が灰褐色土、56・64は茶灰土の出土、61は87次灰褐色土、53・57は104次出土で53が床土、57が暗茶灰土、

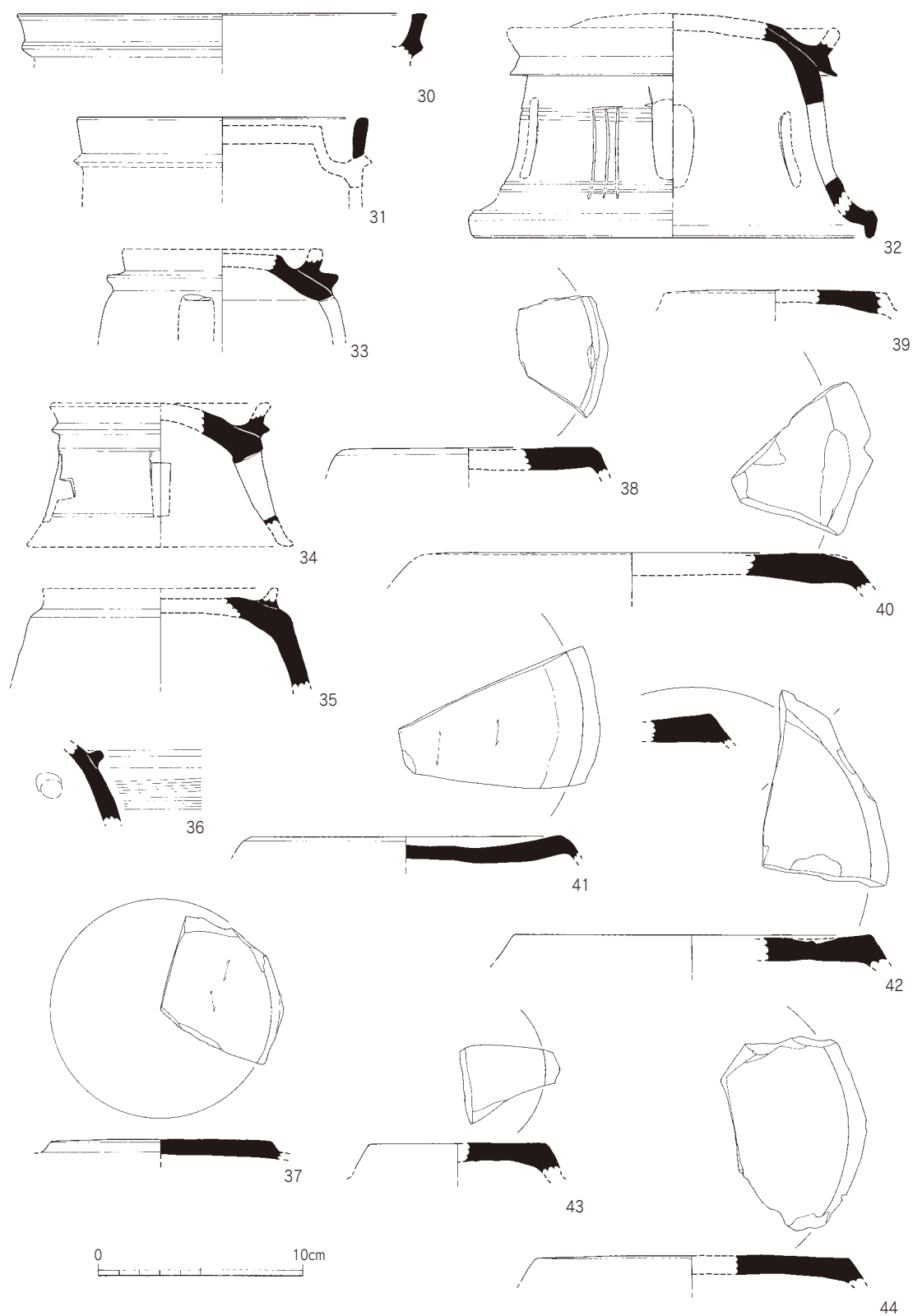


Fig.25 定形硯実測図③ (1/3)

45・48・55・63・68は147次出土で、45・48・55が茶褐色、63がS55、68が灰褐色の出土、50～52・59は187次出土で、50・59が検出時、51が暗褐色、52が黄灰土の出土、67はSD2359の出土で、47・49・54・60・66はSD320の出土で、47が中層腐植土、49は灰白砂、54は下層腐植土、60は腐植土、66は灰白砂礫から出土した。

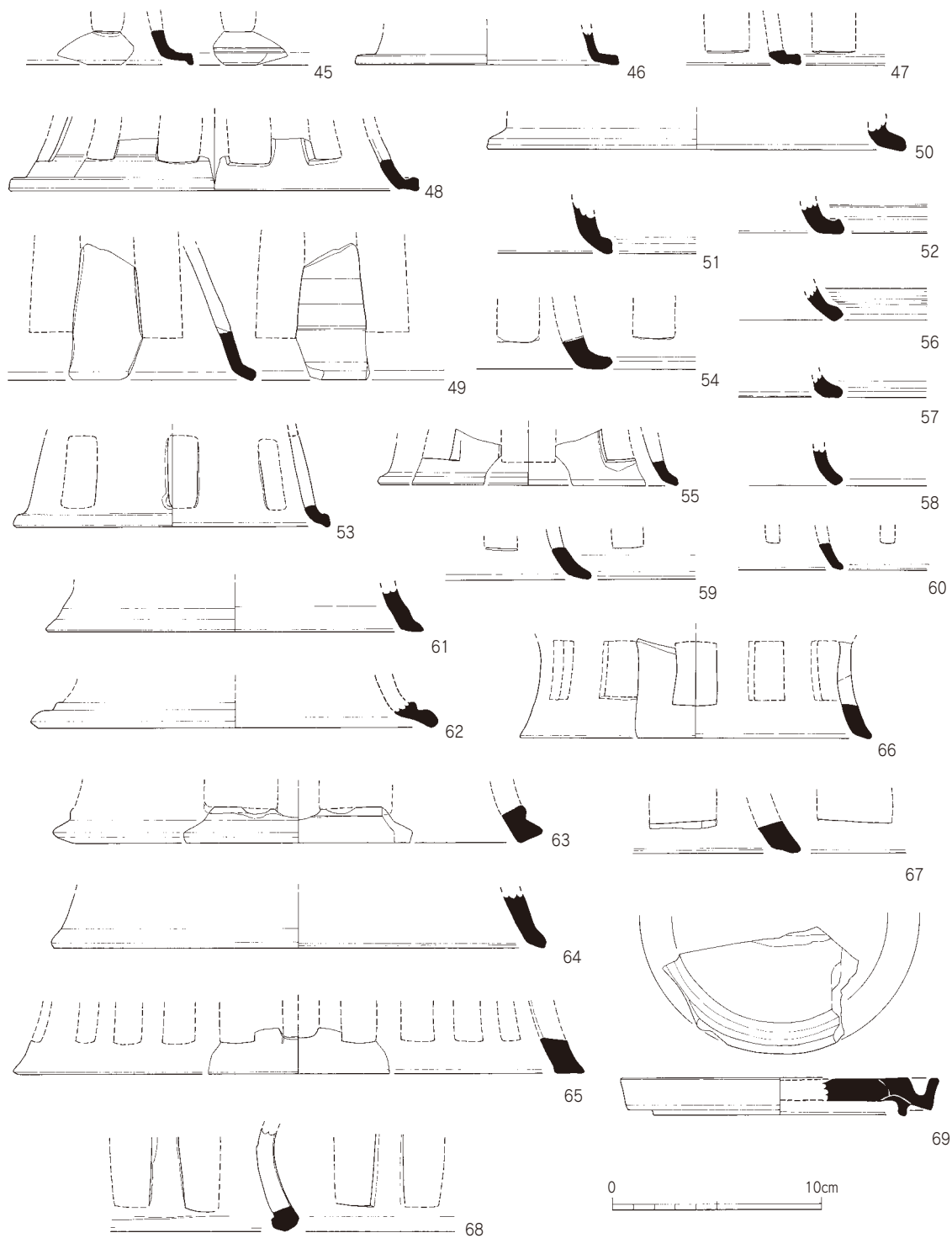


Fig.26 定形硯実測図④ (1/3)

69は低脚円面硯で、海・陸・外堤部が一体となった硯部に細い高台状の脚を貼付する。器高1.8cm，復原陸部径12.2cm，脚部径12.0cmを測る。硯面は全く擦れておらず，墨痕もみられないことから未使用品と考えられる。187次の暗褐色土から出土している。

Ⅱ 類：円形硯 (71～75) 71は陸部側縁の破片で，風字硯の可能性もあるが，底面が平坦で側縁が弧を描くことから円形硯とした。硯面は擦れているものの墨痕の付着はみられない。

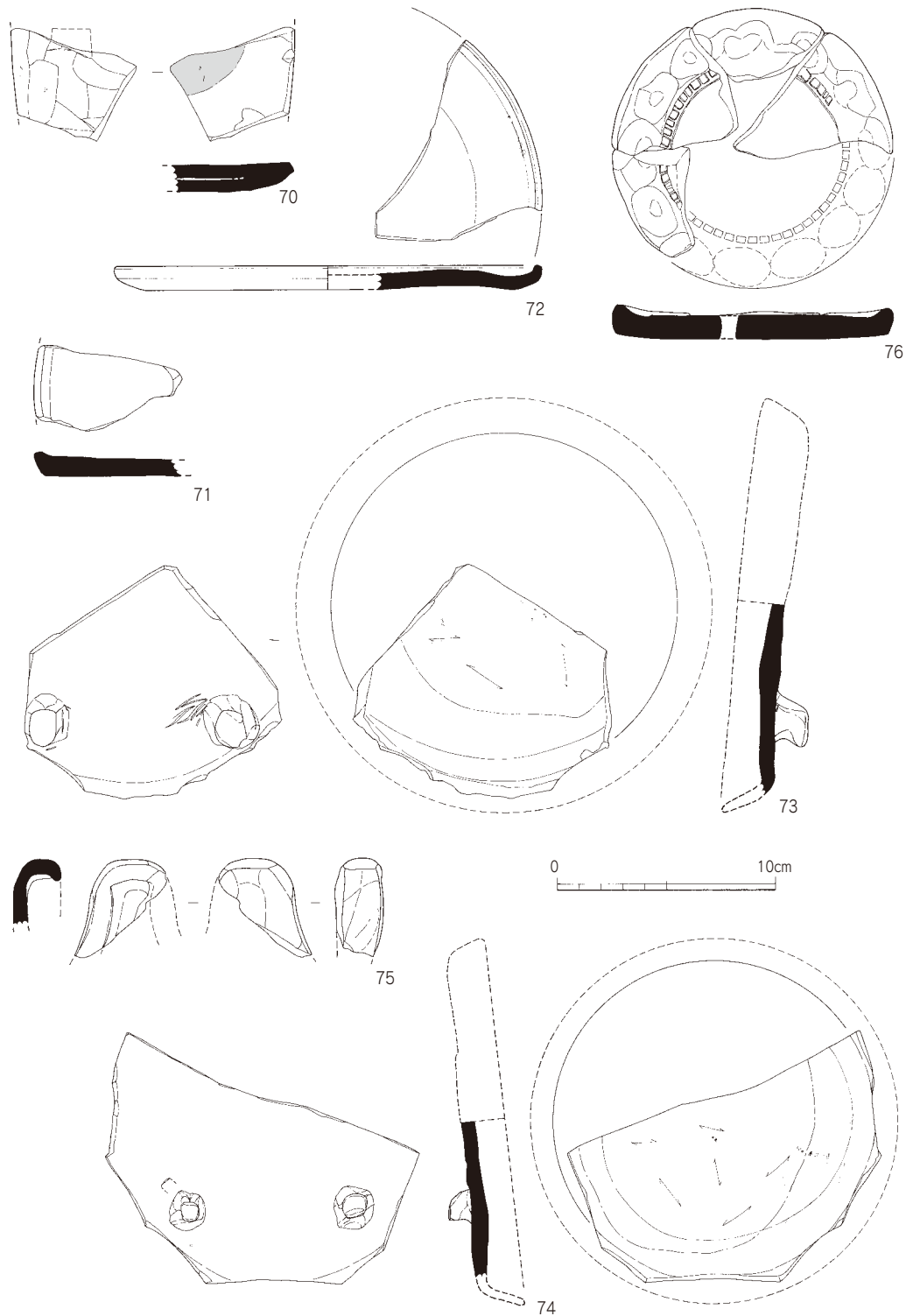


Fig.27 定形硯実測図⑤ (1/3)

SD320中層粗砂の出土である。72は所謂坏蓋硯で、8世紀前半代の坏蓋の形状をなす。通常の坏蓋硯と異なる点は、器高が低く、作りが丁寧で、器壁が厚い点にある。口縁部の立ち上がりがあるまま外堤となり、その内側を若干窪めることで海部としている。硯面はあまり擦れていないが、墨痕の付着がみられる。器高1.1cm、復原口径19.6cmを測る。SD2340の出土。

73・74は皿形の器形に脚を付したものであるが、脚部の接地面全体が擦れていることから二足で、硯面が傾斜するタイプとして復原した。側縁が殆ど残っていないため、図のように高

くなるかは不明。73の脚は74に比して大きめである。両者とも硯面は良く擦れているが、墨痕は顕著ではない。73が84次灰褐色土、74はSK2336の出土である。75は亀形を呈する特殊円形硯とした取手部の破片とみられるが、目・口等の表現は施していない。先端は鉤状に屈曲し、下面は平坦である。なお、凹部には墨痕の付着はみられない。SD320の暗褐色砂から出土した。

III 類：風字硯 (70・77～89) 77～81が二面風字硯、70・82～89は単面風字硯である。70は陸部右側縁の破片で、側縁は面取りを施しており、裏面はヘラケズリによる。また、側縁寄りに脚が剥離した痕跡がみられる。硯面はほぼ平坦で、擦れている部分には朱墨が付着している。SD2015から出土した。

77はほぼ完形に近い風字硯で、側縁を折り曲げて外堤とし、硯部の中央に粘土帯を貼付して硯面を二面にしている。硯面の中央はよく擦れており、朱墨がみられる。また、硯部は内湾し、裏面に五面体の短い脚を2箇所貼付しており、接地面はよく擦れている。外面はハケ目及びヘラによる面取りを施す。長さ15.1cm、幅13.3cmを測る。90次茶褐色土の出土である。

78は中央突帯部分の破片で、凸帯は1.5cmと高く、ヘラによる面取りを施している。硯面はあまり擦れておらず、使用頻度が低かったか。79は硯尻部の破片で、中央突帯を有することから二面硯と判る。硯面は殆ど擦れておらず、墨痕の付着もみられない。未使用品であろう。80は側縁の破片で、端部を直角に折り曲げて外堤としている。図の右側部分が盛り上がっており、中央突帯とみられることから二面硯と判断した。硯面はよく擦れており、墨痕も付着している。81も硯尻部の破片で、中央に突帯を有する。ただ、二面風字硯としては、尻部が大きく反り返っており、或いは鳥形の形象硯の尾羽部分になるか。上面には厚く灰が被っている。78は147次茶褐色土、79はSD2015、80はSD320の中層茶砂、81は84次灰褐色土から出土した。

鳥形の形象
硯か

82・83は単面風字硯の頭部破片である。82は接合しないものの同一個体として実測した。側縁は直線的に立ち上がり、外面はヘラケズリによる。海部には墨痕がみられる、83は左側縁部の破片で、陸部が上がっていることから脚を貼付していたことが窺われる。陸部は平滑で、墨痕も認められた。82が84次灰褐色土、83は85次暗褐色土の出土である。

84は陸部左側縁端部の破片で、85・86は陸部右側縁端部片である。84の外面は全体的にヘラケズリを施す。硯面はよく擦れており、鏡面状をなす。脚は扁平な高めのもので、硯部の隅に貼付している。接地面はよく擦れており、使用頻度が高かったことが窺われる。85は多面体の脚を貼付したもので、陸部には脚の位置と対応するように指で押さえつけた窪みがつく。側縁はヘラケズリを施している。86の脚は剥落しているが、剥離痕から扁平な脚を貼付したものとみられる。側縁はヘラによる面取りを施す。陸部は擦れているものの墨の付着は確認できなかった。84がSD4566、85はSD4570B下層、86は187次黄灰色土から出土した。

87は陸部端の破片で、端部は丸く納める。側縁を欠損するが、両端付近が窪んでおり、脚部となるか。陸部はやや擦り減っているものの墨痕は確認できなかった。88は右側縁の破片で、裏面には脚部の剥離痕がみられ、風字硯であることが判る。陸部はあまり擦れておらず、墨痕はみられない。89は黒色土器B類の単面風字硯で、非常に珍しいものである。頭部の破片で、海部には墨が付着している。内面は細かいミガキで、外面はヘラケズリ後ナデによる。胎土は精良で、丁寧な作り。87はSD320下層腐植土、88はSK2358、89はSD4570Aの出土。

黒色土器の
風字硯

V 類：形象硯 (76) 76は花卉形を呈する円盤で、面径12.8cm、厚さ1.1cmを測る。50倍の

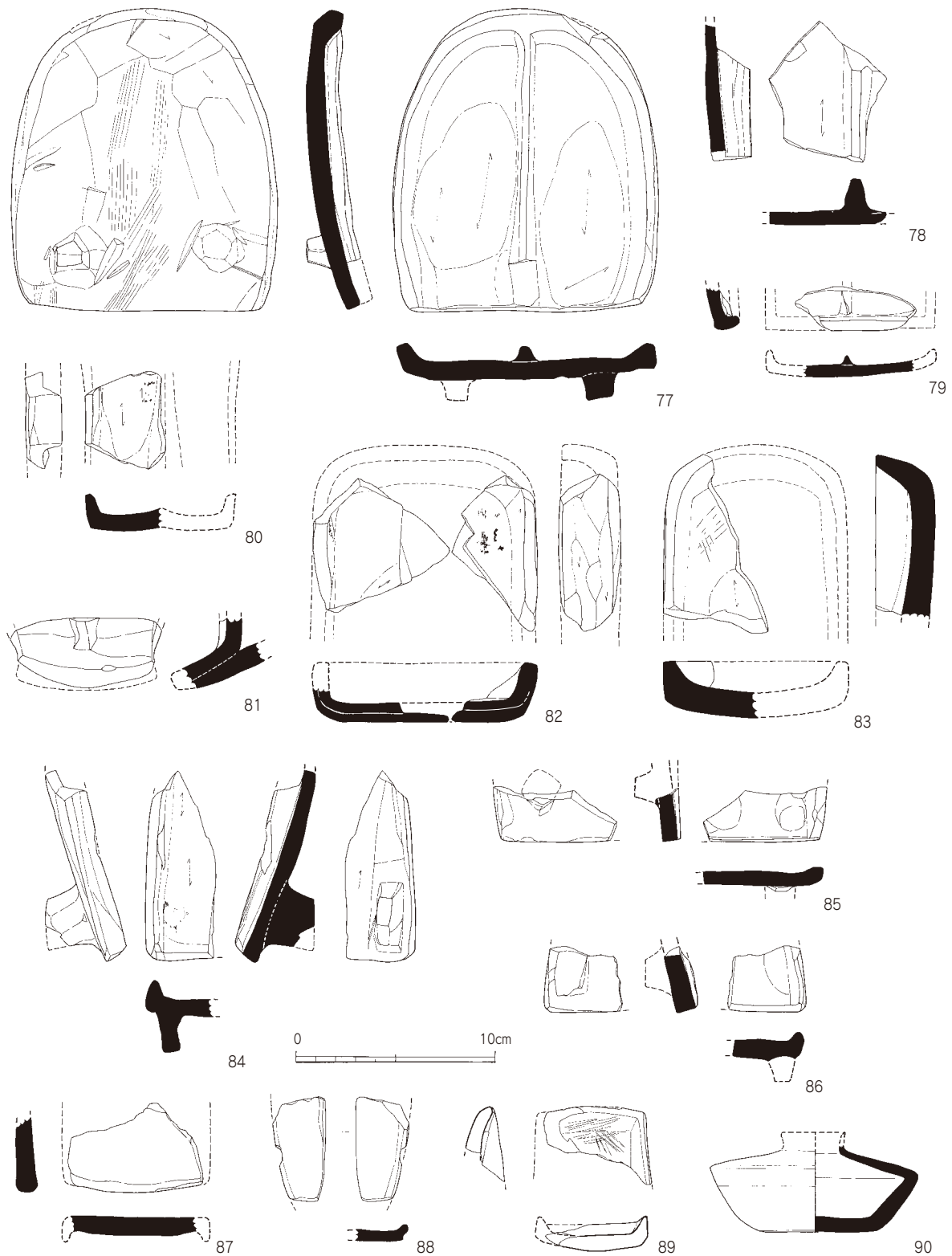


Fig.28 定形硯実測図⑥ (1/3)

ルーペで観察した所、花卉状の窪み及び中央の平坦面に墨痕が認められたので花を模した形象硯とした。側縁を指オサエで窪ませ花卉とし、連続する方形の刺突孔を円形に巡らせ硯面との境としている。砂粒を多く含み、色調は灰青色を呈する。焼成は軟質で、裏面が黒っぽく変色しており、生焼け品とみられる。SD2340の下層腐植土から出土した。

花形の形象硯

Tab.3 定形硯一覽表

No.	次数	地区	遺構・土層	分類	部位	スカシ孔・数	墨痕状況	備考	Fig.		
1	14次	S3	SD320(暗褐土)	I D類	圈足凹面硯	外堤部	—	—	25-31		
2		Z	SD320(灰白砂礫)	"	"	脚部	長方形	12	—	26-66	
3		N2-2	SD320(灰白砂)	"	"	脚部	"	?	—	26-49	
4		S2	SD320(灰黒粘)	"	"	脚部	"	?	—		
5		N6	SD320(暗褐砂)	"	"	脚部	"	?	—		
6		N2	SD320(暗褐砂)	IID類	特殊凹形硯	取手部	—	—	—	27-75	
7	14次 補足	YJ68	SD320中層(S10黒粘)	I D類	圈足凹面硯	陸～外堤部	長方形	8	若干遺存	内面に「集兵」墨書	24-18
8		YL68	SD320中層(S10黒粘)	"	"	陸～脚上部	"	14	若干遺存		23-7
9		YG66	SD320中層(S10腐植土)	"	"	外堤～脚上	"	9	—		23-6
10		YH66	SD320中層(S10腐植土)	"	"	脚裾部	"	?	—		26-47
11		YE65	SD320中層(S10粗砂)	IIA類	普通凹形硯	陸部	—	—	若干遺存		27-71
12		YF65	SD320中層(S10粗砂)	III B類	二面風字硯	陸部	—	—	未確認	未使用品	28-80
13		YD68	SD320下層(S10砂)	I D類	圈足凹面硯	脚柱部	長方形	?	—		
14		YF68	SD320下層(S10砂)	"	"	海～脚上部	"	15	—		23-9
15		YI66	SD320下層(S10砂)	"	"	外堤部	長円形?	?	—		24-29
16		YI67	SD320下層(S10砂)	"	"	海～脚上部	長方形	10?	—		23-8
17	76次	NH66	SD320(S10)	"	"	陸部	—	—	若干遺存		25-41
18		ND66	SD320(S10暗灰砂礫)	"	"	脚裾部	?	?	—		
19		NI67	SD320(S10腐植土)	"	"	陸部	—	—	未確認	未使用品?	25-44
20		NG65	SD320(S10下層腐植土)	"	"	脚裾部	長方形	?	—		26-54
21		NG65	SD320(S10下層腐植土)	III A類	単面風字硯?	海端部	—	—	—		28-87
22		NH65	SD320(S10下層腐植土)	I D類	圈足凹面硯	脚柱部	長方形	?	—		
23		NI65	SD320(S10下層腐植土)	"	"	海～脚上部	"	—	未確認		24-27
24		NI67	SD320(S10腐植土A)	"	"	脚裾部	長方形	?	—		26-60
25		NE65	SD320(S10腐植土B)	"	"	外堤部	—	—	—		25-30
26		NI67	SD320(S10腐植土D)	"	"	陸部	—	—	未確認		
27		NZ66	SD320(S10腐植土D)	"	"	外堤部	—	—	—		24-26
28		ND65	SD320最下(S13)	"	"	海～脚部	無	—	未確認		25-35
29		Z	SD2010(S1最下層)	"	"	脚上部	—	?	—		25-36
30		NN59	SD2015(S5)	III B類	二面風字硯	海端部	—	—	—		28-79
31		NH59	SD2015(S5)	III A類	単面風字硯	陸部	—	—	若干遺存	朱墨	27-70
32		NH60	SD2015(S5)	I D類	圈足凹面硯	陸～脚部	長方形	6	未確認		25-32
33		NH60	SD2015(S5)	"	"	脚裾部	"	?	—	No. 32と同一固体か	
34		NG78	SK2017(S32)	I類	凹面硯	陸部	—	—	未確認	大楠官衙跡で報告	
35		NG70	暗灰土	"	"	陸部	—	—	未確認	未使用品	25-38
36		NH69	暗灰土B	"	"	陸部	—	—	未確認	未使用品	25-40
37	NC62	暗茶土	I D類	圈足凹面硯	海～脚部	十字形	4	—		25-34	
38	NC64	暗茶土・NC64灰砂	"	"	陸～脚上部	長方形	14	若干遺存		24-19	
39	NE67	茶灰土	"	"	脚裾部	"	27	—		26-65	
40	NF64	茶灰土	"	"	陸～脚上部	長方形	12	未確認		24-22	
41	83次	UI50	SK2358(S22)	III A類	単面風字硯?	陸部	—	—	未確認		28-88
42		UI58	SD2359(S54)	I D類	圈足凹面硯	陸部	—	—	未確認		25-43
43		UI58	SD2359(S54)	"	"	脚裾部	長方形	?	—		26-67
44		UB38	SX2336(S2)	II C類	脚付凹形硯	陸部	—	—	未確認		27-74
45		UD40	灰褐土	I D類	圈足凹面硯	脚裾部	長方形?	?	—		26-62
46	84次	SI45	SD2418(S49)	"	"	脚柱部	長方形	?	—		
47		Z	SD2419	"	"	陸～脚裾部	方形	13	若干遺存		23-5
48		SJ51	暗灰土	"	"	脚柱部	長方形	?	—		
49		SC42	灰褐土	III A類	単面風字硯	海部	—	—	若干遺存		28-82
50		SC45	灰褐土	I D類	圈足凹面硯	脚裾部	—	?	—		26-58
51		SD45	灰褐土	III A類	単面風字硯	頭部	—	—	—	No. 49と同一固体	28-82
52		SF34	灰褐土	I D類	圈足凹面硯	脚裾部	—	?	—		26-46
53		SG44	灰褐土	I A類	蹄脚凹面硯	陸端～海部	逆台形	20	—		23-1
54		SG44	灰褐土	"	"	外堤部	—	—	—	No. 53と同一固体	
55		SI44	灰褐土	II C類	脚付凹形硯	陸部	—	—	若干遺存		27-73
56		SJ45	灰褐土	III B類	二面風字硯	陸部	—	—	未確認		28-81
57		SF37	茶灰土	I D類	圈足凹面硯	脚裾部	?	?	—		26-64
58	SH37	茶灰土	"	"	脚裾部	?	?	—		26-56	
59	85次	QH45	SD2015(S5)上層	"	"	外堤～脚部	長方形	18	—		24-14
60		QH46	SD2015(S5)下層	I A類	蹄脚凹面硯	外堤部	—	—	—	No. 54と同一固体	
61		QE40	暗褐土	III A類	単面風字硯	頭部	—	—	—		28-83
62		QI44	暗褐土	I B類	獸脚凹面硯	海～脚部	—	—	—	4脚	23-3
63		QL44	暗褐土	I D類	圈足凹面硯	脚柱部	?	?	—		
64		QJ39	茶褐土	I A類	蹄脚凹面硯	陸端～海部	逆台形	—	—		
65		QJ39	茶褐土	I D類	圈足凹面硯	陸部	—	—	若干遺存		25-37
66	87次	VB34	灰褐土	"	"	外堤～脚部	長方形	17	—		24-13
67		VF36	灰褐土	"	"	外堤部	—	—	—		26-61

No.	次数	地区	遺構・土層	分類	部位	スカシ孔・数	墨痕状況	備考	Fig.		
68	90次	VK37	SD2340(S50) 中層黒粘	—	水滴	頸～底部	—	—	28-90		
69		VI37	SD2340(S50) 下層茶褐土	I A類	蹄脚円面硯	脚柱部	—	?	23-2		
70		VK37	SD2340(S50) 下層腐植土	V類	形象硯	口～内面	—	—	若干遺存	花形	27-76
71		VJ37	茶褐土	III B類	二面風字硯	ほぼ完形	—	—	若干遺存	28-77	
72	98次	QO37	SD2340 中層腐植土	II B類	坏蓋硯	口縁～陸部	—	—	若干遺存	27-72	
73		QN41	SX2480 上層	I D類	圈足円面硯	海～脚上部	長方形	?	—	23-10	
74		QO39	暗褐土下層	"	"	海～脚部	方形	14	若干遺存	23-4	
75										欠番	
76	104次	PK69	SD320	I D類	圈足円面硯	海～脚上部	長方形	8	若干遺存	24-17	
77		PJ63	暗茶灰土	"	"	脚裾部	?	?	—	26-57	
78		PL68	暗茶灰土	"	"	海～脚上部	長方形	?	—	24-28	
79		PL64	床土	"	"	脚部	長方形	7?	—	26-53	
80	129次	NP52	SD3818(S7)	"	"	陸部	—	—	若干遺存	25-39	
81		NO55	SD3825(S10)	"	"	海～脚上部	長方形	?	—		
82		NQ52	SD3836(S22)	"	"	海～脚上部	長方形	?	—	24-16	
83		NO56	黒褐土	"	"	海～脚上部	長方形	10	若干遺存	24-20	
84		NO56	黒褐土	"	"	海～脚上部	長方形	9	若干遺存	24-24	
85		NO57	黒褐土	"	"	陸～海部	—	—	—	24-21	
86		NP56	黒褐土	"	"	脚柱部	長方形	?	—		
87	147次	QG50	SD4037(S15)	"	"	脚裾部	方形	?	—		
88		QE56	S55	"	"	脚裾部	長方形	?	—	26-63	
89		QB59	茶褐土	III B類	二面風字硯	陸部	—	—	未確認	28-78	
90		QE48	茶褐土	I D類	圈足円面硯	脚柱部	長方形	?	—		
91		QE51	茶褐土	"	"	脚部	方形?	16	—	26-48	
92		QG47	茶褐土	"	"	脚部	方形?	8	—	26-55	
93		QH54	茶褐土下層	"	"	外堤部	—	—	墨痕顕著	24-25	
94		QJ48	茶褐土下層	"	"	陸～脚上部	長方形	11	若干遺存	24-15	
95		QL50	茶褐土下層	"	"	脚裾部	長方形	?	—	26-45	
96		QK47	暗褐土	"	"	陸～脚部	長方形	24	墨痕顕著	24-12	
97		QM47	暗褐土	"	"	外堤～脚上部	長方形	—	—	No. 47 と接合	
98		Q 地区	C Tr 暗褐土	I 類	円面硯	陸部	—	—	未確認	25-42	
99		QL48	灰褐土	I D類	圈足円面硯	脚部	長方形	?	—	26-68	
100	187次		SD4566(S4)	"	"	脚部	長方形	?	—		
101			SD4566(S4)	III A類	単面風字硯	陸部	—	—	墨痕顕著	28-84	
102			SD4570A(S10) 下層	"	"	陸端部	—	—	若干遺存	黒色土器	28-89
103			SD4570B(S10) 下層	"	"	陸端部	—	—	若干遺存	28-85	
104		C1	SK4574(S3) 黒色土	I D類	圈足円面硯	陸～脚上部	長方形	10	若干遺存	24-23	
105		B3	暗褐土	"	"	脚裾部	—	?	—	26-51	
106		B4	暗褐土	I E類	低脚円面硯	陸～脚部	無	—	未確認	未使用品?	26-69
107		D2	黄灰土	I D類	圈足円面硯	海～脚上部	長方形?	2	—	25-33	
108		F2	黄灰土	III A類	単面風字硯?	陸端部	—	—	未確認	28-86	
109		G2	黄灰土	I D類	圈足円面硯	脚裾部	?	?	—	26-52	
110		A2	検出面	"	"	脚裾部	?	?	—	26-50	
111		B2	検出面	"	"	脚裾部	長方形	?	—	26-59	
112	A4	攪乱土	"	"	海～脚上部	長方形	?	—	23-11		

VI 類：転用硯（1～97）蓋・坏・甕・鉢・壺等の土器を硯に転用したもので、転用硯かどうかの判別に際しては50倍のルーペを用いた肉眼観察を行い、墨痕が付着し擦れているものを転用硯とみなした。しかし、須恵器甕等の側縁を打欠き成形した所謂猿面硯に関しては、墨痕の付着がみられなくとも硯の未使用品として扱った。その結果、約460点の転用硯を確認したが、殆どが須恵器を転用したものであった。中には土師器の坏蓋と甕を転用したのもも1点ずつ存在する。なお、図示に際しては、墨痕が顕著にみられるものを中心に器形・出土遺構ごとに100点程を掲載した。また、墨痕の付着が著しいものを“顕著”、肉眼で確認できるものを“明瞭”、ルーペでしか確認できないものを“不明瞭”と表現した。

1～54は坏蓋を転用したものであるが、上下を逆さにして天井部内面を硯面として使用する。そのため天井部が平坦なもの、天井部中央が窪んでいるもの、摘みを付していないものを用いる傾向がある。摘みがあれば使用時の邪魔になるので、故意に打ち欠いているものもある。また、天井部外面が部分的に磨滅しているものがみられる。これは、使用に伴って接地面がこすれたためと考えられる。

1は天井部の破片で、扁平な摘みを貼付している。墨痕は顕著で、内天井面も擦れている。礎石建物SB370の礎石抜き取り穴から出土した。2の口縁端部は小さく立ち上がる。天井は平坦なもので、低い擬宝珠形の摘みを貼付する。墨痕は明瞭であるが、内面はあまり擦れていない。器高1.8cm、復原口径19.8cmで、SE2890の出土。

3～13はSD320の出土で、10は黒灰粘、6・13は腐植土D、11は中層粗砂、12は中層黒粘、5は下層砂、4・7は灰白砂礫、3・8・9が最下砂。3・5・7～9は口縁端部が鳥嘴状を呈し、4・6・12の口縁部は小さく立ち上がる。天井部には5・10・11が鉤形、8は扁平な擬宝珠形の摘みを貼付する。4は摘みを欠損するが、天井部外面が擦れていることから故意に摘みを打ち欠いた可能性がある。3・4・6～13の墨痕は顕著で、5の内天井面はよく擦れているものの墨痕は不明瞭。4・6・12は小型のもので、復原口径は4が14.7cm、6は16.6cm、12は11.0cmを測る。8・9は大型のもので、口径は8が19.8cm、9は20.2cmに復原した。

14～30はSD2340の出土で、16は上層、26は上層最下、14・17が中層、22・30は中層灰粘、23は中層黒色土、28・29は中層黒粘、21・27は下層、15は下層腐植土と茶褐砂の接合品、20・24は下層粘質砂、18は下層茶褐砂、25は青灰砂質土、19は最下層砂質土である。

14・15は口縁部内側に身受けのかえりを有するもので、15のかえりはシャープである。何れも摘みは付していないが、天井部には14が二本線、15は「キ」形のヘラ記号を付す。また、14は生焼け品であり、墨痕は不明瞭。15は口縁部外面に漆状の膠着物がみられる。15は器高cm、口径12.6cmを測る。16・19～25・28・30は口縁端部が鳥嘴状を呈するもので、17・18・26・27・29は口縁端部が小さく立ち上がるもの。24～27・29・30は天井部が扁平で、16・21・22は扁平な摘み、30は擬宝珠形の摘みを付している。16～18・24・26・27は口径11cm程の小型品で、20～23は口径15cm程の中型品、28～30は口径21cm程の大型品である。17～30の墨痕は顕著で、21・27の天井部外面には文字風の墨痕がみられる。16の内天井面はよく擦れているが墨痕は不明瞭。また、16・18・22・25の外天井部は使用に伴う磨滅がみられる。22は天井部中央が窪んでおり、転用硯としては最適なもので、23の摘みは故意に打ち欠いており、その部分は磨滅している。

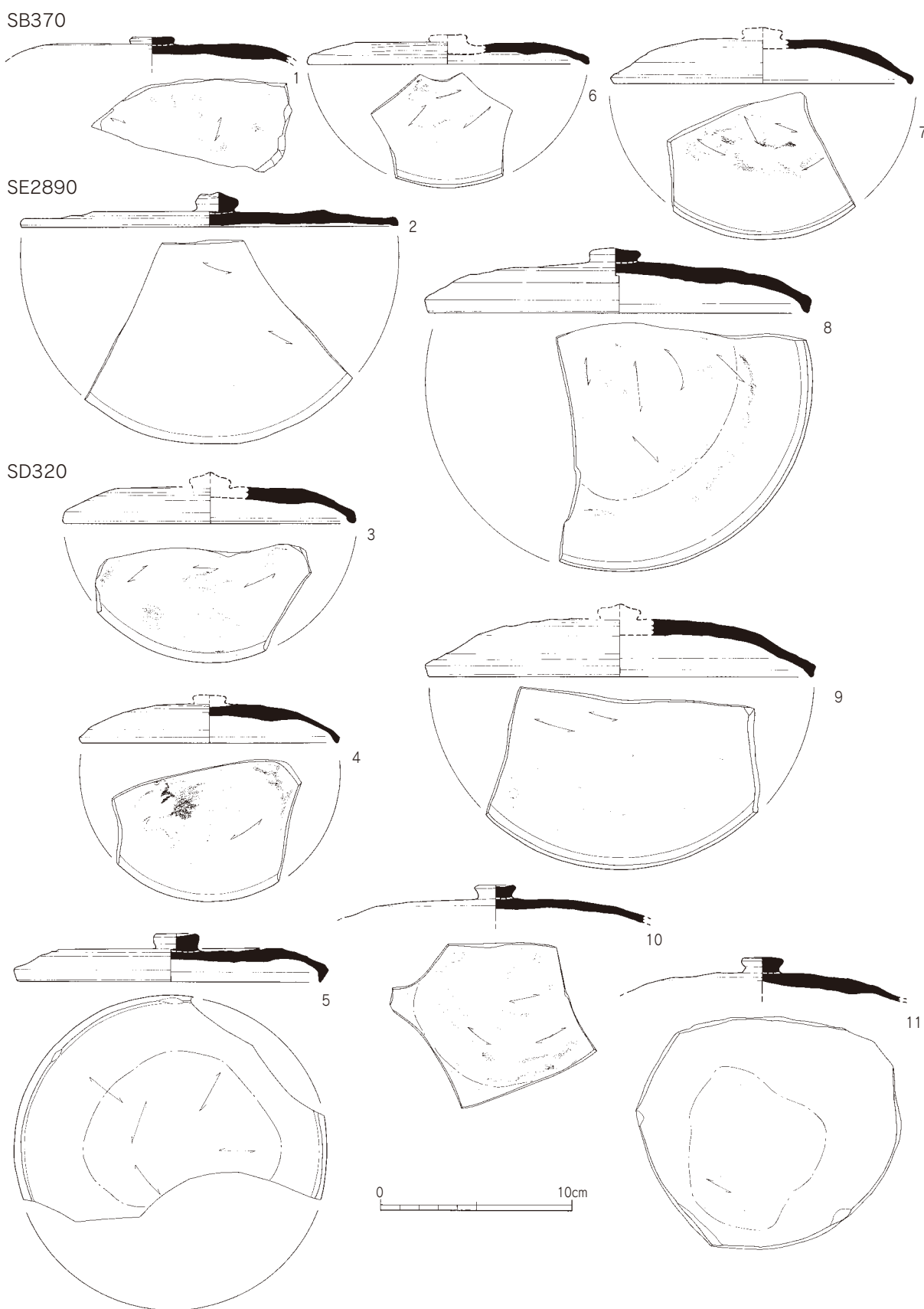


Fig.29 転用碗実測図① (1/3)

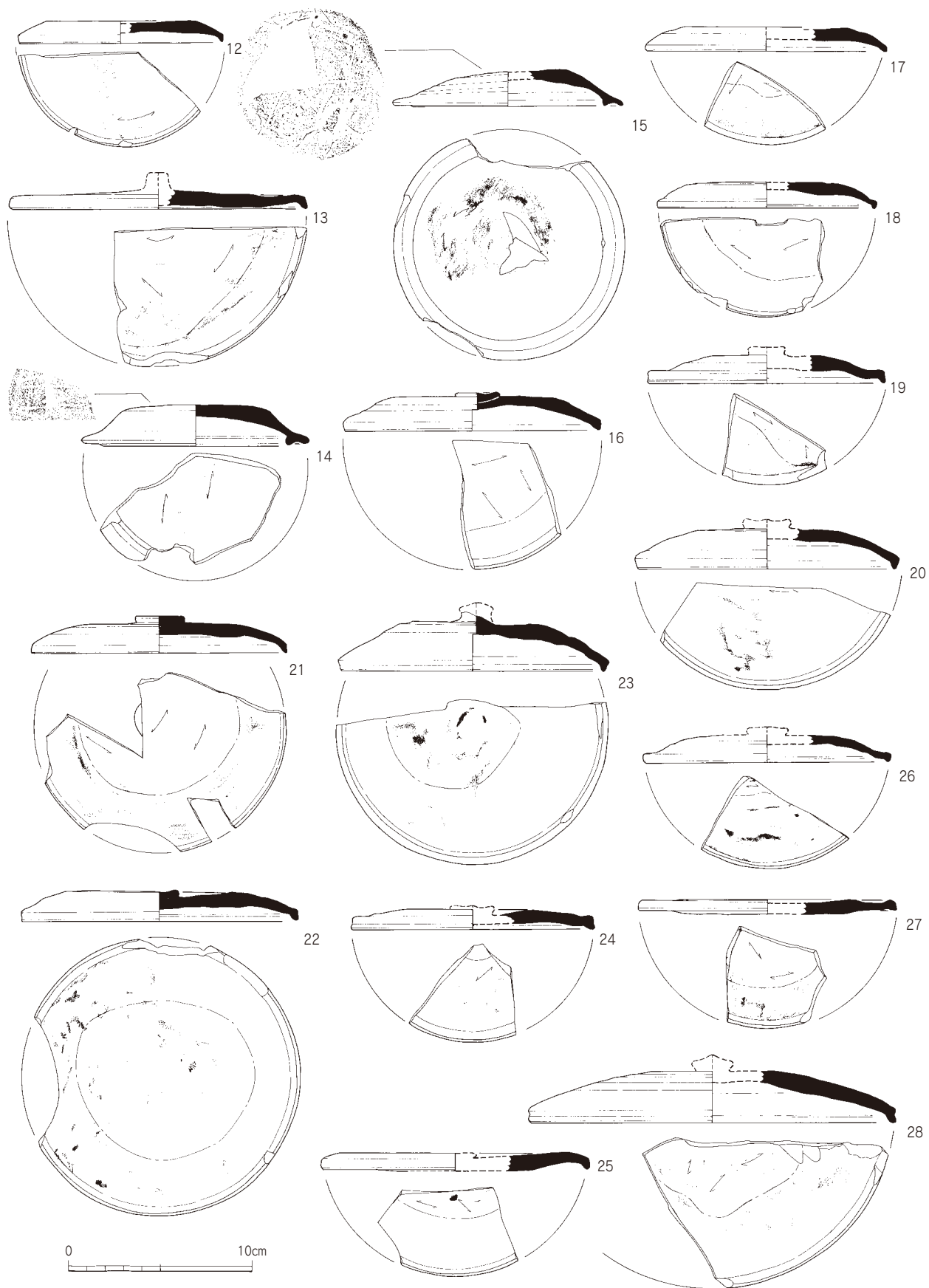


Fig.30 転用碗実測図② (1/3)

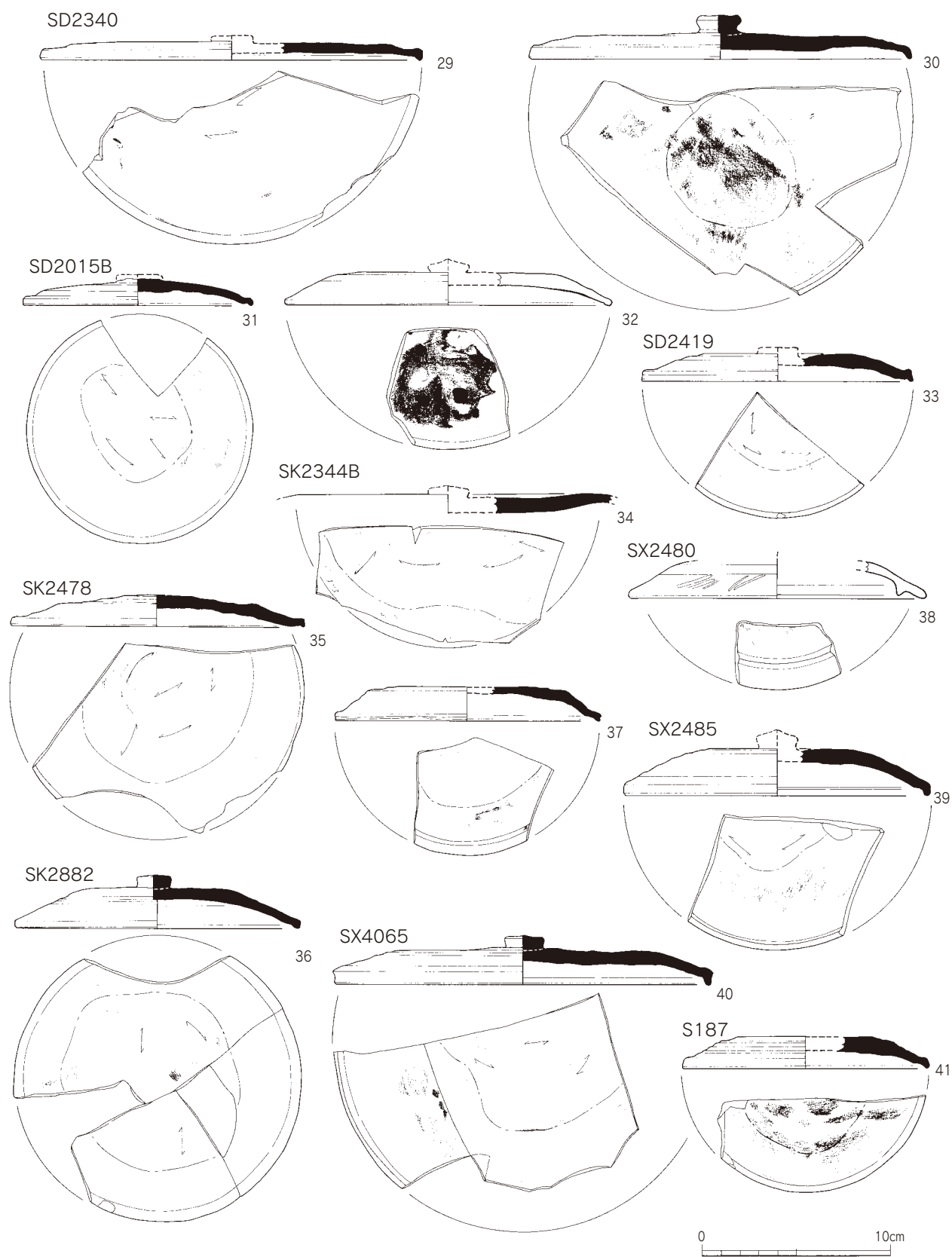


Fig.31 転用碗実測図③ (1/3)

31・32はSD2015の出土で、31は須恵器、32は土師器を転用したもの。31・32とも口縁部内面に篋先による段を施し、口縁部との境としている。31の内天井面はよく擦れているが、墨痕は不明瞭。天井部の摘みは故意に打ち欠いたか。口径は12.1cmを測る。32の外表面には赤色顔料を塗布しており、内面には墨が固化している。口縁部はヨコナデで、天井部外面はヘラケズリによる。33はSD2419から出土した。口縁端部は小さく立ち、内側には篋先による沈線を施す。天井部内面の墨痕は明瞭で、器面もよく擦れている。

坏蓋硯 34はSK2344B出土で、蓋の天井部破片である。天井部中央が窪み、所謂坏蓋硯形をなす。内面には墨痕が顕著にみられ、器面はよく擦れており、天井部外面の接地面も磨滅している。35はSK2478から出土した。口縁端部内側に沈線を施し、口唇部としている。天井は低く、摘みは貼付していない。口縁部ヨコナデ、天井部外面は未調整で、粘土紐痕を留める。内天井面の墨痕は明瞭で、器面もよく擦れている。器高1.7cm、口径15.6cmを測る。36はSK2882の出土で、口唇部は鳥嘴状を呈する。器壁が薄いシャープな感がある。天井部には釦形の摘みを貼付する。天井部内面の墨痕は明瞭で、器面は擦れている。

37はSX2454出土で、口径14.2cmの小型品。口縁部内側に沈線を施し、口唇部としている。天井部は平坦で、摘みは付していないようである。墨痕が内天井部にみられ、器面も擦れている。38はSX2480出土で、口縁部内側に身受けのかえりを有する。須恵器の生焼け品で、色調は黄橙色を呈する。天井部内面に墨痕がみられる。39はSX2485の出土で、口縁端部は鳥嘴状を呈する。天井部は高めで、摘みの剥離痕がみられる。墨痕は僅かに付着し、器面もあまり擦れていない。口径は16.2cmに復原した。40はSX4065出土で、器高2.6cm、口径20.1cmを測る大型のもの。口唇部は鳥嘴状を呈し、口縁端部に稜を有する。釦形の摘みを貼付するが、その上面は擦れており、使用に伴うものであろう。墨痕は明瞭で、器面も擦れている。41は84次S187（溝）出土で、口径13.2cmの小型品。口唇部は小さく立ち上がり、口縁部から天井部にかけて沈線状の段を有する。内面の墨痕は顕著で、器面はよく擦れている。天井部は平坦で、天井部外面も擦れていることから摘みは付していなかった可能性が高い。

42～54は土層出土の坏蓋転用硯で、42～46が84次で、42が灰褐土、43・44が茶灰土、45・46が茶褐土、47は87次茶褐土から出土した。42は天井部の破片であるが、天井部外面は平坦で、内面は盛り上がりをもよおさせることから坏蓋硯の可能性が高い。墨痕はルーペでないと見えないが、内面はよく擦れており、外面にも磨滅痕跡が認められる。43は低平な蓋で、口縁部内側に僅かな段を設け口唇部としている。口径からして摘みを付さないタイプと考えられる。墨痕は明瞭で、天井部外面も部分的に擦れている。44も低平な蓋で、器高3.0cm、口径18.5cmを測る。天井部には釦形の摘みを貼付する。墨痕は顕著であるが、器面はあまり擦れていない。天井部外面の磨滅もみられないことから使用頻度は低かったものと思われる。口縁部外面には重ね焼きによる帯状の黒変部がみられる。45はほぼ完形の蓋で、器高2.9cm、口径14.7cmを測る。口唇部は鳥嘴状を呈し、端部の稜は鋭い。天井部は丸みを帯び、乳頭状の摘みを貼付する。墨痕は明瞭で内面中央にあり、器面も擦れている。また、口縁部外面には重ね焼きによる帯状の黒変部がみられる。46は口縁部の一部を欠損する。口唇部は鳥嘴状を呈するが、立ち上がりは弱い。天井部は丸みを帯び、摘みは打ち欠いている。墨痕は明瞭で内面中央にあり、文字風のものもみられるが、筆ならしであろうか。残存器高2.0cm、口径14.7cmを測る。47は輪状摘

輪状摘み

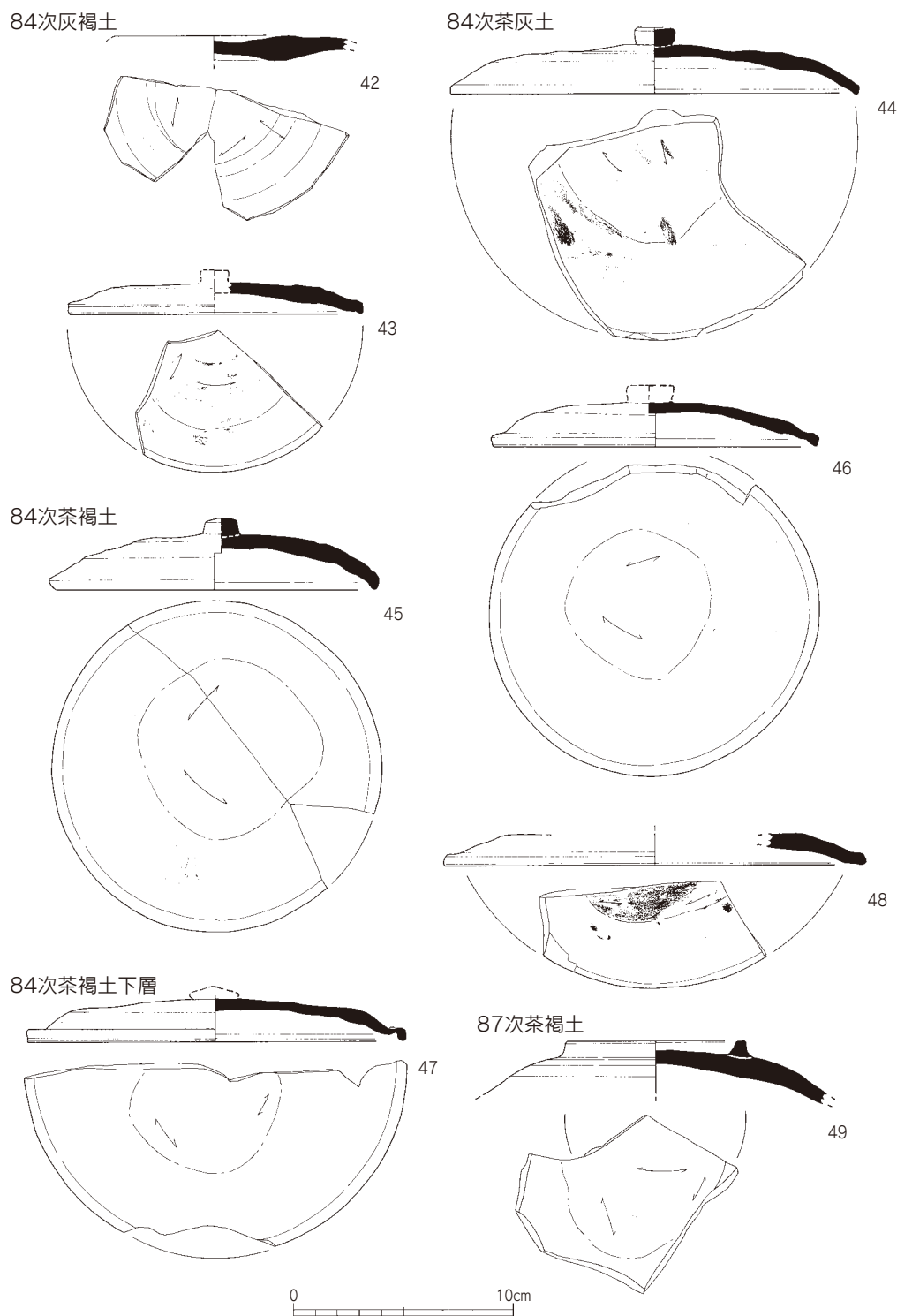


Fig.32 転用硯実測図④ (1/3)

みを貼付した坏蓋の天井部破片で、珍しい器形のもの。摘み径は8.2cmに復原した。天井部外面はヘラケズリで、内面はナデによる。墨痕は明瞭で、内面はよく擦れている。胎土・形状から牛頸窯跡以外の製品の印象を受ける。

48～54は147次で、48・49が茶褐土、50～54が暗褐土から出土した。48の天井部は低平で、摘みを打ち欠く。口縁部はS形に屈曲し、屈曲部外面は磨滅している。恐らく、坏若し

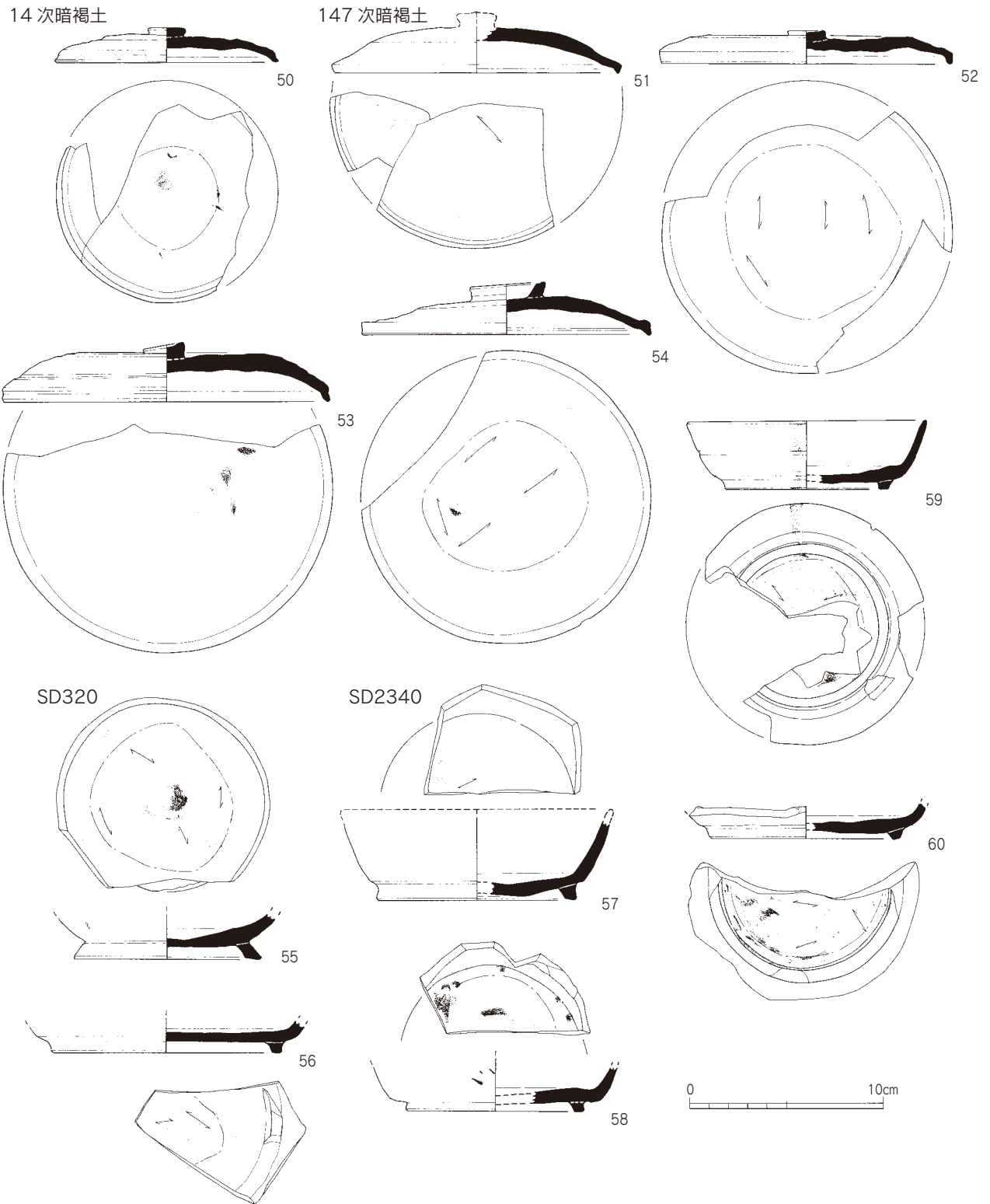


Fig.33 転用碗実測図⑤ (1/3)

くは皿を台座として使用し、屈曲部が坏等の受部となり、こすれたものとみられる。墨痕は明瞭で、器面もよく擦れている。1/2程の破片で、残存器高2.0cm、復原口径17.2cmを測る。49は口縁部の小破片で、天井部は低平。口唇部の立ち上がりはほんの僅かである。内面には墨痕が丸く付き、口縁部寄りにも文字風の墨痕がみられる。

50は口径11cm程の小型品で、低平な天井部に扁平な摘みを貼付する。口縁部の立ち上がりは弱く、外面には沈線を施す。墨痕は明瞭であるが、器面はあまり擦れていない。51・52は口径15cm程の蓋で、口唇部は鳥嘴状を呈するが立ち上がりは低い。52は口縁端部にシャープな稜を有する。51の天井部は丸みを帯びるが、52は中央部が窪む。また、51は摘みを欠くが、52は扁平な摘みを貼付する。墨痕はともに明瞭で、器面もよく擦れている。53は口唇部が鳥嘴状をなし、立ち上がりも高い。天井部中央が窪み、鉤形の摘みを貼付する。墨痕は明瞭であるが、器面は擦れていない。器高3.1cm、口径16.9cmを測る。54は低平な天井部に輪状摘みを貼付した蓋で、口唇部の立ち上がりは弱い。口縁部はヨコナデで、天井部はヘラケズリによる。墨痕は明瞭で、器面もよく擦れている。器高2.7cm、口径14.9cmを測る。

55～66は有高台の坏を転用したもので、通常底部内面を硯面とするが、高台内を硯面としたもの(56・59・60・62)もみられる。55・56はSD320で、55が腐植土D、56が青粘から出土している。55は底部の破片で、ハ字形の高台を貼付する。墨痕は顕著で、断面にも墨が付着していることから口縁部を打ち欠いて使用したことが知られる。接地面となる高台畳付も擦れている。56の高台は底部端寄りに貼付し、断面方形の低いものである。高台内を硯面としたもので、高台が外堤の役目を果たす。墨痕は明瞭で、器面も擦れている。

57～60はSD2340で、57が中層、58・59は下層、60は上層から出土した。何れも底部端寄りに断面方形の高台を貼付している。57・58は底部内面を硯面とするが、60は高台内を硯面とし、59は底部内面及び高台内面両方を硯面としている。58の胴部外面には点状の墨痕がみられ、59の外面には縦方向に墨が垂れた痕がみられる。器高3.6cm、口径12.4cm、高台径8.4cmを測る。接地面となる口唇部及び高台畳付部は擦れている。60は口縁部を打ち欠き、接地面となる部分を磨いて調整している

底部内外面
を使用

61は底部破片で、SD2015Aの出土である。底部端に断面方形の高台を貼付している。高台径は10.4cmに復原した。内底面には墨痕がみられるが、器面はあまり磨滅していない。62も底部破片で、口縁部を打ち欠き、接地面を研磨している。高台を強く撫でつけるため、高台際は海状をなし、中央部が陸部となる。墨痕は陸部にみられるが、器面はあまり擦れていない。高台径は10.1cmに復原した。63は1/2程の破片で、SK2453から出土した。器高5.0cm、口径15.8cm、高台径9.8cmを測る。器面は薄く、シャープな作りである。高台は低めで、底部の端寄りに貼付する。内底面に墨痕がみられ、その部分はよく擦れている。

64～66は土層出土品で、64が17次第1層下層、65は84次灰褐色土、66は98次暗褐色土から出土している。何れも底部破片で、64の高台は沓形を呈する高めのものである。65・66の高台は低く、底部端に貼付する。64・65は内底面を硯面とするが、66は内底面及び高台内も硯面としている。何れも、墨痕は顕著であるが、66の高台内はよく擦れているものの不明瞭。66の高台径は7.8cmに復原した。

67は無高台坏の底部破片で、84次灰砂の出土である。底部は平らで、ヘラケズリを施す。底径は7.2cmに復原した。墨痕は明瞭であるが、器面はあまり擦れていない。

68～74は皿を転用したもので、内底面を硯面としている。68・69はSD2340、70はSK2453、71は85次暗褐色土、72は84次茶褐色土、73は87次茶褐色土、74は147次茶褐色土の出土である。70・71は口径13cm程の小型品で、73・74は口径18cm程の中型品。口縁部は69を除

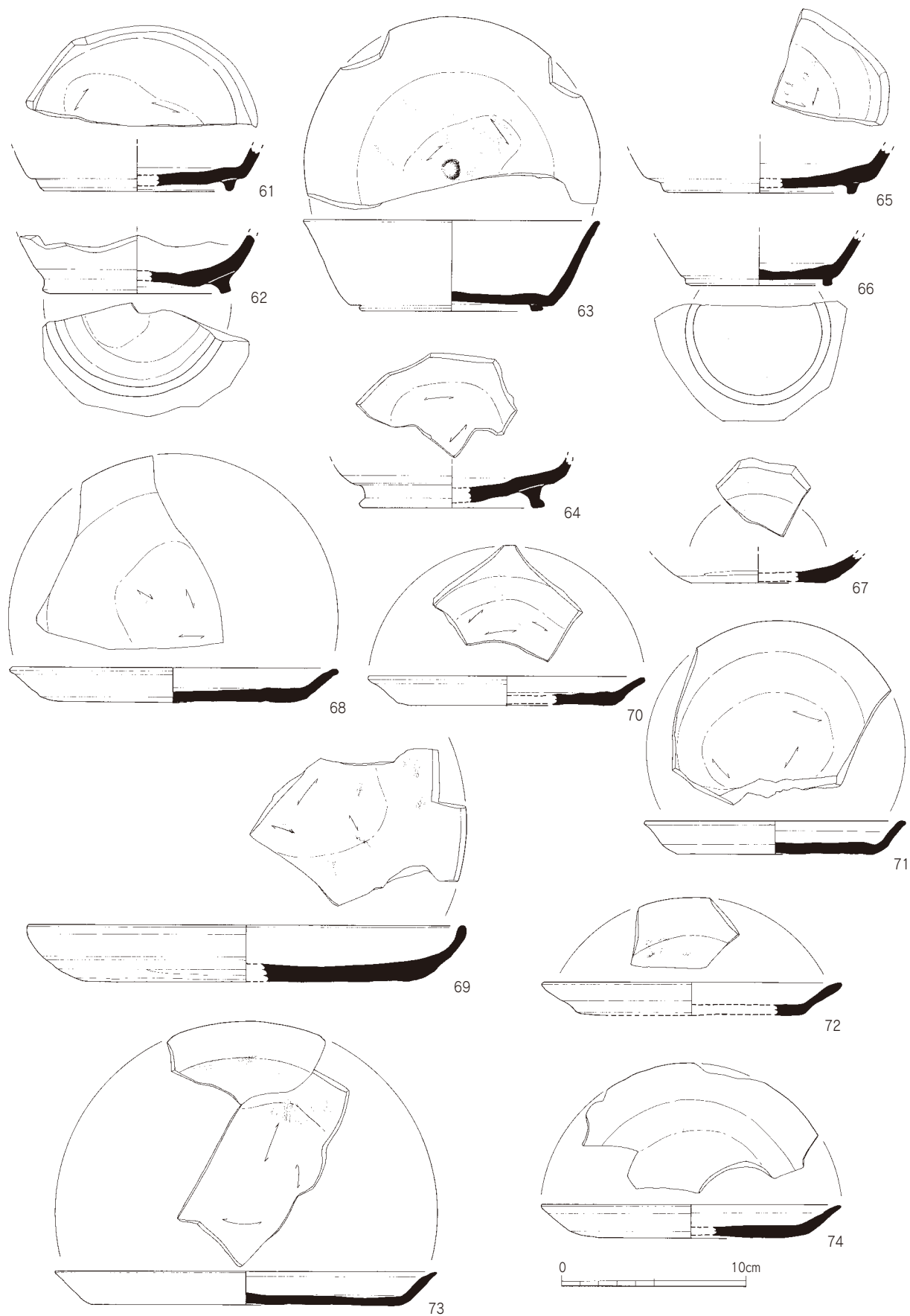


Fig.34 転用碗実測図⑥ (1/3)



Fig.35 転用硯実測図⑦ (1/3)

き外反気味に立ち上がり、73の口唇部はシャープである。69の口縁部は内湾して立ち上がる。
盤とすべきか。何れも墨痕は明瞭で、70・73・74の硯面はよく擦れている。

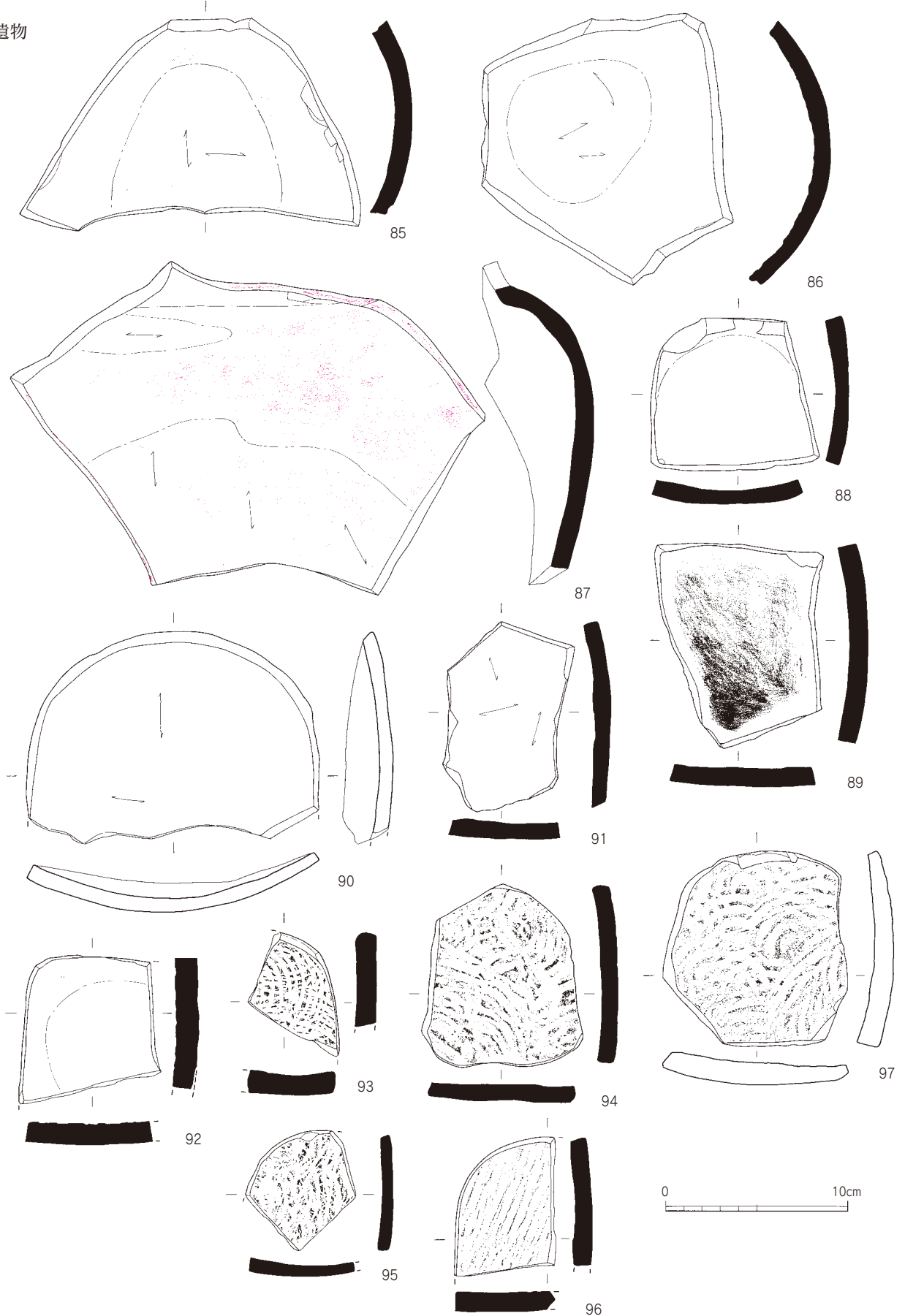


Fig.36 転用硯実測図⑧ (1/3)

75～81は壺を転用したもので、内底面或いは胴部内面を硯面としている。75～78はSD320で、75が中層粗砂、76は下層砂、77は中層腐植土の出土で、79・80はSD2340、81はSK4573の出土である。75は胴部片であるが、頸部の立ち上がりが僅かにみられ、短頸壺に

なるか。胴部を1/4程打ち欠き硯としているが、破面は調整しておらず、打ち欠いたままである。墨痕は顕著で、器面もよく擦れている。内外面ともナデ調整による。76は胴下半部の破片で、平底をなす。外面は格子目タタキ、内面はナデによる。墨痕は顕著であるが、器面はあまり擦れていない。77・78は平底で、77が底部片、78は胴下半部から底部にかけての破片で、77は内底面を硯面とし、78は胴部内面を硯面とする。78の破面は打ち欠いたままである。また、77の墨痕は不明瞭であるが、78は顕著で、器面もよく擦れている。78の外面は平行タタキ、内面はナデによる。

79・80は胴下半部から底部にかけての破片で、79は高台を打ち欠き、平らになるよう研磨している。内底面を硯面とし、墨痕は明瞭で、器面も擦れている。また、接地面となる底部外面もこすれている。80は底部端に内端部で接地する断面方形の高台を貼付する。内底面を硯面とし、墨痕は明瞭である。79・80とも胴下半部外面は回転ヘラケズリで、内面はナデによる。81は底部の小破片で、破面を部分的に研磨している。内底面を硯面とし、墨痕は顕著であるもののあまり擦れていない。

82・83は鉢を転用したもので、胴部内面を硯面とする。82は縦14cm、横10cm程の大きさで、側縁は打ち欠いたままである。墨痕は顕著で、器面はよく擦れている。また、接地面となる胴部外面もこすれている。83は胴下半部の小片で、内外面ともヘラミガキ調整によることから鉄鉢になるか。墨痕は明瞭で、器面も擦れている。84は高坏の転用硯で、非常に珍しい。坏部を欠損し、現状で坏部内面中央に墨痕を留めるが、本来杯部を硯面としていたものであろう。墨痕は不明瞭であるが、器面はよく擦れている。SD2340下層から出土した。

高坏の転用
硯

85～97は甕の胴部破片を転用したもので、①側縁を打ち欠いただけのもの（85～87・89・91）、②側縁を隅丸方形にはつったもの（88・92・96・97）、③側縁を研磨したもの（90・93・94）がある。側縁を隅丸方形に調整した②・③が所謂猿面硯になる。大半が須恵器にあって90のみ土師器を利用している。85・86がSD320で、85は下層砂、86は整地層の出土、87～89がSD2340、90がSD2015、91がSD4570の出土であり、92は83次S2、93は76次暗褐土、94は76次側溝、95は84次灰褐土、96は104次暗茶灰土、97は147次灰褐土出土。

85～89の墨痕は顕著で、85・87・88の硯面はよく擦れており、85・87の接地面となる胴部外面もこすれている。なお、87は朱墨の転用硯で、タタキ目が無くなるほどに擦っている。90は打ち欠いた後側縁を丸く擦っている。硯面に墨痕はみられるが僅かで、器面はそれほど擦れていない。使用頻度が低かったとみられる。91の墨痕は不明瞭であるが、器面はよく擦れている。92の墨痕は明瞭で、器面もよく擦れている。93～97の側縁は、研磨或いは丸くはつっているが、墨痕は確認できず未使用品とみられる。調整は外面格子目タタキ、内面円弧当て具を基調とするが、85・88・92・95の外面は平行タタキで、89の内面は車輪文当て具を施した珍しいもの。96の内面は平行当て具による。

朱墨付着

車輪文当て
具

水滴 (90) 陶硯ではないが、硯関連資料としてここで掲載した。小型の短頸壺で、口唇部を欠く。頸部はよく締まり、算盤玉形の胴部に移行する。肩部との境にヘラケズリによるシャープな稜を有する。底部は平底をなし、推定器高5.0cm、復原口径3.2cm、底径5.8cmを測る。外面には厚く灰が被るため暗灰色であるが、下半部は黒紫色を呈する。SD2340の中層黒粘出土。

Tab.4 転用硯一覧表

No.	次数	地区	遺構・土層	種別	器種	部位	墨痕部位	時期	備考	Fig.	
1	14次	S-2	灰黒粘	須恵器	坏蓋	天井部	内面	8c後半	墨痕顯著	29-10	
2		S-3	暗褐土	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半			
3		S-3	灰黒粘	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕顯著		
4		S-3	褐粗砂	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半			
5		S-3	褐粗砂	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
6		S-3	灰白砂礫	"	坏蓋	口縁~天井部	内天井面	8c中	摘み打欠き	29-4	
7		S-4	灰白砂礫	"	坏蓋	口縁~天井部	内天井面	8c中	摘み打欠き	29-7	
8		S-4	灰白砂礫	"	坏蓋	摘み部	内面	8c中	墨痕顯著		
9		S-4	灰白砂礫	"	皿	底部	内底面	8c中			
10		S-4	灰褐砂	"	甕	胴部		-	8c	未使用, 側縁打欠き	
11		N-1	灰砂	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
12		N-1	暗褐砂	"	甕	胴部		-	8c	未使用, 側縁研磨	
13		N-1	暗褐砂	"	甕	胴部	内面	8c			
14		N2-1	灰黒粘	"	坏蓋	口縁~天井部	内天井面	8c後半			
15		N2-2	青粘	"	有高台坏	底部	高台内	8c中	墨痕顯著	33-56	
16		N2-2	茶粗砂	"	甕	胴部		-	8c	未使用, 側縁打欠き	
17		N3	暗褐砂	"	坏蓋	口縁部	内面	8c前半			
18		N6	暗褐砂	"	有高台坏	底部	内底面	8c中			
19		Z	黒灰粘	"	坏蓋	口縁部	内面	8c中	墨痕顯著		
20		Z	黒灰粘	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
21		Z	灰Z	"	坏蓋	天井部	内面中央	8c			
22		Z	Z	"	皿	底部	内底面中央	8c中			
23	YK68	SD320(S10) 整地層	"	甕	内面	内面中央	8c		36-86		
24	YD64	SD320(S10) 上層砂	"	坏蓋	天井部	内面	8c	天井部に墨書「一」			
25	YE64	SD320(S10) 中層黒粘	"	坏蓋	口縁~天井部	内天井面	8c中				
26	YE67	SD320(S10) 中層黒粘	"	坏蓋	口縁~天井部	内面	8c中	墨痕顯著	30-12		
27	YF67	SD320(S10) 中層黒粘	"	甕	胴部		-	8c	未使用, 叩目擦消し		
28	YK67	SD320(S10) 中層黒粘	"	甕	胴部		-	8c	No.27 と同一個体		
29	YF68	SD320(S10) 中層黒粘	"	甕	胴部		-	8c	未使用, 側縁打欠き		
30	YE64	SD320(S10) 中層粗砂	"	坏蓋	天井部	内天井面	8c		29-11		
31	YF64	SD320(S10) 中層粗砂	"	甕	胴部	内面	8c	側縁一部打欠き			
32	YF65	SD320(S10) 中層粗砂	"	平瓶	胴部	内面	8c	墨痕顯著	35-75		
33	YI66	SD320(S10) 中層粗砂	"	甕	胴部		-	8c	未使用, 側縁研磨		
34	YI66	SD320(S10) 中層粗砂	"	甕	胴部	内面	8c				
35	YL66	SD320(S10) 中層粗砂	"	坏蓋	口縁~天井部	内天井面	8c前半				
36	YF66	SD320(S10) 中層腐植土	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕僅か			
37	YG66	SD320(S10) 中層腐植土	"	坏	底部	内底面	8c中				
38	YG67	SD320(S10) 中層腐植土	"	坏蓋	口縁~摘み部	内面	8c後半				
39	YH66	SD320(S10) 中層腐植土	"	壺	底部	内底面	9c前半		35-79		
40	YH67	SD320(S10) 中層腐植土	"	坏蓋	口縁部	内面	8c中				
41	YE65	SD320(S10) 下層砂	"	坏蓋	口縁~天井部	内面	8c末	8c後半			
42	YE68	SD320(S10) 下層砂	"	壺	底部	内底面	8c				
43	YF67	SD320(S10) 下層砂	"	坏蓋	天井部	内面	8c中				
44	YF68	SD320(S10) 下層砂	"	坏蓋	口縁~摘み部	内天井面	8c中				
45	YG67	SD320(S10) 下層砂	"	坏蓋	口縁~天井部	内天井面	8c中				
46	YJ66	SD320(S10) 下層砂	"	有高台坏	高台部	内底面	8c中				
47	YJ66	SD320(S10) 下層砂	"	甕	胴部	内面	8c				
48	YJ66	SD320(S10) 下層砂	"	甕	胴部	内面	8c		36-85		
49	YL65	SD320(S10) 下層砂	"	坏蓋	天井部	内面	8c前		29-5		
50	YL65	SD320(S10) 下層砂	"	坏蓋	天井部	内面	8c				
51	YC65	SX2507(落込II)	"	有高台坏	口縁~底部	内底面	8c後半				
52	ト Tr	SB370 礎石抜方	"	坏蓋	天井部	内面	8c中?	墨痕顯著	29-1		
53	カ Tr	土坑下層	"	坏蓋	天井部	内面	8c				
54	ヘ Tr	第1 整地	"	坏蓋	口縁部	内面	8c中				
55	A-7	第1 層	"	壺?	胴部	内面	8c				
56	U-2	第1 層下層	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半				
57	U-2	第1 層下層	"	壺	胴部	内面	8c	側縁打欠き			
58	V-2	第1 層下層	"	甕	胴部		-	8c	未使用, 側縁研磨		
59	V-3	第1 層下層	"	坏蓋	口縁部	内面	8c末	墨痕若干			
60	V-3	第1 層下層	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半				

No.	次数	地区	遺構・土層	種別	器種	部位	墨痕部位	時期	備考	Fig.
61	17次	Y-3	第1層	須恵器	有高台坏	底部	内面	7c後半	墨痕顕著	34-64
62		B-7	第2層	〃	坏蓋	天井部	内面	8c		
63		V-3	第2層 pit	〃	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c後半	墨痕僅か	
64		Z-5	第2層 pit	〃	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c後半		
65		Z-5	第2層 pit	〃	坏蓋	天井～摘み部	内面	8c		
66		卜 Tr	床土	〃	坏蓋	天井部	内面	8c		
67		A-5	床土	〃	坏蓋	天井部	内面	8c		
68		B-5	床土	〃	坏蓋	天井部	内面	8c		
69		D-4	床土	〃	皿	底部	内底面中央	8c		
70		NB65	SD320(S10) 灰砂礫	〃	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c後半		
71	NC64	SD320(S10) 灰砂礫	〃	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c後半			
72	NG66	SD320(S10) 灰砂礫	〃	甕	胴部	内面	8c			
73	NH66	SD320(S10) 灰砂礫	〃	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c前半			
74	ND66	SD320(S10) 灰白砂粘	〃	甕	胴部	内面	9c			
75	NB66	SD320(S10) 暗灰砂礫	〃	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c後半			
76	NC66	SD320(S10) 暗灰砂礫	〃	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c中			
77	ND65	SD320(S10) 暗灰砂礫	〃	坏蓋	天井部	内面	8c			
78	NB65	SD320(S10) 腐植土	〃	坏蓋	摘み部	内面中央	8c			
79	ND65	SD320(S10) 腐植土	〃	坏蓋	天井部	内面	8c			
80	ND65	SD320(S10) 腐植土	〃	甕	胴部	内面	8c			
81	NE66	SD320(S10) 腐植土	〃	坏蓋	天井部	内面	8c			
82	NE67	SD320(S10) 腐植土	〃	坏蓋	天井部	内面	8c			
83	NE67	SD320(S10) 腐植土	〃	壺	胴～底部	内面	9c前半		35-78	
84	NF67	SD320(S10) 腐植土	〃	甕	胴部	内面	8c	No.28 と接合		
85	NC65	SD320(S10) 下層腐植土	〃	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c中			
86	NC66	SD320(S10) 下層腐植土	〃	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c後半			
87	ND65	SD320(S10) 下層腐植土	〃	甕	胴部	内面	8c			
88	NG66	SD320(S10) 下層腐植土	〃	坏蓋	天井部	内面	8c			
89	NH65	SD320(S10) 下層腐植土	〃	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c後半			
90	NH65	SD320(S10) 下層腐植土	〃	坏蓋	天井部	内面	8c			
91	NH66	SD320(S10) 下層腐植土	〃	甕	胴部	内面	8c			
92	NH66	SD320(S10) 下層腐植土	〃	甕	胴部	内面	8c			
93	NI65	SD320(S10) 下層腐植土	〃	甕	胴部	内面	8c	側縁打欠き		
94	NI67	SD320(S10) 下層腐植土	〃	壺	胴部	内面	9c前半			
95	76次	NC65	SD320(S10) 腐植土 D	〃	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c末		30-13
96		NC66	SD320(S10) 腐植土 D	〃	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c後半		29-6
97		ND65	SD320(S10) 腐植土 D	〃	有高台坏	口縁部	内面	8c中		
98		NE66	SD320(S10) 腐植土 D	〃	坏蓋	天井～摘み部	内天井面	8c中		
99		NE66	SD320(S10) 腐植土 D	〃	坏蓋	天井部	内天井面	8c		
100		NG66	SD320(S10) 腐植土 D	〃	坏?	底部	内底面	8c		
101		NG66	SD320(S10) 腐植土 D	〃	有高台坏	口縁部	内面	8c中		
102		NG66	SD320(S10) 腐植土 D	〃	有高台坏	口縁部	内面	7c末		33-55
103		NH65	SD320(S10) 腐植土 D	〃	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c後半		
104		NH65	SD320(S10) 腐植土 D	〃	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c後半		
105	NH65	SD320(S10) 腐植土 D	〃	有高台坏	胴部	内面	8c			
106	NH65	SD320(S10) 腐植土 D	〃	甕	胴部	内面	8c			
107	NI65	SD320(S10) 腐植土 D	〃	坏蓋	天井部	内面	8c			
108	NI65	SD320(S10) 腐植土 D	〃	皿	口縁～底部	内面	8c中			
109	ND62	SD320(S10) 最下層砂	〃	有高台坏	口縁部	内面	8c中			
110	ND67	SD320(S10) 最下層砂	〃	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c前半	墨痕顕著	29-8	
111	NE65	SD320(S10) 最下層砂	〃	坏蓋	口縁部	内面	7c後半	墨痕僅か		
112	NE65	SD320(S10) 最下層砂	〃	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c前半	墨痕顕著	29-9	
113	NE65	SD320(S10) 最下層砂	〃	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c前半	墨痕顕著	29-3	
114	NE65	SD320(S10) 最下層砂	〃	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c中	墨痕僅か		
115	NE65	SD320(S10) 最下層砂	〃	坏蓋	天井部	内面	8c			
116	NE66	SD320(S10) 最下層砂	〃	壺	胴下半部	内面	9c前半		35-76	
117	NE67	SD320(S10) 最下層砂	〃	坏蓋	天井～摘み部	内面	8c中	墨痕顕著		
118	NH65	SD320(S10) 最下層砂	〃	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c後半			
119	NH65	SD320(S10) 最下層砂	〃	坏蓋	口縁部	内面	8c中			
120	NH65	SD320(S10) 最下層砂	〃	坏蓋	天井～摘み部	内面	8c	摘み打欠き		

No.	次数	地区	遺構・土層	種別	器種	部位	墨痕部位	時期	備考	Fig.
121		NH67	SD320(S10) 最下層砂	須恵器	甕	胴部	内面	8c	墨痕顕著	
122		NI67	SD320(S10) 最下層砂	"	壺	胴下半部	内面	8c		
123		NI67	SD320(S10) 最下層砂	"	甕	胴部	内面	8c		
124		NI67	SD320(S10) 最下層砂	"	甕	胴部	内面	8c		
125		65ライン	SD320(S10) 最下層砂	"	坏蓋	天井～摘み部	内面	8c中	墨痕僅か	
126		NB65	SD320 下層溝 (S13)	"	甕	胴部	—	8c	未使用, 側縁研磨	
127		NE65	SD320 下層溝 (S13)	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕僅か	
128		ND63	SD2010(S1) 黒灰土	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
129		NH63	SD2010(S1) 最下層砂	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕顕著	
130		NH68	SD2011(S18)	"	甕	胴部	内面	8c		
131		NI77	SD2011(S30)	"	甕	胴部	—	8c	未使用, 側縁打欠き	
132		NI77	SD2011(S30)	"	甕	胴部	内面	8c	墨痕僅か	
133		NH58	SD2015(S5) 砂層	"	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c中		
134		NH59	SD2015(S5)	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
135		NH59	SD2015(S5)	"	皿	底部	内面	8c中		
136		NH59	SD2015(S5)	土師器	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c中	墨液固着	31-32
137		NH62	SD2015(S5)	"	甕	胴部	内面	8c	墨痕僅か	36-90
138		NH64	SK2007(S16)	須恵器	坏蓋	天井～摘み部	内面	8c	墨痕僅か	
139	76次	NF59	暗灰土	"	甕	胴部	内面	8c		
140		NH66	暗灰土	"	甕	胴部	—	8c	未使用, 側縁研磨	
141		NI60	暗灰土	"	甕	胴部	—	8c	未使用	
142		NN71	暗灰土	"	甕	胴部	—	8c	未使用, 側縁研磨	36-93
143		Z	暗灰土 B	"	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c中	墨痕僅か	
144		NE63	黄灰土	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半		
145		NH61	茶灰土	"	坏蓋	口縁部	内面	8c中		
146		NI69	黒色土	"	甕	胴部	内面	8c	墨痕僅か	
147		NZ63	黒灰土	"	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c後半	墨痕僅か	
148		NZ63	黒灰土	"	坏蓋	天井～摘み部	内面	8c	墨痕僅か	
149		ND64	灰白砂粘	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半	墨痕僅か	
150		ND65	灰色砂礫	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
151		NI68	床土	"	甕	胴部	—	8c	未使用, 側縁研磨	
152		NI66	側溝	"	甕	胴部	—	8c	未使用, 側縁研磨	36-94
153		NJ59	側溝	"	甕	胴部	—	8c	未使用, 側縁研磨	
154		Z	Z	"	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c前半		
155		Z	Z	"	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c後半		
156		Z	Z	"	坏蓋	口縁部	内面	8c中		
157		Z	Z	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
158		UA36	SD2340(S38) 最下層	"	坏蓋	口縁部	内面	8c中	墨痕顕著	
159		UG45	SD2350(S30)	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕僅か	
160		UC45	SK2344B(S13)	"	坏蓋	天井部	内面	8c	坏蓋硯?	31-34
161		UD44	SK2344B(S13)	"	皿	底部	内面中央	8c		
162		UC44	SK2344B(S13) 下層	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕僅か, 側縁研磨	
163		UC44	SK2344B(S13) 下層	"	坏蓋	天井部	内面	8c	No. 162 と同一か	
164		UC44	SK2344B(S13) 下層	"	坏蓋	天井部	内面	8c	No. 161 と接合	
165	83次	UA36	SX2336(S2)	"	甕	胴部	内面	8c		
166		UB34	SX2336(S2)	"	坏蓋	摘み部	内面	8c		
167		UB34	SX2336(S2)	"	甕	胴部	内面	8c		36-92
168		UB38	SX2336(S2)	"	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c		
169		UB39	SX2336(S2)	"	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c		
170		UD36	SX2336(S2)	"	甕	胴部	内面	8c	墨痕僅か, 側縁研磨	
171		UB38	床土	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c	墨痕僅か	
172		UB38	床土	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
173		SF40	SB2340B(S27) 柱穴	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
174		SB49	SD2419 炭中	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c中		31-33
175		SB48	SD2419 炭中	"	壺	胴下半部	内面	8c中	SB49 炭中と接合	35-80
176		SD38	SX2454(S6)	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c後半		31-37
177	84次	SE44	(S10)	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
178		SI37	(S187)	"	坏蓋	口縁部	内面	8c中	墨痕顕著	32-41
179		SB46	茶褐色土	"	坏蓋	口縁部	内天井面	8c後半	墨痕僅か	
180		SB47	茶褐色土	"	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c中		32-46

No.	次数	地区	遺構・土層	種別	器種	部位	墨痕部位	時期	備考	Fig.
181	84次	SC46	茶褐土	須恵器	坏蓋	天井部	内面	8c		
182		SC49	茶褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕僅か	
183		SC50	茶褐土	"	坏蓋	天井～摘み部	内面	8c	墨痕僅か	
184		SC50	茶褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕僅か	
185		SD48	茶褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
186		SD49	茶褐土	"	坏蓋	口縁部	内面	8c中		
187		SD49	茶褐土	"	皿	口縁～底部	内面	8c中		
188		SE48	茶褐土	"	坏蓋	摘み部	内面	8c		
189		SE48	茶褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕顯著	
190		SE50	茶褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
191		SF49	茶褐土	"	皿	口縁～底部	内面	8c中		34-72
192		SF50	茶褐土	"	壺	胴部	内面	8c		
193		SG49	SK2453(S3)	"	有高台坏	口縁～底部	内底面	8c中	墨痕顯著	34-63
194		SG49	茶褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕顯著	
195		SG50	茶褐土	"	皿?	底部	内面	8c		
196		SG50	茶褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
197		SH34	茶褐土	"	皿	口縁～底部	内面	8c中	墨痕顯著	34-70
198		SH47	茶褐土	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半		
199		SH47	茶褐土	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c中		
200		SH48	茶褐土	"	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c前半	墨痕顯著	32-45
201		SH49	茶褐土	"	坏蓋	口縁部	内面	8c前半	墨痕顯著	
202		SH51	茶褐土	"	坏蓋	口縁部	内面	8c中		
203		SE33	茶灰土	"	坏蓋	口縁部	内面	8c前半		
204		SE34	茶灰土	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c前半		32-44
205		SE34	茶灰土	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕僅か	
206		SE34	茶灰土	"	甕	胴部	内面	8c		
207		SE35	茶灰土	"	坏蓋	口縁部	内面	8c中	墨痕僅か	
208		SE36	茶灰土	"	甕	胴部	内面	8c		
209		SF34	茶灰土	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c後半		32-43
210		SF35	茶灰土	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
211		SF37	茶灰土	"	坏蓋	天井～摘み部	内面	8c		
212		SG35	茶灰土	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕顯著	
213		SH37	茶灰土	"	皿?	底部	内底面	8c	墨痕僅か	
214		SI35	茶灰土	"	甕	胴部	内面	8c		
215		SI36	茶灰土	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕僅か	
216		SI37	茶灰土	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕顯著	
217		SC38	灰褐土	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c中	SC39 灰褐土と接合	
218		SC39	灰褐土	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半	墨痕僅か	
219		SC42	灰褐土	"	皿?	底部	内面	8c		
220		SC46	灰褐土	"	鉢	底部	内面	8c	墨痕僅か	
221	SD40	灰褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
222	SD41	灰褐土	"	甕	胴部	内面	8c			
223	SD45	灰褐土	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c後半	墨痕僅か		
224	SD45	灰褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
225	SE40	灰褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c	坏蓋硯?	32-42	
226	SE48	灰褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
227	SF45	灰褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
228	SF46	灰褐土	"	甕	胴部	—	8c	未使用品	36-95	
229	SG46	灰褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
230	SG48	灰褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕僅か		
231	SH43	灰褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
232	SH43	灰褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
233	SH45	灰褐土	"	皿?	底部	内面	8c			
234	SI33	灰褐土	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半	墨書 (No.96) で登録		
235	SI33	灰褐土	"	皿?	底部	内面	8c			
236	SI40	灰褐土	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半			
237	SI48	灰褐土	"	坏蓋	天井～摘み部	内面	8c			
238	SJ43	灰褐土	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半	SE50 灰褐土と接合		
239	SJ43	灰褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
240	SJ44	灰褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c			

No.	次数	地区	遺構・土層	種別	器種	部位	墨痕部位	時期	備考	Fig.
241		SJ44	灰褐色土	須恵器	坏蓋	天井部	内面	8c		
242		SJ44	灰褐色土	"	坏蓋?	天井部	内面	8c		
243		SK43	灰褐色土	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半		
244		SK46	灰褐色土	"	坏蓋	天井～摘み部	内面	8c		
245		SK46	灰褐色土	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
246		SK50	灰褐色土	"	有高台坏	底部	内底面	8c中		34-65
247		SO40	灰褐色土	"	坏蓋?	天井部	内面	8c		
248		SG41	灰褐色土B	"	坏蓋	口縁部	内面	8c前半		
249		SI40	灰褐色土B	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半	墨痕僅か	
250		SI40	灰褐色土B	"	坏蓋	天井～摘み部	内面	8c		
251		S140	灰褐色土B	"	有高台坏	底部	内底面	8c後半		
252		SI40	灰褐色土B	"	皿	口縁～底部	内面	8c中	墨痕顯著	
253		SI40	灰褐色土B	"	甕	胴部	内面	8c		
254		SI43	灰褐色土B	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
255		SJ40	灰褐色土B	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半		
256		SJ40	灰褐色土B	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
257	84次	SJ41	灰褐色土B	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
258		SJ43	灰褐色土B	"	坏蓋	天井～摘み部	内面	8c	墨痕顯著	
259		SK43	灰褐色土B	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半		
260		SK43	灰褐色土B	"	坏蓋	天井～摘み部	内天井面中央	8c	墨痕僅か	
261		SG48	暗褐色土	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半		
262		SJ50	暗褐色土	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c末		
263		SJ35	灰砂	"	坏	底部	内面	8c中		34-67
264		SB48	焼土中	"	坏蓋	口縁部	内面	8c中	墨痕顯著	
265		SB48	焼土中	"	坏蓋	摘み部	内面	8c		
266		SB48	焼土中	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
267		SB49	焼土中	"	坏蓋	天井～摘み部	内面	8c		
268		SC47	焼土中	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半	墨痕僅か	
269		SC47	焼土中	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半		
270		SC48	焼土中	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
271		SC48	焼土中	"	甕	胴部	内面	8c	墨痕顯著	
272		SF48	焼土中	"	坏蓋?	天井部	内面	8c	墨痕僅か	
273		SG47	焼土中	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c後半	墨痕顯著	
274		QH46	SD2015A(S5 下層)	"	有高台坏	底部	内底面中央	8c後半		34-61
275		QH47	SD2015A(S5 下層)	"	皿?	底部	内面	8c		
276		QH43	SD2015B(S5 上層)	"	坏蓋	口縁～天井部	内面中央	8c後半		31-31
277		QH47	SD2015B(S5 上層)	"	坏蓋	天井部	内面	8c	摘み打欠き	
278		QG38	SD2340 最上層 (S25)	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
279		QH37	SD2340 最上層 (S25)	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
280		QJ37	SD2340 最上層 (S25)	"	坏蓋	天井部	内面	8c後半		
281		QJ37	SD2340 最上層 (S25)	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
282		QH37	SD2340(S50)	"	有高台坏	口縁部	内面	8c前半	QJ37-S50上層と接合	
283		QH37	SD2340(S50) 上層	"	坏蓋	天井～摘み部	内面	8c		
284		QH37	SD2340(S50) 上層	"	有高台坏	底部	外底面	8c中	墨痕顯著	33-60
285		QI37	SD2340(S50) 上層	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c中	墨痕僅か	30-16
286		QI37	SD2340(S50) 上層	"	坏蓋	口縁部	内面	8c中	墨痕顯著	
287	85次	QI37	SD2340(S50) 上層	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕顯著	
288		QI37	SD2340(S50) 上層	"	甕	頸部～肩部	内面	8c		
289		QJ37	SD2340(S50) 上層	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕顯著	
290		QJ37	SD2340(S50) 上層	"	鉄鉢	胴下半部	内面	8c		35-83
291		QG37	SD2340(S50) 下層	"	坏蓋	口縁部	内面	8c前半	墨痕顯著	
292		QH37	SD2340(S50) 下層	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c前半	墨痕顯著	
293		QH37	SD2340(S50) 下層	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c後半	外天井部に墨痕	30-27
294		QH37	SD2340(S50) 下層	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕顯著	
295		QH37	SD2340(S50) 下層	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
296		QH37	SD2340(S50) 下層	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
297		QH37	SD2340(S50) 下層	"	有高台坏	胴下半部	内底面	8c前半	墨痕顯著	33-58
298		QH37	SD2340(S50) 下層	"	鉢	底部	内底面	8c	墨痕顯著	
299		QH37	SD2340(S50) 下層	"	甕	胴部	内面	8c		
300		QI37	SD2340(S50) 下層	"	坏蓋	口縁～摘み部	内面	8c前半		30-21

No.	次数	地区	遺構・土層	種別	器種	部位	墨痕部位	時期	備考	Fig.
301	85次	QI37	SD2340(S50)下層	須恵器	坏蓋	口縁部	内面	8c中		
302		QI37	SD2340(S50)下層	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c前半	No.300 と接合	
303		QI37	SD2340(S50)下層	"	坏蓋	口縁部	内天井面	8c前半		
304		QJ37	SD2340(S50)下層	"	高杯	脚柱部	坏部内面	8c		35-84
305		QL38	SD2340(S50)下層	"	坏蓋	天井部	内天井面	8c		
306		QL38	SD2340(S50)下層	"	坏蓋	口縁部	内面	8c前半		
307		QL38	SD2340(S50)下層	"	有高台坏	口縁～底部	内底面	8c中		33-59
308		QM37	SD2340(S50)下層	"	皿?	底部	外底面	8c		
309		QM37	SD2340(S50)下層	"	甕	頸～胴上部	内面	8c	朱墨遺存	36-87
310		QC40	SD2463(S29)	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
311		QF44	SD2470(S10)	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
312		QF44	SD2470(S10)	"	坏蓋	天井部	内天井面	8c	No.310 と接合	
313		QC42	SK2478(S24)	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c後半		31-35
314		QK37	SX2485(S20)	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c中		31-39
315		QK41	焼土層	"	有高台坏	胴下半部	高台内面	8c中		34-62
316		QB42	暗褐色土	"	坏蓋	口縁部	内天井面	8c中		
317		QC45	暗褐色土	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
318		QD40	暗褐色土	"	甕	胴部	-	8c	未使用、側縁研磨	
319		QD41	暗褐色土	"	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c後半	墨痕僅か	
320		QD44	暗褐色土	"	皿	口～底部	内面	8c中		
321		QD45	暗褐色土	"	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c後半	墨痕僅か	
322		QE43	暗褐色土	"	皿	口～底部	内底面	8c中		34-71
323		QE46	暗褐色土	"	皿?	底部	内底面	8c		
324		QG43	暗褐色土	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
325		QM42	暗褐色土	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c後半		
326		QM42	暗褐色土	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
327		QL42	セクション部	"	皿	天井部	内面	8c		
328	87次	VD37	SD2340(S50)上層	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
329		VD37	SD2340(S50)上層	"	坏蓋	天井部	内面	8c	No.330 と同一固体か	
330		VE37	SD2340(S50)青灰砂質土	"	坏蓋	口縁部	内天井面	8c中	坏蓋硯?	30-25
331		VD37	SD2340(S50)暗灰粘	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕顕著	
332		VD37	SD2340(S50)暗灰粘	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕顕著	
333		VD37	SD2340(S50)暗灰粘	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
334		VD37	SD2340(S50)灰白砂	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
335		Z	SD2528(S70)	"	皿	底部	内底面	8c		
336		VC37	茶褐色土	"	坏蓋	摘み部	内面	8c		
337		VC38	茶褐色土	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
338		VC38	茶褐色土	"	皿	口縁～底部	内面	8c中		34-73
339		VD37	茶褐色土	"	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c後半		
340		VD37	茶褐色土	"	坏蓋	天井～摘み部	内天井面	8c中		32-47
341		Z	Z	"	坏蓋	天井部	内天井面	8c		
342	90次	VJ37	SD2340(S50)上層	"	坏蓋	天井部	内天井面	8c	墨痕僅か	
343		VH37	SD2340(S50)中層黒粘	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c前半	墨痕顕著	30-28
344		VJ36	SD2340(S50)中層黒粘	"	壺	底部	内底面	8c中	高台打欠き	35-79
345		VJ37	SD2340(S50)中層黒粘	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c中		31-29
346		VL37	SD2340(S50)中層黒粘	"	坏蓋	口縁～摘み部	内面	8c中	墨痕顕著	31-30
347		VL37	SD2340(S50)中層黒粘	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c中		
348		VL37	SD2340(S50)中層黒粘	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕顕著	
349		VI37	SD2340(S50)中層灰粘	"	盤	口縁～底部	内面	8c中		34-69
350		VI37	SD2340(S50)中層灰粘	"	坏蓋	摘み部	内面	8c		
351		VK37	SD2340(S50)中層灰粘	"	坏蓋	口縁～摘み部	内面	8c前半	墨痕顕著	30-22
352		VI37	SD2340(S50)下層腐植土	"	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	7c中	墨痕顕著	30-15
353		VJ37	SD2340(S50)下層茶褐色砂	"	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c中		30-18
354		VL40	床土	"	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c中		
355		98次	QS37	SD2340 上層	"	坏蓋	天井部	内天井面	8c	
356	QT37		SD2340 上層	"	皿	底部	内面	8c中		
357	QT37		SD2340 上層	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
358	QZ		SD2340 上層	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
359	QQ37		SD2340 上層最下	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半	墨痕顕著	30-26
360	QZ37		SD2340	"	皿	口縁～底部	内面中央	8c中		34-68

No.	次数	地区	遺構・土層	種別	器種	部位	墨痕部位	時期	備考	Fig.
361	98次	QN37	SD2340 中層黒色土	須恵器	坏蓋	口縁～天井部	内面	7c中	墨痕僅か	30-14
362		QO37	SD2340 中層黒色土	"	坏蓋	口～摘み部	内面中央	8c前半		30-23
363		QP37	SD2340 中層黒色土	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕顕著	
364		QR37	SD2340 中層黒色土	"	有高台坏	胴下半～高台	内面	8c中		33-57
365		QQ37	SD2340 下層砂	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
366		QQ37	SD2340 下層砂	"	坏蓋	摘み部	内面	8c		
367		QT37	SD2340 下層砂	"	坏蓋	口縁部	内面中央	8c中		
368		QS42	SE2890(S50)	"	坏蓋	口縁～摘み部	内面	8c後半		29-2
369		QS42	SE2890(S50)	"	坏蓋	摘み部	内面	8c		
370		QT38	SK2822(S6)	"	坏蓋	口縁～摘み部	内面	8c中		31-36
371		QT38	SK2822(S6)	"	皿	口縁～底部	内面	8c中		
372		QN40	SX2480	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
373		QP40	SX2480	"	坏蓋	口縁部	内面	7c後半		31-38
374		QO42	暗褐色土	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕僅か	
375		QQ41	暗褐色土	"	有高台坏	胴下半～高台	高台内面	8c後半		34-66
376		QO38	暗褐色下層	"	壺蓋	摘み部	内面	8c		
377		QP36	暗褐色下層	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
378		104次	PJ64	暗茶灰土	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕僅か
379	PK65		暗茶灰土	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c中		
380	PL70		暗茶灰土	"	甕	胴部	-	8c	未使用, 側縁打欠き	36-96
381	PL70		暗茶灰土	"	甕	胴部	-	8c	未使用, 側縁研磨	
382	PH73	床土	"	甕	胴部	-	8c	未使用, 側縁打欠き		
383	124次	QG37	SD2340 中層	"	坏蓋	口縁部	内面	8c中	墨痕顕著	30-17
384		QG37	SD2340 中層	"	坏蓋	口縁部	内面	8c中	墨痕顕著	
385		QG37	SD2340 下層粘質砂	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c前半	墨痕顕著	30-20
386		QG37	SD2340 下層粘質砂	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c前半		30-24
387		QG37	SD2340 下層粘質砂	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c中	墨痕顕著	
388		QG37	SD2340 下層粘質砂	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c前半		
389		QG37	SD2340 下層粘質砂	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c前半	墨痕顕著	
390		QF37	SD2340 最下層砂質土	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c前半	墨痕顕著	30-19
391		QF37	SD2340 最下層砂質土	"	鉢	口縁～底部	内面	8c中	墨痕顕著	35-82
392		QF37	SD2340 最下層砂質土	"	甕	胴部	内面	8c	側縁打欠き	36-88
393		QG37	SD2340 最下層砂質土	"	坏蓋	摘み部	内面	8c	墨痕顕著	
394		QG37	SD2340 最下層砂質土	"	皿	底部	内底面	8c	墨痕顕著	
395	QG37	SD2340 最下層砂質土	"	甕	胴部	内面	8c	墨痕顕著	36-89	
396	129次	NP52	SD3818(S7)	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c中	墨痕僅か	
397		NO54	SD3825(S10)	"	甕	胴部	-	8c	未使用, 側縁打欠き	
398		NQ56	SD3835(S40)	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c前半	墨痕僅か	
399		QI51	SK4059(S56)	"	坏蓋	天井～摘み部	内面	8c		
400	147次	QG52	SK4063(S7)	"	坏蓋	口縁部	内面	8c中		
401		QD56	SX4065(S55)	"	坏蓋	口縁～摘み部	内面	8c前半		31-40
402		QE54	SX4065(S55)	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕僅か	
403		QE55	SX4065(S55)	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
404		QE56	SX4065(S55)	"	坏蓋	口縁部	内面	8c前半	墨痕僅か	
405		QE56	SX4065(S55)	"	坏蓋	天井～摘み部	内面	8c	墨痕顕著	
406		QG47	(S16)	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
407		QI48	(S24)	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
408		QH50	整地層	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
409		QC52	茶褐色土	"	坏蓋	摘み部	内面	8c		
410		QD50	茶褐色土	"	坏蓋	口縁部	内面	8c前半		
411		QD50	茶褐色土	"	坏蓋	天井部	内天井面	8c	墨痕僅か	
412		QD50	茶褐色土	"	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c	墨痕僅か	
413		QF50	茶褐色土	"	坏蓋	摘み部	内面	8c	摘み打欠き	
414		QC57	茶褐色下層	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
415		QD53	茶褐色下層	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
416		QD56	茶褐色下層	"	坏蓋	天井部	内面	8c		
417	QD57	茶褐色下層	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c前半			
418	QE47	茶褐色下層	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半		32-48	
419	QH48	茶褐色下層	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c			
420	QH49	茶褐色下層	"	坏蓋	口縁部	内面	8c中			

No.	次数	地区	遺構・土層	種別	器種	部位	墨痕部位	時期	備考	Fig.	
421	147 次	QHZ	茶褐土下層	須恵器	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c中	墨痕僅か		
422		QI48	茶褐土下層	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半			
423		QI48	茶褐土下層	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半			
424		QI48	茶褐土下層	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
425		QJ48	茶褐土下層	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c後半		32-47	
426		QJ48	茶褐土下層	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
427		QJ50	茶褐土下層	"	甕	胴部	内面	8c			
428		QK48	茶褐土下層	"	蓋	摘み部	内面	8c			
429		QK48	茶褐土下層	"	"	皿	口縁～底部	内底面	8c中		
430		QK49	茶褐土下層	"	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c後半			
431		QK49	茶褐土下層	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半			
432		QK50	茶褐土下層	"	坏蓋	口縁部	内面	8c中			
433		QK50	茶褐土下層	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
434		QK50	茶褐土下層	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
435		QK50	茶褐土下層	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
436		QK50	茶褐土下層	"	坏蓋	天井部	内面	8c	墨痕僅か		
437		QK50	茶褐土下層	"	"	皿	底部	内面	8c		
438		QK51	茶褐土下層	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
439		QKZ	茶褐土下層	"	坏蓋	口縁部	内面	8c中			
440		QL49	茶褐土下層	"	"	皿	口縁～底部	内底面	8c中		34-74
441		QL50	茶褐土下層	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
442		QM48	茶褐土下層	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c前半			
443		QF52	暗褐土	"	坏蓋	口縁～摘み部	内面	8c中			33-52
444		QH50	暗褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
445		QH52	暗褐土	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c後半			
446		QH52	暗褐土	"	坏蓋	天井～摘み部	内面	8c	墨痕僅か		
447		QJ47	暗褐土	"	坏蓋	口縁～摘み部	内面	8c前半			33-53
448		QJ48	暗褐土	"	坏蓋	口縁～摘み部	内天井面	8c中			33-50
449		QJ48	暗褐土	"	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c前半	墨痕僅か		
450		QJ48	暗褐土	"	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c後半	墨痕僅か		
451		QJ48	暗褐土	"	坏蓋	天井部	外面	8c			
452		QJ48	暗褐土	"	坏蓋	天井～摘み部	内面	8c	墨痕僅か		
453		QJ48	暗褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
454		QJ48	暗褐土	"	"	有高台坏	底部	内底面	8c後半		
455		QJ49	暗褐土	"	坏蓋	口縁～摘み部	内面	8c中			33-54
456		QK48	暗褐土	"	坏蓋	口縁～天井部	内天井面	8c前半			
457		QL48	暗褐土	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
458		QL49	暗褐土	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c中			33-51
459		CTr	暗褐土	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c後半			
460		QJ48	灰褐土	"	有高台坏	底部	内面	8c			
461		QL48	灰褐土	"	坏蓋	口縁～天井部	内面	8c後半			
462		CTr	灰褐土	"	甕	胴部		—	8c	未使用, 側縁打欠き	36-97
463		Z	Z	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
464	187 次		SB4560(S35) 掘方	"	坏蓋	天井部	内面	8c			
465			SD4570(S10A 下層)	"	甕	胴部	内面	8c		36-91	
466		A1	SK4573(S2) 黒色土	"	壺	胴部	内面	9c前			
467		B1	SK4573(S2) 黒色土	"	壺蓋	底部	内底面	9c前			35-81
468		C2	SK4574(S3) 黒色土	"	坏蓋	口縁部	内面	8c後半			

(2) 服飾品・ガラス製品

1) 腰 帯 (Fig.37, PL.51)

不丁地区では、7点の石帯と1点の鍔帯が出土している。

石 帯 (1～7) 1・2は丸軋, 3～5が巡方, 6・7が鉤尾である。1は76次調査SD320の暗灰色砂礫層から出土したもので、下部を欠損するが、長径2.75cm, 短径2.1cm, 厚さ0.5cmを測る。表面と側面は平滑に研磨しており、鏡面状となっている。かがり孔は頂部に1ヶ所, 下部に1ヶ所穿孔するが、本来3ヶ所に存在したとみられる。また、穿孔は貫通しており、径1.5mmと非常に小さいものである。

2は187次調査のD3区黄灰色土出土で、左隅を欠損する。やや横長のもので、長径4.2cm, 短径2.75cm, 厚さ0.6cmで、残存重量14.4gを量る。表面と側面は平滑に研磨しているが、裏面は研磨が粗い。かがり孔は3ヶ所あり、双孔タイプのものである。石材はサヌカイト。

3は147次調査SX4060出土で、縦3.35cm, 横3.5cm, 厚さ0.7cm, 重さ20.5gを量る。表面と側面は平滑に研磨しており、鏡面状を呈するが、裏面の研磨は雑である。かがり孔は上方に1ヶ所, 下方に2ヶ所あり、双孔タイプのものである。石材は透明感のある緑色を呈し、白斑が入る硬質のものである。4は187次調査のE3区黄灰色土出土で、縦4.15cm, 横4.2cm, 厚さ0.6cm, 重さ28.0gを量るやや大振りのものである。かがり孔は双孔タイプで、側縁と平行に四隅に設けている。石材は火成岩で、表面の風化が著しい。

5は147次調査の茶褐色土出土で、大半を欠損する。残存部位は下半部で、切込みの存在から長方形スカシ孔を設けていたことが判る。厚さは0.5cmで、一辺4cm程になろう。かがり孔は1ヶ所の遺存であるが、双孔タイプを呈しよう。石材は蛇紋岩で、風化が著しい。

6は76次調査SD2011の腐植土出土で、位置的にはSD320との接続部位に当たる。基部付近の小破片であるが、かがり孔が側縁に対して斜めであること、基部よりも中央部が厚みを増していることから鉤尾とした。先端の厚さ0.65cm, 推定長7.5cm程になろう。表面及び側面は丁寧に研磨しており、鏡面状を呈する。石材は緑色を帯びた白玉である。なお、大宰府史跡における白玉製の鉤尾としては、観世音寺僧坊跡に出土例がある。

7は90次調査SD2340の上層にあたる茶褐色土から出土した。先端部の破片で、残存長3.1cm, 幅3.5cm, 厚さ0.55cmを測る。頭部は丸く納め、表面及び側面は丁寧に研磨している。かがり孔は先端部に1ヶ所遺存するが、双孔タイプのものである。石材は濃緑色を呈する蛇紋岩で、風化により表面が白色化している。

鍔 帯 (8) 8は187次調査SK4573下層出土の銅製巡方で、1/2弱の残存であり、一辺2.7cm, 厚さ0.2cmを測る。裏面には帯と留金具を固定するための突起が鋳出されているが、先端は欠損している。また、表面は錆化が進行しており、遺存状態は悪い。なお、前回は鋳留と報告していたが、X線CTスキャナによる分析の結果、留鋳ではなく鋳出と判明したので、訂正しておく。

2) ガラス製品 (Fig.37, PL.51)

ガラス製品 (9) 9は気泡を多く含む緑色を帯びたガラス製品で、なで肩の小壺形をなす。26mm×19mm, 厚さ1.1～2.8mmの小破片でSK4573出土である。

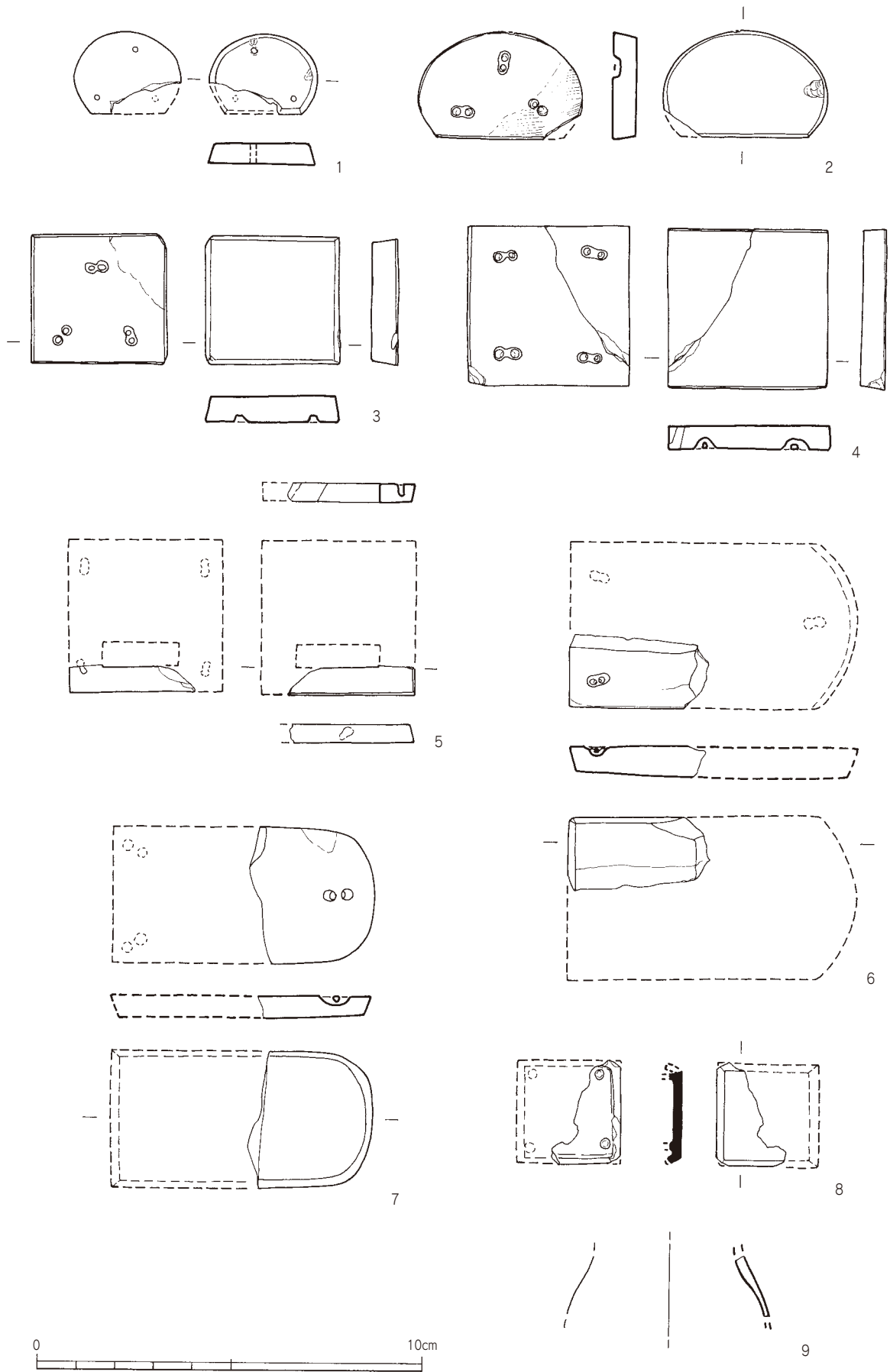


Fig.37 腰帯・ガラス製品実測図 (2/3)

(3) 生産関連遺物

1) 製塩土器 (Fig.38 ~ 43, PL.52 ~ 54, Tab. 5)

形態分類

製塩土器は形態により大きく3類に大別し、内面の調整等により細分した。

- I 類：鹹水煎熬用の甕形土器で、タタキ成形による。所謂玄界灘式製塩土器と呼ばれるもので、口径28cm前後の大型品をA類、口径18cm以下のものをB類とした。
- II 類：円筒形を呈する丸底の型作りによる焼塩土器で、「六連式土器」と称されるもの。器面調整は外面が指オサエで、内面調整の違いによりa～f・z類に細分した。
 - a：内面調整がナデ・工具によるナデ・指オサエによるもの。
 - b：内面に布目痕を留めるが、縦15本×横14本／5mmと非常に細かいもの（極細布目）。
 - c：布目痕が縦6～8本×横8本／5mmと割合細かいもの（細布目）。
 - d：布目痕が縦4本×横5本／5mmと粗いもの（粗布目）。
 - e：貝殻腹縁による条痕を留めるもの。
 - f：口縁部内面の下位に粘土の隆起帯を有するもの。
 - z：布目痕を留めるものの、磨滅によりb～d類に分類できないもの。
- III 類：逆円錐形を呈する型作りによる焼塩土器で、底部から直線的に開く形態のものをA類、体部中位で一端屈曲した後、口縁部が内湾気味に開くものをB類とした。
 - a～e・z：上記に同じ。

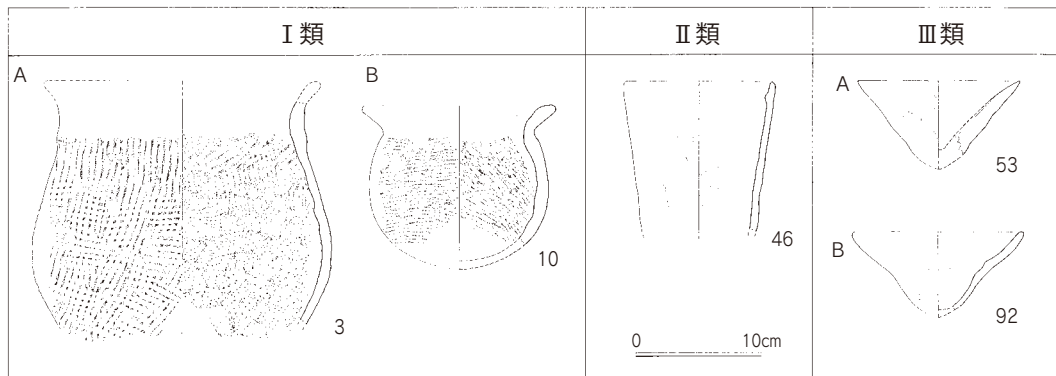


Fig.38 製塩土器分類図 (1/6)

概要

不丁地区官衙からは、破片を含めた総数1,398点もの製塩土器が出土しているが、その内訳は鹹水煎熬用の甕形土器（玄界灘式製塩土器：I類）151点・10.8%、型作りによる円筒形の土器（六連式土器：II類）697点・49.9%、同じく逆円錐形の土器（III類）549点・39.3%である。遺構の上では、SD320（159点）、SD2015（130点）、SD2340（133点）が主立ったものであるが、129次調査の整地層SX3838からも244点が出土している。ただ、製塩土器自体は、内容物（塩）を取り出す際に細かく割っており、明らかに同一個体と認定できないものは別個体としてカウントしているため、1,398点と言う数字は実数より多い可能性を否めない。

製塩土器の掲載に当たっては、紙数の都合上、比較的残存状態が良好で、形態分類を網羅するように112点抽出し、そのうち105点を掲載した。なお、Tab. 5の製塩土器出土遺構一覧表は、遺構・土層からどの様な形態の製塩土器が何点出土しているかを示したものである。

以下、形態分類ごとに説明を加える。

I A類 (1～7) 1～7は大型の土師器甕で、1・2が口縁部から胴部上位、3は頸部から胴下半部、4・6は胴部上位、5は胴下半部、7は底部の破片である。外面は擬格子目タタキで、内面は平行当て具或いは円弧当て具を特徴とする玄界灘式製塩土器で、胎土に石英・長石等の粒子を多く含む。2・3は頸部の締まりが悪く、3は下膨れの寸胴を呈する。1の口縁部は鉤形に外反する。口径は1が28.0cm、2は27.2cmに復原した。なお、4を除き外面には煤が付着しており、3は煤の付着が特に著しい。1～3はSD320出土で、1が中層、2は灰色砂粘、3は下層の出土で、4はSK4574、5はSK4573、6はSK4059、7はSD2419の出土である。

I B類 (8～15) 8～15は小型の土師器甕で、8・9・11～13が口縁部から肩部、10は口縁部から胴下半部、14は肩部、15は胴部の破片である。外面平行タタキ、内面弧状当て具による玄界灘式製塩土器で、A類同様、胎土に石英・長石等の粒子を多く含む。8・9の口縁部は緩やかに外反し、10は頸部に締まりを見せる。11・12の口縁部は「く」字形に屈曲し、13は口縁端部が内湾する。口径は8が16.0cm、10が15.4cm、11が16.4cm、12が16.6cm、13は18.0cmに復原した。14を除き、外面には煤が付着しており、8・9は煤の付着が顕著である。8はSD320中層、9はSD2010、10はSD2015、11は84次調査黒色粘質土、12は84次灰褐土、13～15はSX2480から出土した。

II 類 (16～51) II類は比較的出土量が多く、不丁地区官衙出土製塩土器のほぼ半数を占める。先細りの円筒形を呈し、口縁部はヘラで斜めに切り落としている。器壁は割合厚く、1cm前後を測る。外面は何れも指オサエ・ナデにより、工具による面取り風のナデを施すものもみられる(29・38)。胎土には砂粒を多く含み、器面はざらついている。

16～19は内面調整がナデによるa類で、16は口縁部から胴部中位、17・18は底部、19は口縁部の破片である。16は二次焼成により黒化している。口径は16が11.2cm、19が12.8cmに復原した。16～18がSK2007、19はSX3838の出土である。

20は内面の布目痕が非常に細かいb類で、使用した布は恐らく絹かと思われる。口径は9.5cmに復原した。SX3838の出土である。

21～32は布目痕が割合細かなc類で、21～24が口縁部、25～29・31・32が胴部、30が底部の破片である。23の口唇部は内側に小さく突出し、24は断面三角形を呈する。29の外面は二次焼成により赤変し、灰色物質が付着している。21がSD2015、22は85次茶褐土、23はSK2344B、24は147次茶褐土、25は187次黒色土、26・27はSB4560柱掘方、28はSD3825、29はSD320最下層、30はSD320腐植土D、31はSD4570A、32はSD4571から出土した。

33～45は布目痕が粗いd類で、33～36が口縁部、37～42が胴部、43～45が底部の破片である。口縁部は斜めに切り落としているため、端部が尖っている。口径は33が12.9cm、34は10.2cm、35は10.0cmに復原した。43・44の底部は肉厚の尖底で、45は平底をなす。33がSD2015、34はSD2340上層、35は17次第1整地凹み、36・40はSD2419、37はSD320最下層、38は17次第1整地層、39は147次整地層、41はSB4560柱掘方、42は187次S-5上層、



Fig.39 製塩土器実測図① (1/3)

43はSD3825, 44は147次茶褐土下層, 45は187次S-64から出土した。なお, d類はII類中最も出土点数が多く, 243点数えた。

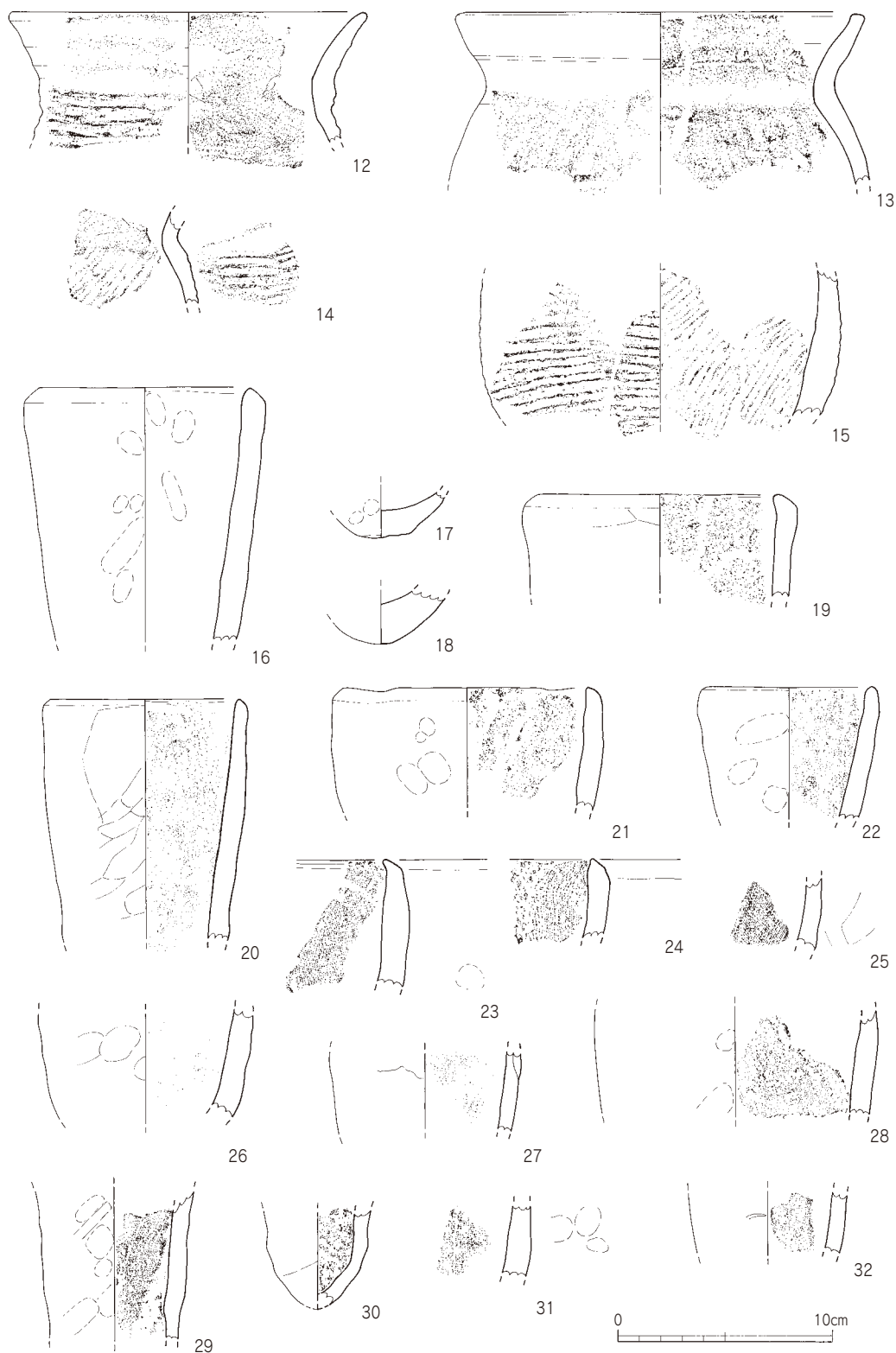


Fig.40 製塩土器実測図② (1/3)

46～48は口縁部内面の下位に粘土の隆起帯を有するf類で、隆起は何れも三角突帯状を呈し、48の隆起はシャープである。内面調整は46・47がナデで、48には粗い布目痕（縦5本×横5本／5mm）がつく。壁厚は5mm前後とII類の中では薄い作りで、口径は46・47が12.0cm、48は12.1cmに復原した。46が14次補足床土、47は85次暗褐色土、48は129次黒褐色土から出土している。

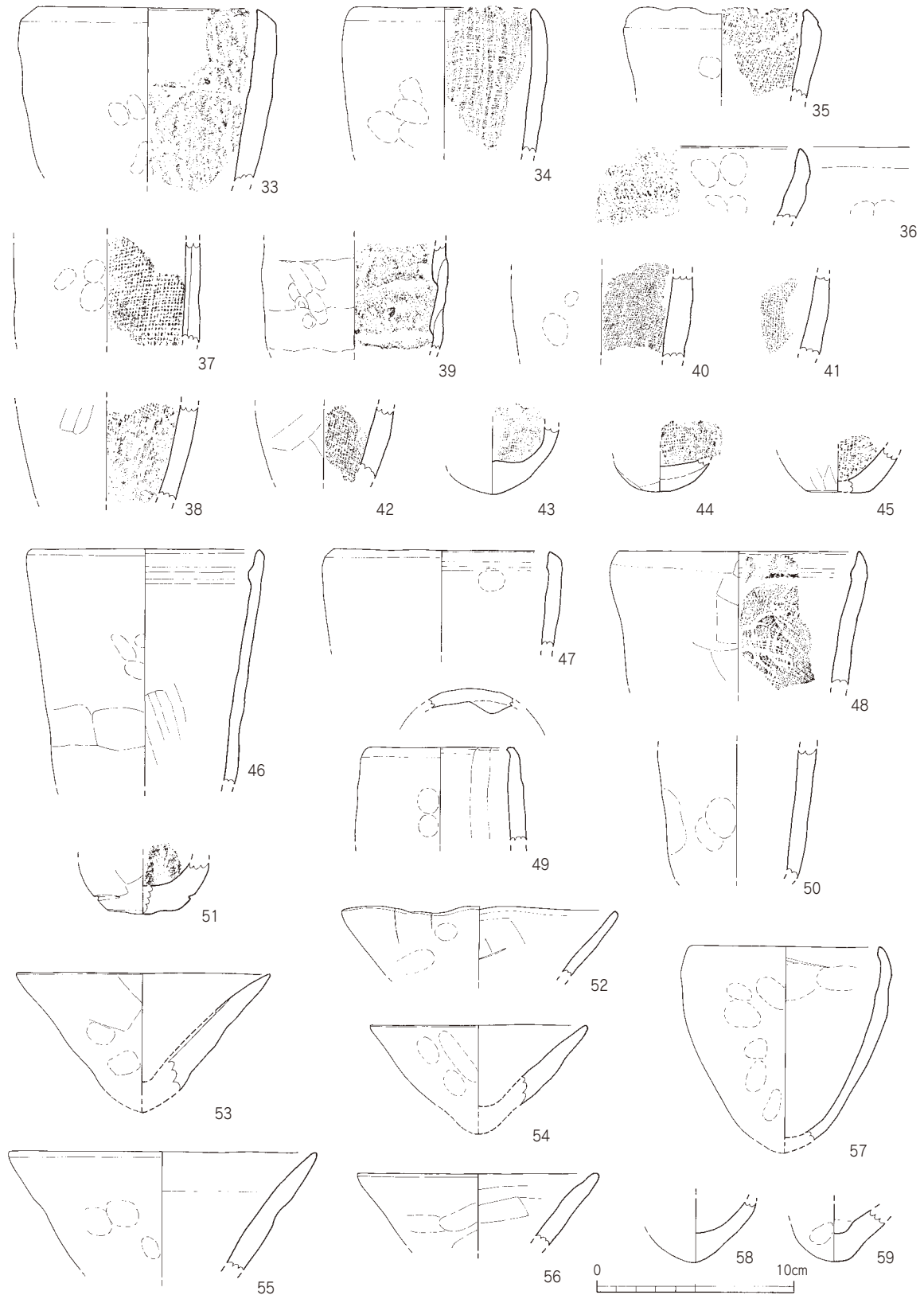


Fig.41 製塩土器実測図③ (1/3)

49～51は布目痕の分類ができないZ類で、49が口縁部、50は胴下半部、51が底部の破片である。49の口縁端部は内側に小さく突出する。また、内面には縦方向に粘土の隆起帯がみられ、

製作時の補修痕かと思われる。口径は7.4cmに復原した。50の外面は二次加熱により一部白色化している。49が85次暗褐土、50は同じく茶褐土、51はSD4569の出土である。

Ⅲ A類 (52～76) A類は尖底の底部から口縁部が直線的に開く形態で、胎土には砂粒を多く含み、器面がざらつく。色調は暗褐色を基調とする。

52～62は内面調整がナデによる a 類で、52・55・56は口縁部、58・59・62は底部破片で、53・54・57は底部を欠き、60・61は口縁端部を欠く。53・55の口唇部はシャープで、口径は53が12.8cm、55は15.6cmに復原した。52・54・56は口唇部を丸く納め、口径は52が14.0cm、54は11.0cm、56は12.2cmに復原した。なお、52・56は工具によるナデを施している。52・53は二次加熱を受け、52の外面は青く変色している。57の口縁部は内湾しているが、一応 a 類とした。復原口径9.4cmで、器高は10.5cm程になろう。外面には煤が付着している。

60は口縁端部を欠くが、復原口径9.0cm、推定器高6cm程の小振りなものである。61の内面は工具ナデにより、内底面にはハケ目を留める。52・57・62がSD2340、53は147次茶褐土、54は85次茶褐土、55はSD2015、58はSD2015 B、56はSD4570 B、59は147次茶褐土下層、60はSK2479、61はSD320下層の出土である。

63・64は内面の布目痕が非常に細かい b 類で、何れも胴部破片である。64は側縁を打ち欠いた後、左側を擦っている。63は147次茶褐土下層、64はSX3838から出土した。

65～67は布目痕が割合細かな c 類で、66・67が口縁部、65は胴部破片である。66の四周は擦っており、円盤状をなす。製塩土器の転用品であろう。口径は13.6cmに復原した。65・66がSX3838、67はSD2015 Aの出土である。

製塩土器の
転用品

68～72は布目痕が粗い d 類で、68・69は底部を欠き、70・71は口縁部及び底部を欠く。72は胴部の小破片である。68・69の口唇部は丸く納めており、口径は68が13.8cm、69は14.6cmを測る。70の布目痕には横方向の溝が平行に11条程走っており、木型の痕跡（年輪か）を留めている。72は須恵質焼成の製塩土器で、内外面とも灰白色を呈し、硬質である。また、布目痕が粗く、糸自体も太いものを使用している。68・69は85次暗褐土、70はSK4576、71は129次 Z、72はSD4570 Aから出土した。

木型の痕跡
須恵質焼成
の製塩土器

73～75は貝殻腹縁による条痕を留める e 類で、73・74が口縁部、75は底部破片である。73の下半部側縁は擦っており、転用品とみられる。75は内底面に条痕を留める。73がSD2340中層、74・75はSX3830の出土である。

76は布目痕の分類ができない Z 類の口縁部破片で、シャープな口唇部を呈する。SD4566から出土している。

Ⅲ B類 (77～105) B類は体部中位で一端屈曲した後、口縁部が内湾気味に開く形態のもので、胎土は割に精良である。色調は橙褐色ないしは赤橙色を基調とする。なお、A・B類両者で不丁地区官衙出土製塩土器の約4割を占める。

77～101は内面調整がナデ或いは工具ナデによる a 類で、何れも底部を欠損する。80・88は口縁端部を肥厚させるもので、78・79・98の端部はシャープである。口径が15cmを超えるもの(82・87・96)、14cm前後のもの(77・79・84・88・92・93・95)、12cm前後のもの(78・80・81・83・85・90・94)、11cm以下のもの(98～101)がある。

79の外面は二次加熱により赤変し、84・85・88には煤が付着している。77はSB3824、

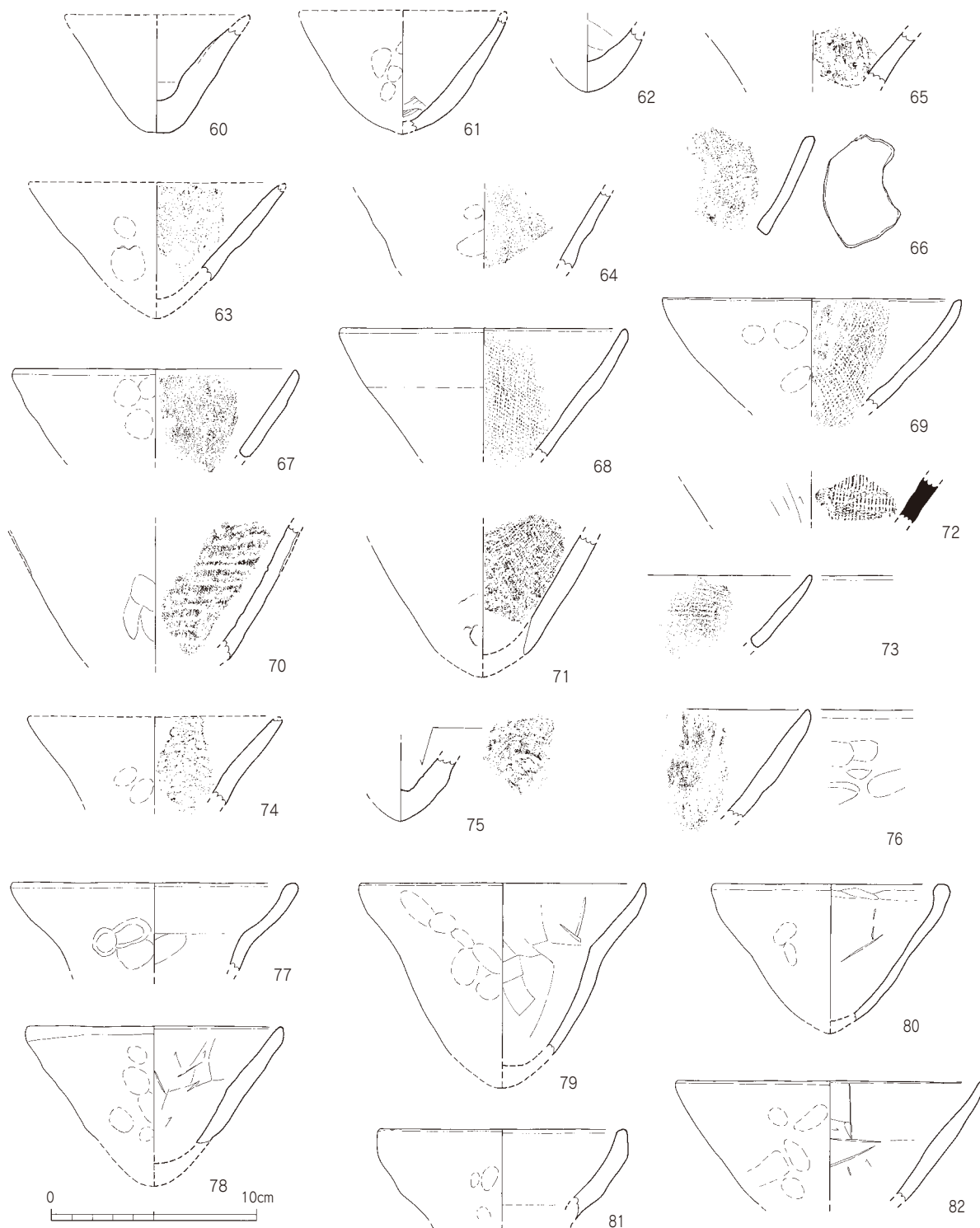


Fig.42 製塩土器実測図④ (1/3)

78～80はSD320最下層，81はSD320腐植土D，82はSD2007，83はSD2015，84～86はSD2340，87はSD3835，88～95はSX3838，96はSX3830，97は14次灰砂，98・101は85次暗褐色土，99は17次第1層，100は85次茶褐色土から出土した。

102・103は布目痕が粗いd類で，102が口縁部，103は胴部破片である。102は口縁部上面に平坦面を有する。口径は10.0cmに復原した。102がSD3825，103は85次暗褐色土の出土。

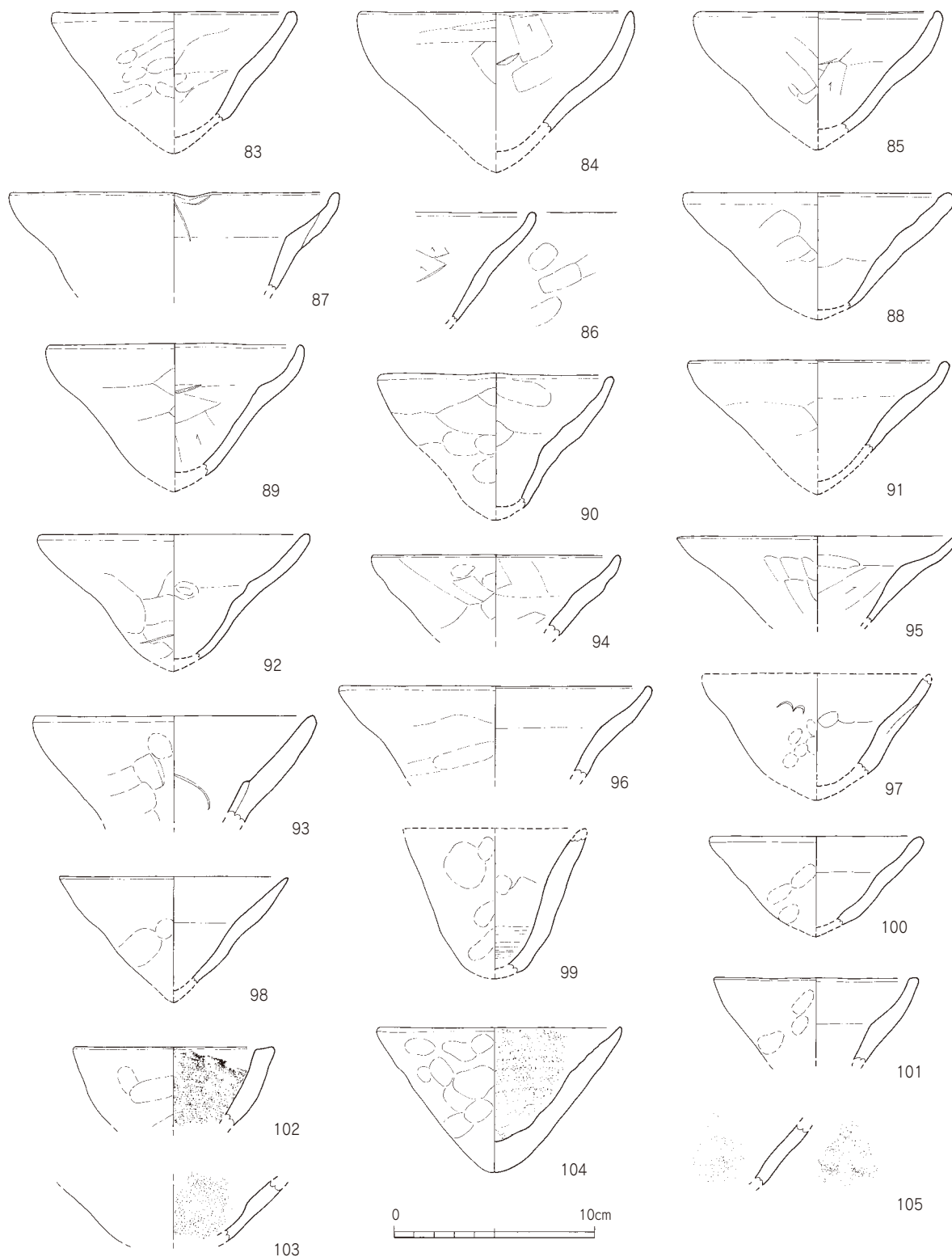


Fig.43 製塩土器実測図⑤ (1/3)

104・105は貝殻腹縁による条痕を留めるe類で、105は胴部の小片。104の口縁部は僅かに外反し、口唇部はシャープである。器高7.2cm、口径12.2cmを測る。また、外面には煤が付着している。104はSX3838、105はSD2340から出土した。

次数	地区	遺構・土層	形態分類																								Fig.	登録No.				
			I		II								III A						III B													
			A	B	a	b	c	d	e	f	z	a	b	c	d	e	z	a	b	c	d	e	z									
		SD4569(S88 下層)						1							1															41-51	98	
		SD4570(S10 上層)						1																								
		SD4570A(S10A 下層)																									1				42-72	112
		SD4570A(S10A 下層)		2				1																							40-31	99
		SD4570A(S10A 西端)		1				2																								
		SD4570B(S10B 上層)		1																							1				41-56	100
		SD4570B(S10B 下層)																														
		SD4571(S26)																														
A1		SK4573(S2 黒色土)						1																							40-32	101
B1		SK4573(S2 黒色土)		2				2																								
		SK4573(S2 黒色土)																														
		SK4573(S2)																														
B2		SK4574(S3 黒色土)																														
C2		SK4574(S3 黒色土)		2				2	1																							
		SK4574(S3)						2																								
		SK4574(S3 下層)		1																												
		SK4574(S3 底部)																														
		SK4574(S3 底面)		1																												
		SK4574(S3 中央柱穴)																														
		SK4576(S59)						1	3																							
		SK4579(S69)																														
		(S5 上層)																														
		(S31)																														
		(S39)																														
		(S52)																														
		(S53)																														
		(S64)																														
		(S67)																														
B2		整地層																														
B4		暗褐色土																														
B5		暗褐色土																														
C2		暗褐色土																														
C3		暗褐色土																														
C4		暗褐色土																														
A3		黄灰色土																														
B2		黄灰色土																														
B3		黄灰色土																														
C4		黄灰色土																														
C5		黄灰色土																														
D3		黄灰色土																														
E3		黄灰色土																														
F2		黄灰色土																														
H2		黄灰色土																														
C3		整地層上面																														
C3		整地層																														
A2		検出面																														
B1		検出面																														
B2		検出面																														
C1		床土																														
C2		床土																														
192次		SD4610(S1)																														
		計	135	16	115	38	82	243	2	6	210	119	5	14	31	5	70	280	1	2	2	5	17									

2) 漆附着土器 (Fig.44 ~ 51, PL.55 ~ 57, Tab. 6)

分類

漆附着土器は、器種・器形及び漆の附着状況により分類することが可能で、先ず用途により I ~ IV 類に大別し、須恵器・土師器等の種別により A ~ H 類に細分したが、E 類の緑釉陶器、G 類の白磁及び H 類の瓦質土器は現段階では確認されていないものの一応設定した。例えば、I Aa 類は須恵器蓋のパレット、II Ab 類は須恵器平瓶の運搬具ということになる。

I 類：漆器及び漆塗り製品を製作する際のパレットとして用いたもの。

A：須恵器… a：蓋，b：坏（無高台），c：坏（有高台）・椀，d：皿，e：盤，f：鉢

B：土師器… a：坏，b：椀，c：蓋，d：皿

C：黒色土器… a：A 類椀，b：B 類椀

D：灰釉陶器… a：皿

E：緑釉陶器

F：青磁… a：碗

G：白磁

H：瓦質土器

II 類：漆の運搬容器として用いたもの。種別は I 類に同じ。

A：須恵器… a：長頸壺，b：平瓶，c：甕，d：壺

D：灰釉陶器… a：壺

III 類：土器の表面に漆を厚く塗布したもので、漆器模倣品とみられる。塗布の状況により

1 ~ 3 類に細分している。種別は I 類に同じ。

1 - 内外面とも塗布したもの。

2 - 内面のみ塗布したもの。

3 - 外面のみ塗布したもの。

IV 類：所謂漆継ぎ土器で、接着剤としての漆膜が器面或いは断面にみられるもの。

A：須恵器… a：長頸壺

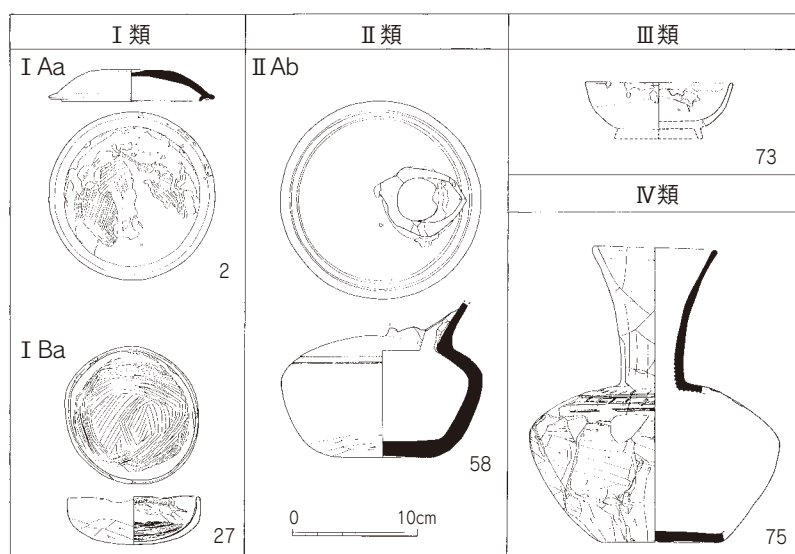


Fig.44 漆附着土器分類図 (1/6)

上記の如く、不丁地区官衙跡で確認された漆付着土器を分類したが、将来的に器種の増加に伴い細分される可能性を有する。また、漆そのものは固化しているため膜として残存するが、土器から剥落しやすい。しかし、漆が付着していたのであれば、その部分が黒っぽく変色しており、漆が剥落していても漆付着土器であったかの判別は可能である。

概要

漆付着土器は、土器の内外面及び断面に黒色、焦げ茶色或いは赤褐色の漆が付着している土器のことで、不丁地区官衙跡においては総数485点が確認された。遺構的にはSD320が126点(26.0%)、SD2340が56点(11.5%)、SD2015が28点(5.8%)、SX2480が17点(3.5%)の出土で、全体の約5割を占める。他の遺構としては、SD2419(6点)、SD4566(6点)、SX2344B(5点)、SX4065(8点)から出土している。

以下、説明を加えるが、詳細については漆付着土器一覧表(Tab. 6)を参照されたい。

I 類 (1～38)

パレットとしては、I Ba類とした土師器杯(53点・10.9%)が最も多用され、2番目がI Ac類の須恵器有高台の杯(33点・6.8%)、3番目がI Aa類の須恵器蓋(24点・4.9%)、次いでI Ab類の須恵器杯(16点・3.3%)、I Bb類の土師器椀(7点・1.4%)で、特徴としては掌に収まる大きさの土器を用いている点にある。

1～11は須恵器蓋の内面に数層の漆が付着しているAa類で、1～4は口縁部内側に身受けのかえりを有するもので、1・4のかえりは小さく、2・3のかえりはシャープである。4は摘みを欠損するが、1・2は元々天井部に摘みは付していない。漆は内面に付着しているが、2・3の漆には工具で漆を掻き取った際の工具痕－ハケ目(7条/cm)がみられる。また、3の外面上には漆で固着した布が遺存している。口径は1が12.0cm、2は13.3cmで、3は13.6cm、4は12.9cmに復原した。1はSX2416、2はSX2480、3は84次Z、4はSD320の下層砂から出土した。

6～11は口縁端部が鳥嘴状を呈するもので、8・9は内窪みの摘み、10は擬宝珠形の摘みを貼付する。6・7の漆は単層で、6は褐色、7は焦げ茶色を呈する。8は器高3.1cm、口径14.2cmを測り、内面の漆にはハケ目がみられる。10は器高3.3cm、口径16.4cmを測り、漆にはへら状工具痕を留める。6・7・11はSD320出土で、6が下層砂、7は中層粗砂、11は灰色砂礫で、8・9はSD2015A、10はSD2340の下層砂から出土した。

5は口縁部を欠損するためかえりを有するのかわ、鳥嘴状を呈するのかわ不明。内外面には墨痕がみられ、内面の漆は墨痕の上に乗っかっており、転用碗を更にパレットにしたとみられる。また、漆には粗い工具痕がつく。SX2480の出土である。

12～15は須恵器杯の内面に数層の漆が付着しているAb類である。12は受部を有し、口縁部は外反気味に立ち上がる。漆は黒色を呈し、内底面から口唇部にかけて付着している。土器が6世紀末頃の古い形態であることから、後世二次的に利用されたものであろう。13・14は口縁部が斜め上方に緩やかに外反する形態で、ともに口唇部は丸く納める。13の漆は殆ど剥落しているが、14の漆にはハケ目がみられる。口径は13が10.8cm、14は12.8cmに復原した。15は口径に比して器高が3.1cmと低く、皿的な形態をなすが一応杯としておく。口径は15.6cm、底径は12.4cmに復原した。12は84次灰褐土、13は同じく茶灰土、14はSX2480、15はSD320の中層粗砂から出土した。



Fig.45 漆附着土器実測図① (1/3)

16～22は須恵器有高台杯の内面に数層の漆が付着しているAc類で、16・18・19は口縁部を欠損し、17の高台は剥離している。17・20は器高に比して口径が大きい浅めの器形で、21・22は深めのものである。高台は16・18・19・21が逆台形を呈し、20・22は沓形を呈する。16～19の漆にはハケ目がみられる。器高は20が4.0cm、21は4.7cm、22は5.8cmで、復

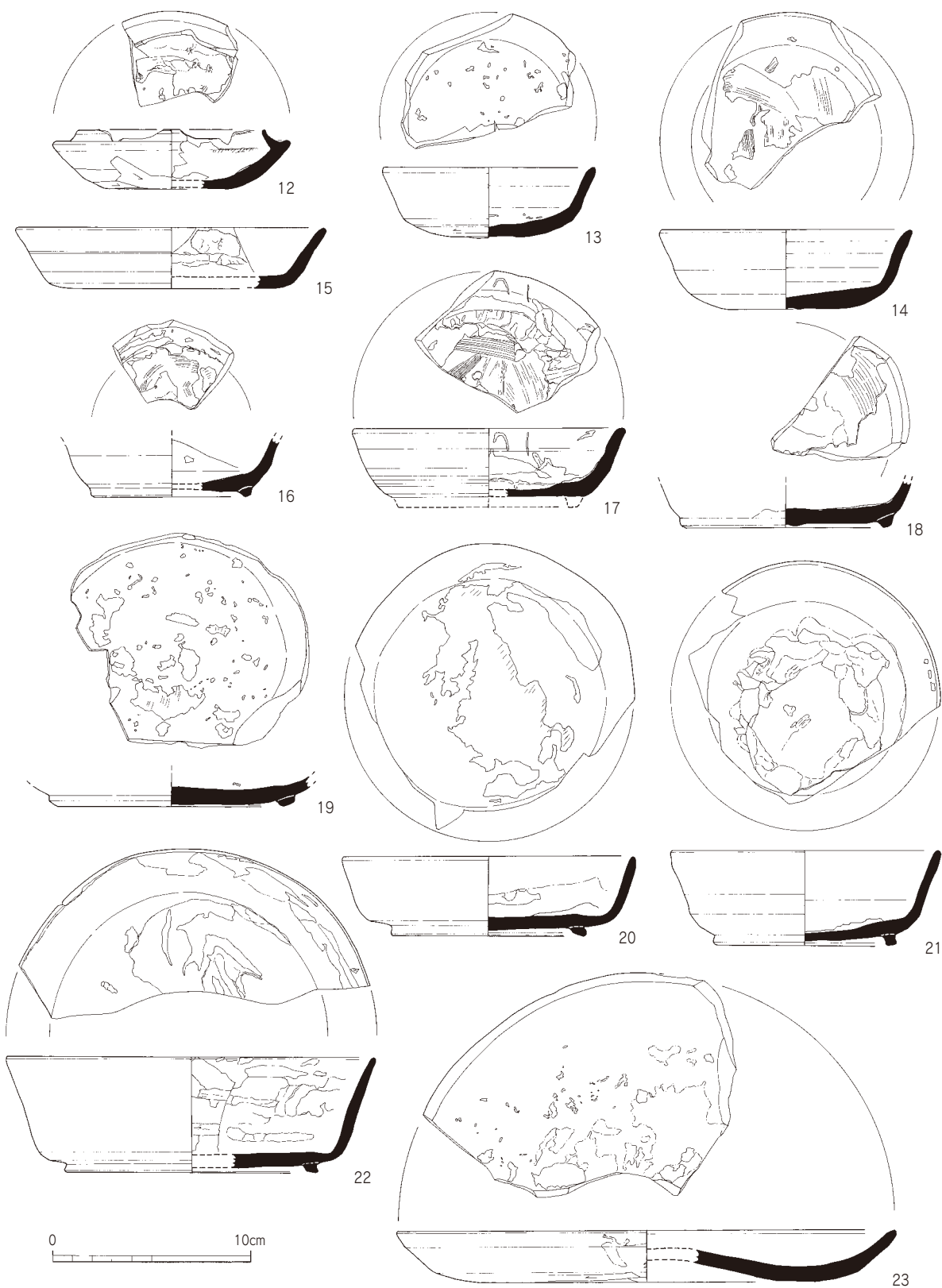


Fig.46 漆附着土器実測図② (1/3)

原口径は20が14.8cm, 21は13.6cm, 22は18.6cmで, 復原高台径は20が9.8cm, 21が9.2cm, 22は12.8cmを測る。16・17はSD320の下層砂出土で, 18は84次茶褐色土, 19は85次暗褐色土,

20はSX4065, 21・22はSD2340出土で, 21が中層黒色土, 22は中層灰粘から出土した。

23は須恵器盤の内面に漆が付着したAe類で, 焼け歪みが著しいが, 口径は25.2cmに復原した。口唇部上面に平坦面を有する。漆は黒色を呈し, 内面から外面にかけて付着する。SD320の最下層砂の出土である。

24～27は土師器坏の内面に漆が付着したBa類である。24の口縁部は平底の底部から内湾気味に立ち上がり, 口縁部外面を強くなでるため, 口唇部はシャープな作りとなっている。内面に厚く漆が付着しており, 幅広の工具による掻き取りがみられる。器高3.4cm, 復原口径16.0cm, 復原底径8.0cmを測る。25・26とも口縁部を欠くが, 25は内湾気味で, 26は外反する。また, 25は底部にも若干漆が付着している。

27は丸底の底部から口縁部が直立し, 口唇部は丸く納める。内面には赤褐色を呈する漆が数層みられ, 螺旋状にハケ目(6条/cm)が残る。また, 口縁部付近の漆は皺状になっており, 固化した所に新たな漆を継ぎ足して使用したことが窺える。器高3.8cm, 口径10.4cmを測る。24はSD2015A, 25は84次灰褐土, 26はSK4573, 27はSK2893から出土した。

漆を継ぎ足して使用

28～32は土師器碗の内面に漆が付着したBb類で, 28は口縁部を欠き, 30は口縁部破片, 29・31・32は口縁部を欠く。28は須恵器模倣の碗で, 胴部は内外面ともヘラミガキによる。高台は断面方形状を呈し, 底部の端寄りに貼付している。29は底部端に断面三角形の高台を貼付したもので, 高台径は7.9cmに復原した。内面には茶褐色の漆が付着しており, ハケ目がみられる。30は口縁部小片であるが, 黒色の漆が内面及び断面の一部に付着している。31は底部の小破片で, 黒色の漆が遺存するが, 漆が剥離した部分は緑褐色に変色している。32の高台は八字形を呈し, 細身で高いものである。漆は焦げ茶色を呈し, ハケ状の工具痕(単位幅1.5cm程)がみられる。28・29・31・32はSD320出土で, 28・32が下層砂, 29は中層黒粘, 31は上層粘質土で, 30はSK2344Bの出土である。

33は土師器蓋の内面に漆が付着したBc類である。須恵器模倣の蓋で, 口縁部内面に突出度の弱いかえりを有する。摘みを付していたかは不明。漆は単層で, 黒色を呈する。器高2.8cmで, 口径は13.0cmに復原した。SD320下層砂の出土である。

34は土師器皿の内面に漆が付着したBd類である。1/7程の破片で, 器高2.5cm, 復原口径19.6cm, 復原底径14.8cmを測る。漆は単層で, 赤褐色を呈する。147次暗褐土から出土した。

35は黒色土器A類碗の内面に漆が付着したCa類の口縁部破片で, 口唇部は丸く納める。漆は単層で, 茶褐色を呈する。復原口径13.0cmで, SD320黒色砂の出土である。

36は黒色土器B類碗の内面に漆が付着したCb類で, 口縁部と底部中央を欠く。高台は八字形を呈する低いもので, 高台径は7.7cmに復原した。漆は数層みられ茶褐色を呈するが, 大半が剥落している。SD320中層黒粘の出土である。

37は灰釉陶器皿の内面に漆が付着したDa類で, 底部の小破片である。高台は低く, 畳付は丸く納める。内面には黒色の漆が付着しており, また高台内には墨痕がみられる。復原高台径8.2cmで, SD320の腐植土から出土した。灰釉陶器に漆が付着したものは点数的に極めて少なく, 1点が確認されたのみである。

38は青磁碗の内面に漆が付着したFa類で, II-1類に分類される越州窯系青磁碗の高台付近の破片である。高台は断面方形を呈し, 高台径は8.0cmに復原した。畳付は釉剥ぎ。漆は数層

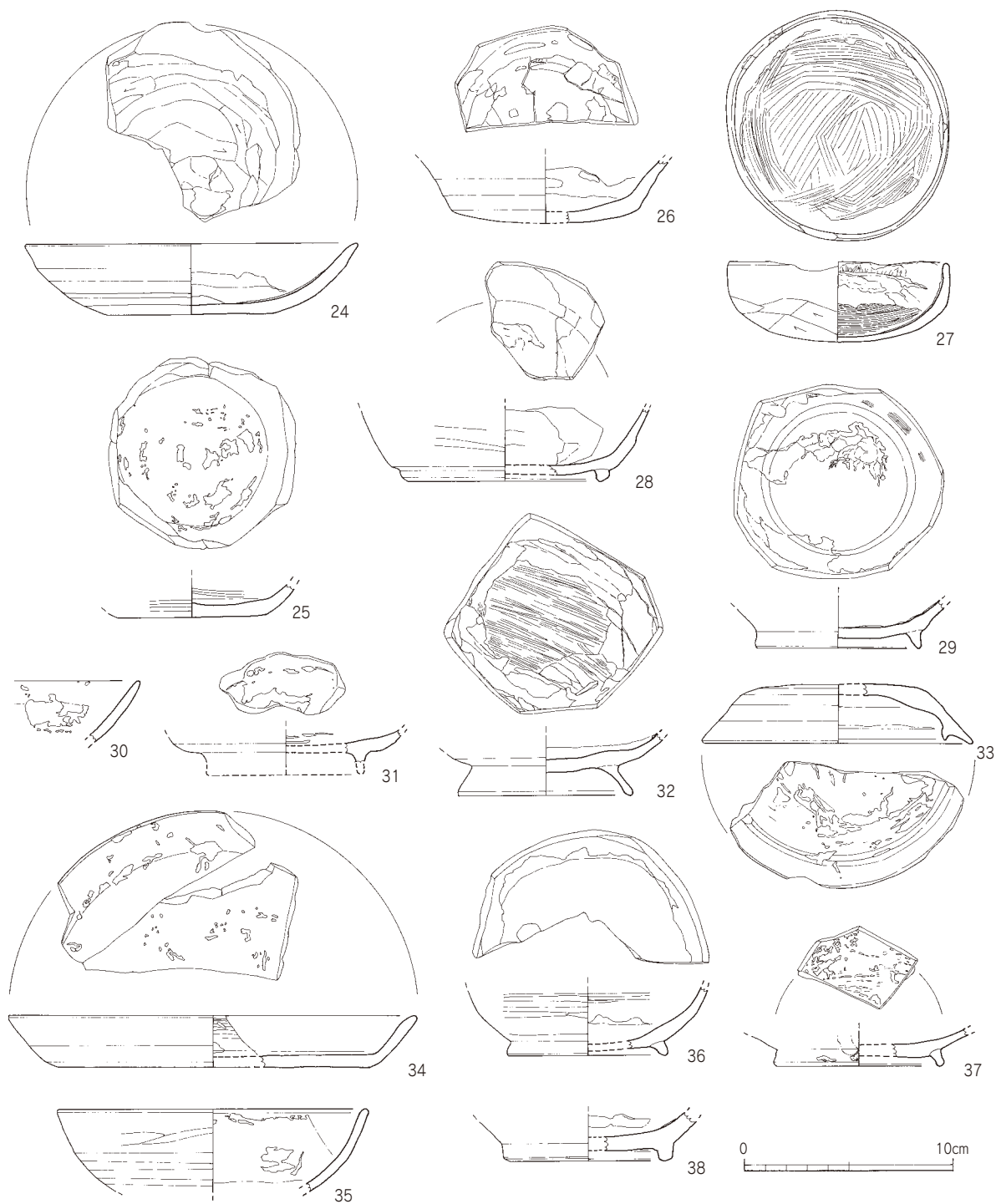


Fig.47 漆付着土器実測図③ (1/3)

みられ、黒褐色を呈する。SD320黒色砂から出土した。灰釉陶器同様、青磁碗をパレットに利用したものも極めて少なく、1点が確認された程度である。

II 類 (39～71)

運搬具としては、IIAb類とした須恵器平瓶 (259点・53.4%) が群を抜いて多く、次いでIIAc類の須恵器甕 (29点・6.0%)、3番目にIIAa類の須恵器長頸壺 (20点・4.1%)、IIAd類の須恵器壺 (20点・4.1%) の順であり、平瓶は形態・容量的に漆を運搬するのに、容器

としても使用するのにも最も適していたと言えよう。また、II類は打ち欠かれたものが多く、内面にこびりついた漆を取り出すために故意に割ったものと考えられる。

39～47は須恵器長頸壺の内面に漆が付着したAa類で、39が口頸部、40が胴部、41が頸部から肩部にかけて、42・43が胴下半部で、44は口縁部を欠損する。45～47は脚台部付近の破片である。39の口縁部はラップ状に開き、端部を折り返している。漆は口縁部外面に僅かに遺存する程度である。SD320の腐植土Dから出土した。

40は胴部の破片で、なで肩をなす。漆は内面から肩部及び底部断面にも付着しており、打ち欠いたことが知られる。41の肩部は丸く、胴部は球状を呈するか。口縁部及び胴部は打ち欠かれており、内外面及び断面にも焦げ茶色の漆が厚く付着している。42は肩部が丸く、胴径が平瓶に比して小さいことから長頸壺としたが、カキ目を施していることから平瓶の可能性がある。肩部は打ち欠かれており、内面から断面にかけて焦げ茶色の漆が厚く付着している。43は平底の底部で、底径6.0cmを測る。胴部は打ち欠いており、漆は内面から断面にかけてと外面の一部にもみられる。40はSD320の中層腐植土及び粗砂出土品と下層砂出土品が接合したもので、41は84次茶灰土、42はSD2419、43はSX2480の出土である。

44は算盤玉形の胴部にハ字形に開く脚部を貼付した長頸壺で、口縁部は打ち欠いている。胴部中位に稜を有し、その上下にへら沈線を巡らす。脚端部は外方に突出し、内端で接地する。底部と脚部との接合部位には杏仁形のスカシ孔を2箇所穿孔している。漆は焦げ茶色を呈し、内面から断面にかけて付着している。SD2340の腐植土と灰褐土出土品が接合した。

45～47は底部から脚台部の破片で、脚径は45が9.8cm、47が11.0cmを測る。45の脚部は高めで、脚端部は外方に大きく突出するが、47の脚部は低く、端部は丸みを帯びる。45・46は底部側縁を打ち欠いており、45は内面から外面にかけて、46は内面から断面にかけて黒色の漆が付着している。47は内面のみ焦げ茶色の漆が付着している。45はSD320中層黒粘、46は84次Z、47はSD3835の出土である。

48～51は須恵器壺の内面に漆が付着したAd類で、48が底部、49が頸部、50が口縁部から肩部、51が胴部の破片である。48の高台は断面台形を呈し、内端部で接地する。高台径は9.8cmを測る。底部側縁の一部は打ち欠いており、焦げ茶色の漆が内面及び外面に付着している。49は1/6ほどの破片であるが、頸部径は16.6cmに復原した。口縁部内面と頸部外面に焦げ茶色の漆がみられる。50の口縁部は大きく外反し、端部は外方に突出する。また、胴部上位に不明瞭ながら稜を有する。漆は内面に付着しており、暗褐色を呈する。口径は10.6cmに復原した。51は肩部と胴部との境にシャープな稜を有する。漆は内面のみが付着しており、焦げ茶色を呈する。48は85次茶褐土、49・51はSD320出土で、49が下層腐植土、51は中層粗砂出土であり、50はSX2480から出土した。

52～68は須恵器平瓶の内面に漆が付着したAb類である。52は口縁部の小片であるが、傾きが不明であるため口唇部が水平な状態で実測した。漆は黒色を呈し、内面のみが付着している。口径は6.2cmに復原した。52はSD320灰白砂礫の出土。53は口縁部から頸部にかけての破片で、口頸部中位にへら沈線を巡らす。漆は内面から断面にかけて付着しているが、乾燥により筒状となっている。口径は5.0cmを測る。SD2340の中層灰粘の出土である。

54は口縁部から胴部中位の破片で、口頸部には5条程のへら沈線を巡らす。漆は内面から外面にかけて付着しており、断面にもみられる。SK2344Bから出土した。55は頸部付近の破片で、

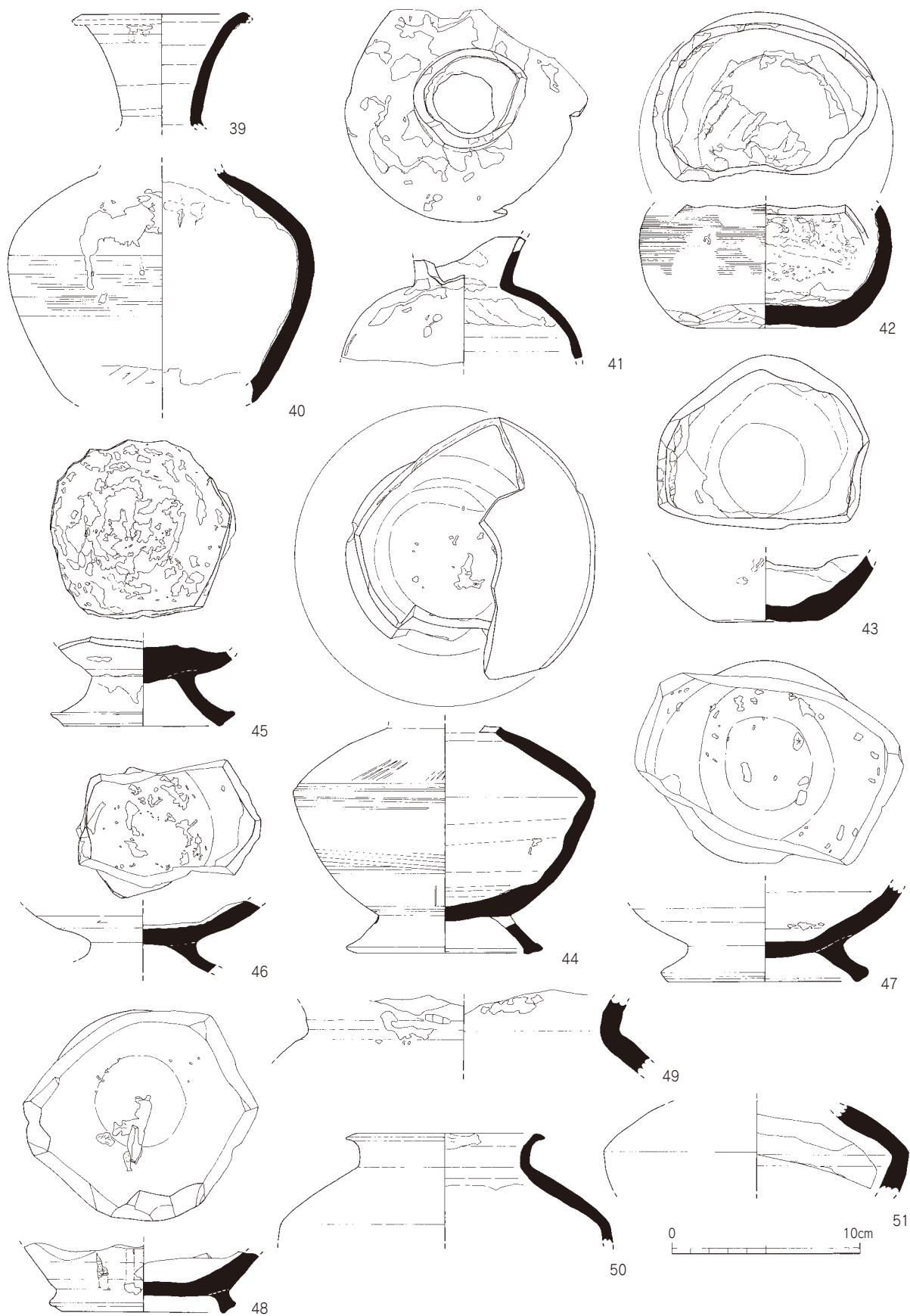


Fig.48 漆付着土器実測図④ (1/3)

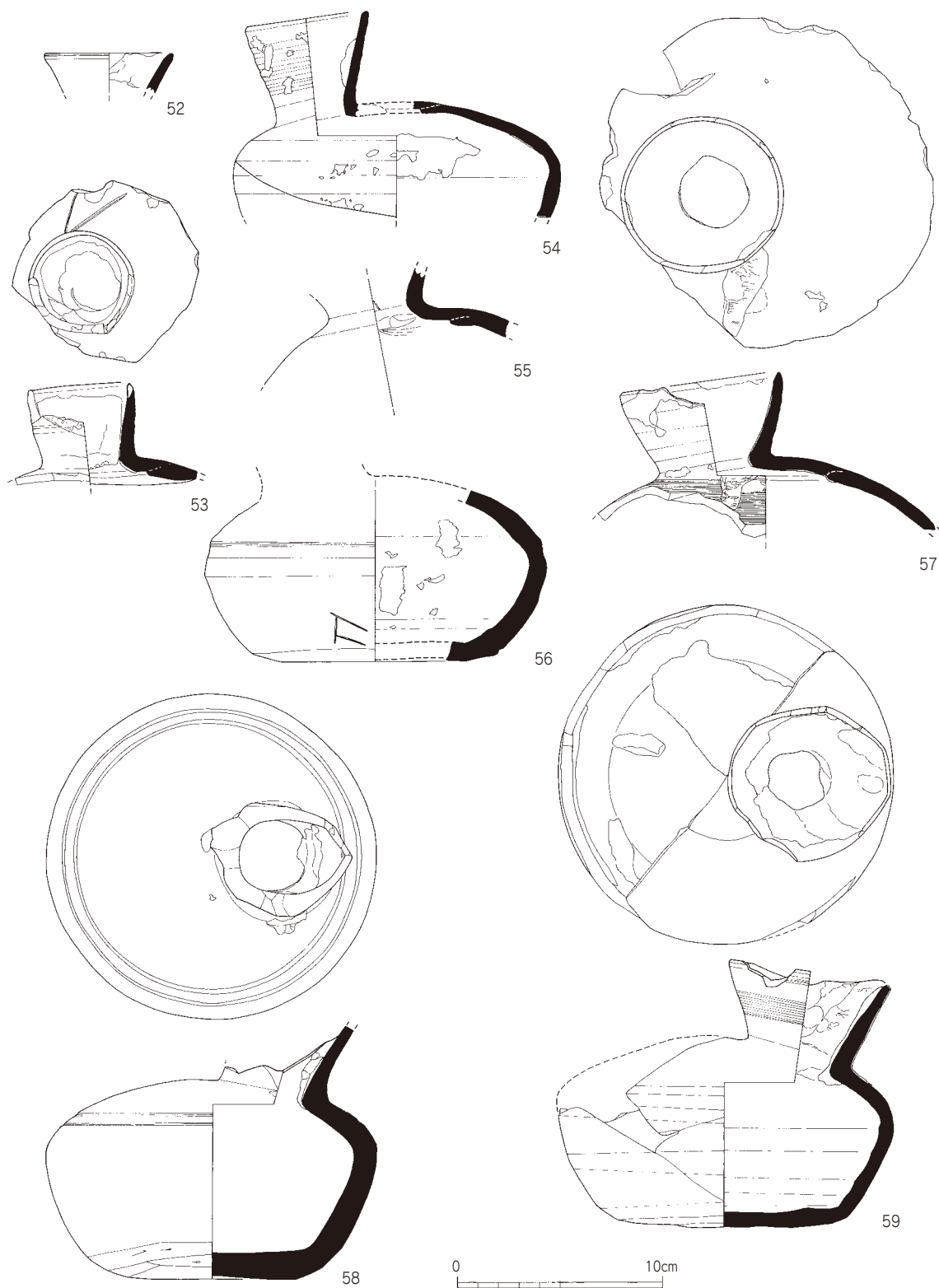


Fig.49 漆附着土器実測図⑤ (1/3)

黒色の漆が内面から断面にかけて付着している。SD320中層黒粘の出土である。

56は胴部の破片で、口頸部及び底部中央を欠く。胴部中位には工具による幅広の沈線状のナデを施す。漆は茶褐色を呈し、内面及び断面にも付着している。また、底部下位に「II」形の

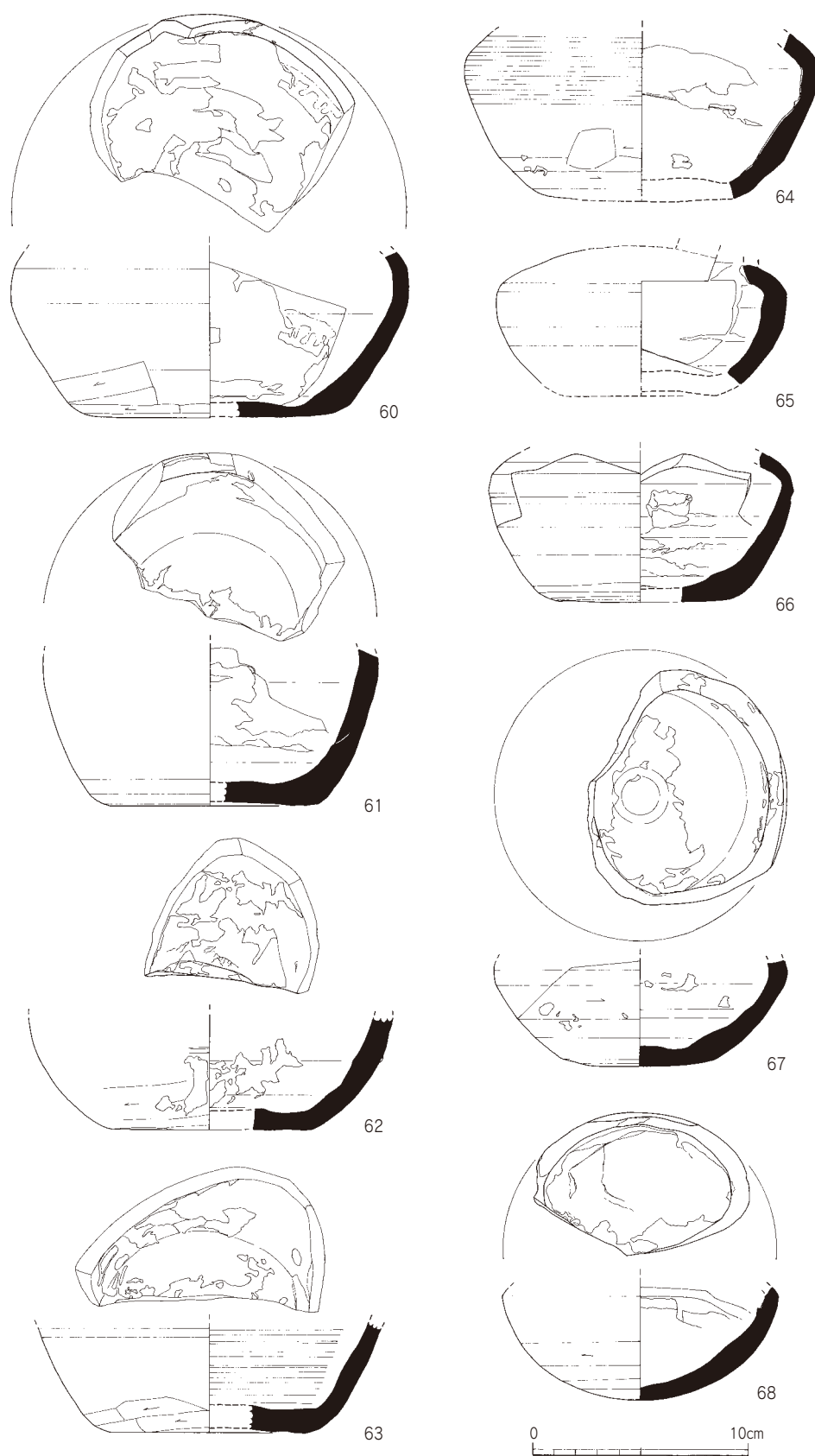


Fig.50 漆付着土器実測図⑥ (1/3)

ヘラ記号を付している。SX2480から出土した。

57は口縁部から肩部にかけての破片で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁部はヨコナデで、肩部にはカキ目（14～15条/cm）を施す。胴部は打ち欠いており、漆は内面から外面にかけてと断面にも付着する。口径は8.0cmを測る。SD2419の出土である。

58・59は比較的残存状態の良好な資料で、58は口縁部の1/2を欠き、59は肩部を1/2程欠く。58は胴部上位に2条のヘラ沈線を巡らし、底部付近は手持ちヘラケズリによる。漆は内面から口縁部外面にかけて付着する。59の口縁部はラッパ状に開き、中位にカキ目を施す。胴部はナデで、底部はヘラケズリを施す。漆は焦げ茶色を呈し、内面から口縁部外面にかけて付着するが、口頸部付近には特に厚く付着している。ともにSX2480から出土した。59は器高13.0cm、口径8.0cm、底径10.4cmを測る。

60～68は胴部から底部にかけての破片で、60・67が丸底気味の平底で、61・62・66が平底、63が上げ底、68は尖底状をなす。外面調整は何れも胴下半部回転ヘラケズリ若しくは手持ちヘラケズリによるが、61の胴部は工具による面取風のナデにより、64の胴部上位は粗いカキ目（5条/cm）を施す。63を除き肩部上位を打ち欠いており、断面にも漆が付着している。なお、61の胎土中には鉄片（鉄鏝の茎？）が混入している。60～64・66・68はSD320の出土で、60が下層砂、61は腐植土D、62は中層黒粘、63・66は中層粗砂、64・68は下層砂出土であり、65は84次灰褐土B、67はSD320灰白砂礫から出土した。

胎土に鉄片
混入

69・70は須恵器甕の内面に漆が付着したAc類で、何れも胴部の小破片である。70の側縁は打ち欠いている。ともに外面格子目タタキ、内面円弧当て具による。また、69は細いヘラ沈線を1条巡らせている。両者とも内面に漆が付着しているが、69は焦げ茶色、70は黒色を呈する。69がSD320の腐植土D、70がSD2340の黒灰粘から出土した。

71は灰釉陶器の内面に漆が付着したDa類で、胴部の破片であるが恐らく壺になろう。外面はヘラケズリの後ナデで、内面は回転ナデによる。胎土は灰青色を呈し、釉薬は緑灰色に発色する。漆は内面に付着しており、焦げ茶色を呈する。SD320中層黒粘の出土である。

Ⅲ 類 (72～74)

漆器模倣品としたⅢ類は点数的には極めて少なく、A1・A2・F1類が1点ずつ、B1・C1類を2点確認したにすぎない。72は土師器碗の内外面に漆を厚く塗布したB1類で、口縁部の小破片である。漆は黒色を呈し、平滑で厚みがあり、口唇部外面まで丁寧に塗布している。また、外面にも付着していることから本来、内外面に塗布していたものと思われる。SD2015Aから出土した。73は黒色土器A類碗の内外面に漆を厚く塗布したC1類で、口縁端部は小さく反する。内外面に黒色の漆を丁寧に塗布している。口径は11.8cmに復原した。SD320黒色砂の出土である。74は越州窯系青磁碗で、底部を欠く。輪花を施している。内外面に黒褐色の漆を厚く塗布しているためF1類の漆器模倣土器とした。SD320腐植土の出土である。

漆器模倣品

Ⅳ 類 (75)

75は長頸壺で、器高23.7cm、口径10.0cm、底径9.3cmを測る。口縁部は大きく開き、端部を丸く納める。肩部にはカキ目の後にヘラ先によるキザミ目を2段に施している。胴下半部は手持ちヘラケズリによる。土器の割れに沿って幅5mm程の漆が塗布されているが、漆は内面及び断面にはみられないことから、ひび割れが生じたために補修したものと考えられる。

漆による補
修

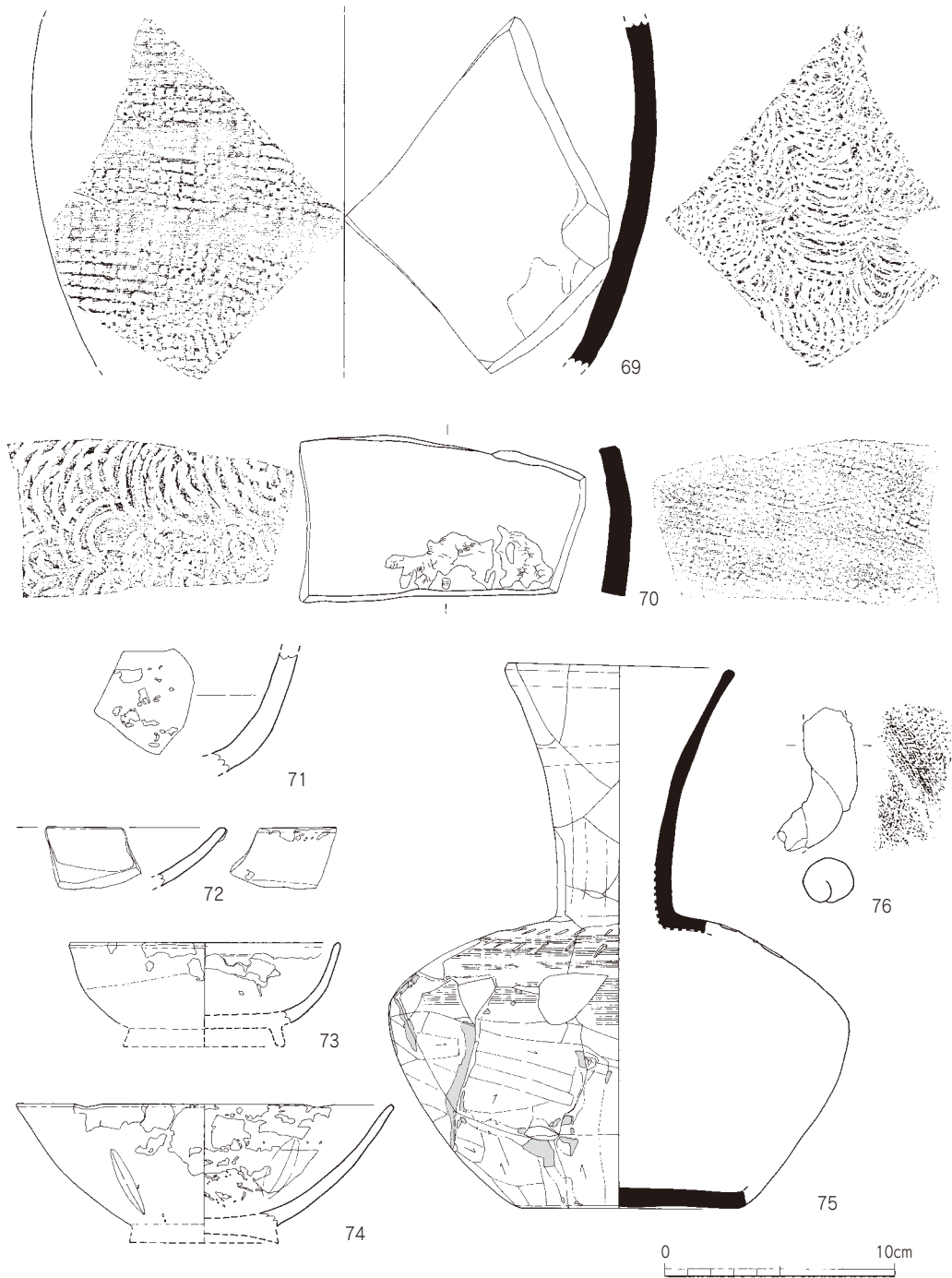


Fig.51 漆附着土器実測図⑦ (1/3)

76は土器ではないが、ここで紹介しておく。漆が付着した布で、紐状に捻っている。漆を濾すのに使用した布とみられる。飛鳥池遺跡に類例がある。^(註)

漆を濾すための布

註
飛鳥池遺跡 2000 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館図録第36冊

Tab.6 漆附着土器一覽表

No.	次数	地区	遺構・土層	種別	器種	部位	付着部位	漆色調	漆膜	分類	時期	備考	Fig.
1		N1	SD320(暗褐色)	須恵器	平瓶	底部	内底~断面	黒色	単層	IIAb	7c後半		
2		N1-2	SD320(暗褐色)	"	平瓶	胴部	内面	褐色	単層	IIAb	"		
3		N2	SD320(暗褐色)	"	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	"	一部遺存	
4		S1	SD320(暗褐色)	"	甕	胴部	内面	褐色	単層	IIAc	"		
5		S3	SD320(暗褐色)	"	平瓶	胴部	内面	暗色	単層	IIAb	"	一部遺存	
6		S3	SD320(暗褐色)	"	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	"		
7		S3	SD320(暗褐色)	黒A	椀?	胴下半	内外面	黒色	単層	III C1?			
8		N2-1	SD320(灰黒粘土)	須恵器	皿	底部	内底面	黒色	数層	III A2	8c		
9		S3	SDD320(暗灰粘土)	"	甕	胴部	内面	黒色	数層	IIAc	"		
10		S6	SD320(腐植土)	青磁	碗	口~胴	内外面	黒色	単層	III F1		越州・輪花	51-74
11		N1	SD320(灰砂)	須恵器	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	7c後半		
12		N2-5	SD320(灰砂)	"	壺	頸部	内面~断面	褐色	単層	IIAa	"		
13		N2-2	SD320(灰白砂)	"	平瓶	胴部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	"		
14		N2-2	SD320(灰白砂)	"	平瓶	底部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	"	一部遺存	
15		N2-3	SD320(灰白砂)	"	平瓶	底部	内面	黒色	単層	IIAb	"		
16		N2-2	SD320(茶色粗砂)	"	壺	底部	内面~断面	黒色	単層	IIAa	8c		
17		N2-3	SD320(茶色粗砂)	"	平瓶	肩部	断面	暗褐色	単層	IIAb	7c後半		
18	14次	S7	SD320(黒色砂)	黒A	椀	口縁部	内外面	黒色	数層	III C1			51-73
19		S7	SD320(黒色砂)	"	椀	口縁部	内面	褐色	単層	I Ca			47-35
20		S6	SD320(黒色砂)	青磁	碗	底部	内面	黒色	数層	I Fa			47-38
21		S3	SD320(褐色粗砂)	須恵器	平瓶	口縁部	内面~断面	褐色	単層	IIAb	7c後半	一部遺存	
22		S3	SD320(褐色粗砂)	"	平瓶	胴部	内面	黒色	数層	IIAb	"		
23		S3	SD320(褐色粗砂)	"	平瓶	胴部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	"		
24		S3	SD320(褐色粗砂)	"	平瓶	底部	内底面	褐色	単層	IIAb	"		
25		S2	SD320(灰白砂礫)	"	平瓶	胴部	内面	褐色	単層	IIAb	"		
26		S2	SD320(灰白砂礫)	"	平瓶	胴部	S4	灰白砂礫	単層	IIAb	"		
27		S4	SD320(灰白砂礫)	"	平瓶?	口縁部	内面	黒色	単層	IIAb?	"		49-52
28		S4	SD320(灰白砂礫)	"	平瓶	肩部	内面	褐色	単層	IIAb	"		
29		S4	SD320(灰白砂礫)	"	平瓶	胴部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	"		
30		S4	SD320(灰白砂礫)	"	平瓶	胴部	内面~断面	黒・褐色	単層	IIAb	"		
31		S4	SD320(灰白砂礫)	"	平瓶	胴~底部	内面~断面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		50-67
32		S4	SD320(灰白砂礫)	"	平瓶	底部	内底面	暗褐色	単層	IIAb	"	一部遺存	
33		S4	SD320(灰白砂礫)	"	甕	胴部	内面	暗褐色	単層	IIAc	7c後半?	一部遺存	
34		S4	SD320(灰白砂礫)	"	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	7c後半		
35		S6	排土	"	坏?	胴部	内面	褐色	数層	I Ab?	8c?		
36		YD66	SD320上層(S10粘質土)	土師器	椀	底部	内面	黒色	数層	I Bb	9c前半		47-31
37		YL66	SD320上層(S10砂)	須恵器	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	7c後半	漆剝離痕跡	
38		YJ65	SD320上層(S10砂2)	"	壺	胴部	内面	黒色	単層	IIAd	"		
39		YD65	SD320中層(S10黒粘)	"	壺	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAd	8c前半?		
40		YE67	SD320中層(S10黒粘)	"	平瓶	底部	内底面	黒色	単層	IIAb	7c後半		
41		YF67	SD320中層(S10黒粘)	土師器	椀	底部	内底面	茶褐色	数層	I Bb	10c		47-29
42		YF67	SD320中層(S10黒粘)	黒B	椀	胴~底部	内面	赤褐色	数層	I Cb	10c		47-36
43		YG66	SD320中層(S10黒粘)	須恵器	平瓶	胴~底部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	7c後半	漆剝離痕跡	
44		YG68	SD320中層(S10黒粘)	"	平瓶	胴部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	"	一部遺存	
45		YG68	SD320中層(S10黒粘)	"	壺	胴下半部	内面~断面	黒色	単層	IIAd	"	一部遺存	
46		YG68	SD320中層(S10黒粘)	"	長頸壺	底~脚台	内外面	黒色	単層	IIAa	"		48-45
47		YI66	SD320中層(S10黒粘)	灰釉	壺	胴部	内面	焦げ茶色	単層	II Da			51-71
48		YI67	SD320中層(S10黒粘)	須恵器	壺	底部	内面	黒色	単層	IIAa	7c後半		
49		YI67	SD320中層(S10黒粘)	"	平瓶	胴~底部	内外面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		50-62
50		YL68	SD320中層(S10黒粘)	"	平瓶	頸~肩部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	"		
51		Z	SD320中層(S10黒粘)	"	甕	胴部	内面	黒色	単層	IIAc	"		
52	14次 補足	YD64	SD320中層(S10粗砂)	"	平瓶	肩部	内外面・断面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		
53		YE65	SD320中層(S10粗砂)	"	平瓶	肩~底部	内外面・断面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		50-66
54		YE66	SD320中層(S10粗砂)	"	平瓶	胴部	内外面・断面	黒色	単層	IIAb	"		
55		YE66	SD320中層(S10粗砂)	"	平瓶	胴部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	"		
56		YG65	SD320中層(S10粗砂)	"	壺	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAa	8c前半		48-51
57		YH65	SD320中層(S10粗砂)	"	坏蓋	口縁部	内面	焦げ茶色	単層	I Aa	"		45-7
58		YI66	SD320中層(S10粗砂)	"	平瓶	胴~底部	内面	暗褐色	単層	IIAb	7c後半		50-63
59		YL66	SD320中層(S10粗砂)	"	坏	口~底部	内面	黒色	数層	I Ab	"		46-15
60		YG66	SD320中層(S10腐植土)	"	平瓶?	肩部	内外面・断面	焦げ茶色	単層	IIAb?	7c後半?		
61		YG66	SD320中層(S10腐植土)	"	平瓶	胴部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	7c後半		
62		YG67	SD320中層(S10腐植土)	"	壺?	胴部	内面~断面	黒色	単層	IIAd?	8c?		
63		YI69	SD320中層(S10腐植土)	"	皿?	底部	内面	黒色	単層	I Ad?	8c		
64		YG65	SD320中層・下層	"	長頸壺	肩~胴部	内外面・断面	黒褐色	単層	IIAa	8c	YL65と接合	48-40
65		YD65	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	底部	内面~断面	焦げ茶色	単層	IIAb	7c後半		
66		YD65	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	口縁部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	"		
67		YD65	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	肩~胴部	内外面・断面	黒色	単層	IIAb	"		
68		YD65	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	肩~底部	内外面・断面	黒色	単層	IIAb	"		50-64
69		YD65	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	肩~底部	内面	黒色	単層	IIAb	"	一部遺存	
70		YD68	SD320下層(S10砂)	"	蓋	天井部	内天井面	焦げ茶色	単層	I Aa	"		

No.	次数	地区	遺構・土層	種別	器種	部位	付着部位	漆色調	漆膜	分類	時期	備考	Fig.	
71		YE65	SD320下層(S10砂)	須恵器	坏蓋	口~天井	内天井面	焦げ茶色	単層	I Aa	7c後半		45-4	
72		YE65	SD320下層(S10砂)	"	坏蓋	口~天井	内天井面	黒色	単層	I Aa	"		47-33	
73		YE65	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	底部	内面~断面	焦げ茶色	数層	IIAb	"		50-68	
74		YE65	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	胴部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	"	一部遺存		
75		YE66	SD320下層(S10砂)	"	坏蓋	口~天井	内天井面	褐色	単層	I Aa	"		45-6	
76		YE66	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	胴~底部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	"			
77		YE66	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	胴~底部	内面~断面	焦げ茶色	単層	IIAb	"			
78		YE66	SD320下層(S10砂)	"	平瓶?	胴部	内面	暗褐色	単層	IIAb?	7c後半?			
79		YE67	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	胴~底部	内面	黒色	単層	IIAb	7c後半		50-60	
80		YE67	SD320下層(S10砂)	"	甕	胴部	内面	黒色	単層	IIAc	8c			
81		YF65	SD320下層(S10砂)	"	甕	胴部	内面	黒色	単層	IIAc	7c後半	一部遺存		
82		YG64	SD320下層(S10砂)	"	坏	底部	内面	黒色	数層	I Ac	8c後半		46-16	
83		YG66	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	7c後半			
84		YH65	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"			
85		YH66	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"			
86		YI65	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	胴~底部	内面~断面	焦げ茶色	単層	IIAb	"			
87	14次 補足	YI65	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	胴下半	内面~断面	黒色	単層	IIAb	"			
88		YI65	SD320下層(S10砂)	"	平瓶?	胴部	内面~断面	暗褐色	単層	IIAb?	7c後半?			
89		YI66	SD320下層(S10砂)	土師器	坏	底部	内面	黒色	数層	I Bb	8c中		47-28	
90		YI66	SD320下層(S10砂)	"	椀	底部	内面	黒褐色	数層	I Bb	9c		47-32	
91		YI69	SD320下層(S10砂)	須恵器	平瓶	胴部	内面	褐色	単層	IIAb	7c後半	一部遺存		
92		YK66	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"			
93		YL65	SD320下層(S10砂)	"	坏	口~底部	内面	焦げ茶色	数層	I Ac	8c中		46-17	
94		YL65	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	胴部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	7c後半			
95		YL66	SD320下層(S10砂)	"	坏	底部	内面	褐色	単層	I Ac	8c中			
96		YL66	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	底部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	7c後半			
97	YL66	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	底部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	"				
98	YL66	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	胴部	内面	暗褐色	単層	IIAb	"				
99	YL67	SD320下層(S10砂)	"	平瓶	胴部	内面	暗褐色	単層	IIAb	"		漆剥離痕跡		
100	YI66	SD320下層(S10腐植土)	"	平瓶	肩部	内面~断面	黒褐色	単層	IIAb	"		YK66と接合		
101	YK66	SD320下層(S10腐植土)	"	平瓶	底部	内底面	褐色	単層	IIAb	"				
102	YK66	SD320下層(S10腐植土)	"	平瓶	胴~底部	内面~断面	褐色	単層	IIAb	"		一部遺存		
103	YC63	SX2507(落込II)	"	平瓶	胴部	内面	褐色	単層	IIAb	"				
104	YD63	SX2507(落込II)	"	平瓶	胴~底部	内面~断面	焦げ茶色	単層	IIAb	"				
105	NB64	SD320(S10灰白砂礫)	"	平瓶	肩部	内面~断面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		一部遺存		
106	NC64	SD320(S10灰砂礫)	"	坏蓋	口~天井	内天井面	黒色	単層	I Aa	8c前半		45-11		
107	ND65	SD320(S10灰砂礫)	"	平瓶	肩部	内面	暗褐色土	単層	IIAb	7c後半				
108	NG66	SD320(S10灰砂礫)	"	平瓶	底部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	"				
109	NI66	SD320(S10灰砂礫)	"	平瓶	胴部	内面	焦げ茶色	数層	IIAb	"				
110	NC66	SD320(S10暗灰砂礫)	"	平瓶	胴部	内外面	黒色	単層	IIAb	"				
111	NE66	SD320(S10腐植土)	灰釉	碗	底部	内外面	黒色	単層	I Da	10c		47-37		
112	NE67	SD320(S10腐植土)	須恵器	盤	底部	内外面	焦げ茶色	数層	I Ae	8c				
113	NI65	SD320(S10腐植土)	"	平瓶	胴部	内外面・断面	黒色	単層	IIAb	"				
114	NE65	SD320(S10腐植土)	土師器	椀	口縁部	内外面	焦げ茶色	単層	I Bb	10c				
115	NC65	SD320(S10腐植土D)	須恵器	平瓶	肩部	内外面・断面	黒色	単層	IIAb	7c後半				
116	ND67	SD320(S10腐植土D)	"	平瓶	肩部	内外面・断面	黒色	単層	IIAb	"		一部遺存		
117	NE65	SD320(S10腐植土D)	"	平瓶	底部	断面	黒色	単層	IIAb	"				
118	NE65	SD320(S10腐植土D)	"	甕	胴部	内面	黒色	単層	IIAc	"				
119	NE66	SD320(S10腐植土D)	"	平瓶	胴部	内外面・断面	黒色	単層	IIAb	"				
120	NF65	SD320(S10腐植土D)	"	平瓶	胴~底部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	"		50-61		
121	NF66	SD320(S10腐植土D)	"	平瓶	胴部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	"				
122	NG67	SD320(S10腐植土D)	"	平瓶	底部	内面	黒色	単層	IIAb	"				
123	NH65	SD320(S10腐植土D)	"	坏身	口縁部	内面	黒色	単層	I Ac	7c後半?				
124	NH65	SD320(S10腐植土D)	"	平瓶	胴部	内外面・断面	黒色	単層	IIAb	7c後半				
125	NH67	SD320(S10腐植土D)	"	平瓶	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"				
126	NH67	SD320(S10腐植土D)	"	平瓶	底部	内面	黒色	単層	IIAb	"				
127	NI65	SD320(S10腐植土D)	"	坏身	底部	内面	暗褐色土	単層	I Ac	8c中				
128	NI65	SD320(S10腐植土D)	"	長頸壺	口縁部	外面	黒色	単層	IIAa	8c前半		48-39		
129	NI65	SD320(S10腐植土D)	"	甕	胴部	内面	黒色	単層	IIAc	7c後半				
130	NI65	SD320(S10腐植土D)	"	甕	胴部	内面	黒色	単層	IIAc	"		51-69		
131	NI67	SD320(S10腐植土D)	"	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	"				
132	NZ66	SD320(S10腐植土D)	"	甕	胴部	内面	黒色	単層	IIAc	"				
133	NZ66	SD320(S10腐植土D)	"	甕	胴部	内面	黒色	単層	IIAc	"				
134	NC65	SD320(S10下層腐植土)	"	壺	頸部	内外面	黒色	単層	IIAd	8c		48-49		
135	NC66	SD320(S10下層腐植土)	"	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	7c後半				
136	NG66	SD320(S10下層腐植土)	"	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	"				
137	NH65	SD320(S10下層腐植土)	"	平瓶	底部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	"				
138	NH66	SD320(S10下層腐植土)	"	壺	胴部	内面	黒色	単層	IIAd	8c前半				
139	NI65	SD320(S10下層腐植土)	"	平瓶	底部	内面	黒色	単層	IIAb	7c後半				
140	NI65	SD320(S10下層腐植土)	"	平瓶	底部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"				

No.	次数	地区	遺構・土層	種別	器種	部位	付着部位	漆色調	漆膜	分類	時期	備考	Fig.
141		NH65	SD320(S10 下層腐植土)	須恵器	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	7c後半		
142		NC67	SD320(S10 最下砂)	"	盤	口～底部	内面	黒色	単層	IAe	"		46-23
143		ND65	SD320(S10 最下砂)	"	平瓶	胴部	内面～断面	黒色	単層	IIAb	"		
144		ND65	SD320(S10 最下砂)	"	甕	胴部	内面～断面	黒色	単層	IIAc	8c		
145		ND66	SD320(S10 最下砂)	"	平瓶	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	7c後半		
146		NE65	SD320(S10 最下砂)	"	平瓶	胴部	内面～断面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		
147		NG66	SD320(S10 最下砂)	"	平瓶	底部	内面～断面	黒色	単層	IIAb	"		
148		NH65	SD320(S10 最下砂)	"	坏蓋	天井部	内外面・断面	黒色	単層	IAa	"		
149		NH65	SD320(S10 最下砂)	"	平瓶	肩部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"	一部遺存	
150		NH65	SD320(S10 最下砂)	"	平瓶	肩～底部	内面	黒色	単層	IIAb	"		
151		NH65	SD320(S10 最下砂)	"	壺	底部	内面	黒色	単層	IIAd	"		
152		NH66	SD320(S10 最下砂)	"	平瓶	肩部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		
153		NH66	SD320(S10 最下砂)	"	平瓶	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		
154		NI65	SD320(S10 最下砂)	"	平瓶	底部	内面～断面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		
155		NI65	SD320(S10 最下砂)	"	平瓶	頸部	内外面・断面	黒色	単層	IIAb	"		
156		NI67	SD320(S10 最下砂)	"	坏身	口縁部	内面	黒色	単層	IAc	8c中		
157		NI67	SD320(S10 最下砂)	"	壺	胴部	内面	黒色	単層	IIAd	8c前半		
158		65ライン	SD320(S10 最下砂)	"	甕	胴部	内面～断面	暗褐色	単層	IIAc	8c		
159		NC65	SD320 下部溝 (S13)	"	平瓶	胴部	内面～断面	黒褐色	単層	IIAb	7c後半		
160		NC65	SD320 下部溝 (S13)	"	平瓶	胴部	内面	黒褐色	単層	IIAb	"		
161		ND65	SD320 下部溝 (S13)	"	平瓶	肩部	内面～断面	黒褐色	単層	IIAb	"		
162		ND65	SD320 下部溝 (S13)	"	平瓶	底部	内面	暗褐色	単層	IIAb	"		
163		NE65	SD320 下部溝 (S13)	"	平瓶	胴部	内面～断面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		
164		NC63	SD2010(S1 黄灰土)	"	坏	底部	内面	黒色	数層	IAb	8c前半		
165		ND63	SD2010(S1 黒灰土)	"	平瓶	胴部	内面	暗褐色	単層	IIAb	7c後半	一部遺存	
166		NG63	SD2010(S1 最下砂)	"	平瓶	胴部	内外面	暗褐色	単層	IIAb	"		
167		NH59	SD2015A(S5)	土師器	坏	口～底部	内面	焦げ茶色	数層	I Ba	9c前半		47-24
168		NH59	SD2015A(S5)	"	坏	底部	内面	焦げ茶色	単層	I Ba	8c後半		
169		NH59	SD2015A(S5)	"	坏	底部	内面	焦げ茶色	数層	I Ba	"		
170		NH59	SD2015A(S5)	"	坏	底部	内面	焦げ茶色	単層	I Ba	"		
171		NH59	SD2015A(S5)	"	坏	口縁部	内面	暗褐色	単層	I Ba	"		
172	76次	NH59	SD2015A(S5 灰砂)	須恵器	平瓶	胴部	内面	暗褐色	単層	IIAb	7c後半		
173		NH60	SD2015A(S5)	"	坏蓋	口～天井	内面	黒色	単層	IAa	8c前半		45-9
174		NH60	SD2015A(S5)	"	坏蓋	口～天井	内面	黒色	単層	IAa	"	NH62 と接合	45-8
175		NH60	SD2015A(S5 灰粘)	土師器	坏	底部	内面	焦げ茶色	単層	I Ba	8c後半		
176		NH60	SD2015A(S5)	"	坏	底部	内面	黒色	数層	I Ba	"		
177		NH60	SD2015A(S5)	"	坏	底部	内面	黒色	単層	I Ba	"		
178		NH60	SD2015A(S5)	"	坏	口縁部	内外面	黒色	数層	III B1	"		51-72
179		NH60	SD2015A(S5)	"	坏	底部	内面	黒色	単層	I Ba	"		
180		NH61	SD2015A(S5)	須恵器	坏身	口縁部	内面	黒色	単層	IAc	8c中		
181		NH61	SD2015A(S5)	"	平瓶	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	7c後半		
182		NH61	SD2015A(S5)	"	平瓶	胴部	断面	黒色	単層	IIAb	"		
183		NH61	SD2015A(S5)	"	鉢?	胴部	内外面・断面	黒色	単層	IAF?	8c		
184		NH61	SD2015A(S5)	土師器	坏	口縁部	内面	焦げ茶色	単層	I Ba	8c後半		
185		NH61	SD2015A(S5)	"	坏	底部	内面	暗茶褐色	数層	I Ba	"		
186		NH61	SD2015A(S5)	"	坏	胴部	内面	黒色	単層	I Ba	"		
187		NH62	SD2015A(S5 灰砂)	須恵器	坏蓋	天井部	内面	焦げ茶色	単層	IAa	8c前半		
188		NH62	SD2015A(S5 灰砂)	土師器	坏	底部	内外面	黒色	数層	I Ba	8c後半		
189		NH62	SD2015A(S5 灰砂)	"	盤	底部	内外面	焦げ茶色	単層	IAe	8c中		
190		NH62	SD2015A(S5)	"	坏	底部	内面	黒色	単層	I Ba	8c後半		
191		NH62	SD2015A(S5)	"	坏	底部	内面	黒色	数層	I Ba	"		
192		NH62	SD2015A(S5)	"	坏	底部	内面	赤褐色	単層	I Ba	"		
193		NH62	SD2015A(S5)	"	坏	底部	内面	黒色	単層	I Ba	"		
194		NF59	暗灰土	"	坏	胴部	内面	焦げ茶色	数層	I Ba	"		
195		NH60	茶灰土	須恵器	坏身	底部	内面	黒色	単層	IAc	8c中		
196		NH61	茶灰土	"	平瓶	胴部	内面～断面	黒色	単層	IIAb	7c後半		
197		NH61	茶灰土	"	平瓶	胴～底部	断面	黒色	単層	IIAb	"		
198		NF64	暗茶土	"	平瓶	底部	断面	黒色	単層	IIAb	"		
199		NC64	灰砂	"	平瓶	頸～肩部	内面～断面	黒色	単層	IIAb	"		
200		ND65	灰砂礫	"	平瓶	底部	内面～断面	黒褐色	単層	IIAb	"		
201		NZ	Z	"	坏身	口縁部	内外面	黒色	単層	III A1	8c中		
202		NZ	Z	"	平瓶	胴部	断面	焦げ茶色	単層	IIAb	7c後半		
203		NZ	Z	"	平瓶	頸～肩部	断面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		
204		UH45	SB2355(S33 掘方)	"	平瓶	底部	内面～断面	暗褐色	単層	IIAb	"		
205		UH45	SB2355(S34)	"	平瓶	頸部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		
206		UA37	SD2335(S10)	"	甕	胴部	内面	黒色	単層	IIAc	"		
207	83次	UG54	SD2350(S30)	"	平瓶	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		
208		UC44	SK2344B(S13 下層)	"	平瓶	口縁～胴	内面～断面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		48-45
209		UC44	SK2344B(S13)	"	平瓶	胴部	内面～断面	黒色	単層	IIAb	"		
210		UC45	SK2344B(S13)	"	平瓶	胴部	断面	暗褐色	単層	IIAb	"		

No.	次数	地区	遺構・土層	種別	器種	部位	付着部位	漆色調	漆膜	分類	時期	備考	Fig.
211	83次	UC45	SK2344B(S13)	須恵器	平瓶	胴部	内面～断面	黒褐色	単層	IIAb	7c後半		
212		UD45	SK2344B(S13)	土師器	椀	口縁部	内面	黒色	単層	I Bb	8c中		51-72
213		UA33	SX2336(S2)	須恵器	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	7c後半		
214		U157	(S54)	"	平瓶	口縁部	内外面	黒色	単層	IIAb	"		
215		UD44	灰褐色	"	平瓶	底部	内面	黒色	単層	IIAb	"		
216		UG56	灰褐色	"	平瓶	口頸部	内面	暗褐色	単層	IIAb	"		
217		UC38	床土	"	坏	底部	内面～断面	焦げ茶色	単層	I Ab	8c		
218		UC45	床土	"	壺	胴下半部	内面	暗褐色	単層	IIAd	"		
219		SG43	SB2380A	"	甕	胴部	内面	黒色	単層	IIAc	"		
220		SE53	SB2415(C96b)	土師器	坏	底部	内面	焦げ茶色	単層	I Aa	8c後半		
221	SI37	SD2340(腐植土)	須恵器	長頸壺	頸～脚部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	7c後半		48-44	
222	SI46	SD2392(S49)	"	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAa	"			
223	SE37	SX2345(S187)	"	平瓶	底部	内面～断面	焦げ茶色	単層	IIAb	"			
224	SJ39	SX2416(腐植土)	"	坏蓋	口～天井	内面	黒色	数層	I Aa	"		45-1	
225	SI39	SX2416(腐植土)	"	平瓶	胴下半部	内面～断面	焦げ茶色	単層	IIAb	"			
226	SD38	(S8)	"	坏身	底部	内面	焦げ茶色	数層	I Ac	8c中			
227	SI46	(S49)	"	甕	胴部	断面	暗褐色	単層	IIAc	7c後半			
228	SB48	SD2419(焼土)	"	甕	胴部	内面	暗褐色土	単層	IIAc	"			
229	SC48	SD2419(焼土)	"	平瓶	胴下半部	内面	暗褐色	単層	IIAb	"			
230	SD48	SD2419(焼土)	"	平瓶	胴下半部	内面	焦げ茶色	数層	IIAa	"		48-42	
231	SE48	SD2419(焼土)	"	平瓶	胴下半部	口縁～肩部	焦げ茶色	数層	IIAb	"		48-49	
232	SE48	SD2419(焼土)	"	平瓶	底部	内外面～断面	焦げ茶色	数層	IIAb	"			
233	SI47	SD2419(焼土)	"	平瓶	底部	内外面～断面	焦げ茶色	単層	IIAb	"			
234	SJ44	黒色粘	"	平瓶	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"			
235	SK43	黒色粘	"	長頸壺	肩部	内面	黒色	単層	IIAa	8c			
236	SK45	黒色粘	"	平瓶	胴部	内外面・断面	黒色	単層	IIAb	7c後半			
237	SK52	暗褐色	"	甕	胴部	内面	暗褐色	単層	IIAc	"			
238	SB46	灰褐色	"	平瓶	胴部	内面	暗褐色	単層	IIAb	"			
239	SC39	灰褐色	土師器	坏	底部	内面	焦げ茶色	単層	I Ba	8c			
240	SC42	灰褐色	須恵器	平瓶	肩～底部	内面～断面	黒色	単層	IIAb	7c後半			
241	SC51	灰褐色	土師器	坏	口～底部	内面	黒色	単層	I Ba	8c後半	漆剥離痕跡	47-25	
242	SE49	灰褐色	須恵器	平瓶	胴～底部	内面	黒色	単層	IIAb	7c後半			
243	SF44	灰褐色	"	甕	胴部	内面	黒色	単層	IIAc	"			
244	SG43	灰褐色	"	坏	口～底部	内面	黒色	数層	I Ab	7c前半		46-12	
245	SG43	灰褐色	"	平瓶	肩部	断面	暗褐色	単層	IIAb	7c後半			
246	SG47	灰褐色	"	平瓶	肩～底部	内面～断面	暗褐色	単層	IIAb	"			
247	SH42	灰褐色	"	平瓶	肩部	内外面・断面	黒色	単層	IIAb	"			
248	SI45	灰褐色	"	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	"			
249	SI45	灰褐色	"	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	"			
250	SI45	灰褐色	土師器	坏	口～底部	内外面・断面	焦げ茶色	単層	I Ba	8c後半			
251	SI46	灰褐色	須恵器	平瓶	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	7c後半			
252	SJ44	灰褐色	"	甕	胴部	内面	黒色	単層	IIAc	"			
253	SJ44	灰褐色	"	平瓶	胴下半部	内面	黒色	単層	IIAb	"			
254	SJ44	灰褐色	"	甕	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAc	"			
255	SJ46	灰褐色	"	平瓶	胴下半部	内面～断面	焦げ茶色	単層	IIAb	"			
256	SJ46	灰褐色	"	平瓶	胴下半部	内面	暗褐色土	単層	IIAb	"			
257	SG41	灰褐色土B	"	平瓶	口～肩部	内面	暗褐色土	単層	IIAb	"			
258	SG43	灰褐色土B	土師器	壺?	肩部	内面	黒褐色	単層	II Bd?	8c			
259	SI41	灰褐色土B	須恵器	平瓶	肩部	内面	暗褐色土	単層	IIAb	7c後半			
260	SI43	灰褐色土B	灰釉	壺	肩部	断面	黒褐色	単層	II Dd	10c			
261	SJ43	灰褐色土B	須恵器	平瓶	底部	内面	暗褐色	単層	IIAb	7c後半	一部遺存		
262	SJ43	灰褐色土B	"	平瓶	肩部	内外面・断面	焦げ茶色	単層	IIAb	"			
263	SK42	灰褐色土B	"	平瓶	胴部	内面～断面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		50-65	
264	SK45	灰褐色土B	"	平瓶	頸～肩部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"			
265	SE34	茶灰土	"	平瓶	頸～肩部	内外面・断面	焦げ茶色	数層	IIAa	"		48-41	
266	SE34	茶灰土	"	壺	胴部	内面	黒色	単層	IIAd	8c			
267	SF34	茶灰土	"	坏	底部	内面	暗褐色	単層	I Ac	8c中			
268	SF36	茶灰土	"	坏	口～底部	内面	黒色	単層	I Ab	7c後半		46-13	
269	SG35	茶灰土	"	平瓶	肩部	内面	黒色	単層	IIAb	"	一部遺存		
270	SI36	茶灰土	"	坏	底部	内面	黒色	単層	I Ab	7c後半			
271	SB50	茶褐色	土師器	坏	底部	内面	黒色	数層	I Ba	8c中			
272	SC46	茶褐色	須恵器	平瓶	胴下半部	内面	黒色	単層	IIAb	7c後半			
273	SC49	茶褐色	"	平瓶	肩部	内面～断面	黒色	単層	IIAb	"			
274	SD48	茶褐色	"	平瓶	肩～底部	内面～断面	暗褐色	単層	IIAb	"	SF48 と接合		
275	SD49	茶褐色	"	平瓶	頸部	内面	暗褐色	単層	IIAb	"			
276	SE49	茶褐色	"	平瓶	肩部	内面～断面	黒色	単層	IIAb	"			
277	SF48	茶褐色	"	平瓶	頸～胴部	内面～断面	暗褐色	単層	IIAb	"	一部遺存		
278	SG47	茶褐色	"	平瓶	頸～胴部	内面～断面	黒褐色土	単層	IIAb	"			
279	SG48	茶褐色	"	坏	底部	内面	黒色	数層	I Ac	8c後半		46-18	
280	SH47	茶褐色	"	平瓶	胴部	内面～断面	暗褐色	単層	IIAb	7c後半			

No.	次数	地区	遺構・土層	種別	器種	部位	付着部位	漆色調	漆膜	分類	時期	備考	Fig.	
281	84次	SI38	床土	須恵器	壺	底部	内面	黒色	単層	IIAd	8c			
282		SZ	Z	"	蓋	口~天井	内外面	黒褐色	単層	IAa	7c後半		45-3	
283		SZ	Z	"	平瓶	底部	内外面・断面	黒色	単層	IIAb	"			
284		SZ	Z	"	長頸壺	脚台部	内面~断面	黒色	単層	IIAa	"		48-46	
285	85次	QH46	SD2015(S5上層)	"	壺	胴部	内面	黒色	単層	IIAd	8c			
286		QG38	SD2340(S25A)最上層	"	蓋	口縁部	内面	暗褐色	単層	IAa	8c前半			
287		QJ7	SD2340(S50下層)	"	甕	口縁部	内面	黒色	単層	IIAc	7c後半			
288		QH37	SD2340(S50上層)	"	坏身	底部	内面	黒色	単層	IAc	8c			
289		QI37	SD2340(S50下層)	"	平瓶	肩部	内面	黒色	単層	IIAb	7c後半			
290		QI37	SD2340(S50下層)	"	平瓶	肩部	内外面	暗褐色	単層	IIAb	"			
291		QJ37	SD2340(S50下層)	"	平瓶	底部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	"			
292		QJ37	SD2340(S50下層)	"	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	"			
293		QL37	SD2340(S50下層)	"	平瓶	底部	内面	黒色	単層	IIAb	"			
294		QG41	SD2464(S16)	"	坏	底部	内面	焦げ茶色	数層	IAb	8c			
295		QL47	SD2471(S1)	"	長頸壺	口縁部	内面	暗褐色	単層	IIAa	8c前半			
296		QB44	暗褐土	"	甕	胴部	内面	黒色	単層	IIAc	8c			
297		QD45	暗褐土	"	坏身	底部	内面	黒色	単層	IAc	8c中	一部遺存		
298		QK41	暗褐土	"	坏身	底部	内外面	黒色	数層	IAc	8c中			
299		QL44	暗褐土	"	坏蓋	天井部	内面	焦げ茶色	数層	IAa	8c前?			
300		QM44	暗褐土	"	坏身	底部	内面	黒色	数層	IAc	8c中		46-19	
301		QM47	暗褐土	"	平瓶	底部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	7c後半			
302		拡張区	暗褐土	"	土師器	坏身	底部	内面	黒褐色	数層	IBc	8c末		
303		QF42	灰褐土	"	須恵器	坏	底部	内面	黒褐色	単層	IAb	8c		
304		QD48	茶褐土	"	坏蓋	口~天井	内面	暗褐色	単層	IAa	8c後半			
305		QF48	茶褐土	"	鉢?	口縁	内面	黒色	単層	IAf?	8c			
306		QH39	茶褐土	"	坏身	底部	内面	暗褐色	単層	IAc	8c中			
307		QI39	茶褐土	"	甕	胴部	内面	暗褐色	単層	IIAc	8c			
308		QL41	茶褐土	"	甕	胴部	内面	黒褐色	単層	IIAc	8c			
309		QL44	茶褐土	"	壺	底部	内外面	黒色	単層	IIAd	8c		48-48	
310		QM42	セクション部	"	平瓶	胴下半部	内面	暗褐色	単層	IIAb	7c後半			
311		87次	VD38	SD2340(S50最上層)	"	平瓶	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		
312			VE38	SD2340(S50最上層)	"	壺?	胴下半部	内面~断面	黒色	単層	IIAd?	8c		
313			VE38	SD2340(S50上層)	"	平瓶	口縁部	内面~断面	暗褐色	単層	IIAb	7c後半		
314			VD38	SD2340(S50暗灰粘質土)	"	坏蓋	天井部	内面	焦げ茶色	単層	IAa	8c		
315	VE38		SD2340(S50黒灰粘)	"	壺	胴部	内面~断面	焦げ茶色	単層	IIAd	7c後半?			
316	VE38		SD2340(S50黒灰粘)	"	甕	胴部	内面	黒色	単層	IIAc	8c		51-70	
317	VE38		SD2340(S50中層黒粘)	"	平瓶	頸部	内面~断面	黒褐色	単層	IIAb	7c後半			
318	VE38		SD2340(S50青灰砂質土)	"	平瓶	底部	内外面	黒褐色	単層	IIAb	"			
319	VD38		SD2340(S50灰白砂)	"	平瓶	底部	内面	黒色	単層	IIAb	"			
320	VC37		茶褐土	"	平瓶	胴部	断面	黒色	単層	IIAb	"			
321	VE36		暗褐土	"	平瓶	底部	内面	黒色	単層	IIAb	"			
322	VG34		床土	"	土師器	坏	底部	内面	暗褐色	単層	IBa	8c		
323	90次	VH37	SD2340(S50上層茶灰土)	須恵器	坏身	底部	内面	褐色	単層	IAc	8c中			
324		VJ37	SD2340(S50上層茶灰土)	土師器	坏	底部	内面	黒色	単層	IBa	8c			
325		VJ37	SD2340(S50中層黒粘)	須恵器	平瓶	胴部	内面	暗褐色	単層	IIAb	7c後半			
326		VL36	SD2340(S50中層黒粘)	"	平瓶	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"			
327		VL36	SD2340(S50中層黒粘)	"	坏蓋	天井部	内面	焦げ茶色	単層	IAa	"			
328		VI37	SD2340(S50中層灰粘)	"	平瓶	胴部	内面	暗褐色	単層	IIAb	"	一部遺存		
329		VI37	SD2340(S50中層灰粘)	"	平瓶	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"			
330		VI37	SD2340(S50中層灰粘)	"	平瓶?	底部	内面	焦げ茶色	数層	IIAb?	"			
331		VJ36	SD2340(S50中層灰粘)	"	平瓶	口頸部	内面	黒色	単層	IIAb	"		51-73	
332		VJ36	SD2340(S50中層灰粘)	"	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	"			
333		VJ37	SD2340(S50中層灰粘)	"	坏身	口~底部	内面	黒褐色	数層	IAc	8c中		46-22	
334		98次	VJ37	SD2340(S50中層灰粘)	"	平瓶	胴部	内面	黒褐色	単層	IIAb	7c後半		
335	VK37		SD2340(S50中層灰粘)	"	平瓶	頸~胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"			
336	VK37		SD2340(S50中層灰粘)	"	壺?	底部	内面	黒褐色	単層	IIAd?	9c?			
337	VL37		SD2340(S50中層灰粘)	"	平瓶	口頸部	内面~断面	暗褐色	単層	IIAb	7c後半			
338	VL37		SD2340(S50中層青灰粘)	"	平瓶	底部	内面	暗褐色	単層	IIAb	"			
339	VL37		SD2340(S50中層青灰粘)	"	坏身	底部	内面	黒褐色	数層	IAc	8c後半			
340	VI37		SD2340(S50下層腐植土)	"	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	7c後半			
341	VI37		SD2340(S50下層腐植土)	"	平瓶	胴部	内面	暗褐色	単層	IIAb	"			
342	VJ37		SD2340(S50下層腐植土)	"	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	"			
343	VK37		SD2340(S50下層茶褐土)	"	平瓶	口縁部	内面	黒褐色	単層	IIAb	"			
344	VJ37		SD2340(S50下層茶褐砂)	"	坏蓋	天井部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	8c			
345	VZ		SD2340(S50Z)	"	平瓶	胴部	内面	黒褐色	数層	IIAb	"			
346	98次	QR37	SD2340上層	"	平瓶	胴下半部	断面	焦げ茶色	単層	IIAb	7c後半			
347		QR37	SD2340中層	"	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	"			
348		QT37	SD2340中層	"	平瓶	肩部	内面	暗褐色	単層	IIAb	"			
349		QT37	SD2340中層	"	平瓶	胴部	内面	暗褐色	単層	IIAb	"			
350	QT37	SD2340中層	"	平瓶	胴部	外面	焦げ茶色	単層	IIAb	"				

No.	次数	地区	遺構・土層	種別	器種	部位	付着部位	漆色調	漆膜	分類	時期	備考	Fig.
351		QO37	SD2340中層(黒色土)	須恵器	平瓶	頸部	内外面・断面	黒褐色	単層	IIAb	7c後半		
352		QQ37	SD2340中層(黒色土)	"	坏蓋	天井部	内面	黒色	単層	IAa	"		
353		QQ37	SD2340中層(黒色土)	"	平瓶	頸～胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		
354		QS37	SD2340中層(黒色土)	"	坏身	口～底部	内底面	焦げ茶色	数層	IAc	8c前半		46-21
355		QS37	SD2340中層(黒色土)	"	平瓶	胴部	外面	黒色	単層	IIAb	7c後半		
356		QU37	SD2340中層(黒色土)	"	坏身	高台部	外面	黒色	単層	IAc	"		
357		QU37	SD2340中層(黒色土)	"	平瓶	底部	内面	焦げ茶色	数層	IIAb	"		
358		QQ37	SD2340下層(砂)	"	坏蓋	口～天井	内外面	焦げ茶色	数層	IAa	8c前半		45-10
359		QQ37	SD2340下層(砂)	"	平瓶	胴～底部	内面～断面	焦げ茶色	単層	IIAb	7c後半		
360		QT37	SD2340下層(砂)	"	平瓶	胴部	内面	黒褐色	単層	IIAb	"		
361		Z	SD2340 Z	"	平瓶	底部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		
362		QP40	SX2480上層	"	壺	胴部	断面	焦げ茶色	単層	IIAd	"		
363		QO39	SX2480上下境	"	坏	底部	内面	黒褐色	数層	IAb	"		
364		QN39	SX2480	"	脚付壺	脚部	外面	黒色	単層	IIAa	"		
365		QN39	SX2480	"	坏蓋	口～天井	内面	暗褐色	数層	IAa	"	QO40と接合	45-2
366		QN39	SX2480	"	平瓶	口～底部	内面・外面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		
367		QN39	SX2480	"	平瓶	肩～底部	内面～断面	暗褐色	単層	IIAb	"		
368		QN39	SX2480	"	甕	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAc	"		
369		QN39	SX2480	"	坏蓋	天井部	内天井面	焦げ茶色	数層	IAa	"		45-5
370		QN39	SX2480	"	平瓶	肩～底部	内面～断面	焦げ茶色	数層	IIAb	"		
371		QN40	SX2480	"	壺	口～肩部	内面	暗褐色	単層	IIAd	"	QO40と接合	48-50
372	98次	QO40	SX2480	"	長頸壺	口～底部	内面	焦げ茶色	単層	IVAa	"	QO38～41と接合	51-75
373		QO40	SX2480	"	脚付壺	胴～底部	内面～断面	焦げ茶色	単層	IIAa	"		
374		QP40	SX2480	"	坏	口～底部	内面	焦げ茶色	単層	IAb	"		46-14
375		QP40	SX2480	"	平瓶	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		
376		QP40	SX2480	"	平瓶	胴～底部	内面～断面	暗褐色	単層	IIAb	"		
377		QP40	SX2480	"	平瓶	胴～底部	内面～断面	焦げ茶色	数層	IIAa	"		48-43
378		QP40	SX2480	"	平瓶	口～底部	内面～外面	焦げ茶色	単層	IIAb	"	QP41と接合	
379		QO40	SX2480	布	-	-	-	焦げ茶色	-	-	-	漆付着布	51-76
380		QZ	SK2893	土師器	坏	口～底部	内面	焦げ茶色	数層	IBa	8c		47-27
381		QQ44	SX2901(S23)	須恵器	坏身?	底部	内面	焦げ茶色	単層	IAc?	"		
382		QS43	(S55)	"	坏蓋	摘み	内面	黒色	単層	IAa	"		
383		QO38	暗褐色土下層	土師器	坏	口～胴	内外面	暗褐色	単層	IBa	"		
384		QP36	暗褐色土下層	須恵器	平瓶	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	7c後半		
385		QN39	Z	土師器	坏	口縁部	内面	黒褐色	単層	IBa	10c		
386		QN39	Z	"	坏	高台部	高台内面	黒色	単層	IBa	"		
387		QN40	Z	須恵器	坏	底部	内面	焦げ茶色	数層	IAb	8c		
888		QN41	Z	"	平瓶	胴部	内面	暗褐色	単層	IIAb	7c後半		
389		QN41	Z	"	平瓶	胴部	内面	暗褐色	単層	IIAb	"		
390		QO39	Z	土師器	坏	口縁部	内面	焦げ茶色	単層	IBa	10c		
391		QO40	Z	須恵器	平瓶	底部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	7c後半		
392		Z		土師器	坏?	胴部	内面	黒色	数層	IBa?	8c?		
393	104次	PI64	SD320最上層	須恵器	坏身	底部	内底部	黒色	単層	IAc	8c前半		
394	110次	TD06	暗灰粘	"	甕	胴部	外面～断面	黒色	単層	IIAc	8c		
395		NQ54	SD3825(S10)	土師器	蓋	天井部	内面	黒色	数層	IBc	8c		
396		NM56	SD3835(S40)	須恵器	脚付壺	底部	内面	暗褐色	単層	IIAa	7c後半		48-47
397		NN55	SX3830(S50)	"	平瓶	頸部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	7c後半		
398		NO54	(S9)	土師器	坏	底部	内底面	茶灰色	単層	IBa	8c後半		
399	129次	NP52	黒褐色土	"	坏	底部	内底面	黒色	単層	IBa	8c		
400		NP56	黒褐色土	"	坏	底部	内底面	黒色	単層	IBa	8c	漆剥離痕跡	
401		NQ55	黒褐色土	"	坏	底部	内外面	黒色	単層	III B1	8c		
402		NP53	黒褐色土下層	"	坏	底部	内底面	黒褐色	単層	IBa	8c後半		
403		NP55	黒褐色土下層	須恵器	甕	胴部	内面	黒色	単層	IIAc	7c後半		
404		QC51	SD4038(S1上層)	"	坏身	口縁部	内面	黒色	単層	IAc?	"		
405		QR53	SD4044(S80)	土師器	坏	胴下半部	内面	黒色	数層	IBa	8c		
406		QE58	SK4056(S207)	須恵器	平瓶	底部	内面～断面	黒色	単層	IIAb	7c後半		
407		QE59	SK4056(S220)	土師器	坏	底部	内底面	黒褐色	単層	IBa	8c中		
408		QI54	SK4058(S143)	須恵器	平瓶	口縁部	内面～断面	黒褐色	単層	IIAb	7c後半		
409		QD56	SX4065(S55)	"	平瓶	頸部	内面～断面	黒色	単層	IIAb	"		
410		QD57	SX4065(S55)	"	平瓶	口縁部	内面	黒色	単層	IIAb	"		
411		QD57	SX4065(S55)	"	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	"		
412	147次	QD57	SX4065(S55)	"	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	"		
413		QE56	SX4065(S55)	"	坏	口～底部	内面	褐色	単層	IAc	8c前半		46-20
414		QE56	SX4065(S55)	"	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	7c後半		
415		QE56	SX4065(S55)	"	平瓶	内面	内面	黒色	単層	IIAb	"		
416		QF56	SX4065(S55)	"	平瓶	内面	内面	黒色	単層	IIAb	"		
417		QH53	(S141)	"	平瓶	口縁部	内面	黒色	単層	IIAb	"		
418		QE57	(S203)	"	平瓶	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		
419		QE59	(S220)	"	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	"		
420		QH47	茶褐色土	"	平瓶	頸～肩部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	"		

No.	次数	地区	遺構・土層	種別	器種	部位	付着部位	漆色調	漆膜	分類	時期	備考	Fig.
421	147次	QC54	茶褐土下層	須恵器	平瓶	底部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	''		
422		QC56	茶褐土下層	''	平瓶	胴下半部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	''		
423		QC54	茶褐土下層	''	平瓶	底部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	''		
424		QC56	茶褐土下層	''	平瓶	胴下半部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	''		
425		QC57	茶褐土下層	''	平瓶	底部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	7c後半		
426		QC57	茶褐土下層	''	平瓶	胴部	断面	黒色	単層	IIAb	''		
427		QC57	茶褐土下層	''	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	''		
428		QD55	茶褐土下層	''	平瓶	肩部	内面	黒褐色	単層	IIAb	''		
429		QE57	茶褐土下層	''	平瓶	胴部	内面~断面	褐色	単層	IIAb	''		
430		QE57	茶褐土下層	''	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	''		
431		QF52	茶褐土下層	''	坏身	底部	内面	暗褐色	数層	IAc	''		
432		QF54	茶褐土下層	''	平瓶	胴部	内面~断面	黒褐色	単層	IIAb	''		
433		QG48	茶褐土下層	''	坏	胴部	内面	黒色	単層	IAb	8c末		
434		QG48	茶褐土下層	''	坏	胴部	内面	黒色	単層	IAb	''	No.429 と同一	
435		QG48	茶褐土下層	''	坏身	底部	内面	黒色	単層	IAc	8c中		
436		QH48	茶褐土下層	''	坏身	底部	内面	黒色	単層	IAc	''	漆剥離痕跡	
437		QH54	茶褐土下層	''	坏身	口縁部	内面	黒色	単層	IAc	''		
438		QI51	茶褐土下層	土師器	坏	底部	内面	黒色	数層	IBa	8c		
439		QM48	茶褐土下層	''	坏	底部	内面	黒褐色	単層	IAc	8c中		
440		QE49	暗褐土	''	皿	口~底部	内面	茶褐色	単層	IBd	''		47-34
441		QF50	暗褐土	須恵器	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	7c後半	一部遺存	
442		QF52	暗褐土	''	坏身	底部	内面	暗褐色	数層	IAc	''		
443		QG51	暗褐土	''	平瓶	頸部	内面~断面	暗褐色	単層	IIAb	''		
444		QG52	暗褐土	''	平瓶	底部	内面	黒色	単層	IIAb	''		
445		QJ47	暗褐土	''	蓋	口縁部	内面	褐色	単層	IAa	8c前半		
446		QJ47	暗褐土	''	平瓶	胴部	内面~断面	暗褐色	単層	IIAb	7c後半	一部遺存	
447		QJ49	暗褐土	''	平瓶	頸部	内面~断面	黒褐色	単層	IIAb	''		
448		QJ50	暗褐土	''	坏	口縁部	内面	黒色	単層	IAb	8c		
449		QK48	暗褐土	''	平瓶	胴部	断面	黒色	単層	IIAb	7c後半		
450		QK48	暗褐土	''	平瓶	胴部	内面	黒色	単層	IIAb	''		
451		QM48	暗褐土	''	坏身	底部	内面	焦げ茶色	数層	IAc	8c前半		
452		QM48	暗褐土	''	平瓶	胴部	内面	暗褐色	単層	IIAb	7c後半		
453		QJ47	灰褐土	''	壺?	胴部	内面~断面	黒色	単層	IIAd?	8c		
454		QJ48	灰褐土	''	平瓶	頸~肩部	内面~断面	暗褐色	単層	IIAb	7c後半		
455		QJ48	灰褐土	''	平瓶	胴部	内面~断面	黒色	単層	IIAb	''		
456		QK48	灰褐土	''	平瓶	口~肩部	内面~断面	焦げ茶色	単層	IIAb	''		
457		QK49	灰褐土	''	平瓶	胴部	内外面・断面	焦げ茶色	単層	IIAb	''		
458		QL47	灰褐土	''	坏	底部	内面・外面	焦げ茶色	数層	IAb	8c		
459		QL47	灰褐土	''	平瓶	頸~胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	7c後半		
460		QL47	灰褐土	''	平瓶	頸部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	''		
461		QL48	灰褐土	''	脚付壺?	胴部	内面~断面	黒褐色	単層	IIAa?	''?		
462		QL48	灰褐土	''	脚付壺?	胴部	内面~断面	暗褐色	単層	IIAa?	''?	No.457 と同一	
463		QL48	灰褐土	''	長頸壺	頸部	内面	黒色	単層	IIAa	8c後半		
464		QL48	灰褐土	''	平瓶	胴部	内外面・断面	焦げ茶色	単層	IIAb	7c後半		
465		QL48	灰褐土	''	平瓶	胴部	内面	焦げ茶色	単層	IIAb	''		
466		Q地区	Aトレンチ灰褐土	''	平瓶	頸部	内面	黒褐色	単層	IIAb	''		
467		Q地区	Bトレンチ	''	平瓶	頸部	内面~断面	黒褐色	単層	IIAb	''		
468	B地区	SD4566(S4)B2暗褐土	土師器	坏	底部	内面	黒色	数層	IBa	8c			
469	B地区	SD4566(S4上層)	''	碗	底部	内面	暗褐色	単層	IBb	8c			
470	B地区	SD4566(S4上層)	''	坏?	胴部	内面	暗褐色	単層	IBa?	8c			
471	B地区	SD4566(S4上層)	''	坏	底部	内面	暗褐色	単層	IBa	8c			
472	B地区	SD4566(S4下層)	''	坏	底部	内面	黒褐色	単層	IBa	8c			
473	B地区	SD4566(S4下層)	''	坏	底部	内面	焦げ茶色	単層	IBa	8c後半	旧 Fig.53-2		
474	B地区	SD4570A(S10A)石積裏込	''	坏	底部	内面	焦げ茶色	単層	IBa	8c			
475	B地区	SD4570A(S10A)	''	坏	口~胴部	内面	焦げ茶色	単層	IBa	8c後半			
476	B地区	SD4570B(S10B上層)	''	坏	底部	内面	焦げ茶色	単層	IBa	''			
477	B地区	SD4570B(S10B下層)	''	皿	底部	内面	黒色	単層	IBd	''			
478	B地区	SK4573(S2)B1黒色土	''	坏	胴~底部	内面	暗褐色	数層	IBa	8c後半	旧 Fig.53-1	47-26	
479	B地区	SK4574(S3)C1黒色土	''	坏	底部	内面	黒色	数層	IBa	''			
480	B地区	SK4574(S3)C2黒色土	''	坏	底部	内面	暗褐色	単層	IBa	8c			
481	B地区	(S95)	''	坏?	胴部	内面	暗褐色	単層	IBa?	8c			
482	B地区	(S117)	''	坏	底部	内面	焦げ茶色	数層	IBa	8c			
483	B地区	D4黄灰土	''	坏	底部	内面	黒褐色	単層	IBa	8c			
484	B地区	E3黄灰土	須恵器	碗	口縁部	内外面	黒色	数層	IAc?	9c前半			
485	B地区	E3黄灰土	土師器	坏	底部	内面	焦げ茶色	単層	IBa	8c後半			
486	B地区	D4砂層	''	坏	底部	内面	黒色	数層	IBa	8c			

3) 鍛冶・鑄造関連遺物 (Fig.52～70, PL.58)

不丁地区官衙跡からは、膨大な量の鍛冶・鑄造関連遺物が出土している。出土した鍛冶・鑄造関連遺物の種類は鋳滓（鉄滓・銅滓）、羽口、坩堝・取瓶、炉壁がある。報告にあたっては出土遺構が明らかな資料を重点的に掲載した。また、遺構上面に堆積した各包含層から出土した資料のうち、資料的価値の高いものを抽出して報告した。

鋳 滓（1～109） 鋳滓は不丁地区官衙域の全面から出土する。鋳滓の多くは、鍛冶炉の炉底に形成された椀形滓となる。

1～15は掘立柱建物、柵の柱穴埋土から出土した鋳滓である。

1は83次SB2355埋土から出土した不定形鉄滓で、磁性を帯びたメタルを含有する。2は83次SB2365埋土から出土した椀形滓である。鋳滓底に薄く炉床の粘土が付着する。3・4は84次SB2380埋土出土の椀形滓の小片である。3は古期建物のSB2380A、4は新期建物のSB2380B埋土に含まれていた。4の表面には木炭小片が付着する。5・6は84次SB2388埋土から出土した椀形滓である。5の上面はほぼ水平に近く、部分的に磁性を帯びる。6は椀形滓が三重に重複して形成されている。7は84次SB2405埋土から出土した椀形滓である。8は87・90次のSB2525埋土から出土した不定形滓である。わずかに磁性を帯びる。9は87・90次のSB2530埋土出土の鉄滓付溶解物である。羽口先端付近の破片の可能性が高い。10・11は98次SB2880埋土の椀形滓小片である。11は2～3回程度の単位で重複しており、最下層のみが磁性を帯び、メタル含有率が高い。12・13は98次SB2900埋土から出土した。12は椀形滓小片で、13は羽口先端付近の溶解物の可能性が高い。14は129次SB3820埋土出土の椀形滓小片である。15は87・90次SA2513埋土出土の椀形滓である。単位は上下二層に分かれ、上層の滓はわずかに磁性を帯びる。

16～48は溝の埋土から出土した鋳滓である。

16～20はSD320埋土から出土した。16～18は14次SD320最下層（砂層）、19は76次SD320中層（腐食土D）、20は104次SD320最上層に伴う。16は不丁地区出土の椀形滓で、最も残りがよい資料となる。上下二層に分かれる椀形滓が炉床粘土上に溜まる状況がよく分かる。底面に部分的に残る粘土床は、0.2～1.0cmほどの砂粒を多く含む。粘土は厚い部分で0.5mmほどを測るが、この計測値は椀形滓に貼り付いている部分のみの数値であり、本来の炉床粘土の厚みではない。下層の椀形滓は磁性が弱く、上層の椀形滓の方が強い磁性を帯びる。椀形滓表面にはとくに羽口先端の溶解物は見られない。17の椀形滓は中央部の陥没が著しい。全体的に磁性を帯びる。18は椀形滓接地面からの剥離片である。とくに粘土は見られないが、砂粒の付着が多い。19は重量感のある椀形滓で、磁性を全体的に帯びる。床面にはわずかに粘土の付着がある。20は椀形滓小片で床面が磁性を帯びる。

炉床粘土が
残る

21～24はSD2015埋土から出土した。21・22は76次SD2015から出土したもので、とくに21はSD2015の古期溝(A)埋土に伴う。23・24は85次SD2015上層から出土した。21は小片であるが、厚さ1cm弱の粘土床(炉床)の上面に椀形滓が堆積する状況を観察できる。22は典型的な椀形滓で、中央部を中心に磁性を帯びる。残存範囲には羽口設置部分は確認できない。23は小型の椀形滓でわずかに磁性を帯びる。24は一部に羽口由来と思われる溶解物が付着する。

25は87・90次SD2335埋土出土の椀形滓小片である。26は87・90次SD2528埋土出土の椀

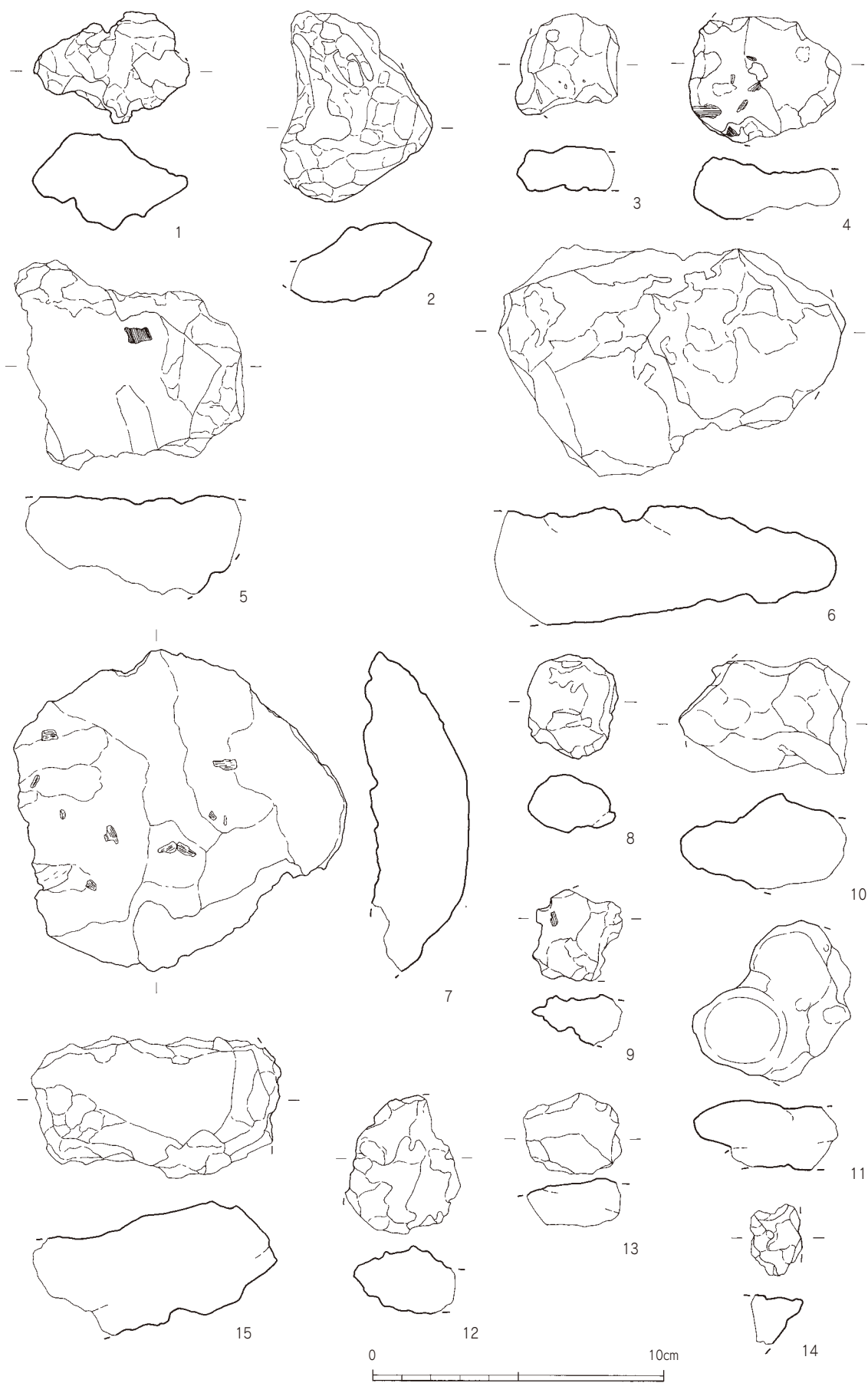


Fig.52 鍛冶・鑄造関連遺物実測図① (1/2)

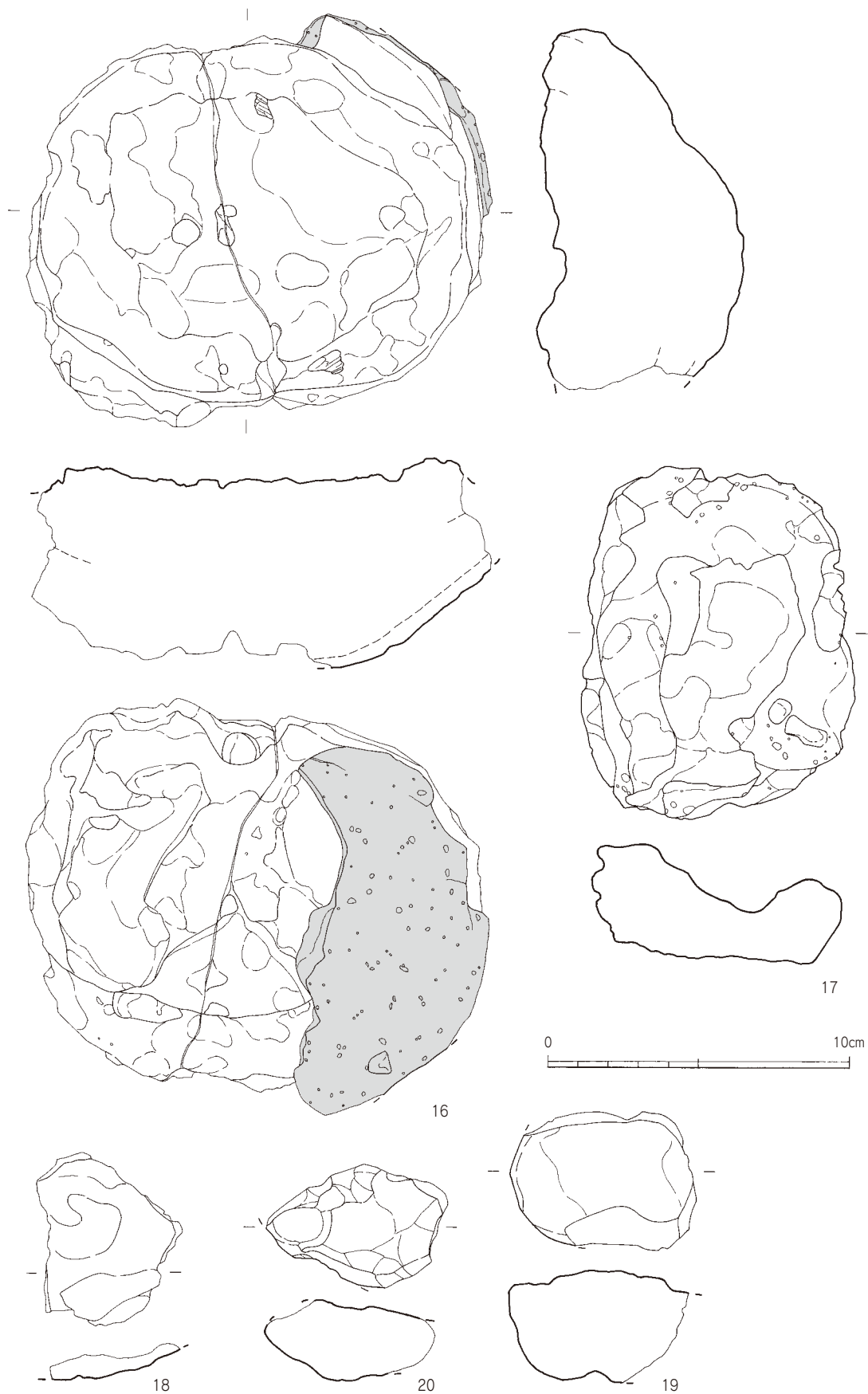


Fig.53 鍛冶・鑄造関連遺物実測図② (1/2)

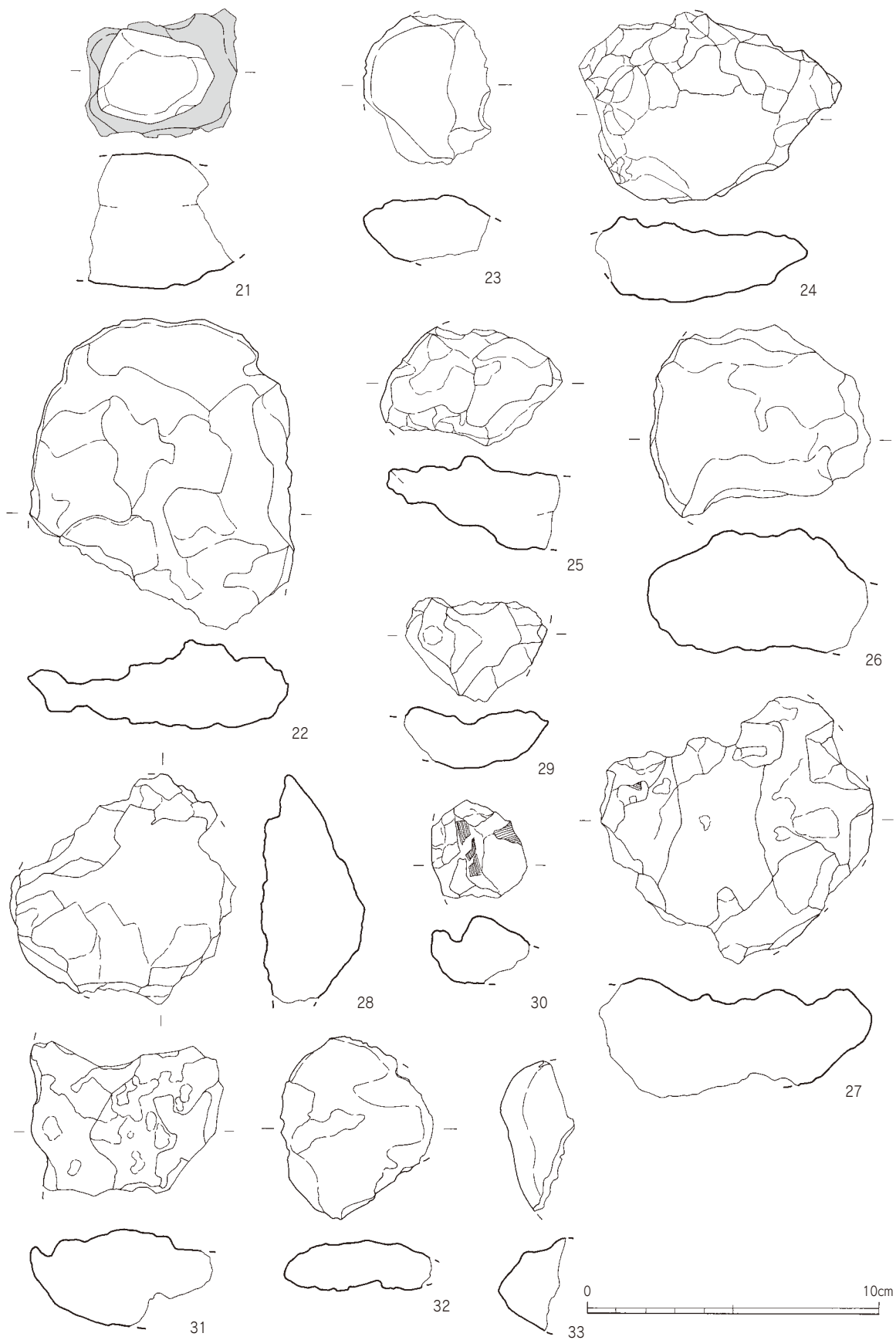


Fig.54 鍛冶・鑄造関連遺物実測図③ (1/2)

形滓である。部分的に磁性を帯びる箇所があり、造滓状況は不均一である。27は84次SD2397埋土出土の椀形滓である。28は84次SD2398埋土出土の椀形滓である。砂粒を多量に含む粘土床上面に椀形滓が溜まる。残存範囲の鉄滓自体も多くの溶解物を内包する。29・30は84次SD2403埋土出土の椀形滓小片である。29は磁性を帯びる。30はわずかに磁性を帯び、木炭片を多く含む。31は84次SD2455埋土出土椀形滓で、上下二層に分かれる。下層床面にはわずかに炉床の粘土小片が残る。上層の鉄滓は磁性を帯びる。また、表面には羽口先端の可能性が高い溶解物が見られる。32は85次SD2463埋土出土椀形滓で、磁性を帯びる。木炭小片を複数内包する。33は85次SD2471埋土出土椀形滓小片で、磁性を帯びる。

34～45はSD2340埋土出土の鉢滓である。34～39は85次SD2340下層、40は87・90次SD2340中層(黒色粘土層)、41は87・90次SD2340下層(腐食土層)、42は98次SD2340上層、43・44は98次SD2340中層、45は124次SD2340埋土出土品となる。34は羽口先端が溶着した椀形滓小片で、大部分が石英を多量に含む溶解物となる。35は上下二層に分かれる椀形滓で、磁性を帯びる。底面には木炭小片が面的に付着しており、造滓時の炉床面の状況を示す。36は椀形滓で、底面に炉床粘土が部分的に残る。37は全体的に木炭片を多量に含む。38の椀形滓は上下二層に分かれ、大小の木炭片が表面に露出する。39も木炭片が多いが、とくに炉床に近い部分で面的に広がる。40は椀形滓で底面に炉床粘土が見られる。木炭片や溶解物を多く含む。41は椀形滓の小片である。42は炉床粘土上面に椀形滓が溜まる。椀形滓は磁性を帯びる。43は椀形滓で木炭片を多量に内包する。床面には面的に木炭片が付着しており、造滓時の炉床面に木炭片を敷いていたことが分かる。44は椀形滓で磁性を帯びる。底面には面的に木炭片が付着する。45は不定形滓で、ほぼ溶解物で構成される。

46は129次SD2835埋土出土の椀形滓で、上下二層に分かれる。全体的に磁性を帯びる。47は98次SD2899埋土出土の不定形滓で、わずかに磁性を帯びる。48は129次SD3825埋土出土の椀形滓小片で、わずかに磁性を帯びる。49は147次SD4038埋土出土の椀形滓で、わずかに磁性を帯びる。底面には若干の炉床粘土が付着する。50は147次SD4042埋土出土椀形滓である。51は147次SD4044埋土出土椀形滓である。52は147次SD4054埋土出土椀形滓で、厚さ0.5cmほどの粘土床上面に鉄滓が溜まる。炉床粘土は石英等の砂粒を多く含む。

53～57は井戸埋土から出土した鉢滓である。

53は83次SE2346埋土出土椀形滓である。全体的に溶解物や木炭片を多く含む。54は84次SE2414埋土出土椀形滓で、上下二層に分かれる。55は98次SE2870埋土出土不定形滓で、溶解物に近い。56は147次SE4033埋土出土椀形滓である。床面には木炭片が若干見られる。上面には土器小片が露出しており、羽口先端部小片の可能性もある。57は147次SE4051埋土出土椀形滓で、底面に炉床面の粘土が若干残る。全体的に強い磁性を帯びる。

58～65は土坑の埋土から出土した鉢滓である。

58は83次SK2344埋土の出土品で、新段階に掘削されたSK2344Bの埋土に伴う。椀形滓の小片で底面には、炉床面の粘土が残る。上面には羽口先端と思われる溶解物が付着する。59は83次SK2361埋土出土の椀形滓小片である。60は84次SK2453埋土出土の椀形滓である。上下二層に分かれ、磁性をわずかに帯びる。61は14次SK2508埋土出土の椀形滓で、磁性を帯びる。62は98次SK2892埋土出土の椀形滓小片である。63は98次SK2901埋土出土の椀形滓

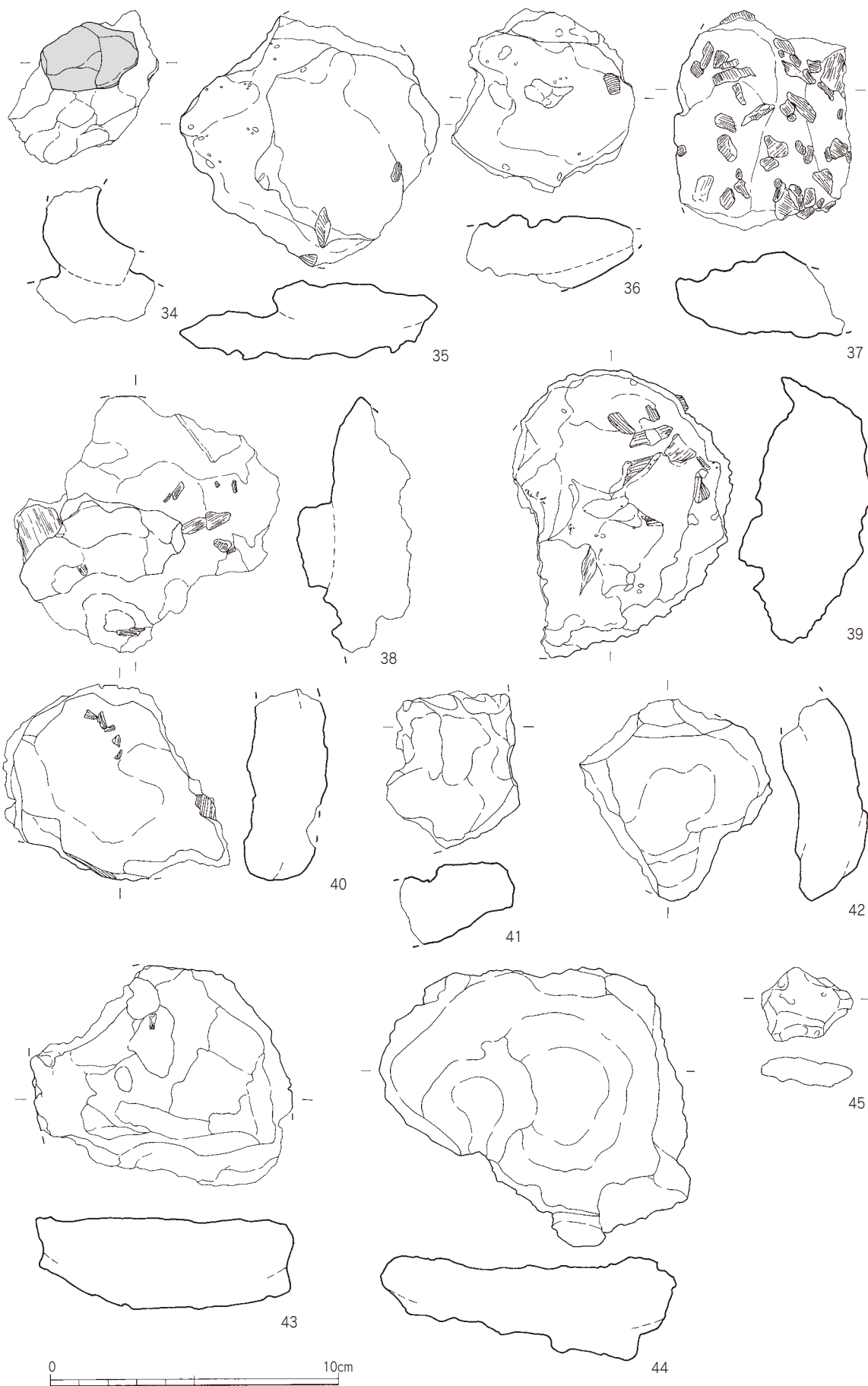


Fig.55 鍛冶・鑄造関連遺物実測図④ (1/2)

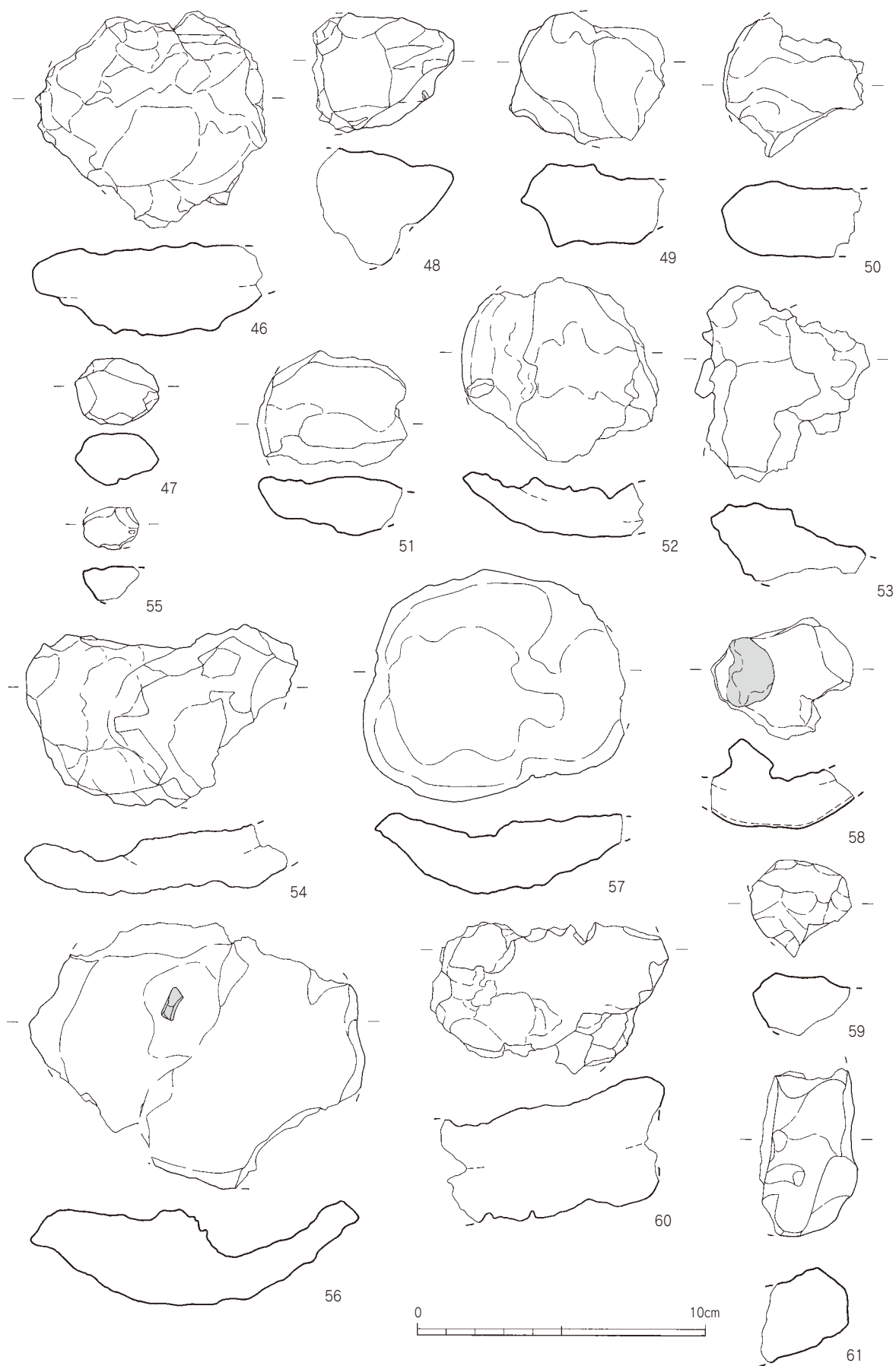


Fig.56 鍛冶・鑄造関連遺物実測図⑤ (1/2)

で、わずかに磁性を帯びる。64は104次SK3056埋土出土の不定形滓で、光沢と磁性を帯び、鉄塊系遺物に近い。65は129次SK3834埋土出土の不定形滓小片である。

66～78は流路、溝状遺構、落ち込みから出土した鉋滓である。

66～76は98次SX2480埋土から出土した鉋滓である。このうち、66～70はSX2480埋土の上層から出土した。66は椀形滓で、溶解物を多く含有する。底面には炉床粘土の一部が残る。67は小型の椀形滓の破片で、比較的強い磁性を帯びる。68～70は椀形滓の破片で、69は全体的に磁性を帯びる。71は木炭片を多く含む。72は炉床粘土の上に椀形滓が溜まる状況が観察できる。椀形滓は磁性を帯びる。73は椀形滓小片で、底面に炉床粘土の一部が残る。74も椀形滓で、底面に炉床粘土が薄く見られる。また、上面には溶解物が部分的に見られ、羽口先端部の可能性がある。75は椀形滓で、比較的強い磁性を帯びる。76も椀形滓で、底面には薄く炉床粘土の一部が見られる。上面には羽口先端の形状を残した溶解物が確認できる。

SX2480
出土鉋滓

77は129次SX3813埋土出土の不定形滓である。78は147次SX4060埋土出土の椀形滓で、わずかに磁性を帯びる。

79～109は整地層や包含層から出土した鉋滓である。

79・80は14次灰砂層から出土した椀形滓である。79の底面には薄く炉床粘土が見られる。80の底面にも炉床粘土が部分的に残る。また、椀形滓上面にわずかに溶解物が見られ、羽口先端の可能性はある。81は14次暗灰砂層から出土した椀形滓で、上下二層に分かれる。上層の滓のみ磁性を帯びる。82は17次茶灰土層出土の椀形滓でほぼ完形品となるが、炉床粘土や羽口先端部の痕跡は残らない。83～87は17次第1層から出土した椀形滓である。このうち、85～87は第1層の下層から出土した。83・84は小型のもので、84の底部には粘土が見られる。85は全体的に磁性を帯び、木炭片を若干含む。86は大型のもので、底部には木炭片が多く観察できる。87はほぼ完形に近い椀形滓である。上面や底面に木炭片が断片的に見られる。88は84次茶褐土層から出土した椀形滓である。全体的に錆による腐食が著しい。89・90は84次灰褐色土層から出土した椀形滓である。89は中央部表面に羽口先端の形状を残した溶解物が付着する。底面には炉床由来と思われる砂粒が多く見られ、粘土床の特徴を示す。90は底面に炉床粘土の一部が薄く貼り付く。上面には羽口先端の断片が付着する。わずかに磁性を帯びる。91は84次茶灰土層から出土した椀形滓である。底面には砂粒を含んだ粘土床の一部が残る。他の椀形滓底面に見られる粘土よりも、精製された粘土を用いている。上面には羽口先端と思われる溶解物が付着する。

92～96は84次焼土層から出土した椀形滓である。92は磁性を帯びる。93の椀形滓は上下二層に分かれる。底面には木炭片が多く見られる。94は全面を錆が覆うが磁性はない。95は底面に粘土が貼り付く。96は部分的に磁性を帯びる箇所がある。97は85次暗褐土層から出土した椀形滓である。底面に木炭片が多く見られる。98は85次茶褐土層から出土した椀形滓端部の破片である。底面には残りのよい場所で厚さ1cmほどの炉床粘土が残る。炉床粘土は0.2cmほどの砂粒を多く含む。99は87次の落ち込みから出土した椀形滓で、上下二層に分かれる。100は90次の茶灰色土層から出土した。断面には腐食が進んだ鉄塊状の断片が見られ、磁性を帯びる。101は98次の暗褐土層から出土した椀形滓である。底面に部分的に残る粘土床には、精製粘土を用いており、砂粒が見られない。上面には羽口先端と思われる溶解物が付着する。

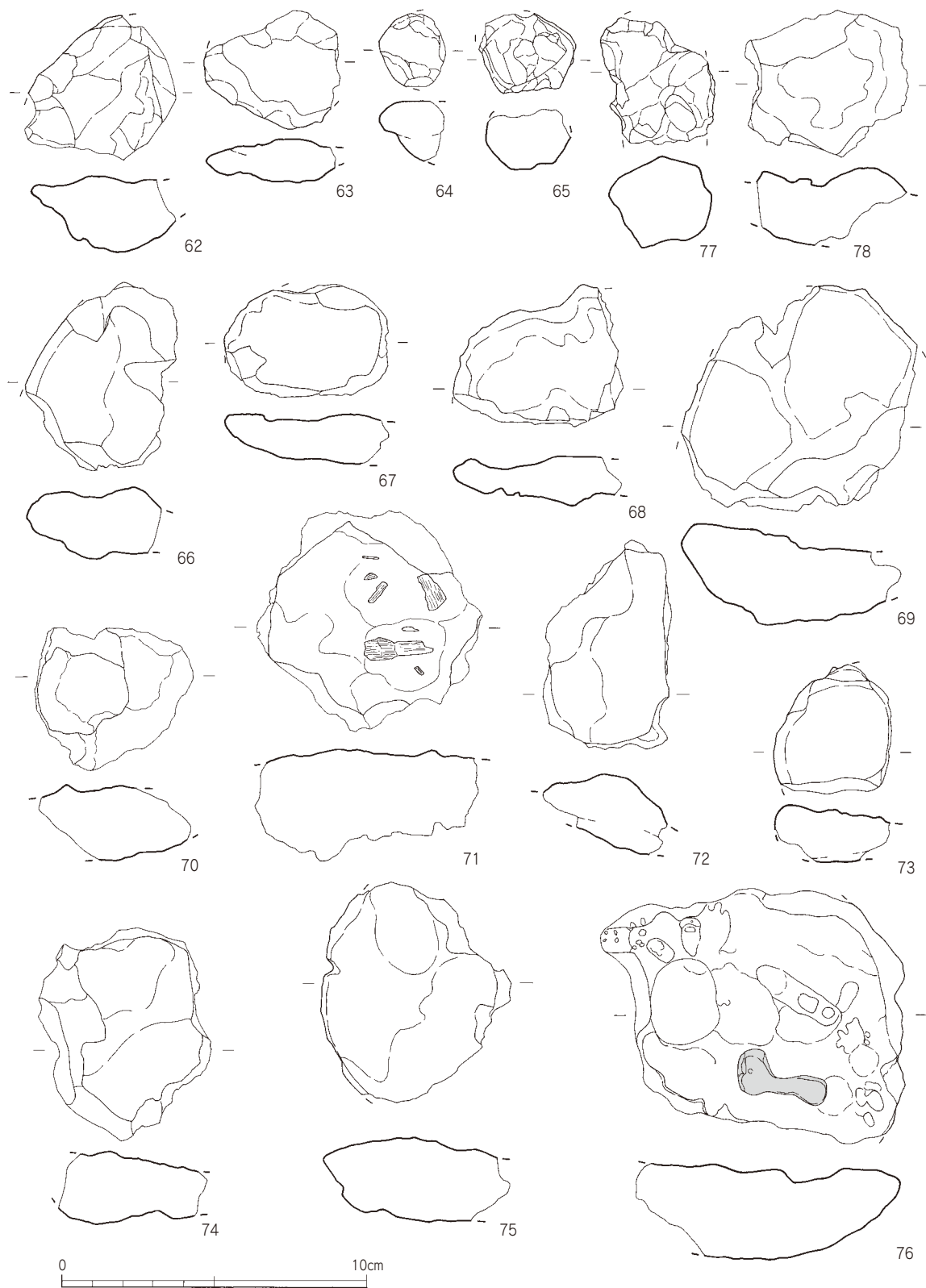


Fig.57 鍛冶・鑄造関連遺物実測図⑥ (1/2)

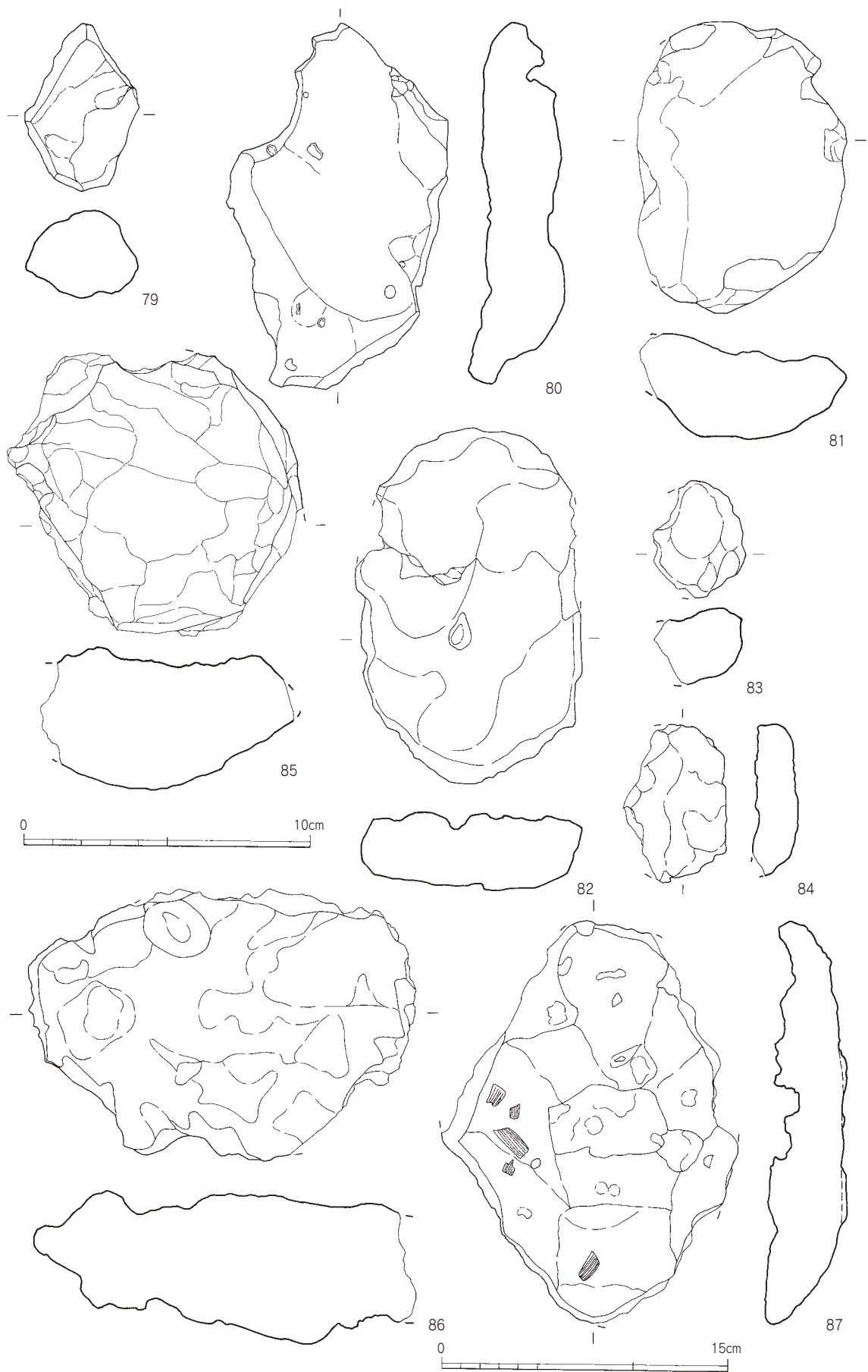


Fig.58 鍛冶・鑄造関連遺物実測図⑦ (1/2・1/3)

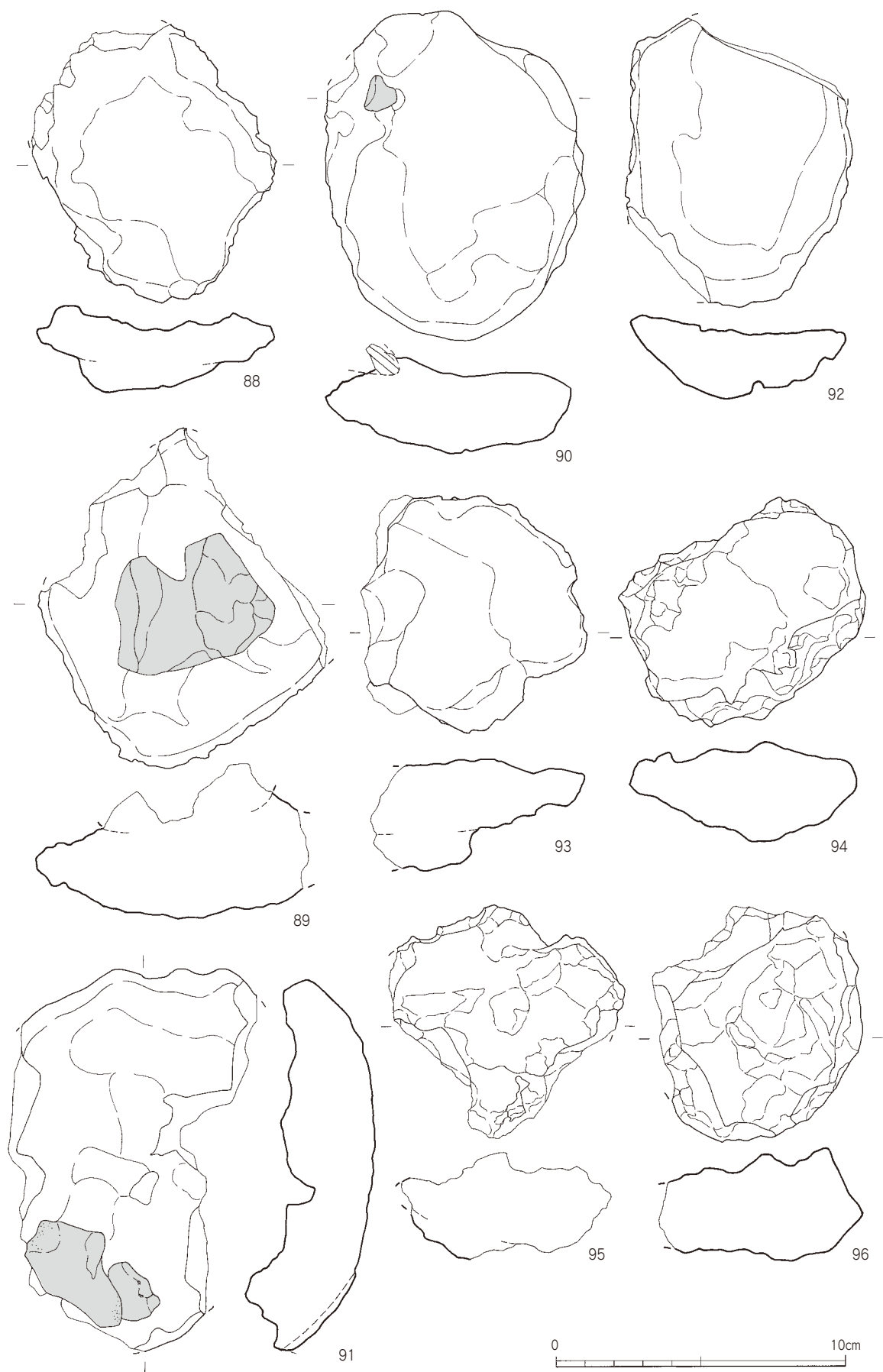


Fig.59 鍛冶・铸造関連遺物実測図⑧ (1/2)

102は104次の暗茶灰土層から出土した椀形滓で、底面には木炭が多く見られる。部分的に強い磁性を帯びる。103は110次灰褐土層から出土した椀形滓で、表層は強い磁性を帯びる。104は129次黒褐土層から出土した椀形滓である。105・106は147次茶褐土層から出土した。105は表面に羽口先端の形状を残した溶解物が付着する。106は鉄塊系遺物に近い。107は147次暗褐土層から出土した椀形滓である。108は147次黒褐土層から出土した椀形滓で、上面に羽口先端と思われる溶解物が付着する。特筆すべきは、上面中央部に突き刺さるように鉄鍬茎部、もしくは鉄釘体部状の鉄製品が露出する点である。微細な破片だが、鍛造による面形成が確認できるため、確実に「製品」の一部が椀形滓に含有されている。109は147次の遺構面直上の包含層から出土した。底面には炉床粘土が断片的に残る。上面には羽口先端の溶解物が見られる。

被熱瓦 (110) 76次の茶灰土層から出土した。二次的な破損面を除く、すべての面で光沢をもつ鉄塊系付着物で薄く覆われており、鉄製品と共に二次的に被熱したことが分かる。計8枚の平瓦が、上下4枚ずつに分かれて、凹面を向かい合わせの状態では溶着する。重なり合う平瓦相互には基本的に隙間がない。すべての平瓦の叩き目は確認できないが、最下面に露出する平瓦の凸面は緻密な単位の縄目叩きである。このような特徴をもつ被熱瓦は、不丁地区の北側に隣接する蔵司地区で複数出土している。

木炭 (111) 83次SB2335柱穴埋土から出土した。直径3cmに復元できる枝材の炭化したものである。また、黒鉛化が進み硬質となる。

銅滓 (112～121) 112は76次SD320最下層から出土した銅滓で、底面は平坦である。113は76次SD2015下層埋土で出土した銅滓で、全体的に緑青に覆われる。114は90次SD2340下層腐植土で出土した銅塊である。小型埴塼での溶解時の形状をそのまま残している点の特筆される。本資料から復元できる埴塼の内径は直径5cm程度である。115は83次SK2344の新段階に掘削されたSK2344B埋土に伴う銅滓付須恵器片である。壺底部の内面に銅滓が付着する。116は98次SX2480上層埋土から出土した銅付着鑄型である。鑄型の胎土は極めて緻密で砂粒が細かい。117は85次暗褐土層出土の銅滓で、全体的に緑青で覆われる。底面が曲線を描き、埴塼内面の形状を反映する可能性がある。118は84次暗褐土層出土の銅塊である。製品を製作した際のバリ状の遺物であろうか。119は147次暗褐土層から出土した銅滓で、底面の曲線は埴塼底部の形状を反映する。120は147次茶褐土層から出土した銅滓で、垂れ流れたような形状となる。121は147次茶褐土層から出土した銅滓で、全体的に緑青で覆われる。

小型埴塼内面の形状を残す銅塊

羽口 (1～62) 羽口片は数多く出土するが、全形がわかる資料は限られている。小片の中に送風管が含まれる可能性はあるが、大半の資料が操業時の被熱痕跡を残す小片のため、基本的に羽口として報告する。

1～6は掘立柱建物の柱穴埋土から出土した羽口片である。

1は129次SB2005埋土から出土した羽口先端部の破片で、二次的な被熱を受ける。直径はおおよそ6cmに復元できる。2は84次SB2383出土の羽口先端付近の破片で、わずかに二次的な被熱が確認できる。直径はおおよそ6cmに復元できる。3～5は98次SB2885埋土から出土した。数多くの羽口片が出土する。3は羽口先端の破片で、二次的な被熱により溶解している。直径6.5cmに復元できる。4も羽口先端の破片で溶解が進んでおり、椀形滓上面との接地面で

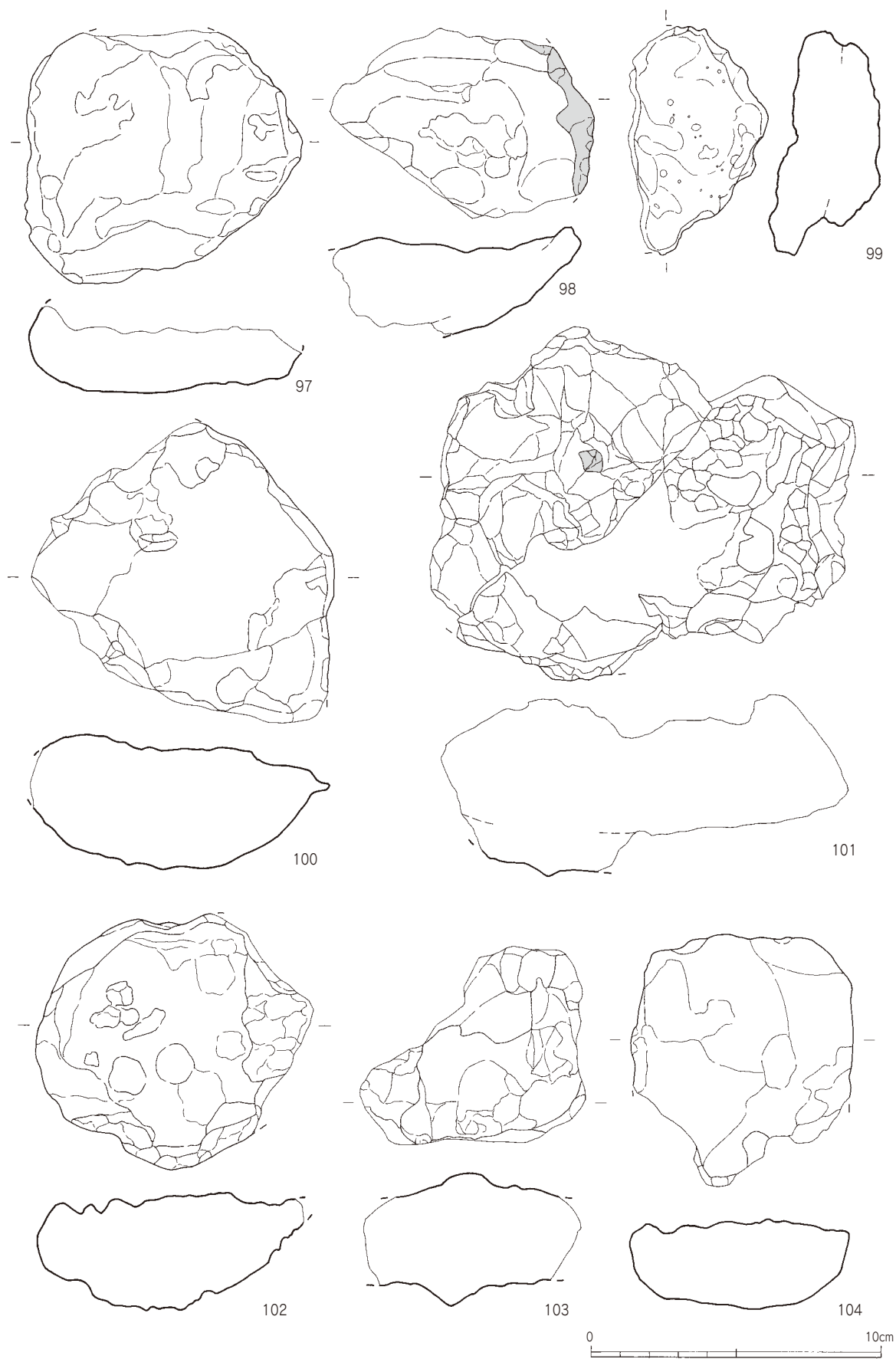


Fig.60 鍛冶・铸造関連遺物実測図⑨ (1/2)

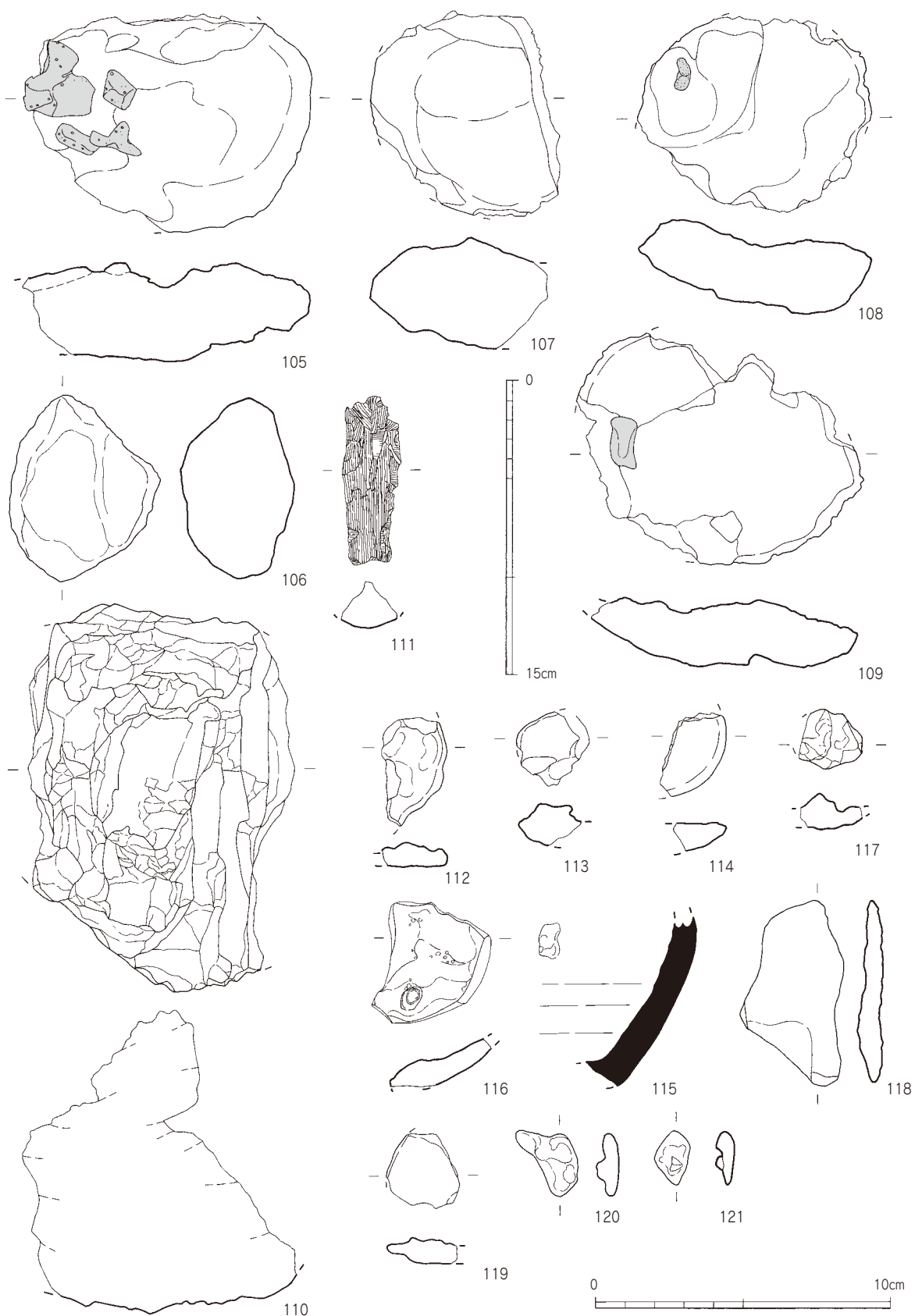


Fig.61 鍛冶・鑄造関連遺物実測図⑩ (1/2・1/3)

剥離する状況にある。直径5.5cmに復元できる。5は羽口先端付近の破片で被熱による色調の変化が見られる。直径は約7.5cmである。6は98次SB2900埋土から出土した羽口小片である。

7～27は溝の埋土から出土した羽口片である。

7～9は17・76次のSD320埋土最下層（砂層）から出土した羽口片である。7は羽口先端の破片で、一部に銅滓が付着することから、銅製品の鑄造に用いた羽口と判断できる。8は羽口先端付近の破片で、被熱による変色が確認できる。直径は約7cmである。9は羽口先端付近の破片で、外面調整の強いナデが特徴的である。内面に芯棒を抜き取った際の縦方向の擦痕が残る。

10は76次SD2010最下層（砂層）から出土した羽口である。先端付近の溶解が進むものの、一部に本来の形状を残し、羽口先端はゆるやかな曲線を描く。器面は縦方向のナデである。胎土には砂粒を多く含む。11は76次SD2015下層から出土した羽口である。羽口先端は溶解が進み変形する。一部に銅錆が付着する。粘土接合面で剥離しており、粘土帯を巻き付けた状態が観察できる。

12～21はSD2340埋土出土の羽口である。12は85次SD2340上層、13～15は85次SD2340下層、16は85次SD2340埋土、17～20は98次SD2340中層（黒色土層）、21は124次SD2340最下層（砂質土）でそれぞれ出土した。12は羽口先端付近を欠損するが、根元まで残存する。根元付近はゆるやかに八字状に開き、やや厚みが薄くなる。外面は縦方向のナデ調整で、面取り状を呈し、縦方向の稜が薄く見られる。内面には軸棒を抜き取る際の痕跡である横方向の回転擦痕と縦方向の直線擦痕が見られる。胎土は若干の砂粒を含むものの、精製粘土を用いている。13は羽口先端の破片で、成形時の軸棒がやや偏る。胎土には砂粒を多量に含む。14も羽口先端の破片である。外面調整は強い縦方向のナデで、面取り状となる。15も羽口先端の破片だが、作業時間が短かったためか、それほど溶解せずに原形を保つ。偶発的なものと思われるが、成形もしくは乾燥時に羽口中央部分に平坦面をつくるような押圧を受けており、断面が歪な楕円形状を呈する。16も羽口先端付近の破片で、被熱による変色が見られる。内面には軸棒を抜いた際の縦方向の擦痕がある。17も羽口先端付近の破片である。先端付近の溶解はあまり進んでおらず、一部に原形が確認できる。先端部の調整は手持ちヘラ切り状で、直線的な平坦面を形成する。18も羽口先端付近の破片である。内径3.5cmを測り、やや大きい。19は根元を欠損するものの、羽口先端まで残る。先端部の調整は17に類似しており、直線的な平坦面を形成する。20は羽口先端の破片である。外面には板状工具を用いたと思われるナデ調整の痕跡が確認できる。21は羽口根元付近の破片である。根元付近はゆるやかに八字状に開き、器壁が薄くなる。根元付近の外面調整には沈線状の板状工具痕が密に入る。

22は83次SD2359埋土から出土した羽口先端付近の破片である。器壁が厚く、重厚な造形である。胎土には砂粒を多量に含む。23は84次SD2397埋土出土の羽口小片である。直径約6cmに復元できる。

24は85次SD2471埋土出土の羽口である。25は129次SD2835埋土出土の羽口先端付近の破片である。26は98次埋土出土の羽口小片である。27は147次SD4037埋土出土の羽口先端付近の破片である。内面の一部に銅錆が付着する。

28～34は土坑から出土した羽口片である。28は76次SK2007出土の羽口で、根元部の破

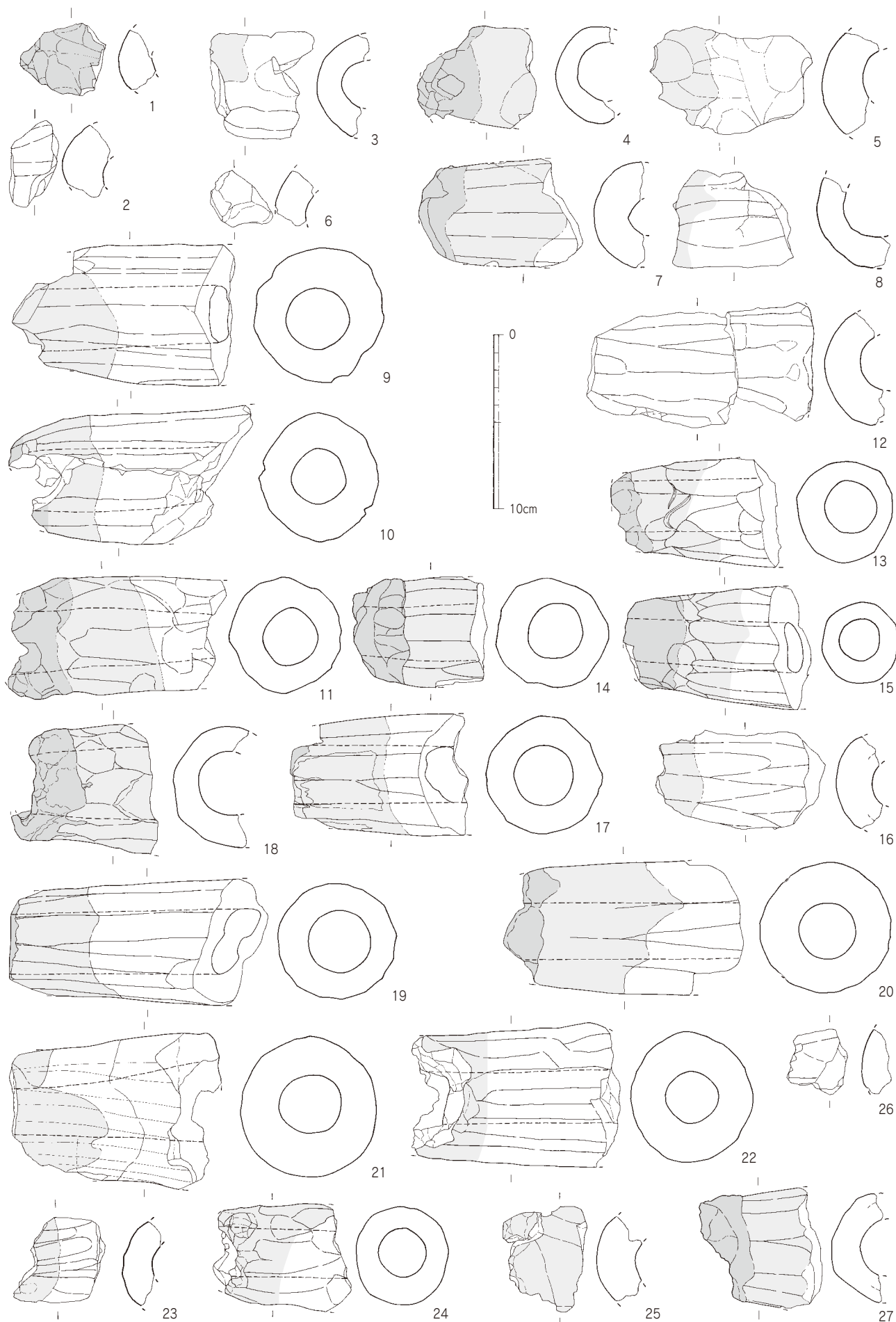


Fig.62 鍛冶・鑄造関連遺物実測図⑩ (1/3)

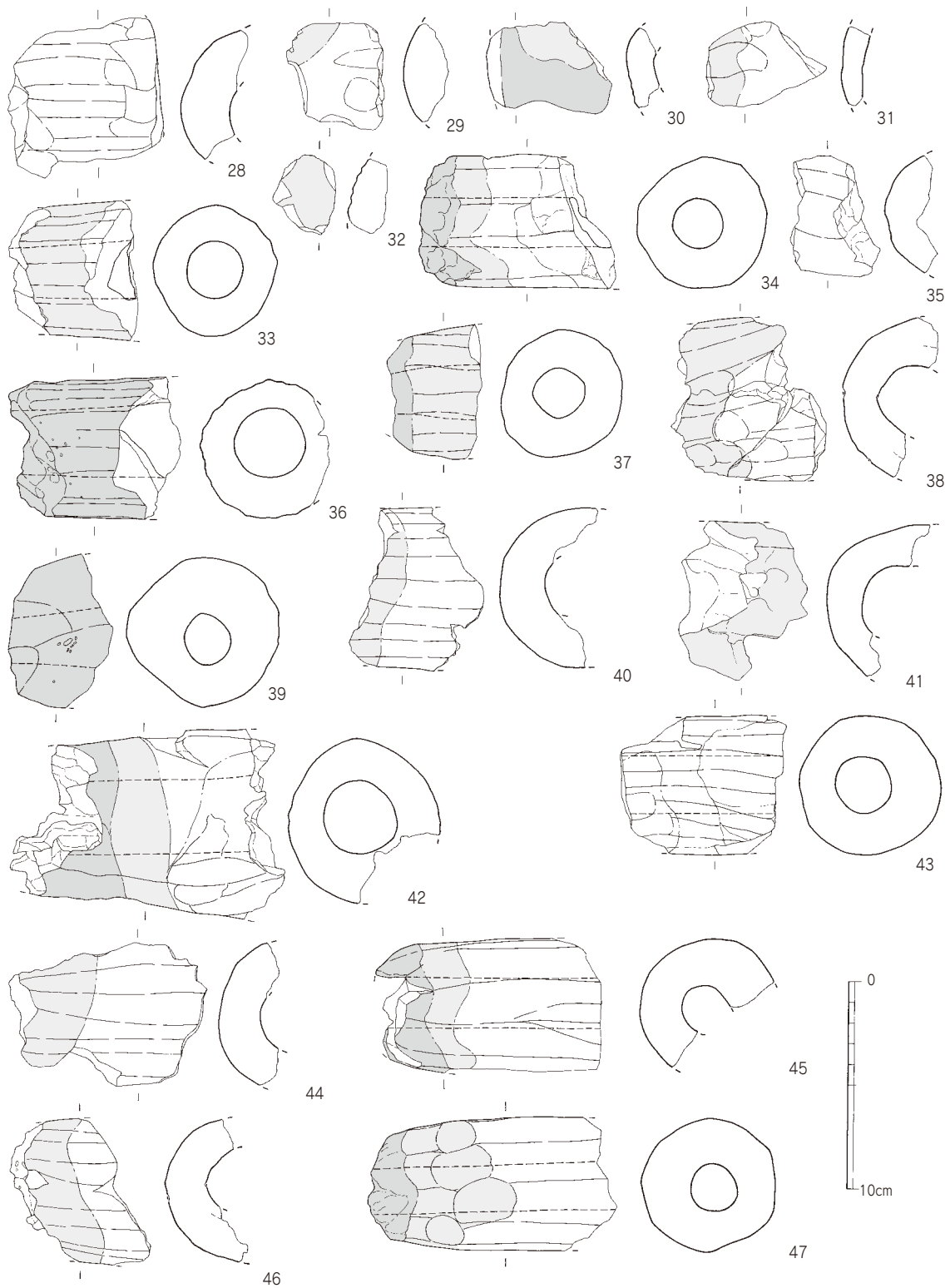


Fig.63 鍛冶・鑄造関連遺物実測図⑩ (1/3)

片である。二次的な被熱による色調の変化が根元付近にまで及ぶ。外面はケズリに近い縦方向のナデ調整で、内面には芯棒を抜き取る際の擦痕が見られる。胎土には精製粘土を用い、砂粒が目立たない。29は85次SK2475出土の羽口小片で、先端付近の破片である。30は85次

SK2475出土の羽口小片で、先端の破片である。作業時の被熱を受けて溶解が進むが、部分的に原形を保つ。31は98次SK2882出土の羽口片である。二次的な被熱と内外面の調整から羽口片と判断できる。器壁の薄さは、成形時に芯棒が偏っていたことに起因すると考えられる。32は98次SK2883出土の羽口で、先端の破片である。33は147次SK4056出土の羽口先端の破片である。先端部の破損は部分的に作業時の溶解を含むが、大部分は二次的な欠損に起因する。34は187次SK4573出土の羽口先端の破片である。作業時に炉の上方に位置していた部分は下方向に溶解する。

35～47は流路・落ち込みから出土した羽口片である。

35は83次SX2336出土の羽口片である。36・37は85次SX2488出土の羽口片である。

38～47は98次SX2480出土の羽口片である。このうち、38～43は上層埋土から出土した。SX2480出土羽口
38は中間付近の破片で、作業時の被熱による色調の変化が見られる。外面のナデ調整が比較的丁寧で、稜が目立たない。39は作業により、先端部の形状が歪に変化している。胎土に砂粒が目立つ。40は中間付近の破片で、粘土接合面を起点に二次的に破損する。41は中間付近の破片で、作業時の被熱による色調の変化が見られる。39と同様に外面のナデ調整が比較的丁寧で、稜が目立たない。内面には芯棒を抜き取る際に生じた横方向（回転）の擦痕が見られる。また、破損面は粘土の継ぎ目を起点に生じている。42は先端付近の破片で作業時の被熱による色調の変化が外面全体に及ぶ。胎土にはスサを若干含む。43は中間付近の破片で、外面のナデ調整がやや強い。44は中間付近の破片である。外面の縦方向のナデ調整は単位が細かい。内面には斜め方向（回転）の擦痕が見られる。45は作業による形状変化は少ない。内面に斜め方向（回転）と縦方向の擦痕が観察できる。胎土は肌理の細かい砂質となる。46は羽口先端の作業時の消耗が著しい。47は先端付近の破片で、破損面に部分的に溶解物が付着するが、大部分は二次的な欠損となる。

48～62は整地層や包含層から出土した羽口片である。

48・50～52は17次の遺構面直上の包含層、49は17次第2整地層から出土した。外面のナデ調整が丁寧で、稜が目立たない。胎土には砂粒を多量に含む。50は粘土の継ぎ目を起点に破損が生じている。51は羽口先端の破片で作業時の溶解により、大幅に摩耗する。溶解箇所は部分的にガラス質となる。52は芯棒が中心軸より大幅に偏った状態で成形される。53は76次暗灰土Bから出土した羽口中間の破片である。根元に向かってハ字状に開く形状が特徴的である。54は76次茶灰色土層出土の羽口で、先端部分の粘土をやや厚めに成形している。外面には多くの指頭痕が見られる。55は84次焼土層出土の羽口先端の破片で、作業時の被熱により溶解が顕著に進む。胎土には砂粒を多量に含む。56は84次灰褐土B層から出土した羽口先端の破片である。一部に緑青が見られ、銅の鑄造に用いたと判断できる。57は98次黒茶色土層から出土した羽口である。先端を二次的に欠損するものの、ほぼ作業時の形態を残している。芯棒を回転させながら抜き取ることで、根元に向かってハ字状に開くように成形する。内面には、この際に生じた螺旋状（回転）の擦痕が見られる。根元端部を平坦にナデ調整で整え、一部に棒状圧痕が見られる。58～61は147次茶灰色土下層出土の羽口である。58は先端部が部分的にガラス質となる。59は先端のみが極端に被熱する。溶解による摩耗も若干あるが、本来的に先端部がすぼまる形状となる。60は中間部の破片で、先端部と根元部の両端を二次的に欠損する。

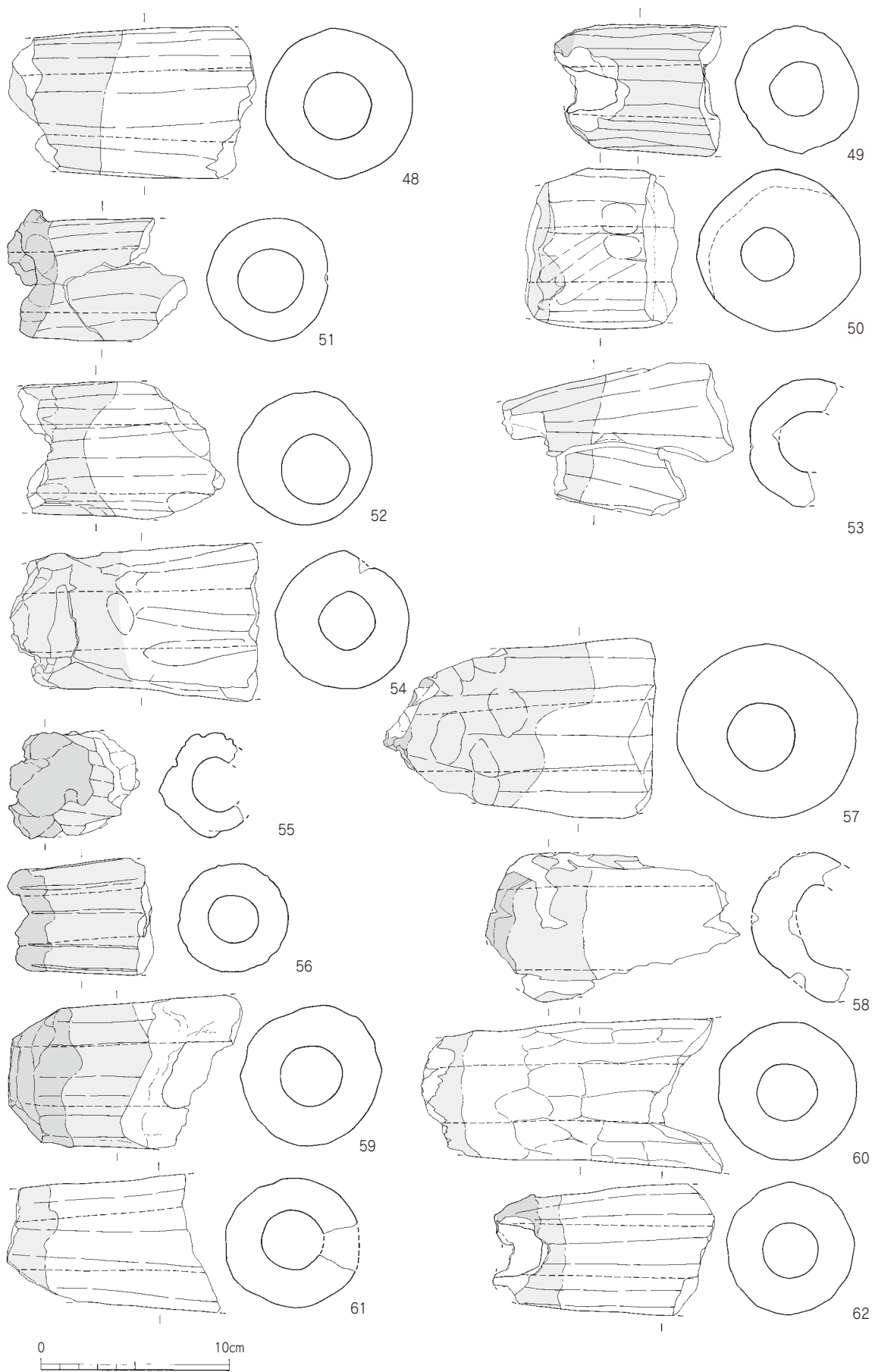


Fig.64 鍛冶・铸造関連遺物実測図⑬ (1/3)

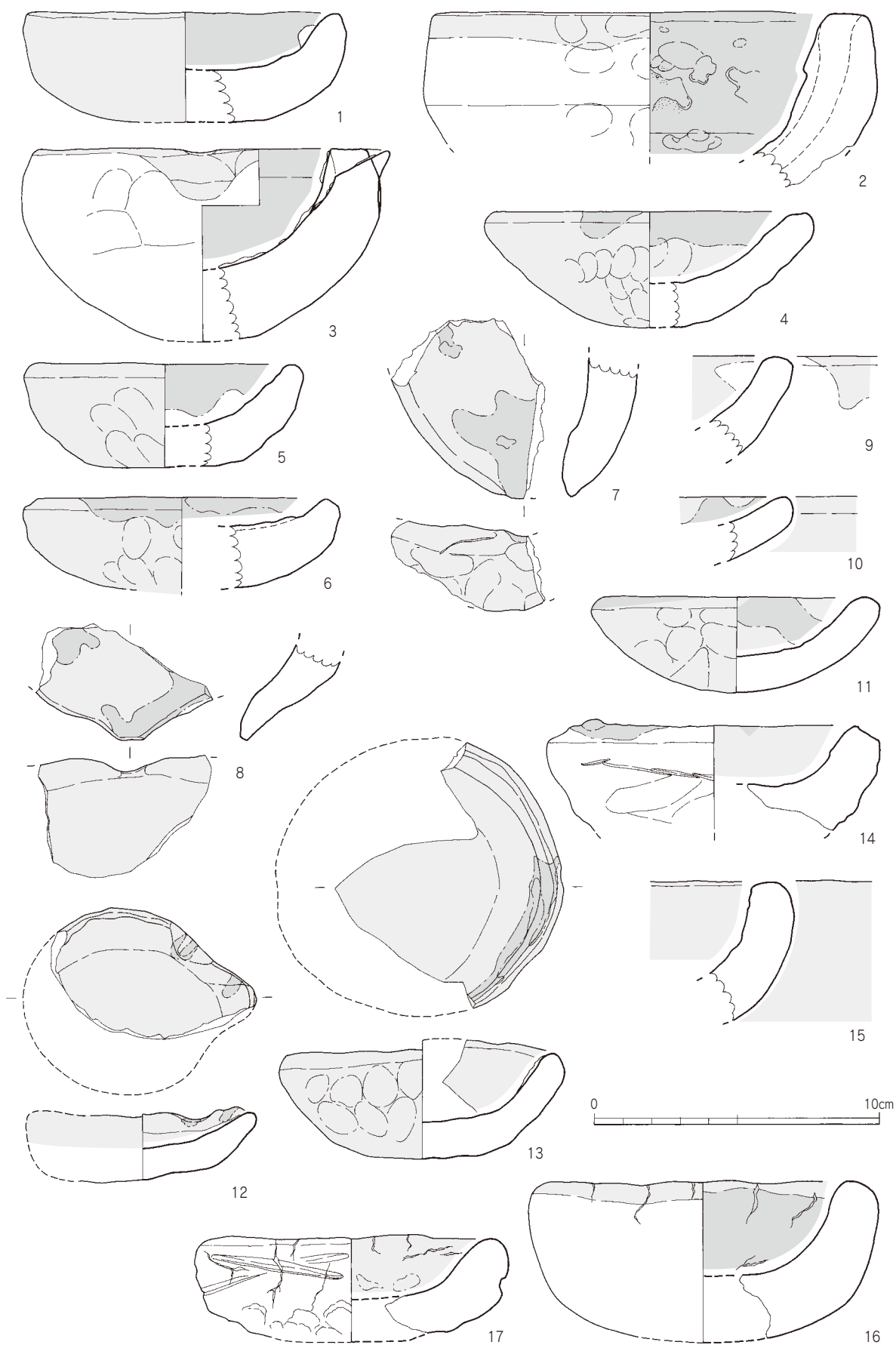


Fig.65 鍛冶・铸造関連遺物実測図④ (1/2)

61は二次的に欠損した際に、粘土接合面での剥離が目立つ。62は147次暗褐色土層出土の羽口で、59と同様に先端部がすぼまる形状となる。

埴塙・取瓶（1～40）1～17は溝出土の埴塙・取瓶である。埴塙と取瓶の区別は外面の被熱状況に依ったが、両者は明瞭には峻別できない。

1・2はSD320埋土の出土品で、1が14次SD320灰白砂礫層で、2が76次SD320最下層で出土した。1は二次的な被熱により、内面に溶解物が見られる。胎土には少量の粉殻を含む。2の内面には緑青が面的に付着しており、銅の鑄造に用いたと分かる。また、他の出土品に比べ、外面に明瞭な被熱痕跡を残さないことから取瓶であった可能性が高い。

3は76次SD2015埋土の出土品で注口をもつ。粘土接合面に沿って生じた亀裂から溶解が進む。

4～11はSD2340埋土の出土品である。4が87・90次SD2340最上層、5が87・90次SD2340上層、6～8が87・90次SD2340中層（黒色粘質土・黒灰砂質土）、9が85次SD2340下層、10・11が87・90次SD2340下層（腐植土）で出土した。4は内外面に指頭痕が顕著に残る。5は胎土に砂粒を多く含む。6は底が浅くパレット状となるが、底部の器壁は厚く成形する。作業時の被熱により亀裂が生じ、亀裂面の溶解が進行している。また、亀裂面の一部には銅が付着しており、銅の鑄造に用いたと判断できる。7は底が浅くパレット状となり、注口も部分的に見られる。内外面が還元色を呈しており、埴塙と取瓶を併用した用途が想定できる。外面の指頭痕は顕著であるが、内面は丁寧にナデ調整を加えている。8も7と類似した形態となるが、底がやや深い。9・10は口縁端部の破片で、10には緑青が見られる。11は破面に緑青が面的に付着しており、作業時に底が抜けたことが分かる。

12・13は84次SD2419焼土中から出土した。12は歪みが著しく、全体的に華奢な印象を受ける。注口に隣接して棒状圧痕がある。注口と棒状圧痕の双方に溶解物が付着することから、作業時には二箇所から銅が流れ出たと分かる。胎土には粉殻を多量に含む。13は明瞭な注口をつくらず、器壁全体を凹ませた箇所を注口に利用する。胎土には若干の粉殻を含むが、12ほど顕著ではない。14は147次SD4044北半から出土した。口縁端部下方に稲藁圧痕があり、乾燥時に全周するように巻いていたと考えられる。胴部下半は粘土接合面で剥離欠損する。外面の二次的な被熱は弱く、取瓶として用いられたと考えられる。15は147次SD4054から出土した。胎土に砂粒を多く含む。16は187次SD4567から出土した。胎土には若干の粉殻を含む。外面の二次的な被熱は弱く、取瓶として用いられたと考えられる。17は187次SD4569から出土した。14と同様に口縁部先端下方に稲藁状の圧痕が見られる。

18～27は土坑と流路から出土した埴塙・取瓶である。

18～20は83次SK2344の出土品であるが、これらはSK2344の新段階に掘削されたSK2344Bの埋土に伴う資料となる。18は注口のみではなく、注口下方の外面にも赤色溶解物が付着する。胎土には砂粒を多量に含む。19は胎土に少量の粉殻を含む。20は全体の1/2強が残る。内面の底に円形状の溶解が見られ、湯が溜まった痕跡が確認できる。胎土には砂粒と粉殻を含む。

SX2480 21～27は98次SX2480の出土品である。21はほぼ完形に近く、下部に突起をもつ形態と
出土埴塙・
取瓶 なる。器壁は全体的に還元色を呈し、内面と注口付近に溶解物が見られる。22の下部は粘土接

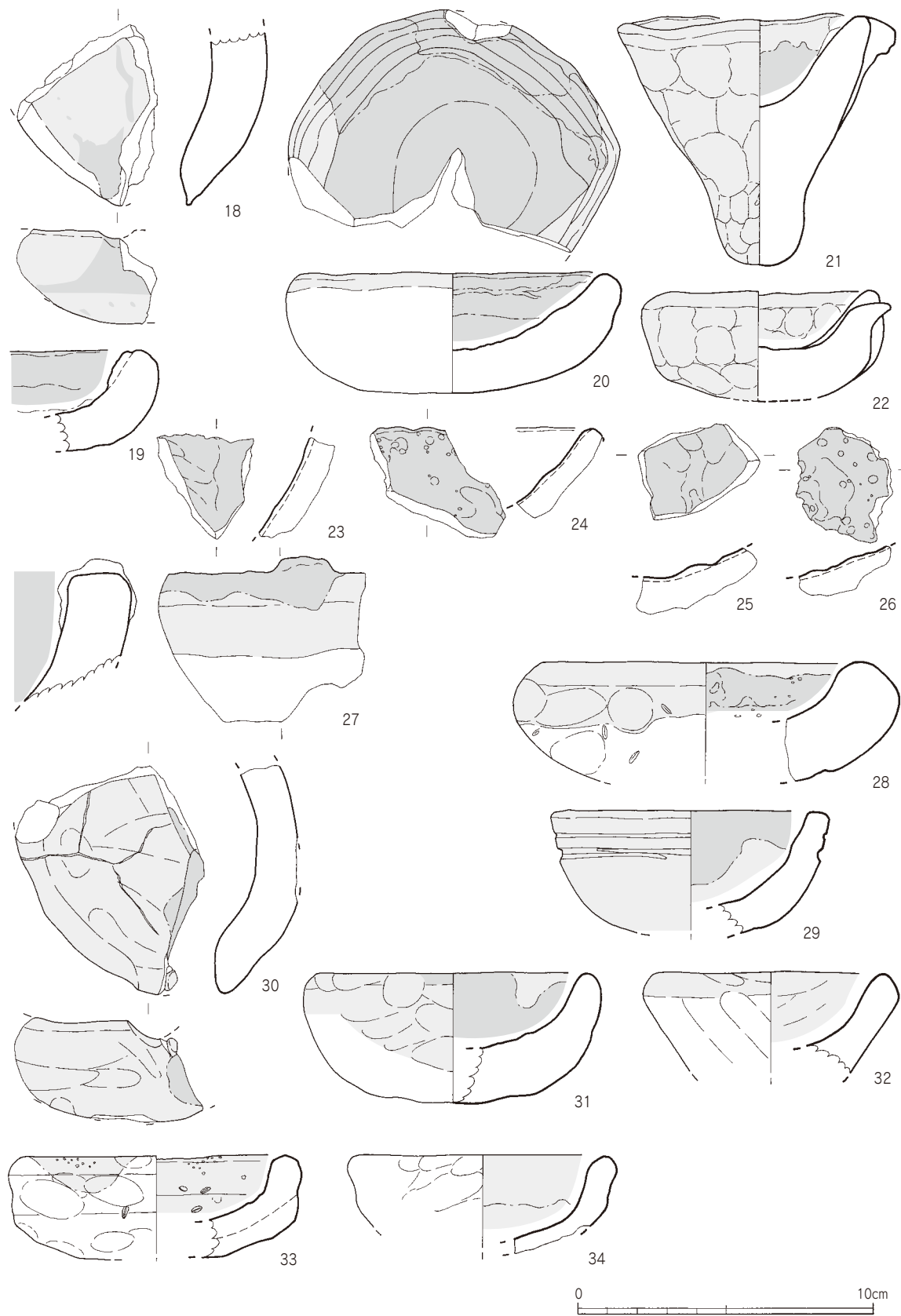


Fig.66 鍛冶・鑄造関連遺物実測図⑬ (1/2)

合面で剥離欠損する。溶解物の付着は底部内面に薄くみられるのみだが、作業時の亀裂はほぼ全面に及ぶ。23～26は埴塼・取瓶内面の剥離片である。いずれも溶解物が面的に付着する。27は溶解物の付着が著しく、注口がない口縁部上端にも及んでいる。

28～40は整地層や包含層から出土した埴塼・取瓶である。

28は17次第1層から出土した。器壁は全体的に肉厚に成形されており、胎土には若干の粉殻を含む。29は76次暗灰土B層から出土した。口縁部先端下方に稲藁圧痕が見られ、乾燥段階で全周するように巻かれていたことが分かる。稲藁圧痕は明瞭に二条に分かれる。30・31は84次灰褐色土B層から出土した。30は器壁全体に丁寧な調整を加える。注口下部の破損面に多くの溶解物が付着しており、作業時の損傷が深刻であったことが窺える。31も30と同様に注口付近と思われる個所の欠損部にも溶解物が付着する。32～34は84次焼土層の出土品である。32は内面に溶解物の付着がなく、被熱の程度が極めて軽微である。33は胎土に粉殻を多く含む。注口ではない口縁部先端にも強い被熱と溶解物の付着が見られる。34も32と同じく、被熱の程度は弱い。底部外面は粘土接合面で剥離する。

35・36は147次茶褐色土層から出土した。このうち、36は下層埋土に伴う。35は口縁部外面に溶解物が付着しており、注口付近の破片と思われる。36は亀裂面に溶解物が貫入する。溶解物の一部は鉄錆状となる。37は内面と口縁部付近が強く被熱し、底部外面にはとくに被熱痕跡はない。強く被熱した部分は亀裂が複数走り、作業による損傷過程が窺える。38・39は147次暗褐色土層の出土品である。38は三つの破片を接合したものであるが、完形に復元できる。底部外面は二次的な被熱が強いためか、全体的に摩耗しており、埴塼としての使用が認められる。内面には黒色溶解物に混じって、部分的に銅自体が残されている。また、黒鉛化木炭の小片と思われる付着物も認められる。これらの溶解物は成形段階でつくられた注口の反対側に厚く付着しており、注口と異なる口縁部先端から流れ出るように外面にも厚く付着する。従って、作業時の湯（銅）は本来の注口とは反対方向から排出されたと分かる。胎土は全体的に多量の砂粒を含む。39はわずかに口縁部先端に注口を成形する。注口付近には乳白色の溶解物が薄く付着する。40は187次の遺構検出面で出土した。胎土には粉殻を含む。

完形の埴塼

鑄型 (41～53) 41～53は鑄型の破片であるが、本来の形状を残す資料は少量となる。小片での鑄型の峻別は、鑄型特有の精良な胎土（真土）の有無に依るところが大きい。なお、確認できた鑄型はすべて土製品である。

41～50は溝・流路・落ち込みから出土した鑄型である。

41は76次SD320灰白砂土層から出土した。隆起状の突起が見られるが、全体的な形状は不明である。胎土は二種類で、外側は粗い砂粒を多量に含み、内側は肌理の細かい真土を用いる。42～44は98次SD2340から出土した。このうち、42はSD2340上層埋土、43・44はSD2340中層埋土（黒色土）に伴う。42は鑄型内面の形状を全く残していないが、その大きさから比較的大型の製品の鑄造に用いたものと考えられる。内側には精良な真土を用い、外側には粉殻や砂粒を含んだ粗い胎土を用いる。胎土の状況から、43・44とは別個体と判断できる。43は炉壁上部の破片にしては溶着物の付着が著しく、鑄型外型の中でも湯口に近い破片と思われる。胎土は大型の石英を多量に含む。44は43と類似した胎土と被熱痕跡をもつことから、同一個体の破片の可能性がある。内面にわずかに真土を貼った痕跡が見られる。45は85次



Fig.67 鍛冶・铸造関連遺物実測図⑩ (1/2)

SX2477埋土出土の鑄型外型である。溶解物の付着がなく、不丁地区出土の埴塙・取瓶と形状が異なることから鑄型とした。形状は52と類似する。

46は98次SX2480埋土出土の鑄型断片である。47～49は187次SD4566埋土出土の鑄型である。47は口径19cmに復元できる口の開いた小型鍋状の器の鑄型で、内面に細かい砂質の真土を1.5mmの厚さに貼る。製品としてはこの真土の下端までとなる。48は内面に明確な真土は認められないが、本体の胎土自体がきめの細かい土となる。天井中央付近に湯口らしき痕跡がわずかに見られる。49は真土そのもので、製品は直径5.2cmの小型釘隠し状のものが想定できる。50は187次SD4570B出土品で、鑄型と思われるが、真土は認められない。二次的な被熱痕跡から湯口の可能性もある。

51～53は包含層から出土した鑄型である。

51は17次第2層から出土した。内面がゆるやかな湾曲を描く鑄型の外型である。外側の粗い胎土には籾殻が多く含まれる。52は87次灰褐色土層出土の鑄型で、内面に銅の小片が付着する。

埴塙・取瓶
転用鑄型

埴塙・取瓶と形状が類似するが、内面に精良な真土を貼りつけており鑄型であることが確認できる。真土が剥落した箇所には銅片や溶着物の付着が見られることから、埴塙・取瓶を転用した可能性がある。53は187次暗褐色包含層から出土した。断面円形の湯口部内側に厚く真土が残る。湯口部が円筒状に長く、真土を貼ることから、製品は半球形に棒状の突起物がつく形状である可能性がある。

炉壁(54～69) 不丁地区で出土した炉壁で原位置を保つ資料は現状で確認されておらず、いずれも遊離した資料となる。

54～57は溝埋土出土の炉壁である。

54は85次SD2015の上層埋土から出土した。炉壁中央の破片と考えられ、内面は鉍滓が付着しないものの強い被熱により、溶解が進んでいる。外側胎土は溶解部分との境で剥落する。55・56はSD2340から出土した。このうち、55は90次SD2340下層腐植土、56は98次SD2340中層に伴う。55は炉壁下部の送風口付近の溶解物と考えられ、強い被熱による溶解が著しい。部分的にガラス質を呈している。56は炉壁下部の比較的上部内面の破片と考えられる。

円筒形
自立炉

55と同様に強く被熱しており、溶解物が垂下する。57は85次SD2469埋土から出土した。炉壁上部の破片で、内面は強い被熱により亀裂が無数に入るものの溶解にはいたっていない。本炉壁から炉の上部が円筒形を呈することが分かる。58は17次SD320中層から出土した。炉床付近の炉壁で、溶解により剥落してきた上部の炉壁とも再結合する状況にある。胎土には籾殻を多量に含む。本炉壁からは炉下部から円筒形となる炉が想定できる。

SX2480
炉壁

59～61は98次SX2480埋土から出土した。このうち、61は上層埋土に伴うものである。59は不丁地区で出土した炉壁で最も大型の破片となる。炉壁下部の上側の破片で、溶解が進む端部は送風口に近いと考えられる。内面は溶解物が垂下する状況が観察できる。胎土には砂粒やスサを含む。60は炉壁上部下側の破片と考えられ、操業時の溶解はそれほど進行しておらず、内面は乳白色を呈する。外面は粘土接合面で面的に剥離する。61は炉壁中央でも下側の破片と考えられ、溶解物が下に垂下する状況が観察できる。操業時の被熱により外面まで色調の変化が及び、淡い還元色を呈する。

62～66は整地層や包含層から出土した炉壁である。

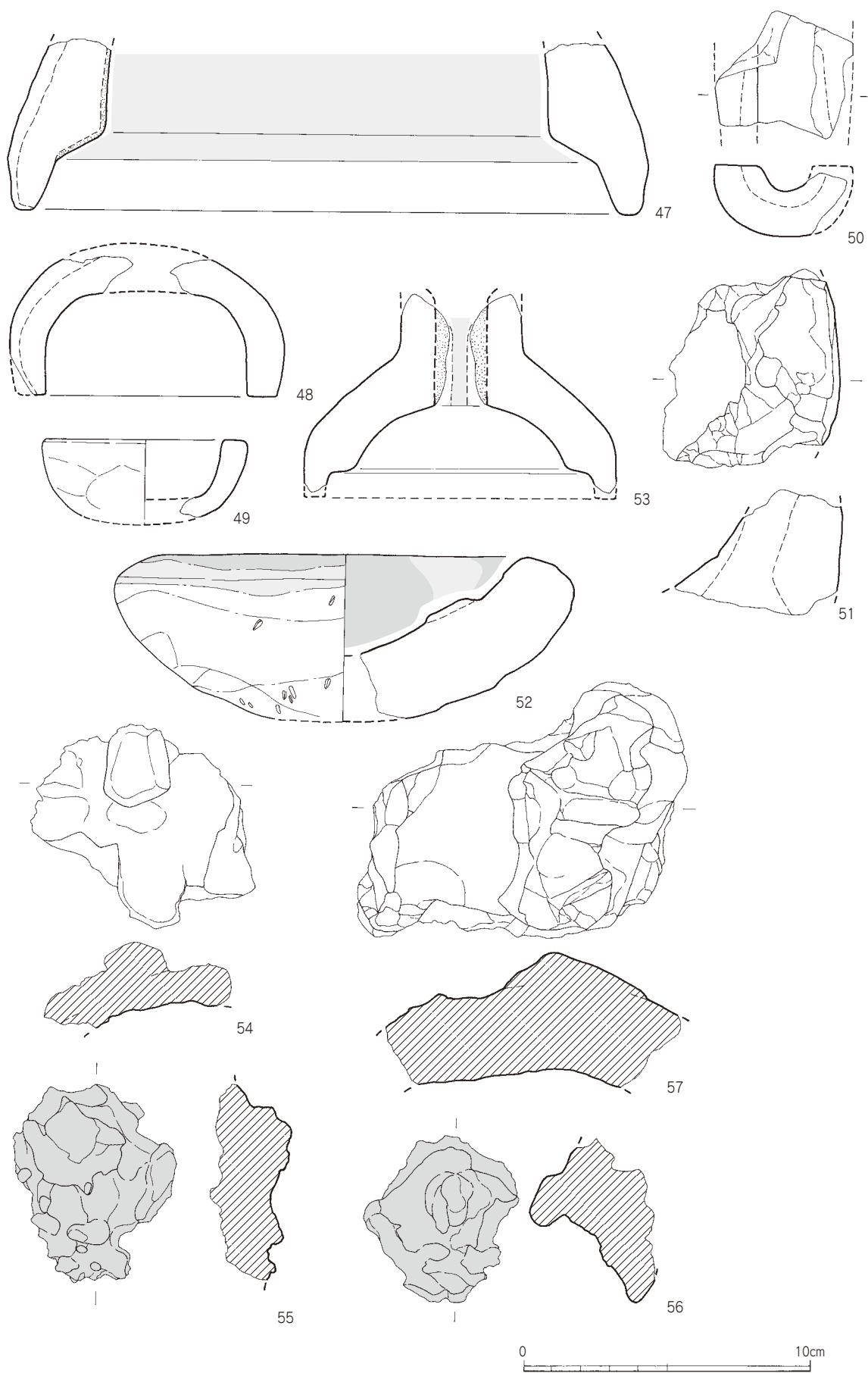


Fig.68 鍛冶・鑄造関連遺物実測図⑰ (1/2)

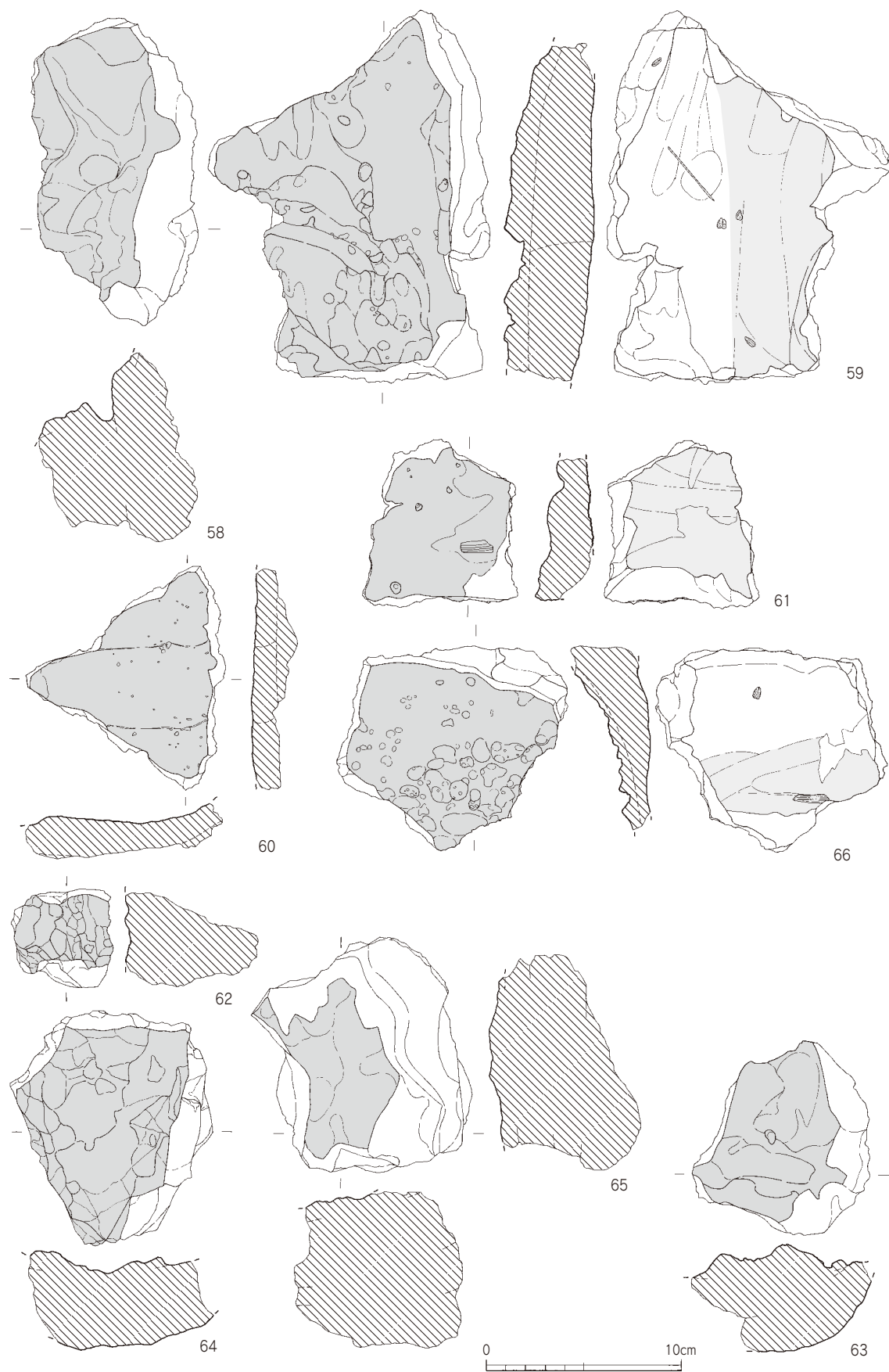


Fig.69 鍛冶・铸造関連遺物実測図⑱ (1/3)

62は14次灰黒粘質土層から出土した。炉壁中央でも下側の破片と考えられ、内面に垂下する溶解物が付着する。63は76次暗灰砂礫層から出土した。炉床付近の炉壁で操業による溶解が著しく進んでいる。64は85次暗褐色土層から出土した。炉壁中央でも下側の破片で、内面は強い被熱により溶解する。炉壁全体がゆるやかに湾曲しており、円筒形の炉が想定できる。65は85次焼土層から出土した。本資料も64と同様に炉壁中央でも下側の破片で、ゆるやかに湾曲する形状となる。炉壁の厚みは約8cmとなる。二次的な欠損では、粘土接合面を起点に剥離する箇所が多い。66は98次遺構面直上の包含層から出土した。炉壁下部の破片で、操業による溶解の浸食が著しく、送風口に比較的近い部位と判断できる。67は147次調査区の暗褐色土層から出土した。炉壁下部の炉床付近の破片である。胎土にはスサを多量に含む。68は147次調査区茶褐色土下層から出土した。67と同様に炉壁下部の炉床付近の破片で、亀裂部分から外側に向かって溶解が進む。69は187次調査区遺構面直上の包含層から出土した。不丁地区出土の罏塙・取瓶に比べると、明らかに器壁が厚く、直径も大幅に大きくなることから炉壁上端部の破片と考えた。内面はわずかに溶解が進む。

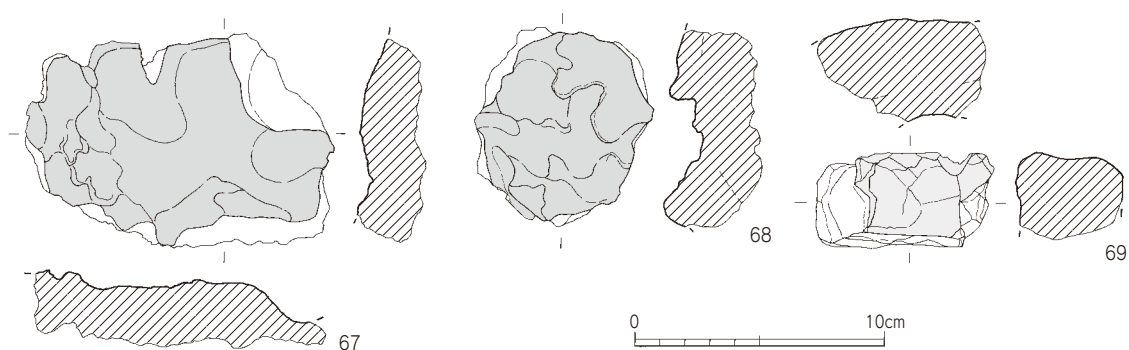


Fig.70 鍛冶・鑄造関連遺物実測図⑨ (1/3)

4) 白色物付着土器 (Fig.71・72, PL.59)

確認した白色物付着土器は78点である。遺構出土の遺物はSD320中層がFig.70-1, 腐植土層がFig.71-4, 最下砂がFig.71-7, SD2340下層がFig.71-9, SD2347がFig.70-3である。

1・2・4～6は高台がない須恵器壺である。1は色調が内外面灰色, 調整は外面が回転ヘラケズリである。内面に黄白色の物質が密に付着している。2は色調が内外面灰色で, 調整は内外面回転ナデである。胴部内面に白色の物質が付着している。4の色調は内外面灰色である。調整は内外面回転ナデで, 外面は砂粒が右から左へ移動している。内面の底部と胴部の境付近に白色の物質がわずかに付着している。5の色調は内外面暗灰色。調整は底部外面がナデ, 外面の底部と胴部の境が回転ナデ, 内面が回転ナデである。主に底部内面に褐色粒を含む白色の物質が塊状に付着している。付着位置はナデの単位の凹部が顕著で, 特に底部と胴部の境が密である。6の色調は内外面灰色。調整は内外面回転ナデである。内面の底部から胴部にかけての凹部に白色の物質が疎らに付着している。

3は陶器の壺底部で, 色調は外面暗灰色, 内面は赤褐色である。調整は底部外面が無調整で, 胴部外面および内面が回転ナデである。内面に白色の物質が広範囲に見られる。底部内面には厚さ約1mmの粒が連続し, 主にナデの単位の凹部に付着している。

7は黒色土器の坏底部である。高台は短く, 体部は緩やかに伸びる。色調は外面が淡褐色, 内面が黒色である。内面に黄褐色の付着物が広範囲に見られ, 部分的に塊状を呈する。

8・9は高台付須恵器壺である。8の色調は外面が黒灰色, 内面が灰色である。内面の底部と胴部の境付近に白褐色の物質が付着している。9の色調は外面黒灰色, 内面灰黒色。調整は底部外面ナデ, 胴部および内面が回転ナデ, 底部内面中央は無調整である。塊状の白色の物質が内面の胴部と底部中央の凹部に付着している。

10は高台付須恵器壺の底部である。やや高めの高台が外向きに付く。色調は内外面灰色である。調整は外面が回転ヘラケズリ, 内面が回転ナデである。底部から胴部にかけての内面に灰白色の物質が付着している。底部内面の付着物は淡褐色の粒を含み, 厚さ約2mmである。胴部内面の付着物は, 3層程度の薄い層が重層している。

11は須恵器平瓶で, 頸部下半から体部にかけての破片である。色調は内外面灰色である。調整は頸部から体部上半が回転ナデ, 外面下半は回転ヘラケズリである。頸部から体部内面に黄褐色の付着物が見られ, 体部上部と下部の境の内面は部分的に塊状を呈する。

12は須恵器横瓶である。破片のため, 天地は不明である。色調は外面が暗灰色, 内面が灰色。調整は外面がタタキ後カキ目で, 内面には当具痕がみられる。胴部の当具による凹部に白色の物質がわずかに付着している。

白色物質について簡易的ではあるが, 蛍光X線分析法により材質を分析したところ, 一様に鉄 (Fe) とアルミニウム (Al) を検出した。土器付着の白色物質においてこの元素が検出された事例は, 平城宮跡や藤原宮跡出土の須恵器平瓶などにみられ, 小便に由来する可能性が指摘されており, これらも同様に推定できるものとする。ただし, 今回の分析による見解は推定に留まるものであり, 最終的な判断は詳細な分析, 検討を経て別稿にて行いたい。

小便に由来

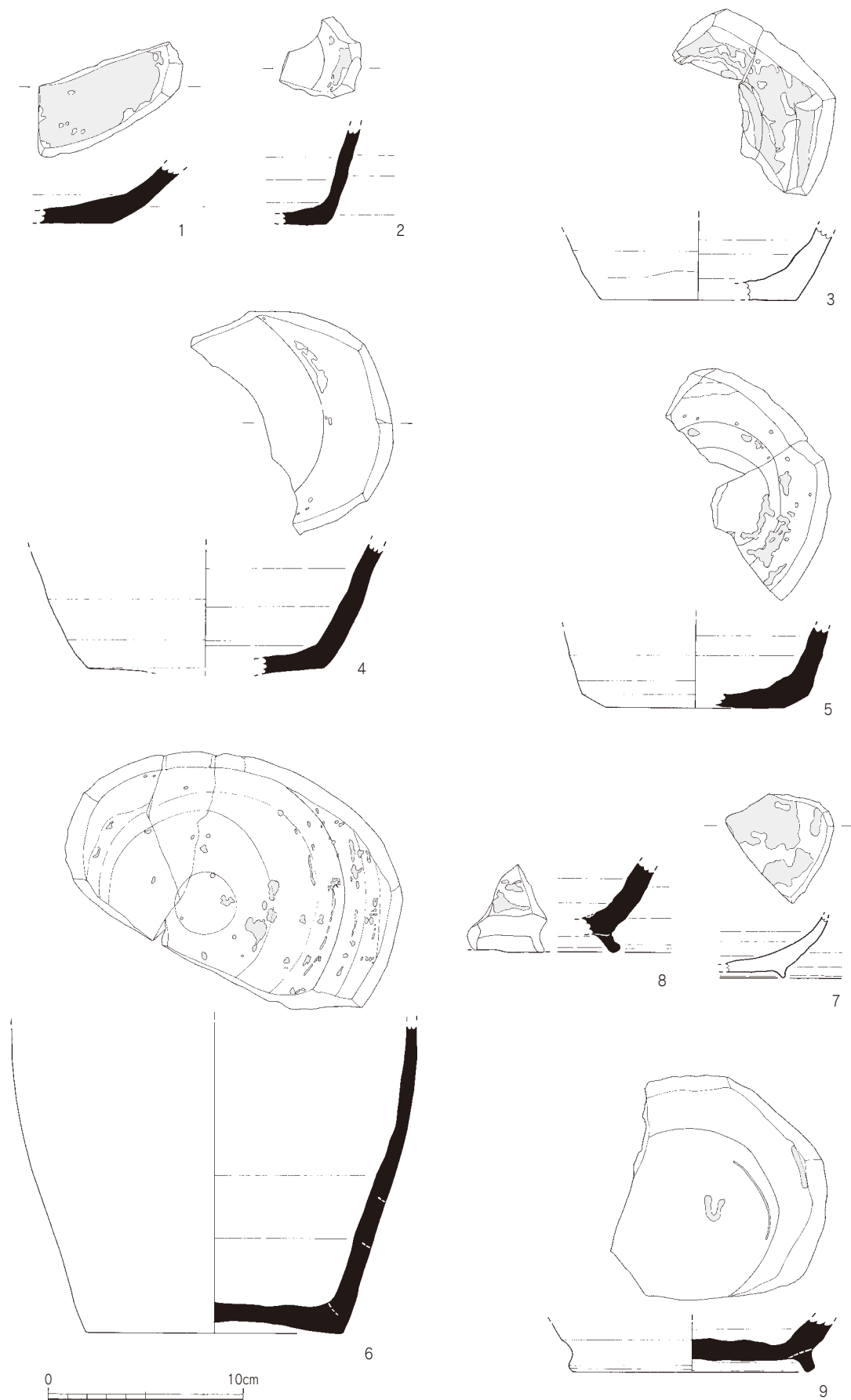


Fig.71 白色物付着土器実測図① (1/3)

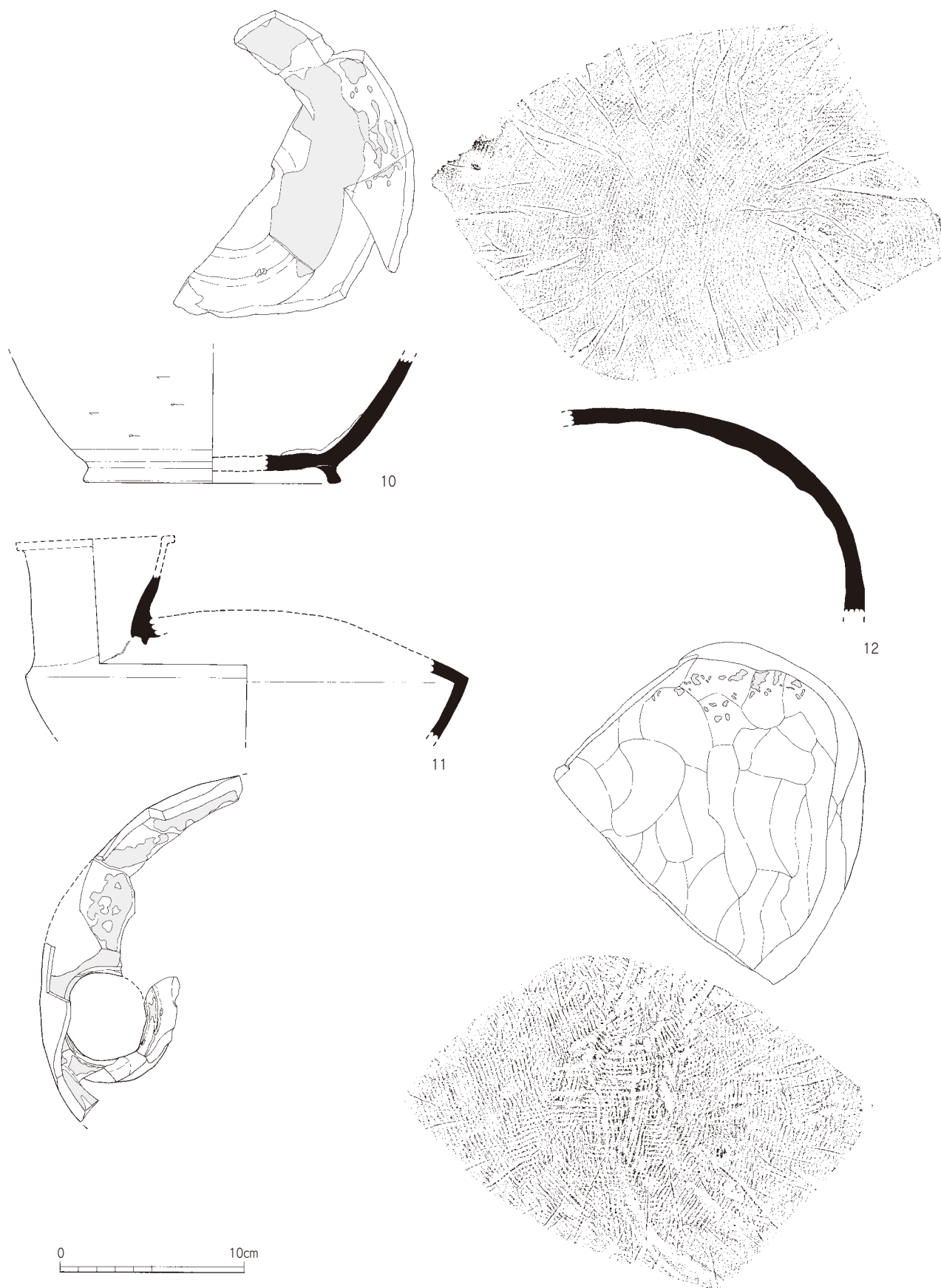


Fig.72 白色物付着土器実測図② (1/3)

5) 須恵器播鉢 (Fig.73・PL.59)

不丁地区においては、7点の須恵器播鉢が出土しているが、現在のところ大宰府史跡全体としても僅か8点しか確認されておらず、生産量自体が極めて少ない特殊な器種である。なお、実測図は刺突孔を有する方が播面と認識されるので、そちらを上側として掲載している。

播鉢は特殊な器種

1は播面がナデ調整によるⅠ・Ⅰ類で、頭部が187次調査SD4570B上層出土、脚部が同じくSD4570暗褐色土出土品とが接合したもので、再整理作業において脚部を発見したため、今回は接合した状態で掲載した。1/3程の残存状況で、頭部中央及び脚裾部を欠く。頭部は内窪みで、八字形に開く脚部を接合する。全体的に磨滅しているが、播面は磨れておらず、未使用品かと思われる。頭部外面はナデで、側縁は篋による面取りを施している。脚部は内外面とも回転ナデにより、指頭による器面の凹凸がみられる。焼成は軟質で、灰青色を呈する。残高11.5cmで、頭部径11.8cm、基部径9.6cmに復原した。

2・3・5は播面に篋先による刺突を施したⅢa・Ⅰ類で、何れも頭部から基部付近にかけての破片資料。2の頭部は若干内窪みで、播面には長さ4mm、幅1mm、深さ1mm程の刺突孔を無数に施しており、播面は使用により磨り減っているが、内天井面は全く磨れていない。側縁は薄く、突出度も弱い。頭部外面はナデ、側縁は篋による面取り、内面はナデによる。焼成は堅緻で、灰青色を呈する。3も播面に長さ5mm、幅3mm、深さ2mm程の刺突孔を無数に施したもので、播面は刺突孔周囲の粘土隆起が無くなる程に使用している。側縁は2.1cmと厚いが、突出度は弱い。側縁はヘラケズリによる。焼成は堅緻で、色調は灰青色を呈する。5は2と同形態の播鉢で、同一工人による製作かと思われる。播面は平坦で、全体的によく磨れているが、内天井面は全く磨れていない。側縁は篋による面取りを施している。焼成は堅緻で、色調は灰青色を呈する。復原頭部径は2が12.6cm、3が12.4cm、5が13.0cmで、2は14次調査黒灰色粘土、3は17次調査床土、5は85次調査SD2340上層の出土である。

6は播面に竹管による刺突を施したⅢb・Ⅱ類で、76次調査SD320灰色砂礫層の出土。頭部から脚部上位にかけて1/2程度残存する。頭部は丸みを帯び、脚部も内湾している。播面には径3～5mm、深さ21mm程の円孔を無数に穿っている。播面は刺突の際の粘土隆起が無くなる程に使用しているが、内天井面は全く磨れていない。側縁は1.7cmと厚く、突出度も大きい。側縁ヨコナデ、脚部は内外面ともナデによる。頭部径は13.0cmを測る。

竹管による刺突

4・7は頭部側縁にも刺突孔を有するⅢc類で、4は頭部破片で、1/4程残存する。側縁が全く突出しないもので、弥生中期の甕を逆さにした形状を呈する。播面は内窪みで、中央部はよく磨れているが、他と同様、内天井面は全く磨れていない。焼成は堅緻で、青灰色を呈する。頭部径は10.2cmに復原した。14次調査灰色砂層からの出土である。7は頭部の破片資料で、14次補足調査SD320下層砂出土品と76次調査SD320最下層砂出土品とが接合したもので、両調査区は100m程離れているが、別々に投棄されたものであろう。頭部は丸みを帯び、側縁は3.3cmと分厚い。播面には径6mm、深さ15～25mmの円孔を蜂の巣状に穿っており、播面は使用によりよく磨れている。また、7は側縁と側縁内側にも円孔を穿っており、加飾のためであろうか。焼成は堅緻で、灰青色を呈する。頭部径は13.0～14.5cmを測る。

蜂の巣状の穿孔

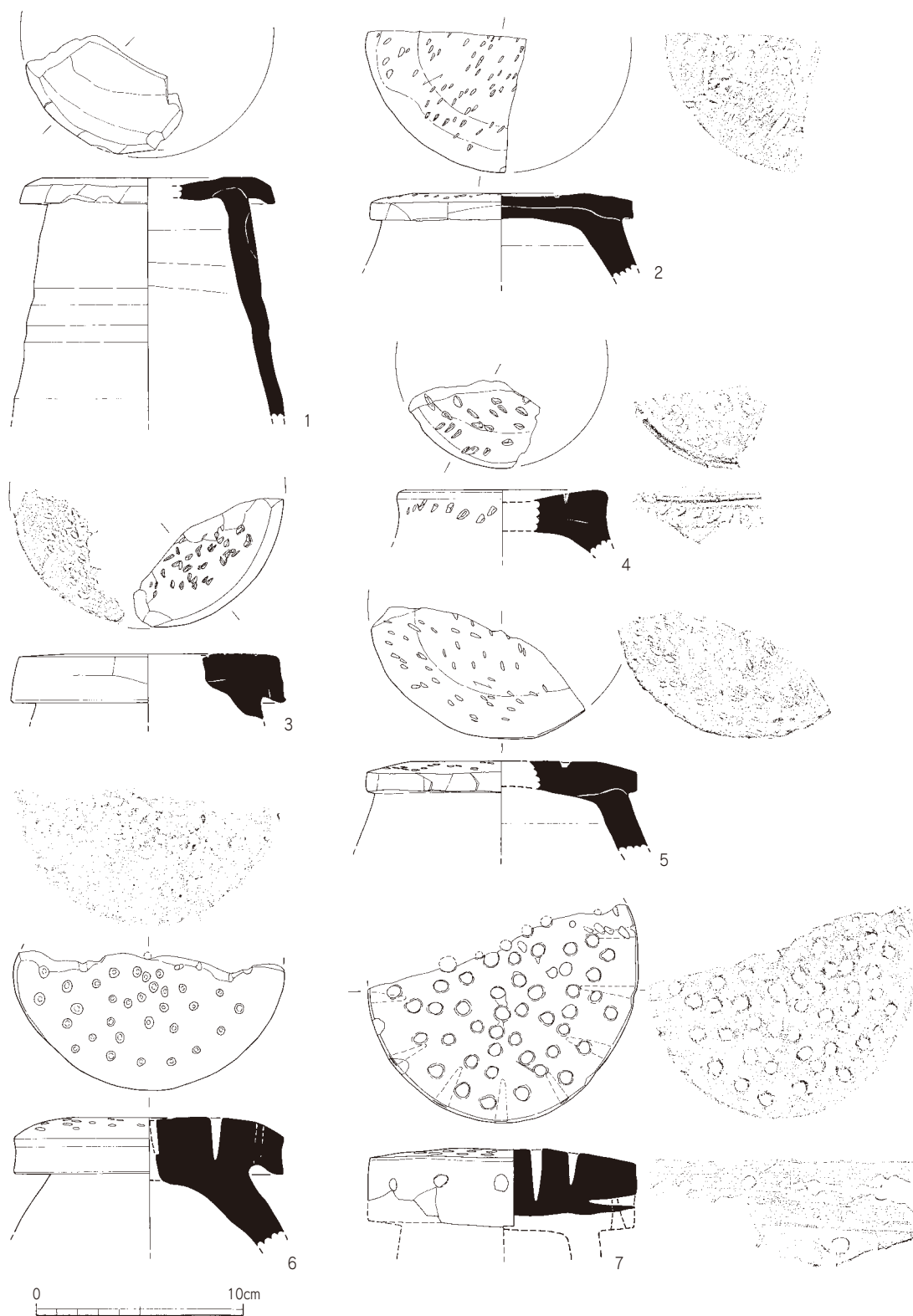


Fig.73 須恵器播鉢実測図 (1/3)

註

- (1) 大宰府史跡第41次調査（政庁跡北門地区）でⅢb類の須恵器播鉢が1点出土している。
九州歴史資料館 2001 『大宰府政庁跡』
- (2) 小田和利「須恵器播鉢について」『九州歴史資料館研究論集38』 2013 九州歴史資料館

第IV章 遺構・遺物の補遺 資料

(1) 遺構の補遺 (Fig.74)

ここでは、遺構編の報告から漏れた遺構について、遺構解説及び遺構実測図を報告する。

SK2007 (Fig.74)

76次調査区で確認した不整形な土坑である。遺構編では南北溝SD320の東端を切るような円形の土坑として報告したが、遺構配置原図における注記の誤りで、今回報告する遺構が正しいSK2007である。SD320の東側に位置し、後述するSK2014を切り、SD2010に切られる。残存長3.44m、最大幅2.3m、深さ0.64mを測る。遺構内からは木が複数出土しているが、とくに木材として加工されたものではない。また、木の先端は壁面に潜っており、掘り足りない可能性もある。土器類、製塩土器がまとまって出土している。

SK2014 (Fig. 74)

76次調査区で確認した楕円形の土坑で、SK2007に切られる。長軸残存長1.88m、短軸1.74m、深さ0.38mを測る。SK2007と一連の遺構である可能性もあるが、別遺構とした。

SK2338 (遺構編Fig.76, 本書Fig. 74)

83次調査区の東側で確認した不整形な浅い土坑で、SK2376に切られる。長軸残存長2.28m、短軸1.8m、深さ0.15mを測る。SD2340よりも東側に位置することから、政庁前面広場地区に属する遺構と考える。

SK2341 (Fig. 74)

83次調査区の東側で確認した浅く不整形な土坑で、長軸2.76m、短軸2.6m、深さ0.2mを測る。SD2340の埋没後に掘り込まれ、平面形は変形三日月形をなす。

SK2376 (Fig. 74)

83次調査区の東側で確認した浅い楕円形の土坑で、SK2338を切る。長径2.66m、短径1.54m、深さ0.18mを測る。SD2340よりも東側にあり、政庁前面広場地区に属すると考える。

SK2518 (Fig. 74)

87次調査区の東側で確認した不整形な土坑で、長軸1.5m、短軸0.76m、深さ0.3mを測る。矩形が連なったような不整形をなす。SD2340より東側に位置し、政庁前面広場地区に属する遺構と考える。

SK2519 (遺構編付図)

87次調査区の東側で確認した円形土坑で、径0.74m、深さ0.3mを測る。SD2340より東側にあり、政庁前面広場地区に属する遺構と考える。

SK2522 (Fig. 74)

87次調査区の東側で確認した不整楕円形の土坑で、長径3.18m、残存短径2.18m、深さ0.16mを測る。不丁地区東限溝SD2340の埋没後に掘り込まれた浅い土坑で、SD2528に切られる。

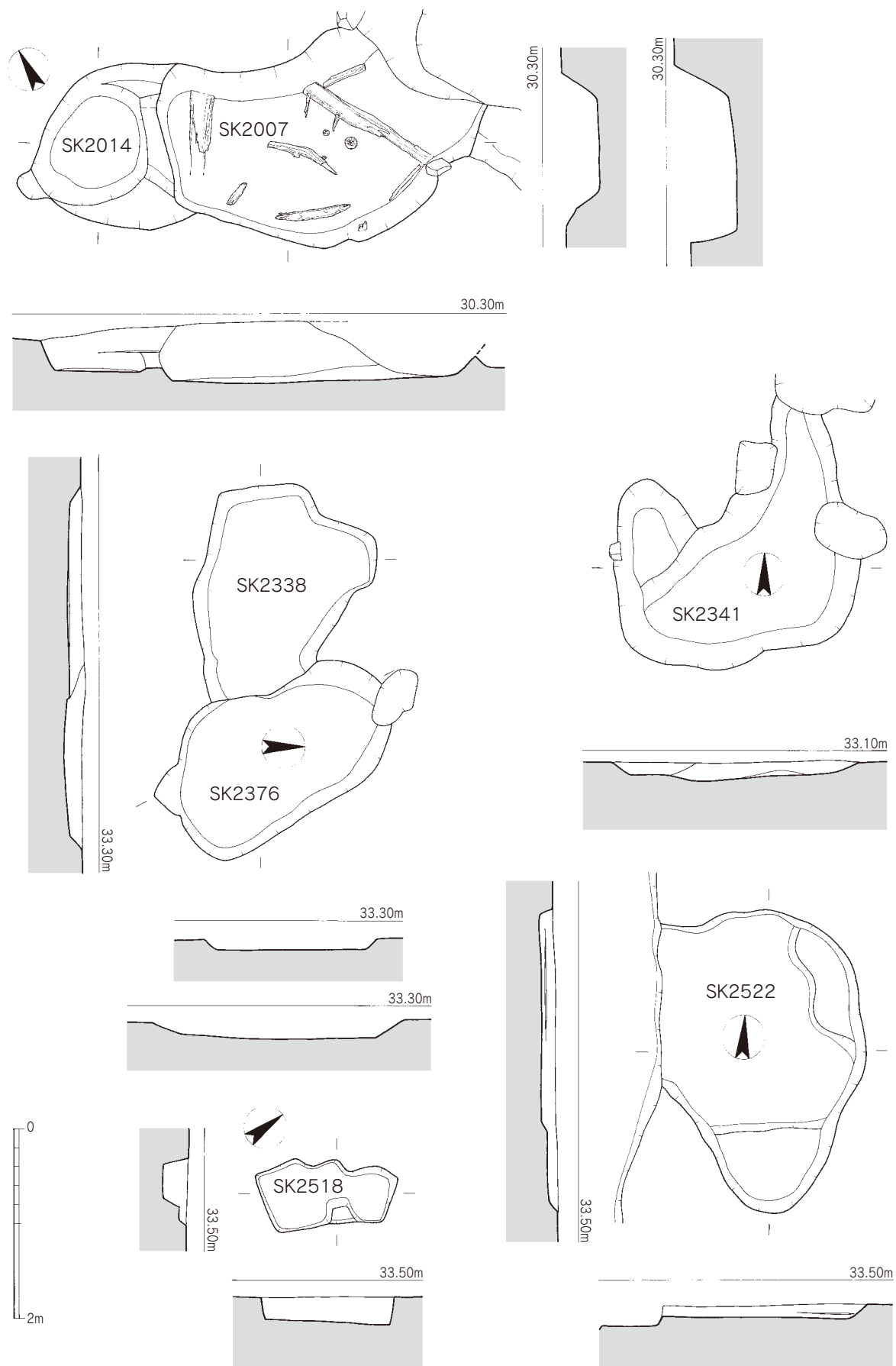


Fig.74 遺構補遺実測図 (1/60)

(2) 遺物の補遺

1) 瓦罽類

①軒平瓦 (Fig.75・76, P L60, Tab. 7)

ここで報告する軒平瓦は、従来の大宰府分類（九州歴史資料館2000）において「560B型式」とされてきた一群のうち、瓦範の相違により別途新種として取り出した資料である。

560B型式は範傷の進行によって、無傷のBaから、右側に範割による大きな傷がみられるBb、次いで左側にも範割に伴う傷がみられるBcへと変化することが指摘されてきた。そのため、無傷である資料は全て560Baの範疇として整理・報告されてきた。しかし、不丁地区出土の瓦類を整理・観察するなかで、560Baとされる資料のなかには複数の種類が混在しているのではないかという疑念が生じた。そのことから、『遺物編1』では1点のみであるが、新種と考える破片を掲載し、その可能性を指摘した。ただ、その段階ではまだ完全に従来の資料との相違点等の特徴が把握しきれておらず、あくまで可能性の提示に留めていた。

今回、改めて不丁地区より出土した560B型式とされる資料を全て実見し、さらに既に正式報告書が刊行されている政庁跡、日吉地区、政庁前面広場地区の資料も実見した。その結果、2種類の新種が存在することが判明した。このことにより、型式分類についても再編の必要が生じてきた。しかし、本書でそれらの課題を解消するにはさらに時間を要するため、ひとまず新種と認定できる資料について報告を行い、その詳細については『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅷ 平成24・25年度』の中で触れることとしたい。

さて、不丁地区で確認した新種には、従来560B型式とされてきた瓦当文様に極めて近く、細片の場合仔細に観察しなければ分離し難い一群と、比較的分離しやすい一群とがある。文様の親縁性を考えれば前者から後者へと順に出現したと考えられることから、ここでは便宜的に前者を「560新種1型式」、後者を「560新種2型式」と仮称し、以下記述を進めることとしたい。ちなみに、『遺物編1』のFig. 5-7に掲載した資料は、560新種2型式に相当する。

1・2は560新種1型式に相当する資料である。

1は、76次SD320下層（腐植土）出土の資料である。瓦当左側の破片で、左5転目から6転目が確認できる。左6転目の子葉と主茎との分岐が従来の560B型式よりも右側に寄る点の特徴である。焼成は良好な須恵質で、色調は明灰～灰色を呈する。凹面は瓦当側端部付近が不定方向のケズリで、一部に布目が残る。布目の残り方からすると、桶巻きづくりの可能性もある。凸面の調整は遺存しておらず不明であるが、顎部は横方向のケズリの後に横方向のナデで仕上げる。破面には平瓦に対して顎部を接合している痕跡が明瞭に残る。

2は、14次補足SD320中層（粗砂）出土の資料である。瓦当右側の破片で、右1転目と左1転目、2転目が確認できる。欠損等があるため不明瞭な箇所も多いが、560B型式に比べ右1転目の左側子葉が主茎と完全に平行して伸びる点、左2転目の右子葉が長く伸びる点の特徴である。焼成はやや焼の甘い瓦質で、色調は明灰色を呈する。凹面は磨滅やケズリによって明確でないが、凹凸が全くないため一枚作りによる可能性も考えられる。凸面は一部しかないが、ナデ調整か。

3～8は560新種2型式に相当する資料である。

3は、124次SD2340出土の資料である。瓦当右端の破片で、右1転目と左1転目の一部が確認できる。内区の厚さが狭く、唐草の主莖の流れと上外区との界線が近接するのが特徴で、右1転目の左子葉が短くなっている。焼成は堅緻な須恵質で、色調は青灰色を呈する。凹面は瓦当側端部付近のみ横方向のケズリ、それ以外は縦や斜め方向のケズリで調整する。右側縁寄りに模骨の痕跡が残る。凸面は縦方向のケズリを行い、顎部は横方向のナデで仕上げる。

4は、14次補足SD320下層（砂）出土の資料である。瓦当左側の破片で、左4転目から左6転目までがよく残る。瓦当面には施文前の縄目叩きの痕跡が顕著に残り、主莖と界線とが近接するため左6転目の右子葉が短くなっている。焼成は須恵質で、色調は明灰色から灰色を呈する。凹面は布目と模骨痕が顕著に残り、瓦当側端部のみ横方向のケズリを行う。凸面調整は不明であるが、顎面は横方向のケズリの後、ヨコナデで仕上げる。

5は、98次SD2340下層（砂）出土の資料である。瓦当中央部の破片で、左2転目の一部から左5転目の一部までが確認できる。560B型式との大きな差は、左2転目の左子葉が短く、左4転目の左子葉が長く、右子葉が短い点である。焼成は須恵質で、色調は灰色を呈する。凹面は瓦当側端部付近を横・斜め方向のケズリ、それ以外は縦方向のケズリで調整する。凸面は顎部まで含めきれいに横方向のナデで仕上げている。

6は、76次SD320下層（腐植土）出土の資料である。瓦当左半分が残り、左4転目から6転目までが確認できる。やはり主莖の流れと界線が近接するため、左4転目と6転目の右子葉の伸びが短く、左5転目は子葉が2つとも短くなる。焼成は須恵質気味の瓦質で、色調は明灰色から黒灰色を呈する。凹面は瓦当側端部のみを横方向のケズリで仕上げ、それ以外は布目を残す。糸切り痕と模骨痕、縦方向の粘土の継ぎ目（Z型）が確認できる。凸面は縦方向の縄目を粗くケズリ、顎部は横方向のケズリの後、横方向のナデで仕上げる。瓦当面には縄目叩きの痕跡が残る。

7は、不丁地区出土の新種2型式のなかでは比較的瓦当面の残りが良い資料で、14次補足SD320中層（粗砂）出土である。瓦当左端が欠損しているが、右1転目から左5転目までを確認できる。焼成は須恵質で、色調は灰色から暗灰色を呈する。凹面は瓦当側端部付近に横方向のケズリを行う以外は、布目や模骨の痕跡が顕著に残る。凸面はほとんど残っていないがケズリ調整を行っており、顎部は横方向のナデで仕上げる。なお、瓦当面には縄目痕が顕著に残る。

8は、17次包含層第2層中のピット（遺構番号なし）出土の資料である。瓦当右側を失っているが、左2転目から左6転目までを確認できる。やはり主莖の流れと上外区の界線とが近接するため子葉の流れが短い。焼成は瓦質で、色調は淡灰色から灰色を呈する。凹面は瓦当側端部付近を横方向に糸切りし、それ以外は布目と模骨痕を残す。わずかに糸切り痕と思われる痕跡がみられる。凸面は縦方向の縄目で、顎部とその周辺は横方向のナデで仕上げる。

9・10は不丁地区以外で出土した良好な新種資料を参考までに掲載した。8は政庁前面広場地区73次SX1910出土の560新種1型式である。焼成が軟質であるため磨滅が激しいが、拓影からは全体像を確認することができる。9は政庁跡6次第1整地層（2層）出土の560新種2型式である。小さな欠損箇所が目立つものの、全体に近い状況を確認できる数少ない資料である。瓦当面の縄目痕跡などその特徴が顕著にみられる。

以上、掲載した資料は僅かであるが、詳細観察の結果、新種1型式4点、新種2型式51点を

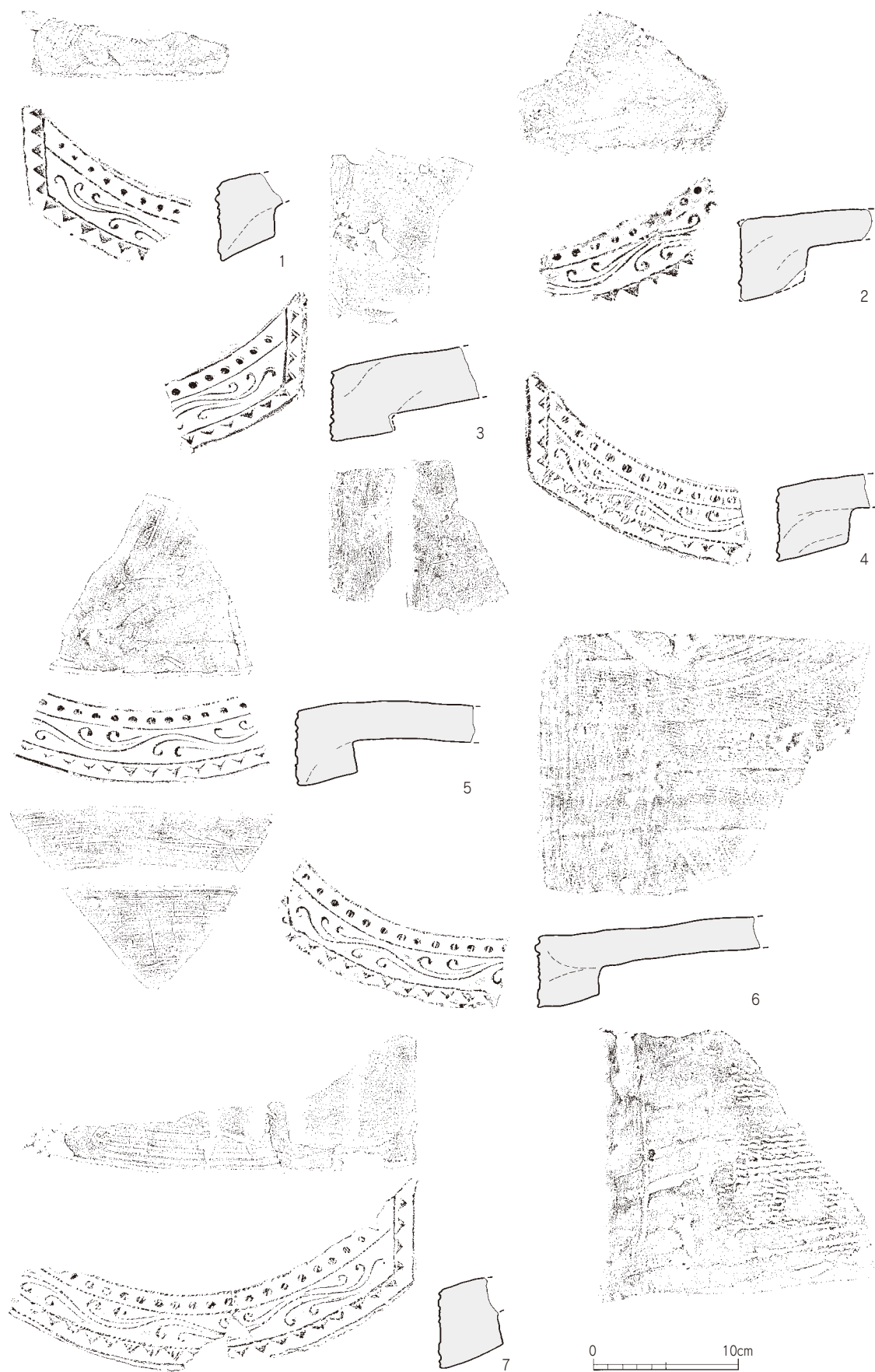


Fig.75 軒平瓦実測図① (1/4)

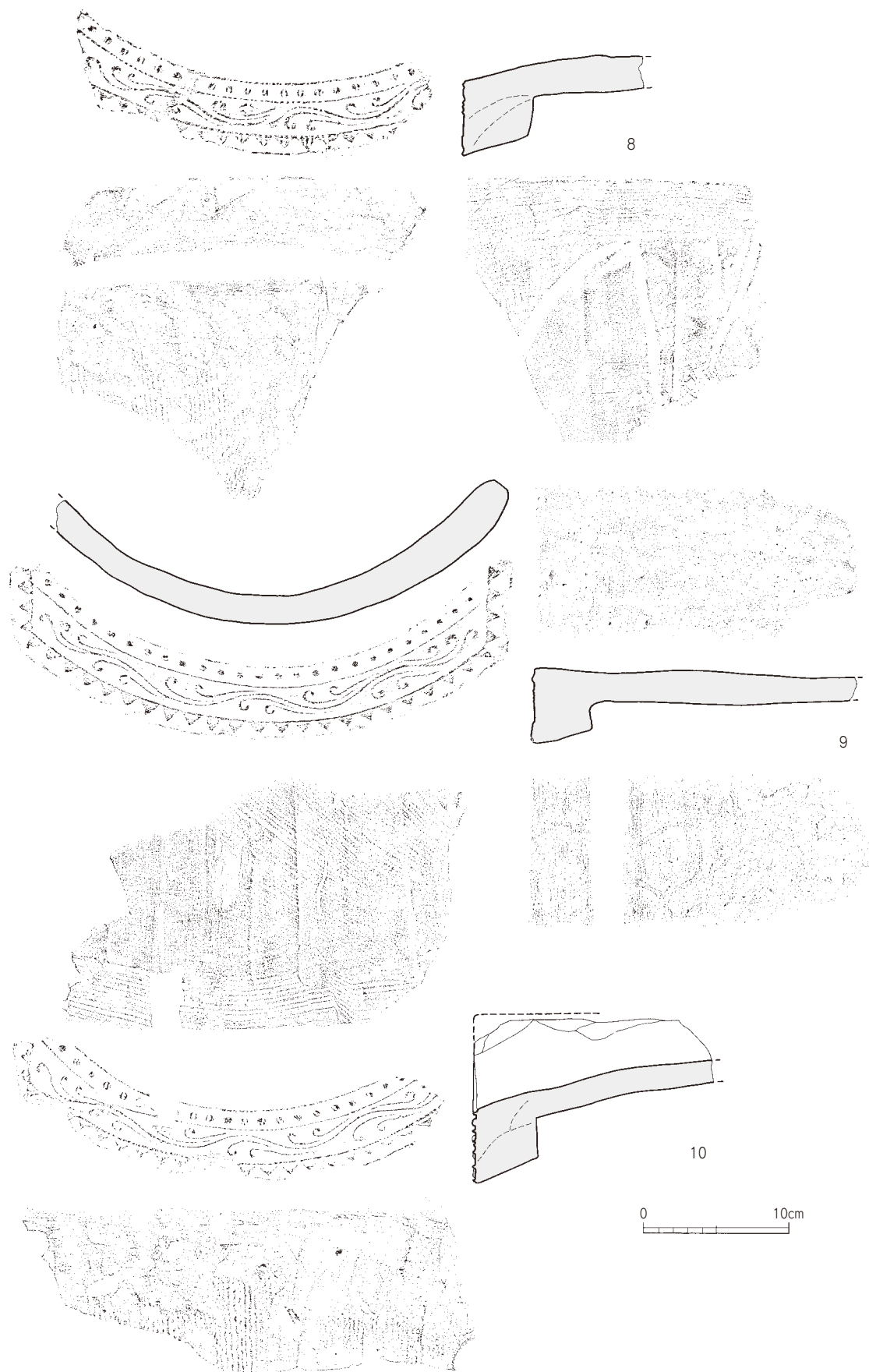


Fig.76 軒平瓦実測図② (1/4)

Tab.7 軒平瓦出土点数表

型式名	点数	14次	14次補	17次	76次	83次	84次	85次	87次	90次	98次	104次	110次	124次	129次	147次	187次	小計	百分比(%)	合計	百分比(%)			
510	5	1	3										1							5	0.70			
515	Aa	2		1					1											2	0.28			
560	560	14	1	2	1		2	1	1						2	3		14	1.97	219	30.85			
	B	60	2	7		5	2	5	21	3				1	7	7								
	Ba	5		1				2	1								1							
	Ba~Bb	8		1		2			2						2	1								
	Bb	1		1															150			21.13		
	Bb~Bc	46	1	8	1	6	1	2	8	1	1	3		1	1	4	5	3						
	Bc	30	2	3		5	1	2	9	2	1	2				1	2							
	新種1	4	1	1		2																4	0.56	
新種2	51		9	3	8		1	11	2		6			1	2	6	2	51	7.18					
561	17		1					8	1		1					5	1			17	2.39			
576	1	1																		1	0.14			
580	1											1								1	0.14			
582	13					1	2	2	2					1		5				13	1.83			
600	A	2		1												1				19	2.68			
601	A	17		6		4	1		5				1											
625	3	1	2																	3	0.42			
635	635	244	14	59		45	8	14	25	22	21	7	1	1		4	23			273	38.45			
	A	27	1	3		2	5	1	5	3	1	2					4							
	B	2		1					1															
642	B	3		3																3	0.42			
647	1				1															1	0.14			
648	1				1															1	0.14			
653	6			3		1	1						1							6	0.85			
656	2			1	1															2	0.28			
657	657	15	1		1	3	4			1	2	2					1			94	13.24			
	a	77		9	9	5	27	6		15	3						2	1						
	b	2		2																				
688	688	9	1	4	1	2		1												30	4.23			
	A	2		2																				
	Aa	5	1	3				1																
	Aa'	3		1			1	1																
	B	4		2						2														
	Bb	1					1																	
C	6				1	2		1		1						1								
691	Aa	1			1															2	0.28			
	Ab	1			1																			
不明	18		3	2	2		2	4									1	4		18	2.54			
合計	710	28	131	32	91	60	43	99	60	30	24	2	5	4	22	68	11			710	100.00			

抽出することができた。また、560B型式の範傷認定に誤りがあったこともあって、560B型式の数量は以前の報告段階から大きく変化している。これにより型式ごとの出土割合も変化した

ので、再度軒平瓦出土点数表を掲載する。

②無文埴 (Fig. 77)

前書『遺物編1』では、紙幅の都合により文様埴しか掲載できなかつたため、ここで改めて無文埴について報告を行う。ただし、不丁地区出土の無文埴の大半は破片資料で、完形品や略完形品は非常に乏しい。そこで、不丁地区全体の中から残りの良い資料を任意に選び、ここに掲載する。とはいえ、多様な法量の無文埴が存在することは破片資料をみても明らかであり、その多様性を視覚的に読み取れるよう、主観的ながら複数の法量の資料を抽出し掲載した。

1は、187次SD4571出土の完形資料で、標準的な法量の資料として提示する。長さ27.9cm、幅17.9cm、厚さ6.6cmを測る長方形無文埴である。焼成は良好で、やや須恵質である。色調は淡灰色～暗灰色を呈する。上面は斜め方向のケズリ、下面は縦ないし横方向のケズリを行った後、全体を粗くなでる。側面は各面とも横方向にケズリを行うのみである。

2は、1と同じく187次SD4571出土の完形資料である。長さ26.1cm、幅19.0cm、厚さ6.3cmを測る長方形無文埴である。1に比べると若干の法量差が認められるが、概ね同一規格の範疇といえよう。焼成は瓦質で、色調は鴻臚館式軒先瓦(223・625型式)によくみられるような黒灰色を呈する。断面は灰白色である。上面は長軸方向のケズリで、下面はやや曖昧であるが不定方向のケズリを行うが、下面には僅かに糸切り痕らしき痕跡をみることができる。側面は各面とも横方向のケズリを行う。

3は、83次石組溝SD2335の石組に用いられていた資料である。長さ29.2cm、幅17.1cm、厚さ5.8cmを測る長方形無文埴であるが、1・2に比べて若干薄手で長めである。焼成は土師質に近く、やや軟質である。色調は淡灰褐色を呈するが、断面は黒灰色である。上面・下面とも長軸方向にケズリを行う。側面は各面とも横方向のケズリである。

4は、83次SD2350出土の資料である。長さ24.1cm、幅16.5cm、厚さ7.9cmを測る長方形無文埴で、他の資料に比べて短く厚いのが特徴である。焼成は土師質で、胎土はやや粗い。色調は淡褐色を呈する。上面は長軸方向のケズリを行い、下面も長軸方向のケズリを行うが側面に近い部分は不定方向のケズリで調整する。側面は各面とも横方向のケズリである。

5は、14次補足SD320中層(黒色粘質土)出土の資料である。完形品ではないが、長さ16.5cm以上、幅17.2cm以上、厚さ3.2cmを測る。長方形無文埴とみられるが、通有の法量に対して半分ほどの厚さである。標準的な厚さの資料の中には、この資料と同じ程度の厚さの粘土を重ねて接合した痕跡が明瞭に残るものもあるが、この資料は明らかにこの厚さで製作されたものである。焼成は須恵質で、色調は明灰～暗灰色を呈する。上面は一定方向のケズリの可能性が高いが、ナデ調整のため不明瞭となっている。下面は糸切り痕が僅かに残るがナデ消されている。側面は各面とも横方向のケズリを行う。

6は、84次SB2380Aの柱穴より出土した破片資料である。完形品ではないが、上面に縄目叩きを行っている資料であることから掲載した。小片のため大きさは不明であるが、厚さ4.6cmと少し薄手である。上面は既述のとおり縄目叩きを行っており、下面もケズリ調整がなされているが縄目叩きらしき痕跡が確認できる。側面は横方向のケズリを行う。

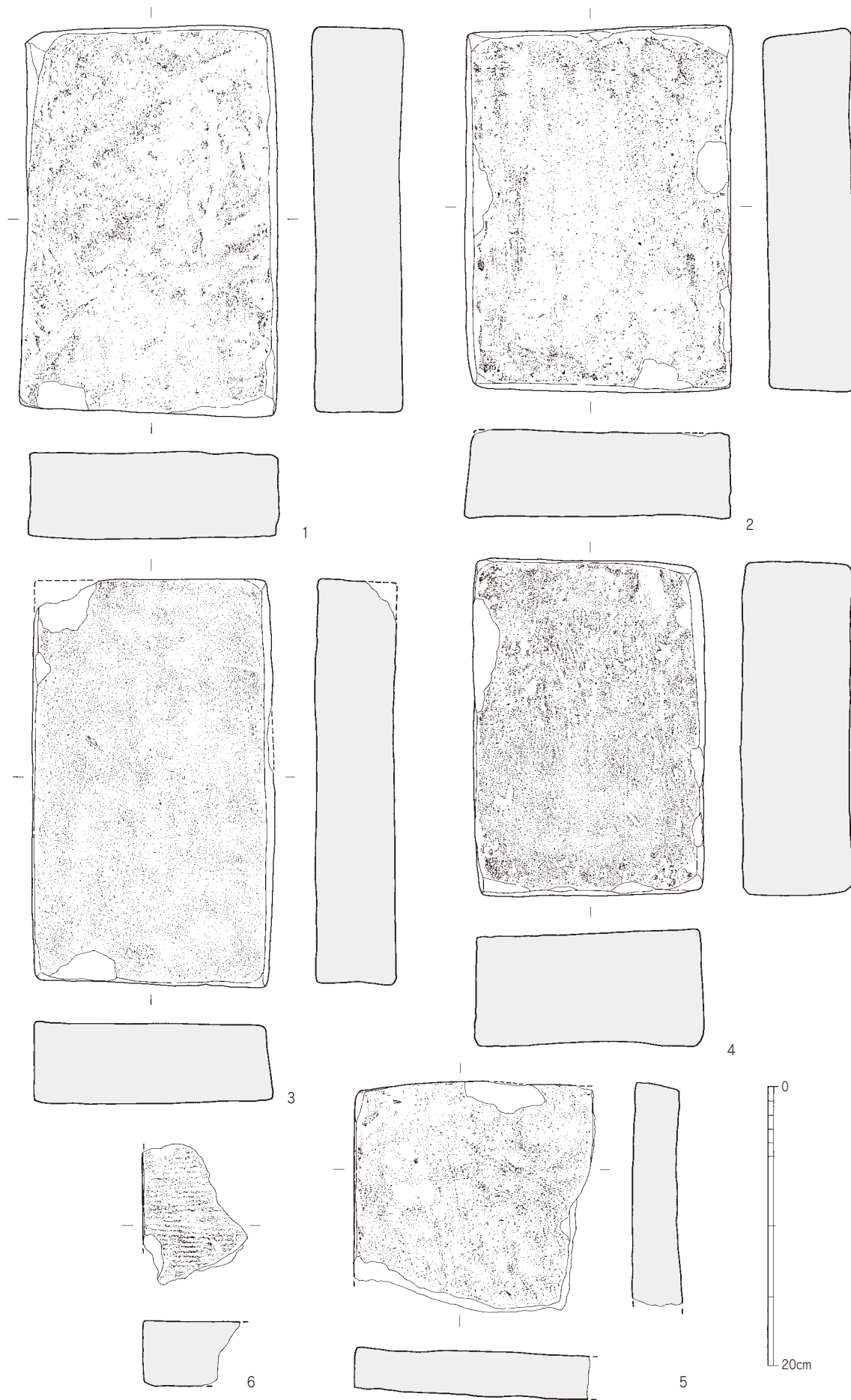


Fig.77 無文埴実測図 (1/4)

2) 金属製品 (第14次調査出土金属製品) (Fig.78, P L60)

鍛冶・鋳造関連遺物の整理作業の過程で、鉄鏃束5点と鉄釘1点、銅釘1点を新たに確認した。新たに見つかった鉄鏃束5点は『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅳ-不丁地区遺物編1-』で報告した鉄鏃束(『遺物編1』 Fig.127-1)と共伴する資料であり、昭和59年度概報で報告されたSD320中層(黒色粘質土)出土品と同一のものである。

鉄鏃束 (1~5) 1~4は14次SD320中層(黒色粘質土)の出土品である。5は出土地不明となるが、1~4と同様の残存状況であり、SD320中層かSE2503埋土の出土品に関連する資料とみられる。1~5はいずれも長頸鏃が束ねられた状態で被熱して溶着した資料となる。1は鑿箭式長頸鏃の刃部付近の破片であり、形状が判別できる資料で20点を数える。他形式の刃部は認められない。2は篋被から茎部にかけての鉄鏃束で、形状判別可能な資料で33点が溶着する。篋被形式が確認できるのは4点でいずれも棘篋被となる。3は刃部付近の破片で、12点が溶着する。刃部形式は片刃箭式が1点のみ確認できる。4も刃部付近の破片で、10点が溶着する。片刃箭式を主体とするようだが、残りが悪い。1点のみわずかに刃関を有する片刃箭式の刃部が認められる。5は頸部の破片で5点が溶着した痕跡がある。

鉄釘 (6) 6は14次SD320中層から出土した。全長12cmを超える大型品で、建築釘に用いられたと考えられる。

銅釘 (7) 7は14次落ち込み埋土から出土した。ともに両端を欠損する。

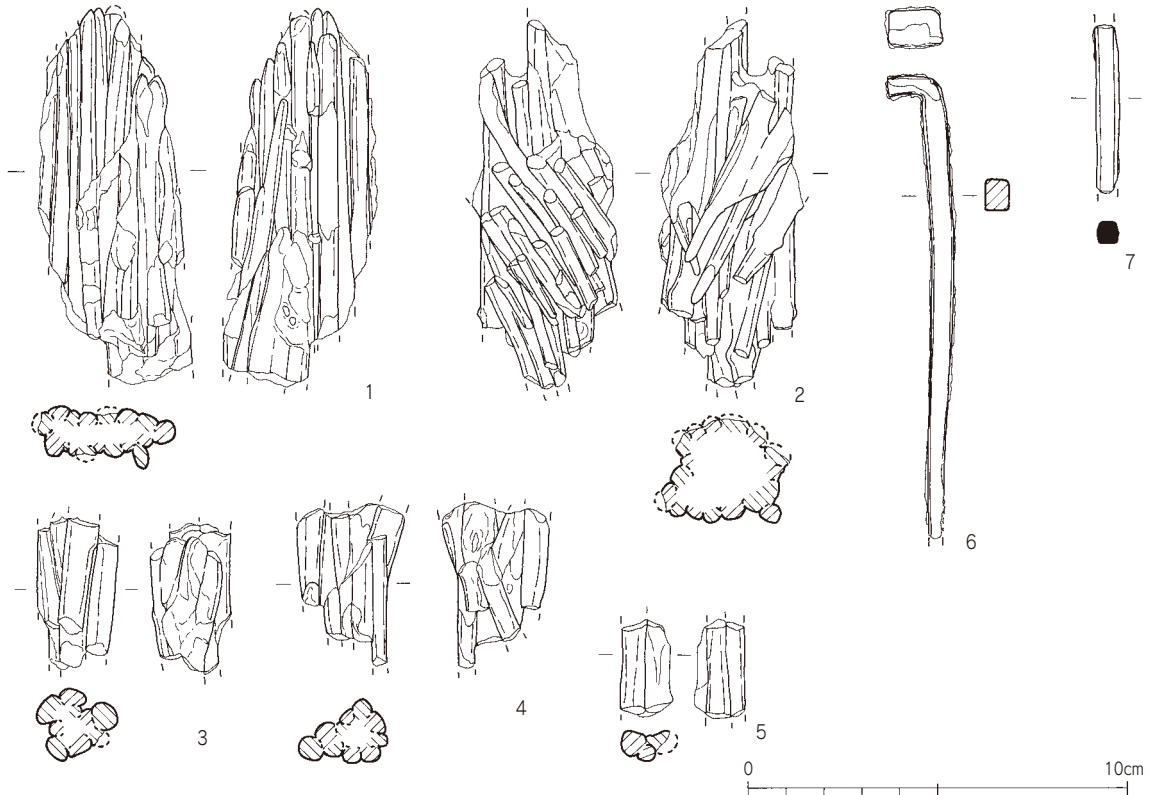


Fig.78 金属製品実測図補遺 (1/2)

3) 層位出土土器 (Fig.79～91, PL. 61・62)

ここでは、各調査区の整地層等で出土した、比較的まとまりのある土器群等を報告する。

84次茶褐色土出土土器 (Fig.79)

須恵器蓋 (1～7) 1の口縁端部は丸みをもって肥厚する。外天井部はナデ。2は端部を肥厚させながら嘴状に折り返す。外天井部はヘラケズリ。3・4は円柱状の撮みで低平な天井部に特徴があり、口縁部を嘴状に折り返すが、3は踏ん張り外反する。どちらも外天井部はヘラ切り。5・6は口縁部を屈折して端部は丸みを持って肥厚する。6は口径25.0cm。7は壺蓋で宝珠状の撮みを有し、口縁端部に沈線状の段を有する。外天井部はヘラケズリで口径17.9cm。

須恵器杯 (8～12) 8の体部の器壁の厚さは一定で、体部は直線的に開く。低く丸みを持って踏ん張る高台を貼付し、外底部はヘラ切り。口径13.2cm、底径9.5cm、器高4.0cm。9・10の体部は直線的に開き、方形の低い高台を貼付する。外底部はナデ。11は口縁端部を僅かに外反する。方形で内湾する高台を底部端に貼付する。12は無高台で体部と底部の境は丸みを持つ。

須恵器椀 (13・14) 13の体部と底部の境は丸みをもち、体部は直線的に開いて口縁部へ至る。方形で直立する高台を貼付する。復元口径17.4cm、器高6.2cm、底径10.2cm。14は体部と底部の境をヘラケズリする。口縁部は僅かに外反する。復元口径19.4cm。

須恵器皿 (15) 体部が直線的に開く。復元口径15.1cm、外底部はヘラ切り未調整。

土師器蓋 (16・17) 16は円柱状の撮みを持ち、低平な天井部から口縁端部を嘴状に折り返す。外天井部はヘラミガキ。口径13.3cm。17は壺蓋。口縁部は肥厚して僅かに踏ん張る。外天井部は回転ヘラケズリ。復元口径13.4cm。

土師器杯 (18～26) 18は体部と底部の境に丸みを持ち、口縁端部を肥厚して外反する。外底部には指頭圧痕を残し、胎土は精良で淡茶色に焼成する。復元口径16.7cm。19～21・23・24の体部は大きく直線的に開く。19は口縁部を肥厚し、外底部をヘラ切り。口径9.5cm、器高3.4cm。20の口縁部は僅かに外反して肥厚する。21の体部外面は強い横ナデにより稜を持つ。22は体部下位に丸みを持つ。口径13.0cm、底径8.5cm、器高4.0cmで外底部はヘラ切り。23の外底部はヘラ切り後、板状圧痕。24の体部下位は強いナデにより器壁は薄い。25は内外面共に横位のミガキ、外底部ならびに体部下位から底部は回転ヘラケズリ。26は体部に丸みを持ちながら開く。内外面を横ナデ、外底部はヘラ切り離し。口径18.8cm、器高3.3cm。

土師器皿 (27～30) 27の体部の器壁は薄い。外底部はヘラ切り離し。口径12.3cm、器高2.3cm。28～30は径の大きい底部に低い体部が開いて取り付く。28の口縁部は丸みを持って肥厚する。29の外底部は回転ヘラ切り。30は内外面共に横位のミガキ。外底部は回転ヘラケズリ。

盤 (31) 小さな底部に対して口縁部は大きく開く。直立気味に立ち上がりながら少し踏ん張る高台を貼付する。

灰釉陶器碗 (32) 体部と底部の境に丸みを持つ。直立する高台の豊付部は沈線状の段を有する。復元底径7.5cm。

灰釉陶器皿 (33・34) どちらの体部も大きく開くが、中位で屈折する。33の外底部には糸切り、44は回転ヘラケズリ。高台はどちらも丸みを持つが、34の豊付部はやや内湾する。

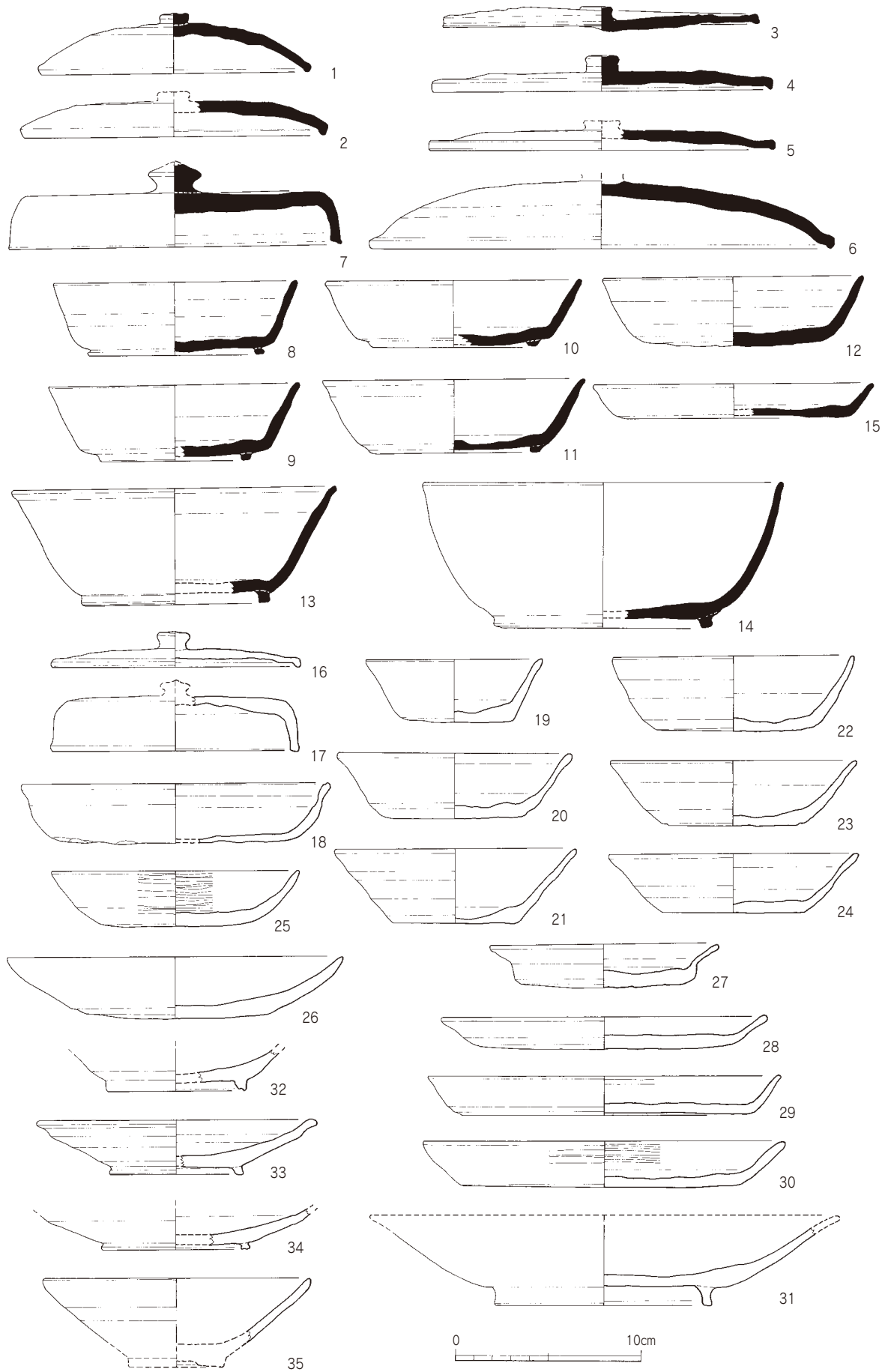


Fig.79 84次茶褐色土出土土器実測図 (1/3)

越州窯系青磁碗 (35) 体部中位から下部を回転ヘラケズりする。

84次灰褐色土出土土器 (Fig.80)

須恵器蓋 (1~6) 1~4は擬宝珠状の撮みを有する。1は口縁端部を嘴状に折り曲げ、丸みを持ち天井部はヘラケズリ。2は肥厚した口縁端部を嘴状に折り曲げる。口径11.7cm。3・4は口縁部を大きく屈折して端部を折り曲げる。3の天井部はヘラ切り未調整。5は低平な撮みを有する。口縁部の器壁は肥厚する。口径15.5cm。6は硯に転用されている。

須恵器坏 (7~14) 7は体部と底部の境を強くナデる。断面方形の高台を貼付する。口径13.2cm, 底径8.6cm, 器高4.3cm。8の体部は直線的に開く。平らな外底部に断面方形で低い高台を貼付する。外底部はヘラ切り。9の体部は中位で屈折してさらに開く。外底部には高い断面方形の高台を貼付する。外底部はヘラ切り後ナデ。10は大きく逆ハ字形に体部が開く。外底部の端に方形で沈線状の段を有する高台を貼付する。口径13.8cm, 器高5.2cm。11は体部を直線的に開く。底部端に低い高台を貼付する。底部から体部への器壁はほぼ一定で、外底部はヘラ切り。12の高台はやや踏ん張って外反する。体部下位をヘラケズリし、外底部はヘラ切り。口径15.0cm, 器高6.0cm。13は体部下位をヘラケズリして底部との境が丸みを持つ。低い高台を底部端に貼付する。外底部に板状圧痕あり。14は無高台。体部は強いナデ、外底部はヘラ切り。

須恵器皿 (15) 体部の器壁は肥厚する。外底部はヘラ切り。復元口径14.8cm, 器高1.7cm。

須恵器盤 (16) 体部は丸みを持ち、口縁部はやや肥厚して外面に沈線状の段を有する。外底部は丁寧なヘラケズリ。口径23.2cm, 器高4.3cm。

須恵器甕 (17) 口縁部を肥厚して直立させ、端部を天井に向ける。体部には把手の剥離した痕跡がある。体部外面に格子状のタタキ、内面に青海波の当具痕。復元口径50.0cm。

土師器坏 (18~21) 18は体部を開いて口縁部を肥厚、外底部はヘラ切り。19の外底部と体部下位の境に丸みを持つ。内面煤付着。20は体部が逆ハ字形に開く。外底部はヘラ切り後、板状圧痕。口径15.2cm。21は丸底坏で口縁部を僅かに肥厚する。外底部はヘラ切り後、板状圧痕。

土師器皿 (22~24) 22の小皿の外底部はヘラ切り後、板状圧痕。口径8.8cm, 器高1.1cm。23は体部を屈折しながら外反し、口縁部を肥厚する。外底部はヘラ切り。24は磨滅により体部の調整不明。外底部は回転ヘラケズリ。口径19.5cm, 器高2.1cm。

土師器高坏 (25・26) 25の脚は裾部を大きく外反して端部を僅かに折り返す。体部から脚部はナデ。復元裾径7.9cm。26は口縁部を僅かに折り返して内面に1条の沈線を巡らす。内外面共に横位のミガキ。口径28.3cm。

84次灰褐色土下層出土土器 (Fig.80)

須恵器蓋 (27) 円柱状の撮みを有する。口縁部を一度屈曲させ端部を僅かに折り返す。口縁内面に屈折による1条の沈線がある。口径16.6cm, 器高3.3cm。

須恵器坏 (28・29) 28は体部が直線的に開き、平らな外底部に僅かに踏ん張る高台を貼付する。内外面に墨痕あり。29は底部と体部の境は丸みを持ち、体部中位で大きく外反しながら口縁に至る。高く大きく踏ん張る高台を貼付する。口径17.6cm, 底径10.9cm, 器高5.4cm。

須恵器壺 (30) 体部から頸部へは大きく屈曲して至る。内底部に竹管文がある。

土師器蓋 (31) 円柱状の撮みを有する。口縁端部を僅かに屈折させ、内面に沈線状となる段

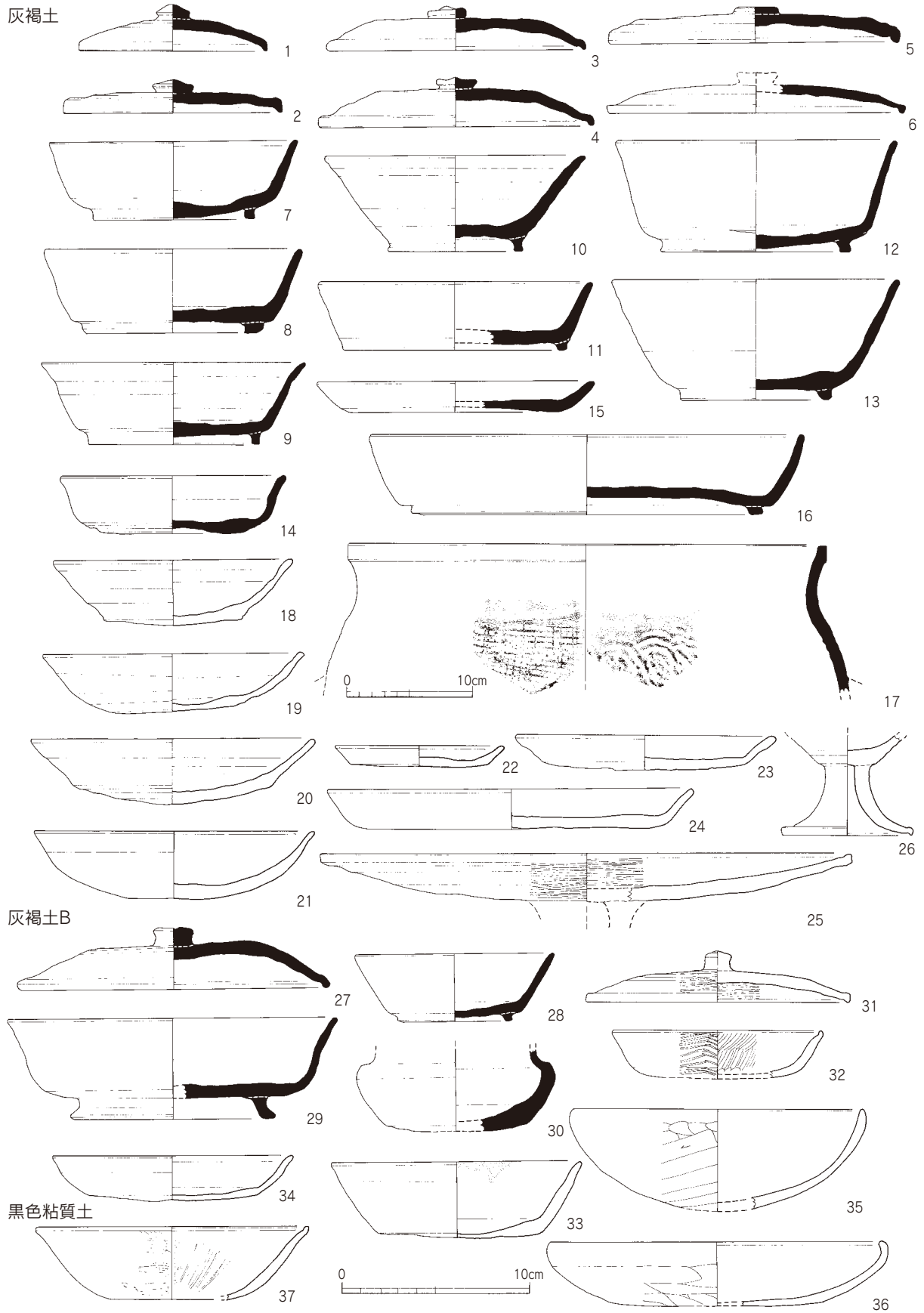


Fig.80 84次灰褐色土・黒色粘質土出土土器実測図 (1/3)

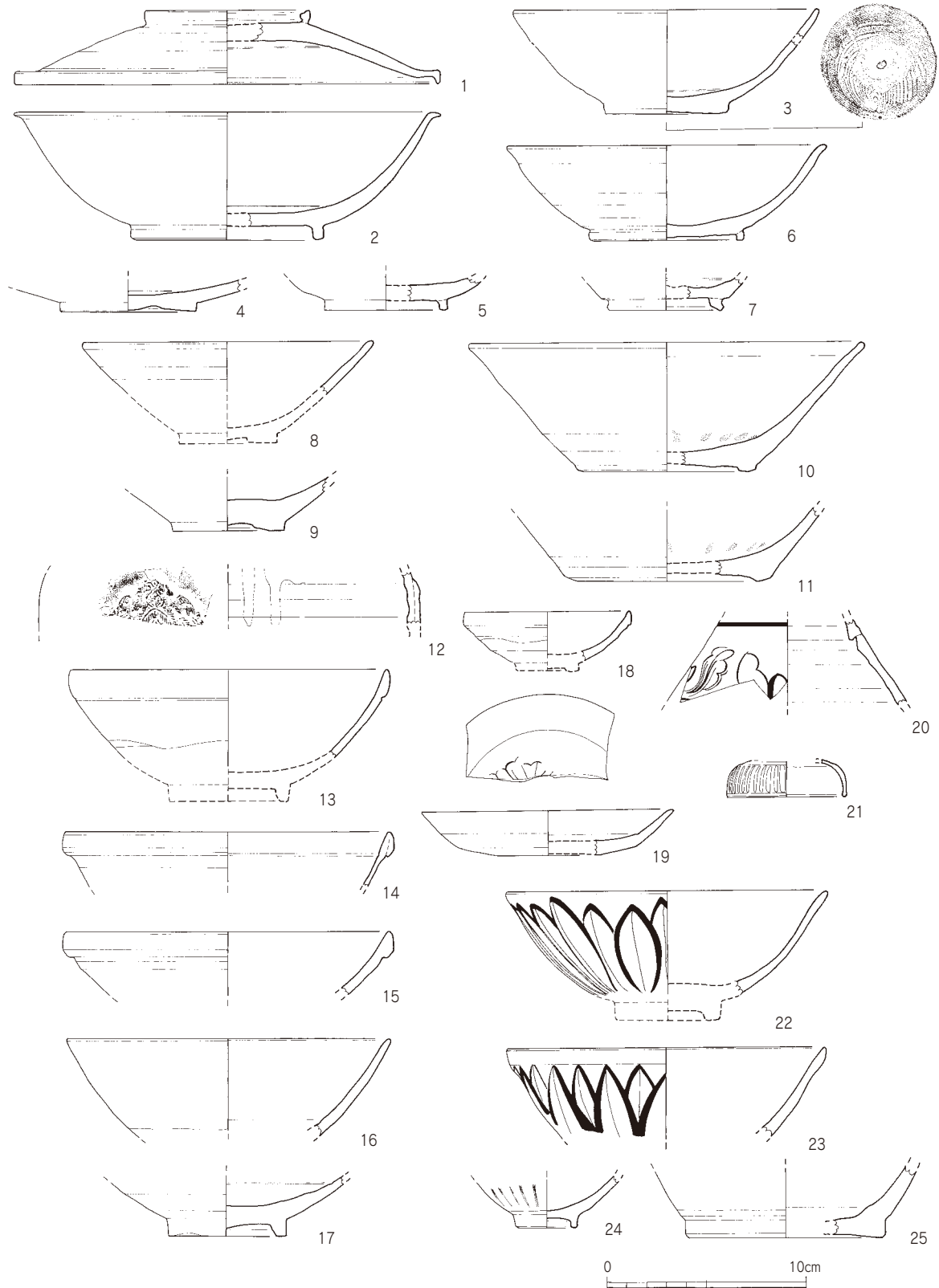


Fig.81 84次灰褐色土出土陶磁器類実測図(1/3)

を有する。外天井部は回転ヘラケズリで内外面には横位のミガキ。口径14.0cm。

土師器坏(32~34) 32は体部を一旦開きながら口縁端部を内側に内傾し、内面に沈線状の段を有する。体部外面には山形の暗文、底部は手持ちヘラケズリ、内面体部は放射文、底部は

螺旋文。復元口径11.2cm。33の体部は直線的に開く。外底部には板状圧痕、口縁部に油煙が付着しており、灯火器として使用されたのであろう。34は体部に僅かに丸みを持つ。外底部は磨滅気味だが、ヘラ切りを確認できる。口径12.8cm、器高2.4cm。

土師器坏（35）は丸底を呈する坏で、外面体部下位は手持ちのヘラケズリ、内面ヘラミガキ。

土師器皿（36）胎土に殆ど砂粒を含まない。外面の体部上位から口縁部をヨコナデ、中位下位は手持ちヘラケズリ、内面中位下位はミガキ。口径17.8cm、器高3.3cm。

84次黒色粘土層出土土器 (Fig.80)

土師器坏（37）口縁部を屈折して僅かに内傾し、内面に1条の沈線を有する。内面には放射文、外面には横位のミガキを確認できる。畿内からの搬入土器であろう。

84次灰褐色土出土陶磁器類 (Fig.81)

緑釉陶器蓋（1）輪状の撮みを持ち、天井部には沈線状の段を有する金属器模倣。高い外天井部から体部へはなだらかに至り、口縁部との境で屈折し端部を嘴状に折り返す。外天井部は回転ヘラケズリ、内面ヘラミガキで淡黄緑色の施釉。復元口径21.3cm、撮みの径8.3cm。

緑釉陶器碗（2～5）2は丸みを持って開く体部から口縁に至り、端部を外反させる。断面方形の高台を貼付する。内面体部中位から上を横位のミガキ、中位から下をジグザグの山形文状のミガキ。口径21.4cm、器高6.4cm。黄緑色の施釉で、焼成は軟質。3は体部内面にはヘラミガキがみられる。外底部は蛇目状にケズリ出す。4の高台部はケズリ出しで外底部には糸切りの痕跡。5は体部と外底部の境は丸みを持つ。断面方形で直立する高台を貼付する。

灰釉陶器碗（6・7）6は丸みを持って体部が開き、口縁端部が外反する。外面体部下位を回転ヘラケズリ、内面に淡黄緑色の釉を比較的厚く施釉する。口径13.8cm、器高4.8cm。7は外面体部を回転ヘラケズリ、内面は部分的に施釉。比較的厚みのある高台が踏ん張る。

越州窯系青磁碗（8～11）8・9は青磁碗Ⅰ類に該当する。8は全面施釉し、体部下位を回転ヘラケズリする。復元口径14.6cm。9は蛇目高台で淡緑色の全面施釉。底径5.6cm。

長沙窯系黄褐釉壺（12）厚さ3cm程度のメダイオン貼花文を有する水注の体部片。胎土は灰白色で焼成は堅緻。胴部径は19.0cm。

白磁碗（13～17）13は厚みのない玉縁を有するⅡ類で、体部に丸みを持つ。内外面に黄白色の施釉、復元口径16.0cm。14・15はⅣ類。14は、内面口縁付近に沈線を有する。15は比較的厚い玉縁と器壁を持つ。復元口径16.6cm。16はⅡ類で、内外面共に白色の施釉。17は、Ⅳ類の高台部で底径5.8cm。

白磁皿（18・19）18は玉縁口縁を有する皿Ⅱ-I b類であろう。復元口径8.4cm。19は内面に花文のスタンプ文様があるⅧ-2b類である。外底部は回転ケズリ。復元口径12.7cm。

青白磁瓶（20）頸部との境は接合部分を面取りして頸部を乗せるようにしている。外面には3本単位の櫛状工具とヘラによる片切彫による文様を描く。青白色の施釉。

青白磁合子（21）口縁端部を肥厚し、体部が直線的に立ち上がる。外面に青白色の施釉。復元口径6.0cm。

青磁碗（22～24）22・23は鎬蓮弁文を有する龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。22は復元口径16.2cm。23は口縁部を肥厚するⅡc類であろう。24はⅢ-2C類で外面に蓮弁文。外底部に明緑色の施釉。

水注（25）外底下位はケズリ、外底部端を面取りする。胎土は精良で茶褐色の施釉。

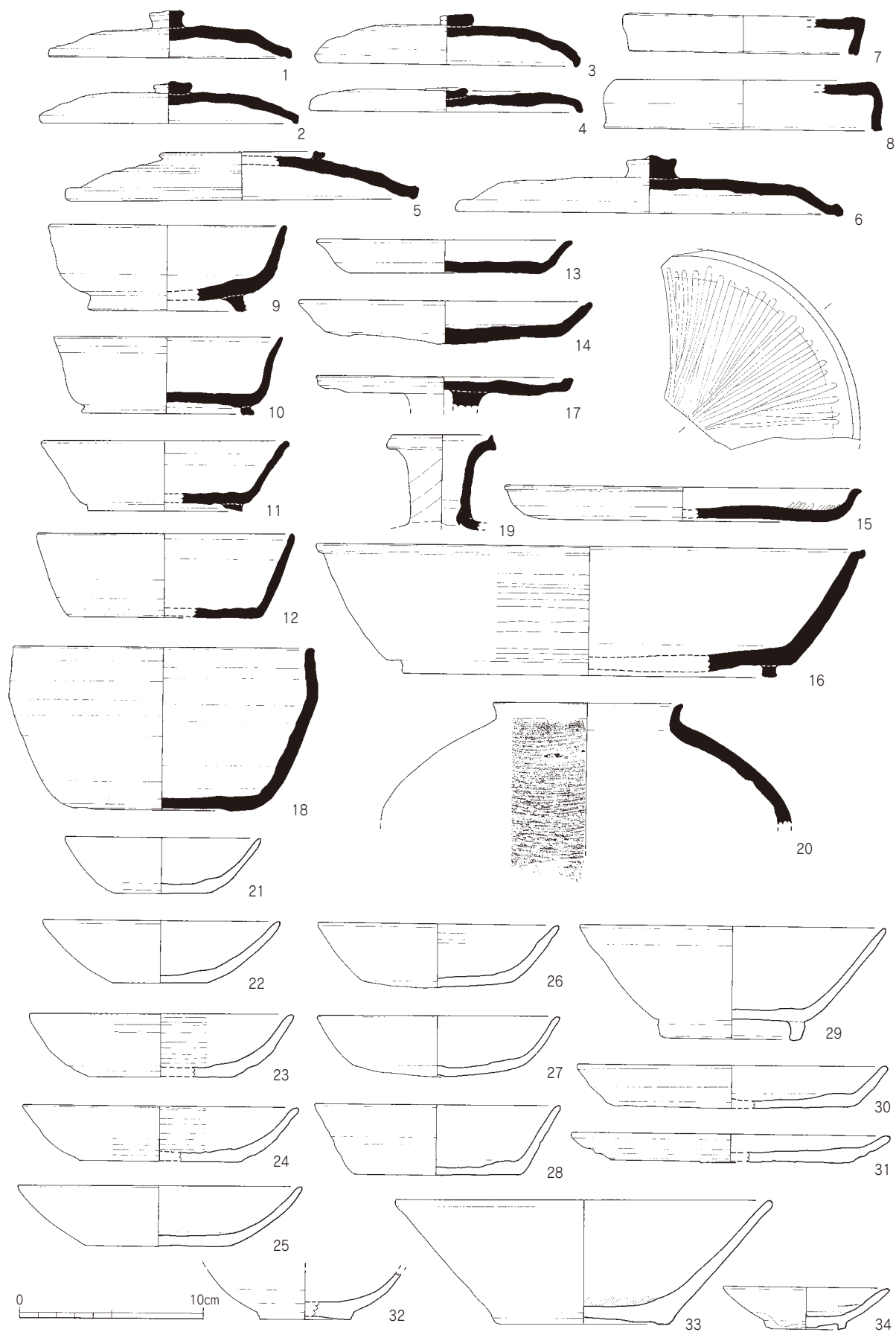


Fig.82 85次暗褐色土出土土器実測図 (1/3)

85次暗褐色土出土土器 (Fig.82)

須恵器蓋 (1～8) 1～3は円柱状に近い撮みを有する蓋。口縁部を僅かに屈折して端部を肥厚する。外天井部はいずれもヘラ切り調整。口径は13.1～14.4cm。4はボタン状の撮みを有する。低平な天井部から口縁部を折り曲げる。外天井部は回転ヘラケズリ。口径14.8cm。5は輪状の撮みを有する。口縁端部を肥厚させ、僅かに屈折する。6は撮みを有する大型の蓋で、口縁端部を外側に屈折させて端部を肥厚する。口径21.0cm。7・8は壺蓋で撮みを欠損する。7の口縁端部には1条の沈線を巡らす。8は口縁端部を肥厚して外反する。外天井部は回転ヘラケズリ。口径15.0cm。

須恵器杯 (9～12) 9～11はいずれも有高台。9は比較的厚みを持った高台が開く。外底部と体部の境はナデにより丸味を持つ。10は低い高台が踏ん張る。外底部は回転ヘラケズリ。11は外底部端に低い高台を貼付する。外底部はヘラ切り。12は無高台の杯。体部は器壁を一定にして直線的に開く。体部下位は回転ヘラケズリ。口径13.9cm, 器高4.6cm。

須恵器皿 (13～15) 13は体部中位から口縁部へかけて外反する。外底面はヘラ切り。14の体部はやや直線的に開く。外底部はヘラ切り。口径15.9cm, 器高2.4cm。15は復元によって皿と理解した。内面に放射状のミガキを施す。外底部には僅かにヘラケズリの痕跡がある。

須恵器盤 (16) 体部中位の下部を回転ヘラケズリの後、ヘラミガキ。口縁部は大きく外反させた後、端部を屈曲する。外面体部には横位のヘラミガキ。復元口径29.7cm。

須恵器高杯 (17) 口縁端部を天井に向ける。外底部を回転ヘラケズリ復元口径13.9cm。

須恵器鉢 (18) 体部を中位で内側へ大きく屈曲させる。外底部はヘラ切り、体部下位をヘラケズリする。口径16.3cm, 器高8.8cm。

須恵器壺 (19・20) 19は口縁部を大きく外反させて端部を細く鋭く仕上げる。胎土は精良である。20は球形の胴部が特徴的で、細く窄まる頸部から短い口縁が直線的に立ち上がる。外面体部を平行のタタキ目の後にヨコナデしている。

土師器杯 (21～28) 21～25は径の小さい底部に対して体部は大きく丸味を持って開く特徴を有する。体部下位から外底部は回転ヘラケズリ。23・24は内外面ヘラミガキ。口径10.6cm～15.4cmである。26～28は口径13.1～13.3cmで逆八字形に開く。外底部の調整はいずれもヘラ切り離し。26は体部内面に僅かに横位のヘラミガキを確認できる。

土師器碗 (29) 口縁部は直線的に立ち上がるものの、やや内湾する。体部下位をヘラケズリし、その後ミガキを施したことが僅かにわかる。口径16.5cm, 器高6.1cm。

土師器皿 (30・31) いずれも外底部をヘラ切り離し。31は短い体部の稜線を際立たせる。

緑釉陶器碗 (32) 外底部をケズリ出しする。対部下位は丸味を持つ。復元底径5.0cm。

越州窯系青磁碗 (33) 直線的に開く体部が特徴的な越州窯系青磁碗 I-1b類で大きく開く体部に特徴がある。高台端部をケズリ。内面に目跡が残る。口径20.4cm。

白磁皿 (34) 外底部をやや深く割る III-1類。内面を環状にカキ取る。

85次茶褐色土出土土器 (Fig.83)

須恵器蓋 (1・2) 1・2どちらも円柱状の撮みを有し、口縁部を折り返して肥厚する。外天井部はヘラ切り離し。2は口径16.8cm, 器高2.6cm。

須恵器杯 (3～5) 3は体部下位に丸味を持ちながら直線的に開く。外底部はヘラ切り離し。

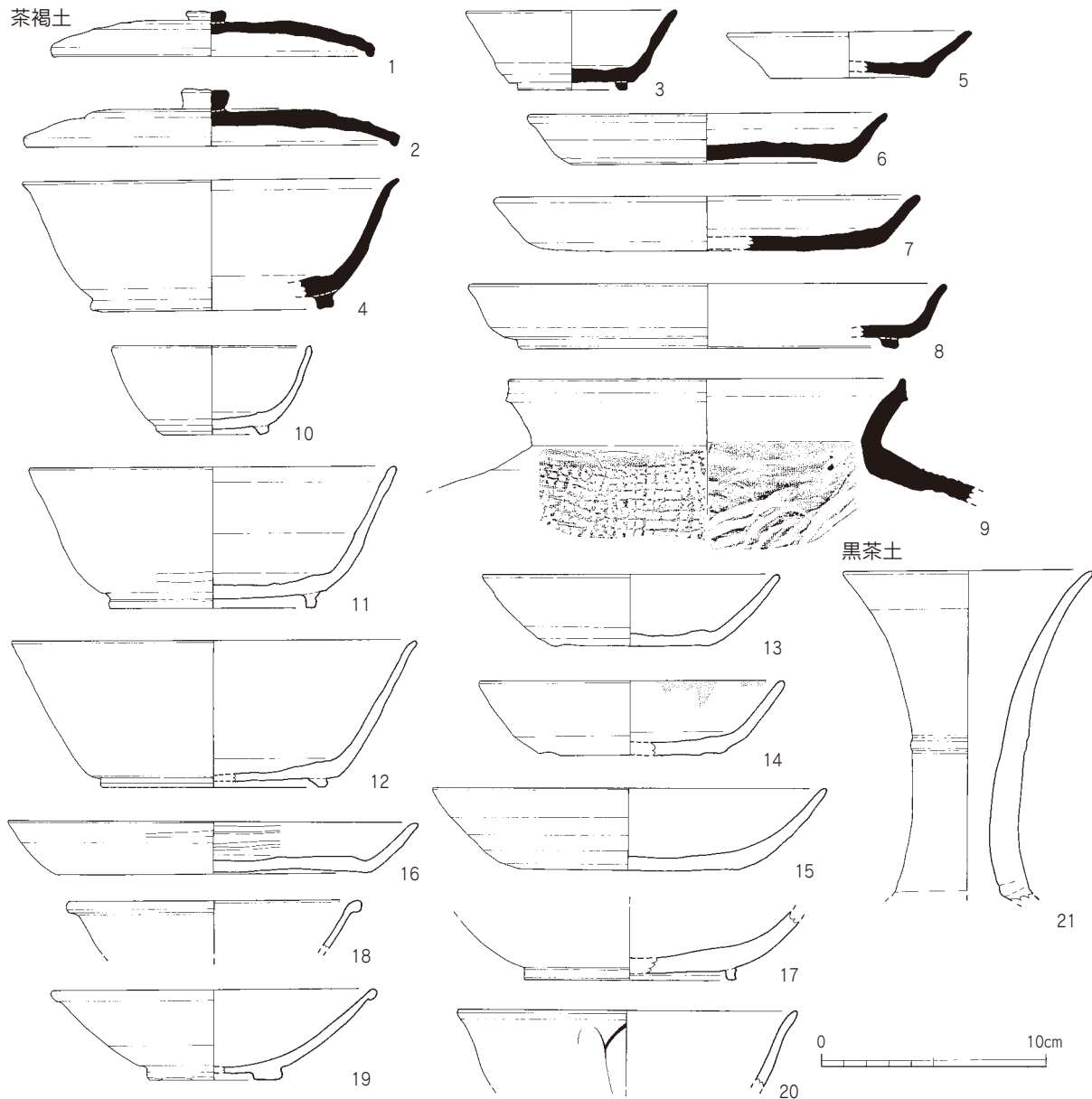


Fig.83 85次茶褐色土・98次黒茶色土出土土器実測図 (1/3)

4は外底部端に厚みのある断面方形の高台を貼付する。胴部下位から中位に丸み持って、口縁部は外反する。復元口径16.8cm、底径10.8cm、器高5.8cm。5は無高台で体部下位を強いナデによって屈折し、そこから大きく逆ハ字形に開く。外底部はヘラ切り離し。

須恵器皿(6・7) 6の外底部端の器壁は厚く、体部中位で僅かに屈折する。外底部は回転ヘラケズリ。7は体部の器壁は一定である。外底部には板状圧痕有り。口径19.0cm、器高2.5cm。

盤(8) 8は低く断面方形の高台を貼付する。体部下位を回転ヘラケズリする。

須恵器甕(9) 口縁部へは鋭く屈折して至る。口縁部に突帯を1条巡らす。外面は格子のタタキ、内面は青海波文の当て具痕。外面に自然釉が多くかかる。復元口径17.9cm。

土師器椀(10～12) 10は断面方形で低く外反する高台を貼付する。体部は丸みを持って口縁に至る。体部外面に僅かにヘラミガキ。口径8.9cm、底径5.0cm、器高4.0cm。11は有高台で、体部と底部の境に丸みを持つ。体部内面に僅かにヘラミガキの痕跡を確認できる。12は平らな

外底部に低く外反する高台を貼付する。復元口径18.0cm, 器高6.5cm, 底径10.1cm。

土師器坏 (13～15) 13は体部下位から口縁部へは丸みを持って至る。体部内外面は横位のミガキ, 外底部は回転ヘラケズリ。口径13.3cm, 器高3.2cm。14は口縁部に煤が付着しており, 灯火器として使用されたとみられる。外底部はヘラ切り離し。15は体部下位をヘラケズリする。赤褐色に焼成する。口径17.5cm, 底径9.9cm, 器高3.7cm。

土師器皿 (16) 体部下位に丸みを持つ。内外面横位のミガキ, 外底部は回転ヘラケズリ。口径18.2cm, 器高2.4cm。

灰釉陶器碗 (17) 内面は黄緑色の灰釉, 外底部は丁寧な回転ヘラケズリ。胎土は精良である。

白磁碗 (18・19) 18は端部を肥厚させ折り返す。復元口径13.0cm。19は刑窯系の白磁 I-1 類で, 高台脇を回転ヘラケズリによる削出し, 全面施釉後に高台畳付部の釉を削り取る。

青磁碗 (20) 外面に鎬の蓮弁文を有する龍泉窯系の碗。復元口径15.0cm。

98次調査黒茶色土土器 (Fig.83)

灰釉陶器壺 (21) 細く長い頸部が喇叭状に開く。中位に二つの沈線を巡らす。内面頸部端には粘土積み上げの痕跡がみられる。口径11.2cm, 頸部高14.0cm。

147次暗褐色土出土土器 (Fig.84・85)

須恵器蓋 (1～15) 口径11.7cm～14.3cm, 14.8cm～16.2cm, 17cm以上に大きく分かれる。撮みはボタン状の低平なもの (1・4・6・8・9), 円柱状のもの (10・13・14), 輪状のもの (7) などがある。口縁部は嘴状に折り返すもの (4～7・9), 折り返して肥厚するもの (8・10～12), 僅かに踏ん張るもの (1・13), 肥厚するもの (3・14・15), 細く収めるもの (2) などがある。外天井部の調整は回転ヘラケズリ (2・4・5・7～9・11・13・15), ヘラ切り (1・3・6・10・12・14) がある。

須恵器坏 (16～23) いずれも有高台。口径は12.3cm～13.5cm, 14.3cmと14.9cm, 16cm以上に大きく分かれる。16が9.9cmが最も小さい。体部は下位に丸みを持つものが多く, また口縁部へは直線的に開く。22は口縁端部を僅かに内面に屈折する。高台は低く外へ跳ねるもの (16・17), 断面方形で低いもの (18～21・23), 低く僅かに踏ん張るもの (22) がある。外底部の調整は, 16がヘラケズリのほか, 17～20がヘラ切り。

須恵器盤 (24・25) どちらも体部は下位に丸みを持ちながら口縁部へは直線的に開く。25の体部下位はヘラケズリ。高台は低く僅かに踏ん張るものを貼付する。外底部の調整はいずれもヘラケズリ。25は復元口径24.2cm, 底径19.8cm, 器高4.7cm。

須恵器皿 (26～28) 口径は18.9～20.6cm。いずれも体部は直線的に開く。外底部は26が磨滅により不明な以外は, いずれもヘラ切り。

須恵器高坏 (29～31) 29・30は坏部片でいずれも口縁端部を天井に向けるが, 30は内面に折り返しによる段を有する。外底部は回転ヘラケズリ。29の復元口径は27.6cm。31は細く直線的な脚部から屈折して, 裾部へ至る。裾端部は僅かに肥厚する。裾径8.4cm。

須恵器壺 (32・33) 32は頸部を大きく外反させて口縁部を屈折させて端部を天井へ向ける。口径11.8cm。33は厚く幅広の突帯を巡らせる。外面は斜格子タタキ, 内面はナデ。

須恵器鉢 (34・35) 34は球形の胴部から短い頸部を屈折させて開く。復元口径18.8cm。35は頸部から口縁部へ屈折して大きく開く。肩部下位には扁平な把手を貼付する。口縁部は横位

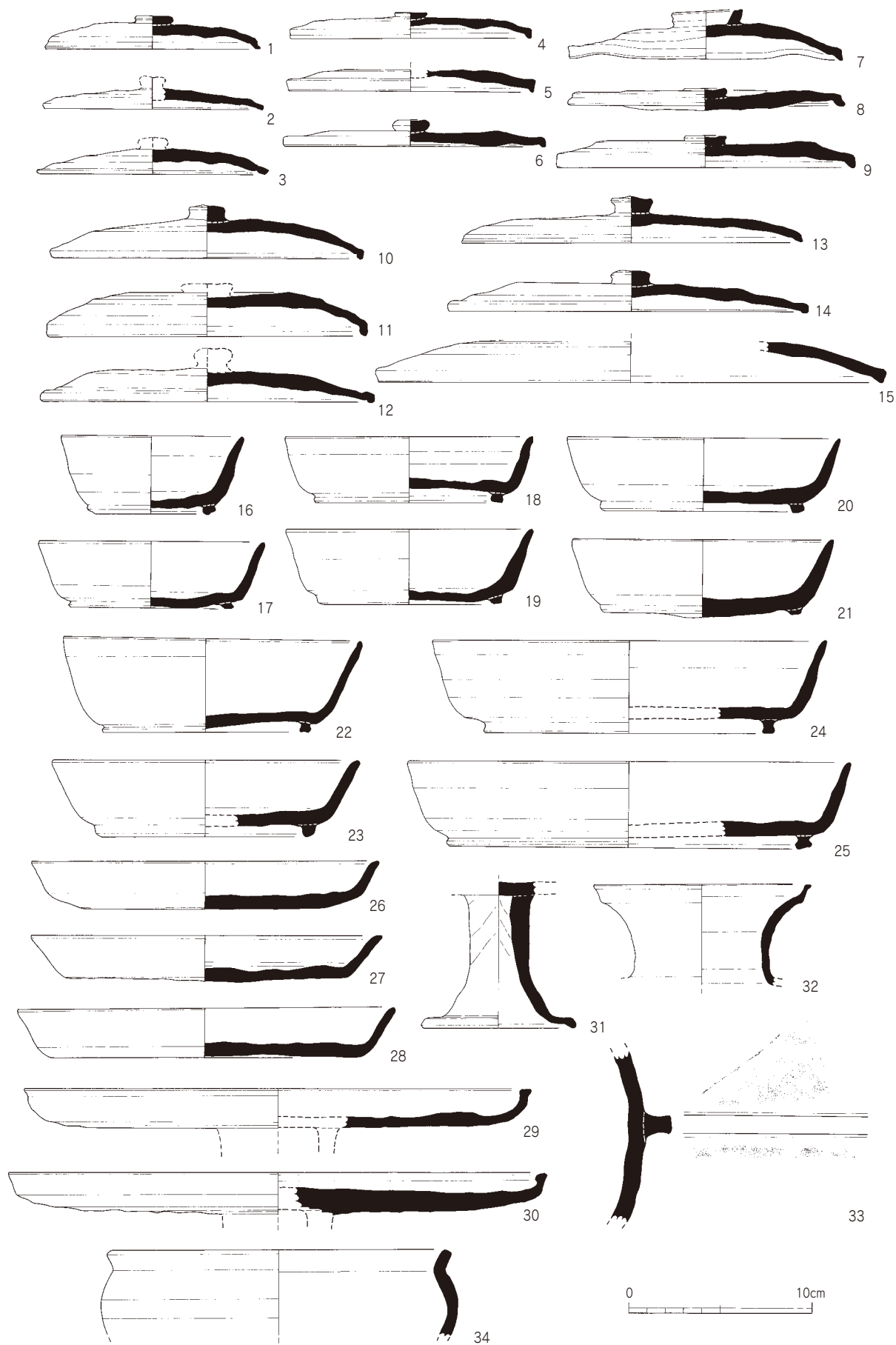


Fig.84 147次暗褐色土出土土器実測図① (1/3)

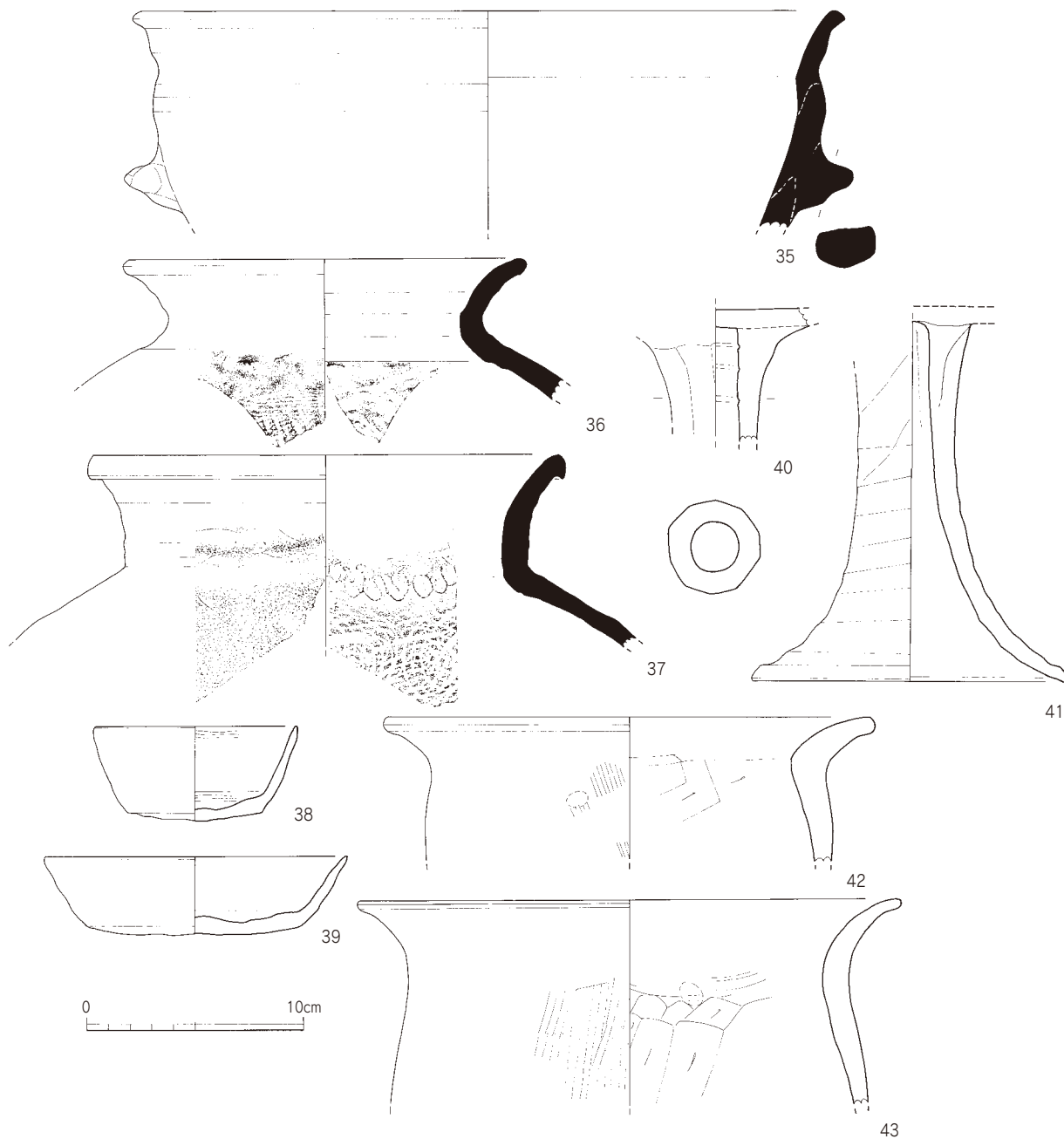


Fig.85 147 次暗褐色土出土土器実測図② (1/3)

のナデ，頸部はヘラケズリ。復元口径33.0cm。

須恵器甕 (36・37) 36は口縁部を大きく逆ハ字形に開く。肩部外面は格子タタキ目，内面は同心円の当具痕。復元口径18.6cm。37の内面には工具によるオサエ痕が連続する。

土師器杯 (38・39) 38は磨滅著しいが内面には横位のミガキを僅かに残す。口径9.6cm，器高4.3cm。39の体部は直線的に開く。外底部はヘラ切り未調整。口径14.1cm。

土師器高杯 (40・41) 40は脚部片でケズリによって，多面体に面取りする。41は脚部から裾部へは喇叭状に開く。裾端部を僅かに屈折させて内面に沈線を有する。裾径14.6cm。

土師器甕 (42・43) 42は頸部から口縁部へは肥厚して至る。外面胴部ハケ目，内面頸部下位をケズリ。復元口径22.8cm。43は頸部から口縁部へは緩やかに外反し，口縁端部は細く鋭い。

胴部外面は縦位のハケ目、内面頸部下位は縦位のケズリ。復元口径25.6cm。

147次茶褐色土下層出土土器 (Fig.86～88)

須恵器蓋 (1～11) 口径11.6cm～13.5cm, 16.2cm～17.5cm, 18cm以上に分かれる。撮みは低平なボタン状 (1・2・9), 円柱状 (3), やや低平な擬宝珠状 (4・6・8) などがある。口縁は端部を肥厚する3を除いていずれも折り返すが, 肥厚させて直立するもの (1), 折り返して内面に屈折する段を有するもの (2・8), 嘴状になるもの (4～7・9), 踏ん張るもの (10・11) などがある。外天井部は3・8がへら切りの他は, いずれも回転へらケズリ。

須恵器壺蓋 (12～14) いずれも天井部と体部の境には丸みを持つ。口縁端部については, 12が肥厚させ, 14は僅かに踏ん張る。13の撮みは肥厚するボタン状。12の外天井部は回転へらケズリ, 13・14はへら切り。14の復元口径は12.9cm。

須恵器杯 (15～26) 15～23は有高台。口径は10.6cm・10.9cm, 12.4cm, 13.7cm～15.6cm, 17cm以上に分かれる。体部は下位にやや丸みを持ちながら大きく逆ハ字形に開く。高台は低く方形で内傾するもの (15・22) と外傾するもの (16・18～21) とに大きく分かれ, 低く踏ん張るもの (23), やや高く外底部端に取り付くもの (17・22) などがある。外底部は15～17・20・21がへら切りの他は回転へらケズリ。なお, 18の口縁部には油煙が付着しており, 灯火器として使用されたとみられる。24～26は無高台。24・25の体部は直線的に逆ハ字形に開く。いずれも外底部はへら切り。25は口径13.5cm, 器高4.1cm。26の外底部には板状圧痕有り。

須恵器皿 (27～29) いずれも体部が逆ハ字形に開くが, 29は外底部との境に丸みを持つ。口径は27が16.6cm, 他は18cmを超える。外底部はいずれもへら切り未調整。

須恵器盤 (30) 体部から口縁部には丸みを持って至る。磨滅著しいが, 体部下位と外底部は回転へらケズリ。復元口径32.9cm。

須恵器高杯 (31～33) いずれも脚部片。31は短脚で杯外底部は回転へらケズリ, 裾部は大きく開いて端部を嘴状に折り返す。32は比較的一定の厚みを持った器壁で裾端部を肥厚している。復元裾径7.8cm。33は脚部内外面にロクロ成形による稜を明瞭に残す。裾端部は肥厚して僅かに折り返す。脚高12.8cm, 裾径13.3cm。

須恵器小壺 (34～36) いずれも平底。34は体部中位に沈線状の段を設ける。体部下位を回転へらケズリ, 外底部はナデ。底径3.3cm。35は体部中位に丸みを持ち, 肩部を回転へらケズリする。36は体部下位から外底部を回転へらケズリ。底径6.2cm。

須恵器壺 (37～39) 37・38はいずれも逆ハ字形に開いてやや踏ん張る高台を貼付する。39は体部下位から外底部をケズリ後ナデ, 38は体部下半をへらケズリ, 高台から脚部をナデる。39・40は球形の体部で平底。外底部から体部下位を回転へらケズリする。39は復元底径11.6cm。

須恵器鉢 (40～43) 40は鉄鉢形で口縁部を肥厚して大きく内傾する。口縁付近に灰被り有り。口径19.8cm。41は朝顔形に開く浅鉢で, 口縁部を大きく外反する。口縁部と体部上位の外面を回転ナデ, 体部下位外面を回転へらケズリ。復元口径33.4cm。43は平底で外底部と体部の境に丸みを持つ。外底部から体部下位を回転へらケズリ。

須恵器甕 (44～48) 44は口縁部に突帯を1条巡らす。内面頸部下位はケズリ。復元口径21.2cm。45は口縁部外面にへらによる沈線を1条巡らす。46は大きく球形となる胴部から短

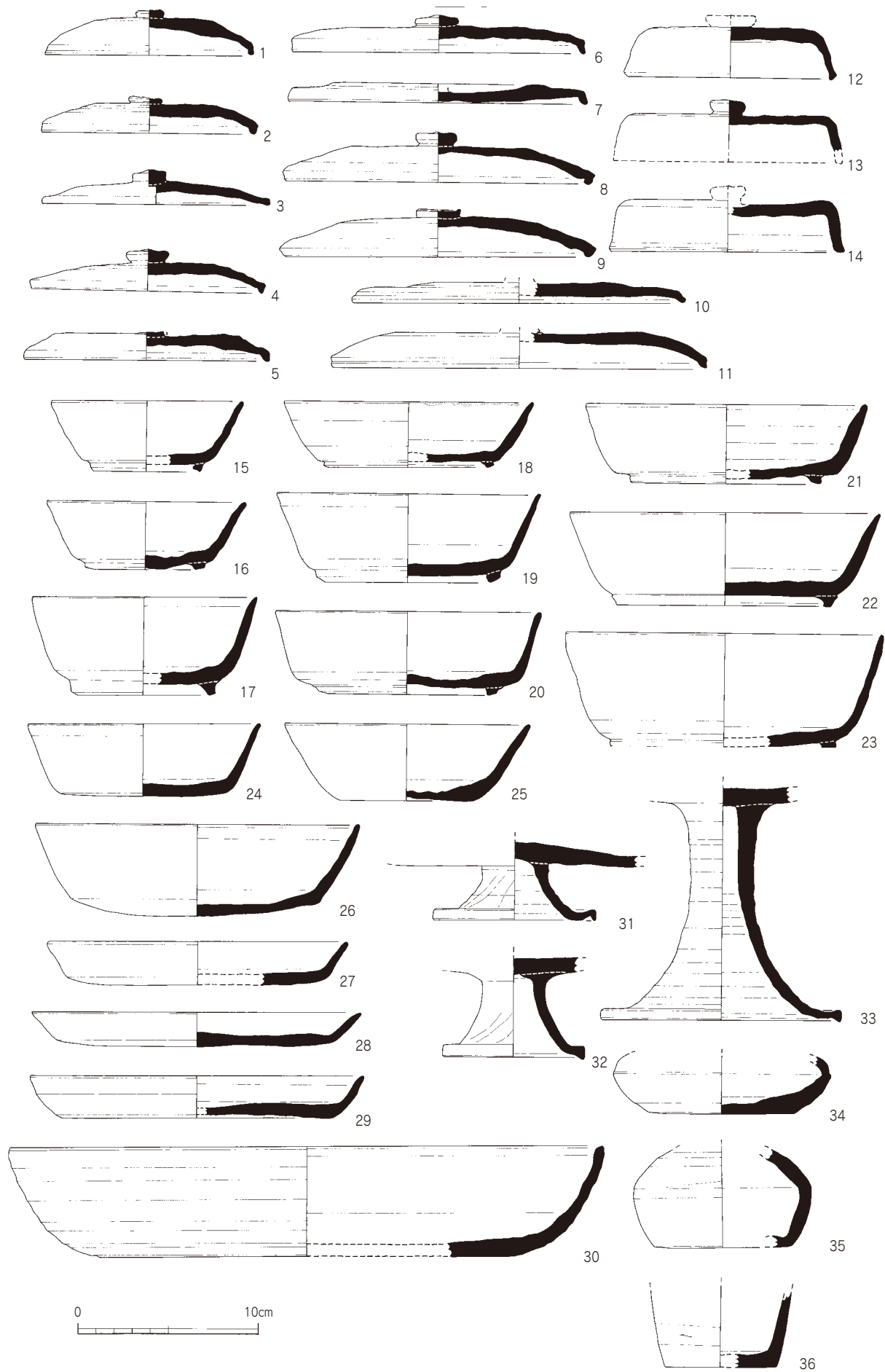


Fig.86 147次茶褐色土下層出土土器実測図① (1/3)

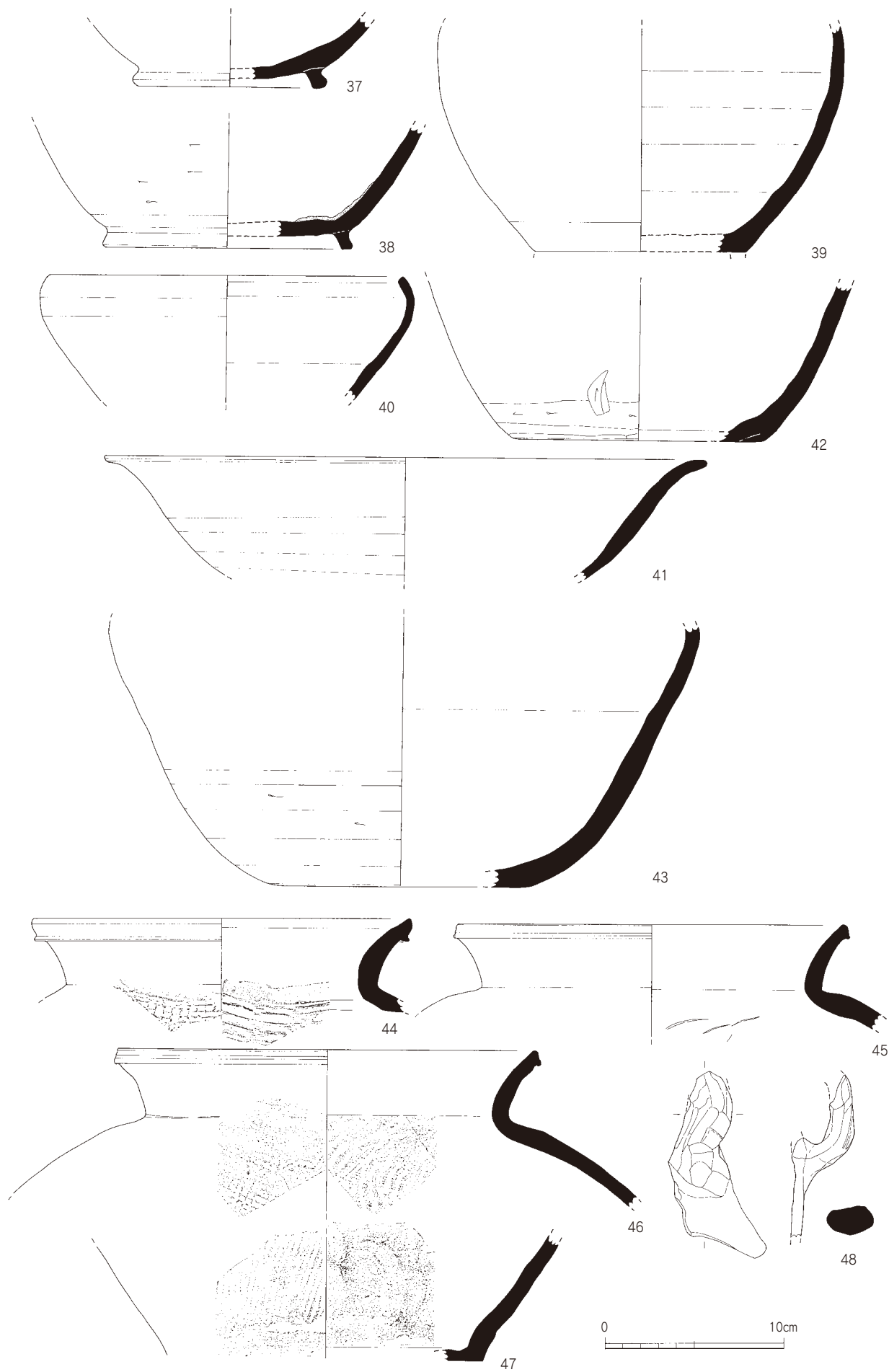


Fig.87 147 次茶褐色土下層出土土器実測図② (1/3)

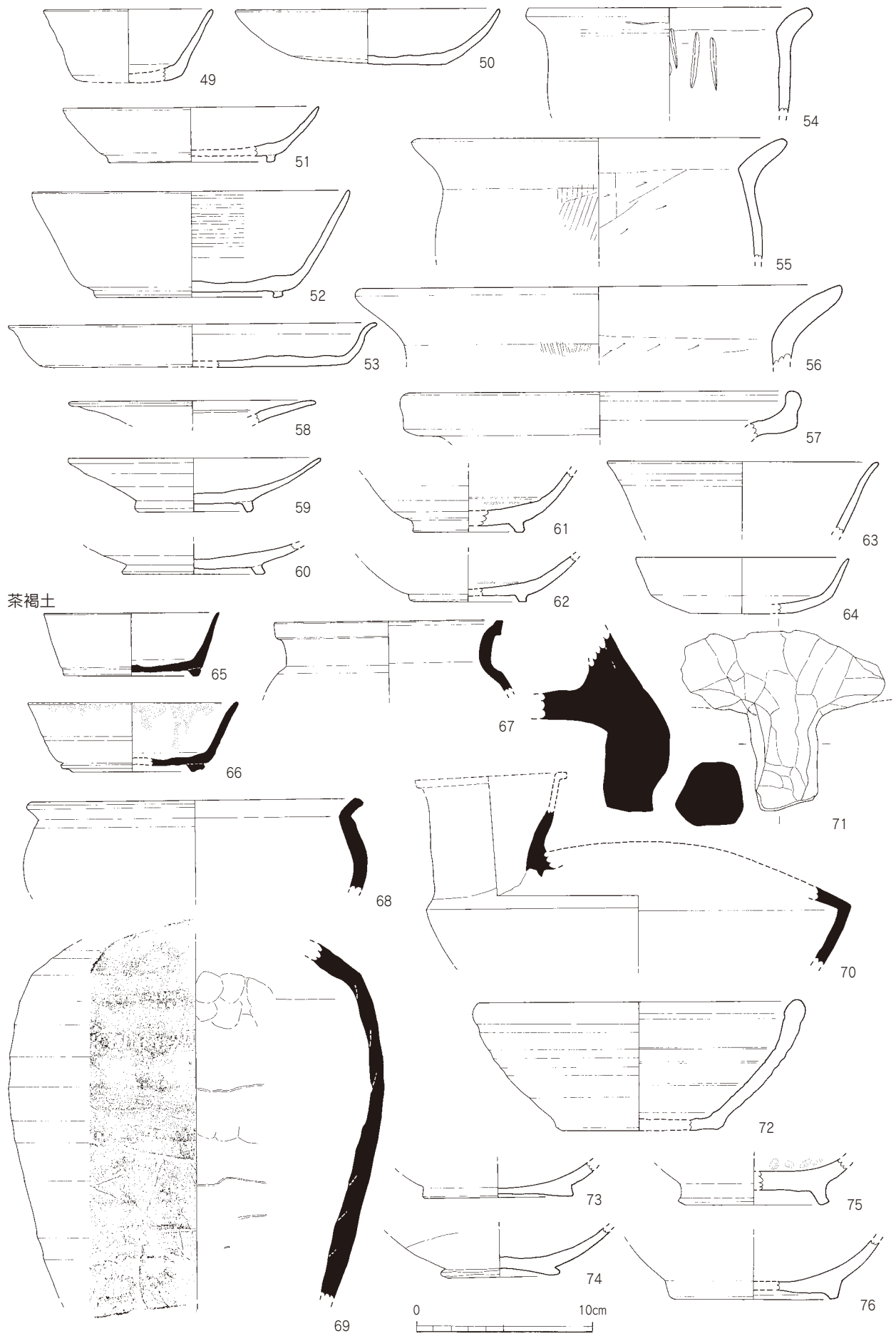


Fig.88 147次茶褐色土下層・茶褐色土出土土器実測図 (1/3)

く逆ハ字形に開く口縁部へ至る。口縁部外面にはヘラによる2条の沈線を巡らす。胴部外面は格子目タタキ、内面は同心円状の当具痕。復元口径23.8cm。47は平底。体部下位に平行タタキ、外底部との境目付近はナデ。外底部は未調整。復元底径17.3cm。48は把手片で外面を格子目のタタキ、内面は同心円の当具痕。把手部はヘラによる面取り。

土師器坏 (49・50) 49は体部を直線的に逆ハ字形に開く。体部内外面ナデ、底部の調整不明。口縁部に煤付着。口径9.6cm, 器高4.1cm。50は体部に丸みを持つ。内外面磨滅により調整不明。口径14.9cm, 器高3.1cm。

土師器椀 (51・52) いずれも断面台形で低い高台を貼付する。51は体部を直線的に逆ハ字形に開くが器面の調整は磨滅により不明。復元口径14.4cm。52は内面に横位のミガキ、外底部から体部下位は回転ヘラケズリ。口径17.9cm, 底径10.6cm, 器高6.0cm。

土師器皿 (53) 53は体部で大きく屈折して口縁部へ開いて至る。器面の調整は磨滅により不明。復元口径20.8cm。器高2.4cm。

土師器甕 (54～56) 54の短い口縁部は肥厚して大きく逆ハ字形に開く。内面頸部下位をケズリ。復元口径16.2cm。55の頸部下位の外面はハケ目、内面はヘラケズリ。56は復元口径27.6cm。

緑釉陶器瓶 (57) 瓶の二重口縁部片。口縁端部を肥厚しながら僅かに内傾する。内外面暗緑色で光沢を持つ、土師質。復元口径22.7cm。

灰釉陶器皿 (58～60) 58は内面中位に有段。内面は灰釉で外面は露胎。復元口径14.0cm。59は逆ハ字形に体部が開き、端部に丸みを持つ高台を貼付。内面底と外面を露胎。外面ヘラケズリ。復元口径14.3cm, 器高3.0cm。60は逆ハ字形に開く方形の高台を貼付する。底径8.1cm。

青磁碗 (61～63) いずれも越州窯系青磁碗。61・62は黄味を帯びた緑色釉を施釉する。高台付部は露胎。内面には目跡を残す。63は口縁部外面に2条の沈線を巡らす。復元口径15.2cm。

青磁皿 (64) 龍泉窯系青磁皿Ⅰ類。内面見込にヘラによる文様がある。復元口径12.0cm。

147次茶褐色土出土土器 (Fig.88)

須恵器坏 (65・66) いずれも体部が直線的に逆ハ字形に開く。65は外底部の端に低い高台を貼付し、外面を強いナデによって体部との境を明瞭にする。外底部はヘラ切り未調整。口径9.8cm, 器高3.5cm。66の低い高台は大きく外反する。口縁部内外と内底面に油煙付着。

須恵器甕 (67) 口縁部は直線的に開いて立ち上がり、端部付近を突帯状に肥厚する。

須恵器鉢 (68) 球形の胴部で、短い口縁部が外反する。外面頸部下位をケズリ状に強くナデる。復元口径19.0cm。

須恵器壺 (69) 二重口縁壺の胴部片。外面は格子目のタタキ後、回転ヘラケズリ。肩部外面に格子目タタキ、内面はナデ。復元口径13.0cm。

須恵器横瓶 (70) 頸部から体部片。頸部から体部上位は横ナデ、下位は回転ヘラケズリ。

須恵器盤 (71) 盤の獣脚片。ヘラにより全体を面取りする。

陶器鉢 (72) 口縁部を玉縁状に丸く収め、体部内外面共に横位のナデ。底部は不整形な方向のケズリ。復元口径18.8cm, 器高7.3cm。篠窯産。

緑釉陶器碗 (73) 外底部を円盤状にケズリ出す。土師質で器面の磨滅著しい。

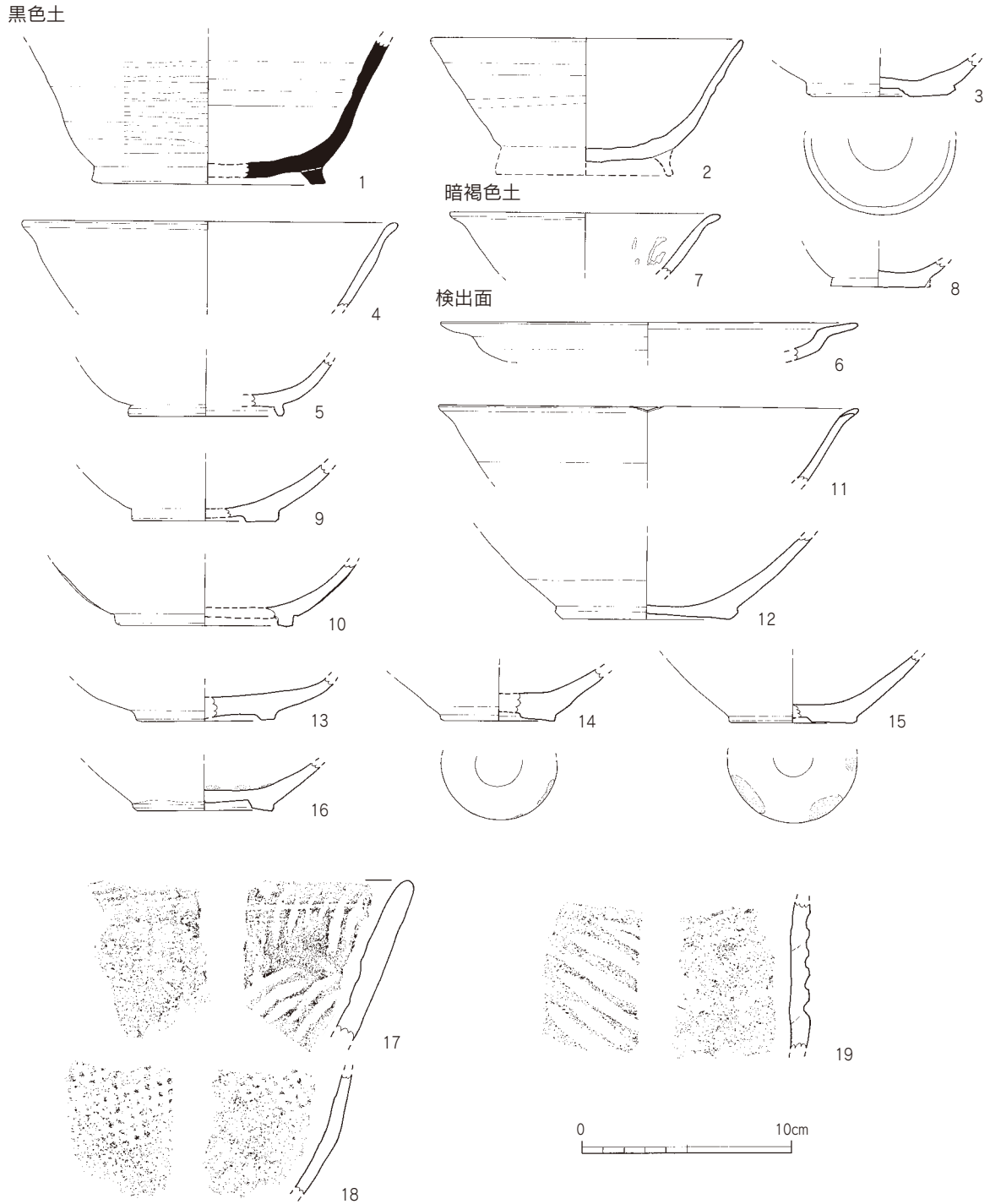


Fig.89 187次黒色土・暗褐色土・その他の層出土土器実測図 (1/3)

青磁碗 (74～76) いずれも越州窯系青磁碗。74は碗Ⅱ類。円盤状の高台で体部下位から外底部は露胎。内面に目跡有り。75・76は輪状の高台で、内外面施釉後に畳付部を描き取って露胎とする。75の内面には目跡を残す。

187次黒色土出土土器 (Fig.89)

須恵器鉢 (1) 方形でやや踏ん張る高台を外底部の端に貼付する。体部中位外面はナデのち横位のミガキ、下位はヘラケズリのちミガキ。復元底径11.2cm。

土師器碗(2・3) 体部は大きく逆ハ字形に開く。高台が剥落する。外面に赤色の付着物有り。3は蛇の目状の高台で、外底部に黒斑が付く。青磁碗模倣であろうか。

緑釉陶器碗(4) 須恵質の焼成で淡緑色に釉を発する。復元口径18.0cm。

灰釉陶器碗(5) 丸く内面に稜を持つ高台を貼付する。内面のみ釉を発する。底径7.4cm。

灰釉陶器皿(6) 段皿の口縁部で内面のみ灰緑色に発色。復元口径19.6cm。

187次暗褐色土出土土器 (Fig.89)

緑釉陶器碗(7・8) 7は口縁部を外反する。内面は淡緑色、外面は灰白色に発色する。復元口径13.0cm。8は小碗の底部で土師質に焼成。

白磁碗(9・10) 刑定窯系のI類とみられる。9は蛇ノ目状の高台、10は輪状高台を有する。どちらも暁付部の釉を掻き取りし、露胎とする。

青磁碗(11～16) 11～16はいずれも越州窯系の碗。11は口縁部に切り込みを入れた輪花。12は円盤状高台で体部下位から外底部は露胎。13・16は輪状高台、14・15は蛇ノ目高台。16の内面には目跡の痕跡がある。13は灰緑色、14・15は緑色、16は灰色に施釉する。

層位出土縄文土器 (Fig.89)

深鉢(17～19) 17・18は早期の押型文土器。17の外面には格子目文、内面口縁部に垂下する刻目文を施文。体部から口縁端部まで一定の器厚をなす。14次調査灰層(地区不明)出土。18は内外面に楕円文を施文。胎土に砂粒を多く含む。14次補足調査S D 320中層(粗砂)出土。19は前期の轟式土器。外面には凹線文を施文、内面は横位のナデ。17次Y 2側溝(砂層出土)。

不丁地区北半出土土器 (Fig.90)

ここでは不丁地区北半における遺構の埋没に関する層位出土の土器を報告する。

17次第2層

土師器皿(1・2) 口径はそれぞれ4.3・4.5cm。外底部はヘラ切り。

土師器坏(3) 大きく逆ハ字形に体部が開く。口径15.4cm。外底部は糸切り。

17次第1層(下層)

土師器皿(4・5) 4の復元口径は9.6cm、外底部はヘラ切り離し。5は器壁が薄く高い高台を貼付する。口径12.0cm。

土師器坏(6) 底部の器壁は比較的厚い。外底部はヘラ切り未調整。口径16.4cm。

土師器碗(7) 高く逆ハ字形に開く高台を貼付する。器壁は比較的厚く外底部に板状圧痕有り。

青磁坏(8・9) 龍泉窯系青磁坏Ⅲ類。8は体部を直線的に立ち上がらせ口縁部を大きく外反する。外面体部に鑄蓮弁文を施し、緑青色に施釉する。9は口縁部を短く屈曲させ、内面は凹面を成す。緑灰色に施釉する。復元口径13.8cm。

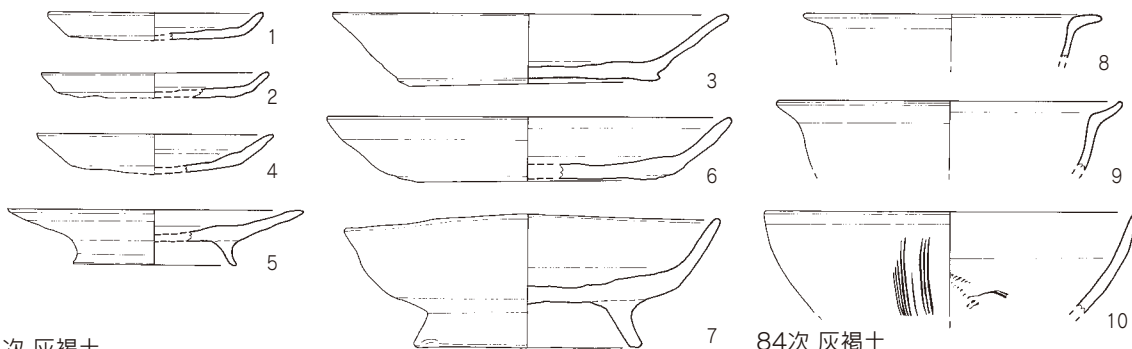
青磁碗(10) 同安窯系の青磁碗I類。外面に縦状の櫛目文、内面には一部花文を施す。

83次灰褐土

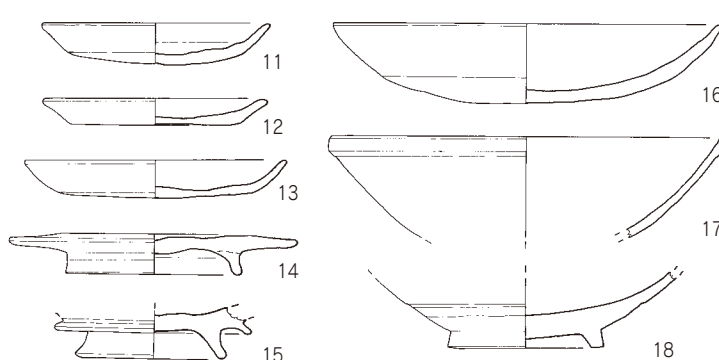
土師器皿(11～14) 11～13は口径8.0cm～10.6cm。外底部はいずれも板状圧痕。14は高台付皿。高台は高く直立し、体部は直線状に大きく開く。外底部に板状圧痕有り。

土師器碗(15) 高くハ字形に開く高台を貼付する。外底部と体部との境に細くスカート状になる突帯を巡らせる。内外面黒色を呈する。底径5.8cm。

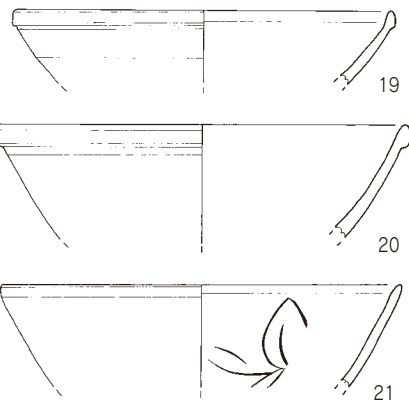
17次 第2層



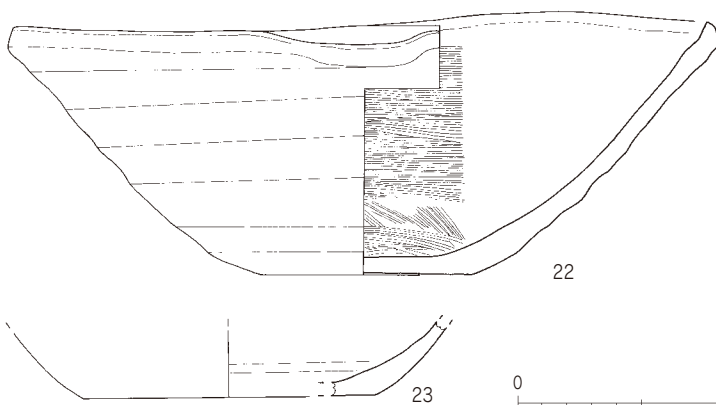
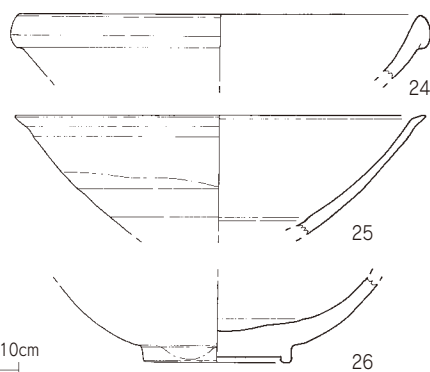
83次 灰褐土



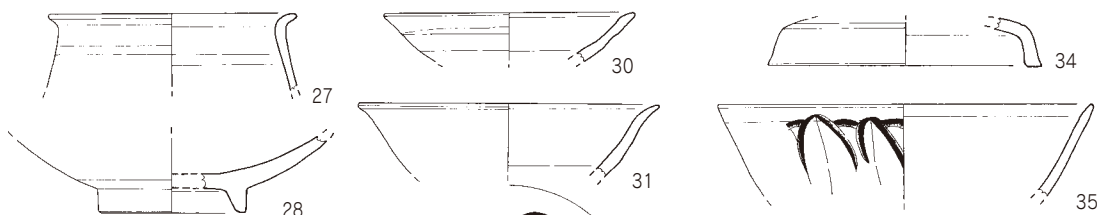
84次 灰褐土



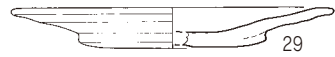
87・90次 暗褐土



110次 暗灰色粘質土



110次 暗褐土



110次 灰褐土

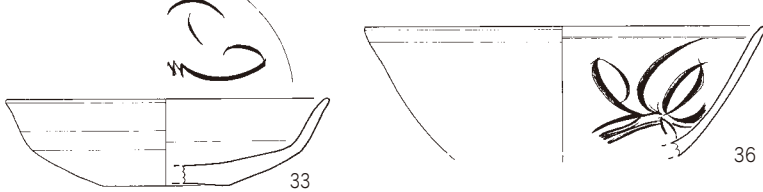
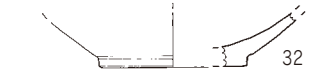


Fig.90 不丁地区北半層位出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

土師器環 (16) 丸底環で底部から口縁部までの器壁は一定の厚さである。口径15.6cm, 器高3.2cm, 外底部は板状圧痕後ナデ。淡橙灰色に焼成。

白磁碗 (17・18) 17は小さい玉縁状の口縁を持つⅠ類。乳白色に施釉する。口径15.6cm。18は外面体部下位に沈線を巡らす。外底部から体部下位は露胎で回転ケズリ。

84次暗褐土

白磁碗 (19・20) 19は小さな玉縁状の口縁を持つ。20は白磁Ⅳ類で復元口径16.4cm。

青磁碗 (21) 龍泉窯系青磁碗の口縁部片。内面に草花文を施すⅢ類とみられる。

瓦質土器鉢 (22) ほぼ完形になる。口縁端部はやや肥厚して内傾する。外面にはロクロ成形による稜を明瞭に留め、磨滅著しいが縦位のハケ目も僅かに確認できる。内面は横位のハケ目、外底部はナデ。口径28.0cm。

84次灰褐土

陶器鉢 (23) 外面は黄褐色の施釉, 内面は茶褐色の釉がみられる。胎土は精良。

87・90次暗褐土

白磁碗 (24) 玉縁状の口縁を持つ白磁Ⅳ類。復元口径16.0cm。

87・90次茶褐土

白磁碗 (25・26) 25は口縁部を僅かに外反する白磁Ⅴ類。体部外面下部は露胎。26は外面口縁部まで施釉し一部底面にも及ぶが, 畳付については掻き取る。内面見込に段を有する。

110次暗灰色粘質土

黄褐釉壺 (27) 内傾する頸部から口縁部へ大きく外反する。器面の剥落が著しいが黄褐色に施釉し, 土師質の焼成。復元口径は10.0cm。

110次暗褐土

白磁碗 (28) 高く直立する高台をケズリ出す。体部下位と高台部は露胎。乳白色に施釉する。

110次灰褐土

土師器皿 (29) 体部を大きく開く。底部の器壁は体部に比べて厚く外底部はヘラ切り未調整。復元口径13.0cm, 器高1.7cm。

白磁皿 (30・31) 30は体部を直線的に開きながら口縁部がやや肥厚する。外面体部は露胎, 復元口径10.0cm。31は口縁部を外反して開く。内面見込に段を有する。

白磁碗 (32) 内外面青白色に施釉するが, 高台は掻き取る。高台の復元底径は6.0cm。

青磁皿 (33) 龍泉窯系青磁皿Ⅰ類。体部中位で大きく屈折する。内面見込に片彫花文を施す。内外面施釉後, 外面底部を掻き取る。

青磁蓋 (34) 内外面施釉後に口縁の端面のみ掻き取る。

青磁碗 (35・36) 35は龍泉窯系Ⅲ類碗で外面に蓮弁文を施す。復元口径15.0cm。36は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で内面に片彫蓮花文を有する。

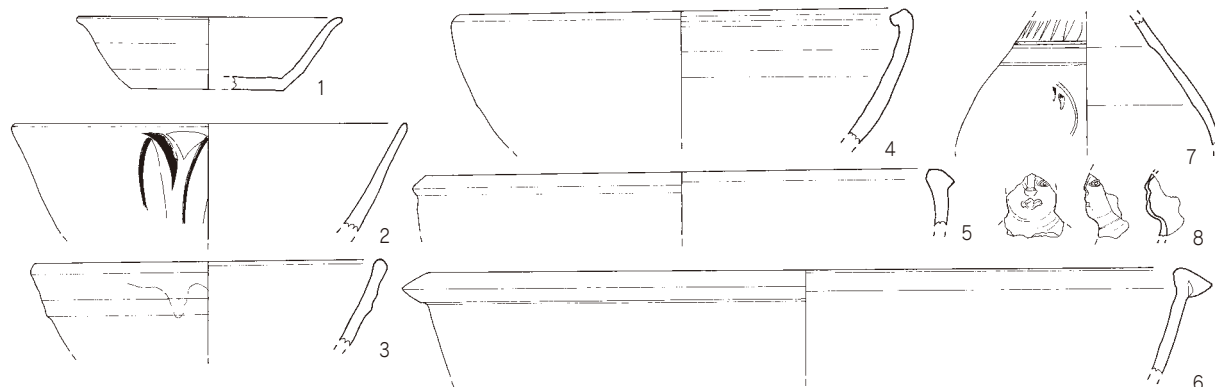
不丁地区南半出土土器 (Fig.91)

ここでは不丁地区南半における遺構の埋没に関する層位出土の土器を報告する。

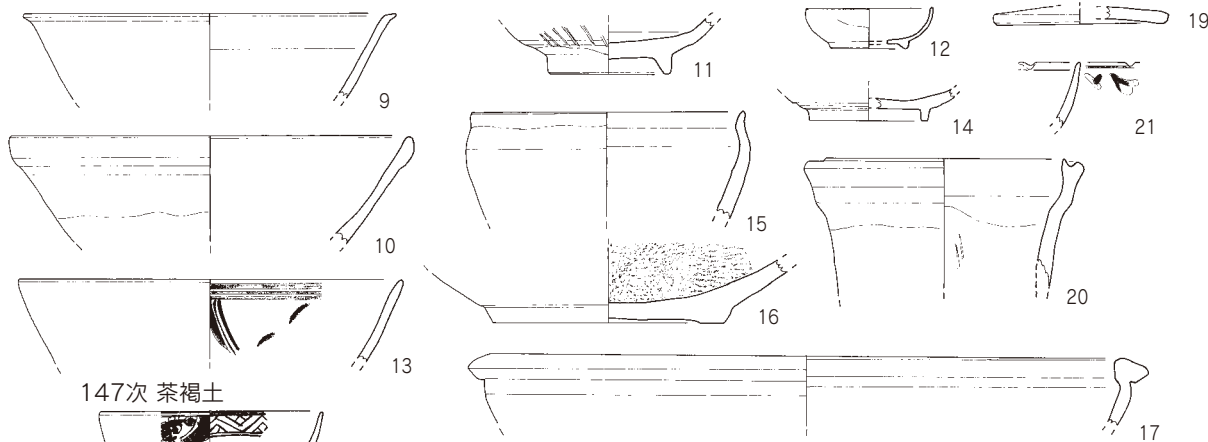
85次灰褐土

白磁皿 (1) 白磁皿Ⅸ類。体部は平底で, 口縁部は僅かに外反する。内外面施釉するが, 口縁端部が口禿げとなる。

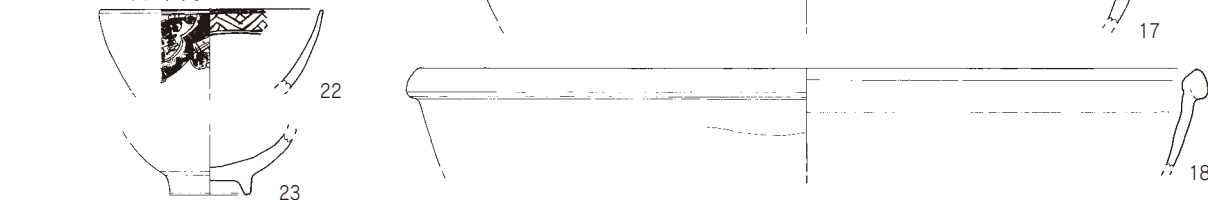
85次 灰褐土



98次 暗褐土



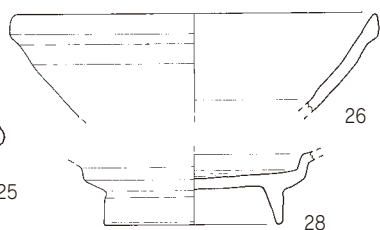
147次 茶褐土



76次 暗茶色土



76次 灰色土B・暗灰色土



76次 茶灰土

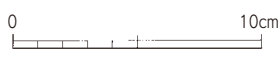
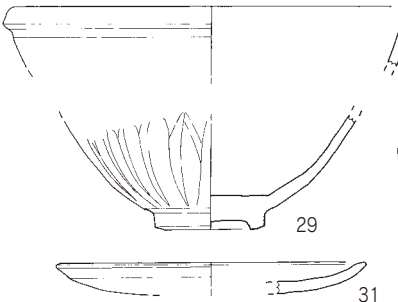


Fig.91 不丁地区南半層位出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

青磁碗 (2) 龍泉窯系青磁碗Ⅱ類で体部外面に鎬蓮弁文を持つ。淡緑色に釉を発する。

磁器碗 (3) 口縁端部を肥厚する。内外面共に施釉し白色に発するが、通常の白磁とは異なる。

近世磁器の可能性が高い。

須恵質土器鉢 (4) 口縁部を大きく折り返す。内外面丁寧な横位のナデ。復元口径18.5cm。

陶器鉢 (5) 口縁外面に突帯を持つ。硬質に焼成する。復元口径20.0cm。

褐釉陶器盤 (6) 口縁部外面に三角状の突帯を貼付する。復元口径30.0cm。

染付磁器壺 (7) 頸部には赤色で三角形を連続させた鋸歯文様, 胴部にも僅かな文様がみられる。染付部分は大きく剥落している。

白磁人形 (8) 人形の顔面片。鼻筋を通し, 目は切れ長で瞳を1点で表現する。胎土は精良。

98次暗褐色土

白磁碗 (9~11) 9は口縁部を外反する白磁Ⅴ類で復元口径15.0cm。10は玉縁状の口縁を持つ白磁Ⅳ類。11は細く直立する高台を持つ。外面体部下位に縦位のヘラ状の工具痕が有る。内外面施釉, 体部下位と高台は露胎。

白磁小碗 (12) 器面全体に施釉する。高台はケズリ出しで復元口径5.0cm。紅皿であろうか。

青磁碗 (13) 内面口縁部に三重の圈線を巡らし, 体部には縦位の文様を施す。

陶器碗 (14) 内外面施釉するが外面体部下位は露胎で胎土は精良。

天目碗 (15) 口縁部で屈折して外反する。黒鉛色の釉を内外面に施釉するが口禿げ状になる。

陶器鉢 (16~18) 16は外面体部下位をケズリ, 内面は縦位のハケ目を施す。須恵質に焼成。17には淡白色の釉が僅かに残る。口縁部を外側へ折り返して肥厚する。復元口径25.0cm。18は口縁部を外側へ折り返して肥厚する。内外面に施釉するが体部下位は露胎。淡白色に釉を発する。胎土には砂粒を多く含む。復元口径31.2cm。

陶器蓋 (19) 緑紫色に釉が発色するが口縁端部と内面を掻き取る。茶瓶等の蓋として使用か。

陶器碗 (20) 内外面口縁部付近に黒色に発する釉を施釉するが, 焼成によるひび割れが入る。

染付磁器碗 (21) 21の口唇部には縦状の刻目が一部入り, 歪んでいる。内外面に一重の圈線を巡らせ, 外面にはその下位に文様を施す。

147次茶褐土

染付磁器碗 (22) 内外面に青色で文様を染め付ける。近世以降であろう。

磁器小碗 (23) 内外面に施釉するが高台畳付部のみは橙色にする。復元底径3.2cm。

76次暗茶色土

白磁碗 (24) 刑定窯系の白磁Ⅰ類。胎土は精良で復元口径15.0cm。

76次茶灰土

白磁碗 (25) 玉縁状の口縁を持つ白磁Ⅳ類。復元口径16.0cm。

76次暗灰色土B

白磁碗 (26) 玉縁状の口縁を持つ白磁Ⅳ類で, 内面に段を有する。

青白磁壺 (27) 胴部中位に横位の沈線を2条施文し, その上位に櫛目文をジグザグに走らせ草花文ないし雲文を施文する。青白色に釉が発色する。胎土は精良。

陶器鉢 (28) 高く直立する高台を持つ。底部と体部の境を大きく屈折する。皿か鉢のいずれかであろう。内外面に施釉し, 釉は白色に発する。底径6.8cm。

76次暗灰色土

青磁碗 (29) 龍泉窯系青磁碗Ⅱ類で外面に鎬蓮弁文。外底部畳付部に僅かに釉, 底面は露胎。

白磁碗 (30) 内外面に白色に施釉。丸みを持った碗形態をとる。復元口径7.8cm。

白磁皿 (31) 大きく開く口縁部から体部を僅かに屈折する。内外面淡白色に施釉する。復元口径12.4cm。

第V章 理化学的分析調査

(1) 大宰府史跡187次調査及び鴻臚館跡から出土したガラス製品の材質調査

ガラスは弥生時代以降、大陸や半島などから日本に持ち込まれたとされているが、これまでの先学による調査研究により、その組成が幾つかのグループに分類できることが明らかにされ、その歴史の変遷や流通経路などの研究も進められている。大宰府史跡187次調査で出土した、奈良時代末から平安時代初頭に属すると考えられるガラス製品について、その位置づけを目的とした材質調査を行ったので、ここにその結果を記す。また、本資料と外見的に酷似し、比較的近い時期に属すると考えられる資料が、福岡市の鴻臚館跡から出土している。比較検討のため、こちらの資料についても調査を行ったので、その結果も併せて掲載する。(Fig. 92)

大宰府出土の資料(仮に資料D-1とする)は縦1.9cm、横2.6cm、厚さ2.8～0.8mm、重さ1.8gを計り、容器の破片と考えられている。透明度は高く、淡い青緑色を呈している。各所に1mm前後の気泡が見られ、製作技法を検討する場合には何らかの手がかりになると思われる。

調査は蛍光X線分析法で行った。この方法は試料にX線を照射し、試料に含有する各元素から発生する二次X線(特性X線)を検出器でとらえ、X線エネルギー分布と強度をピークとして表すものである。ガラス試料の場合、局部的に強いX線を照射するとその部分が変色を来す現象が起きるため、同じ蛍光X線分析法でも、X線強度が小さくても測定のできるエネルギー分散型蛍光X線分析法が、資料に損傷を与えない方法として有効である。そこで今回は、福岡市埋蔵文化財センターの微少領域用エネルギー分散型蛍光X線分析装置(エダックス社製:Eagle μ -plove)を使用し、以下の条件により分析を行った。対陰極:モリブデン(Mo)/検出器:半導体検出器/印加電圧・電流:20及び40kV・180～500 μ A/測定雰囲気:真空/測定範囲0.3mm ϕ /測定時間300秒

また本来詳細な調査を行うには、風化層を除去した上で標準資料を用いた校正により成分の定量値を求める必要があるが、今回は大まかな傾向を知るための非破壊的手法による定性分析とし、肉眼的に汚れ等の付着がないことを確認した上で、そのまま測定している。

分析の結果、ガラスの主成分である珪素(Si)の他、ナトリウム(Na)、マグネシウム(Mg)、アルミニウム(Al)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)といった元素が検出された。この他、特に高い電圧で測定した際に、8KeV付近に微弱な高まりが現れている。この部分は銅(Cu)のK α 線に相当するが、この元素が含まれるか否かの判断は難しい。

今回は完全非破壊による定性分析のため、検出される蛍光X線ピークの特徴と相対強度を手掛かりとして判定することとなる。過去に行ってきた同様の手法による調査でも、この方法によりある程度分類が可能なのは確認されている。古代のガラスには、これまでの調査研究でアルカリ珪酸塩ガラスと鉛珪酸塩ガラスのあることが知られている。アルカリ珪酸塩ガラスは融剤に酸化カリウムを用いるカリガラス(K_2O - SiO_2 系)と融剤に酸化ナトリウムを用いるソーダ石灰ガラスに区別され、更にソーダ石灰ガラスは酸化アルミニウム含有量の高いもの(Na_2O - Al_2O_3 - CaO - SiO_2 系)と、低いもの(Na_2O - CaO - SiO_2 系)に区分される。鉛珪酸塩ガラスには、鉛ガラス(PbO - SiO_2 系)と鉛バリウムガラス(PbO - BaO - SiO_2 系)がある。

資料D-1の場合、ナトリウムの明瞭なピークと、カルシウムがカリウムのピークを上回っている特徴から、アルカリ珪酸塩系ガラスのソーダ石灰ガラスであることが推測される。マグネシウムもこれまでに類を見ないほど明瞭なピークとして現れているという特徴も指摘できる。この他マンガンが鉄のピークを上回るほど強く表れている。弥生時代から古墳時代に盛行する青紺色の玉類の中にも同様にマンガンが強く表れるものがあるが、これは着色要因であるコバルトに伴うと考えられている。本資料ではコバルトは確認されておらず、その成因は不明である。またアルミニウムについては定量値を算出していないため推測にすぎないが、これまでに行ってきた他の資料との比較により、低アルミタイプに属すると考えられる。

続いて鴻臚館跡出土の資料であるが、今回対象としたのは3次調査の土壌（SK-02）から出土した2点のガラス容器片で、いずれも口縁部分と考えられる破片である。1点は資料D-1と似通っていて透明な緑色を（資料K-1）、もう1点は無色透明を（資料K-2）、それぞれ呈している。遺構の時期は出土する陶磁器から9世紀後半とされている。

分析の結果、検出された元素の種類（ナトリウム、マグネシウム、アルミニウム、珪素、カリウム、カルシウム、チタン、マンガン、鉄）とその強度は2点ともD-1と非常に酷似している。いずれも低アルミタイプに属すると考えられるソーダ石灰ガラスの特徴を示す結果となった。またK-1では、やはり銅(Cu)のK α 部分にピークが微弱ながら確認され、特に高電圧の測定ではより顕著に表れている。これに対してK-2ではこの状況は観察できない。

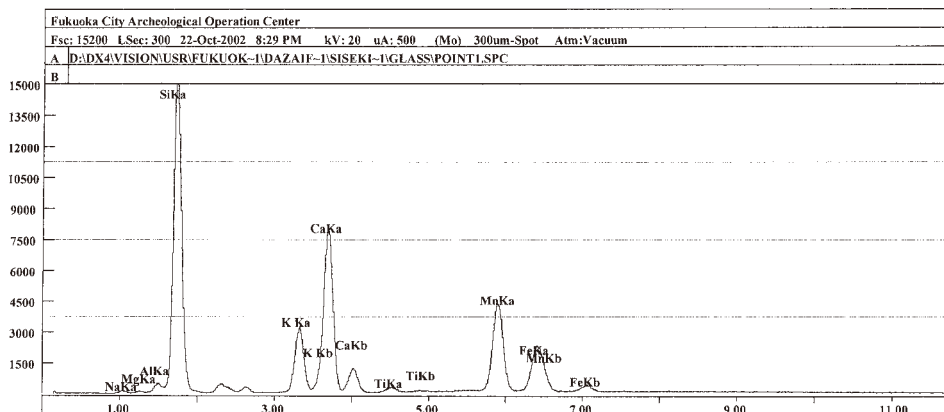
なお、鴻臚館出土の2点については、過去に日本電気硝子株式会社においてEPMA及び湿式法（内容は不明）による分析が行われ、今回とほぼ同様の結果が得られており、その中にマグネシウムとカルシウムの含有量からイスラムガラスであるとの判断がコメントとして付されている^註。

ソーダ石灰ガラスの内、アルミニウム含有量の少ないタイプは西アジアが起源とされている。即断はできないものの、特に鴻臚館ではイスラム陶器の供伴も見られることから、今回の分析結果は何らかの繋がりを想起させるものとなっている。いうまでもなく大宰府は古代九州における政治の中心であり、その外交を担っていた鴻臚館は、まさにアジアに開かれた玄関口であった。この2カ所で西アジアとの関連が想定されるガラスが出土することには、何の違和感もなく至極当然のことであろう。ただし、今回はあくまでも当該資料の表面的な定性分析からの推測に過ぎず、原料（ガラス素材）の産地と加工場所の問題や、これらの資料が仮に搬入品であったとしても、それが直接か間接かといった点については、別途検討が必要な課題である。それらも含め、今後は形態も含めた類例の調査や定量的な数値の比較といった裏付けが必要になるものとする。

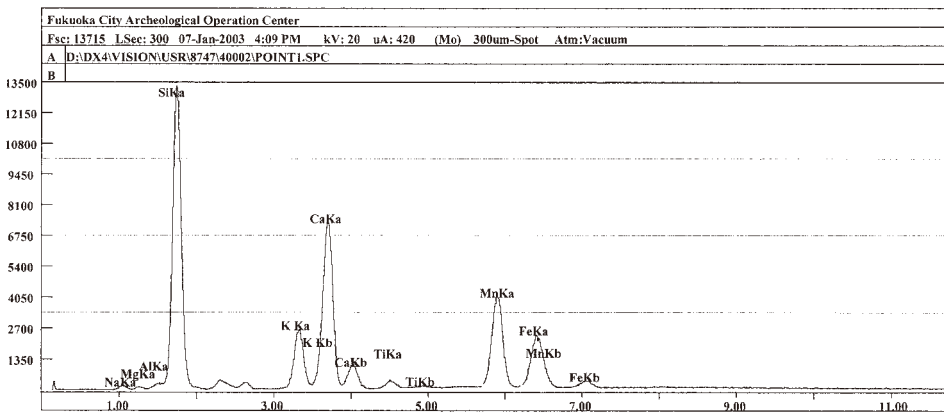
註 分析結果は公表されておらず、福岡市教育委員会に提出された分析結果をもとに作成されたレポートを、同前文化財部長柳田純孝氏より提示頂いた。

参考文献

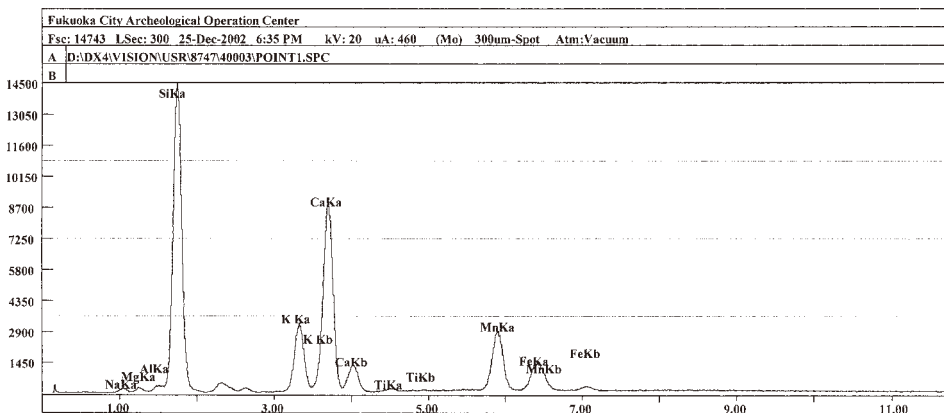
- 肥塚隆保 1996 「化学組成から見た古代ガラス」『古代文化』第48巻8号 財団法人古代学協会
 肥塚隆保 1998 「主成分からみた古代ガラスとその歴史の変遷」『保存科学研究集会1998(発表要旨集)』奈良国立文化財研究所



大宰府出土ガラスD-1の分析結果



鴻臚館出土ガラス（緑色）K-1の分析結果



鴻臚館出土ガラス（透明）K-2の分析結果

Fig.92 大宰府・鴻臚館跡ガラス分析図

(2) 大宰府史跡不丁地区出土鍛冶・銅鑄造関連遺物の金属学的調査

概要

大宰府史跡（不丁地区）から出土した7世紀後半～9世紀頃までの鍛冶・銅関連遺物を分析調査して、次の点が明らかになった。

〔1〕官衙開始以前（7世紀後半）に属する初期大宰府では、故鉄（廃鉄器：鍋・釜鑄造品）の下げ脱炭の鉄素材から鍛錬鍛冶による鉄器製作のあった事が指摘できる。

〔2〕8世紀後半の大宰府が大規模に整備できる段階の鉄事情は、福岡平野東側（宗像方面）の火山岩由来中チタン砂鉄（10% TiO_2 ）を原料とした鉄素材の搬入があった可能性が鉄滓の鉱物・化学組成から明らかになった。

〔3〕8～9世紀代になると糸島半島方面賦存の花崗岩起源低チタン砂鉄（1% TiO_2 ）から製錬された鉄素材の鉄器製作に変更される。

〔4〕奈良時代後半以降？（8世紀後半～11世紀頃？）の銅塊や銅滓は、酸化銅鉱由来の銅・鉄共存粗銅からの精製を経て銅製品の製作がなされる事が判明してきた。銅滓は故銅（廃銅器）+粗銅の溶解精製時の排出滓の可能性を持つ。低鉄分銅滓組成からの発言。

1) いきさつ

大宰府史跡不丁地区は政庁前面の西側に広がる官衙域である。鉄や銅に関する遺物が多数出土して、工房の存在が指摘されてきた。今度、この地区より出土した鉄・銅生産関連遺物（炉底塊、椀形鍛冶滓、鉄塊系遺物、銅塊、銅滓）を通して、当時の金属生産の実態把握を目的とした、自然科学的分析調査の運びとなった。

2) 調査方法

供試材

Tab. 8に示す。鍛冶関連遺物8点、銅鑄造関連遺物2点で計10点の調査を行った。

調査項目

1 肉眼観察

遺物の外観上の観察所見を簡単に記載した。

2 マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の5倍で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

3 顕微鏡組織

滓中に晶出する鉱物及び鉄部の調査を目的として、光学顕微鏡を用い観察を実施した。観察面は供試材を切り出した後、エメリー研磨紙の#150, #240, #320, #600, #1000, 及びダイヤモンド粒子の3 μ と1 μ で順を追って研磨している。なお、金属組織の調査では腐食（Etching）液に5%ナイトル（硝酸アルコール液）を用いた。

4 ビッカース断面硬度

鉄滓中の鋳物と、金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計 (Vickers Hardness Tester) を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角を持ったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

5 EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

化学分析を行えない微量試料や鋳物組織の微小域の組織同定を目的とする。

分析の原理は、真空中で試料面 (顕微鏡試料併用) に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピュータ処理してデータ解析を行う方法である。

6 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO) : 容量法

炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素 (SiO₂)、酸化アルミニウム (Al₂O₃)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K₂O)、酸化ナトリウム (Na₂O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO₂)、酸化クロム (Cr₂O₃)、五酸化燐 (P₂O₅)、バナジウム (V)、銅 (Cu)、二酸化ジルコニウム (Zr₂O₃) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

3) 調査結果

6AYM-B-1 椀形鍛冶滓片 : 8世紀末~9世紀

1 肉眼観察 : 本来の平面は、楕円形状だったが、中核部を残して長軸両端の一部を欠落した141gの2段重ね椀形滓である。表裏共に赤褐色酸化土砂に覆われるが、地の色は灰黒色で気孔少なく、風化を受けている。

2 顕微鏡組織 : Fig.93の②③に示す。白色粒状結晶のウスタイト (wüstite : FeO) と、淡灰色長柱状結晶のファヤライト (fayalite : 2FeO · SiO₂) がガラス地に晶出する。高温沸し鍛接・鍛冶滓の晶癖である。

3 ビッカース断面硬度 : Fig.93の③に鋳物相の検証を目的とした硬度測定^(註1)の圧痕を示す。白色粒状結晶は437Hv、461Hvの値が得られた。ウスタイトの文献硬度値は446~503Hvであり、この範疇に収まる。また、淡灰色長柱状結晶は699Hvで、ファヤライト (文献硬度655~713Hv) に同定される。

4 化学組成分析 : 52.26% Total Feと高鉄分鍛冶滓で造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は23.57%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO₂) 0.26%、バナジウム (V) 0.06%、二酸化ジルコニウム (ZrO₂) 0.04%と低値である。更に酸化マンガン (MnO) も0.07%に留まる。成分的にも砂鉄系高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓に分類できる。

小 結 : 落ち込みSX2507(くぼみ遺構)からの出土滓は、鉄器製作時に排出された砂鉄系高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓であった。花崗岩起源を持つ低チタン砂鉄由来の鉄素材充当の可能性を持つ。

6AYM-B-2 椀形鍛冶滓片：8世紀代中頃

1 肉眼観察：平面は不整五角形状のほぼ完形の椀形鍛冶滓である。上面は細かい凹凸を持つが、ほぼ平坦面で、下面は皿状を呈する。全面が赤褐色の酸化土砂に覆われて観察しにくい、比較的緻密な滓である。473gの中型品。上下面に木炭痕を残す。

2 マクロ組織：Fig.99に示す。観察面は白色粒状結晶の滓部を中心に不定形で明白色輪郭線に縁取られた錆化鉄痕跡（内部空洞化）や緻密な黒色孔（気孔か）が多数点在する。金属鉄の遺存は認められない。

3 顕微鏡組織：Fig.93の⑤⑥に鉱物相を示す。白色粒状結晶は一見ウスタイトらしく見えるが、マグネタイト（magnetite： Fe_3O_4 ）である。ファヤライトは消失して黒色ガラス地のみとなる。こちらは6AYM-B-1前述椀形滓の排出作業より、より高温操業と考えられる。⑦は含鉄部分である。鉄は錆化してゲーサイト（goethite： $\alpha\text{-FeO(OH)}$ ）となり、金属鉄を留めない。年輪状模様からフェライト単相の可能性が窺える。

4 ビッカース断面硬度：Fig.93の⑧に硬度測定の前痕を示す。白色粒状結晶の硬度値は537Hvとウスタイトの硬度値より高めにあった。マグネタイト（magnetite： Fe_3O_4 、磁鉄鉱）の文献硬度値は505～592Hvで提示される。マグネタイトに同定できた。

5 化学組成分析：Tab. 9に示す。全鉄分（Total Fe）は53.00%に対して、金属鉄（metallic Fe）0.08%、酸化第1鉄（FeO）はやや低減気味の40.31%、酸化第2鉄（ Fe_2O_3 ）は逆に若干増加して30.87%となり、鉱物相のマグネタイト化を裏付けた。造滓成分は19.63%に留まる。一方、砂鉄特有成分は全体に底上げされて、二酸化チタン（ TiO_2 ）は0.73%、バナジウム（V）0.12%、酸化ジルコニウム（ ZrO_2 ）0.73%など、前述6AYM-B-1椀形滓よりも僅かながら数値は上昇している。鍛冶原料鉄におけるスラグ付着の違いが現れたと解釈できる。

小 結：掘立柱建物SB2405から出土した滓は、鉄器製作時の高温沸し鍛接：鍛錬鍛冶滓に分類される。こちらは鉱物相がウスタイトからマグネタイト化して、鍛冶作業温度が高め傾向と指摘できる。併せて鍛冶原料鉄はスラグ（製錬滓）付着が多めだったと推定される。

6AYM-B-3 鍛冶滓（2段重ね）：8世紀前半～中頃

1 肉眼観察：不整形形状の2点の滓がずれて重なりを持つ特異な形状である。赤褐色酸化土砂に覆われて、気孔と木炭痕を残す。228gを測る。

2 マクロ組織：Fig.99に示す。灰黒色多孔質な錆化鉄と狭小に晶出した白色粒状結晶は2段重なるの境界を残さずに連なる。

3 顕微鏡組織：Fig.93の②に示す。鉱物相は、2段重ね下段側の大きく成長した凝集ウスタイト晶出部分を撮影した。不純物除去の精錬鍛冶滓の晶癖である。

4 ビッカース断面硬度：Fig.93の③に凝集ウスタイトの硬度測定の前痕を示す。硬度値は441Hv、455Hv、477Hvが得られた。ウスタイト文献値の446～503Hvの範囲に収まる。

5 化学組成分析：Tab. 9に示す。全鉄分（Total Fe）は57.27%と多くて、造滓成分は10.15%と少ない。砂鉄特有成分の二酸化チタン（ TiO_2 ）3.76%、バナジウム（V）0.10%など鍛冶滓としては多い。二酸化ジルコニウム（ ZrO_2 ）の0.01%は少ないが、酸化マンガン（MnO）の0.16%は脈石の残りが感じられる。精錬鍛冶滓に分類される。

6AYM-B-5 椀形滓：8世紀中頃

- 1 肉眼観察：平面が楕円形状の半欠品に推定される中型椀形鍛冶滓である。厚みが43mmで重量は203gを測る。表面は酸化土砂に覆われるが、露出肌はざらつき、風化の著しい痕跡が認められる。
- 2 マクロ組織：Fig.100に示す。視野は底面側（下方）で白色粒状結晶と灰褐色錆化鉄がくすんだ存在で観察される。間隙の多い滓である。
- 3 顕微鏡組織：Fig.100の②③に鉱物相を示す。白色粒状結晶のウスタイトと、淡灰色長柱状結晶のファヤライトが風化を受けて半光沢状態で留まる。④⑤は錆化鉄（goethite: α -FeO(OH)）の局部に自然腐食（etch）による黒色層状のパーライト（pearlite）の痕跡を残す。炭素（C）含有量は共析鋼（0.77% C）レベルと推定される。
- 4 ビッカース断面硬度：Fig.95の③は白色粒状結晶ウスタイトの硬度測定の際の圧痕を示す。風化の影響を強く受けて306Hvと異常値を呈した。また、④⑤はパーライト痕跡部分の硬度測定である。④は179Hv、⑤は329Hvの値が得られた。金属鉄組織ではないので、この数値はあくまでも参考値としての提示である。
- 5 化学組成分析：Tab.9に示す。全鉄分（Total Fe）が50.52%に対して、造滓成分が15.28%の滓である。鍛冶滓傾向を表わす。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO₂）は1.12%と鍛冶滓組成としてはやや高濃度側で、バナジウム（V）0.02%、二酸化ジルコニウム（ZrO₂）<0.01%は低下する。しかし、酸化マンガン（MnO）は0.14%とこちらも高濃度側へ傾く。砂鉄精錬鍛冶滓に分類できよう。ただし、気掛りは銅（Cu）が0.04%と僅かに多く、前述してきた滓は全て0.01%台であった。一方、検鏡結果から風化の影響が著しいことが判明したが、これは五酸化リン（P₂O₅）の1.12%の高濃度にも関連しそうである。心配なのは二次汚染から成分変化である。この問題は後日の検討課題として止めおく。

6AYM-B-8 炉底塊破片：8世紀中頃

- 1 肉眼観察：平面が不整形形状で、小割された86gの炉底塊破片である。色調は風化を受けて脱色無光沢の灰褐色で、木炭の噛み込みがある。
- 2 顕微鏡組織：Fig.96の⑦⑧に示す。鉱物相は淡茶褐色多角形結晶のウルボスピネル（Ulvöspinel: 2FeO·TiO₂）と、淡茶褐色析出物を伴う白色粒状結晶ウスタイトである。これに本来はファヤライトがガラス地に晶出する状態があったと想定されるが風化により消失している。砂鉄製錬滓の晶癖である。
- 3 ビッカース断面硬度：Fig.96の⑧に淡茶褐色多角形結晶の硬度測定の際の圧痕を示す。硬度値は309Hvと風化による異常値を呈していた。当結晶の正常値は700～800Hvになるであろう。
- 4 EPMA調査：Fig.102の左上に滓の反射電子像（COMP）を示す。分析点9の淡茶褐色多角形結晶は、特性X線像では鉄（Fe）とチタン（Ti）に白色輝点がやや強く集中する。定量分析値は62.0% FeO-26.1% TiO₂-5.7% Al₂O₃-2.1% MgO組成から、少量のアルミナやマグネシアを固溶したウルボスピネル（2FeO·TiO₂）が同定される。ただし風化の影響から96.7% Totalからの数値である。分析点10は白色粒状結晶に淡茶褐色析出物が重なる結晶を調査対象とした。こちらも分析点9と同様に66.7% FeO-24.3% TiO₂-4.5% Al₂O₃-1.2% MgO-2.2% P₂O₅組成が得られた。ウルボスピネル判定で大過ない。分析点11は白色粒状結晶単身の分析である。やはり風化の影響が認められるなかに、71.2% FeO-6.0% TiO₂組成となり、風化汚染から2.8%

P_2O_5 -4.7% SiO_2 -1.1% MgO の混入があった。ウスタイトを主とした複数の相がある。分析点12は、ガラス基地の分析である。こちらは風化の影響が最も強く、43.6% Totalからの分析値で18.8% SiO_2 -12.6% Al_2O_3 -4.7% FeO -1.9% TiO_2 -3.8% P_2O_5 組成となる。珪酸塩ガラスとその中の微小相であろう。砂鉄製錬滓の判定は揺るがない。

小 結：政庁周辺官衙の区画溝SD2340下層（8世紀前半：天平年間の本簡が出土）から出土した3点の鉄滓は、除滓処理を目的とした精錬鍛冶炉の存在を示唆する。鍛冶原料鉄は中チタン含有（10% TiO_2 程度）火山岩由来で宗像方面からの搬入品に推定できる^(註2)。6AYMA-B-8炉底塊破片（製錬滓）は、ウルボスピネルトウスタイトを晶出した製錬滓であり、粗鉄割出しの残滓の可能性を持つ。中チタン砂鉄由来の製錬滓に分類できる。6AYM-B-3 2段重ね鍛冶滓は、3.73% TiO_2 -0.16% MnO から先発精錬鍛冶滓、6AYM-B-5椀形滓は、1.12% TiO_2 -0.14% MnO 組成から後発精錬鍛冶滓に位置付けられる。大宰府政庁が大規模に整備される段階までの鉄原料の供給地は福岡平野の東側、官衙機能の整った後は元岡遺跡などの西側糸島方面へ移った兆候の現われが出土鉄滓の組成から窺われる。因に6AYM-B-1、2椀形滓は8～9世紀代に属して、糸島方面花崗岩起源の鉄素材からの鍛錬鍛冶で鉄器製作がなされた背景をもつ。

6AYM-B-4 鍛冶滓：7世紀末頃

1 肉眼観察：平面が不整六角形を呈する143gと小型の椀形鍛冶滓だった。酸化土砂に覆われて、鍛造剥片や木炭痕を付着する。滓の地は風化により無光沢灰黒色に脱色している。

2 顕微鏡組織：Fig.94の⑦⑧に滓の鉱物相を示す。白色粒状結晶ウスタイトは、風化の影響から亀裂と黒味を帯びると共にガラス地は侵食を受ける。⑤は付着した3層分離型の鍛造剥片^(註3)を示す。外層白色微厚ヘマタイト（hematite： Fe_2O_3 ）は明瞭で、内層ウスタイト（wüstite： FeO ）は非晶質である。鍛錬鍛冶を証明する微細遺物が検出された。⑥は噛み込み木炭片である。樹種は広葉樹であろうか。切口の方向が定かでないので明瞭な発言はできない。

3 ビッカース断面硬度：Fig.94の⑧に淡灰色盤状結晶の硬度測定の前痕を示す。硬度値は624Hvであった。ファヤライトの文献硬度値は655Hv～713Hvで、下限値を僅かに割り込むが、風化の影響を考慮すると、ファヤライトに同定できる。白色粒状結晶の硬度測定も試みたが、粒が割れて定量値を得ることが出来なかった。

4 化学組成分析：Tab.9に示す。全鉄分（Total Fe）は50.94%に対して、金属鉄（metallic Fe）0.06%、酸化第1鉄（ FeO ）18.97%、酸化第2鉄（ Fe_2O_3 ）は高めの51.67%である。酸化鉄を多く含むのかマグネタイトが風化しており、定かでない。造滓成分は17.48%、砂鉄特有成分の二酸化チタン（ TiO_2 ）は0.46%、バナジウム（V）0.06%、酸化ジルコニウム（ ZrO_2 ）が0.17%と多いのは糸島側の花崗岩系砂鉄由来の原料鉄の可能性をもつ。酸化マンガン（ MnO ）0.15%、酸化クロム（ Cr_2O_3 ）0.11%も花崗岩系砂鉄の推定で問題なさそうである。該品は高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓に分類される。

6AYM-B-6 鍛冶滓：7世紀末頃

1 肉眼観察：椀形滓の外周が欠落した中核部破片である。上下面が生きて厚みが52mmあるので、可成り大型滓が想定できる。該品は赤褐色酸化土砂に覆われていて、地は無光沢灰緑色に風化侵食を受けていた。

2 顕微鏡組織：Fig.95の⑦⑧に示す。肥大した白色粒状結晶の凝集ウスタイトの晶出組織である。廃鉄器（鑄造鍋・釜）を再溶解して「下げ」による脱炭時の排出滓である。鑄鉄の炭素（C）を酸化除去した鍊鉄（軟質材：<0.1% C）からの鉄器製作が想定できる。

3 ビッカース断面硬度：Fig.95の⑧に白色粒状結晶の硬度測定の前痕を示す。値は299Hvと低値で該当鉱物が思い浮かばない。鉱物形態はウスタイトの可能性を持ちながら、文献硬度値446～503Hvから大きく外れる。肉眼観察で触れたように風化起因の劣化異常値である。

小 結：旧流路SX2480上層出土で7世紀末頃と推定される2点の鉄滓である。6AYM-B-6鍛冶滓は廃鉄器（鑄造鍋・釜破片）の脱炭下げの精鍊鍛冶滓であり、これに連なる6AYM-B-4鍛冶滓は高温沸し鍛接・鍛鍊鍛冶滓で、両者はセット関係の鍛冶作業が想定できる。

6AYM-B-10 鉄塊系遺物：8～12世紀

1 肉眼観察：平面が楕円形状を呈する138gの鉄塊系遺物である。厚く赤褐色酸化土砂に覆われて、鉄肌は隠される。メタルチェッカーでL（●）反応があり金属鉄を残す。外観は錆膨れと亀裂以外は情報が取れぬ。

2 マクロ組織：Fig.100に示す。断面は風化の著しい銹化鉄に囲まれた中核部に、僅かに明白色金属鉄が認められる。表皮スラグは残さない。

3 顕微鏡組織：Fig.98の②～⑦に示す。②③は鉄中の非金属介在物である。②の明白色金属鉄の中央部に黒色で約400μmの横に伸びた異物を③に拡大した。中央に広がる黒色ガラス地に灰白色片状の介在物が認められる。組成の詳細はEPMAの項で述べるとして、結論はチタン酸化物のルチル（rutile：TiO₂）である。砂鉄原料由来の還元温度上昇で生成した鉄塊に証拠付けられる^(註4)。更に該品は軽く鍛打を加えて外観形状が楕円形となり、介在物②で僅かに展伸気味と観察できた。③⑤～⑦は金属鉄を5%ナイトル（硝酸アルコール液）で腐食（etch）した。黒色層状のパーライト（Pearlite）地に白色針状の初析セメントタイト（Cementite：Fe₃C）が走る過共析鋼（>0.77% C）組織である。刃鋼として搬入された利器製作向け素材であろう。

4 ビッカース断面硬度：Fig.98の⑧⑨に過共析鋼の硬度測定の前痕を示す。硬度値は⑧で281Hv、⑨は260Hvで両者に大きな開きはない。組織に見合った数値が得られた。

5 EPMA調査：Fig.106の左上に介在物の反射電子像（COMP）を示す。灰白色片状介在物の特性X線像はチタン（Ti）に白色輝点が強く集中する。当介在物のうち、分析点7の定量分析値は、91.0% TiO₂でルチル（rutile：TiO₂）に同定できる。4.3% Al₂O₃-3.3% MgOが加わるが、こちらは周囲のガラス地からの影響で無視される値である。分析点8は黒色ガラス地で定量分析値は65.6% SiO₂-16.4% Al₂O₃-3.4% CaO-1.6% MgO-2.5% K₂O組成である。非晶質珪酸塩（glass）となる。

小 結：第147次調査で帰属する遺構が不明の鉄塊系遺物である。古代（8～12世紀）に比定される。大宰府政庁では、鍛冶原料鉄の1つに中チタン砂鉄由来の生成鉄が準備された可能性をもつ。鉄塊は軽く鍛打して輸送に安定性を与え、かさばらないセミ規格品と見做してもおかしくない形状（64×52×38mm, 138g）であった。古代へかけても福岡平野東側（火山岩系砂鉄原料）で製鍊された鉄資源の流通は続く痕跡が窺われた。

6AYM-B-7 銅塊

1 肉眼観察：不整五角形状平面で、34gの小型銅塊である。表裏は灰褐色酸化膜や土砂混じり

に覆われて石英粒などが付着する。緑青吹きで気孔は認められない。

2 顕微鏡組織：Fig.96の②～④に示す。②は黒色ガラス中の右下端に、褐色酸化膜に囲まれて金属銅（カラーで朱色）が遺存する。③は金属銅から酸化に伴う銅イオンの溶出拡散を拡大した。④の金属銅は局部に酸化が始まり、灰黒色樹枝状に亜酸化銅（ Cu_2O ）が点在する。

3 ビッカース断面硬度：Fig.96の⑤に硬度測定の見本の2点の圧痕を示す。金属銅基地（下側）は52.7Hvと軟質で、合金元素を含まぬ純銅である。一方、灰黒色粒状亜酸化銅（ Cu_2O ）は、62.8% Hvと酸化により材質は硬化する。

4 EPMA調査：Fig.101の左上は、金属銅基地と褐色粒状結晶の反射電子像（COMP）を示す。金属銅の分析点1の定量分析値は、99.7% Cu組成から純銅に同定される。褐色粒状結晶の分析点2は86.9% Cu-6.2% O組成で、酸素（O）不足ながら亜酸化銅（ Cu_2O ）である。定量分析値の合計が93.3%から風化の影響を配慮すべきであろう。狭小な白色析出物の分析点3は、37.5% Bi-39.9% As-7.0% Sb-10.6% Cu合金は脈石である。こちらも風化の影響が大きく、分析値合計が108%と過大になった。

6AYM-B-9 銅滓

1 肉眼観察：平面が不整形円形状で、赤褐色酸化土砂に覆われた棗実大の銅滓（32 g）である。2次破面は緑青を吹き、併せて鉄錆が観察される。

2 マクロ組織：Fig.99の3段目に示す。淡灰黒色スラグ地断面は、多孔質で、明白色の微細金属粒や帯状メタルと噛み込み木炭片などが認められる。

3 顕微鏡組織：Fig.97の②～⑦に示す。②の組織は、一見すると粒状結晶のウスタイト（ FeO ）と柱状結晶でファヤライト（ $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）の鍛冶滓近似組織である。しかし、よく観察すると、画面中央に約50 μm 径の銅粒（カラーで朱色）が粒状結晶ウスタイトに取り囲まれて存在する。モノクロ（白黒写真）は見辛く、説得力を持つEPMAの項で再度取り上げる。何れにしろ、銅（Cu）と酸化鉄（ FeO ）の共存組織が捉えられたことは注目に値する。粗銅の精製で排出された滓を雄弁に物語っている。

③は淡灰白色塊の鉄（Fe）が不整形多角形結晶のファヤライト（ $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）と共存し、④は白色不整形鉄と、右下に粒状銅（Cu）の点在を見る。⑤は3%ナイトル腐食（etch）で不整形粗大フェライト（ferrite：純鉄、 α 鉄）が表れた。⑥⑦は噛み込み木炭に朱く（カラーで確認）銅（Cu）が置換する。ともかくも銅滓は銅、鉄共存で鋳物相はウスタイト+ファヤライトの構成がしっかりと押えられた。

4 ビッカース断面硬度：Fig.97の⑧に中央縦方向3点の硬度測定の見本を示す。最上部は白色粒状結晶で442Hvからウスタイト（ FeO ）、2段目のウスタイトに取り囲まれた約50 μm 径金属銅は78.5Hvで3段目の淡灰色柱状結晶は583Hvからファヤライト（ $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）が同定される。顕微鏡組織②と同一視野からの硬度測定であった。

5 EPMA調査：3視野を調査した。まずFig.103の左上に反射電子像（COMP）を示す。当視野は顕微鏡組織やビッカース断面硬度測定と同一箇所である。分析点1は約50 μm 径銅粒を取り囲む鋳物相を対象とする。特性X線像は、鉄（Fe）と酸素（O）に白色輝点が集中する。定量分析値は96.1% FeO でウスタイト（ FeO ）、分析点2は分析点1と同一色調の分離した楕円形状鋳物粒である。定量分析値は96.6% FeO 組成から、こちらもウスタイトとなる。分析点3は淡

灰色木ずれ状結晶である。特性X線像は白色輝点が鉄 (Fe) と珪素 (Si) に集中し、定量分析値は60.4% FeO-31.2% SiO₂からファヤライト (2FeO · SiO₂) に同定できる。分析点4は約50 μm径銅粒そのものである。特性X線像は白色輝点が銅 (Cu) が全面と共に錫 (Sn) の分散集中で、定量分析値は89.8% Cu-6.4% Sn-1.6% As-2.2% Fe組成が得られた。金属銅に僅かな錫、砒素、鉄を固溶する。分析点5, 6は分析点4の銅粒とこれを取り囲む分析点1のウスタイトの間隙に少量の白色鉱物が存在するので、これを分析した。まず分析点5は72.9% Cu-19.1% S組成から輝銅鉱 (chalcocite : Cu₂S), 分析点6は42.6% Sn-13.4% Fe-28.0% O-9.9% Pb-2.3% Cu組成が得られた。錫石 (Sn · Fe) を主とした多相部の分析値である。当鉱物相は銅・鉄共存金属塊から純銅を得るための精製より派生した銅滓の可能性が頗る高い。

2視野目は、Fig.104に示す。反射電子像 (COMP) でみられる淡灰色片状結晶の明暗2ヶ所を分析した。まず分析点4は明色部で定量分析値は、59.3% FeO-30.6% SiO₂組成からファヤライト (2FeO · SiO₂) が同定される。分析点5は暗色部である。定量分析値は39.3% FeO-33.3% SiO₂-4.8% CuO-6.2% As₂O₅組成から、大きく風化の影響を被ったファヤライト+スパイス (Cu+As) が想定できる。分析点6は黒色基地である。定量分析値は65.9% SiO₂-24.6% Al₂O₃-11.1% K₂Oからガラス (glass) である。分析点7は小型明白色メタルを対象とした。50.4% Fe-11.1% Cu-25.8% S-1.3% Pb-4.5% O組成が得られた。磁硫鉄鉱 (FeS) +輝銅鉱 (Cu₂S) を主とした複数の相であろう。分析点8は明白色約60 μm強のメタルである。定量分析値は85.4% Cu-5.5% Oで亜酸化銅 (Cuprite : Cu₂O) が同定された。

3視野目がFig.105で明白色メタルを対象としたが、風化の影響を大きく受けている。反射電子像 (COMP) の明白色部はメタル部で、その周囲の灰黒色部は銹化域の可能性をもつ。分析点9は明白色メタル中の硫化物を予測した箇所である。定量分析値は70.5% Cu-26.2% Sは、組成に問題をもつが輝銅鉱 (Cu₂S) であろう。分析点10は明白色メタルで、86.4% Cu-5.8% Oは亜酸化銅 (Cuprite : Cu₂O) であろう。風化の影響が大きい。分析点11, 12は風化の影響からTotal < 90%の数値で使用不能となる。

6 化学組成分析 : Tab.9に示す。銅滓としては18.28% Total Feと鉄分が低く、造滓成分が35.82%と高めの滓である。銅 (Cu) を19.66%含む。銅の脈石成分は0.45% Sn, 1.88% As, 0.04% Sb, 1.00% Pbなど、銅滓を実証する化学組成を明瞭に内蔵する。低鉄分傾向から故銅 (スクラップ) +粗銅の溶解精製からの排出滓の可能性を持つ。

小 結 : 奈良時代後半以降 (8世紀後半 ~ 11世紀頃?) の整地層から銅塊と銅滓が出土した。6AYM-B-7銅塊 (34 g) は脈石 (As, Bi, Sb) 含みの純銅 (99.7% Cu) であった。一方、6AYM-B-9銅滓は純銅粒 (一部酸化) に共伴して、スラグ組成にウスタイト (FeO) +ファヤライト (2FeO · SiO₂) 晶出が認められた。古代酸化銅鉱由来の粗銅の精製滓と判別できた。銅製品の鑄造に関わる遺物に分類される。

まとめ

大宰府史跡 (不丁地区) から出土した鍛冶関連遺物8点と、銅鑄造関連遺物2点の分析調査を行った。個々のまとめをTab.10に示す。

(1) 鍛冶関連遺物 : 8点

福岡平野東部産の中チタン含有砂鉄由来の (i) 炉底塊 (製錬滓) 破片1点と、鍛冶原料鉄と

なりうる (ii) 鉄塊系遺物 1 点, 粗鉄の不純物除去と成分調整 (C) を目的とした (iii) 精錬鍛冶滓 2 点, 鉄器製作の (iv) 高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓 (v) 下げ脱炭滓 5 種に分類できた。

(i) は含鉄炉底塊の含鉄部分が取り去られた残り滓に想定される。鉱物相はウルボスピネル (Ulvöspinel: $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$) + ウスタイト (wustite: FeO) であった。

(ii) は $34\times 16\text{mm}$ 程度の断面を持つ過共析鋼 ($>0.77\%$ C) である。楕円状を呈するのは、軽く鍛打を加えて硬さ感触から材質 (C) を推し量った形跡が窺える。金属鉄組織はパーライト (pearlite) 地に初析セメントイト (pro-eutectoid cementite) が析出した鋼 (利器向け) レベルの硬鋼であった。鉄中の非金属介在物はルチル (rutile: TiO_2) を含む高温製錬操業の成果物である。なお介在物形態が伸展性を持つところから「軽く鍛打」の根拠にしている。

(iii) の精錬鍛冶滓の化学組成は砂鉄特有成分が高め傾向を示して、以下の組成となる。 3.73% TiO_2 - 0.10% V- 0.16% MnO, 1.12% TiO_2 - 0.02% V- 0.14% MnO 組成である。如何なる理由からか鉱物相には Fe-Ti 化合物がウスタイト中には現われなかった。Tab.9 の 6AYM-B-3, 5 を参照。

(iv) 高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓の鉱物相はウスタイト + ファヤライト (fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組成で、 $<1.0\%$ TiO_2 分析値なるもので整理できる。

(v) 下げ脱炭滓の鉱物相は、凝集ウスタイトの晶出を特徴とする。

(2) 銅鑄造関連遺物：2 点

(i) 銅塊は純銅であった。脈石は 40% As- 38% Bi- 7% Sb 含みで産地同定の手掛りになろう。

(ii) 銅率は 18.88% Total Fe と鉄分の低めが特徴である。通常の粗銅溶解精製過程で生じたスラグであれば 50% 台鉄分と高めとなる^{(註5) (註6)}。該品は故銅：廃銅器+粗銅の溶解精製時に排出された滓の可能性が頗る高い。古代の粗銅の原料は酸化銅鉱 (孔雀石: $\text{CuCO}_3\cdot\text{Cu}(\text{OH})_2$) が多く、含銅褐鉄鉱と共存するので、不純物として鉄分を多く含む^(註7)。この様な背景を考慮すれば、今回の低鉄分銅滓は粗銅原料でないことが発言できる。Table2 には大宰府史跡出土の粗銅精製スラグの分析値を提示している。

また、Fig1 に銅滓中に酸化鉄 (wüstite: FeO) が存在する理由を模式図として示した。

註

- (1) 日本学術振興会製鉄第54委員会 (1968) 『焼結鉄組織写真および識別法』日本工業新聞社 ウスタイトは $446\sim 503\text{Hv}$, マグネタイトは $505\sim 592\text{Hv}$, ファイヤライトは $655\sim 713\text{Hv}$, ヘマタイトは $1020\sim 1084\text{Hv}$, ガラスは $639\sim 884\text{Hv}$ の範囲が提示されている。また、ウルボスピネルの硬度値範囲の明記がないが、マグネタイトにチタン (Ti) を固溶するので、 600Hv 以上であればウルボスピネルと同定している。それにアルミナ (Al) が加わり、ウルボスピネルとヘーシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため 700Hv を超える値では、ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体の可能性が考えられる。
- (2)-1 井澤英二 (2008) 「九州の製鉄原料について」—古代から現代まで—「九州地域の古代から近代の製鉄技術発達史」2008年度秋季講演大会シンポジウム論文集 日本鉄鋼協会
- (2)-2 大澤正己 (2009) 「坂堤遺跡第1次調査出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『坂堤1』福岡市埋蔵文化財調査報告書1030集 福岡市教育委員会
- (2)-3 大澤正己 (2010) 「香椎A遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」—一般国道3号バイパス建設に伴う調査2—(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1072集) 福岡市教育委員会
- (2)-4 大澤正己 (2013) 「吉森遺跡 (3次) 出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『吉森遺跡Ⅲ』—福岡県糸島市二丈吉井所在中世製鉄遺跡の調査—中山間地域総合整備事業福吉地区関係埋蔵文化財調査報告・Ⅵ 糸島市文化財調査報告書第12集 糸島市教育委員会
- (3) 鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌 (金肌) やスケールとも呼ばれる。
鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト (Hematite: Fe_2O_3)、中間層マグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4)、大部分は内層ウスタイト (Wüstite: FeO) の3層から構成される。このうちのヘマタイト相は 1450°C を越えると存

在しなく、ウスタイト相は570℃以上で生成されるのはFe-O系平衡状態図から説明される^(註4)。

(4) 森岡進ら『鉄鋼腐食科学』『鉄鋼工学講座』11 朝倉書店 1975

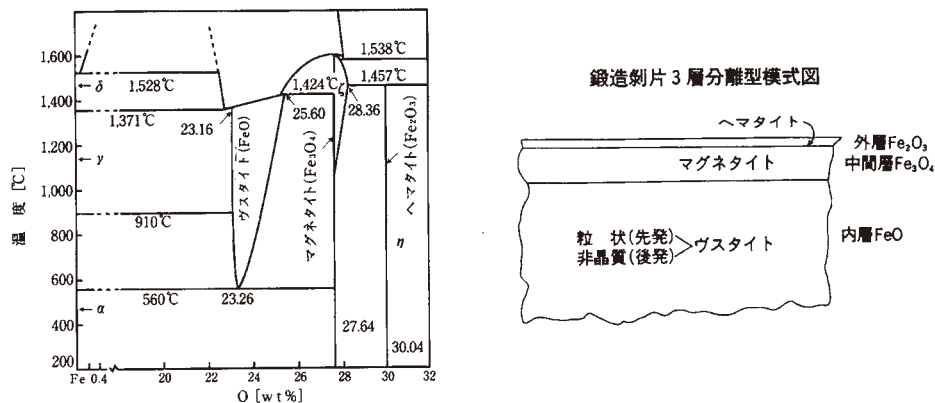


Fig.93 Fe-O系平衡状態図及び鍛造剥片3層分離型模式図

(5) 大澤正己2002「大宰府史跡（政庁跡・来木地区）出土鉄塊と鑄造関連遺物の金属学的調査」『大宰府政庁跡』九州歴史資料館

(6) 大澤正己2007「観世音寺出土鑄銅・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『観世音寺—考察編—』九州歴史資料館

(7) 大澤正己2008「古代銅製錬復元実験から確認できた銅・鉄共存の様相」～長登遺跡出土8世紀前半金属スラグとの比較～『古代銅製錬復元実験報告書』—第21回国民文化祭やまぐち2006：シンポジウム「文化資源の活用」美東町教育委員会

[追記]

銅滓 (6AYM-B-9) の顕微鏡組織Fig.98-②, Fig.108は銅 (Cu) と酸化鉄 (FeO) の共存組織である。粗銅の精製で排出された滓とみられる。この組織に酷似した組織が福原長者原遺跡（福岡県行橋市）からも発見された。

大澤正己・鈴木瑞穂 2014「福原長者原遺跡出土鑄造・鍛冶関連遺物の分析調査」『福原長者原遺跡・福原寄原遺跡』東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告 (13)

Tab.8 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物No.	遺物名称	推定年代	計測値		磁着度	メタル度	調査項目						備考			
						大きさ (mm)	重量 (g)			マクロ 組織	顕微鏡 組織	ビッカース 断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析		耐火度	カロリー	
6AYM-B-1	大宰府史跡 (不丁地区)	YC62 落ち込み (II)	840110	椀形滓 (2重)	8～9c	81×49×38	140.5												
6AYM-B-2		SF46 S-60	830526	椀形鍛冶滓	8c 中頃	115×111×35	472.8											小鉄片	
6AYM-B-3		QL37 S-50 下層	831024	鍛冶滓 (2段重ね)	8c 前半～ 中頃	92×90×52	228.3												
6AYM-B-4		SX2480		鍛冶滓 (軽質)	7c 末頃	74×71×37	142.6												
6AYM-B-5		QM37 S-50 下層	831003	椀形滓	8c 前半～ 中頃	101×77×43	203.5												薄鉄片か
6AYM-B-6		QP40 SX2480 上層	860213	鍛冶滓	7c 末頃	52×47×52	70.6												
6AYM-B-7		Z-6 第1層 (下層)	720122	銅塊	8c 後半～ 11c?	55×32×16	34.2												
6AYM-B-8		QM37 S-50 下層	831004	炉底塊破片	8c 前半～ 中頃	77×62×30	85.9												
6AYM-B-9		基壇側溝 第1整地	720315	銅滓	8c 後半～ 11c?	41×33×26	32.1												
6AYM-B-10		QH49	921015	鉄塊系遺物	8～12c	64×52×38	138.3												

Tab.9 供試材の組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化リチウム (Li ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化リン (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化亜鉛 (ZnO)	錫 (Sn)	砒素 (As)	アンチモン (Sb)	鉛 (Pb)	造滓成分 造滓成分 Total Fe	TiO ₂ Total Fe	注			
6AYM-B-1	大宰府史跡 (不丁地区)	YC62落ち 込み (II)	桶形鍔 (2重)	8~9c?	52.26	0.11	50.26	18.71	15.40	5.68	1.18	0.40	0.65	0.26	0.07	0.26	0.08	0.027	1.15	0.31	0.06	0.01	0.04	-	-	-	-	23.57	0.451	0.005	(1)		
6AYM-B-2				8c代?	53.00	0.08	40.31	30.87	12.67	4.02	1.55	0.55	0.59	0.25	0.10	0.73	0.12	0.12	0.033	0.27	0.29	0.12	0.01	0.73	-	-	-	-	19.63	0.370	0.014	(1)	
6AYM-B-3				8c前半	57.27	0.16	33.34	44.60	5.20	2.45	1.43	0.67	0.32	0.08	0.16	3.73	0.05	0.062	0.66	1.28	1.28	0.10	0.10	0.01	0.01	-	-	-	-	10.15	0.177	0.065	(1)
6AYM-B-4				7c後半頃	50.94	0.06	18.97	51.67	11.77	3.51	1.29	0.43	0.18	0.30	0.15	0.46	0.11	0.084	1.09	1.67	1.67	0.08	0.08	0.01	0.17	-	-	-	-	17.48	0.343	0.009	(1)
6AYM-B-5				8c前半	50.52	0.05	15.95	54.44	8.17	5.10	1.18	0.43	0.15	0.25	0.14	1.12	0.03	0.060	1.12	2.14	2.14	0.02	0.02	0.04	< 0.01	-	-	-	-	15.28	0.302	0.022	(1)
6AYM-B-9	大宰府史跡	基壇側溝 第1整地	銅洋	8c後半~ 11c?	18.88	0.08	10.92	14.74	25.46	6.94	1.30	0.33	1.26	0.53	0.05	0.21	0.02	0.27	0.69	1.22	< 0.01	19.66	0.01	0.45	1.88	0.04	1.00	35.82	1.897	0.011	(1)		
DZ-4				7c後半~ 8c前半	52.50	0.14	42.77	27.33	7.60	2.66	2.06	0.64	0.39	0.07	0.10	0.08	0.36	0.48	0.36	0.27	0.27	0.01	13.14	-	-	-	-	-	13.42	0.256	0.002	(2)	
KKZ-2	大宰府史跡	觀世音寺 地区	桶形鍔洋	12c後半~ 13c前半	51.73	0.05	53.60	14.32	15.46	4.16	3.15	0.64	1.76	0.47	0.18	0.16	0.06	0.03	0.73	1.20	< 0.01	0.41	0.02	-	-	-	25.64	0.496	0.003	(3)			

註

- (1) 本稿
- (2) 大澤正己2002「大宰府史跡(政庁跡・来木地区)出土鉄塊と鍔造関連遺物の金属学的調査」『大宰府政庁跡』九州歴史博物館
- (3) 大澤正己2007「觀世音寺出土鍔銅・鍔造関連遺物の金属学的調査」『觀世音寺一考察編一』九州歴史資料館

Tab.10 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成(%)							所見	
						Total Fe	Fe ₃ O ₃	塩基性成分	TiO ₂	V	MnO	ガラス質成分		Cu
6AYM-B-1		YC62落ち込み(II)	椀形滓(2重)	8~9c?	滓:w+f	52.26	18.71	1.58	0.26	0.06	0.07	23.57	0.01	砂鉄系高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓
6AYM-B-2		SF46 S-60	椀形鍛冶滓	8c代?	滓:m,鉄:gt	53.00	30.87	2.10	0.73	0.12	0.10	19.63	0.01	砂鉄系高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓
6AYM-B-3		QL37 S-50下層	鍛冶滓(2段重ね)	8c前半	滓:w(凝集)+f	57.27	44.60	2.10	3.73	0.10	0.16	10.15	0.01	砂鉄系精錬鍛冶滓
6AYM-B-4		SX2480	鍛冶滓(軽質)	7c後半頃	滓:w+f,鍛造剥片付着,木炭噴込み	50.94	51.67	1.72	0.46	0.08	0.15	17.48	0.01	砂鉄系高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓(風化)
6AYM-B-5		QM37 S-50下層	椀形滓	8c前半	滓:w+f,鉄:pe	50.52	54.44	1.61	1.12	0.02	0.14	15.28	0.04	砂鉄系精錬鍛冶滓,共析銅(0.77% C)含み
6AYM-B-6	大宰府史跡(不丁地区)	QP40 SX2480上層	鍛冶滓	7c後半頃	滓:w(凝集)+f	-	-	-	-	-	-	-	-	廃鉄器(鑄造銅・釜破片)の脱炭下げ滓か
6AYM-B-7		Z-6第1層(下層)	銅塊	8c後半~11c?	母金属は純銅,初相αが酸化してCuP粒を形成	-	-	-	-	-	-	-	-	純銅の脈石は40% As-38% Bi-7% Sb含み
6AYM-B-8		QM37 S-50下層	炉底塊破片	8c前半	滓:u+w+f(風化)	-	-	-	-	-	-	-	-	砂鉄製錬滓(炉底塊の破片)
6AYM-B-9		基壇側溝第1整地	銅滓	8c後半~11c?	滓:w+f,銅粒(青銅粒:Cu-Sn),純銅,bn,cc	18.88	14.74	1.63	0.21	<0.01	0.05	35.82	19.66	廃銅器溶解精製時に排出された滓の可能性
6AYM-B-10		QH49	鉄塊系遺物	8~12c	介在物:r,鉄:pe+Ce	-	-	-	-	-	-	-	-	福岡平野東部側(福津海岸の後背地に花崗岩と火山岩を賦存する高子タン砂鉄原料)生産の可能性,過共析銅(銅)

w : wüstite(FeO), f : fayalite(2FeO·SiO₂), gt : goethite(α-FeO·OH), pe : pearlite(フェライトとセメンタイトの共析), Cu : Cuprite(亜酸化銅, Cu₂O), mt : magnetite(Fe₃O₄)
 bn : bornite(Cu₅FeS₄) 固溶体, cc : chalcocite(Cu₂S), r : rutile(TiO₂), Ce : Cementite(Fe₃C)

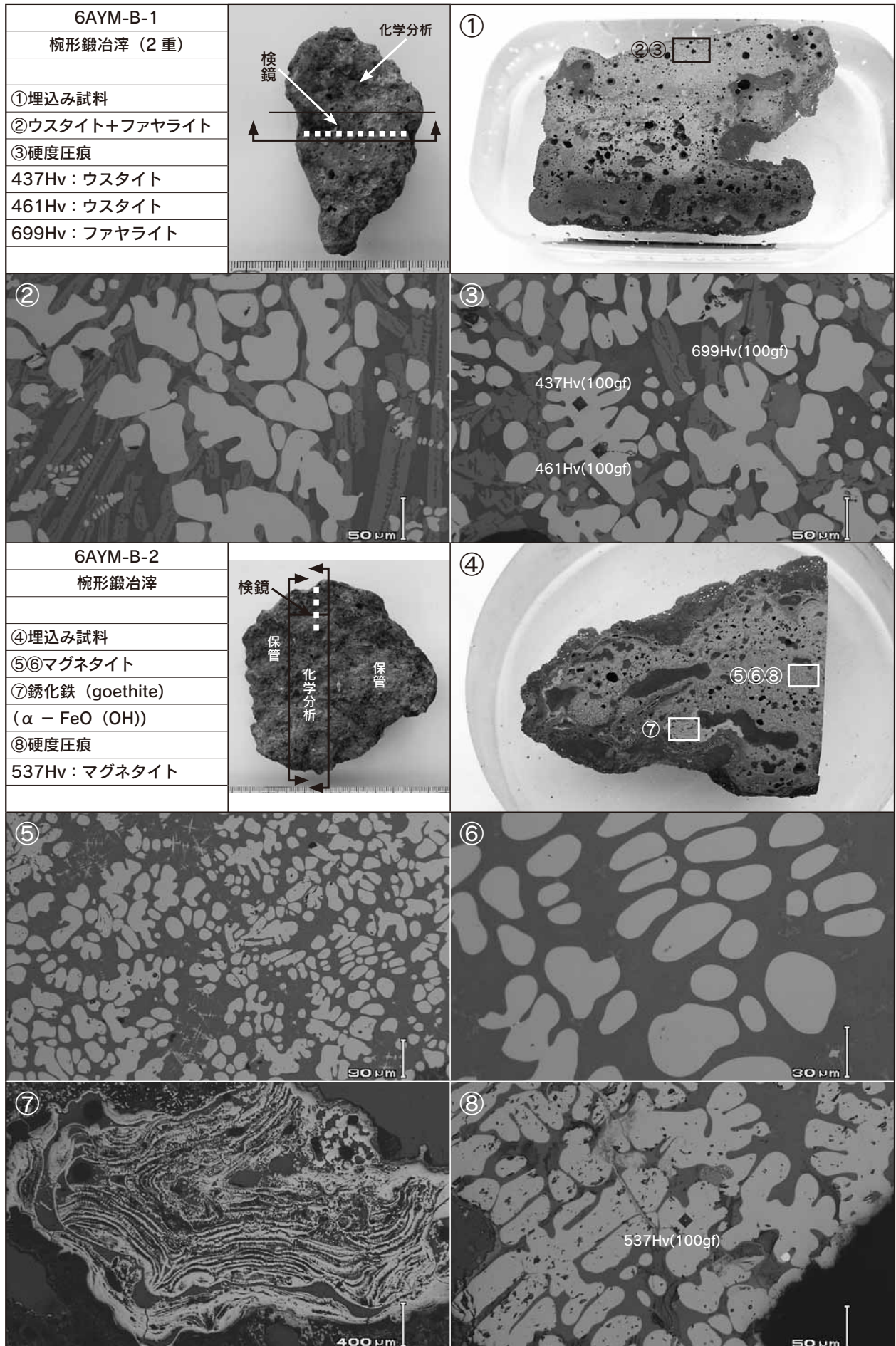


Fig.94 顕微鏡組織 ①

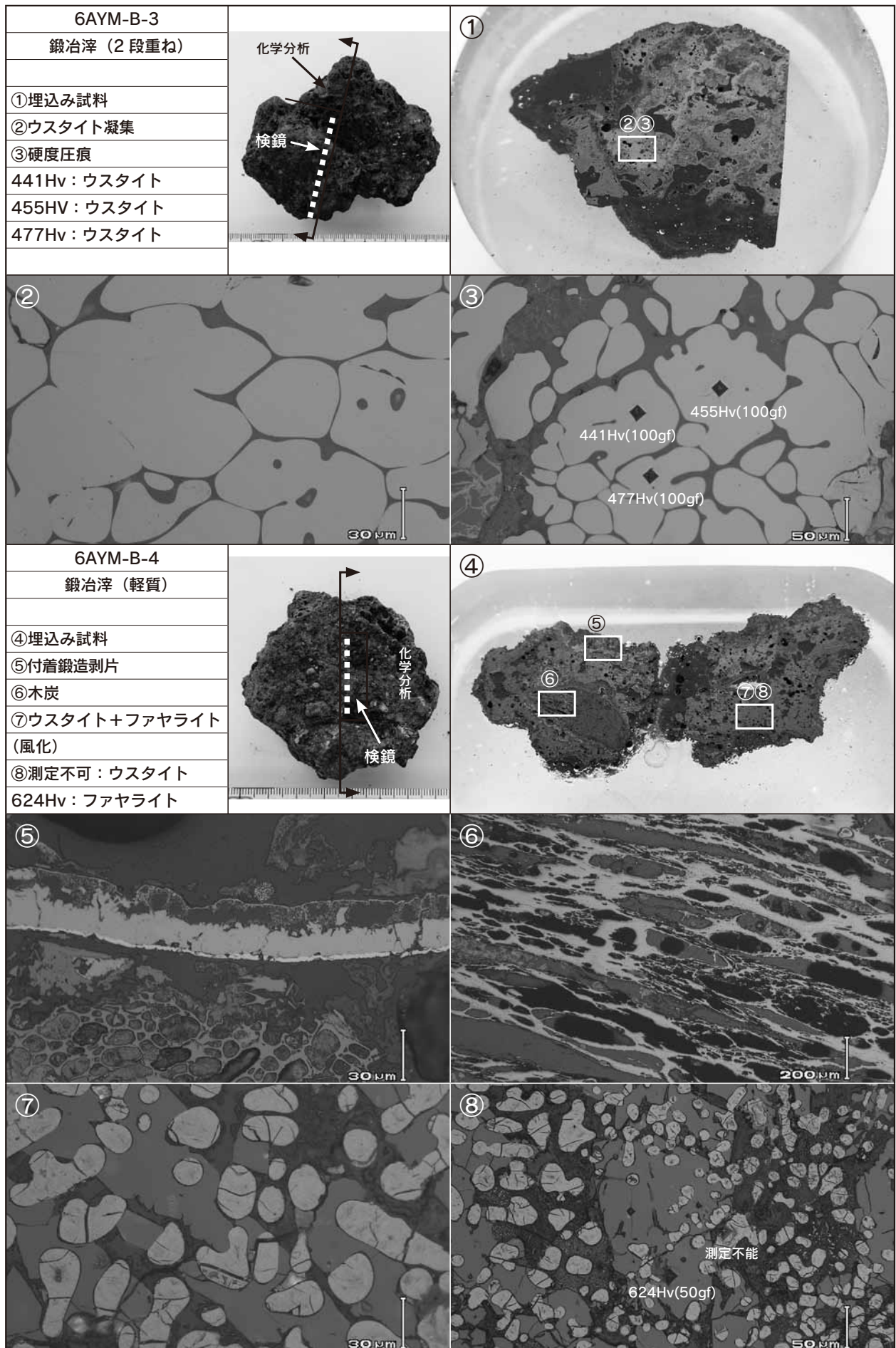


Fig.95 顕微鏡組織②

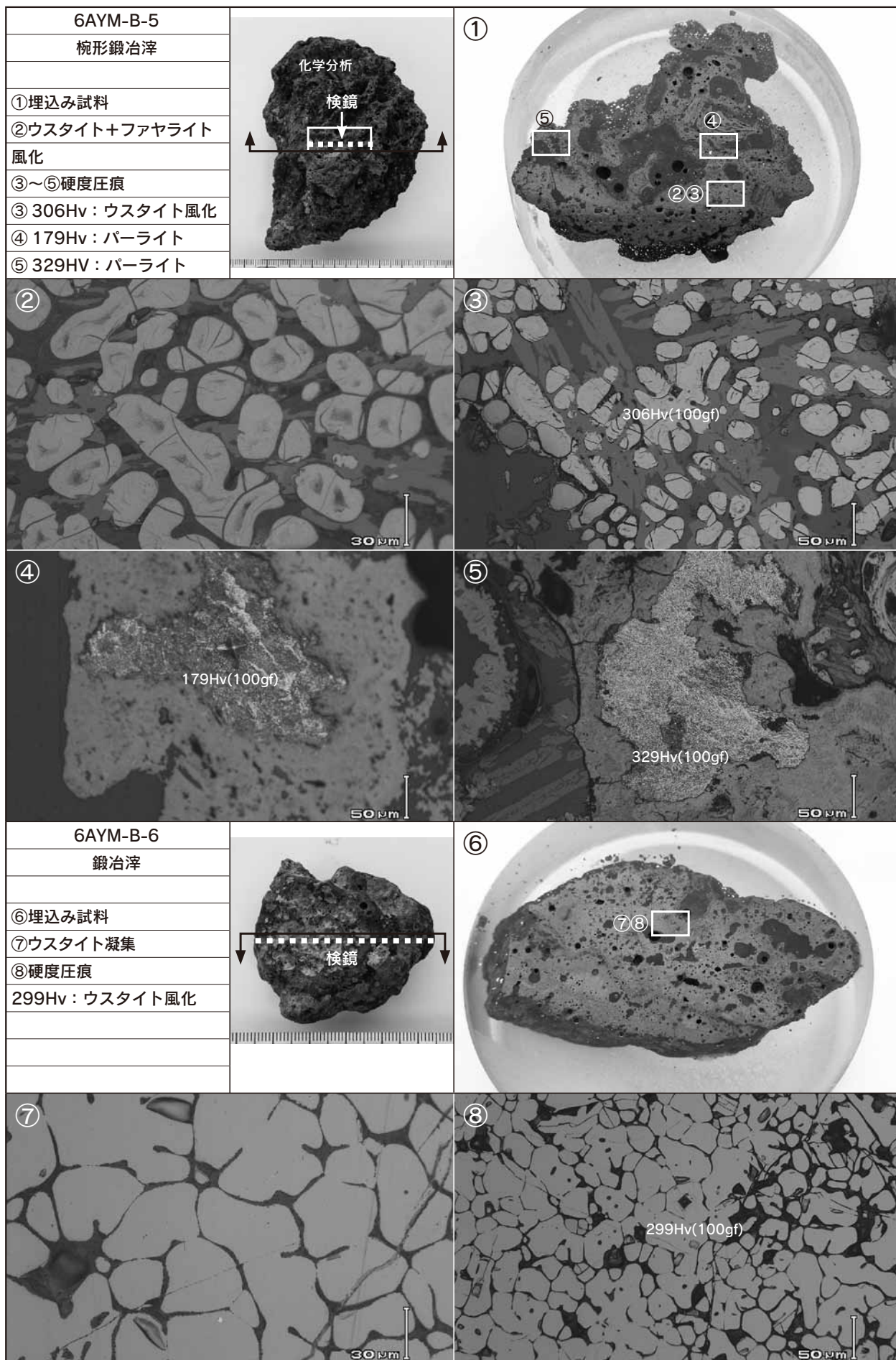


Fig.96 顕微鏡組織③

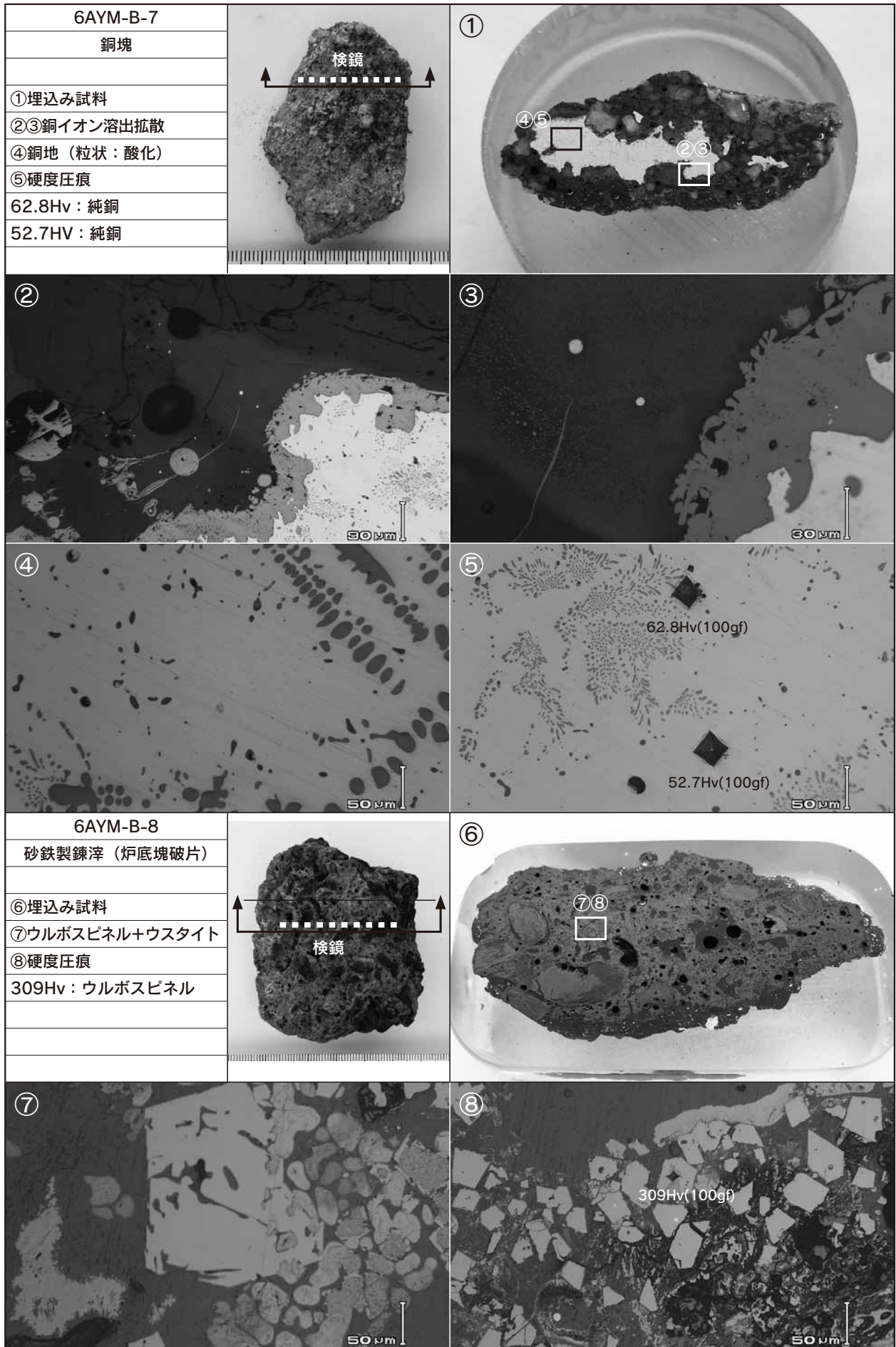


Fig.97 顕微鏡組織④

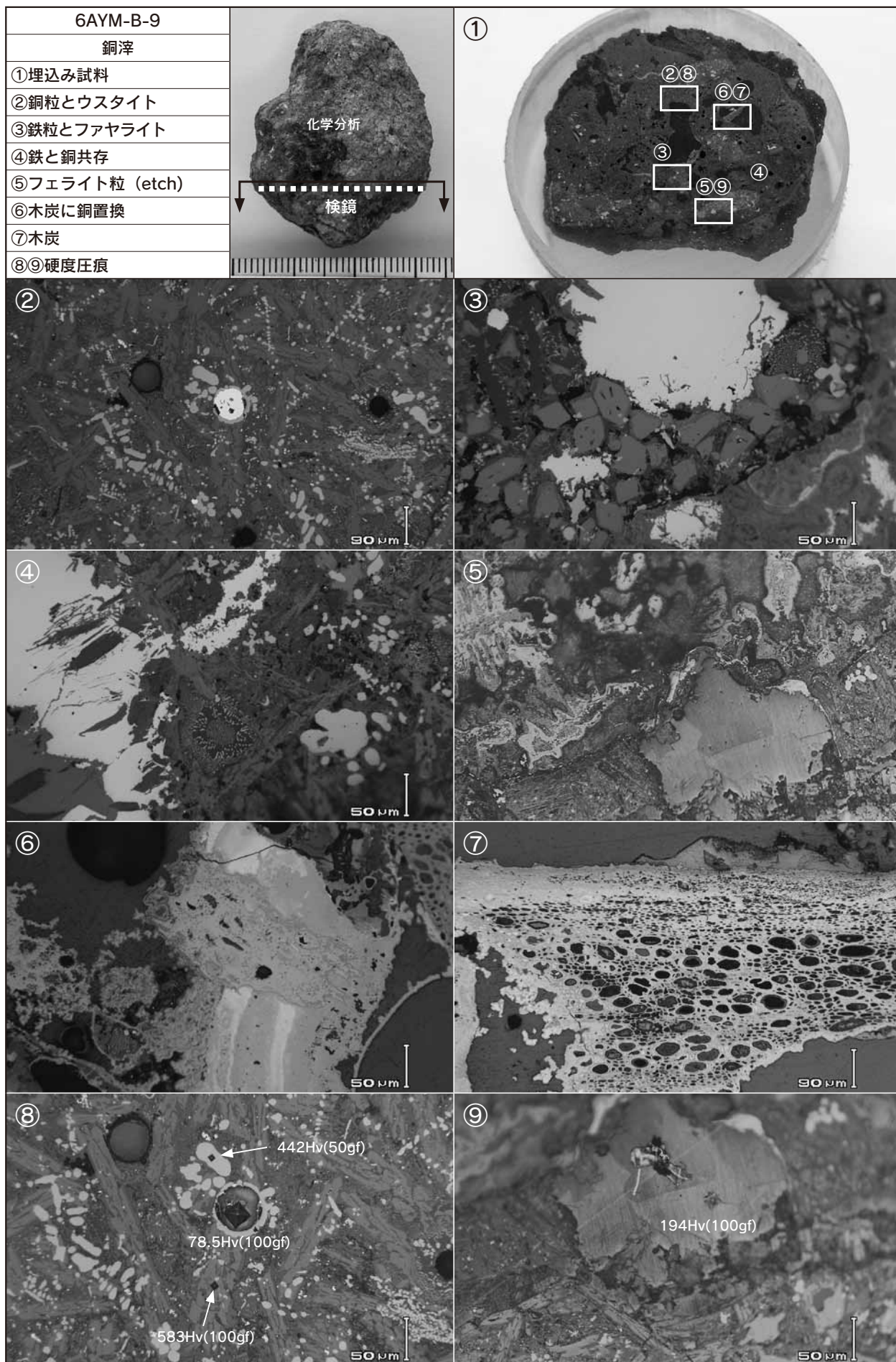


Fig.98 顕微鏡組織⑤

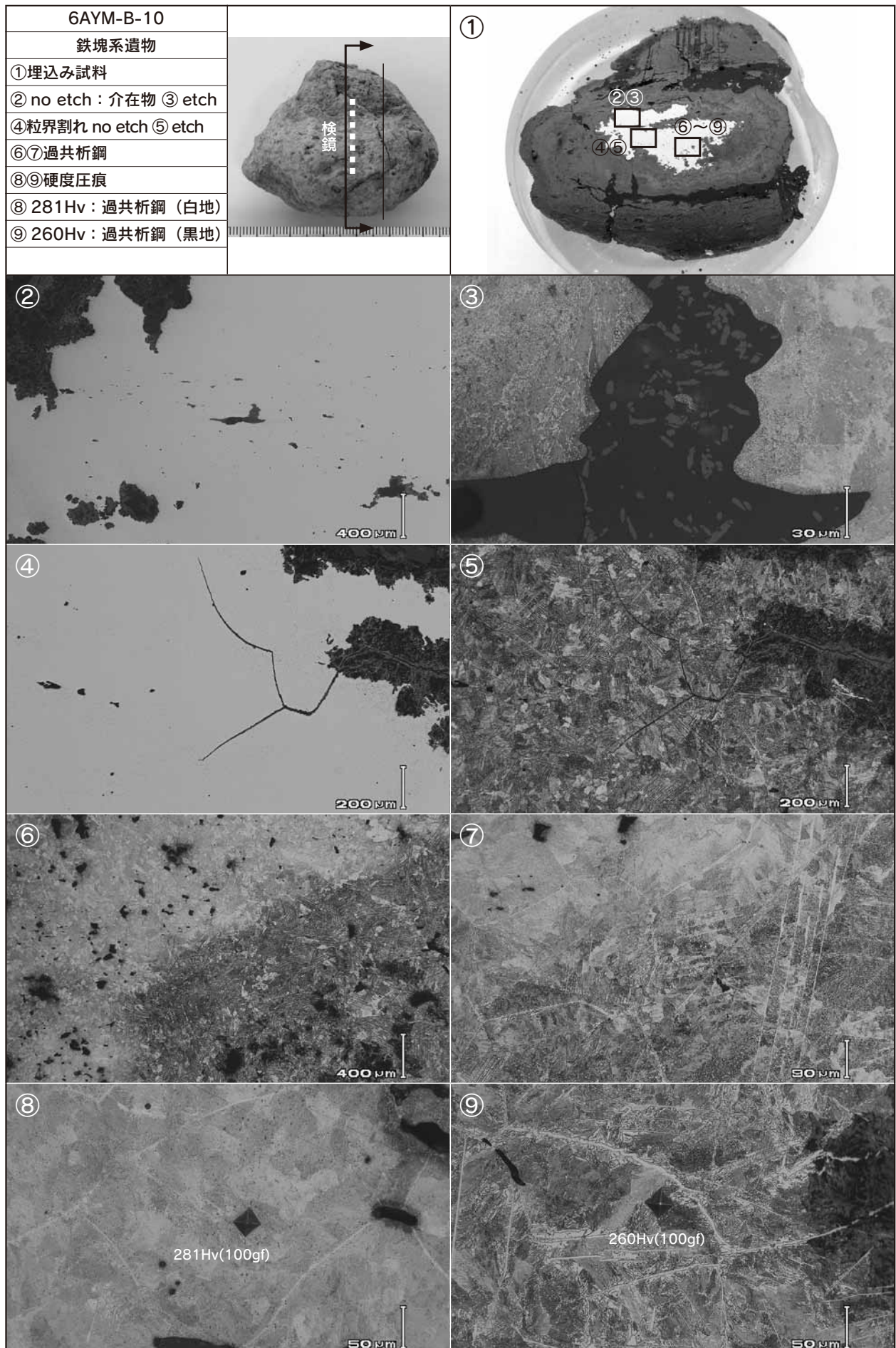
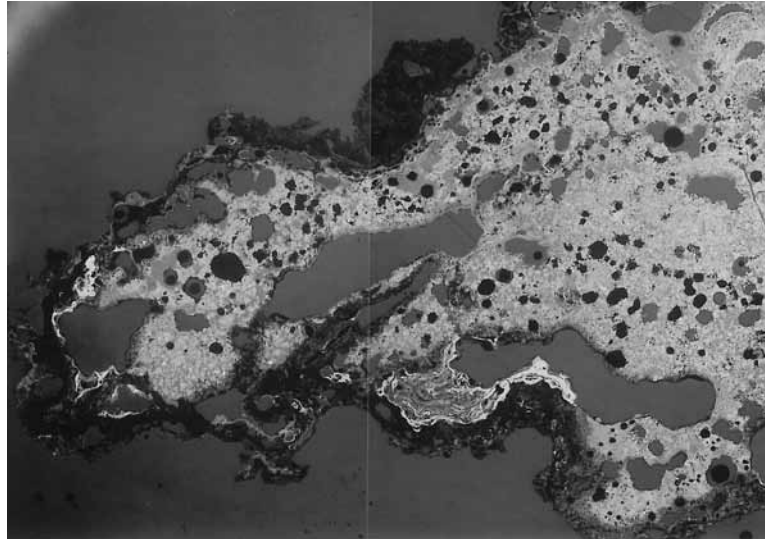
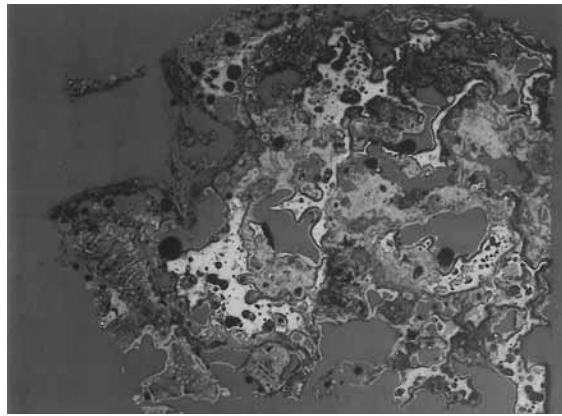


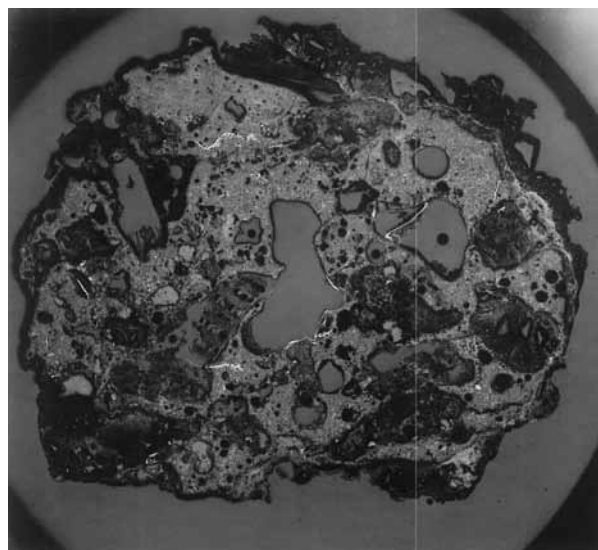
Fig.99 顕微鏡組織 ⑥



6AYM-B-2 ×7.5

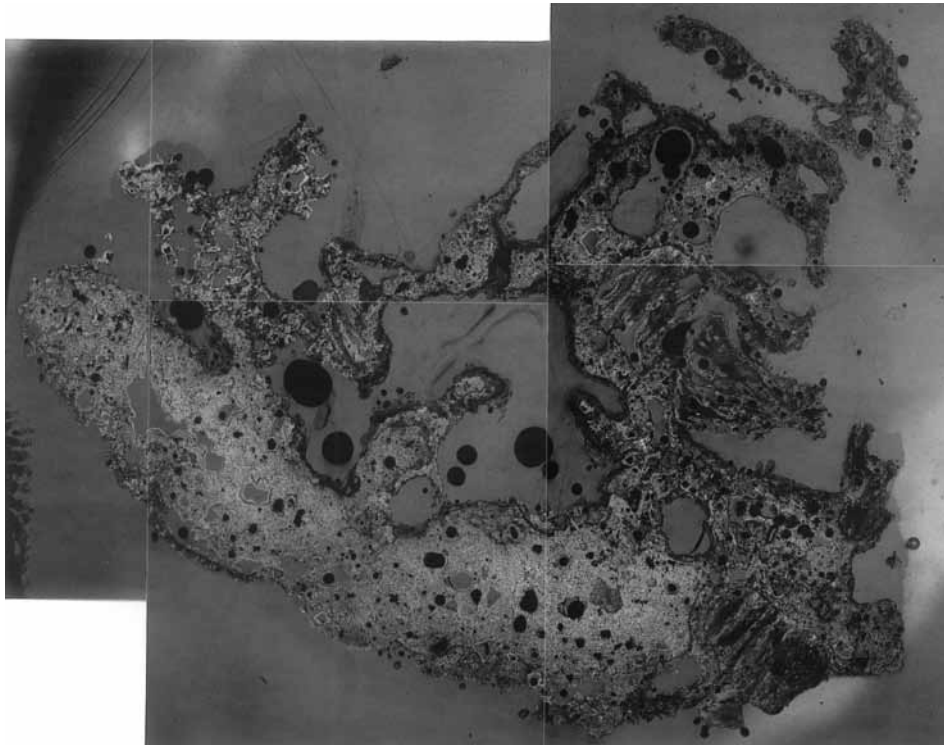


6AYM-B-3 ×7.5

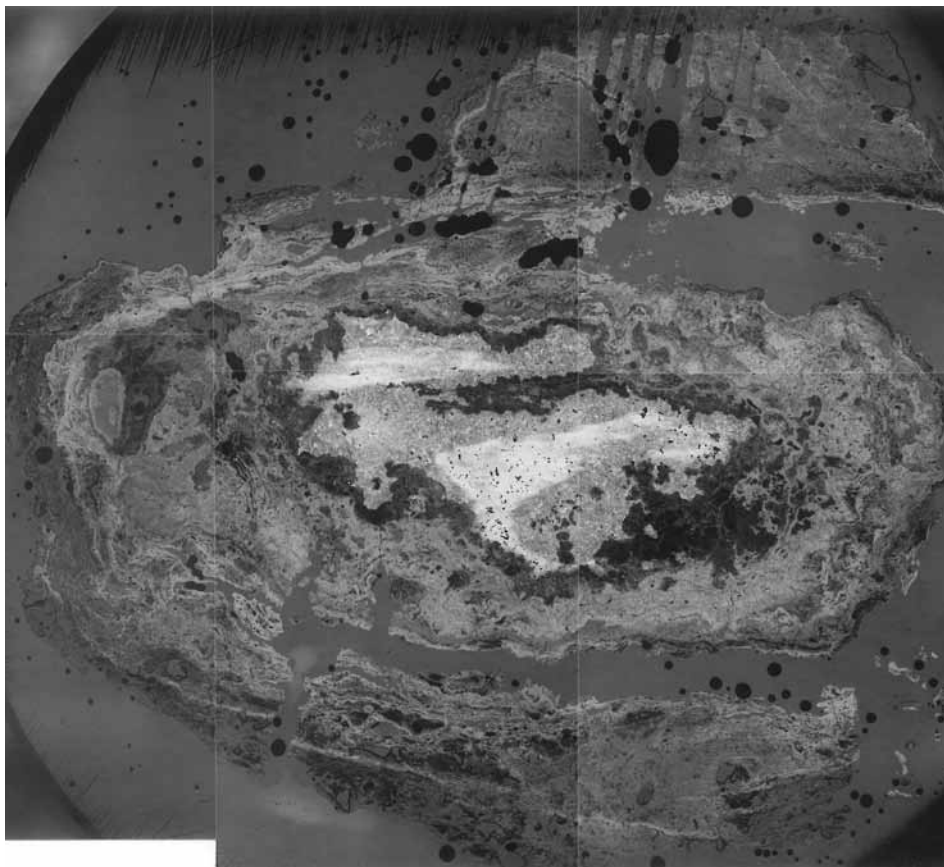


6AYM-B-9 ×7.5

Fig.100 マクロ組織①



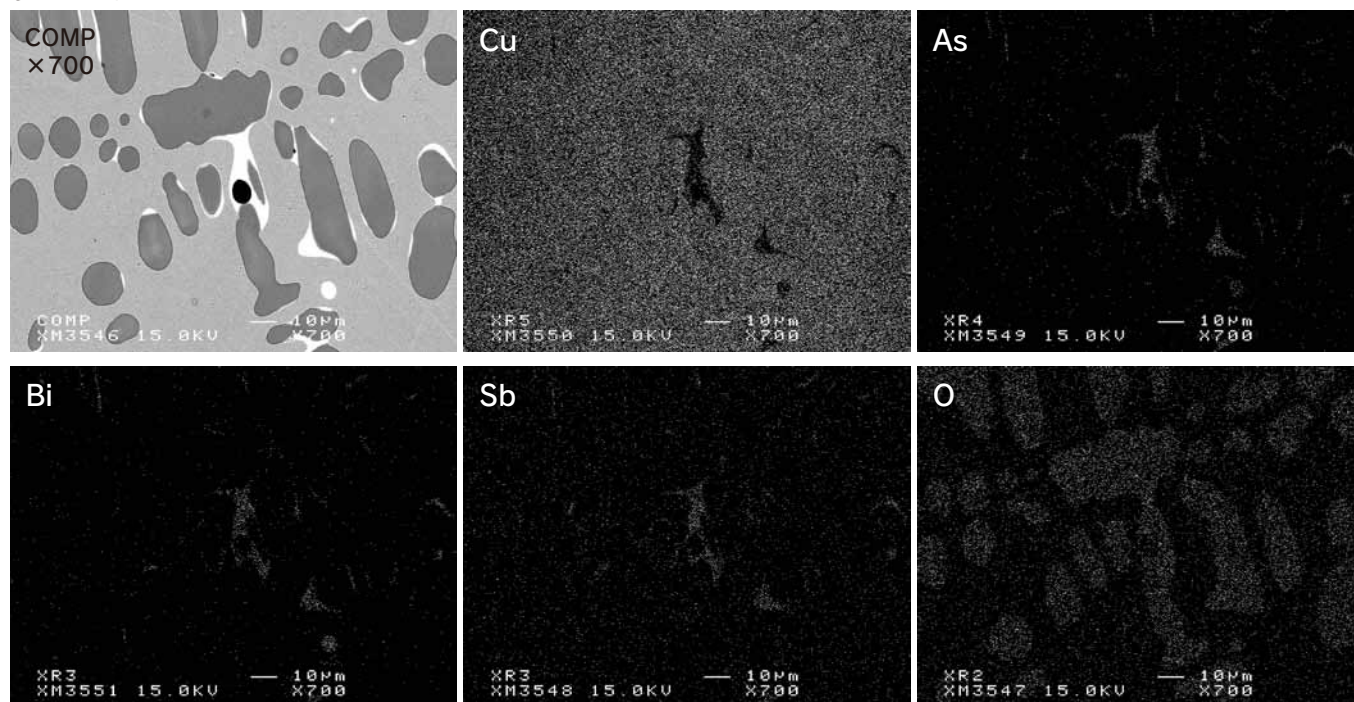
6AYM-B-5 ×7.5



6AYM-B-10 ×7.5

Fig.101 マクロ組織②

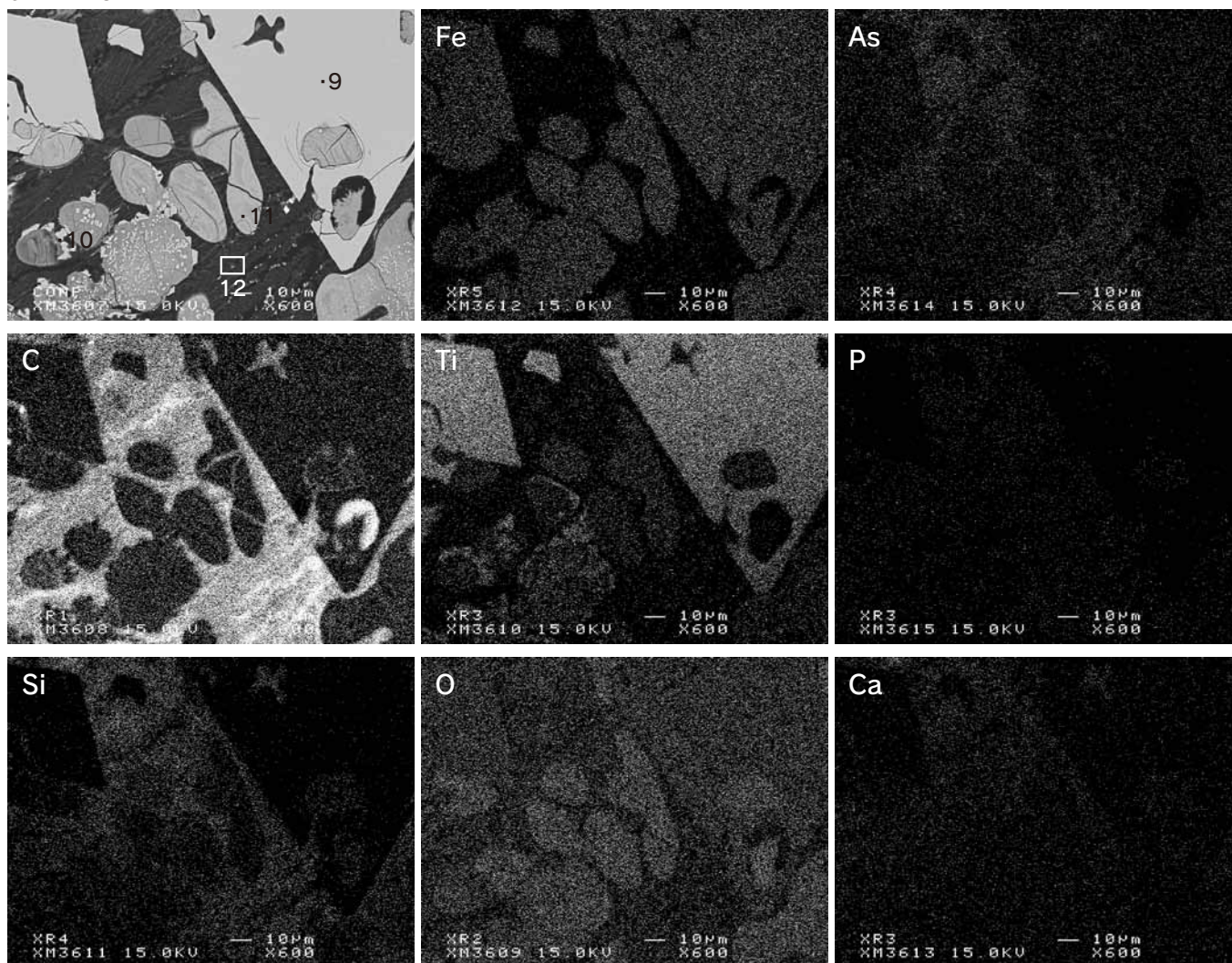
6AYM-B-7



Element	1	2	3	分析点 1 : 金属銅
Cu	99.664	86.853	10.629	
Pb	-	-	-	分析点 2 : 亜酸化銅 (Cu ₂ O) (酸素の定量不足は風化の影響)
Sn	0.012	-	-	
Fe	0.042	-	0.344	分析点 3 : Bi-As-Sb-Cu合金 (風化の影響大)
As	0.441	0.081	39.861	
Sb	-	0.027	6.989	
Bi	-	-	37.468	
Ag	0.014	0.019	0.278	
O	-	6.224	12.463	
S	-	-	0.177	
Ce	-	-	0.065	
P	0.023	0.058	-	
Ti	0.019	0.032	0.021	
Mn	-	-	-	
V	-	-	-	
Total	100.215	93.294	108.295	

Fig.102 EPMA調査①

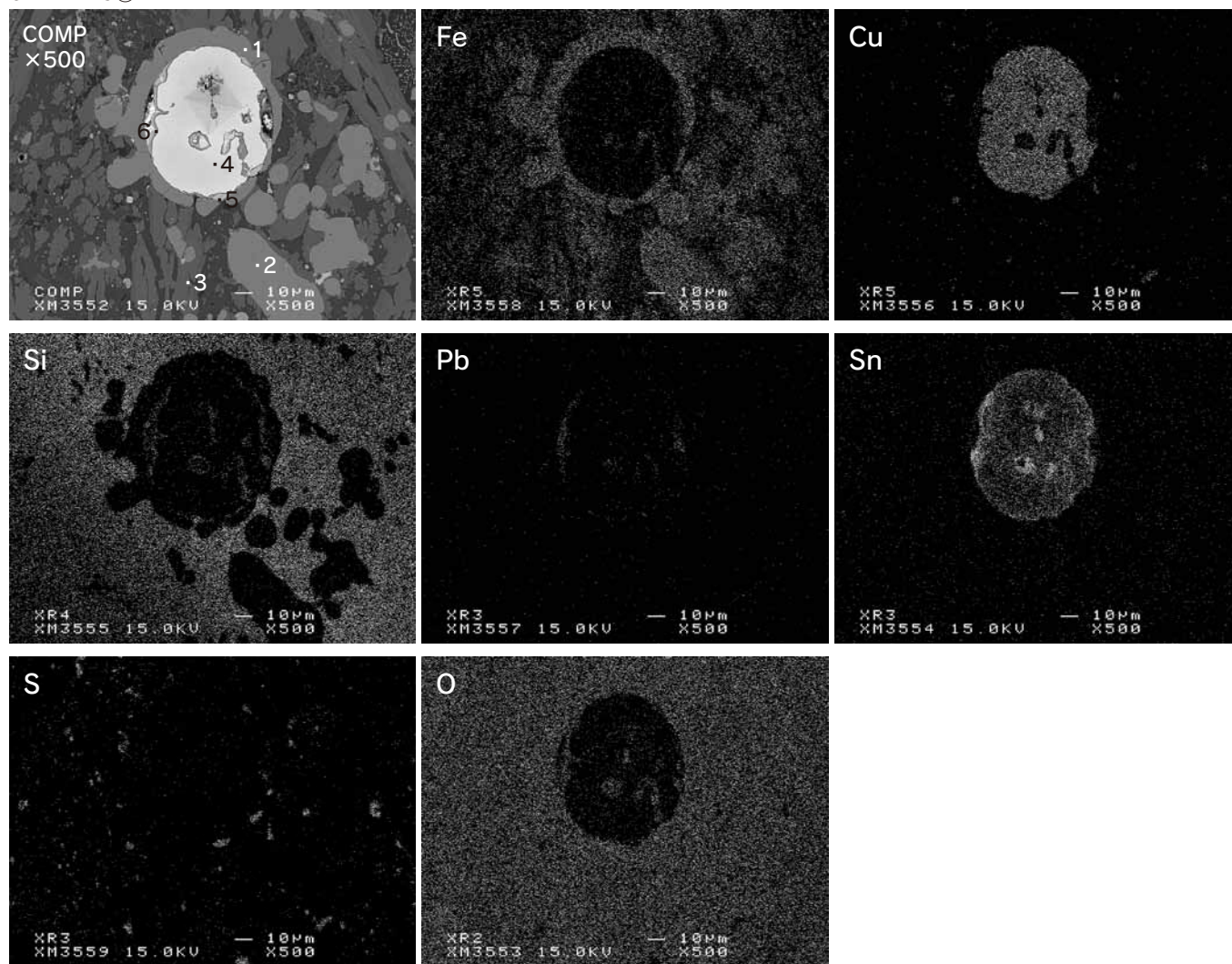
6AYM-B-8



Element	9	10	11	12	分析点9：ウルボスピネル (Ulvöspinel : 2FeO·TiO ₂)
Na ₂ O	-	-	0.017	0.016	
MgO	2.082	1.210	1.143	0.287	分析点10：ウルボスピネル (Ulvöspinel : 2FeO·TiO ₂)
Al ₂ O ₃	5.676	4.471	4.716	12.625	
SiO ₂	0.045	0.126	2.827	18.783	分析点11：ウスタイトを主とする複数の相か (風化の影響)
P ₂ O ₅	-	-	2.184	3.793	
S	0.008	-	0.041	0.083	分析点12：基地のガラスとその中の微小相 (風化の影響大)
K ₂ O	-	-	0.021	0.124	
CaO	0.007	0.016	0.265	0.962	
TiO ₂	26.062	24.343	6.040	1.861	
Cr ₂ O ₃	0.192	0.189	0.131	-	
MnO	0.367	0.246	0.139	0.051	
FeO	62.152	66.717	71.232	4.732	
ZrO ₂	0.032	-	0.015	0.104	
F	-	-	-	0.029	
As ₂ O ₅	0.078	-	-	0.050	
PbO	0.013	0.015	0.034	0.028	
CuO	-	-	-	0.053	
SnO ₂	-	-	0.016	-	
Total	96.714	97.333	88.821	43.569	

Fig.103 EPMA調査②

6AYM-B-9①



Element	1	2	3	4	5	6
Na ₂ O	-	-	0.054			
MgO	0.124	0.116	3.115			
Al ₂ O ₃	0.706	1.066	0.177			
SiO ₂	0.256	0.279	31.218	89.745	72.896	2.283
P ₂ O ₅	0.074	-	0.112	0.056	0.186	9.866
S	0.001	0.007	0.004	6.348	0.871	42.637
K ₂ O	-	-	0.012	2.209	4.099	13.414
CaO	-	0.008	2.680	1.552	0.051	0.636
TiO ₂	0.485	0.451	0.002	-	-	-
Cr ₂ O ₃	-	0.029	0.028	0.085	-	-
MnO	0.046	0.139	0.445	0.026	0.002	-
FeO	96.078	96.563	60.363	-	-	28.005
ZrO ₂	0.041	0.021	-	-	19.077	0.045
F	-	-	-	0.044	0.016	-
As ₂ O ₅	-	0.072	0.004	0.039	0.039	-
PbO	0.045	0.030	-	0.014	0.021	0.033
CuO	0.536	0.073	0.014	-	0.013	0.124
SnO ₂	0.045	-	-	-	-	-
Total	98.437	98.854	98.228	100.118	97.271	97.043

分析点1：ウスタイト (Wustite : FeO)

分析点2：ウスタイト (Wustite : FeO)

分析点3：ファヤライト (fayalite : 2FeO · SiO₂)

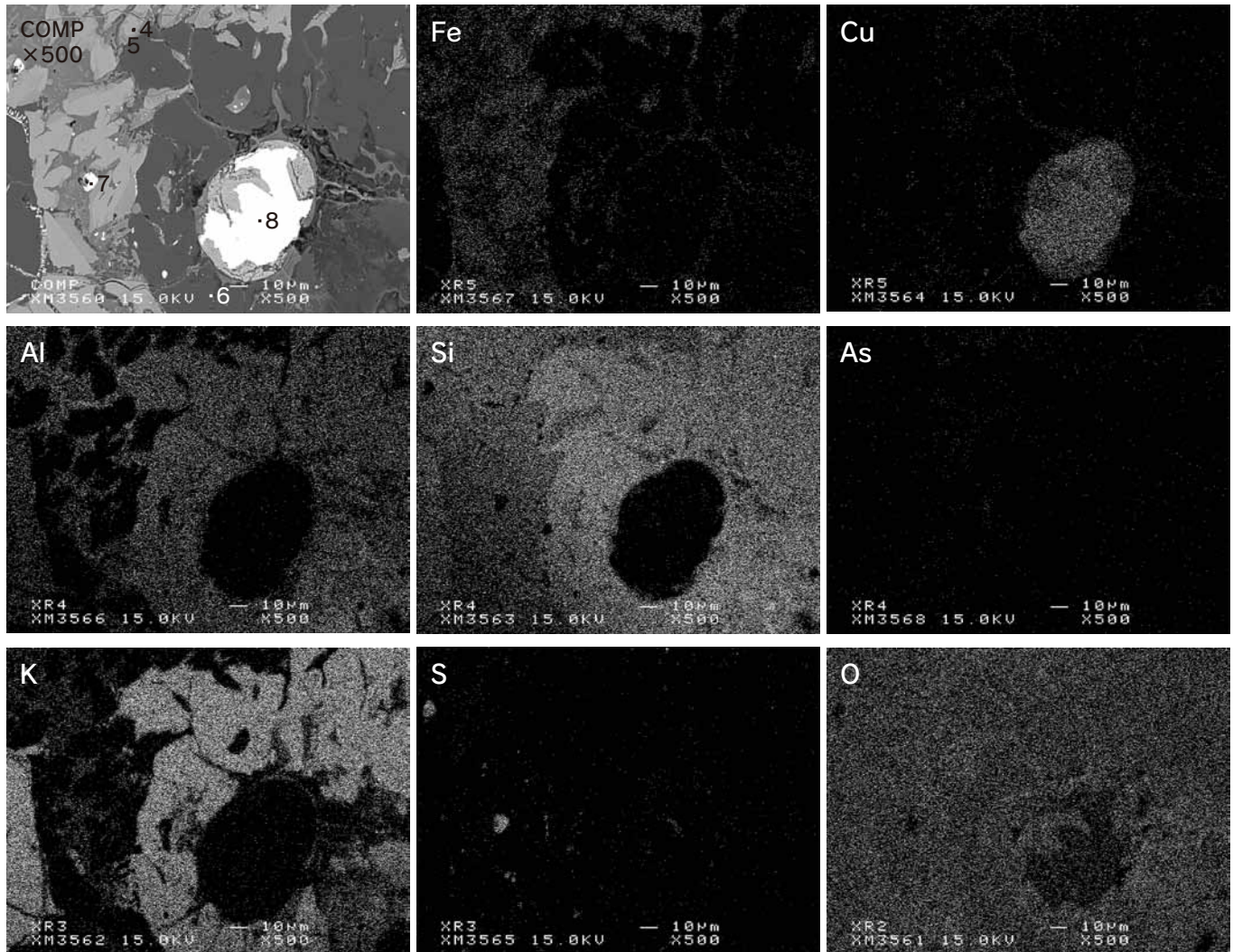
分析点4：金属銅 (錫、砒素、鉄)

分析点5：輝銅鉱 (chalcocite : Cu₂S)

分析点6：多相部の分析値 錫石 (Sn、Fe)O₂を主とする

Fig.104 EPMA調査③

6AYM-B-9②



Element	4	5	6	Element	7	8
Na ₂ O	0.040	-	0.243	Cu	11.107	85.396
MgO	2.257	-	-	Pb	1.325	-
Al ₂ O ₃	0.115	0.329	24.568	Sn	0.074	0.002
SiO ₂	30.583	33.257	65.931	Fe	50.347	0.430
P ₂ O ₅	0.525	0.713	0.036	As	0.038	-
S	0.015	0.015	-	Sb	0.027	-
K ₂ O	0.051	0.107	11.064	Bi	-	0.067
CaO	3.487	1.107	0.001	Ag	0.020	0.017
TiO ₂	0.013	0.087	0.074	O	4.449	5.526
Cr ₂ O ₃	-	-	-	S	25.779	-
MnO	0.478	0.167	-	Ce	-	0.005
FeO	59.306	39.275	0.448	P	-	0.081
ZrO ₂	0.041	-	0.033	Ti	0.040	0.031
F	-	-	-	Mn	0.044	0.020
As ₂ O ₅	-	6.244	-	V	0.021	0.041
PbO	0.022	0.596	0.005	Total	93.271	91.616
CuO	0.145	4.754	0.219			
SnO ₂	-	-	-			
Total	97.078	86.651	102.622			

分析点4：ファヤライト (fayalite : 2FeO · SiO₂)

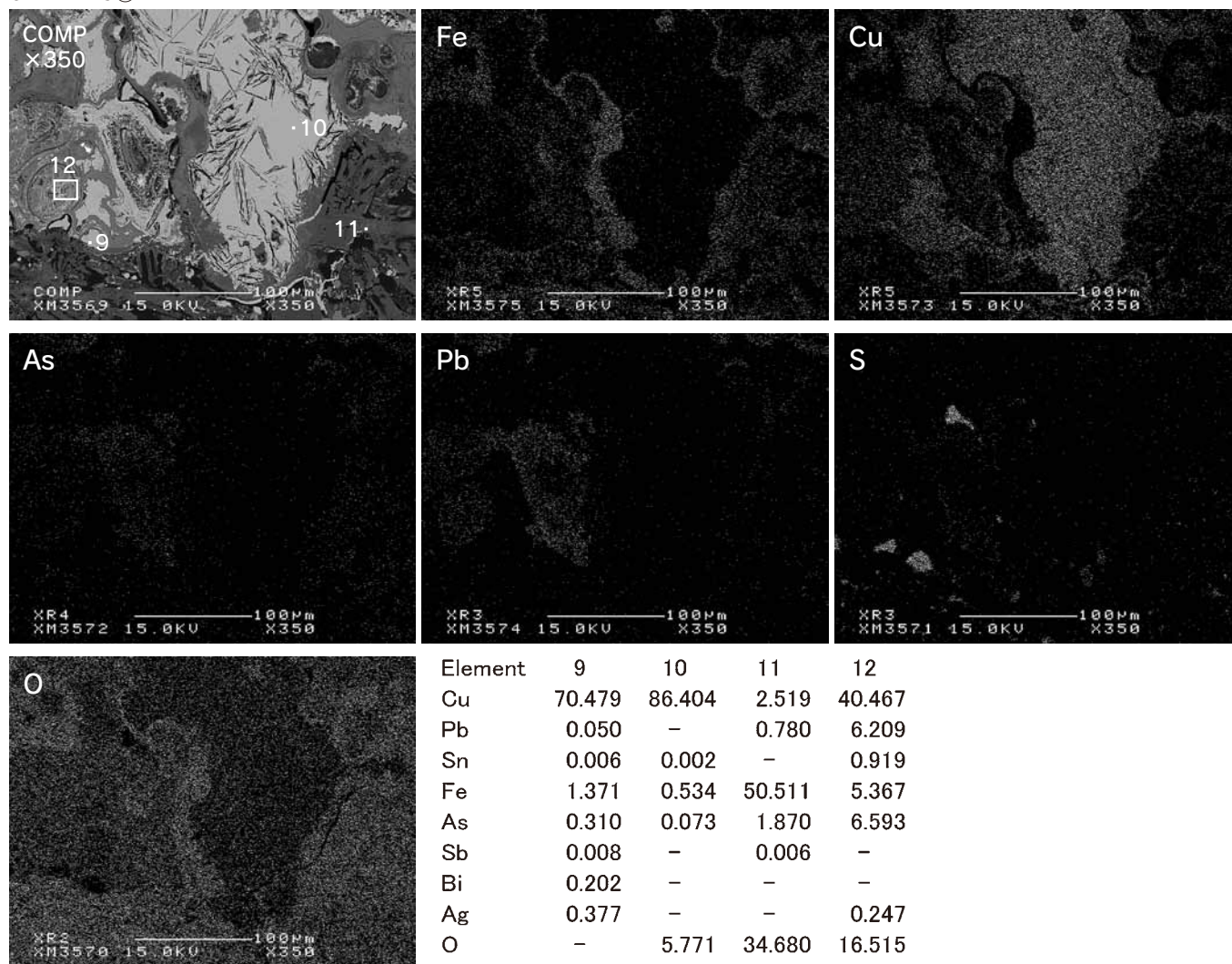
分析点5：ファヤライト+スパイス (Cu+As)風化の影響大

分析点6：ガラス (glass)

分析点7：複数の相の分析 磁硫鉄鉱(FeS)+輝銅鉱(Cu₂S)か?分析点8：亜酸化銅 (Cuprite : Cu₂O)

Fig.105 EPMA調査④

6AYM-B-9③



Element	9	10	11	12
Cu	70.479	86.404	2.519	40.467
Pb	0.050	-	0.780	6.209
Sn	0.006	0.002	-	0.919
Fe	1.371	0.534	50.511	5.367
As	0.310	0.073	1.870	6.593
Sb	0.008	-	0.006	-
Bi	0.202	-	-	-
Ag	0.377	-	-	0.247
O	-	5.771	34.680	16.515
S	26.204	-	0.097	0.090
Ce	0.044	-	0.044	0.041
P	0.075	0.088	0.158	0.184
Ti	0.034	0.025	0.012	0.030
Mn	0.038	0.050	0.024	-
V	0.026	-	-	0.009
Total	99.224	92.947	90.701	76.671

分析点9：風化の影響大、組成に問題をもつが輝銅鉱 (Cu_2S)か？

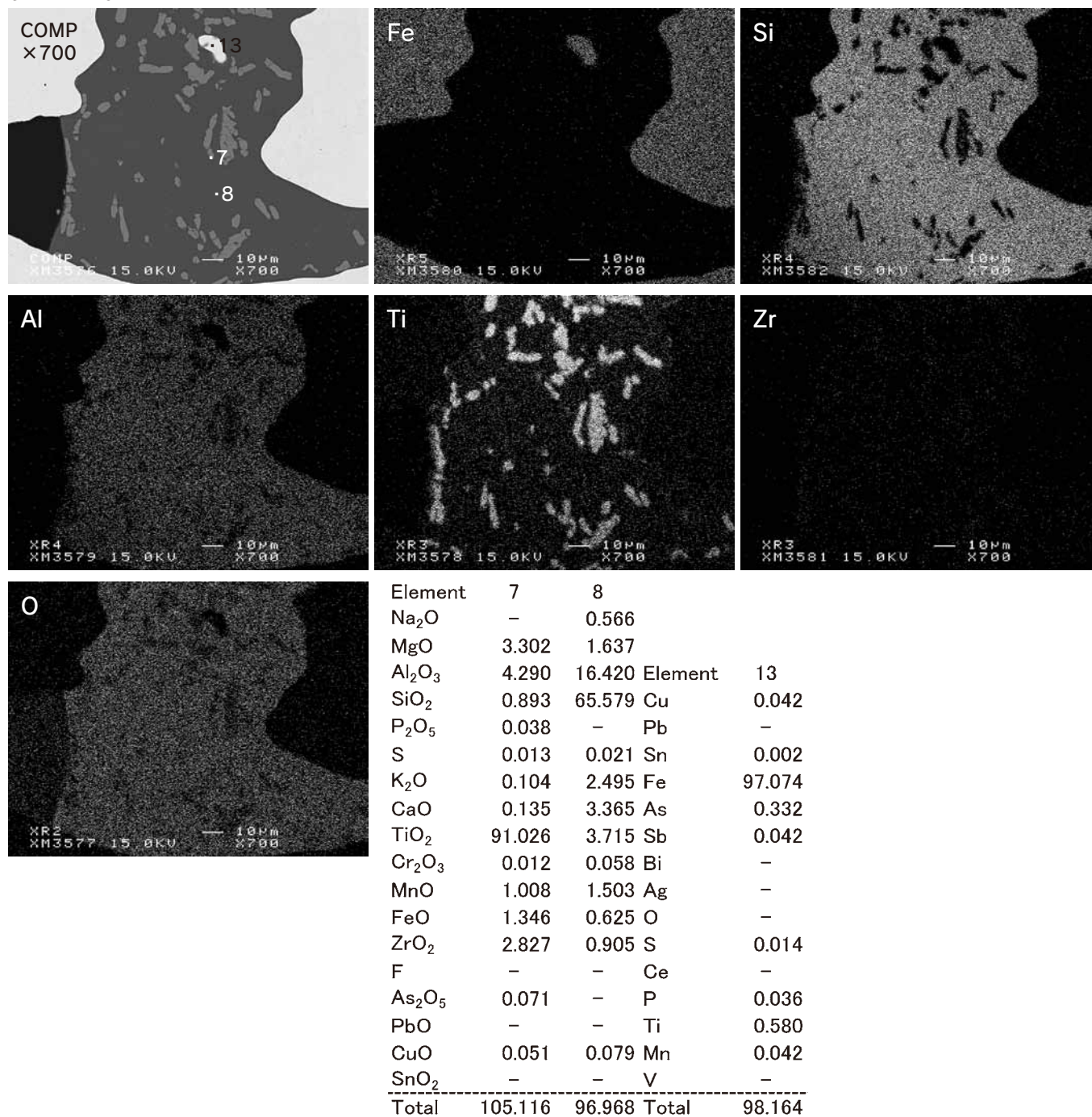
分析点10：風化の影響大、亜酸化銅 (Cuprite : Cu_2O)

分析点11：風化の影響大、磁硫鉄鉱か (Pyrrhotite : Fe_{1-X}S) ?
(Total悪く使用不可)

分析点12：風化の影響大、銅、鉄、砒素、鉛の酸化物
(Total悪く使用不可)

Fig.106 EPMA調査⑤

6AYM-B-10

分析点7：酸化チタン (rutile : TiO₂)

分析点8：ガラス(glass)

分析点13：金属鉄

Fig.107 EPMA調査©

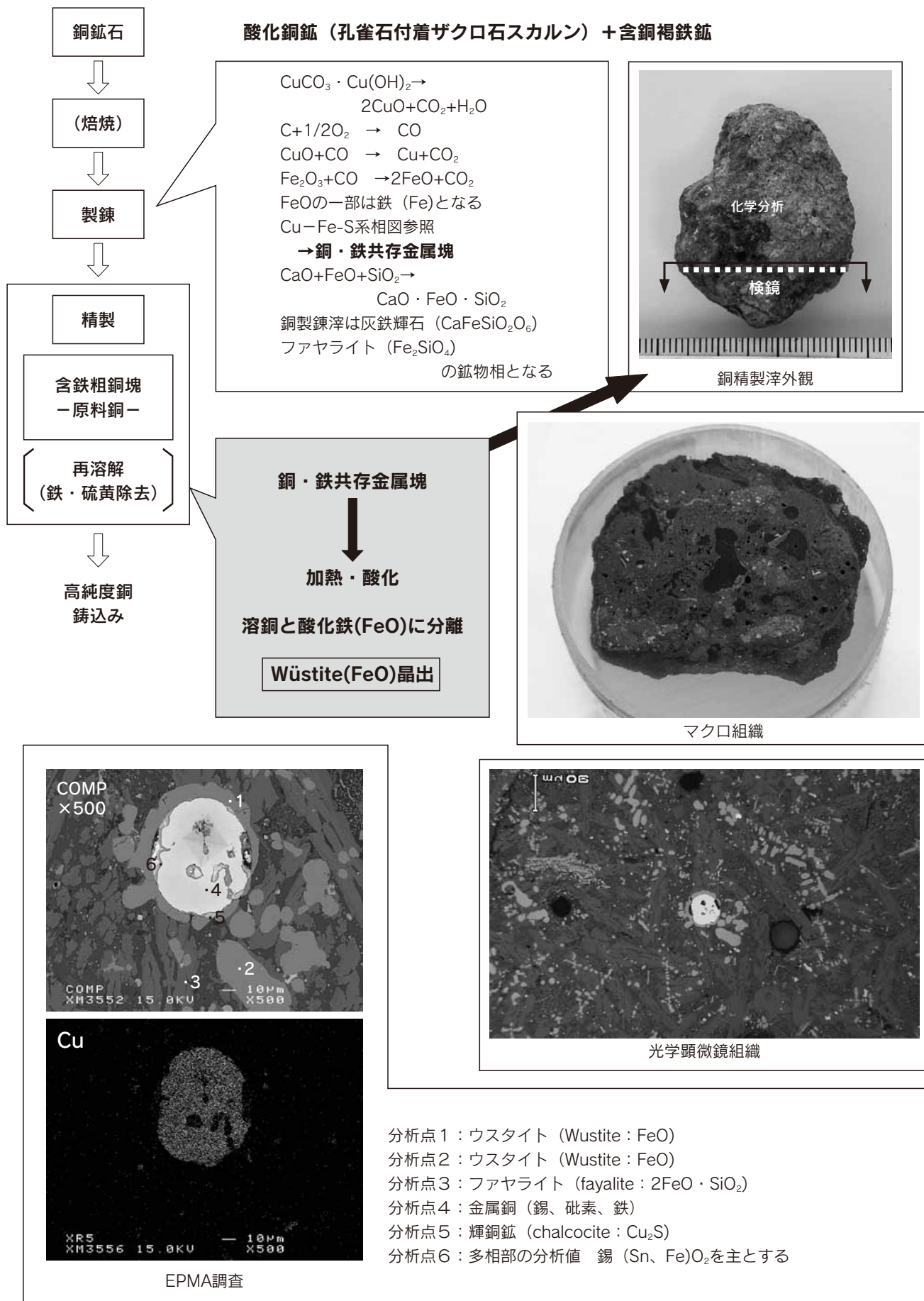


Fig.108 銅滓中に酸化鉄 (Wüstite : FeO) 存在理由模式図 (サンプル : 6AYM-B-9)

第Ⅵ章 遺構と遺物の検討

(1) 遺構とその変遷

本節では、不丁地区遺構編及び遺物編1・2において報告した遺構・遺物の調査成果をもとに、不丁地区官衙の変遷及び官衙の性格について言及する。なお、不丁地区に限ったことではないが、正式報告書作成に際しては総ての出土遺物の吟味及び遺構の検討を行った上で報告している。よって、今次報告と概報段階での見解が大きく異なる場合が生じるが、今回の正式報告書をもって最終見解とする。

1) 建物の配置と変遷 (Fig.109~112)

不丁地区官衙の四至は、東西が東側の南北溝SD2340と西側の南北溝SD320に挟まれた幅 76～82m（溝肩での距離）で、南北は北側の藏司地区官衙南端の築地SA1410から南側の朱雀門礎出土地点を東西方向に延長した線の長さ約220mである。

不丁官衙の
四 至

この範囲において、現状で63棟の建物を検出したが⁽¹⁾、その殆どが掘立柱建物であり、中には礎石建物（SB370）が1棟存在する。掘立柱建物の内訳は、四面廂建物1棟（SB2420）、両面廂建物1棟（SB2355）、片廂建物7棟（SB2390・2400・2415B・2460A・3815・4035B・4577）、総柱建物2棟（SB2370・3832）、側柱建物51棟であり、側柱建物には梁行1間×桁行2間程度の小型建物5棟（SB2461・2902・4046・4047・4048）及び門建物2棟（SB2388・2450）が含まれる。

次に梁行の規模でみていくと、身舎の梁行が3間の大型建物はSB2355（桁行7間）・2435（桁行8間）・2445（桁行7間以上）・2525（桁行9間以上）・2530（桁行8間以上）・2540（桁行1間以上）・2900（桁行4間以上）の7棟が存在し、日吉地区の9棟に次ぐ数であり、周辺官衙域においては際立っている点が指摘できる⁽²⁾。

建物群の配列に関しては、一部建物と重複してはいるものの、東西方向の柵SA2451・2452及び築地基礎とみられる遺構SX4045の南北10m余りが空地となっており、建物群は大きく北・中央・南の三つのエリアに区画されている状況が窺える。建物群はその区域内においてそれぞれ独立した配列をなすことから各区域ごとに建物の変遷を検討した上で、最終的に不丁地区官衙の建物変遷を提示したい。しかしながら、建物はすごく錯綜し、加えて確実に建物に伴うと言える遺物は少なく、時期決定を困難なものとしている。従って、先ず建物の切り合い・重複関係、次に建物方位・配置、出土遺物の順でみていく。

三つのエ
リア

北区域

北区域の建物群は、東西方向の柵SA2451・2452以北の一群で、礎石建物SB370がSD320・2340両溝間の中央に位置し、その南に東西棟建物SB2355・2360・2365の3棟が配列する。SB370の東側には南北棟建物SB2535AB及び桁行10間とみられる南北棟建物SB2525・2530がSD2340寄りに位置し、柵SA2522を挟んで南にSB2515・2520が存在する。また、西側には2間×3間の総柱建物SB2370を配している。この一群は若干の重複はあるものの、比較的単独で建物が配置されている。

[重複関係]

〈→印：切合い（古→新），⇔印：重複〉

SB2355 → SB2515⇔SB2520 → SX2531(採土遺構)

↓

SA2367⇔SB2365 → SD2350

SB2535A → SB2535B

[建物方位]

①北を示す建物：SB2355・2370・2450・2520，SA318・2505

②北から東に30分振る建物：SB370・381・2525，SA2513

③北から東に1度振る建物：SB2360・2365・2530・2540，SA2354

④北から東に2度30分振る建物：SB2535AB

⑤北から東に3度振る建物：SB2515

⑥北から東に8度振る建物：SB386

⑦北から西に2度30分振る建物：SB2366

⑧東から北に30分振る建物：SA2522

⑨東から南に1度振る建物：SA2451

以上、9の方位がみられるが、大別するとA：①～③・⑧・⑨の北から東に0～1度振る建物、B：④・⑤の北から東に2度30分～3度振る建物、C：⑥の北から東に8度振る建物、D：⑦の北から西に2度30分振る建物に分けられる。しかし、SB370・381・2360の3棟及びSB2525・2530・2540，SA2513の4棟は重複し、前後関係が存在するのは明白である。

次に出土遺物（遺物編1 Fig.19～27，以下Fig.○—○）をみていくと、SA2513からは口縁部内面に身受けのかえりを有する坏蓋が出土しており、7世紀末におけよう。SB2540の西側桁行の南東隅柱から北に2個目の柱掘方からは、手持ちヘラケズリを施した須恵器皿が出土していることから8世紀前半とみられる。SB2360からは須恵器の坏・皿・甕と土師器有高台の坏が出土しており、これらの土器は8世紀中頃の特徴を示す。SB2530からは須恵器の坏蓋・有高台坏及び土師器の小型甕が出土しており、8世紀中頃とみられる。SA2522からは須恵器模倣の土師器坏が出土しており、8世紀中頃であろう。

SB2530と重複するSB2525の掘方からは8世紀中頃の須恵器坏蓋が出土しているが、柱穴出土の須恵器坏蓋は前者に比して低平であることから8世紀後半と考えられる。SB2535Bの柱穴上層からは須恵器坏蓋・坏及び土師器坏が出土しており、8世紀後半におけよう。

SB2355の柱掘方からは土師器皿・碗が出土しているが、小片であるため時期決定に苦慮するが9世紀前半頃であろう。SB2515からは須恵器坏蓋、土師器坏・碗が出土しており、遺物編1では土師器碗（Fig.21-31）を混入品とみなしたが、9世紀前半に比定したSB2355を切っており、9世紀中～後半と考えておきたい。

以上のことを総合的に検討すると、北区域に建物が出現するのは8世紀前半頃で、SD2340の開鑿に伴い梁行3間のSB2540が調査区の北東側に位置する。また、7世紀末としたSA2513とは軸を揃えており、両者は関連する可能性が高い。なお、北側及び西側にも建物が展開すると思われるが、未調査ヶ所が多く現時点では不明と言わざるを得ない。

次の8世紀中頃段階は、東西棟建物SB2360が区域の中央やや南側に位置し、梁行3間×桁行10間とみられる南北棟建物SB2530とでL字形配列をなす。先のSB2540が梁行3間である

ことを考えると、SB2530はSB2540の機能を踏襲する建物の可能性が高い。また、総柱建物SB2370は建物に伴う出土遺物がなく、時期は判然としないが、柱掘方が隅丸方形を呈し、一辺1m前後の大きさであることから8世紀代とみられ、建物配列からすると当該期におけよう。

その後には築造されるのが8世紀後半のSB2525・2535Bである。SB2530と重複するSB2525も梁行3間で、桁行5間分に当たる建物中央に間仕切りに関わる柱穴があり、両建物は規模・構造的に類似し、SB2525はSB2530の建替えと考えられる。

SB2535Bは梁行1間以上であるが、西側の17次調査区までは伸びないことから梁行2間とみられる。なお、概報では礎石建物SB370の時期を8世紀後半としているが、両者が同時併存だとするとSB370東桁行ラインとSB2535B推定西桁行ラインとの間隔が約5.6mとなり、両建物の軒の出を考えると近接しすぎるきらいがある。また、後述するSB370とSB2355・2365の建物配列からみてもSB370は9世紀代に下げた方が妥当と考える。

9世紀前半には北区域の最南端の東側に東西棟の両廂建物SB2355が位置し、その西側には東西棟建物SB2365が位置し、両者の中央やや北側に南北棟の礎石建物SB370が位置する。この三者の位置関係は、SB370の南中心線から左右11.6mの等間隔をもってSB2355・2365が配列する格好となる。このことは、3棟が同時併存していたことを裏付けよう。また、SB370の南中心線上にL字形の柵SA2354が乗ることから、この柵も同時期とみなせる。

SB2355の約13m南側には門建物とみられるSB2450及びそれに接続する柵SA2451が東西方向に走り、その東延長線上に暗渠施設SX2345が位置し、SX2345からさらに14m東の地点で政庁前面広場側の門建物SB2388の南北延長線と直角に接続する。SA2451は構造的に板塀とみられ、SX2345がSD2340埋没後の8世紀後半に設置されることから、9世紀に入ってSA2451によって不丁地区が北区域と中央区域とに二分されたことが窺える。また、SA2451の南側の柵SA2452は西下がりで東西方向に走るが、SA2451の建替えとみられる。このSA2452も暗渠SX2345を跨がしており、SD2340の北半部はほぼ埋没状態にあったが、この付近は小規模な排水溝的に流れていたものと思われる。

SA2451は
板塀か

梁行2間×桁行4間の南北棟建物SB2515は東に3度振り、9世紀前半のSB2355・2520を切ることから9世紀中頃～後半とみられる。また、東に8度振るSB386は梁行2間×桁行3間規模の小型建物であり、10世紀代であろう。

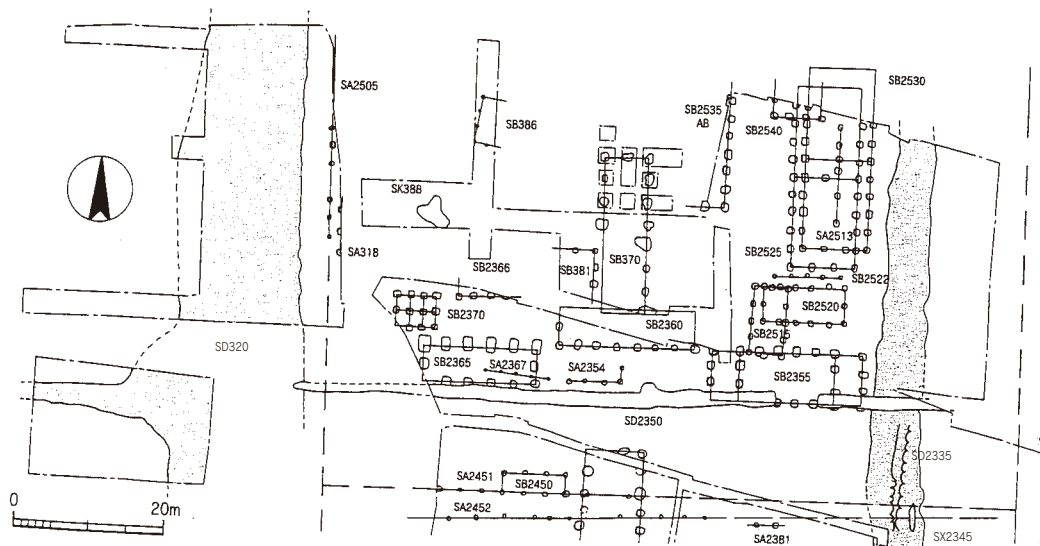


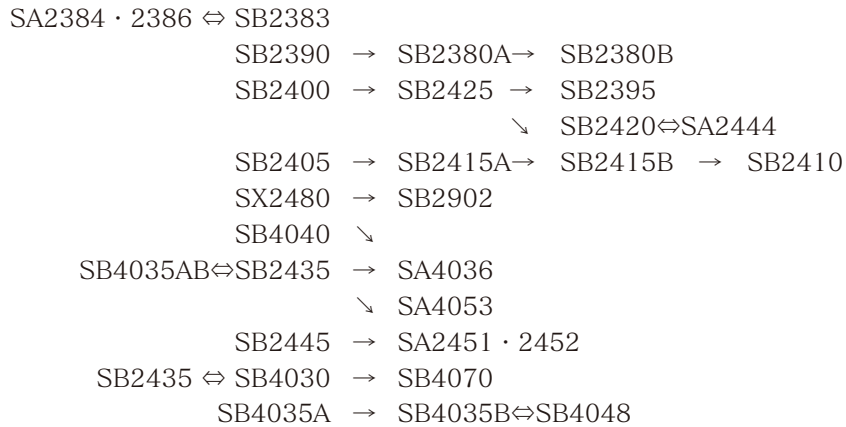
Fig.109 北区域の建物配置図 (1/1,000)

SB2355・2365を切る東西溝SD2350も10世紀代の開鑿と考えられるが、東側で長さ5.6m間が途切れており、建物の上部構造に関わる柱穴等は確認できなかったものの、この部分は北区域への出入口となる。また、SA2451が何時の時期まで存続していたか明らかではないが、SA2451とSD2350間は11～13mの距離を有し、空閑地となっていることから、この空間に東西方向の通路が想定される。

中央区域

中央区域の建物群は、東西方向の柵SA2451と築地基礎とみられる遺構SX4045との間に存在する一群で、北・南区域に比して比較的切り合っている。この一群の主体をなすのが、今回、四面廂建物と考えたSB2420で、この建物の周囲に南北棟・東西棟の建物が配列する。また、建物群はSD2340寄りに位置するSB2380AB・2383・2390・2880・2885・2900、SA2386・2408・2895等の東群とそれ以外の西群とに分かれ、区域の南側には梁行1間×桁行2間の小型建物SB2902・4046・4047・4048が位置する。

[重複関係] <→印：切合い（古→新）、⇔印：重複



[建物方位]

- ①北を示す建物：SB2380A・2380B・2385・2390・2410・2430・2445・2900, SA4053
- ②北から東に1度振る建物：SB2425・2435
- ③北から東に1度30分振る建物：SA2386
- ④北から東に2度振る建物：SB2383・2415A・2415B・2902・4035A・4035B, SA2894
- ⑤北から東に2度30分振る建物：SB2420・4070
- ⑥北から東に3度振る建物：SB4040
- ⑦北から東に3度30分振る建物：SB4030, SA2384
- ⑧北から東に4度振る建物：SB2885
- ⑨北から西に1度振る建物：SB2405
- ⑩北から西に1度30分振る建物：SB2388
- ⑪北から西に2度30分振る建物：SB2395・2400
- ⑫北から西に4度振る小型建物：SB4048
- ⑬北から西に4度30分振る小型建物：SB4046・4047
- ⑭東から北に30分振る建物：SA2895
- ⑮東から北に1度振る建物：SA2408

⑯東から北に2度振る建物：SA2381

⑰東から南に1度振る建物：SA4034

⑱東から南に1度30分振る建物：SA2382

⑲東から南に2度振る建物：SA2444

⑳東から南に3度振る建物：SA4036

以上、20余りの建物方位がみられるが、大別するとA：①～③・⑰・⑱の北から東に0～1度30分振る建物、B：④～⑧・⑲・⑳の北から東に2度～4度振る建物、C：⑨～⑪・⑭～⑯の北から西に1～2度30分振る建物、D：⑫・⑬北から西に4～4度30分振る小型建物の四つに大別できる。

次に、建物の重複関係を加味して柱掘方・柱穴からの出土遺物をみていくと、SA2895からは口縁部内面に身受けのかえりを有する須恵器坏蓋と坏が出土しているが、かえりが退化していることから7世紀末であろう。

SB4030の掘方・柱穴からは、須恵器の坏蓋・有高台坏、土師器盤が出土しているが、坏蓋は口唇部が鳥嘴状を呈し、天井部も高い。有高台坏は高台が断面沓形を呈し、細身であることから8世紀初頭と考えられる。SB4035Aからも須恵器坏蓋が出土しているが、口唇部が鳥嘴状を呈し、天井部も高いこと及びSB4030の東側に柱筋を揃えて並列することからも同時期におけよう。

SB2435からは須恵器坏蓋・有高台坏が、SB2880からは須恵器有高台坏が出土しており、有高台坏の形態は8世紀初頭としたSB4030出土のものより後出することから8世紀前半とみられる。SB2900の南東隅柱掘方上層からは須恵器坏が出土しており、8世紀中頃とした北区域の南北棟建物SB2530と梁行がほぼ等しく（両者は20cmの差）、東側桁行を揃えて配置されることから、SB2900も同時期における。

SB2380Aからは須恵器坏蓋・有高台坏が、SB2383からは須恵器坏・鉢が、SB2415Aからは須恵器坏蓋・坏・盤及び土師器皿が、SB2420からは須恵器坏蓋・有高台坏が、SB4035Bからも須恵器坏蓋・有高台坏、土師器碗が出土している。何れの坏蓋も天井部は低めであり、SB2420出土の有高台坏（Fig.21-2）は底部端に高台を貼付しており、8世紀後半代の特徴を示す。なお、SB4035Bを切るピットからは8世紀後半の墨書土器（遺物編2 Fig. 8-2）が出土している。また、SB2380AとSB2415Aは北側桁行の柱筋を揃えて東西に配置されていることから、同時併存を裏付けるものである。

SA4034からは須恵器坏蓋が出土しているが、天井部が低平で、口唇部の立ち上がりもみられないことから8世紀末と考えられる。SB2380Bからは土師器碗の小片が出土しているが、SB2380Aに後出することから9世紀前半であろう。SA4053からは9世紀後半とみられる土師器の皿が出土している。SB4046・4047・4048からは、土師器碗・坏・皿、黒色土器碗が出土しており、建物規模も1間×2間と小型であることから10世紀中頃の築造と考えられる。

また、8世紀後半のSB2415Aに切られるSB2405は8世紀中頃で、SB2415Aを切るSB2410は9世紀前半頃と考えられる。同じく8世紀後半のSB2420に切られるSB2425は8世紀中頃で、それに切られるSB2400は8世紀前半頃の築造と考えておきたい。

以上を総合的に検討すると、中央区域に建物が出現するのは8世紀初頭で、区域の南西側に東西棟建物SB4030と4035Aが柱筋をそろえて並列する。また、区域の東側に位置する

南区域

南区域の建物群は、築地基礎とみられる遺構SX4045以南に存在する一群で、従来、SX4045南側の東西溝SD2015以南には官衙建物は存在しないとされてきたが、187次調査で確認されたSB4560・4561の存在はその考えを否定するものであり、建物群は朱雀門礎出土地点を東西方向に延長した線付近まで広がっていた可能性がでてきた。この一群の建物は上記区域の建物に比して規模が小さめで、建物どうしの切合いも割と少なく、相対的に新しい傾向が窺える。また、187次調査区の南側は御笠川の氾濫原となっており、建物は確認できていない。

建物群は朱雀門付近まで広がる

[重複関係]

(↔印：切合い (古→新), ⇔印：重複)

SB2005 ⇔ SB3832
 SK2478 ⇔ SB2460A → SB2460B → SB2486
 SX2480 → SB2461
 SD3818 ⇔ SB3815 ⇔ SB4561 → SD4566・4569, SK4574
 SB3820 ⇔ SA3816, SD3818
 SB3822 ⇔ SB3828, SD3818
 SB3824 ⇔ SD3825, SX3831
 SB4562 → SB4560 ⇔ SA4578
 ↘ SK4573
 ↗ SB3815
 SB4561 ⇔ SB4563 → SB4577

[建物方位]

- ①北を示す建物：SB2460A・2460B・2461・3832・4560
- ②北から東に1度振る建物：SB2486・3822・4562
- ③北から東に2度30分振る建物：SB3815・4561
- ④北から東に3度振る建物：SB4577
- ⑤北から東に3度30分振る建物：SB2005・3820
- ⑥北から東に5度振る建物：SB4563
- ⑦北から西に1度振る建物：SA3816
- ⑧東から北に1度振る建物：SA4578
- ⑨東から北に5度振る建物：SB4575
- ⑩東から南に1度30分振る建物：SB3828
- ⑪東から南に2度30分振る建物：SB3824

以上、11の建物方位がみられるが、大別するとA：①・②・⑩の北から東に0～1度30分振る建物、B：③～⑤・⑪の北から東に2度30分～3度30分振る建物、C：⑥の北から東に5度振る建物、D：⑦・⑧の北から西に1度振る建物、E：⑨の東から北に5度振る建物の5群に大別できる。

次に、建物の重複関係を加味しながら柱掘方・柱穴からの出土遺物をみていくと、SB3832からは口縁部内面に身受けのかえりを有する須恵器坏蓋と坏が出土しているが、かえりがしっかりしていることから7世紀後半とみられる。SB4562からは須恵器坏、土師器皿が出土しており、8世紀中～後半とした東西棟建物SB4560に切られることから8世紀前半におけよう。SA4578からは須恵器の坏蓋小片が出土しており、口縁端部の立ち上がりも高く、8世紀前半としたSB4562及び8世紀中～後半としたSB4560と重複することから8世紀中頃とすべきか。

SB2005・4560の柱掘方からは割と多量の土器が出土しており、SB2005からは須恵器坏蓋・

有高台坏・皿・壺，土師器坏蓋・坏・皿・甕・甗が，SB4560からは須恵器坏蓋・有高台坏・坏・皿・盤・甕，土師器坏・鉢・甕が，それに緑釉陶器の香炉蓋がある。須恵器坏蓋の特徴は口縁端部の立ち上がりが高いもの (Fig.19-1) もあれば，僅かなもの (Fig.19-3・4, 25-5・7) があり，有高台坏は胴部が直線的に開くもの (Fig.19-6・7) と内湾気味に立ち上がるもの (Fig.19-9, 25-8) があることから，SB2005・4560は8世紀中～後半とみられる。なお，SB4560出土の緑釉陶器の香炉蓋は9世紀中頃の所産と考えられ，混入品とみられる。

また，SA3816からは須恵器坏・皿，土師器蓋・椀・坏が出土しており，土師器坏蓋の口縁端部の立ち上がりは僅かなものであるが，8世紀後半～末としたSB3820と重複していることから，SB3820に先行する8世紀中～後半頃と考えておきたい。

SB2461からは須恵器有高台坏・鉢が，SB2486からは須恵器皿・椀が，SB4561からは須恵器坏蓋，土師器椀・皿・甕が出土しており，それらの土器は8世紀後半代の特徴を示す。

SB3820は梁行2間×桁行3間の小規模な建物であるが，比較的多くの土器が出土している。須恵器では坏蓋・壺蓋・坏・壺，土師器では坏蓋・坏・椀・皿・甕があり，須恵器坏蓋 (Fig.23-1・2) は口縁端部が屈曲し，低平であること。土師器椀 (Fig.23-10) の高台は断面三角形を呈することなどから8世紀後半～末と考えられる。また，SB3824出土の坏蓋は，口縁端部に立ち上がりを有するもの (Fig.22-27) と立ち上がりが僅かなもの (Fig.22-26・28) があり，当建物も8世紀後半～末とみられる。

SB2460Aからは須恵器坏蓋・有高台坏，土師器坏が，SB2460Bからは須恵器坏蓋・壺蓋，土師器坏が，SB3828からは須恵器坏蓋，土師器坏蓋が，SB4564からは須恵器坏蓋・坏が，SB4575からは須恵器坏蓋・甕，土師器坏が出土している。須恵器坏蓋の特徴は，口縁端部の立ち上がりが殆どないもの (Fig.21-9・22, Fig.22-32, Fig.24-35) で，これらは8世紀末の所産と考えられる。

SB4563からは須恵器坏蓋・有高台坏・甕，土師器椀・坏が出土している。土師器椀は底部の小片であるが，9世紀であろう。また，当建物の柱掘方は円形を呈し，掘方が方形の建物より後出すとみられ，柱掘方が方形を呈する8世紀後半のSB4561と重複していることからSB4563は9世紀前半頃と考えておきたい。

SB3815の掘方からは比較的多くの土器が出土している。須恵器では坏蓋・有高台坏・壺が，土師器では坏蓋・椀・坏・皿・甕があり，黒色土器椀，灰釉陶器皿もみられる。掘方からは黒色土器椀 (Fig.22-24) 及び灰釉陶器皿 (Fig.22-25) が出土していることと10世紀前半としたSB4577と並列することから，当建物も10世紀前半とみられる。

なお，SB4577はSB3815の2m南に位置し，同建物と南北に並ぶ。以前の報告では，SB3815とSB4577を同一の建物とみなして桁行11間の片廂建物と報告していたが，桁行が11間もある建物の類例に乏しいこと。また，東西溝SD4560の中にはSB3815の南側梁行中央の掘方とみられる穴があり，その2m南にもSB4577の北側梁行中央の掘方とみられる穴があることから別の建物と判断した。なお，SB4577からは須恵器壺蓋・甕，土師器椀・皿・甕，越州窯系青磁碗が出土しており，10世紀前半と考えておきたい。

以上を総合的に検討すると，南区域に建物が出現するのは7世紀後半頃で，区域の北西側に倉庫とみられる梁行2間×桁行2間の総柱建物SB3832が位置する。ただ，南区域においては，この倉庫と同時併存する掘立柱建物ないし堅穴住居は確認されていない。その後，8世紀前半

に区域の中央にSB4562が配されるが、規模は確定できていない。

当区域に建物が増加するのは8世紀中頃以降で、区域の北西側に東西棟建物SB2005が、中央にSB4560が占地する。8世紀後半には区域の北東側にSB2461が、その南にSB2486が、中央にはSB4561が、その隣にSB3824が配される。また、8世紀後半～末頃にはSB4561の北側にSB3820が築造される。

8世紀末には東側にSB2460ABが、北側にSB3828、南側にSB4564、西側にSB4575が築造され、区域の全域に配されるもののまとまりはみられない。なお、SB2460BはSB2460Aの改築と考えられるが、さほど時間差はなかったものと考えている。9世紀前半にはSB4561の後にSB4563が配される。その後、1世紀程の空白期を経た後、10世紀前半に入って区域の中央にSB3815・4577が2mの間隔を置いて南北に直列する。

この様に、南区域においては、建物群は明確にL字形やコ字形の配列をなさず、散在する状況をみせる。ただ、187次調査区以南は御笠川の氾濫原となっており、かつて建物が存在していた可能性はあるものの、現在では確認できない状況にある。

南区域の建物は散在

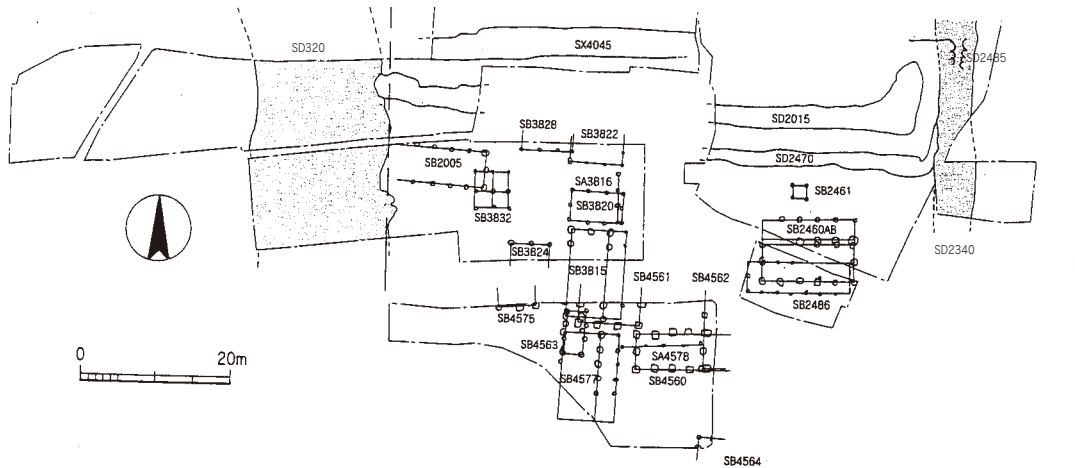


Fig.111 南区域の建物配置図 (1/1,000)

以上、不丁地区の建物を北・中央・南区域の3地区に分けて、それぞれの変遷をみてきたが、次に地区を通して建物変遷をみていく。なお、他の遺構を含めた官衙の変遷については、次節で述べることにする。

ここで問題となるのが建物の存続期間である。柱掘方出土の土器は、往々にして当該建物築造以前の土器が混入する事例があるが、総てがそうではないにしろ建物築造時のものとみられること。また、中央区域の北西側の一群 (SB2395・2400・2405・2410・2415・2420・2425) の7棟は相互に重複し、8世紀前半～9世紀前半の1世紀において次々に建替えられていること。これらのことを勘案すると、大凡ではあるが20～30年の存続期間があったものと考えられる。従って、仮に8世紀前半に築造された建物は、重複関係にある次の建物が出現しない限り、8世紀中頃までは存続した可能性が考えられる。

〔7世紀後半～8世紀初頭〕

不丁官衙の
萌芽

大宰府政庁Ⅰ期に該当し、不丁地区官衙の萌芽期である。北区域の北東端に梁行3間の南北棟建物SB2540とその南に柵SA2513が配され、中央区の南側に東からSA2895、SB2885・4035A・4030が東西に配列する。また、SB4030の約37m南に総柱倉庫SB3832が位置する。この段階では、不丁地区を南北に区切る遮蔽施設は設置されていないものの、北端のSB2540から南側のSB2885までは約99mの距離を有することから一連の施設とはみなし難い。ただ、次期の建物配列、空間利用等を見越して建物を配列した可能性は十分考えられる。

〔8世紀前半～末〕

建物群の展
開

大宰府政庁Ⅱ期（8世紀前半～10世紀中頃）の前半部分に該当する時期で、全域に建物が展開する。8世紀前半には、中央区に建物が進出し、南北棟建物SB2400・2445及び東西棟建物SB2435とでL字形配列を構成する。8世紀中頃にはL字形配列の内側（北西側）にSB2405・2425・2430の3棟がコ字形に配される。また、北区においては南北棟建物SB2530と東西棟建物SB2360、総柱倉庫SB2370がL字形に配される。

8世紀後半～末にはコ字形配列の跡地に四面廂建物SB2420を中心とする一群（SB2395・2415・4035B）が占地し、東西棟建物SB2380AとでL字形配列を構成する。この四面廂建物が占地する一画は、8世紀代において不丁地区官衙の中核部をなす。南地区においては、築地塀とみられる区画施設SX4050によって北側の中央区域と画され、建物は区域内において散在的に配され、北側とは異なる様相をみせる

〔9世紀前半～10世紀中頃〕

大宰府政庁Ⅱ期の後半部分に該当する時期で、板塀とみられるSA2451によって不丁地区が南北に分断され、北・中央・南の3区域を構成する。9世紀前半においては、前面広場と不丁地区を画していた南北溝SD2340の廃絶に伴い、門建物SB2388に接続する板塀で遮蔽していたとみられる。北区域では礎石建物SB370を中心にその南東に妻廂建物SB2355、南西に東西棟建物SB2365が逆T字形に配列する。中央区域では区域の北側にSB2380B、SB2410が左右に配される。これらの建物がいつの時期まで存続したかは明らかではないが、SB2355は9世紀中頃までの存続とみられる。礎石建物の存続時期も定かではないが、10世紀前半に開鑿される南側の東西溝SD2350の東側には出入り口があり、両者が関連するとすればこの頃まで存在していた可能性がある。

不丁官衙の
終焉

当該期には南区域に南北棟建物SB3715・4577が南北に配されるが、中央区には建物がみられず空白地帯となる。その後、不丁地区においては官衙建物は終焉し、藤原純友の乱後に築造されたとみられる小型建物SB2902・4046・4047・4048が井戸を伴い中央区域の南側に現れる。穿った見方をすると、大宰府政庁（Ⅲ期）の再建に関連する施設とみられる。この建物を以て不丁地区の建物は消滅へと至る。

註

- (1) 不丁地区遺構編では、64棟の建物を検出したとしていたが、本来大楠地区で報告すべき建物（SB2018）がカウントされており、不丁地区で検出した建物総数は63棟と訂正する。
- (2) 不丁地区遺構編では、身舎の梁行が3間規模の建物としてSB2366も含めていた。当建物は南側柱列を4個検出した程度であるが、南北棟建物と仮定すると南妻側3間以上となる。しかし、大半が調査区外にあり、梁行3間と確定できないことから除外した。

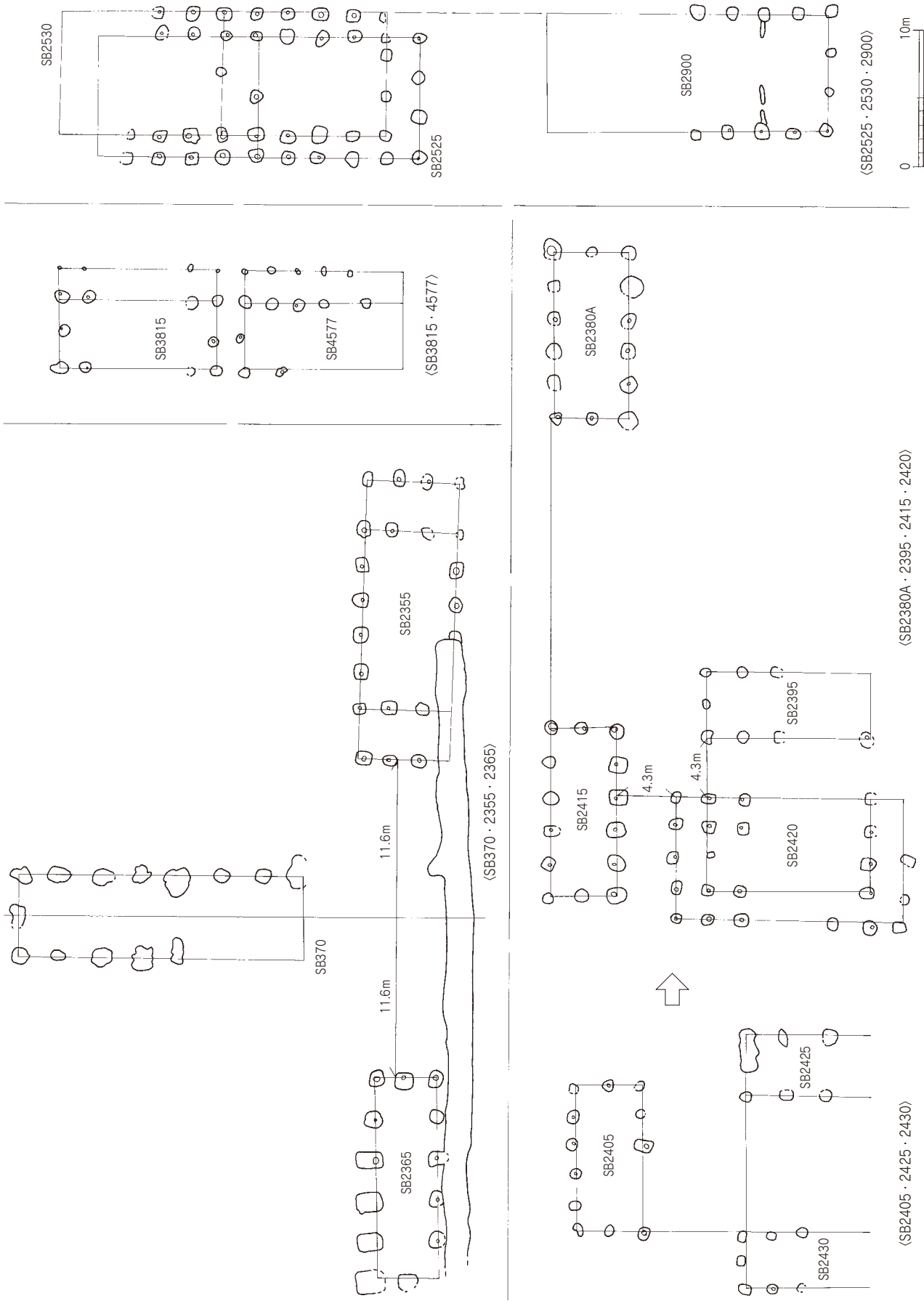


Fig.112 建物配列図 (1/400)

Tab.11 不丁地区建物・柵一覧表

No.	建物	次数	区域	棟方向	型式	梁行	桁行	柱間(梁)	柱掘方	時期	備考
				方位	構造	規模(m)	柱間(桁)	柱痕(m)	切り合い関係		
1	SB370	17	北	南北棟	礎石建物	2	7	3.0	方,1.6	9c前	・SD368・374は建物に伴う排水溝 ・礎石抜き取り
				N0°30'E	側柱	6.0	21.1	3.0	-		
2	SB381	17	北	東西棟?	掘立柱建物	2 α	1 α	2.1~2.25	方,1.0		・新規 ・SB370と重複
				N0°30'E	側柱	-	-	2.7	-		
3	SB386	17	北	南北棟	掘立柱建物	1 α	3	1.57	円,0.3	10c中?	・新規,2間×3間か
				N8°E	側柱	-	6.18	1.92~2.21	-		
4	SB2005	76	南	東西棟	掘立柱建物	2	4 α	2.22~2.45	円,0.6	8c中 ~後	・2間×5間か。掘方内に角礫・瓦片混入 ・SB3832と重複
				N3°30'E	側柱	4.67	-	2.23~2.6	0.25		
5	SB2018	76	-	東西棟	掘立柱建物	1 α	2 α	2.03	円,0.6		※大橋地区 ・溝状遺構と重複
6	SB2355	83	北	-	側柱	-	-	2.2~2.65	-	9c前	・妻廂,身舎3間×5間 ・SB2515,SD2350に切られる
				東西棟	掘立柱建物	3	7(5)	1.84~2.5	隅方,1.2		
7	SB2360	83	北	N0°E	二面廂	4.76	20.06	2.48~2.64	0.25	8c中	・2間×7間か ・SD2359,SK2358に切られる
				東西棟	掘立柱建物	1 α	7 α	2.48	隅方,1.3		
8	SB2365	83	北	N1°E	側柱	-	-	2.28~2.78	0.3	9c前?	・SD2350・SD2359に切られる
				東西棟	掘立柱建物	2	5	2.16~2.55	隅方,2.05		
9	SB2366	83	北	N1°E	側柱	4.41	14.72	2.95~3.05	0.22		
				東西棟?	掘立柱建物	-	3 α	-	隅方,1.1		
10	SB2370	83	北	N2°30'W	側柱	-	-	1.92~2.32	0.26	8c中?	・総柱建物2棟の一つ
				東西棟	掘立柱建物	2	3	2.1	隅方,1.0		
11	SB2380A	84	中央	N0°E	総柱	2.4	5.2	1.6~1.88	0.24	8c後	・SD2403は建物に伴う区画施設 ・SB2390を切る
				東西棟	掘立柱建物	2	5	2.7	楕円,1.3		
12	SB2380B	84	中央	N0°E	側柱	5.4	12.0	2.4	0.25	9c前	・SD2403は建物に伴う区画施設 ・SB2390→SB2380A→SB2380B
				東西棟	掘立柱建物	2	5	2.7	不方,1.0		
13	SB2383	84	中央	N0°E	側柱	5.4	12.26	2.33~2.58	0.25	8c後	・倉庫か ・SA2384・2386,SD2403と重複
				南北棟	掘立柱建物	1	2	4.65	隅方,0.9		
14	SB2385	84	中央	N2°E	側柱	4.65	5.07	2.45~2.53	0.22	9c中?	・新規 ・SD2419,SK2453に切られる
				南北棟	掘立柱建物	1 α	2 α	2.18	円,0.5		
15	SB2388	84	中央	N0°E	側柱	-	-	2.32~2.38	0.08	9c前?	・門建物 ・SX2336に切られる
				南北棟	掘立柱建物	1	3	3.0	円,0.7		
16	SB2390	84	中央	N1°30'W	側柱	3.0	8.77	2.88~2.96	-	8c前?	・片廂,身舎2間×2間,倉庫か ・SB2390→SB2380A→SB2380B→SD2391
				東西棟	掘立柱建物	2	3(2)	2.15	隅方,1.0		
17	SB2395	84	中央	N0°E	片廂	4.2	6.3	2.1~2.16	-	8c後?	・SB2425→SB2400→SB2395
				南北棟	掘立柱建物	2	2 α	2.35~2.46	隅方,0.9		
18	SB2400	84	中央	N2°30'W	側柱	4.81	-	2.54~2.82	0.18	8c前?	・妻廂,身舎2間×5間か ・SB2400→SB2425→SB2395
				南北棟	掘立柱建物	2	5 α	2.31~2.6	隅方,1.5		
19	SB2405	84	中央	N2°30'E	片廂	4.91	-	2.18~2.4	0.2	8c中?	・SB2405→SB2415AB→SB2410
				東西棟	掘立柱建物	2	5	2.35~2.46	隅方,1.0		
20	SB2410	84	中央	N1°W	側柱	4.75	10.68	1.92~2.38	0.2	9c前?	・扁平な石を礎盤として使用 ・SB2405・2415ABを切る
				東西棟	掘立柱建物	2	5	2.36~2.52	隅方,1.0		
21	SB2415A	84	中央	N0°E	側柱	4.75	10.68	1.98~2.66	0.18	8c後	・SB2415A→SB2415B→SB2410
				東西棟	掘立柱建物	2	5	-	隅方,1.4		
22	SB2415B	84	中央	N2°E	側柱	4.72	12.1	-	-	9c前?	・身舎2間×5間,柱押さえに礫を充填 ・SB2405→SB2415AB→SB2410
				東西棟	掘立柱建物	3(2)	5	2.32~2.38	円,1.0		
23	SB2420	84	中央	N2°E	片廂	7.45	12.06	2.25~2.65	0.2	8c後	・身舎2間×5間 ・SB2425を切り,SA2444に切られる
				南北棟	掘立柱建物	4(2)	7(5)	2.3	隅方,1.1		
24	SB2425	84	中央	N2 30' E	四面廂	8.8	16.8	2.22~2.35	0.28	8c中?	・SB2400→SB2425→SB2420
				南北棟	掘立柱建物	2	2 α	2.1	不方,1.0		
25	SB2430	84	中央	N1°E	側柱	4.25	-	2.8~3.1	0.2	8c中?	
				南北棟	掘立柱建物	2	2 α	1.97~2.07	隅方,0.8		
26	SB2435	84・147	中央	N0°E	側柱	4.04	-	1.92~2.22	0.24	8c前	・SA4036・4053に切られ, SB4030・4035AB・4070と重複
				東西棟	掘立柱建物	3	8	1.95~2.36	隅方,1.3		
27	SB2445	84	中央	N1°E	側柱	6.4	17.0	1.73~2.45	0.28	8c前?	・SA2451・2452に切られ,SE2434・ 2436と重複
				南北棟	掘立柱建物	3	7 α	2.46~2.76	隅方,1.2		
28	SB2450	84	北	N0°E	側柱	7.84	-	2.34~2.6	-	9c前?	・門建物,SA2451に接続
				東西棟	掘立柱建物	1	3	2.4	不方,0.7		
				N0°E	側柱	2.7	8.44	2.4	-		

No.	建 物	次数	区域	棟方向	型式	梁行	桁行	柱間(梁)	柱掘方	時期	備 考
				方位	構造	規模 (m)	柱間 (桁)	柱痕 (m)	切り合い関係		
29	SB2460A	85	南	東西	掘立柱建物	3(2)	5	2.6	隅方,1.2	8c末	・身舎2間×5間,礎盤あり ・SB2486に切られ,SK2478と重複
				N0°E	片廂	7.93	12.2	2.34~2.52	0.18		
30	SB2460B	85	南	東西棟	掘立柱建物	2	5	2.6	隅方,0.7	8c末	・SB2460Aの建替え
				N0°E	側柱	5.2	12.2	2.32~2.5	0.3		
31	SB2461	85	南	東西棟?	掘立柱建物	1	1	1.9	円,0.5	8c後	・竪穴住居か ・SX2480を切る
				N0°E	側柱	1.9	1.9	1.9	—		
32	SB2486	85	南	東西棟	掘立柱建物	2	6 α	1.96~2.0	円,0.4	8c後	・2間×7間か ・SB2460ABを切る
				N1°E	側柱	3.96	—	1.8~2.0	—		
33	SB2515	87-90	北	南北棟	掘立柱建物	2	4	2.1~2.3	隅方,0.9	9c中 ~後	・SB2355を切り,SB2520と重複
				N3°E	側柱	4.4	8.94	2.12~2.29	0.3		
34	SB2520	87-90	北	東西棟	掘立柱建物	2	5	2.24~2.4	隅方,0.8	9c前?	・SB2515と重複し,SX2531に切られる
				N0°E	側柱	4.58	10.82	2.1~2.38	0.2		
35	SB2525	87-90	北	南北棟	掘立柱建物	3	9 α	2.83~2.99	隅方,1.0	8c後	・3間×10間か,間仕切りの柱穴あり ・SB2530・2540,SA2513と重複
				N0°30'E	側柱	8.78	—	2.05~2.5	0.25		
36	SB2530	87-90	北	南北棟	掘立柱建物	3	8 α	2.9	隅方,0.6	8c中	・3間×10間か,間仕切りの柱穴あり ・SB2525・2540,SA2513と重複
				N1°E	側柱	8.76	—	2.24~2.46	0.2~0.3		
37	SB2535A	87-90	北	南北棟	掘立柱建物	1 α	6 α	—	隅長,1.2	8c中?	・2間×7間か,柱抜き取り
				—	側柱	—	—	—	—		
38	SB2535B	87-90	北	南北棟	掘立柱建物	1 α	6 α	2.47	不方,1.1	8c後	・SB2535の建替え,2or3間×7間か
				N2°30'E	側柱	—	—	2.28~2.43	0.2		
39	SB2540	87-90	北	南北棟	掘立柱建物	3	1 α	2.08~2.3	隅長1.04	8c初	・SB2525・2530と重複
				N1°E	側柱	6.5	—	2.06	0.2		
40	SB2880	98	中央	?	掘立柱建物	1 α	—	—	隅方,1.1	8c前	・2間×3間総柱倉庫か
				?	側柱	—	—	—	—		
41	SB2885	98	中央	東西棟	掘立柱建物	2	3 α	1.53~1.77	不方,0.7	8c初?	・2間×5間か
				N4°E	側柱	3.3	—	1.58~1.9	0.16		
42	SB2900	98	中央	南北棟	掘立柱建物	3	4 α	2.56~3.06	隅方,1.2	8c中	・木製礎盤,間仕切り溝あり
				N0°E	側柱	8.56	—	2.36~2.5	0.22		
43	SB2902	98	中央	東西棟	掘立柱建物	1	2	1.6	円,0.45	10c?	・SX2480と重複
				N2°E	側柱	1.6	4.4	2.01~2.42	—		
44	SB3815	129	南	南北棟	掘立柱建物	3(2)	6	2.4~2.74	円,0.7	9c前	・身舎2間×6間 ・SD3818と重複
				N2°30'E	片廂	5.15	11.72	1.85~1.92	0.19		
45	SB3820	129	南	東西棟	掘立柱建物	2	3	1.89~2.09	円,0.5	8c後 ~末	・SA3816,SD3818と重複
				N3°30'E	側柱	3.98	6.86	2.13~2.47	0.18		
46	SB3822	129	南	南北棟	掘立柱建物	1 α	3	1.68	円,0.4	8c後?	・SB3828,SD3818と重複
				N1°E	側柱	—	6.95	2.22~2.4	—		
47	SB3824	129	南	南北棟	掘立柱建物	2	?	2.36~2.73	円,0.7	8c後 ~末	・SD3825,SX3831と重複
				E2°30'S	側柱	5.09	—	—	—		
48	SB3828	129	南	東西棟	掘立柱建物	?	3	—	円,0.48	8c末	・SB3822と重複
				E1°30'S	側柱	—	6.7	1.98~2.4	—		
49	SB3832	129	南	南北棟	掘立柱建物	2	2	1.94~2.3	不円,0.7	7c後半	・総柱倉庫 ・SB2005と重複
				N0°E	総柱	4.56	4.9	2.3~2.64	—		
50	SB4030	147	中央	東西棟	掘立柱建物	2	3 α	2.28~2.62	隅方,1.1	8c初	・旧SB4030A,2間×5間か ・SB4070に切られ,SB2435と重複
				N3°30'E	側柱	4.9	—	2.3~2.52	0.25		
51	SB4035A	147	中央	東西	掘立柱建物	2	5	2.4	隅方,0.8	8c初	・SB2435・4048,SA4053と重複
				N2°E	側柱	4.86	12.14	2.1	—		
52	SB4035B	147	中央	東西棟	掘立柱建物	3(2)	5	2.4	隅方,0.8	8c後	・SB4035Aの建替え,身舎2間×5間 ・SB2435・4048,SA4053と重複
				N2°E	片廂	7.4	11.8	2.36	0.22		
53	SB4040	147	中央	南北棟	掘立柱建物	2	1 α	1.3~1.93	隅方,0.9	8c前?	・SX4050→SB4040→SA4036,SD4037
				N3°E	側柱	3.23	—	1.6~2.02	0.2		
54	SB4046	147	中央	南北棟	掘立柱建物	1	2	2.0~2.21	円,0.5	10c中	・SB4047とでL形に配列 ・SK4056と重複
				N4°30W	側柱	2.21	3.41	1.65~1.76	—		
55	SB4047	147	中央	東西棟	掘立柱建物	1	2	2.28~2.37	円,0.4	10c中	・SB4046とでL形に配列 ・SX4065と重複
				N4°30'W	側柱	2.37	3.94	1.68~2.13	—		
56	SB4048	147	中央	東西棟	掘立柱建物	1	2	2.13~2.36	円,0.5	10c中	・SB4046・4047と一連の建物 ・SB4035ABと重複
				N4°W	側柱	2.35	4.36	2.14~2.18	—		
57	SB4070	147	中央	東西棟	掘立柱建物	2	2 α	2.4~2.46	隅長,0.7		・旧SB4030B,2間×5間か ・SB4030を切り,SB2435と重複
				N2°30'E	側柱	4.86	—	2.37~2.4	0.2		

第Ⅵ章 遺構と遺物の検討

No.	建物	次数	区域	棟方向	型式	梁行	桁行	柱間(梁)	柱掘方	時期	備考
				方位	構造	規模(m)	柱間(桁)	柱痕(m)	切り合い関係		
58	SB4560	187	南	東西棟	掘立柱建物	2	4 α	2.3	方,0.9	8c中 ~後	・SD4567は建物に伴う雨落ち溝 ・SB4562を切り,SA4578と重複
				N0°E	側柱	4.63	-	2.28~2.51	0.25		
59	SB4561	187	南	東西棟?	掘立柱建物	1 α	3	2.7	方,1.0	8c後	・2間×3間か ・SD4566・4569,SK4574に切られる
				N2°30'E	側柱	-	8.14	2.58~2.88	0.2		
60	SB4562	187	南	南北棟?	掘立柱建物	?	3 α	-	方,0.8	8c前	・SB4560,SK4573に切られる
				N1°E	側柱?	-	-	2.4	0.22		
61	SB4563	187	南	南北棟	掘立柱建物	1	3	2.7	円,0.6	9c前	・花崗岩割石を礎盤に使用 ・SB3815・4577,SD4566に切られる
				N5°E	側柱	2.7	5.43	1.58~2.07	-		
62	SB4564	187	南	南北棟?	掘立柱建物	1 α	1 α	-	円,0.6	8c末	
				?	側柱?	-	-	-	0.22		
63	SB4575	187	南	南北棟?	掘立柱建物	?	2	-	方,1.0	8c末	・SD4566を切る
				E5°N	側柱?	-	4.94	2.16~2.78	0.24		
64	SB4577	187	南	南北棟	掘立柱建物	3(2)	5 α	2.5	円,0.8	10c前	・身舎2間×6間か ・SB4563を切る
				N3°E	片廂	7.3	-	1.8~2.32	-		

方位は座標北(第二座標系)による。*柱掘方-隅方:隅丸方形,隅長:隅丸長方形,不方:不整形

No.	柵	次数	区域	柱列方向	方位	間数	柱間(m)	柱掘方	時期	備考
						規模(m)		柱痕(m)		
1	SA318	14	北	南北	N0°E	2 α	2.68~2.84	隅丸長方形		・SD368・374は建物に伴う排水溝 ・礎石抜き取り
						5.5		0.8		
2	SA2354	83	北	東西	E1°N	3 α	2.06~2.6	隅丸方形	9c前?	・L形
						7.0		0.7		
3	SA2367	83	北	東西	E11°30'S	5 α	1.88~2.26	円形		・新規 ・SB2365と重複
						10.26		0.3		
4	SA2381	84	中央	東西	E2°N	2 α	2.52	不整形		・旧SB2385。根固めに礫・瓦を使用
						2.52		0.8		
5	SA2382	84	中央	東西	E1°30'S	4 α	2.15~2.53	不整形	9c中?	・旧SB2385,根石有り
						9.42		0.9		
6	SA2384	84	中央	南北	N3°30'E	2 α	2.06~2.48	隅丸方形		・新規 ・SD2403を切り,SB2383と重複
						4.54		0.8		
7	SA2386	84	中央	南北	N1°30'E	5 α	1.46~1.9	不整形		・SD2403に切れ,SB2383と重複
						8.3		0.7		
8	SA2408	84	中央	東西	E1°N	4 α	2.34~2.5	円形	8c後?	・SB2380B関連施設 ・SD2391と重複
						9.65		0.5		
9	SA2444	84	中央	東西	E2°S	5 α	2.23~2.47	円形		・新規 ・SB2420を切り,SB2400・2425と重複
						11.86		0.5		
10	SA2451	84	北	東西	E1°S	8 α	2.7~2.85	円形		・門建物2450に接続
						21.97		0.7		
11	SA2452	84	北	東西	E2°N	11 α	2.68~3.52	円形		・SB2445と重複
						33.7		0.5		
12	SA2505	14補	北	南北	N0°E	5 α	2.28~2.47	隅丸方形		・SK2508と重複
						14.38		0.65		
13	SA2513	87・90	北	南北	N0°30'E	5 α	1.75~3.34	隅丸方形	7c末	・SB2525・2530と重複
						12.83		0.95		
14	SA2522	87・90	北	東西	E0°30'N	4 α	2.1~2.38	隅丸方形	8c中	・SB2520関連施設
						8.86		0.5		
15	SA2894	98	中央	南北	N2°E	1 α	-	隅丸長方形		
						2.24		0.85		
16	SA2895	98	中央	東西	E0°30'N	1 α	-	隅丸方形	7c末	・建物掘方か
						3.08		0.9		
17	SA3816	129	南	南北	N1°W	3 α	2.03~2.36	円形	8c末	・SD3818, SX3813と重複
						6.53		0.5		
18	SA4034	147	中央	東西	E1°S	2	1.63~1.8	不整形円形	8c末	・SB2435と重複
						3.85		0.8		
19	SA4036	147	中央	東西	E3°S	11 α	2.26~2.46	隅丸方形		・SB2435・4040を切る
						25.86		0.5		
20	SA4053	147	中央	東西	N0°E	3	2.04~2.48	円形	9c後	
						6.8		0.4		
21	SA4578	187	南	東西	E1°N	3 α	2.42~2.53	円形	8c前?	・新規 ・SB4560・4562と重複
						7.43		0.5		

2) 区画施設 (Fig.113, Tab.13)

①官衙境界の成立

不丁地区官衙は、東西の境界溝であるSD2340とSD320によって限られている。官衙の東を限るSD2340は政庁中軸線から心々で約102.4mの位置にある。この東限溝SD2340から西限溝SD320との距離は、溝心々で約87m、溝肩同士で約82mとなる。

官衙の境界溝

東限溝SD2340は、南北約140mの範囲にわたって確認している。北側の87・90次調査では、幅5.5～6.0mで深さ1.25m、南側の124次では幅5.2mで深さ1.55mある。溝底の標高は87・90次で32.36m、124次で30.40mとなり、1.96mの標高差を持って南に傾斜している。溝の堆積は、大きく上層・中層・下層に分かれ、地区によって粗密の差はあるが、最下層に流水を示す砂層堆積があり、中層（地区によっては下層）に滞水を示す粘質土層があり木簡が出土している。

85次調査区では、下層より天平六年銘木簡が出土し、上層堆積層の埋没年代は8世紀中頃までと捉えられる。そして、その上位に暗渠SX2485が配置される。87・90次調査区においても、87次黒灰色粘質土（青灰色粘質土）や90次中層黒褐色粘質土より木簡が出土している。この調査区でもSD2340埋没後に石組溝SD2335が造営され、溝埋没の下限は8世紀中頃までと理解される。なお、溝の開削時期を推定しうる遺物が87・90次下層茶褐色砂層より出土している（IV・Fig47）。出土土器には、上層と関連する8世紀第1四半期を示すものもあるが、7世紀第3～4期に特徴的な須恵器蓋にかえりを有するものがある。SD2340が、98次調査において確認された7世紀第3～4四半期を示す流路SX2480を切ることを踏まえれば、この溝の開削は8世紀前後とみられる。

西限溝SD320は、南北約160mの範囲にわたって確認している。溝の幅については、14次調査では、約13.5m、南端で16.0m、104次（上面）では約16～17m、76次では11.0mであり、本来13m前後の規模であったと考えられる。政庁中軸線から溝心々で約189.4m（640尺）に位置する。溝の堆積層は、大きく上層・中層・下層に分かれる。流水を示す最下層中には、14次調査で8世紀後半を主体とする土器や老司Ⅱ式軒先瓦や鴻臚館式軒先瓦が出土しているが、9世紀末頃の土器類もみられる（IV・Fig28）。このような遺物の出土状況は14次補足・76次調査でもみられ（IV・Fig32・37）、溝の堆積状況からだけでは開削時期を明確にできない。現状では、最下層に8世紀後半代の遺物を一定量含むことから、遅くとも8世紀後半代には機能していたとみられる。

政庁前面の官衙区画の配置から捉え直すと、日吉官衙を限る西境界溝SD4660とSD2340、SD320が約90mの距離で割り振られる（『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅰ』）。これは、Ⅱ期政庁中軸線とは西に5mずれる8世紀前後の条坊造営の区割り案から導きだされたものである（井上2011）。また、不丁地区の建物がこのSD320に規制される形で建物が配置されていることは確かであり、8世紀代の早い時期にSD2340と併存したとみて良いであろう。

②区画施設の展開

不丁地区官衙の区画施設における大きな画期は、東限溝SD2340の廃絶後その上部に構築した石組溝SD2335や暗渠SX2345・2485、地区内を限る東西溝SD2015やSD2470、礫敷遺構SX4045等、新たな区画施設の造営である。

新たな区画施設

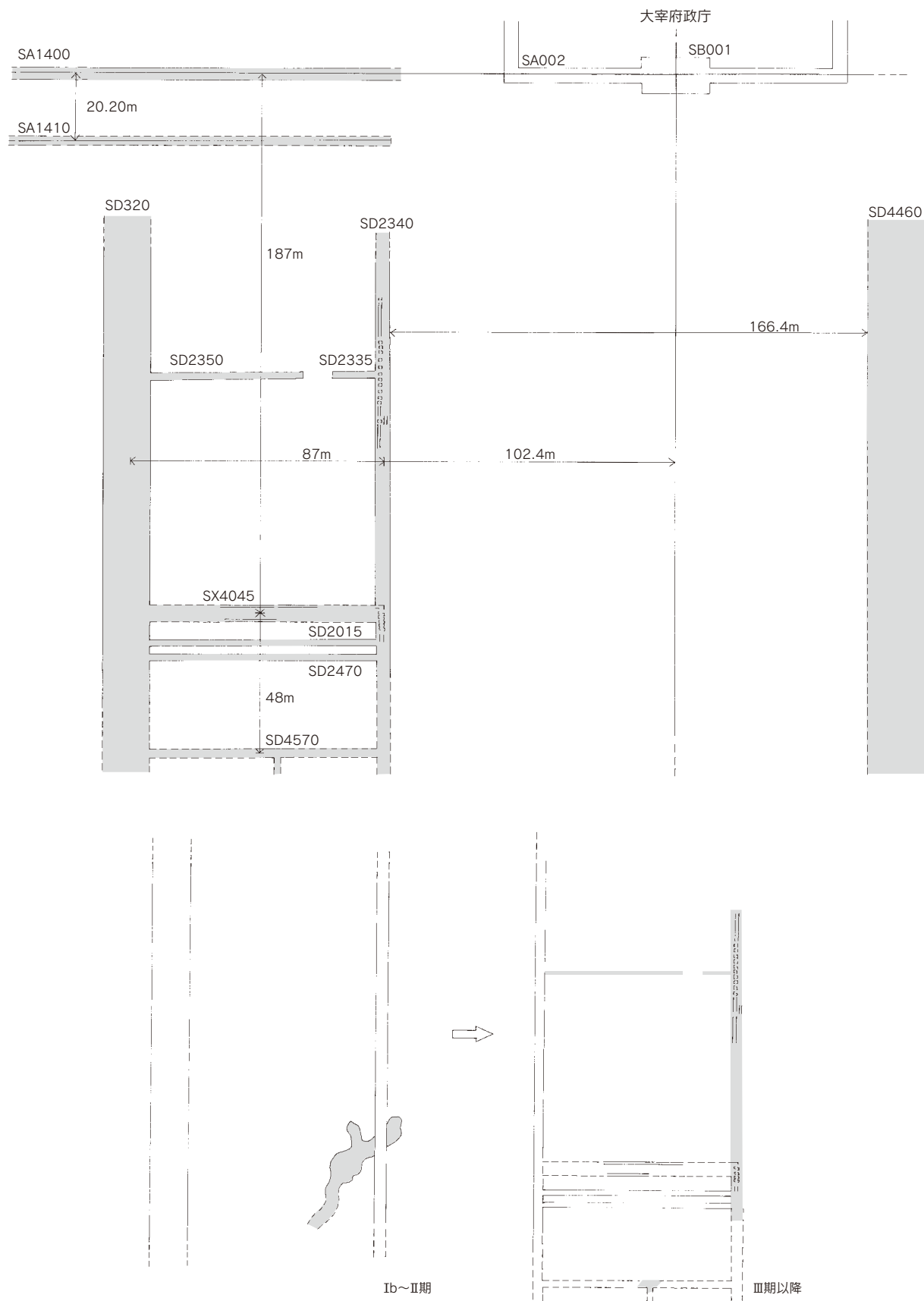


Fig.113 不丁地区の位置と規模 (1/2,000)

83・87次調査で確認した石組溝SD2335は、長さ28mに及ぶ。溝幅0.5m、深さ0.4m、掘方基底部に無文磚を置き、隙間を目地でふさいで自然礫を積み上げており、本来は溝底も石敷きであったとみられる。また、溝南端付近に設置された暗渠の木樋は長さ3.20m、径0.50mで丸太材を半裁している。なお溝全体の北側は途切れ、本来全てが石組であったか不明である。

一方、南側の85次調査ではSD2340廃絶後に石組の暗渠SX2485を造営している。自然石を3段積んだ高さ0.4m、溝幅0.4mの規模で、北端が西側に折れる。この石列の西側延長には、南肩筋を併せた東西溝SD2471があり、溝内に自然礫を数個配置している。さらに、この溝の西側には礫敷遺構SX4045がある。谷地形の谷部を塞ぐように礫を敷いており、基底部幅は3.8～4.0m程度ある。この基底部の南北端には溝SD4038・4039が並走しており、石列を配している。SD2471は、この礫敷遺構の北側溝SD4038に繋がっている。また、このSX4045の東延長に位置する地点、ちょうどSX2485の西側には土壇状遺構SX2487があり、構築物の基礎が想定される。

大宰府史跡において、石組溝と木樋を使用した暗渠は、蔵司地区54次調査でも確認している。築地SA1400下位に埋設された暗渠SX1390・1385であり、後者については丸太材を半裁して石組暗渠の下部に設置している点などSD2335と構造上も酷似する。また、SD2335の東側には、SD2340廃絶後に設置された同時期とみられる丸太材を削り抜いた木樋の暗渠SX2345がある。この状況からSD2340廃絶後にこの付近を角とした東西南北の築地等の構築物が想定される。また一方、南側のSX2485から西側へ延びるSX4045は、東西に並走する溝が設置された基壇状の遺構であり、東側では土壇状遺構のSX2487と繋がる可能性が高い。両側に溝を配した施設とすると、道路あるいは築地が想定される。道路とすると府庁域あるいは条坊域を含めても幅4m前後の「道幅」に対して地業は入念で肩部に石列を配する点も特異である。大宰府府庁域内で確認された基壇状の遺構には、政庁内の回廊や築地、蔵司地区の築地がある。築地基礎地業には、規模の差こそあれ礫を入れ込んで積土しており、基壇幅は前面回廊西南隅で4.4m、後面東北隅で3.3m（Ⅱ期）、3.6m（Ⅲ期）である。

以上のような状況から、SX4045は東西方向の築地になる可能性が高いと考えられる。これら検出遺構を整理すると、SD2340廃絶後にSX4045を南端とし、SD2335の途切れる箇所を先端とする南北約72m（240尺）の範囲にそれぞれ築地等の東西に延びる圍繞施設が想定される。北側の境界は、政庁南面築地から約116m（390尺）となるが、この間に東西方向の区画施設が存在した可能性は高い。SD2340との関係や出土土器からみると、この区画施設は8世紀後半に造営されたとみられる。

東西方向の
築地

この時期の区画施設には、溝SD2015とSD2470がある。検出状況から、両溝は8世紀後半頃に設置され、遅くとも9世紀前半頃には埋没していったとみられる。両溝の距離は心々で約5m、SX4045からSD2470までは約15m、SD2015までは約10mある。このうち、SX4045からSD2015の間に建物が確認できない状況から、官衙を往来する道路（条路）を想定して良いかもしれない。いずれにしても、この付近で不丁地区官衙施設の境界的役割を持つ区画が存在したとみることができる。

溝による
区画

SD2470南側では、東西溝SD4570と直交するSD4571・4572がある。東西溝SD4570の開削は、出土遺物からみると9世紀前半頃である。ただし堆積土出土資料をみると、幾度かの

修復を経ながら9世紀代を中心に機能した溝であることが分る。また、石列や無文埴によって護岸を構築する技術的特徴も8世紀後半以降の作業と言える。東西溝SD4570とSD2470は心々で約35.5mある。

以上のように、SD2340廃絶以降、不丁地区官衙は大きく3つに区画されたとみられる。

③区画施設の終焉

発掘調査で確認した不丁地区官衙の遺構の多くは下部構造の一部であり、築地などの立体構造物の痕跡は僅かである。SD2340廃絶後に構築されたとみられる構造物の年代の下限は不明だが、その一部であるSD2335を切る東西溝SD2350がある。不丁地区官衙の範囲に亘って東西に掘られた溝状遺構で区画を意図したものであることは確かである。ただし、東半部で一部5.6mの間隔で途切れる箇所があり、またSB2355・2365等を掘削している。さらに埋土をみると、黄色や黒褐色の粘土がブロック状に入っており人為的に埋め戻されている。出土遺物をみると、9世紀後半～10世紀前半に比定される。このような状況は、不丁地区官衙の最終的な廃絶期に関する遺構の可能性が高い。

人為的に埋め戻した溝

一方、不丁地区で長期間に亘って機能した区画施設として、西限溝SD320がある。開削の上限は推定の域を出ないが、徐々に埋没していったことが堆積状況から確認できる。下層の砂層が9世紀末頃であり、その上層に堆積する腐植土は10世紀前半から中頃である。このうち、14次補足調査では溝中位において10世紀中頃の整地層が確認された。そして、この時期以降、次第に埋没していき、11世紀前後には完全に埋没したとみられる。76次調査では、このSD320廃絶後に開削された南北溝SD2010がある。SD320に軸線を併せており、溝埋没年代が11世紀後半から12世紀初め頃で、SD320埋没後僅かに痕跡を留めた溝であったとみることができるとみられる。

このような状況から、不丁地区官衙は8世紀後半に東西に亘って遮蔽する区画施設が造営されて施設が細分されたが、遺構内の堆積状況や遺構そのものの埋没状況を見る限り、各施設も9世紀後半以降、段階的な終焉を迎えたとみられる。

④区画施設の課題

不丁地区官衙の造営の開始は、7世紀第4四半期に位置づけられる流路SX2480や土坑SK388の廃絶以降であり、概ね8世紀前後とみられる。この頃に、本地区を限るSD2340とSD320が開削されたとみられる。その後、8世紀中頃の天平年間にSD2340を廃絶して、東西に亘る築地等の遮蔽施設を配置する。発掘調査では、その下部構造に関するSX4045やSX2485、SD2335を確認した。さらに、施設同士を限る区画施設としてSD2015や2470などの溝が開削される。また、官衙の南端に近い東西溝SD4570も同時期に開削の上限が求められる。この8世紀後半は、中央区域で四面廂建物SB2420を中心とする建物配置をとるなど不丁地区における施設造営の大きな画期となっている。そして出土遺物からみる限り、9世紀前半頃までは確実に施設は継続したようである。この画期が、8世紀以降の継続的な施設造営事業の結果であるのか、さらには政治的動向によるものかについては注意する必要がある。その一方で、9世紀後半以降になると、SD2350など区画施設の造営は限られており、限定的な建物配置をとった可能性が高いが、SD320中の出土遺物を見る限り、官衙における活動は継続していることは確かである。この点は遺構の残存状況とも関わる問題でもある。なお、建物施設を併せた総合的な時期的変遷に関する具体的な検討は、本章の4)で行うこととする。

Tab.12 不丁地区区画施設(溝)一覽表

※ IV Figは「遺物編1」

	次数	層位	時期	掲載図	遺物の時期	遺構の所見・切り合い等			
境界溝									
SD	320	14	灰色砂礫	不Ⅳa	9c 末	IV Fig28	8c 後～末	最下層 ※流水層 木簡出土 溜り腐植土で木簡出土「日置マカ」	
			灰白砂	不Ⅳa	9c 末	IV Fig28	8c 後～9c 末		
			黄褐粗砂	不Ⅴ	10c 中	IV Fig29	10c 前～後	中層下部 流水層	
			腐植土		10c 中	IV Fig29	9c 末～10c 中	中層 滯水層 題箋・「烏賊」木簡	
			黒色砂		10c 中	IV Fig29	9c 末～10c 中	中層 流水層 緑釉陶器碗	
		暗灰・青灰粘質土	10c 後		IV Fig29	10c 前～後	中層 滯水層		
		黒褐色土	10c 後		IV Fig29	10c 前～後	中層 滯水層		
		灰・青・灰黒粘質土	10c 後	IV Fig30	10c 前～後	中層 滯水層			
		黒灰色粘質土	10c 後	IV Fig30	10c 前～後	中層 滯水層			
		淡褐色砂	不Ⅴ	10c 後	IV Fig30	10c 前～後	上層下部 流水層		
	茶褐色砂	—		IV Fig30	—	上層 流水層 遺物は古い			
	灰砂・淡灰砂	不Ⅵ	11c 前後	IV Fig30	10c 末～11c	上層			
	14 補	暗灰・暗褐色砂	不Ⅵ	11c 前後	IV Fig30	10c 末～11c	最上層		
		暗褐色土		11c 前後	IV Fig30	10c 末～11c			
		最下層砂	不Ⅳa	9c 末	IV Fig31-32	8c 後～9c 末	最下層 流水層		
		下層腐植土		—	IV Fig32	—	下層 滯水層 遺物は古い		
		中層腐植土	不Ⅳ b	9c 末	IV Fig33	9c 末～10c	中層 滯水層		
	中層黒色粘質土	10c 中		IV Fig33-34	9c 末～10c 中	中層 滯水層 黄釉彩水注・越州窯系青磁碗			
	中層粗砂	不Ⅴ	10c 中	IV Fig35	9c 末～10c 中	中層 流水層			
	中層整地	不Ⅴ	10c 中	IV Fig35	9c 末～10c 中	中層埋没時の整地・上層の境界			
76	上層炭層	不Ⅴ	10c 後	IV Fig36	10c 前～後	上層			
	上層粘質土		11c 前後	IV Fig36	10c 末～11c	上層			
	上層砂・粘土	不Ⅵ	11c 前後	IV Fig36	10c 末～11c	上層			
	最下層砂	不Ⅳa	9c 末	IV Fig37	8c 後～9c 末	最下層 流水層 灰釉陶器碗・緑釉陶器碗			
	腐植土 D	不Ⅳb	10c 前	IV Fig38	9c 末～10c 前	中層下部 滯水層 ・白磁托・越州窯系青磁碗			
104	砂層堆積	不Ⅳb	—	IV Fig39	—	中層 滯水層			
	下層腐植土		10c 前	IV Fig39	10c 前	中層 滯水層 越州窯系青磁唾壺			
	下層暗灰色砂礫	10c 前	IV Fig39	10c 前	中層 流水層				
	上層腐植土 A	不Ⅴ	10c 後	IV Fig39	10c 前～後	上層 滯水層			
	上層灰色砂礫		10c 後	IV Fig40	10c 前～後				
最上層灰色砂	10c 後	IV Fig40	10c 後						
茶灰土	不Ⅵ	11c 後	IV Fig40	11c 後	溝を覆う層 ※SD2010 (11c 後～12c) に切られる				
SD	2340	83	暗茶色土	不Ⅵ	—	IV Fig40	—	トレンチ調査, 層位分けず	
			最上層		—	IV Fig40	—		
		84	上層のみ	不Ⅱ	8c 中	IV Fig43	8c 前～中	トレンチ調査, 上層検出	
		85	下層	不Ⅱ	8c 中	IV Fig44	8c 前～中	上下層に分ける	
			上層		8c 中	IV Fig46	8c 前～中	青磁・黒色土器 A 類椀有注意	
		85	最上層	9c 前	IV Fig46	8c 中～9c	灰釉陶器壺・椀有		
	87・90	下層茶褐色砂	不Ⅰ b	8c 前	IV Fig47	7c 後～8c 前	7 世紀代須恵器多い		
		87 中層青灰暗粘質土	不Ⅱ	8c 中	IV Fig47-48	8c 前～中	木簡出土層に対応 ※黒色土師器有		
		90 中層青灰粘下層腐植土		8c 中	IV Fig48	8c 前～中			
		90 中層青灰色粘質土		8c 中	IV Fig48-50	8c 前～中	土師器類僅か		
90 中層黒色粘質土	8c 中	IV Fig50-51		8c 前～中	土師器類僅か				
87・90	最上層	8c 中	IV Fig51	8c 前～中	土師器類僅か				
98	最下層	不Ⅱ	8c 中	IV Fig52	8c 前～中	土師器僅か			
	中層黒色土		8c 中	IV Fig52	8c 前～中				
98	上層	9c 前	IV Fig52-53	8c 後～9c 前					
124	最下層砂	不Ⅱ	8c 中	IV Fig54	8c 前～中	白磁Ⅰ類・陶器入る			
			8c 中	IV Fig54	8c 前～中				
			9c 前	IV Fig54	8c 中～9c 前				
区画溝									
	2335	83		不Ⅲ a	8c 後	IV Fig55	8c 後～末	石組・無文埴, SD2340 切る	
			2455	84	不Ⅲ b	9c 前	IV Fig55		9c 前
	2015	A	76	灰色粘・灰色砂	不Ⅲ a	8c 後	IV Fig56-57	8c 後～末	SD320 と同時存在, SD2011 が攪乱
				上層下部	不Ⅲ b	9c 前	IV Fig57-58	8c 後～末	
		上層	9c 前	8c 後～9c					
	2470	85	下層	不Ⅲ a	8c 後	IV Fig59-60	8c 後～末	SX2480 を切る, SK2475 に切られる, 9c 前に埋没	
			上層	不Ⅲ b	9c 前	8c 後～9c 前			
	4570	A	187	下層	不Ⅲ b	9c 前	IV Fig61	9c 前～中	北溝: 修築の護岸石組は南新・老司Ⅱ式瓦・無文埴
				上層	不Ⅳ a	9c 中	9c 中～後		
		石積裏込め	不Ⅳ a	9c 中	9c 中～後				
B		下層	不Ⅳ a	9c 中	IV Fig62-63	9c 中～後	南溝: SD4571・4572 と切り合い無く連続		

			上層 A・B上層	不Ⅳa 不Ⅳb	9c 後 10c 前		9c 中～後 9c 末～10c	溝 A・B 最終埋没期
4571	187		粗砂・溝底 堆積土 石積裏込め	不Ⅲa	9c 中 9c 中 9c 中	Ⅳ Fig64	9c 前～中 9c 中～後 9c 前～中	SD4572 と並走、石組で暗渠の可能性 修築による護岸石組に縄目瓦
4572	187			不Ⅳa	9c 後	Ⅳ Fig64	9c 後	SD4571 と並走、SD4570B から東へ排水
2350	83		ブロック埋土		10c 中	Ⅳ Fig65	9c ～ 10c 中	SD2355・SB2355・2365 を切る、人為的埋戻し
2418	84			不Ⅲa	8c 後	Ⅳ Fig65	8c 後	SD2419 に切られるか
2469	85			不Ⅱ	8c 中	Ⅳ Fig65	8c 中	SD2340 より新、SX2485 に切られる
2471	85			不Ⅱ	8c 中	Ⅳ Fig66	8c 中	石組溝 SX2485 と一連
4037	147			不Ⅲa	8c 後	Ⅳ Fig66	8c 中～後	SB4040 切る、SX4045 に接続、人為的埋戻し
その他区画溝								
SD 368	17			不Ⅲc	9c 中	Ⅳ Fig67	9c 前～中	SB370 雨落溝、SD374 も同一の性格
2389	84			不Ⅲb	9c 前	Ⅳ Fig67	9c 前	SB2380 周辺を走る細い溝群、SD2403 と肩筋併せる
2391	84			不Ⅲb	—	—	—	SB2380 の柱掘方を切る、SD2403 と接続
2392	84			不Ⅲa	8c 末	Ⅳ Fig67	8c 後～末	SD2403 に切られる、SD2402 に接続
2393	84			不Ⅲa	—	—	—	SD2402 を切る、SB2380・2390 に切られる
2396	84			不Ⅲa	8c 末	Ⅳ Fig67	8c 後～末	SD2403 に接続
2397	84			不Ⅲa	—	—	—	SD2396 西側を並走
2398	84			不Ⅲa	8c 末	Ⅳ Fig67	8c 後～末	SB2380 の北側柱筋を併せる
2399	84			不Ⅲa	8c 末	Ⅳ Fig67	8c 後～末	SB2390 に切られる
2401	84			不Ⅲa	—	—	—	SD2393・SB2383・2390 に切られる
2402	84			不Ⅲa	—	—	—	SD2393 に切られる
2403	84			不Ⅲb	9c 前	Ⅳ Fig67	9c 前	SD2391 接続
4038	147			不Ⅲa	8c 末	Ⅳ Fig67	8c 後～末	SX4045 の北側溝、SD4049 に切られる、SD2471 と一連
4039	147			不Ⅲa	8c 末	Ⅳ Fig67	8c 後～末	SX4045 の南側溝
4041	147			—	—	—	—	西側は調査区外
4042	147			不Ⅲa	8c 後	Ⅳ Fig67	8c 中～後	SD4038 より新、SD4044 より古い
4043	147			不Ⅲa	—	—	—	南肩が SX4045 に連なる、石列を伴い SD4038 と一連
4044	147			不Ⅴ	10c 中	Ⅳ Fig67	10c 前～中	
4566	187			不Ⅲb	9c 前	Ⅳ Fig68-69	9c 前～中	SB4560 北溝、SK4573・SB3815・4563、SB4561 を切る
4567	187			不Ⅲa	8c 末	Ⅳ Fig69	8c 末～9c	SB4560 南溝、黄茶色系整地層が覆う、北肩に花崗岩
4568	187			不Ⅲa	8c 末	Ⅳ Fig69	8c 末～9c	SK4576 を切る、SD4570 埋土上部に切られる
4569	187			不Ⅲb	9c 前	Ⅳ Fig70	9c 前～中	SD4566・4561 を切る、SB3815 に切られる
その他溝								
SD 2010	76			不Ⅴ	10c 後	Ⅳ Fig71	10c 後	SD320 廃絶後に開削
2337	83			不Ⅳa	9c 末	Ⅳ Fig71	9c 末～10c	溝底が二つに分かれる
2359	83			不Ⅳb	10c 前	Ⅳ Fig71	10c 前	SB2365 を切る
2419	84			不Ⅲa	8c 後	Ⅳ Fig72	8c 後～末	自然流路の可能性
2462	85			不Ⅲa	8c 末	Ⅳ Fig73	8c 後～末	SD2340 西側、途中から二股
2463	85			不Ⅲb	9c 前	Ⅳ Fig73	8c 後～末	SD2015・2470 切る、SD2464 と並走、SD24734 が切る
2464	85			不Ⅲa	8c 末	Ⅳ Fig73	8c 後～末	SD2463 と並走、SK2489・SD2474 に切られる
2466	85			不Ⅲa	8c 末	Ⅳ Fig73	8c 後～末	SD2467 と並走
2467	85			不Ⅲb	9c 前	Ⅳ Fig73	8c 後～9c	SD2466 と並走
2468	85			—	—	—	—	北から南へ傾斜
2472	85			—	—	—	—	SB2460 に関する可能性
2473	85			不Ⅱ	8c 中	Ⅳ Fig73	8c 前～中	
2474	85			不Ⅲb	9c 前	Ⅳ Fig73	8c 後～末	SD2463・2464・2473 を切る
2527				不Ⅲa	8c 末	Ⅳ Fig73	8c 後～末	SD2340・2528 より新
2528				不Ⅲa	8c 末	Ⅳ Fig73	8c 後～末	SD2340 より新、SD2335 の痕跡可能性
2545	90							SX2544 切る
2546	90							SD2545 と並走、SB2535 より新
2899	98			不Ⅲa	8c 後	Ⅳ Fig73	8c 中～後	SB2900 と並走
3051	104							
3052	104							SX3053 を切る
3818	129			不Ⅳa	9c 後	Ⅳ Fig74	9c 後～末	SB4566 切る、SB3815 と並走
3825	129			不Ⅳa	9c 後	Ⅳ Fig74	9c 中～後	SD4566 切る、SB3815 と並走
3835	129			不Ⅲb	9c 前	Ⅳ Fig74	9c 前	SD3825 との間隔を置く
3836	129			不Ⅲb	9c 前	Ⅳ Fig74	9c 前	SD3825 と直交
4044	147			不Ⅳb	10c 前	Ⅳ Fig67	10c 前～中	
4049	147							
4054	147			不Ⅱ	8c 中	Ⅳ Fig75	8c 前～中	SX4055 に関連、二股溝
4610	192			不Ⅲb	9c 前	Ⅳ Fig75	8c 末～9c	SD4611・4612 を切る
4611	192			不Ⅲa	8c 末			SD4610 に切られる
4612	192			不Ⅲa	8c 末	Ⅳ Fig75	8c 末	SD4610 に切られる

3) その他遺構 (Fig.114, Tab.14)

①不丁地区官衙の諸遺構

不丁地区官衙では建物や区画施設以外の遺構として、井戸、土坑、粘土採掘遺構、流路、溜り・落ち込み等がある。これらの遺構は、官衙の空間配置や変遷の画期、廃絶を考える上で重要になる。

井戸 本地区では15基検出した。北区域で6基, 中央区域北側で3基, 南区域で6基である。

北区域では、SE2502～2504の3基がSD320に切り込んでいる。一方、SE2510はSD2340埋没後に設置している。さらにSE2357は、SB2360の柱穴を掘り込んでいる。これらのうち、SD320に切り込む3基の井戸については、検出途中で確認したものであり、溝の完全な廃絶後によるものかは不明である。出土土器からみる限り、9世紀末～10世紀頃に位置づけられる。SD2340に切り込むSE2510からは、10世紀前半～中頃の土器が出土している。

中央区域では、中央の南北にわたって分布している。SB2445の柱掘方と重複するSE2434・2436、SK2344B下位で確認したSE2346、SB2380西側に位置するSE2414がある。SE2346上位のSK2344Bは、出土土器から8世紀後半頃に比較古い時期に位置づけられる。さらにSE2414からは、鴻臚館式軒先瓦が出土しており下限の目安となる。中央南側ではSE2890がSB2900の西側に配置されており、井戸内から8世紀末～9世紀の土器類が出土している。また西側では、SE4051・4052・SE4031～4033が分布している。SE4051・4052からは8世紀後半～9世紀後半頃、SE4031～4033から9世紀後半～10世紀の土器類がそれぞれ出土している。

不丁地区官衙における井戸の分布の在り方をみると、北区域では1基を除き東西境界溝の埋没過程や廃絶後となる10世紀以降に配置されており、建物との直接的な関わりを見出すことは難しい。中央区域北側では、建物の柱穴を切る2基を除いて8世紀代に設置されたとみられる。このうちSE2414は、掘立柱建物SB2460との関係が想定される。一方、中央区域南側では建物と重複するものは無く、大きく8世紀末～9世紀のSE2890、9世紀後半のSE4051・4052、9世紀後半～10世紀のSE4031～4033とに分かれる。特に後者は限られた範囲に井戸が集中分布しており、官衙空間における取水場として機能し続けたことが分かる。

総体としてみると、官衙が機能した8～9世紀代には一部を除き建物を避ける形で中央付近の南北にわたって分布している。また、それらは流路の可能性のあるSD2419、流路SX4050とも一部重複しており、湧水なども想定される建物配置としても地盤条件の良くない場所である。逆にこのような状況は、井戸設置にとって条件が良いと言える。

土坑 本地区では、54基検出した。官衙の全域にわたって分布しており、規模や埋没状況も一様でない。遺構としての特徴をみると、不丁地区官衙成立以前に位置づけられるSK388は、平面凸字状で東西4.28m、南北3.52mの規模である。床面上より多量の土器が出土しており、8世紀前後の大宰府の官衙に関わる痕跡の一部と考えられる。この他にも、同時期に比定されるものとしてSK2344がある。

不丁地区官衙成立後、8世紀後半～9世紀には北・中央北地区で建物周辺に土坑が展開する。東西棟建物SB2365北側では、8世紀後半～9世紀前半の土坑群SK2361～2364がある。建物と平行するように東西にわたって切り合っており、連続的な掘削の痕跡と認められる。土器類

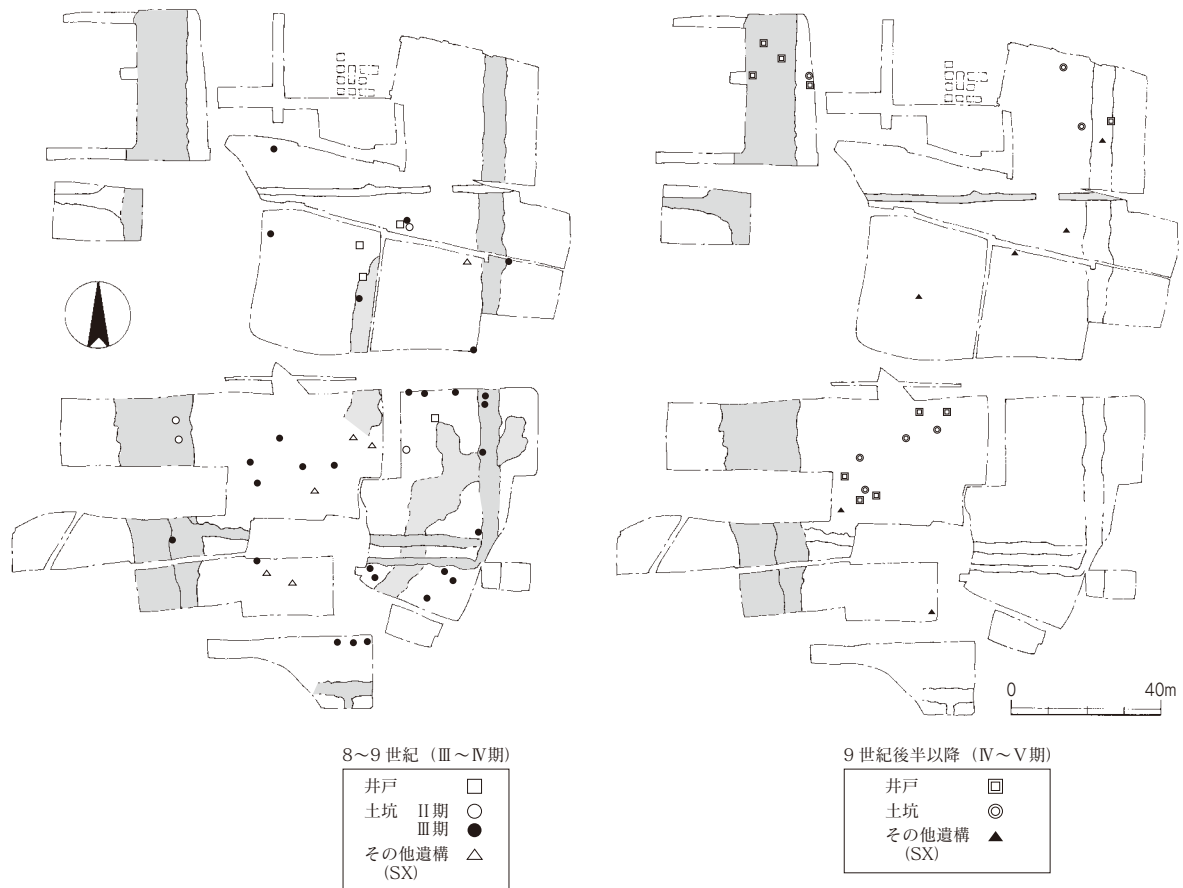


Fig.114 不丁地区諸遺構の動向 (1/1,500)

の出土は多くないが、有機物などを幾度か投棄した廃棄土坑の可能性もあろう。また、建物との切り合い関係を示すものとしてSK4058がある。SK4058は9世紀中頃以降にSB04035を切る形で廃絶し、遅くとも10世紀以降にはSD4044に切られる。SK4068はSB4030Bを切るが、時期などは不明である。この他、土器類の投棄が認められる廃棄土坑としてSK4573・4574がある。このうちSK4573はSB4562・SD4566を切っており、さらにSK4574と切り合いながら東西に拡がっている。9世紀中頃の多量の土器類が出土している。また規模は不明だが、8世紀後半の土器が多量に出土しており一括投棄されたとみられるSK2007がある。

以上のように、建物をはじめ、他の施設の廃絶に直接関係するとみられる土坑は不明である。ただし、8世紀後半～9世紀に位置づけられる土坑の多くは、建物と重複関係を示すものは少ない。建物と時期的にも大きくかけ離れていないことから、何らかの理由で施設周辺に掘削された土坑と理解される。この他、中央区域西側で土坑が確認できない状況には、粘土採掘遺構による遺構の削平も考慮する必要がある。

粘土採掘遺構 平面的なまとまりとして把握できたのは14基であり、調査区北東から中央西側へ向けて集中している。階段状に掘られた方形や角をもつ不定形の平面プランが連続しており、明確な遺構の立ち上がりを確認することができない。そのため、一時期の連続的な掘削によるものとみられる。火山灰起源とみられる暗紫色粘質土の自然堆積層に掘削面が及んでおり、

この粘質土の採集が目的であったと考えられる。出土土器から11世紀以降に下限が求められ、不丁地区官衙施設の完全な廃絶後に掘削が行われたとみられる。大規模なものでSX2438があり、南北約15m、東西約10m、SX2439の南北10m、東西9mに及ぶものがある。

流路・溜り・落ち込み 南北にわたる流路が幾つか存在するが、整地層下位に埋没しているものもあり、数や規模は把握できない。ある程度全容が分かるものとして、調査区南側で検出したSX2480、SX4050がある。

SX2480は、8世紀前後に開削された東限溝SD2340に掘削されており、それ以前に位置づけられる。最下層の灰白色砂・灰黒色砂層の上位となる、灰茶褐色土や炭化物層から7世紀第4四半期前後の土器や鞆羽口、埴塙、鋳型片、炉壁が多量に出土している。遺物は混在した状態であり、層位的にも時間差を想定し難く、整地による鞍部への一括投棄とみられる。

SX4050は中央地区南側を幅10mで南北に走る。最上層に9世紀以降の整地層・茶褐色土を確認できる。そして、その下位には8世紀中頃を下限とする整地層・暗褐色土がある。このような状況から各時期に段階的な整地が行われたことが分かる。そして、その下位には流路に関わる灰褐色砂、腐植土（一部）があり砂層の地山へ至る。灰褐色砂層では8世紀第1四半期を下限とする土器類が出土している。このような堆積状況から8世紀中頃、SD2340廃絶とほぼ同時期にこの流路が整地されたとみられる。

整地層下位の流路

この他、流路の可能性のある遺構として、溝SD2419がある。中央地区を南北に流れ、北端では東へ折れる。幅5m以上、深さ0.6mの規模で堆積層には炭化物や焼土が混じっており、8世紀後半代を中心とする多量の土器や瓦類、鞆羽口、鍛冶関連遺物が出土している。遺物の出土状況を見る限り、整地土と共に投棄されたような状態である。

②不丁地区官衙の空間利用と整地層

官衙空間における施設配置を規定する要因の一つとなる自然堆積状況を見ると、不丁地区中央区域の南北方向に幾重かの流路が走っていたことが分かる。このような状況は、政庁周辺官衙内の各地区で確認することができる。また、こうした場所は、生産関連遺物の廃棄などが可能な谷部や自然流路が選択されることも多い。流路SX2480、SX4050から出土した遺物類は、生産関連遺物の施設造営に関わる痕跡とみることができよう。8世紀後半代を中心に機能した南北溝SD2419についても鞆羽口、鍛冶関連遺物が出土しており、南側には鋳造関連遺構である保土穴SX2421～2423がある。官衙内において時期的に異なる生産遺構や遺物の存在から、施設が段階的に整備・改修されながら継続していったと考えられる。

生産関連遺物と施設造営

施設の整備や廃絶の痕跡として、整地層がある。流路状遺構内の層位もその痕跡に含めることができる。まず、南北に走る流路SX4050に関連するとみられる整地層は、より南側のSX3830・3838等にも拡がっている。SX3830は長軸1.80×短軸1.00m、深さ0.17mの浅い土坑状の遺構であるが、その上部から9世紀前半を下限とする土器群が出土している。周辺で確認されたSX3838も同様の整地事業によるものとみられる。

地区中央の84次調査灰褐色土下位の茶褐色土層では、8世紀後半～9世紀前半代の須恵器や土師器、灰釉陶器や越州窯系青磁碗等が出土しており建物等の下限を示すとみられる。85次調査暗褐色土はSD2470を埋めており、周辺施設の下限を示す可能性が高い。また、出土土器類には8世紀後半～9世紀の須恵器や土師器をはじめ、緑釉陶器や灰釉陶器、越州窯系青磁碗等が

ある。下位のSD2470堆積土出土土器とも大きく離れた時期でなく、この区画溝と周辺施設の廃絶が連続的に行われたとみることができる。147次調査暗褐色土層は、茶褐色土下位に位置づけられ、8世紀後半代で時期的にまとまっている。この他、平面プランとして捉えることのできない整地層には、129次調査の茶褐色土や暗褐色土がある。187次調査の黒色土や暗褐色土はSK4573・4574等の遺構の上に埋没した包含層である。

③不丁地区官衙の埋没

ここでは、不丁地区官衙の調査地区内の最終埋没を示す資料を北から南へ追ってみたい。

地区北 17次調査のSB370の基壇周辺部では、基壇を埋める瓦溜りSX373より龍泉窯系青磁碗Ⅰ・Ⅱ類、あるいは糸切りの底部調整を持つ土師器坏が出土している。さらに周辺部では遺構を埋没させた第1・2層より龍泉窯系青磁碗Ⅲ類、同安窯系青磁碗、土師器皿（糸切り）が出土している。つまり、この地区は13世紀以降、完全に埋没している。さらに87・90次調査茶褐色土・暗褐色土では、白磁Ⅳ・Ⅴ類が出土している。また、粘土採掘遺構SX2531からも白磁や同安窯系青磁皿が、SX2514より底部糸切調整の土師器がそれぞれ出土している。以上から12世紀以降完全に埋没したとみられる。

地区中央 83次調査では、床土下位で粘土採掘遺構上部に堆積した灰褐色土は、この地区の最終埋没層である。土師器丸底坏や白磁碗等が出土し、その下位でSD2350を確認できる。ただし染付磁器碗等が出土しており、下限はさらに新しくなる。84次調査でも灰褐色土層があり、白磁Ⅳ類碗や龍泉窯系青磁碗が出土している。そして、この層下位の粘土採掘遺構SX2347埋土・暗褐色土からは、白磁Ⅳ類碗や糸切りの底部調整を持つ土師器坏、瓦質土器鉢が出土している。13世紀以降、この地区は急速に埋没したことが分かる。

地区中央南側の85次調査では、床土下位の灰褐色土から龍泉窯系青磁碗の他に染付磁器、磁器製人形など、一部近世に至る遺物が出土している。さらに灰褐色土下位の茶褐色土からは、8世紀後半～9世紀前半を中心とする土器類と共に龍泉窯系青磁碗、青白磁瓶が一部出土している。このような状況から、この地区の最終的な埋没は13世紀以降である。北側の98次調査では、床土下位の暗褐色土より、龍泉系窯跡青磁碗や白磁碗の他に天目茶碗、近世陶器や磁器類がみられる。147次調査茶褐色土下層は、SX4050に関わる整地層である。遺物類には8世紀代後半～9世紀の須恵器や土師器類と共に灰釉陶器、越州窯系青磁碗の他に龍泉窯系青磁皿Ⅰ類が出土している。そのため、埋没は12世紀前半以降に位置づけられる。

地区西側 西側に位置する110次調査では、SD320最終埋没層の上層に堆積する灰褐色土からは13世紀の龍泉窯系青磁碗、暗褐色土や暗灰色粘質土からは12世紀代の黄褐釉陶器が出土している。76次調査のSD320埋没層上面に堆積した暗灰色土B層では、玉縁口縁の白磁Ⅳ類碗や景德鎮産の青磁壺が、其の上層の暗灰色土には、龍泉窯系青磁碗が出土している。11世紀前半～中頃に溝が廃絶し、その後13世紀には完全に埋没したとみられる。

以上のように、不丁地区官衙は11世紀前後に西境界溝SD320が埋没して終焉を迎え、中央北側で広範囲の粘土採掘が行われる。そして12世紀以降に地区の崩壊が急速に進んで、13世紀には地区全体が埋没していったとみられる。このような最終的な遺構の崩壊や埋没状況は、大宰府政庁の遺構の崩壊時期ともほぼ整合している。

Tab.13 不丁地区 その他遺構一覧表

※ IV Figは「遺物編1」

			次数	時期	掲載図	遺物の時期	遺構の所見・切り合い等		
井戸	SE	2346	83	不Ⅲb	9c 前	IV Fig76	8c 後	SK2344B に切られる	
		2357	83	不Ⅲb	9c 前	—	—	SB2360・SK2358 を切る	
		2414	84	—	—	—	—	木質出土、鴻臚館式軒平瓦出土	
		2434	84	—	—	—	—	方形で木組か	
		2436	84	—	—	—	—	方形で木組か	
		2502	14 補	不Ⅳa	9c 末	IV Fig76	9c 後～末	SD320 堆積土途中より検出、下部 2 段曲物	
		2503	14 補	—	—	—	—	SD320 堆積土途中より検出、縦板と瓦を上部の井戸枠	
		2504	14 補	—	—	—	—	SD320 堆積土途中より検出、周囲に板材有	
		2510	87	不Ⅳb	10c 前	IV Fig76	10c 前～中	SD2340 を切る、上部の板材と井戸枠の間に瓦片	
		2890	98	不Ⅲb	8c 末	IV Fig76	8c 末～9c	方形で木組か	
		4031	147	不Ⅳa	9c 末	IV Fig77	9c 後～10c	SE4032 に切られる、上部下部間に瓦を詰める	
		4032	147	不Ⅳa	9c 末	IV Fig77	9c 後～10c	SE4031 を切る、曲物痕跡有	
		4033	147	不Ⅳa	9c 末	IV Fig77	9c 後～10c	曲物二段、上・下部の間に板材・瓦・土器を詰める	
		4051	147	不Ⅳa	9c 後	IV Fig77	9c 中～10c	基底部に河原石を積む	
		4052	147	不Ⅳa	9c 末	IV Fig77	9c 末～10c	上部下部の間に瓦・土器・礫を詰める	
土坑	SK	388	17	不Ⅰa	7c 末	IV Fig79-82	7c 後～末	漆付着の壺・平瓶出土	
		2007	76	不Ⅲb	9c 前	IV Fig83-85	8c 後～9c	SD320 に切られる、黒色土器椀	
		2009		不Ⅲb	9c 前	IV Fig85	9c 前～中		
		2016		不Ⅳb	10c 前	IV Fig85	10c 前		
		2338		不Ⅲc	9c 中	IV Fig85	9c 中	SK2376 に切られる	
		2341		不Ⅲc	9c 中	IV Fig85	9c 中	SD2340 を切る	
		2344	A	83	不Ⅰa	7c 末	IV Fig86	7c 後～末	SD2419 に切られる
			B		不Ⅲb	9c 前	IV Fig87	8c 中～後	SE2346 を切る
		2358	83	不Ⅲa	8c 末	IV Fig88	8c 後～末	SE2357 に切られる	
		2361	83	不Ⅲc	9c 中	IV Fig88	9c 前～中	SK2362・2363 を切る	
		2362	83	不Ⅲb	9c 前	—	—	SK2363 より新、SK2361 より古い	
		2363	83	不Ⅲa	8c 末	IV Fig88	8c 末～9c	SK2361・2362 に切られ、SK2364 を切る	
		2364	83	不Ⅲb	9c 以降	—	—	SK2363 に切られる	
		2387	84	不Ⅲa	8c 後	IV Fig88	8c 後	SB2388 と重複するが時期不明	
		2453	84	不Ⅲc	9c 中	IV Fig88	9c 前～中	土器・焼土・鉄滓出土	
		2457	84	不Ⅲb	9c 前	IV Fig88	9c 前～中	溝状の土坑	
		2458	84	不Ⅲa	8c 末	IV Fig89	8c 後～末	矩形の土坑	
		2475	85	不Ⅲb	9c 前	IV Fig89	8c 後～末	SD2015A・B を切る	
		2478	85	不Ⅲb	9c 前	IV Fig89	8c 末～9c	溝状遺構を切る	
		2479	85	不Ⅲb	9c 前	IV Fig90	8c 末～9c	SK2481 隣接	
		2481	85	不Ⅲa	8c 後	IV Fig90	8c 後～末	SK2479 隣接	
		2488	85	不Ⅲa	8c 後	IV Fig91	8c 後～末	土師器・須恵器・鍛冶羽口出土	
		2489	85	不Ⅲa	8c 後	IV Fig91	8c 中～後	SD2464 を切る	
		2508	14 補	不Ⅲc	9c 中	IV Fig91	9c 中～後	床土下位で検出、SA2505 と重複関係	
		2536	87	不Ⅲa	8c 後以降	—	—	SB2525・2530 を切る	
		2538	90	不Ⅲa	8c 後以降	—	—	SK2539 を切る、SB2525・2530 内	
		2539	90	不Ⅲa	8c 後以降	—	—	SK2538 に切られる、SB2525・2530 内	
		2881	98	—	不明	—	—	炭化物出土	
		2882	98	不Ⅲa	8c 後	IV Fig91	8c 後～末	SD2340 を切る	
		2883	98	不Ⅲa	8c 後	IV Fig91	8c 後～末	SD2340 を切る	
		2884	98	不Ⅲa	8c 後	IV Fig91	8c 中	SK2886 を切る	
		2886	98	不Ⅲa	8c 後	IV Fig91	8c 後～末	SK2884 に切られる	
		2892	98	不Ⅱ	8c 中	IV Fig91	8c 中	98 次調査区西端に位置	
		2893	98	不Ⅲa	8c 後	—	—	SD2340 を切る	
		2901	98	—	不明	—	—	SB2885 と重複	
		3054	104	—	不明	—	—	104 次調査区北東	
		3055	104	不Ⅲb	9c 以降	IV Fig91	9c 以降	SD320 に切られる	
		3056	104	不Ⅲb	9c 以降	IV Fig91	9c 以降	SD320 に切られる	
		3834	129	不Ⅲa	8c 後	IV Fig92	8c 後～末	129 次調査区北西端に位置	
		4056	147	不Ⅳa	9c 後	IV Fig92	9c 中	SE4032 に切られる	
		4057	147	不Ⅲa	8c 後	IV Fig93	8c 後	147 次調査区中央、楕円形	
		4058	147	不Ⅲc	9c 中	IV Fig93	9c 前～中	SD4044 に切られる、埋土は黒灰色土、炭化物混	
		4059	147	不Ⅳa	9c 後	IV Fig93	9c 中～後	SB4035A・B に切られる、埋土は暗灰色土、炭化物混	
		4061	147	不Ⅲc	9c 中	IV Fig93	9c 中	SB4030A・B・4035A・B との間に位置	
		4063	147	不Ⅲb	9c 前	IV Fig93	9c 前	147 次調査区中央東に位置、歪な楕円形	
		4068	147	不Ⅲa	8c 後以降	—	—	SB4030 柱穴を切る	
		4069	147	不Ⅲc	9c 中	IV Fig93	9c 前～中	略円筒状の土坑	
		4573	187 黒	不Ⅲc	9c 中	IV Fig94-97	9c 前～中	SB4562・SD4566・SK4574 切る、長沙窯黄褐釉彩水注	
			187 埋	不Ⅲc	9c 中	—	—	9c 前～中	

		4574	187	不Ⅲa	8c 末	Ⅳ Fig98	8c 末～9c	中央柱穴 SK4573 西側, SB4561 を切る
			187 下	不Ⅲc	9c 中	Ⅳ Fig98	9c 前～中	
			187 上	不Ⅳa	9c 後	Ⅳ Fig98-99	9c 中～末	
		4576	187	不Ⅲa	8c 末	Ⅳ Fig99	8c 末～9c	SD4568 に切られる, 埋土に炭・灰・焼土混
			4579	187	不Ⅲc	9c 中	Ⅳ Fig99	9c 中～後
礫敷遺構	SX	4045	147	不Ⅲa	8c 後	Ⅳ Fig100	8c 中～後	SD4038・4039が並走, 右列配置, SX2485へ延びる
暗渠	SX	2345	83	不Ⅲa	8c 末	—	—	SD2340 を切る, SD2335 と一連
		2485	85	不Ⅲa	8c 後	Ⅳ Fig100	8c 前～中	SD2340 を切る, SD2335 との関連
		4055	147	不Ⅱ	8c 中	Ⅳ Fig100	8c 中	SX4050 腐植土上に配置, SD4054 に接続
護岸遺構	SX	328	14	不Ⅲb	9c 以降	—	—	SD320 東側壁に構築, 補足調査でも確認
		2013	76	不Ⅲb	9c 以降	—	—	SD320 東北の溝底で検出 SX328 に繋がる
筏状遺構	SX	2014	76	不Ⅳb	10c 以降	—	—	SD320 埋没後に補強のため設置か
鑄造関連遺構	SX	2421	84	不Ⅲa	8c 後以降	—	—	SD2419 上面で検出, 周辺で多量の鉄滓
		2422	84	不Ⅲa	8c 後以降	—	—	SX2421 南側検出
		2423	84	不Ⅲa	8c 後以降	—	—	84 次調査区中央検出
瓦組遺構	SX	2501	14	不Ⅳb	10c 以降	—	—	SD320 西端肩付近, 一木を扶る桶を据える
瓦敷遺構	SX	2523	87	不Ⅲa	9c 後	Ⅳ Fig100	9c 後～10c	SD2335 廃絶後, 「平井瓦」「賀茂瓦」銘瓦, 無文埴
土壇状遺構	SX	2487	85	不Ⅲa	8c 後以降	—	—	SX2485 と共存か, SX4045 と同じ構築物基礎の可能性
粘土採掘遺構	SX	2339	83	不Ⅲb	9c 以降	—	—	南北 10.0 m, 東西 4.5 m の範囲
		2342	83	不Ⅲb	9c 以降	—	—	東西約 12 m, 幅 2.8 m の範囲
		2347	83	不Ⅲb	9c 以降	—	—	東西約 9 m, 南北約 6 m
		2348	83	不Ⅲb	9c 以降	—	—	SX2347 西側に位置
		2351	83	不Ⅲb	9c 以降	—	—	SX2437 と一連の採掘遺構, 東西幅約 8 m
		2437	84	不Ⅲb	9c 以降	—	—	SX2351 に隣接, 東西 7.9 m, 南北 3.5 m の範囲
		2438	84	不Ⅲb	9c 以降	—	—	SX2439 西側, 東西約 10 m, 南北約 15 m
		2439	84	不Ⅲb	9c 以降	—	—	東西約 10 m, 南北約 9 m, SX2438 に近接
		2442	84	不Ⅳb	10c 前	Ⅳ Fig100	10c 前	SB2405・2410 の柱穴切る, 東西約 11 m, 南北約 8 m
		2514	87	不Ⅳa	9c 後	Ⅳ Fig100	9c 中～後	SD2340 東で検出, 南北約 8 m, 東西約 6 m
		2516	87	不Ⅲb	9c 以降	—	—	SD2340 東で検出, SX2514 北, 3.5 m × 2.4 m
		2517	87	不Ⅲb	9c 以降	—	—	SX2516 北に位置, 長軸 4.5 × 短軸 3.3 m
		2531	87	不Ⅲb	9c 以降	—	—	SB2520 を切る, 南北 12.0 m, 東西 8.0 m
		2532	87	不Ⅳa	9c 後	Ⅳ Fig100	9c 中～後	SB2520 を切る, 2 つの不整形な土坑
		流路	SX	2480	85・98	不Ⅰa	7c 末	Ⅳ Fig101-104
4050	147			不Ⅱ	8c 中	Ⅳ Fig105	8c 前～中	東北から南西に延びる幅約 10 m の流路状遺構
溜まり 落ち込み	SX	2336	83・84	不Ⅶ	12c 後	Ⅳ Fig106	12c 後	SD2340 東側, 方形形の落ち込み
		2342	83	不Ⅲb	9c 以降	—	—	SK2344 北側の土坑状の落ち込み
		2416	84	不Ⅰa	7c 後	Ⅳ Fig107	7c 後	東西幅約 11.6 m, 南北約 4.0 m
		2417	84	不Ⅲb	9c 以降	—	—	不整形の落ち, SX2416 や SX2342 に関連する可能性
		2443	84	不Ⅲb	9c 以降	—	—	SB2415・2420 を切る不整形の落ち込み
		2477	85 補	不Ⅲb	9c 前	Ⅳ Fig107	8c 末～9c	長軸 3.8 m × 短軸 1.7 m 以上の方形形の落ち
		2506	14 補	—	不明	—	—	浅い土坑状の落ち
		2507	14 補	不Ⅲa	8c 末	Ⅳ Fig108	8c 末～9c	SX2506 に近接する土坑状の落ち
		2544	90	不Ⅲa	8c 後以降	—	—	SB2535 を切る浅い落ち
		2887	98	—	不明	—	—	幅 9.8 m の不整形の落ち
		2888	98	—	不明	—	—	SX2887 の南に位置する不整形の土坑状の落ち
		3053	104	—	不明	—	—	SD3052 に切られる, 不整形の落ち込み
		3813	129	不Ⅲc	9c 中	Ⅳ Fig108	9c 前～中	SB3815 を切る, 不整形の落ち込み
		3830	129 下	不Ⅱ	8c 中	Ⅳ Fig109	8c 前～中	SD3825 と SD3835 の間の小礫群, 土器・瓦片集中
			129 上	不Ⅲb	9c 前	Ⅳ Fig109	9c 前	
			129 埋	—	—	Ⅳ Fig110	—	
			3831	129	—	不明	—	—
		3833	129	不Ⅲa	8c 後	Ⅳ Fig110	8c 後	溝状の落ち, 長軸 3.0 m × 短軸 0.6 m
		3838	129	不Ⅲb	9c 前	Ⅳ Fig111-113	8c 末～9c	SD3825 と SD3835 の間で炭化物と多量の土器, 整地か
		4060	147	不Ⅲc	9c 中	Ⅳ Fig114	9c 中～後	幅 2.7 ～ 4.0 m の溝状遺構, 炭化物を含む埋土
		4065	147	不Ⅲc	9c 中	Ⅳ Fig114	9c 前～中	不整形の落ち, 埋土は黒褐色土で羽口・鉄滓出土
		4066	147	不Ⅲa	8c 後	Ⅳ Fig114	8c 後～末	暗褐色土・黄褐色土で埋められる
		4067	147	不Ⅱ	8c 中	Ⅳ Fig115	8c 中～後	SX4066 の東側で一連の落ち込み
4565	187	—	17c 以降	—	—	近世の段落ちの崩壊部分		
ピット・その他	SX	2352	83	—	不明	—	—	東西方向に蛇行する溝状の落ち
		2459	84	不Ⅰb	8c 前後	—	—	下層検出の掘立柱掘方
		372	17	—	13c 前	Ⅳ Fig115	13c 前	SB370 周辺瓦溜り
		373	17	不Ⅳb	10c 前	Ⅳ Fig115	9c 末～10c	SB370 周辺土器溜り
		374	17	不Ⅳa	9c 末	Ⅳ Fig115	9c 後～末	SB370 廃絶に関する第 1 整地
		2454	84	不Ⅳa	9c 後	Ⅳ Fig115	9c 後	遺構不明
		4062	147	不Ⅲa	9c 中	Ⅳ Fig115	9c 前～中	SK4058 西側のピット

4) 官衙の変遷 (Fig.114,115)

前項では、建物と柵のみの変遷をみてきたが、本項では建物及び区画溝、井戸、土坑等の遺構を含めて不丁地区官衙の変遷を述べることにする。

[不丁地区官衙の四至]

前項でも記したが不丁地区官衙の四至は、東縁が南北溝SD2340、西縁が南北溝SD320で、東西幅は両溝肩間の76～82mを測る。北縁は藏司地区官衙南端の築地SA1410、南端は朱雀門礎出土地点を東西方向に延長した線（官衙城南端の区画施設）で、南北長約220mを測る。

ただ、築地SA1410の南側には政庁南門前の外濠から東西方向に伸びる区画溝が想定されており、厳密にはその溝の南肩部までとなる。また、南端についても朱雀門から東西方向に伸びる築地塀等の区画施設までであるが、朱雀門の位置が確定されていないため南北長は推定での長さとしておく。

[検出遺構]

不丁地区官衙においては、建物63棟、柵21列、築地基礎1基、区画溝5条、井戸15基、溝61条、土坑46基、落込、粘土採掘遺構、瓦敷遺構、鋳造遺構等を検出している。

建物では掘立柱建物が殆どであるが、礎石建物も1棟存在する。掘立柱建物の内訳は、四面廂建物1棟、両面廂建物1棟、片廂建物7棟、総柱建物2棟、側柱建物51棟である。不丁地区官衙においては、身舎の梁行が3間の大型建物7棟が存在し、日吉地区の9棟に次ぐ数であり、周辺官衙域においては際立っている点が指摘できるとともに、官衙の性格を考える上で重要な視点となる。区画溝SD2340からは、天平6年(734)・同8年(736)銘木簡及び紫草に関する木簡が多量に出土し、貢上染物所とする見方もある。

[建物配列]

建物群の配列に関しては、東西方向の柵SA2451・2452及び築地基礎とみられる遺構SX4045の南北10m余りが空閑地となっており、建物群は大きく北・中央・南の三つのエリアに区画されている状況が窺える。そのエリア内において、ある時期にはL字形或いはコ字形に建物が配列する。この配列をどう捉えるかは、さらなる検討を要するが、三つのエリアにおいて所司を構成していた可能性が考えられる。

三つのエリアに区画

[時期設定]

不丁地区官衙で検出された建物は、柱掘方内からの出土遺物、他の遺構との切り合い関係、建物方位から築造時期を判断したが、建物が何時まで存続したかは建物どうしの切り合い関係から導き出したものである。その結果、7世紀後半～10世紀中頃にかけてその変遷がみられる。また、区画施設・井戸・鋳造遺構は建物と併存し、官衙を構成する要素であり、建物の終焉と軌を一にする。官衙としての機能が終了した11世紀以降にみられるのが粘土採掘遺構で、当該期までを官衙の変遷として取り上げる。

時期設定に際しては、建物の変遷を主体としてI～V期に大別し、その中を二三の小期に細分した。本来、時期設定は大宰府政庁周辺官衙全体として統一した設定をすべきであろうが、各々の官衙で遺構の変遷時期を異にするため、暫時各々の官衙で時期設定を行い、周辺官衙の総集編において整合性を図りたい。以下、時期ごとに主要遺構の変遷をみていく。

[不丁地区官衙の変遷]

I 期 (7世紀後半～8世紀初頭)

I a期: SB3832, SA2513, SK388・2344A, SX2480

I b期: SB2540・2885?・4030・4035A, SD2340, SX4050

不丁官衙の
萌芽期

大宰府政庁I期に該当し、I a期が7世紀後半、I b期が8世紀初頭とした。不丁地区官衙の萌芽期にあたるが、I a期にはまだ官衙としての体裁は成していない。区域の南西に総柱倉庫SB3832が位置し、北東に柵SA2513が設置される。区域の北西に位置する土坑SK388からは、口頸部を打ち欠いた平瓶45個体が据えられた状態で遺棄されていた。また、区域の南東に位置し、北東から南西方向に走る流路SX2480には製塩土器、漆付着土器及び漆で固化した布が投棄されており、両者は大宰府政庁及び周辺官衙の造営に関わるものとみられる。

次の8世紀初頭のI b期には、不丁地区官衙の東縁をなす南北溝SD2340が開鑿され、区域の北東端に梁行3間の南北棟建物SB2540が占地する。区域の南半部分には、西からSB4030・4035A・2885の東西棟建物3棟が位置し、SB2885の供伴遺物はないものの三者は南側桁行を揃えて配置されていることから同時併存とみられる。

なお、SB2885とSB4035Aとの間が開いているのは自然流路が存在するため、それを避けて建物を配置した結果によるとみられる。また、SX4050はその北側の溝SD2419に接続する可能性を有し、SX2480・4050とも流末が不明ながら湧水池点となっており、両者の周囲には後世のものであるが井戸が掘削されている。

II 期 (8世紀前半～中頃)

II a期: SB2880・2390・2400・2435・2445・4562, SD320, SK2344B

II b期: SB2005・2360・2370・2405・2425・2430・2530・2900・4040・4560,
SA3816・2522

建物の展開

不丁地区官衙の西縁をなす南北溝SD320が開鑿され、東縁のSD2340とで対をなし、不丁域の東西が確定される。建物の配列は、8世紀前半において区域の中央部に位置していた建物群が区域の全体に展開する。II a期を8世紀前半、II b期を8世紀中頃に細分した。

II a期の8世紀前半には、区域の中央区に建物が進出し、南北棟建物SB2400・2445及び東西棟建物SB2435とでL字形配列を構成する。また、倉庫的機能の建物とみられるSB2390は、SD2340際に配置する。II b期の8世紀中頃には、先のL字形配列の内側(北西側)にSB2405・2425・2430の建物がコ字形に配される。北区においては南北棟建物SB2530と東西棟建物SB2360、総柱倉庫SB2370がL字形に配され、一群を構成する。

III 期 (8世紀後半～9世紀中頃)

III a期: SB2380A・2383・2388・2395・2415・2420・2450・2460A・2486・2525・
2535B・3820・3824・3828・4035B・4561・4564・4575, SA2408?・
4036・SD2015・2335・2470, SE2890・4051, SK2361, SX2345・2485・
4045

III b期: SB370・2355・2365・2380B・2410・2520・4563, SA2354・SD4570,
SE4051・4052

III c期: SB2515, SA2382?, SK4058・4573・4574

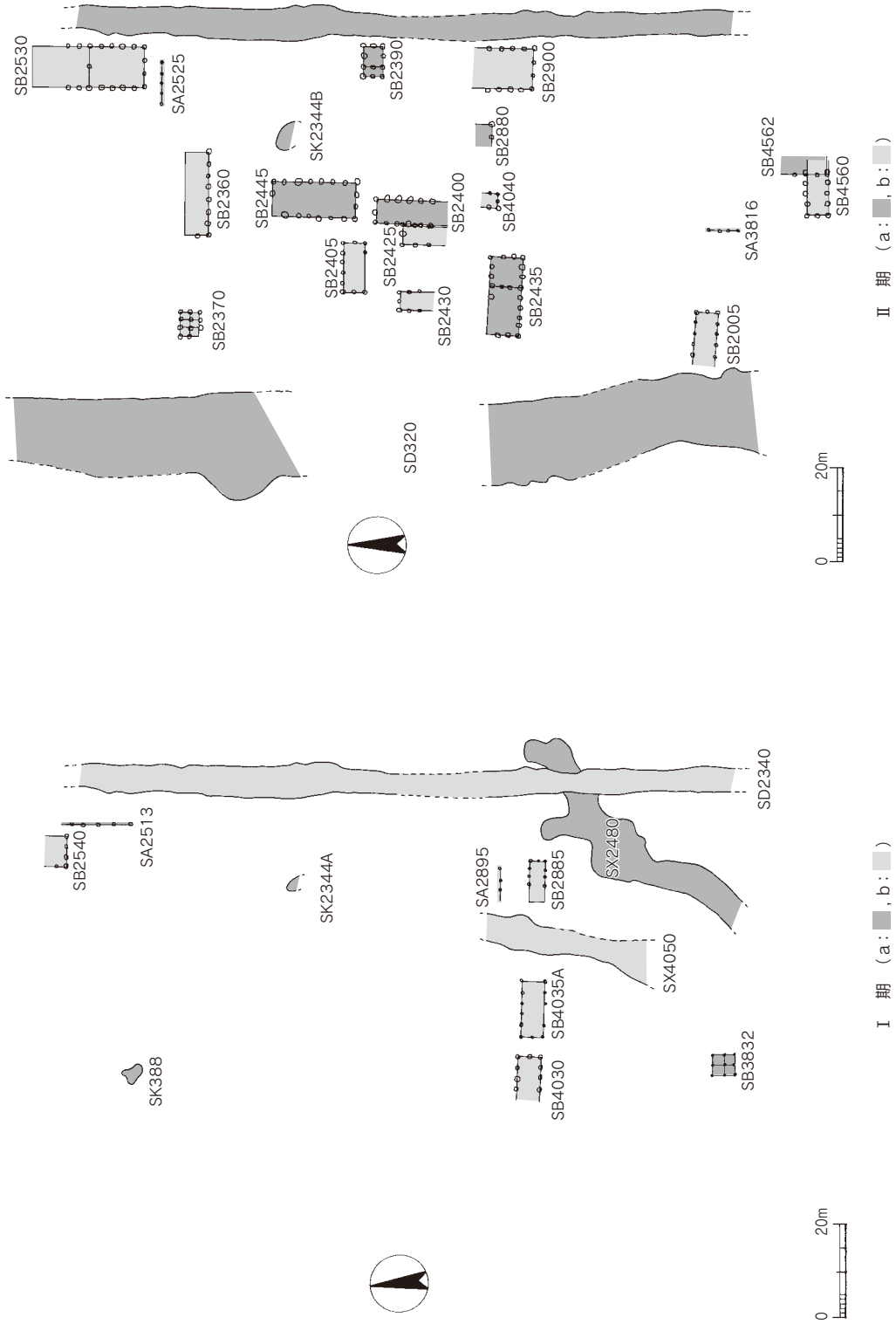


Fig.115 官衙の変遷図①

Ⅲa期を8世紀後半～末、Ⅲb期を9世紀前半、Ⅲc期を9世紀中頃に細分した。

8世紀後半のⅢa期においては、政庁前面広場と不丁地区を画していた南北溝SD2340の廃絶に伴い、SB2388の南北に想定される板塀で広場地区と不丁地区官衙を遮蔽していたとみられる。また、板塀とみられるSA2451によって中央区域が南北に分断され、不丁地区全体として北・中央・南の3区域を構成する。

北区域ではSB2530の跡地に同規模のSB2525が立て替えられ、その西隣にSB2535Bが並列する。SB2388・2450は梁行1間×桁行3間規模であるが、板塀に取り付く門建物と考えられ、SB2388は広場と中央区域との出入り口で、SB2450は中央区域と北区域との出入り口となる。なお、14次調査検出の柵SA2505から溝SD320東肩部までは約4mの間隔を有し、柵の南北延長線は溝肩と平行しており、SB2388の対になる板塀の可能性を有しよう。この場合、SA2505からSD320東肩部までが通路として機能していたとみられる。ちなみに、門建物SB2388に接続する板塀推定線とSA2505の間隔は92.4m（308尺）を測る。

不丁官衙の
中 枢 部

中央区では、先のコ字形配列の跡地に四面廂建物SB2420を中心とする一群（SB2395・2415・4035B）が占地し、東西棟建物SB2380AとでL字形配列を構成する。ただ、SB2380Aと倉庫と考えられるSB2383とは近接しており、8世紀後半～末の時期にあつて前後関係が存在するものとみられる。この四面廂建物が占地する一画は、8世紀代において不丁地区官衙の中枢部をなす。

区域の南側においては、築地とみられる区画施設SX4045によって北側の中央区域と隔絶され、南区域の建物はその区域内において散在的に位置し、北側とは全く異なる様相をみせる。また、東西溝SD2015・2470は肩部での幅3mを測り、平行して走る。両溝は8世紀後半に掘削され、9世紀前半には埋没する短期的な溝であるが、両溝間は通路となる可能性を有する。

この時期においては、SD2340がほぼ埋没し、その埋土中に石組溝SD2335や暗渠施設SX2345・2485が築造され、これまで政庁前面広場との境をなしていたSD2340はその役目を終える。ただ、埋土中に石組溝・暗渠が設けられていることから、小規模な排水溝的に使用されていたものと思われる。

9世紀前半のⅢb期においては、北区域では礎石建物SB370を中心として、その南東に妻廂建物SB2355、南西に東西棟建物SB2365が逆T字形に配列する。中央区域では区域の北側に東西棟建物SB2380B、SB2410が左右に位置する。この4棟の東西棟建物はSA2451を軸線として等間隔で南北に配置されており、極めて計画的である。また、SB2380ABは建物を圍繞する方形溝を伴っており、しかも建物の南側に6m余りの空間を有することから工房的な用途が考えられる。これに対して、南区域においては、小規模な南北棟建物SB4563が区域の中央に位置する程度である。

9世紀中頃のⅢc期には、北区域においてSB2355・2520の後にSB2515が築造されるが、先の建物群がいつの時期まで存続したかは明らかではないが、SB2355は9世紀中頃以前までの存続とみられる。南区域のSK4058・4573・4574は、Ⅲc期の廃棄土坑と考えられる。

Ⅳ 期（9世紀後半～10世紀前半）

Ⅳa期：SB2385、SA4053、SE2502・2503・2504

Ⅳb期：SB3815・4577、SD2350、SE2510

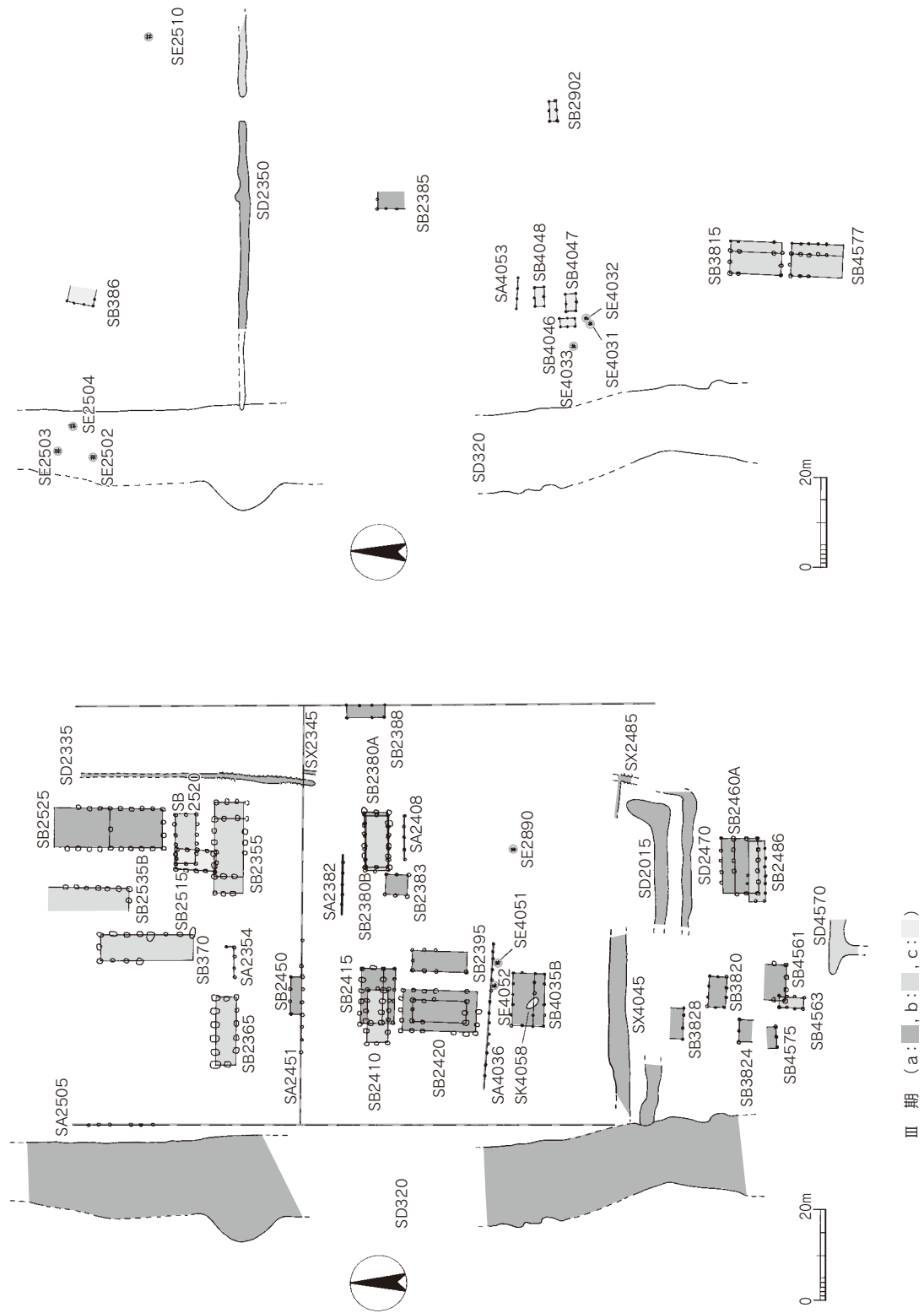


Fig.116 官衙の変遷図②

不丁地区官衙の衰退期にあたり、Ⅳa期を9世紀後半～末、Ⅳb期を10世紀前半とした。

不丁官衙の
衰退

9世紀後半のⅣa期には中央区域の北側にSB2385が、南西側にSA4053が展開する程度であり、建物群の衰退を見せる。10世紀前半のⅣb期に開鑿される北区域の東西溝SD2350の東側には幅5.4mの出入口があり、礎石建物SB370の存続時期も定かではないが、両者が関連するとすればSB370はこの頃まで存在した可能性がある。南区域には南北棟の片廂建物SB3815・4577が南北に直列して配されるが、中央区には建物がみられず空白地帯となる。

また、SD320の埋土中には9世紀末～10世紀代の井戸SE2502・2503・2504が掘り込まれており、SD320が徐々に埋没していく状況が窺える。

V 期 (10世紀中頃)

V期：SB386・2902・4046・4047・4048, SE4031・4032・4033

V期は天慶4年(941)に起こった藤原純友の乱後の10世紀中頃とした。

10世紀前半から中頃にかけては、不丁地区においても官衙建物は終焉し、藤原純友の乱後に築造されたとみられる小型建物SB386が北区域の北西側に、SB2902・4046・4047・4048が中央区域の南側に現れる。これらの建物は、梁行1間(約2.3m)×桁行2間(3.4～4.3m)規模で、SB4046・4047・4048はL字形に配され井戸を伴う居住施設とみなされる。官衙建物の終焉後とは言え、この場所に出現するのは大宰府政庁(Ⅲ期)の再建に関連する施設、穿った見方をすると政庁再建に携わる現場監督者の居住施設と推測される。この建物を以て不丁地区の建物は消滅へと至る。

ここで疑問なのが、10世紀後半とされる大宰府政庁Ⅲ期には、焼失した政庁は再建されるが、前面官衙域においては官衙を構成する建物が存在しない、言い換えると前面域から官衙が姿を消すということである。前面域から別の場所への移動も考えられるが、Ⅲ期政庁の職制はどの様にして維持されていたか、Ⅲ期政庁の性格を改めて検討する必要がある。

Ⅵ 期 (11世紀～12世紀)

Ⅵa期：SX2438

Ⅵb期：SD2010

大宰府政庁の終焉期にあたり、Ⅵa期を11世紀～11世紀後半、Ⅵb期を11世紀後半～12世紀初め頃とした。政庁前面域には暗青灰色粘質土が広範囲に広がっており、その暗青灰色粘質土を採掘した坑が採土遺構で、不丁地区においては87次調査区の南半部(SX2514・2516・2517・2531・2532)から83次調査区(SX2339・2342・2347・2348・2351)及び84次調査区の南西部(SX2437・2438・2439・2442)にかけて広がっている。掘削目的は瓦製作用の粘土として暗青灰色粘質土を使用するため掘削したものと考えられる。供伴土器が僅かであり、掘削時期は定かではないが、SX2438からは11世紀の陶磁器が出土している。官衙終焉後は土取り場として土地利用がなされている。Ⅵb期の溝SD2010はSD320の埋土中に掘削された溝で、この溝を以て不丁地区の遺構も終わりを遂げる。

以上、不丁地区官衙の変遷をみてきた。建物の場合、供伴する遺物が少なく、存続期間を明示するのは難解であるが、建物及び主要遺構の変遷図においては、重複関係を加味した上で建物の存続期間を20～30年程度とみなして作成している。

(2) 出土遺物からみた不丁官衛の特質

1) 瓦罫類 (Fig116, Tab15・16)

i. 大宰府出土の瓦罫類と変遷

大宰府出土の瓦罫類のうち軒先瓦については、栗原和彦氏が製作技法や瓦当文様から大きく5段階の変遷を設定しており(栗原2002)、今回それぞれの盛期を以下のように整理した。

第1段階：7世紀後半～8世紀初頭

第2段階：8世紀前半

第3段階：8世紀後半

第4段階：8世紀末～10世紀初頭

第5段階：10世紀前半～11世紀

各段階の年代観や、属する瓦群の組成についてはまだまだ多くの課題を抱えているが、おおよその傾向を把握するには一つの指標となるだろう。そこで、本項では各段階の時期を栗原氏の論を参照しながら以上のように捉え、各遺構の出土瓦類の様相をみてみたい。なお、文字瓦については第4・5段階に属するが、時期比定は石松好雄・高橋章両氏の検討結果(石松・高橋1978)や軒先瓦に叩打された共存事例などを参考とした。

ii. 主要遺構と瓦類の様相

①建物

不丁地区ではSB370のみが唯一の礎石建物で、周囲に瓦溜りが確認できることから、瓦葺き建物であることは間違いない。しかし、その他はいずれも掘立柱建物であることから直接葺かれていた瓦類ではないため、間接的な時期推定資料ということになる。

さて、瓦罫類の出土状況には大きく二つの傾向があり、一つは第2段階の型式のみが出土する場合、もう一つは第4段階ないし第5段階の文字瓦のみが出土する場合である。前者は、SB2005・2355・2420・2530・4560・4577で、SB2005が290型式である以外は全て鴻臚館式である223型式ないし635型式に限られる。しかし、SB4577では出土土器と乖離しており、混入とみられる。後者の文字瓦出土の一群には、SB370・2365・2515・3815・4563が挙げられる。このうちSB2515は「大国」銘の907型式のみで第4段階、SB370は「平井」銘の901C型式、SB3815は901C型式と「大」銘の915型式、SB4563は915型式が出土し、概ね第4段階の資料とみてよいだろう。ちなみに、SB2360だけは第3段階の657型式が出土している。

②溝

境界溝 不丁地区には東限をなすSD2340と、西限をなすSD320の二つの南北大溝がある。両溝とも膨大な瓦類が出土しているので、ここでやや詳しく様相を整理してみたい。

【SD2340】まず層位について整理しておこう。SD2340は、83・84・85・87・90・98・124次調査の7ヶ次にわたり調査が行われた。このうち、83・85次調査では大きく上下2層に分けて遺物を取り上げられているが、87次調査以降は上中下の3区分による取り上げが行われている。また、調査区によっては最上層や最下層としての取り上げも行われている。問題は、上下2区分の調査回数と、上中下3区分の調査回数との遺物の対応関係である。結論からいえば、当初の上下2区分の段階では、後の3区分でいう中・下層が下層に対応する可能性が高い。そこで、

以下では最初に3区分での状況を確認し、その後上下2区分の状況を確認したい。

上中下の3区分の調査区をみると、下層や最下層では老司Ⅱ式に相当する275B型式・560B型式のほか、290A型式や560新種2型式がみられ、僅か1点であるが582型式もみられる。これらの諸型式のうち、290型式は560B型式との組み合わせ関係が指摘されてきた軒丸瓦で、582型式の文様も老司式と無縁ではないだろう。つまり、下層・最下層からは老司式ないしその関連型式が出土しているといえる。

次に中層をみると、下層・最下層でみられた軒先瓦に加えて、新たに223型式・635型式などの鴻臚館式の組み合わせや、第3段階に属する688C型式が出土している。また、290型式も下層・最下層では290A型式が出土していたが、中層になって新たに290B型式が加わっている。

上層および最上層では、中層に続いて223・290A・290B・560B・635型式が出土しているほか、鴻臚館系の225型式や、第4段階に属する170Bb型式が加わっている。その一方で、275B型式はなく、560B型式もBb～Bcの1点のみでほとんど皆無に等しく、鴻臚館式が主体となる。

このように、3区分で見た場合、下層から上層まで層序に対応するように徐々に型式が変化する状況が窺える。

次に、上下2区分の資料についてみてみよう。下層では、275B・285A・560B・561・582・635型式が出土している。3区分の状況と大きく異なる点は、635型式が一定割合を占める点である。しかも出土点数では最多である。しかし、3区分調査による下層・最下層の状況を踏まえると、ここで出土している635型式は本来中層に属する資料の可能性がある。今回、SD2340出土の平瓦片を全て再確認したが、3区分の調査区における下層資料では凸面の叩打痕が全て縄目叩きのみで、635型式における格子叩きや平行叩きを伴う資料は1点もなかった。もちろん、635型式にも格子叩きと縄目叩きを併用する例もあるが、それならば格子叩きの破片が多少なりとも下層に存在してよいはずである。しかし、縄目叩きの破片しか出土しないことから、3区分における下層（及び最下層）に635型式は含まれない可能性が高いといえよう。

さて、上層をみると、275B・560B・635型式など下層から連続する型式に、290B型式や560新種2が加わる。上層に290Bが加わる点は3区分における状況をもみても頷ける。なお、最上層からは第5段階に属する208Ba型式が1点、第4段階に属する「平井」銘の文字瓦901B型式が1点出土しており、3区分調査の上層にも第4段階の資料が含まれることから、上層・最上層については一部後世の資料の混入もあって考えられる。

以上をまとめると、次のとおりである。

- ・下層（及び最下層）は老司Ⅱ式ないし老司Ⅱ式に関わる型式に限定され、560B型式は範傷が全て進行し、560型式の新種2も出現している。また、一枚作りとされる582型式もこの段階で存在する。なお、出土瓦の様相を鑑みると、8世紀前半よりも遡ることはない。

- ・中層になって鴻臚館式（223・635型式）が登場し、290型式もA型式だけでなくB型式が登場する。また、一枚づくりの688C型式が含まれる。

- ・上層（及び最上層）では、老司Ⅱ式などよりも鴻臚館式のほうが主体となる。一方、異なる時期の型式も含まれ、最上層部分には別遺構の掘削や混入などが若干影響している可能性を考慮しなければならない。

今回、SD2340出土瓦の整理を通じて、老司Ⅱ式と鴻臚館式の出現順序に対する一つの傍証が得

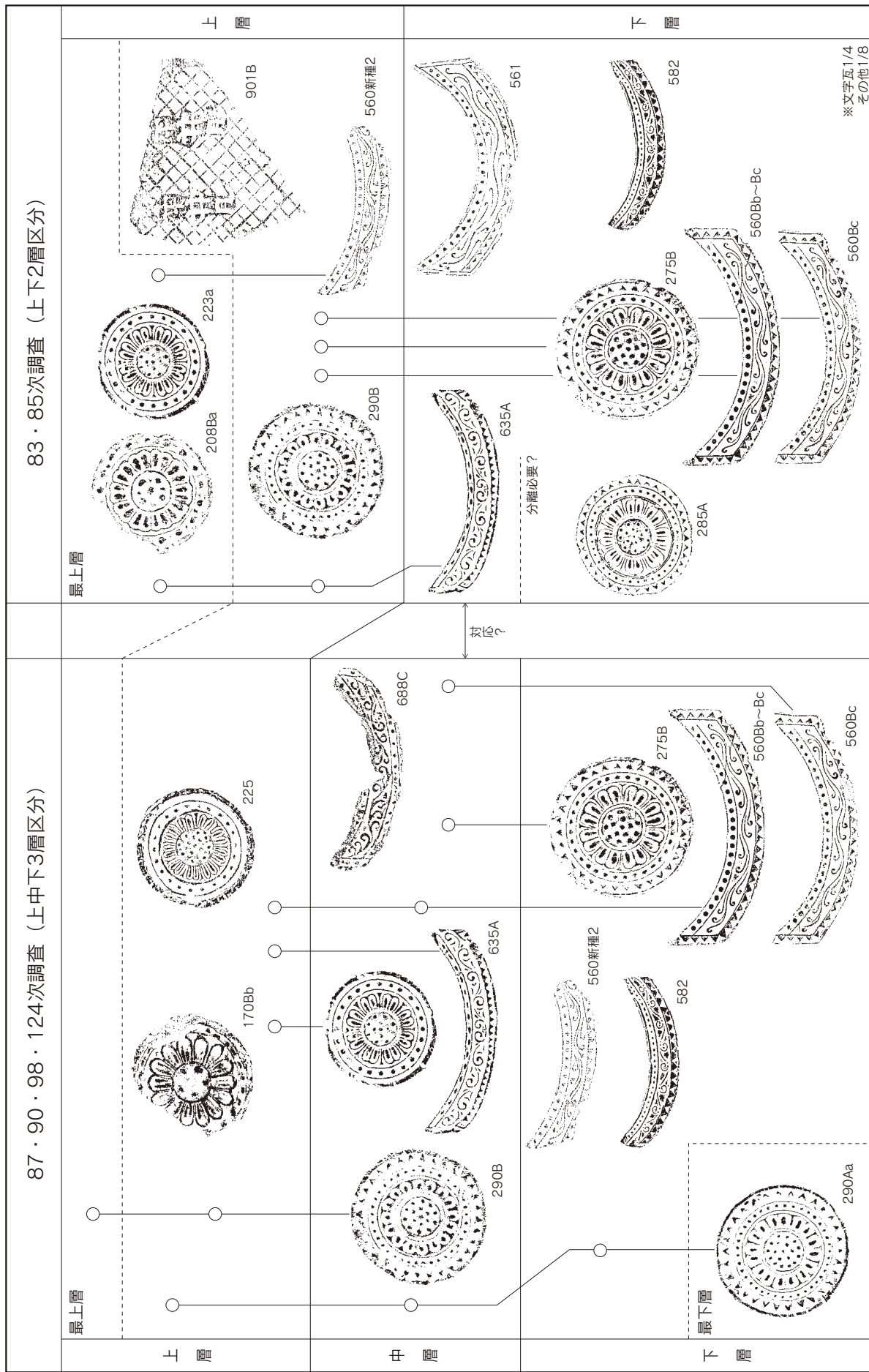


Fig.117 SD2340出土瓦の様相 (1/4・1/8)

られたと考える。ただ、大宰府Ⅱ期政庁の整備から天平初年ごろまでの極めて短期間のうちに、様々な型式が登場しており、各型式の微妙な時期差を整理しなければならないが、ここでの検討だけでは不十分であるため今後の課題としたい。

【SD320】SD320はSD2340よりも規模が大きく、土器類の時期幅が広いこともあり、多様な瓦磚類が膨大に出土している。14次補足調査では上中下の大きく3層に分け、76次調査では上中下に最下層を加えた4層区分を行っている。また、104次調査は遺構の範囲確認を目的としているため、最上層のみの掘削に留まり、遺物量が少ない。最初にSD320の調査を行った14次調査区の資料については、取り上げ単位と層序との対応が必ずしも明確ではなく、資料の振り分けが容易でないが、出土層位、グリッド、取り上げの日付などの諸情報を整理し、改めて上中下の3区分に仕分けた。そのため、他の調査時の資料よりも多少区分に不安が残る。

以下、上中下の3区分をもとにその様相をみてみたい。

下層（及び最下層）をみると、軒丸瓦では223・275B・276・285・290・291型式などSD2340の下層とも対応するような第2段階の典型的な一群が出土しているが、第3段階の108型式も含まれる。軒平瓦でも560B・560新種1・560新種2・561・635など第2段階の主要型式が揃う中で、第3段階に属する657・688型式も含まれ、さらに第4段階とされる662Ba型式も1点ある。SD2340では上層以外に文字瓦はみられないが、SD320では下層から18型式85点が出土している。76次の最下層には3点の文字瓦が確認でき、第5段階の軒先瓦に伴う文字銘の型式も含まれるなど時期的に新しい資料も確実に存在する。この状況はSD320が流水と滞水を繰り返し埋没していった堆積過程が要因と考えられ、溝の機能を維持するための再掘削も想定される。

中層をみると、軒丸瓦では第2段階の瓦が多数を占めるが、第3段階の077・143型式や、第4段階の066・145・170、第5段階とされる133・208型式などが出土している。軒平瓦でも主体は下層で出土していた第2段階の諸型式であるが、第3段階の657・688型式、第4段階の510・642B型式、第5段階の576・625型式が出土している。文字瓦では、38型式191点と種類・点数ともに倍増し、第4段階だけでなく第5段階の型式も一定量を占める。下層に比べると、明らかに新しい段階の瓦の量が増えているが、第2段階から第5段階までの資料が混在し、層序に従って厳然と変遷する状況にあるとはいえない。

上層をみると、軒丸瓦ではほとんど下層・中層でみられた型式がそのまま出土している状況にあるが、第5段階の132型式など僅かに新たな型式もみられる。軒平瓦もほとんどが下層・中層で登場しており、新たな型式は第4段階の580型式が挙げられる程度である。文字瓦も大半は中層までではほぼ出揃っているが、45型式191点と欠落していた型式を埋めるように多様化している。

このような様相をまとめると、次の諸点になる。

- ・下層の状況から、溝の開削時期は8世紀前半に遡ることは確かであるが、流水や滞水の繰り返し、あるいは人為的な掘り直しなどにより下層でも新しい時期の資料が混在する。
- ・中層の状況から、溝は徐々に埋没していつていることがわかるが、やはり新古の資料の混在が認められる。
- ・上層の状況は、概ね中層の様相に近く、顕著な差異は見出せない。第Ⅲ期政庁になってからの時期の資料が豊富に認められる一方、中世期の資料が認められないことから、第Ⅲ期政庁の終焉とともに機能を失った可能性がある。

区画溝 不丁地区には多数の溝が発見されているが、先述の境界溝と同様に主要な区画溝がある。そこで、瓦磚類が出土した溝について様相を整理しておこう。

位置関係から条坊との関連が問題となる溝として、SD2015・2335・2350・2470などがある。このうちSD2015は2段階の変遷があり、古段階をA、新段階をBとして把握されている。古段階のAでは275B型式と560Bb～Bc型式の老司Ⅱ式の組合せのみが出土し、新段階のBになって223aや635型式の鴻臚館式が加わり、さらに老司式の変種である561型式も出土している。なお、層位は不明であるが第3段階の657型式も出土しており、新段階に含まれると考えて良いならば出土土器との対応関係も良好といえる。SD2340に近い様相といえようか。

SD2335はSD2340が埋まった後に設けられた石組み溝で、第2段階の276型式が1点出土しているが、出土土器からすると溝の時期に比べやや古相の瓦といえる。

SD2350は、上記のSD2335や建物SB2355・2365を切る。軒先瓦をみると、第2段階の225・290B型式、第3段階の657型式、第4段階の058b・145b・170Bc・653型式など多様で、文字瓦も8型式15点が確認できる。伴出する越州窯系青磁などと新相の瓦類が対応するとみられる。

SD2470は、軒先瓦では223型式・560B・560新種2・635型式など第2段階の型式に限られるのに対して、文字瓦903G型式が1点出土している。出土土器類からすれば、この文字瓦は混入品の可能性が考えられる。

その他の区画溝 SD320の埋没後に併行するように掘削されたSD2010は、第2～3段階の軒先瓦が数点出土しているが、第5段階の903A型式を含む5型式6点の文字瓦が出土している。SD320との重複関係からすれば文字瓦の時期を採るべきであろう。

SD2359は、SD2350と平行する東西溝で、出土瓦には第3段階の657a型式、第4段階の170Bb・601A、第5段階の208Ca型式などとともに、第4および第5段階の文字瓦が4型式6点出土している。出土土器は極めて少ないが、瓦類の内容からみてもSD2350と同時併存していた溝である可能性が高い。

SD2469は、不丁地区南側を東西に区切る溝の一つとして重要であるが、第2段階の560B・635型式が僅かに1点ずつ出土している程度である。それでも、出土土器との齟齬はないだろう。

SD2528は、境界溝SD2340の埋没後に設けられた南北溝で、石組み溝SD2335とも連結する可能性が高い。出土した瓦は、第2段階の223・225・290Aa・635型式、第3段階の582・657・657a型式がそれぞれ1点ずつである。出土土器との対比からすれば、第3段階の資料が時期を考える上で重要といえよう。

不丁地区の最南端で確認された東西溝SD4570は、南からSD4571が接続することでT字状となる区画溝で、第2段階の275B・290B・560B・560新種2型式や、第3段階の058a・143a型式とともに、第4・第5段階に属する文字瓦7型式10点が出土している。分層による下層からも第4段階の文字瓦901D型式が出土しており、出土土器をみても時期的に後出する溝といえよう。

SD4566は不丁地区南側を東西に走る溝で、第2段階の223・285A・290B・560型式が1点ずつ出土し、時期的にはまとまるが、出土土器からすれば第4段階(古くても第3段階)の瓦が出土するはずで、土器を重視すればいずれも混入資料と考えられる。

この他、区画溝とはいえない難いが、SD2340より東側の政庁前面広場側に掘削されたSD2337では、第3段階の108型式1点・657型式2点が出土している。出土土器はごく僅かであるが、

概ね齟齬はないだろう。

③井戸

不丁地区では15基の井戸が確認できるが、必ずしも遺物には恵まれない。以下、若干ながら瓦類の出土をみた井戸についてみてみよう。

SE2414は土器の出土がみられなかったが、第2段階の635型式2点、635A型式1点が出土している。8世紀前半代の井戸となれば希少な事例といえるが、確証を得るには至らない。SE2503はSD320の埋没後に掘削された井戸であるが、第4段階の文字瓦901C型式1点のみの出土で、SD320の埋没時期を考えると、井戸の掘削時期より古い遺物の混入と考えられる。SE2510は、SD2340の埋没後に掘削された井戸である。井戸枠の一部に使用された瓦類には、第4段階の601A型式や、第5段階の902C・903C・903Fなどのほか、906C・D型式がみられる。出土土器と対応するのは第5段階の資料群である。SE4051では、掘方から第2段階の290B型式1点が出土しているが混入品で、出土土器を考慮すればむしろ埋土より出土した901L型式2点、902I型式1点、903C型式1点が井戸の存続時期を示していると判断できる。この他、SE4031で901Gb型式1点、SE4032で902E型式1点、SE4033で901C型式1点が出土しているが、出土土器に近い段階の資料といえよう。

④その他の遺構

SK4573はSB4562・SD4566・SK4574を切る廃棄土坑で、第4段階の901C型式1点、第5段階の903I型式1点が出土している。SD2340の埋没後に設けられた石組み暗渠SX2485では、掘方から223型式1点が出土しているが、埋土からは「大」銘の915A型式1点が出土している。瓦組遺構SX2501からは、901B(2点)・901C(1点)・910新型式(2点)が出土している。

iii. まとめ

ここまで、栗原氏の5段階分類に従いながら主要遺構の様相を眺めてきた。出土型式の羅列に終始した感も否めないが、各遺構の年代観を考える上で重要な情報と考えている。そのなかでもSD2340出土瓦の整理からは8世紀前半代の限られた時期における瓦群の組成や変遷について一定程度の成果があったと考える。一方、SD320については出土層位を細かく検討したものの新古多様な瓦類の混在により上限と下限について一定の見通しを得るに留まった。その他、建物や溝、井戸については紙幅の都合もあり遺構の時期推定に有益と思われる事例についてのみ取り上げた。政庁周辺官衙の中では不丁地区が最も瓦磚類の出土が多いが、大半は区画溝などからの出土で、本来の帰属を示すような状況はSB370以外確認できていない。瓦から捉えられる様相については述べたつもりであるが、課題もなお多い。

参考文献

- 石松好雄・高橋章 1978「大宰府の瓦について(二)」『九州歴史資料館研究論集』4
九州歴史資料館 2000『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』
栗原和彦 1998「大宰府史跡出土の軒丸瓦―編年試案への模索―」『九州歴史資料館研究論集』23
栗原和彦 2000「大宰府史跡出土の軒平瓦」『九州歴史資料館研究論集』25
栗原和彦 2002「第Ⅵ章 出土遺物(1)瓦磚類」『大宰府政庁跡』九州歴史資料館

2) 土 器 (Fig117~119)

不丁地区官衙は、幾つかの施設の画期を経て8世紀前後から11世紀の長期に亘って継続し、段階的な整備や改修が行われていった。ここでは、遺構の切合いや埋没状況などから、まとまりのある土器群を抽出して画期や変遷を検討する。

①東境界溝SD2340と出土土器群

溝SD2340堆積層は大きく上・中・下層に分かれ、多少の差異はあるが最下層に流水を示す砂層があり、中層(85次調査では下層)に木簡が出土した滞水を示す粘質土層が厚く堆積している。北側の87・90次調査区では、最下層茶褐色砂層が腐植土や粘質土形成以前で層位的にも分離される。そして87次中層黒灰色粘質土(青灰色粘質土)からは、「糟屋郡紫草甘根」,「怡土郡紫草甘根」,「薩摩国枯根」等の多量の木簡や製塩土器をはじめ、須恵器類を中心に器種構成を理解できる土器群が出土している。これに対して、南側の85次調査区北側(QM37)下層黒灰色粘質土から「天平六年」銘木簡や老司Ⅱ式軒平瓦が、南側(QJ37)下層から「糟屋郡紫草甘根」,「岡郡紫草」がそれぞれ出土している。そして、この上層暗茶灰色粘質土から「大城」銘墨書須恵器皿が出土した。さらに98次調査では、調査区南側(QP37)中層黒色土より「為班給筑前筑後肥等基肆城…」銘木簡が出土している。なお、この調査において南側の85次下層と98次中層が同一層と理解されている。また、98次中層には須恵器が多く僅かに土師器がみられるが、この上層では須恵器以外に土師器類、緑釉陶器碗、灰釉陶器碗、中国製無釉陶器が出土している。他に85次上層では黒色土器、越州窯系青磁、灰釉陶器碗が出土した。このように溝南半では上層に新期の遺物が出土し、完全に埋没せずに僅かに開溝していた可能性がある。

木簡出土層
の土器群

SD2340出土土器 (Fig117) 木簡出土層に該当する。85次下層,87次中層青灰色粘質土(黒灰色粘質土)や90次中層青灰色粘質土,98次中層黒色土,124次下層出土土器群が位置づけられる。土器群は、須恵器が多く土師器は僅かである。須恵器蓋は天井部が比較的高く、撮みは擬宝珠や低平なボタン状で口縁端部を嘴状に折り曲げる。外天井部を回転ヘラケズリやヘラ切りする。坏は底部の境をヘラケズリして体部を直線的に開き、低い方形や僅かに踏ん張る高台を貼付する。大半は外底部をヘラ切り未調整である。器種構成が分る90次青灰粘質土には高坏、鉢、壺、甕等がある。高坏の坏部は大きい箱形で裾部は喇叭状に開く。鉢には丸みを持つ底部形態や鉄鉢があり、短頸壺の肩は張らず胴部が球形となる。土師器の蓋坏は須恵器を模倣し、横位のミガキを施す。土師器皿は底部と体部の境に丸みを持ち、外底部を回転ヘラケズリするが、87次中層黒色粘土や98次黒色土では手持ちヘラケズリがある。98次上層では須恵器蓋の口縁端部を折り曲げて踏ん張るものや肥厚させるものがある。須恵器坏は体部を直線的に開き、高台を底部端に貼付する。土師器蓋は外天井部を回転ヘラケズリ後にミガキ、坏は体部下位から外底部を回転ヘラケズリ後にミガキを施す。

②造営開始期の土器群

SK388出土土器 (Fig118) 17次調査土坑SK388床面に遺棄された状態で出土した土器群である。器種構成をみると、須恵器短頸壺・長頸壺や須恵器平瓶が多く僅かに須恵器甕や土師器高坏がある。短頸壺は大きい口縁部に丸みを持った胴部が特徴的で底部は平底である。長頸壺は頸部がハ字形に開いて体部に丸みや僅かな屈曲を持ち、底部は平底か脚を持つ。平瓶は口縁部をハ字形に開き体部から胴部に丸みを持つ。いずれも肩部や胴部にカキ目、二重の沈線を

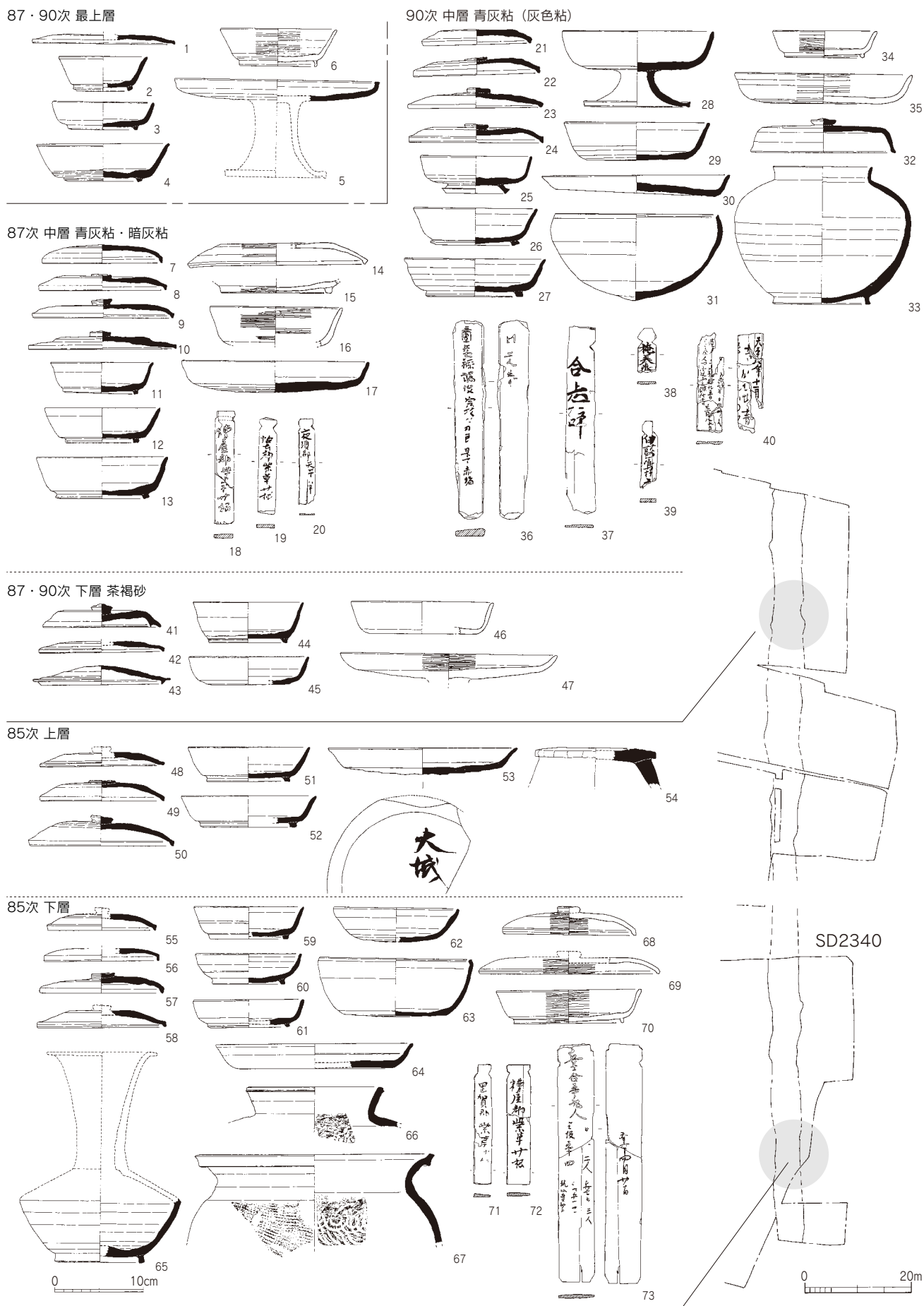


Fig.118 SD2340出土土器群 (1/6)

Tab.16 SD2340層位と出土木簡関連表

SD2340	85次南	木簡銘・報告番号等	土器Fig	85次北	木簡銘・報告番号等	土器Fig
上層	茶灰色土 黒灰色土 暗灰色土			茶灰色粘質土 茶灰色砂		
中層	暗灰砂 暗灰色土			暗茶灰色粘質土	「大城」銘土器	
下層	暗青灰色粘質土 黒色粘質土 黒色土	「肥前國松浦郡」 「糟屋郡紫甘根」 「網賀郡紫草」 「加麻郡」	7・10・12・14・17・ 18・20・21・24・26・ 27・32・33・35・45・ 51～55・62・81・82	Fig44・45 黒灰色粘質土 黒色土	「兵士合五十九人」 「天平六年」	1・8・28・37 Fig44・45
最下層	暗青灰色粘質土			暗灰色粘質土		
	98次	木簡銘・報告番号等	土器Fig			
上層	茶褐色土					
中層	黒灰色土 黒色土 腐植土	「基肆城」 「□□八尺」	84・86～88・90 89 85	Fig52		
下層	灰白色砂					
	87次	木簡銘・報告番号等	土器Fig	90次	木簡銘・報告番号等	土器Fig
上層	黒色土 暗灰色土			茶灰色土 淡茶灰色土		
中層	黒色土 黒灰色粘質土 暗青灰色砂質土	「怡土郡紫草」 「糟屋郡紫草」 「夜須郡天平六年」 「薩摩國枯根」	6・16・23・29・30・ 31・36・42～44・46・ 47・49・50・56～58・ 63～66・68・70・ 72～76・79・80	Fig47・48 黒色粘質土 黒灰色粘質土 (灰色粘質土) 青灰色粘質土	「政所」銘土器 「豊後國海部郡」 「合志」「伊藍嶋」 「楠美嶋」 「三國兵士饗饌」	22・39・40 3～5・9・11・13・ 15・41・59・67・ 69・71・77・78・83 2・48 Fig50・51 Fig48～50 Fig48
	暗茶灰色粘質土 茶灰色砂質土 黒茶色粘質土			腐植土		Fig48
下層	茶灰色粗砂質土 茶褐色砂	老司II式軒平瓦		茶褐色粗砂		

※Figは「遺物編1」

巡らし、胴部下位を中心に回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリ、底部を多方向にヘラケズリする特徴がある。

SX2480出土土器 (Fig118) 98次調査流路SX2480より一括投棄した状態で出土した土器群である。SD2340に切られ、それ以前に位置づけられる。須恵器には蓋、身、皿、高坏、壺、甕がある。蓋は摘みが無いものや宝珠状の摘みがあり、殆どが返りを持つ。口径は11～13cm、14～15cmである。坏はハ字形に大きく踏ん張る有高台と無高台に分かれ、前者は口径14～16cm、後者は口径11～12cm、14～15cmである。高坏は坏部の体部下位に丸みを持つ。壺は口縁部を逆ハ字形に開き、体部下位に丸みを持つ平底である。平瓶も同様の胴部形態をとる。蓋天井部を回転ヘラ切り後に未調整、回転ヘラケズリしてカキ目調整するもの、無高台坏の外底部を回転ヘラケズリやヘラ切りする。土師器には、蓋、坏、皿、高坏、鉢、甕、甗等がある。坏には体部内面に螺旋状暗文、外面にミガキを施し、外底部をヘラケズリする。皿は口縁部が丸く内湾して外底部を手持ちヘラケズリするもの、体部内面に放射状や螺旋状の暗文を施すものがある。

一括投棄
状態

③重層的な溝堆積層の土器群

西境界溝SD320は、大きく上・中・下層に分かれる。14次調査最下層では8世紀後半を主体とする土器や老司II式軒先瓦や鴻臚館式軒先瓦が出土しているが、9世紀末頃の土器類もみられる。そのため溝開削の上限は推定の域を出ないが、遅くとも8世紀後半には機能していたことは確かである。最下層砂層堆積の上層には、各調査区で腐植土が形成される。14次調査腐植土・黒色砂、14次補足調査中層腐植土・黒色粘質土、76次調査腐植土Dなどである。このうち14次補足調査中層腐植土・黒色粘質土出土土器は時期的にまとまりを持つ器種構成である。

14次補中層腐植土・黒色粘質土出土土器 (Fig118) 土師器皿、坏、碗、鉢、甕、黒色土器A類が出土している。皿は無高台や有高台で前者は外底部をヘラ切りし、一部板状圧痕がある。土師器坏類は、体部を直線的に開きながらナデによる稜を明瞭にし、外底部はヘラ切りで板状

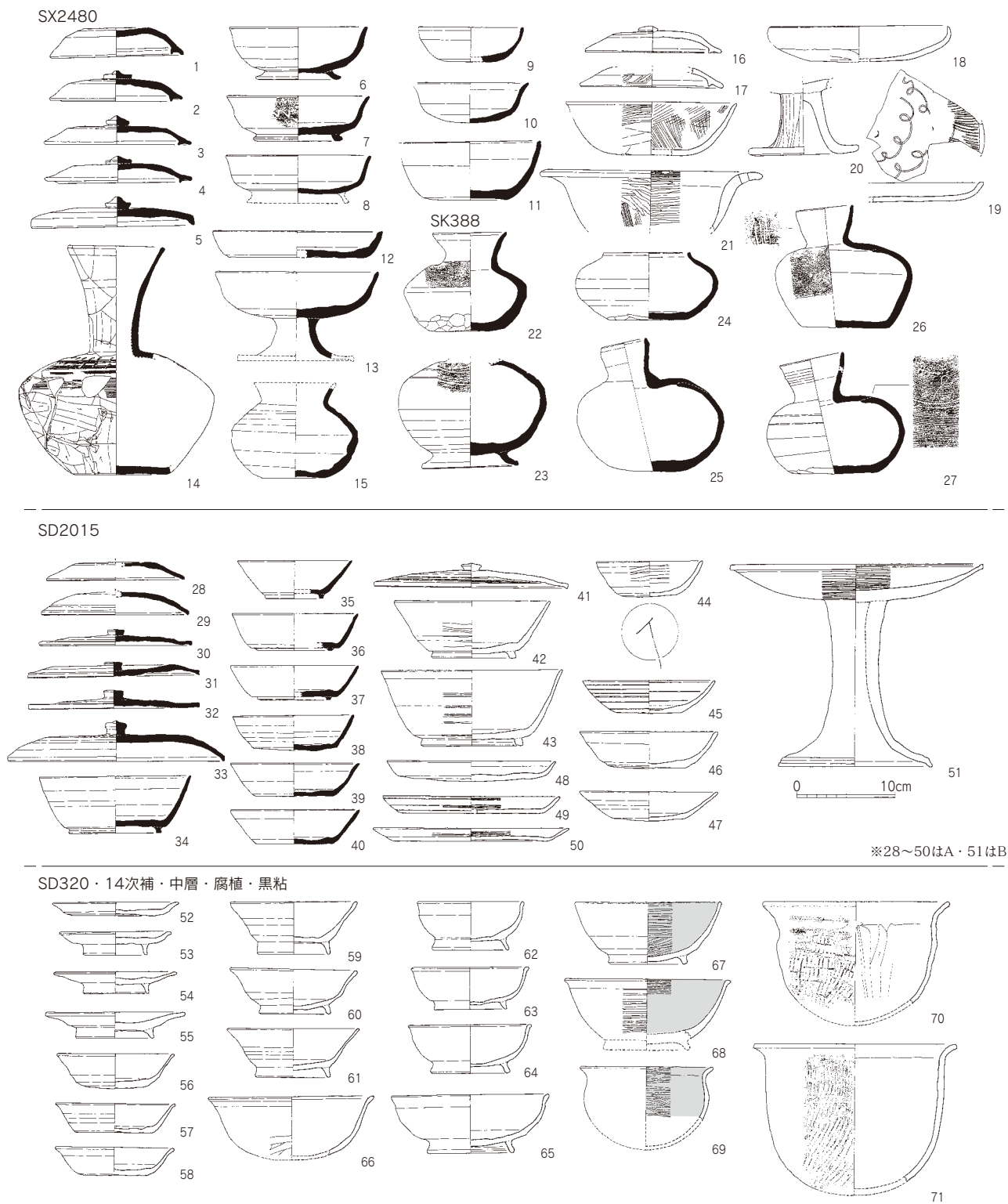


Fig.119 その他の基準土器群 (1/6)

圧痕を残す。口径11.0～12.3cmでまとまりを持つ。土師器碗類には下位にロクロナデによる稜を明瞭にして体部が直線的に開くもの、体部下位に丸みを持って口縁部を外反させるものがある。ハ字形となる高台を外底部端に貼付し、外底部はヘラ切りで一部板状圧痕を持つ。土師器甕には短い口縁を外反させて直線的な胴部と底部に丸みを持つものや外面に胴部に縦位のタタキを施すものがあり、技術的にもまとまりをみせる。黒色土器A類碗は、体部下位に丸みを

みせ、方形の高台を貼付する。またA類甕には体部下位を大きく納めるものや球形になるものがある。この他、刑州窯系白磁碗I類、越州窯系青磁碗、緑釉陶器壺、黄釉褐彩水注が出土している。

④その他土器群

SD2015出土土器 (Fig118) 76・85次調査東西溝SD2015より出土した土器群である。下層Aと上層Bに分かれる。須恵器の蓋は低平な天井部を回転ヘラケズリ後にナデるものや未調整、口縁端部を肥厚させ僅かに屈折するものや丸く納めるものがある。坏は直線的に体部が開き、外底部端に低い高台を貼付する。無高台坏も体部は直線的に開き、外底部はヘラ切り後にナデるものが多い。土師器坏の底径は小さく、体部下位から外底部を回転ヘラケズリし、内外面に横位のミガキを施す。他に外底部をヘラ切りしてナデ消すものや板状圧痕を残すものもある。皿も坏と同様の調整で仕上げる。土師器碗は直線的に逆ハ字形に開く体部に低い方形や高くハ字形に開く高台を貼付し、体部にミガキを施すものがある。上層には須恵器坏に無高台で外底部をヘラ切りするものがある。土師器類の器形や調整は下層Aと大きく変わらないが、土師器には小型短頸壺類もある。85次調査では緑釉陶器や灰釉陶器、越州窯系青磁碗等が出土している。

SK2007出土土器 76次調査でSD320に上部を削平された径1.0mの土坑より出土した土器群である。須恵器、土師器がまとまって出土している。須恵器の蓋は突起状の撮みを持ち、口縁を僅かに肥厚させて端部を折り返す。外天井部は回転ヘラケズリ後にナデる。有高台坏は低い方形の高台で、無高台坏には体部下位から外底部を回転ヘラケズリするものがある。土師器類にはミガキを施すものが多い。坏蓋は外天井部を回転ヘラケズリ後、内外面に横位のミガキを持つ。坏は小さい底径に対して体部が大きくハ字形に開く。体部外面下位から外底部を回転ヘラケズリして内外面にミガキを施す。土師器碗も同様に体部下位から外底部をヘラケズリする。土師器皿は外底部を回転ヘラ切り後にナデ消している。

SK4573出土土器 187次調査SK4573出土土器群である。SK4573は長軸6.4m以上×短軸3.3mの土坑で、埋没層黒色中出土土器群はまとまりを持つ。須恵器坏蓋は口縁端部を丸く肥厚させて外天井部はヘラ切り後に粗雑なナデ、坏は体部が逆ハ字形に開き、外底部の端に低い方形の高台を貼付する。無高台坏は外底部をヘラ切りする。土師器坏は体部を大きく開き回転ナデ調整によって器壁の稜線を明瞭にするものが多い。外底部は回転ヘラ切り調整後、ナデ消しや板状圧痕を残す。碗は回転ヘラ切り後に高台を外底部端に貼付する。皿は器壁の厚い底部に対して体部は薄く大きく逆ハ字形に開く。外底部は回転ヘラ切り後にナデ消しや板状圧痕を残す。甕類には、肥厚する口縁に対して体部下位をヘラケズリするもの、球形で胴部を横位のナデで仕上げるものがある。緑釉陶器や灰釉陶器、黄釉褐彩水注片等が出土している。

⑤土器群の画期と変遷 (Fig119)

不丁I期土器 (7世紀第4四半期) SD2340開削以前でSX2480やSK388出土土器群が比定される。須恵器坏蓋は殆どかえりを有して宝珠状の撮みを持ち、外天井部は回転ヘラケズリやカキ目による調整がみられる。須恵器坏は体部下位に丸みを持ってハ字形に大きく踏ん張る有高台と無高台がある。壺は肩にカキ目を施して体部中位に丸みを持ち、体部下位を回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリする。平瓶も体部中位に丸みを持ち、壺と同じ調整がみられる。土師

器坏や皿には、内面に螺旋状文や暗文を施し、外面にミガキを施す搬入土器がある。

不丁Ⅱ期土器（8世紀第1四半期～第2四半期）SD2340中層出土土器が比定される。須恵器類が主体である。須恵器蓋は口縁端部を嘴状に折り返してボタン状の撮みを持ち、外天井部を回転ヘラケズリやヘラ切りする。坏は底部との境をヘラ切りして体部を直線的に開き、低い方形や僅かに踏ん張る高台を貼付する。皿は体部下位に丸みを残して外低部を回転ヘラケズリする。高坏の坏部は断面箱形で裾部を大きく開く。短頸壺は肩の張りは無く球形の体部で、鉢類には鉄鉢や直線的に体部が開く丸底を呈するものがある。土師器蓋や坏は須恵器模倣で横位のミガキを施し、皿は外底部をヘラケズリする。他に147次暗褐色土出土土器が該当する。

不丁Ⅲ期土器 建物を中心とする遺構変遷から、比較的長期に亘る時期区分となるが、遺構と遺物の対応関係からみると、a～c期に細分され、新器種の出現を含めて時期設定できる。

a期（8世紀第3四半期～第4四半期）SD2340廃絶後のSD2335や区画溝SD2015下層土器群が比定される。土師器類の器種構成が明瞭になる。須恵器蓋は低平な天井部で、口縁端部は肥厚しながら僅かに屈曲し、外天井部は回転ヘラケズリ後にナデや未調整がある。坏は体部が直線的に開き、外底部端に低い高台を貼付する。土師器坏の底径は小さく、体部下位から外底部を回転ヘラケズリして内外面に横位のミガキを施し、外底部に板状圧痕を残すものやヘラ記号もみられる。皿も同様の調整で仕上げる。土師器碗は須恵器と同様の形態をとる。他にSK2007土器が該当する。

b期（9世紀第1四半期）SD2015上層やSX3838土器群が比定される。SD2015上層土器群は、器種構成や調整技術からだけでは下層資料と大きな差異は無いが、土師器坏には体部下位をナデるものがみられる。新器種として、緑釉陶器や灰釉陶器等が認められる。

c期（9世紀第1四半期～第2四半期）SK4573 黒色土出土土器が比定される。須恵器類の最終段階にあたる。撮みの無い須恵器蓋は口縁端部を丸く肥厚させ、外天井部を粗雑にナデる。土師器坏は体部を大きく開き回転ナデ調整によって器壁の稜線を明瞭にするものが多く、外底部は回転ヘラ切り後にナデ、板状圧痕を残す。土師器皿の体部は器壁が薄く逆八字形に開く。甕類には肥厚する口縁に対して体部下位をヘラケズリし、球形で胴部を横位のナデで仕上げるものがある。緑釉陶器や灰釉陶器、越州窯系青磁、黄釉褐彩水注片等が出土している。

不丁Ⅳ期土器（9世紀第3四半期～10世紀第1四半期）一括資料を見出し難い。SD320では、14・76次最下層砂の土師器坏、黒色土器A類碗やB類碗、76次腐植土D中の土師器類の一部に認められる。またSD4570B上層土器群も概ねこの時期に比定される。土師器碗の体部は直線的に開きながら大きく逆八字形に開く高台を貼付する。土師器坏は体部と底部の境に丸みを持ちながら口縁部を外反させる。外底部はヘラ切りや板状圧痕がみられ、黒色土器碗はA・B類共に体部に丸みを持ち、八字形に開く高台を貼付する。燻した器面にミガキを施す。

不丁Ⅴ期土器（10世紀第2四半期～第3四半期）SD320 14次補足調査中層腐植土・黒色粘質土出土土器群が比定される。土師器小皿には有高台がみられる。土師器坏は体部を直線的に開きながらナデによる稜を明瞭にし、外底部ヘラ切りで板状圧痕を残す。土師器碗は下位にロクロナデによる稜を明瞭にして体部が直線的に開くもの、体部下位に丸みを持って口縁部を外反させるものがある。外底部はヘラ切りで一部板状圧痕を持つ。土師器甕は短い口縁を外反させて直線的な胴部と底部に丸みを持つものや外面に胴部に縦位の叩きを施すものがある。黒

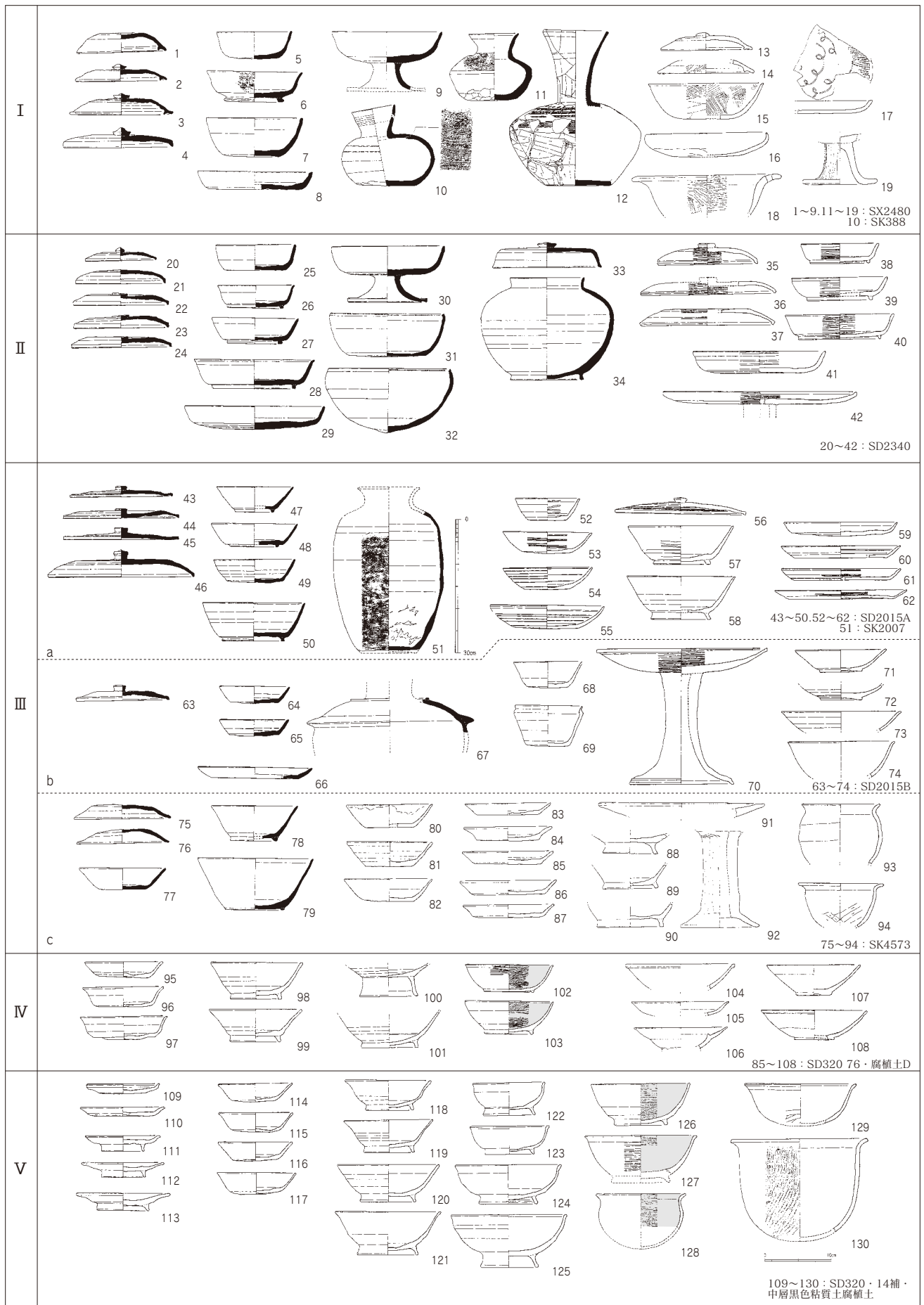


Fig.120 不丁地区土器期別変遷図 (1/8)

色土器A類椀は、体部下位に丸みを持ち方形の高台を貼付する。

⑥不丁地区官衙と土器群をめぐる問題

不丁Ⅰ期SX2480やSK388が直接、不丁地区官衙の前身にあたるか否かは不明であるが、出土土器群の他に鍛冶・铸造遺物が炭化物と共に出土する状況や漆付着土器がみられる点などから、大宰府における官衙造営に関わる痕跡とみてよいであろう。また不丁Ⅱ期SD2340は、このSX2480を切ることから、おそらく8世紀前後の開削とみられ、記年銘木簡との出土から天平年間頃までは機能したことは確かである。そして、この溝が開削から機能した天平年間までにⅡ期大宰府政庁が成立する。政庁Ⅱ期成立頃の土器群は、政庁Ⅰ期新段階から漸的に追える型式であり、Ⅱ期造営に関する鎮壇具である長頸壺や短頸壺が時間軸上の定点に置かれている(九州歴史資料館2002)。不丁地区内でこの時期の明確な遺構や一括資料が見出せない点は、上層遺構の攪乱だけでなく政庁周辺官衙造営過程の時間差を示している可能性が高いとも言える。

不丁地区官衙の遺構変遷における大きな画期は、このSD2340の廃絶にある。木簡が出土した滞水を示す厚い堆積層の形成は短期間であり、さらに上位の石組遺構SD2335やSX2485の造営によって、不丁Ⅱ期SD2340出土土器は上層遺構出土土器とも明確に区分される。この上層遺構に関する不丁Ⅲa期土器群は土師器類が主体であり、土器様相や調整技術からみてもⅡ期土器群と明瞭に区分される。しかし、このⅢa期の時間的な下限を示す土器群を明確にすることは困難である。Ⅲa期の基準となる土器群の多くは溝出土資料が中心であり、遺構との明確な切り合いを持って設定されたものはない。厳密にみると、遺構の最終埋没資料が時間軸上の下限として推定されているに過ぎない。つまり、区画溝SD2015上層やSD2470の出土土器群から9世紀第1四半期にまで及んでおり、時間幅を考慮したⅢb期が設定される所以である。その画期は、緑釉陶器や灰釉陶器、越州窯系青磁碗の出土によって明確に位置づけられる。また、一方で断絶を見出し難い土器群の継続性は、不丁地区施設の継続性を示すものと理解される。

不丁Ⅲc期土器群は、南区域に展開するSK4573等の遺構群の廃絶に関する資料が基になる。土器群は、須恵器の消滅と定量的な土師器坏や土師器皿類の登場によって区分される。これらは、土器様相からみてもⅢb期土器群の下限と接触するが、坏や皿の形態や調整から見ても明らかに次段階に位置づけられる。ただし、明確な遺構同士の切合いによるものではなく、土器様相や型式を考慮した設定となる。さらに不丁Ⅴ期SD320中層腐植土・黒色粘質土出土土器群については、大溝の中では比較的まとまりを持っている。この時期の土器群には、政庁Ⅱ期下限を示す焼土を含む土坑SK012出土土器群と同型式が含まれ、10世紀第2四半期頃に比定される。

以上のように、不丁地区官衙の動向と出土土器群を捉えていく時、東境界溝SD2340の廃絶という絶対的な基準が重視される。そこから、遺構群を時間軸上に上下に配することによって、土器群の変遷もある程度理解することができる。ただし9世紀以降については、一時期の様相として土器群を捉えにくい状況となっており、それは不丁地区官衙における連続的な施設の造営と廃絶に関っている可能性が高いと考えられる。

不丁Ⅱ期
SD2340
出土土器

3) 生産関連遺物

本項では、冶金関連遺物、製塩土器、漆附着土器の生産関連遺物に焦点を当て、不丁地区における生産活動の様相を検討する。

〔冶金関連遺物〕

不丁地区で出土する鉄滓の総重量は約103kgで、その生産量の高さは特筆に値する。ただし、本地区で操業された冶金工房は大宰府官衙と重層的に存在するため、工房自体の遺構は大半が消失する。つまり、不丁地区で操業された冶金工房の実態を解明するには、発掘調査で検出された炉跡を基点としつつも、層位的検討をふまえた上で周囲の溝や土坑に埋没した鉄滓や羽口等の廃棄品を検討する必要がある。以下では、「官衙域整備以前の様相」と「官衙域整備以後の様相」に分けて、不丁地区出土の生産関連遺物を整理する。

総重量100
kgを超える
鉄滓

①官衙域整備以前の様相

官衙域整備以前の冶金関連遺構は、不丁Ⅰb期以降の官衙と重複することもあり、未検出である。その実態を示す資料は、官衙域整備時の不丁Ⅰa期に埋め立てられた自然流路SX2480埋土出土品のみとなる。本遺構の堆積状況は下層が自然堆積で、上層が人為的な埋め立て土となる。特に上層に炭化物や焼土が含まれており、多量の土器片に混じって冶金関連遺物が出土した。つまり、SX2480出土の冶金関連遺物は、大宰府Ⅱ期政庁とはじめとした大宰府官衙の本格的整備直前に堆積したと考えられる。SX2480は85・98次調査区中央部で検出され、98次調査区で面的に埋土が掘削された。このため、現状でのSX2480出土品は、98次調査区中央部に集中する。

98次調査区のSX2480出土冶金関連遺物は、坩堝・取瓶、鋳型、羽口、炉壁、鉄滓、銅滓となる。出土鉄滓の総重量は約1.2kgを量る。なお、上面検出のみの85次調査区では、SX2480上層に堆積する包含層に鉄滓出土地点が集中しており、その総重量は約3.0kgを量る。SX2480出土品でとくに注目できる資料は、複数の炉壁片である。断片のみのため、炉の規模までは復元できないが、自立炉であったことが分かる。出土鉄滓の大半は椀形鉄滓や不定形の銅滓で構成されることから、この自立炉は鋳造に用いられたと考えられる。複数点出土した取瓶や鋳型等がその関連遺物となる。また、鋳造炉だけでなく、椀形鉄滓の存在から鍛冶炉も併設されていたと考えられる。

鋳造用自立
炉

②官衙域整備以後の様相

まず、不丁地区で検出された炉跡と周辺出土遺物を検討する。その後、東西境界溝や区画溝、土坑等に埋没した冶金関連遺物を整理することで、不丁地区での官衙整備以後の冶金生産の様相に迫る。

不丁地区の炉跡 不丁地区で検出された炉跡は、84次調査区中央で近接するSX2421・2422・2423のみである。このうち、SX2421は不丁Ⅲa期に属する流路であるSD2419埋土直上に位置する。SD2419は8世紀後半に埋没するため、これらの炉跡の操業時期は不丁Ⅲb期（9世紀前半）以降に求められる。また、3基の炉跡は調査区南端にまとまるSX2421・2422と調査区中央に位置するSX2423の2者に離れ、それぞれで炉跡周囲（直径約5m）に焼土層を形成する。各焼土層に含まれる鍛冶・鋳造関連遺物の様相をまとめると、SX2421・2422の焼土層からは坩堝・取瓶、羽口が出土し、鉄滓の出土総量は約1.8kgとなる。SX2423の焼土層

から埴埴・取瓶，鋳型，羽口が出土し，鉄滓の出土総量は約1.6kgとなる。また，両焼土層の上層に堆積する包含層からは，総計約4kgの鉄滓が出土した。

東側境界溝SD2340出土冶金関連遺物 不丁地区東側の境界溝SD2340は，83・84・85・90・98・124次調査区で検出され，第85・90・98次調査区で埋土掘削を伴う調査を実施した。SD2340は不丁Ⅰb期（7世紀第4四半期）に掘削され，不丁Ⅱ期（8世紀中頃）には埋没した。以下では，境界溝SD2340埋土に含まれる鍛冶・鋳造関連遺物を下層・中層・上層に分けて整理する。

不丁Ⅰb期に属するSD2340下層埋土は，90次調査区で検出されており，流水層であったことが判明している。出土した鍛冶・鋳造関連遺物は鉄滓・銅滓約0.1kgと微量であるが，不丁地区の北端（上流側）に集まる。

不丁Ⅱ期に属するSD2340中層埋土（滞水層）出土の鍛冶・鋳造関連遺物（埴埴・取瓶，鋳型，羽口，鋳滓）は，大きく2地点に遺物集中域を形成する。一つは，SD2340下層と同じ不丁地区北端（90次調査区北側）である。不丁地区北端の鍛冶・鋳造関連遺物は，いずれもSD2340埋土でも東側に集まる傾向にあり，大宰府政庁側から流れ込んだ可能性が高い。SD2340北端の中層埋土に帰属する鉄滓の総重量は約0.9kgで，包含層出土品は約0.8kgを量る。もう一つの集中域は不丁地区南側（98次調査区南側・85次調査区北端）である。出土した鍛冶・鋳造関連遺物の種類は，埴埴・取瓶，鋳型，羽口，鋳滓，炉壁である。SD2340南側の中層埋土に帰属する鉄滓の総重量は，約1.7kgを量る。

同じく不丁Ⅱ期に属するSD2340上層埋土出土の鍛冶・鋳造関連遺物では，90次調査区南側で埴埴・取瓶片，羽口片が複数出土した。

西側境界溝SD320出土冶金関連遺物 不丁地区西側の境界溝SD320は，14・76・104・110次調査区で検出され，14・76次調査区で埋土掘削を伴う調査を実施した。つまり，不丁地区検出の境界溝SD320は，北側（上流側）と南側（下流側）でのみ溝埋土の堆積状況が判明している。境界溝SD320は滞水と流水を繰り返す形で，不丁Ⅲ期には機能していた。溝の埋没が進むのは不丁Ⅳb期（9世紀末）以降で，最終的な埋没時期は不丁Ⅵ期（11世紀前後）となる。以下では，境界溝SD320埋土に含まれる鍛冶・鋳造関連遺物を下層と中・上層に分けて整理する。

不丁Ⅳb期に属する溝埋土下層の鍛冶・鋳造関連遺物は，埴埴・取瓶，鋳型，羽口，炉壁となる。出土鉄滓の総重量は，上流側（14次調査区）で約2.4kg，下流側（76次調査区）で約1.1kgを量る。不丁Ⅴ期に属する溝埋土中・上層の鍛冶・鋳造関連遺物は，鉄滓である。出土鉄滓の総重量は，上流側（14次調査区）約2.4kg，下流側（76次調査区）で約0.4kgを量る。

このように，不丁地区西側の境界溝SD320は遺構規模（掘削土量）に比べて，包含される鍛冶・鋳造関連遺物は種類が豊富なものの，その数量は微量となる。また，これらの鍛冶・鋳造関連遺物に混じって，上流側の蔵司地区で集中的に出土する被熱遺物（被熱鉄鏃・被熱瓦）も

SD320
埋土から
被熱遺物

数点見られるため，SD320への流入範囲は比較的広域に及ぶことが推測できる。不丁地区内からSD320へ流入する鍛冶・鋳造関連遺物を抽出すると，76・85次調査区検出の東西区画溝SD2015出土品が目に見える。SD2015は不丁地区を東西に横断する区画溝で，不丁Ⅲb～Ⅳa期の限られた期間にのみ存在した。溝埋土の堆積状況から東側（SD2340）から西側（SD320）に流れ込む状況にあり，SD320との接続箇所では，集中的に羽口片や埴埴・



Fig.121 不丁地区鍛冶・鑄造関連遺物分布図 (1/1,000)

取瓶片が埋没する。SD2015が横断する不丁地区中央南側（147次調査区）は最も鍛冶・鑄造関連遺物が集中し、包含層出土品を含めると、鉄滓の総重量は約30kgにも及ぶ。

[製塩土器]

不丁地区官衙跡からは、破片を含めた総数1,398点もの製塩土器が出土しているが、その内訳は鹹水煎熬用の甕形土器（玄界灘式製塩土器：Ⅰ類）151点・10.8%、型作りによる円筒形の土器（六連式土器：Ⅱ類）697点・49.9%、同じく逆円錐形の土器（Ⅲ類）549点・39.3%であった。遺構の上ではSD320（159点・11.4%）、SD2015（130点・9.3%）、SD2340（133点・9.5%）が主立ったものであるが、129次調査区の溜りSX3838からも244点・17.4%が出土しており、残りの半数が各層位からの出土である（Tab. 5参照）。

Ⅰ類の製塩土器は1割程度の出土量であるが、鹹水を煎熬するための甕形土器であり、外面に厚く煤が付着しているものがあることから、製塩作業が官衙域内で行われた可能性を示唆している。Ⅱ・Ⅲ類の製塩土器は所謂焼塩壺で、両者は製塩土器であるとともに運搬容器でもあった。従って、Ⅱ・Ⅲ類の製塩土器は、製塩作業を行った場所から大宰府へと搬入されたものである。また、Ⅱ類の製塩土器は細長い円筒形を呈することから、内容物（塩）を取り出す際には土器を割らないと取り出せず、製塩土器の小破片が多量に出土する所以となっている。年代的には、7世紀後半から8世紀代において使用されたものである。

調査回数ごとに製塩土器の出土状況を見ていくと、14次調査では南北溝SD320に集中する。17次調査では礎石建物SB370及びSB386周辺に散在している。76次調査ではSD320及び溝SD2010・2015に集中する。83・84次調査では溝SD2419に集中し、他は灰褐土・茶灰土・茶褐土の出土である。85次調査の状況は、溝SD2015・2340・2470、土坑SK2479・2481及び茶褐土・暗褐土から出土しているが、QE45・46区の暗褐土に集中する傾向がみられる。87・90次調査では溝SD2335・2340に集中している。98次調査でも南北溝SD2340に集中し、流路SX2480からも出土している。104・110次調査では土層のみの出土であった。

124次調査では南北溝SD2340の出土で、129次調査では狭い調査区ながら建物SB2005・3824・3832の掘方から数点単位で出土している。他に、溝SD3818・3825・3835、土坑SK3834、溜まりSX3830・3838からの出土で、特にSX3838に集中している。147次調査では建物SB4030、溝SD4037・4044、井戸SE4052、土坑SK4050・4059、落込SX4065及び茶褐土・暗褐土・整地層等の層位から出土している。187次調査では建物SB4560・4564の柱掘方、溝SD4566・4567・4568・4569・4570・4571、土坑SK4573・4574・4576・4579及び暗褐色土・黄褐色土・黄灰色土・整地層等の出土である。

以上の如く、遺構の上では溝・土坑・落込・溜まり・流路及び建物の柱掘方内から製塩土器が出土しているが、遺構出土の製塩土器に関しては中身を取り出した後の廃棄と考えられる。一方、129次調査の溜まりSX3838からは炭化物とともに8世紀中～後半の須恵器蓋・坏・皿・高坏及び土師器蓋・坏・皿・高坏・小壺等の供膳具、須恵器鉢・甕の貯蔵具、土師器甕・甑・移動式竈等の炊事具及びⅡ・Ⅲ類の製塩土器が投棄された状態で出土している。また、129次調査区に西接する76次調査区のSD320からは文字の左半分を欠損するが「厨」と判読した須恵器蓋（Fig. 10-30）が出土しており、調査区内において井戸は検出されていないものの、墨書文字が「厨」であるならばSX3838近辺の建物を厨施設とみなすことも可能であろう。

〔漆附着土器〕

漆附着土器とは、土器の内外面及び断面に黒色・焦茶色或いは赤褐色の漆が付着している土器のことで、その用途は漆器及び漆塗り製品を製作する際のパレット（Ⅰ類）及び漆の運搬容器（Ⅱ類）である。また、漆器模倣品（Ⅲ類）・漆継ぎ土器（Ⅳ類）も漆附着土器の範疇に含まれ、不丁地区官衙跡においては総数485点が確認された。遺構的にはSD320が161点・33.2%、SD2340が57点・11.7%、SD2015Aが28点・5.8%、SX2480が17点・3.5%の出土で、全体の約5割を占める。他の遺構ではSD2419（6点）、SD4566（6点）、SX2344B（5点）、SX4065（8点）からも出土している。時期的には7世紀後半のものが66.2%と大半を占め、8世紀代においては前半が4.1%、中頃が4.5%、後半が8.0%であった。9世紀代は0.8%、10世紀代は1.6%と僅かな出土点数であった（Tab. 6参照）。

次に、調査回数ごとに漆附着土器の出土状況を見ていくと、14次調査では南北溝SD320出土が殆どであり、101点中運搬容器であるⅡAb類の須恵器平瓶が64点（63.4%）を占める。他に落込SX2507からⅡAb類が2点出土している。76次調査ではSD320（59点）及び溝SD2010（3点）・2015A（27点）からの出土であり、SD320出土の59点中37点が7世紀後半の須恵器平瓶（ⅡAb類）で、62.7%を占める。また、興味深いのがSD2015A出土の27点中17点が8世紀後半～9世紀前半のⅠBa類のパレットであり、しかも東半部の85次調査では1点しか出土しておらず、西端部に集中していることから、この近辺に漆工房的施設が想定される。

漆工房の
想定

83・84次調査では建物SB2355・2380A・2415の柱掘方、溝SD2335・2340・2350・2419、土坑SK2344B、落込SX2336・2345・2416から数点及び黒色粘・暗褐土・灰褐土・茶灰土・茶褐土等の土層から出土している。85次調査では溝SD2340に集中し（8点）、他は溝SD2015A・2464・2471及び暗褐土・茶褐土の出土であった。87・90次調査では溝SD2340に集中し、32点出土している。また、SD2340からは木工・轆轤役に関する木簡及び漆が付着した木簡が出土しており、付近に木工に関わる施設が存在が想定される。98次調査ではSD2340及び流路SX2480に集中し、SD2340からは「匠司」と記した墨書土器も出土しており、不丁地区官衙の性格を考える上で大変重要である。他に土坑SK2893、落込SX2091と暗褐土から出土している。

木工に関わ
る施設の存
在

104次調査ではSD320、110次調査では暗灰粘から出土した。129次調査では溝SD3825・3835、落込SX3830と黒褐土の出土である。147次調査では比較的多くの漆附着土器がみられ、溝SD4038・4044、土坑SK4056・4058、落込4065及び茶褐土・暗褐土・灰褐土から出土している。187次調査では溝SD4566・4570、土坑SK4573・4574及び黄灰土から出土した。

以上の如く、漆附着土器は遺構的に溝SD320・SD2340及び流路SX2480からの出土が殆どであり使用後の廃棄とみられるが、ここで問題となるのがSD320及びSD2340出土の7世紀後半のものである。SD320からは161点の漆附着土器が出土しているが、その内126点が7世紀後半の土器（ⅡAb類101点、ⅡAc類10点、ⅠAa類5点、ⅡAa・ⅡAd類3点、ⅠAc類2点、ⅠAb・ⅠAe類1点）であり、SD2340からは57点の漆附着土器が出土しており、その内39点が7世紀後半のⅡAb類であった。SD2340は8世紀初頭前後に開削され、8世紀後半には機能を終えるが、埋没途中の中層及び上層に7世紀後半の漆附着土器が投棄されており、溝の埋没

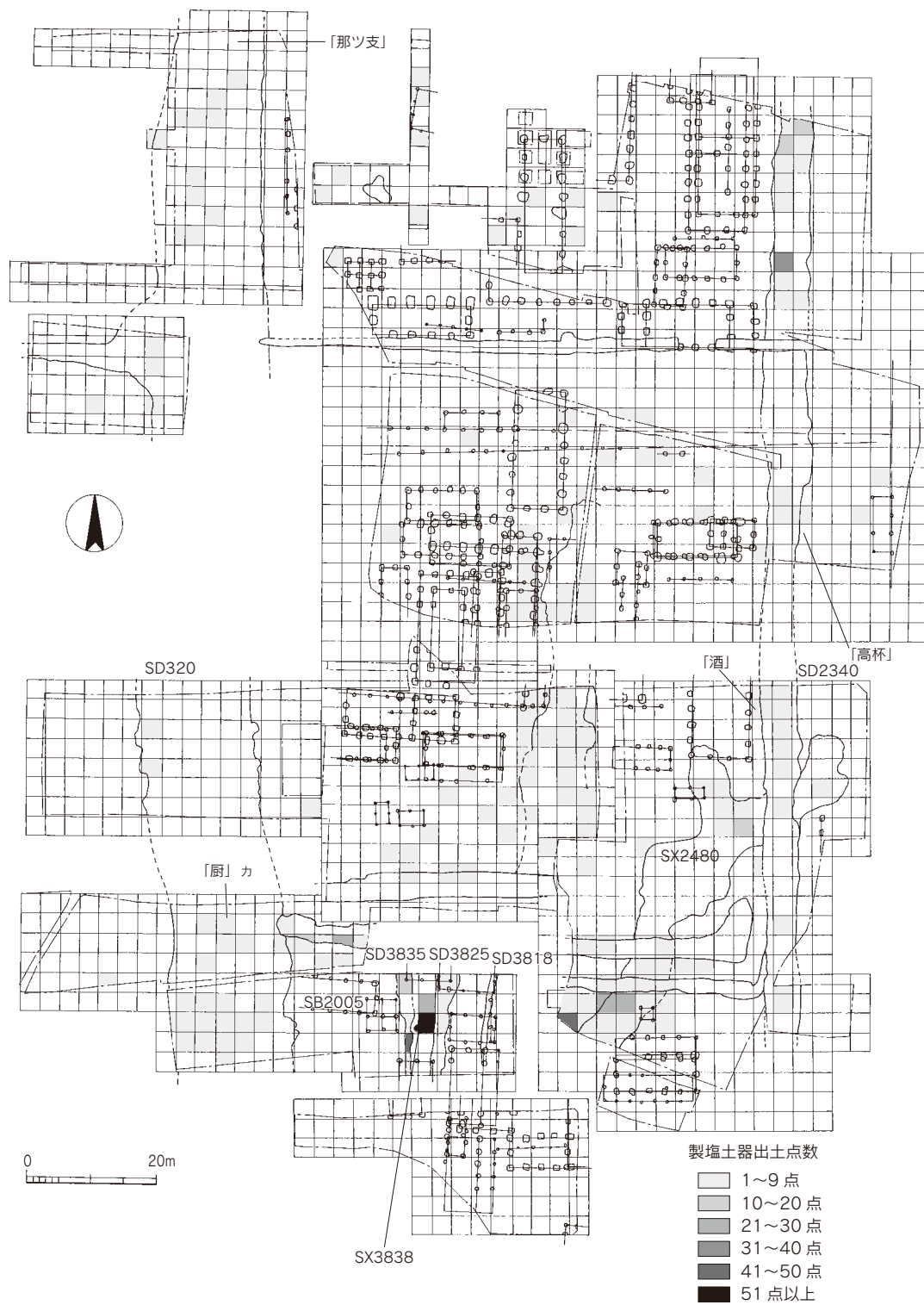


Fig.122 不丁地区製塩土器分布図 (1/1,000)

年代と土器の制作年代に時間的な齟齬が生じる。このことは、約半世紀に渡って須恵器平瓶が使用され続けたことになり、幾層にも固着した漆はそのことを物語るものであろう。ただ、漆付着土器は7世紀後半のものが66.2%を占めており、Ⅱ期大宰府政庁の造営に係わる遺物とみなすことが可能であり、不丁地区官衙の一角に漆塗り製品等の製作を行った工房エリアが想定される。

[不丁地区の生産活動]

最後に冶金関連遺構・遺物や漆付着土器、製塩土器等の資料を総括して、不丁地区の生産活動を時間軸に沿って整理する。

不丁Ⅰa期は、自然地形を残す大宰府Ⅰ期政庁の前面で自立炉を含む鍛冶・鑄造工房が操業されている。この工房に伴う遺構は未検出となるが、同時期の冶金関連遺物は、不丁地区北側に隣接する蔵司地区南端の整地層下からも出土しており、冶金工房が広域に展開していたことが分かる。加えて、SX2480からは冶金関連器物に伴って漆付着土器も集中的に出土しており、不丁・蔵司地区工房が漆工を伴っていたことが確認できる。また、17次調査区SK388は漆保管容器に用いられる頻度の高い平瓶が集積された状態で出土した。SK388出土平瓶自体には漆の付着は見られないが、不丁・蔵司地区工房に付随する資料と評価できる。これらの様相をふまえると、不丁・蔵司地区工房は西海道に設置された初期の複合冶金工房であり、大宰府政庁や周辺官衙の建設・維持のための材料供給やその運営を支えた工房と評価できる。

不丁Ⅰb～Ⅱ期になると官衙域としての整備が政庁周囲にも及び、不丁・蔵司地区工房は解体する。当該期の資料では、官衙整備の起点となる境界溝下層出土品が目撃できる。東側境界溝SD2340北端埋土出土品は、大宰府政庁側から流れ込む状態で出土しており、大宰府Ⅱ期政庁建設に伴う冶金工房が建設地点に近接して操業されていた可能性を示唆する。また、不丁Ⅱ期に属する複数の掘立柱建物柱穴や区画溝でも、冶金関連遺物が出土しており、当地区の官衙整備に際しても近接した形で材料加工の工房が操業されていたことが窺える。なお、SD2340からは133点の製塩土器と56点の漆付着土器が出土しており、継続して複合的な生産活動の痕跡が確認できる。

不丁Ⅲ～Ⅳ期も冶金関連遺物が見られるが、冶金工房の設置が確認できるのは、上述したSX2421・2422・2423の3基の炉跡のみである。つまり、遺構の様相からは冶金工房が継続的に維持される状況は見出せない。現状では不丁地区官衙の維持や再編等の目的に応じて、臨時的に設置された工房が累積した可能性もある。

不丁Ⅴ期以降は遺構数自体も減少することから、冶金関連遺物の数量も減少する。ただし、不丁地区官衙の遺構面上層に堆積する包含層出土品も多い。これらの包含層出土品は、不丁地区で重層的に形成された各工房の遺物であり、厳密に帰属工房を特定することは困難である。また、不丁地区に隣接する政庁前面広場では13世紀の鑄造遺構が検出されており、大宰府廃絶以後に操業された冶金工房の廃棄品を含む可能性も排除できない。

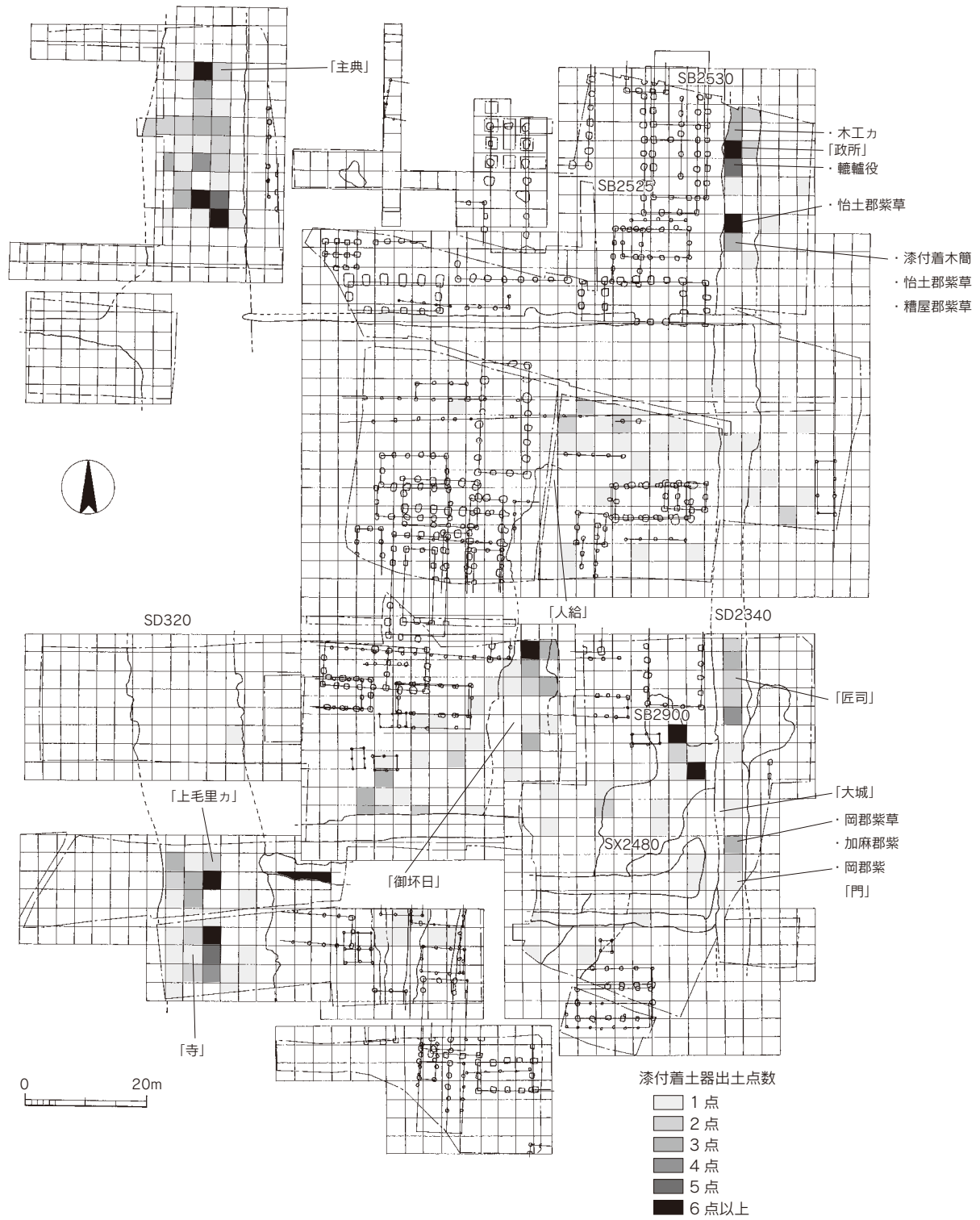


Fig.123 不丁地区漆付着土器分布図 (1/1,000)

4) 出土文字資料

はじめに

不丁地区においては、木簡186点、墨書土器183点、刻書土器40点の文字資料が出土している。ここでは不丁地区出土文字資料から、不丁地区の機能、さらには出土文字資料からみた律令制国家機構における大宰府の位置付けについて考察する。なお木簡については、西に隣接する大楠地区との境界にあたる南北溝SD320から出土した26点も対象に含める。

①出土文字資料を廃棄した主体の遺構

本稿においては、木簡の内容にそって考察を加え、適宜、墨書土器や刻書土器に言及することとする。南北溝SD2340からはこの地区でもっとも多く木簡を出土した。まず、この遺構出土木簡の廃棄主体の遺構について考えておきたい。

政庁の南側正面は広場になっており、この広場の西に隣接し、東から西に並んで、不丁地区、大楠地区という溝で区画された官衙域が存在する。広場と不丁地区を区画する南北溝がSD2340、不丁地区と大楠地区を区画する南北溝がSD320である。

SD2340は、溝心で政庁中軸線から西に104m離れており、8世紀初頭前後に開鑿され、8世紀中葉の天平年間(729～49)に埋没した。この溝からは、大宰府史跡第83・84・85・87・90・98・124次の7次にわたる調査で186点の木簡が出土した。不丁地区は大宰府史跡第187次調査で、従来南限と考えていた東西溝SD2015の南側にも広がることがわかり、全体で北から南へと三つの区画に細分される⁽¹⁾。

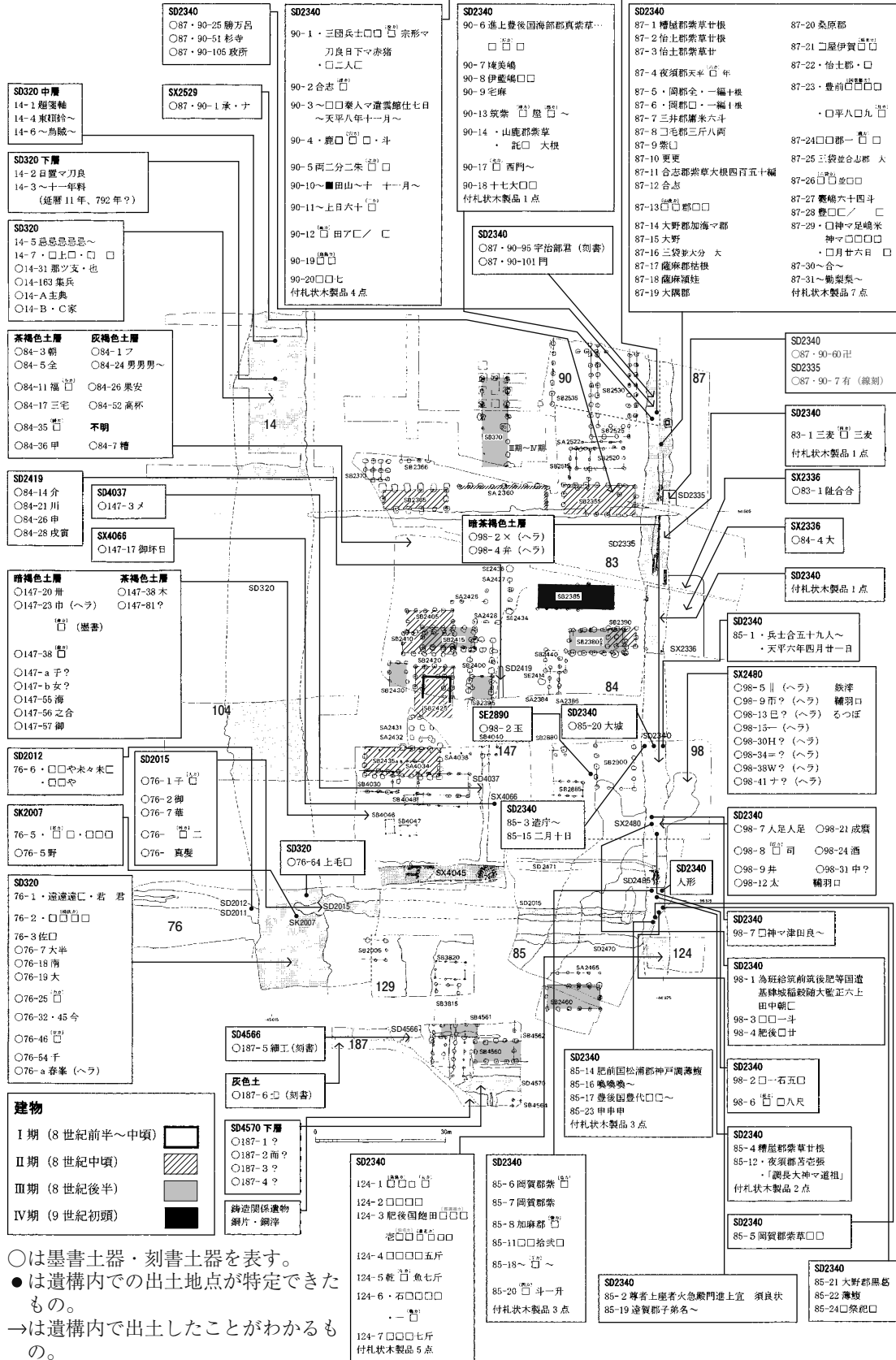
SD2340からは、確認された総延長141mのほぼ全体にわたって木簡が出土し、木簡は8世紀中葉以前におさまる。不丁地区の北側区画から南側区画まで建物が立ち並ぶのは、Ⅱ期(8世紀前半～中頃)からである。木簡群と同時期にあたり、中央部の区画を中心とする。SD2340の北端は確認されておらず、北側の蔵司地区の官衙から廃棄された可能性もあるが⁽²⁾、蔵司地区の南限として東西築地SA1410があり⁽³⁾、蔵司からの投棄の際に障害となるかも知れない。大楠地区は、8世紀後半から建物が営まれ始め、11世紀まで建て替えが継続的に行われており、建物がSD320以東の官衙より小規模である⁽⁴⁾。以上より、SD2340出土木簡の廃棄主体の所在地は、不丁地区の中央部区画の可能性が高い。

②文書・記録木簡、墨書土器、刻書土器

不丁地区出土木簡は大きく文書・記録木簡と付札⁽⁵⁾、習書木簡にわかれる。まず文書・記録木簡について検討し、あわせて習書木簡と墨書土器、刻書土器についても考察する。

まず、不丁地区出土文字資料の全体にわたり、出土地点を図面上に示してみよう(Fig123)。この図からわかるように、文書木簡、記録木簡、付札については、ある程度それぞれがまとまって出土している。このことは木簡の廃棄主体が木簡それぞれの種類によって別々であったことを示し、不丁地区内に複数の官司が並存していた可能性がある。

1号・2号木簡はともに軍団に関わる文書木簡である。1号は筑前国ばかりでなく、筑後国の軍団兵士が大宰府に上番していたことを示す木簡であり、大宰府常備軍がこのような西海道諸国から上番する軍団兵士によって構成されていたことがわかる⁽⁶⁾。2号からは、再調査によって軍団兵士が轡轡役に動員されていたことが判明した。兵士の差配について、不丁地区に所在した担当官司から大宰府に上番した軍団兵士の駐屯場所に発給された木簡が兵士とともに担当官司に戻



※出土文字資料の番号及び遺構の時期は、年次概報段階による。

Fig.124 不丁地区出土文字資料と分布図

り、廃棄されたものと思われる。1号と2号の出土地点が離れているので、同一官司が担当した事案であったが、案件内容が異なるので、別々の時期に廃棄されたものとする。2号とともに、上日について記した3号、館仕について記した4号が同一地点から出土していることから、当該官司は、兵士のみではなく、その他の官人の差配なども担当した可能性がある。しかし、反対に3号・4号ともに対象が兵士で、発給した主体は兵士を所管する官司であったと考えることもできる。

7号のオモテは横長の材に墨書されており、内容からも帳簿木簡である。遠賀郡の郡司子弟が大宰府に奉仕していたことを示しており、大宰府に西海道諸国の郡司子弟が書生として奉仕していたことを伝える『類聚三代格』巻第7、天長2年(825)8月14日付太政官符の内容が奈良時代に遡ることを証明する。また「瓦工」などもみえ、事務的官司が工房的官司の工人の給与等に関する事務を行っていたことを示すだろう。2号・3号・4号との関連で考えれば、兵士、郡司子弟、工人など、人員の差配に関する事務を、一括して不丁地区にあった官司が担当していたことも考えられる。27号の封緘木簡も7号と共伴しており、この官司に宛てられた文書をはさんでいたものであろう。

習書木簡についても、それらはそれらでまとまって出土しているので、おのおのの習書木簡を廃棄した主体は明確にはしがたい。ただし、「豊前国豊代」と記された21号の習書木簡は、10号「肥前国松浦郡神戸調薄鰯」と同じ地点から出土しており、税の収納に関わる官司から捨てられた可能性がある。10号は付札ではなく、文書木簡である可能性が指摘されている。墨書のない付札状木製品3点が同一地点から出土したものの、21号・24号・35号の習書木簡とも共伴しているので、付札ではなく、やはり文書木簡であると考えておく。

84号は基肄城の名がみえる唯一の出土文字資料であり、また基肄城に稲穀が蓄積されていたことを具体的に証明する史料として貴重である。基肄城も含めた古代山城の機能を考える重要な史料となる。この木簡は、筑前・筑後・肥等国に基肄城の稲穀を大宰大監の田中朝臣(名欠)に担当させて班給することを命じた文書木簡である。田中朝臣が命令を完了した後、大宰府に戻され、効力を抹消するために名前を削って廃棄されたものとする。

墨書土器については、不丁地区に所在した官司を推定させる資料がある。第87・90次調査出土「政所」、第98次調査出土「^[匠カ]司」は、この地区に事務的官司と工房的官司が並存した可能性を示す。さきに木簡でみた人員の差配も、工房的官司と並存した事務的官司である政所が担当したのかも知れない。事務的官司と工房的官司が不丁地区に並存し、有機的に連携して政務を処理していた可能性も想定されよう。

第85次調査出土「大城」は、須恵器皿の底部外面に墨書されており、大野城に配給される予定の器を逆さまに重ねた最上部に置かれていたものと推定される。なぜ不丁地区に留まって廃棄されたのか不明だが、このような器を配分する官司が存在した可能性も示す。

刻書土器については、第98次調査で8点のヘラ記号のある須恵器が出土していることが注意される。出土したSX2480からは鉄滓や鞆羽口、埴塙が共伴しており、土器の時期も7世紀後半と考えられている。大宰府成立期に不丁地区で工房が稼動していた可能性を示す文字資料として重要である。また、第187次調査出土の「細工」銘刻書土器は、細工所といった名称の工房的官司の存在を示しており、先の匠司などに関連して機能したのであろう。

③付札木簡

SD2340からは、紫草の付札が多く出土する。賦役令1調絹繩条では、正丁1人に紫3両と規

定され、『延喜式』民部下58諸国別貢雑物から、日向800斤と大隅1800斤の紫草および各種の染造品、同63交易雑物から、5600斤の紫草の貢進が課せられたことがわかる⁽⁷⁾。染料としての紫草だけでなく、布帛類の貢進も課せられ、これらは貢上染物所や『延喜式』式部上106採銅所勘籍にみえる大宰府染生が担当したであろう。賦役令や『延喜式』にみえる「斤」は精製して粉末となった状態、付札にみえる「根」はそれ以前の植物としての状態を表したものと考えられる⁽⁸⁾。

紫草は賦役令1調絹絶条によれば、調副物であったが、養老元年(717)に調副物と中男の調を廃止し、中男作物を課した(『続日本紀』養老元年11月戊午条)後は、中男を役したり、雑籥によったりしたと考えられる。豊後国では、国司が紫草園での紫草の種蒔き、収穫、大宰府使検校の随行のために巡行し(『大日本古文書編年文書』2-42～43, 49, 54～55)、大宰府と豊後国の監督下で生産していたためである⁽⁹⁾、なお一般に、調の荷札には名前が書かれるが、中男作物の荷札には個人名を明記しない⁽¹⁰⁾。

筑前国内の郡名が書かれた紫草の付札は「郡名+物品名+量」という書式のものが多く、大きさも近い。倉住靖彦氏は、墨書のない完形の付札(6032型式)も第85次調査で5点出土しており、紀年もないことから、大宰府が付けた整理用付札と考えた⁽¹¹⁾。

紀年がないことについては、平城京二条大路で出土した筑紫大宰が進上した紫草の種子の付札(『平城宮出土木簡概報』22-40, 31-31)にも紀年がなく、これが大宰府作成の荷札と考えられることから⁽¹²⁾、必ずしも整理用付札とする根拠にはならない。筑前国を通じた共通性に着目すれば、神亀3年(726)～天平宝字元年(757)に存続した筑前国司⁽¹³⁾が作成した可能性もある(筑前国府は太宰府市国分、または同市通古賀に所在したと推定される)。

筑前国の付札の規格性と関連して、55号の筑前国夜須郡から調として納められた苦一張の付札について考えたい。この荷札は、筑前国の紫草の付札とほぼ同じ法量で、やや作りが丁寧である。裏面には別筆で「調長大神マ道祖」の署名があり、付札の作成主体が調長と別である可能性を示す。養老元年(717)の調副物と中男の調廃止により、苦は調副物(賦役令1調絹絶条)から中男作物(『延喜式』主計上4中男作物)へと変わったので、この付札は養老元年以前のものである⁽¹⁴⁾。この時期、苦と紫草はともに調副物であることから、筑前国の紫草の荷札も同じ様式だったであろう。また、後の紫草の荷札の規格性を踏まえると、筑前国では、苦の荷札にも規格性があつたのではないだろうか。

第45次調査観世音寺東辺築地東面部SK1285出土の8世紀中頃の51号墨書須恵器皿に「調長」とあり⁽¹⁵⁾、郡雑任である調長が大宰府に滞在することがあつた。養老元年以前は大宰府が筑前国を兼帯していた時期であることも考慮するならば⁽¹⁶⁾、55号の調長の自署は、大宰府で夜須郡の調長が調の収納に立会った際に、あらかじめ用意されていた付札に署名した可能性もある。

これと関連して筑前国内の郡名がある付札の形態をみてみよう。糟屋郡の付札は筆跡の類似、切り込みの形、上端から切り込みまでの長さが短いという共通性があり、怡土郡の付札は切り込みの形や上端をとがらせる点に共通性がある。加麻郡は下端をやとがらせるという独自の調整を行い、岡賀郡は他郡と共通した書式のほか、「・岡賀郡全・一編_{十根}」という独自の書式でも作る。上端をとがらせるのは怡土郡とも共通する。つまり、筑前国では大きさや書式の統一に規制がかかりつつも、作り方の細部においては郡ごとに特徴があり、郡の官人が作成に関わっていることがわかる。その際、55号から考えたように、納入の際に大宰府において郡雑任

があらかじめ用意された付札に署名した可能性と、郡衙において大宰府が指導して郡の官人に付札を作成させて税物に取り付けさせた可能性がある。

筑前国の紫草の付札が、他の西海道諸国に比べて規格性を持つのはなぜか。これについては、大宰府が筑前国をかつて兼帯していた関係で、その合理的な物品管理方式を筑前国が大宰府から引き継いだためではないかと考える。これと関連して筑後国三井郡の庸米の付札が注目される。筑後国は飛鳥浄御原令が施行された持統天皇3年(689)頃に筑紫国が前後に分割されて成立した。それ以前は筑紫国として筑紫総領の直轄下に置かれており、前後分割後に筑前国のみが筑紫総領の直轄となって大宰府の筑前国兼帯に引き継がれ、筑後国には国宰が派遣された⁽¹⁷⁾。三井郡の庸米の付札が筑前国の付札と良く似た書式であるのは、かつて筑後国地域も筑紫総領の直轄であったことに由来するのではないだろうか。なお、この木簡は、切り込みがなく、米俵の中に入れられた札とみられることから三井郡の現地で作成されたと推定される⁽¹⁸⁾。

筑前国以外の国の郡名の付札は、大きさや形態が多様である。同じ国内の郡、あるいは同じ郡名がある付札どうしても、書式や形態が異なる。例えば、豊後国大野郡(60, 61, 62号)、肥後国合志郡(66, 67, 68号)、肥後国山鹿郡・託麻郡(69, 70, 71号)、薩摩国(72, 73, 74号)である。一方、大隅国の郡名がある付札(75, 76号)は、大きさ、切り込みの形と位置、上端部の整え方などに共通性があり、南島である奄美嶋と伊藍嶋の付札も同様に形態や書体が共通する(77, 78号)。

以上より、豊後・肥後・薩摩などの付札は多様性を持っており、それら諸国が作成した荷札であることを示す。これらは付札の作成にあたった郡、または郡以下のレベルの役人の個性が際立ち、大宰府や国ごとの規制は働いていない。薩摩のみは国名が記載されるという特徴がある。九国の中でも成立が遅い大隅国⁽¹⁹⁾や南島の付札は、大きさ、切り込みの形と位置、上端部の整え方などに共通性があり、国以下において付札を製作することが難しいため、大宰府や大隅国が作成した付札とみられる。

また、63号「三袋並大分 大」、64号「^{〔六袋カ〕}□□並□□」、65号「三袋並合志郡 大」など国を越えた型式、書式の共通性を持つものは、大宰府で作成したと考えられるが、それぞれの袋にもともと各国で作成した荷札が付いていた可能性は残る。

なお、63号は日本出土の付札では出土例が少ない下端一箇所に切り込みを持つものである。この形の付札は城山山城出土木簡など韓半島出土付札に類例があるが、荷物に取り付けた際に文字の向きが上下逆になってしまう可能性があるのにもかかわらず、なぜ下端一箇所にのみ切り込みを施すのか不明である⁽²⁰⁾。

不丁地区出土の3例については、三袋ないし、六袋ごとにまとめられた荷物に付けた付札であることから、いくつかまとめた荷物に、札が文字の向きに向くようにきつめに結んで取り付け、荷物のまとまりごとに付札の内容を見やすくしたのではないだろうか。また下端一箇所に切り込みがある付札の一般的な機能として、城山山城出土木簡では下端一箇所に穿孔を持つものも多く出土していることから、下端を束ねて付札を伝票のように再使用するためであった可能性も考えられる⁽²¹⁾。

以上より、付札は郡が主体となって作成したものが多く、郡が税の納入に責任を持ったことがわかる。したがって、これらは整理用付札ではなく、荷札とするのが妥当である。筑前国は

大宰府が直轄統治していたため、大宰府の規制が行き渡り、規格が統一されている。成立が遅れた大隅国や南島からの物品には郡や島レベルでは荷札が付けられず、大宰府や大隅国が付けたのだらう。また、薩摩国以外では国名が記されず、郡名のみが表記される。蔵司西地区で出土した7世紀末の久須評（豊後国玖珠郡）の荷札も同様である。これは大宰府の前身である7世紀の筑紫大宰や筑紫総領が、後に郡の官人となる地域首長を直接に支配下に置いており、8世紀以降も郡の人事権を掌握し、とくに筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後が大宰府の直接的な経済・軍事基盤であり続けたことによるのだらう⁽²²⁾。

④出土文字資料からみた不丁地区所在の官司

SD2340における木簡の出土状況を見ると、付札とそれ以外の帳簿や文書木簡とは、それぞれがまとまって出土している（Fig.124）。ここから、木簡は、当初に投棄された位置をそれほど動いていないこと、木簡、墨書・刻書土器から推定されるような、匠司・貢上染物所・細工所などの工房的官司と、政所などの事務的官司とが不丁地区に存在し⁽²³⁾、それぞれが投棄した木簡群がまとまって、ほぼそのまま埋没していたことを指摘できよう。その際、建物が存在する中央部区画のすぐ東側ではなく、北側や南側の区画など、8世紀前半には建物が建っていない地域の溝に投棄している点も興味深い。

荷札の紫草の単位が精製される前の「根」であることから（天平九年度豊後国正税帳〔『大日本古文書編年文書』2-43, 49, 55〕にも「掘紫草根」とある）、紫草の荷札は、勘検の際ではなく、管内諸国から集積されていた紫草を貢上染物所（または前身官司）が精製する際に取り外して投棄したのだらう。これは、67号「合志□」のような7世紀後半の可能性のある荷札から8世紀半ばの天平年間までの荷札がまとまって出土しており、この年月の間、蔵司などに蓄積されて来た税物を消費する際に付札を取り外して投棄したと考えられることから傍証される。なお貢上染物所などが投棄した荷札と別に、勘検用に物品名や数量を明記した荷札が別にあり、大宰府が勘検に際して外した可能性は残る。

⑤平城宮・京跡出土西海道木簡と不丁地区出土付札

最後に、平城宮・京跡出土西海道木簡と不丁地区出土付札との関係から大宰府の機能を考える。平城宮第二次内裏北の外郭地区にあるSK820から出土した西海道諸国が納めた調綿の荷札（『平城宮木簡』1-283～310・680）は、すべて広葉樹のシイ製で、国と年次を越えた共通性があることから、大宰府で一括して作成されたと考えられる⁽²⁴⁾。第二次内裏東方のSD3035から出土した筑後国の煮塩年魚の荷札（『平城宮木簡』2-2287・2288）や、前出の二条大路から出土した紫草の荷札とともに、広葉樹であることと、切り込みの形状が丸みを帯びた台形であることは、大宰府が作成した貢進物荷札の特徴とされる⁽²⁵⁾。

平城宮・京跡出土の西海道木簡との関係で注意すべきSD2340出土木簡として、平城宮出土の調綿木簡と良く似た書式の93号「肥後国飽田〔郡調綿カ〕□□□壹〔伯屯カ〕□□□□〔養老カ〕」がある。倉住氏は、平城宮出土のものは「某国某郡調綿壹伯屯」の下に「四両」と紀年があるが、93号は四つの小文字があるのみであることを指摘する⁽²⁶⁾。「四両」は確認できないが、未解読の小さな四文字のうち一・二文字目が「養老」と判読でき、書式が類似することが確認できる。しかし、樹種は肉眼観察では針葉樹と思われ、また切り込みが台形ではなく三角形であることも考慮すると、樹種と形態の面で、大宰府が作成した貢進物荷札の特徴を備えていない。

この点に関連して、西海道の調綿木簡は、100屯単位で府庫に置かれていた綿の梱包を解かずにそのまま貢進し、そのとき付いていた旧荷札（諸国から進上された荷札）の内容を新荷札に転記した可能性が指摘されており、93号は諸国進上の荷札に相当する可能性がある⁽²⁷⁾。大宰府が中央に貢進する物品の荷札は広葉樹製であることが特徴だが、大宰府管内で使用される木簡は、広葉樹製もあるが、針葉樹製のものが多い⁽²⁸⁾。

この他、59号「進上豊後国海部郡真紫草…^{〔斤カ〕}□□□」も原形は不明ながら、二条大路出土の紫草の荷札と似た内容と形態である⁽²⁹⁾。樹種は、肉眼観察では、二条大路出土のものと同じく広葉樹であろう。失われた冒頭部分に「筑紫大宰」のような文言があった場合、中央に染料として貢進する予定の紫草を大宰府が染料に使用することに変更し、廃棄した大宰府作成の荷札となる。

なお、二条大路出土の紫草の荷札には「筑紫大宰進上」とあるが、調綿の荷札には大宰府の名がなく、国郡名のみである。これは、調綿の場合は、国が勘検し、荷造りした綿100屯を京に転送するのみであるのに対して、紫草の場合は、根の状態のものを染料として使えるように大宰府が何らかの加工をして進上するので、「筑紫大宰進上」と書かれているからであろう。

以上のように、8世紀前半の大宰府は、郡や国が作成した荷札を整理に利用したり、内容を転記して中央に送る荷札を作成したりしていた。さらに荷札には貢納者がほとんど書かれていない。このことから、郡が貢納者を把握して徴税に直接の責任を負い、国や大宰府は、税物の数量や品質の確認に主たる責任を負ったと理解される。しかし、中央に送る予定で精製した紫草を大宰府で消費していることから、大宰府に収納された税物は、ただ大宰府を素通りして中央に送られるのではなく、蓄積された税物をどのように運用して中央の需要に応えるかは、大宰府の裁量に任されていたと言えよう。

註

- (1) 九州歴史資料館『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅱ平成13・14年度』79頁
- (2) 『大宰府史跡昭和58年度発掘調査概報』1984年、105頁。以下、大宰府史跡の年次概報は『昭和58年度概報』のように表記する。
- (3) 『昭和54年度概報』6、21、30～31頁
- (4) 『昭和60年度概報』68頁
- (5) 本稿で付札という場合は荷札（貢進物付札）と整理用付札（物品小札）を含む広義の概念である。今泉隆雄「貢進物付札の諸問題」（『古代木簡の研究』吉川弘文館、2000年）63頁を参照。
- (6) 松川博一「大宰府の軍制の特質と展開—大宰府常備軍を中心に—」（『九州歴史資料館研究論集』37、2012年）39～42頁
- (7) 養老律令の条文番号は、日本思想大系『律令』岩波書店、1968年による。また、『延喜式』の条文番号は、虎尾俊哉編『延喜式上』集英社、2000年巻末の「条文番号・条文名一覧」による。
- (8) 『昭和58年度概報』105頁
- (9) 平野邦雄「大宰府の徴税機構」（『律令国家と貴族社会』吉川弘文館、1969年）334～335頁
- (10) 奈良国立文化財研究所『平城宮木簡一解説』1966年、52頁
- (11) 『昭和58年度概報』104頁。墨書のない付札は、6031型式（推定）は90次調査で1点、6032型式は87次調査で1点、6033型式は87次調査で1点、6039型式は83・84次調査で各1点、85次調査で3点、87次調査で5点、90次調査で4点、124次調査で5点出土。
- (12) 友田那々美「古代荷札木簡の平面形態に関する考察—平城宮・平城京跡出土資料を中心に—」（『木簡研究』25、2003年）253～254頁
- (13) 倉住靖彦「筑前国司をめぐる若干の検討」（『九州歴史資料館研究論集』13、1988年）12～14頁

- (14) 『昭和58年度概報』 78頁
- (15) 拙稿「観世音寺出土文字資料について」『観世音寺—考察編—』2007年、34頁
- (16) 倉住氏注(13) 前掲論文、12頁
- (17) 田中正日子「成立期の筑後国と大宰府」(『筑後国府・国分寺跡 久留米市文化財調査報告書 第59集』久留米市教育委員会、1989年) 15頁
- (18) 馬場基「荷札と荷物のかたるもの」(『木簡研究』30)、238～240頁
- (19) 『続日本紀』和銅6年(713)4月乙未条、井上辰雄「筑紫の大宰と九国三島の成立」(『古代の日本3九州』角川書店、1970年) 212頁。
- (20) 国立昌原文化財研究所編『韓国の古代木簡』2004年、渡辺晃宏「木簡の世紀以前—律令制の成立と日本の木簡—」(『平成18年度九州国立博物館国際シンポジウム 漢字文化のひろがり—日本・韓国出土の木簡を中心に』2006年) 22頁
- (21) 拙稿「日本と韓国の古代木簡」(日韓交流史理解促進事業実行委員会編『日韓交流史理解促進事業調査研究報告書』2006年) 39～40頁
- (22) 早川庄八「律令制の形成」(『天皇と古代国家』講談社学術文庫、2000年、初出1975年) 84～87頁、注(6)、拙稿「倭王権の九州支配と筑紫大宰の派遣」(『九州歴史資料館研究論集』34、2009年) 50～52頁
- (23) 『昭和58年度概報』105頁、『昭和59年度概報』54頁、『昭和61年度概報』31～32頁、『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅱ平成13・14年度』2003年、78頁
- (24) 今泉氏前掲注(5) 著書、84～85頁
- (25) 注(12)、鬼頭清明「西海道荷札について」(『古代木簡の基礎的研究』塙書房、1993年) 216頁。
- (26) 『平成2年度概報』90頁
- (27) 吉川真司「税の貢進」(『文字と古代日本3流通と文字』吉川弘文館、2005年) 41頁および吉川氏のご教示による。
- (28) 注(25)、友田氏注(12) 前掲論文、254頁、金山まど加「大宰府貢綿木簡の再検討」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第48輯第4分冊、2003年) 59頁。SD2340出土木簡全点の写真を検討した結果、針葉樹製が159点、広葉樹製が27点であり、付札70点に限ると、針葉樹製が58点、広葉樹製が12点と判断される。
- (29) 友田那々美氏のご教示による。

第Ⅶ章 総 括

(1) はじめに

本報告書は、不丁地区遺物編1の続編にあたり、大宰府政庁周辺官衙跡の不丁地区で出土した文字関連資料・生産関連遺物等の特殊品、ガラス製品・鍛冶鑄造関連遺物の科学的分析及び遺構・遺物についての検討を掲載した。

平成23年度時点での大宰府史跡報告書刊行計画では、平成23年度に不丁地区官衙1を、平成24年度に不丁地区官衙2を刊行し、合わせて2分冊を刊行するというものであった。しかしながら、不丁地区は周辺官衙の中でもとりわけ建物が密集し、土器・瓦類・特殊遺物の出土量も膨大であり、かつ天平6・8年の紀年銘木簡や紫草に関する木簡、南島支配に関する木簡等豊富な木簡が発見され、大宰府研究を行う上で極めて重要な地区であり、遺構の性格付け及び時期決定を行う際には十分な検討を要する地域であった。

従って、2ヶ年で遺構・遺物を吟味し、詳細な検討を加えた正式報告書を刊行するには時間的・体制的・予算的に無理があったことから、不丁地区官衙の報告にあたっては遺構編・遺物編1・遺物編2・表図版編の4分冊で刊行するに至った次第である。

なお、今回の報告書作成にあたって、膨大な出土品の再整理、出土遺物の追加実測、検出遺構・出土遺物の検討には多くの時間を必要とした。しかしながら、今次報告において十分な検討を成し得たか甚だ疑問ではあるが、本章では不丁地区における発掘調査によって得られた成果を主要な遺構・遺物ごとにまとめて総括とする。

(2) 検出遺構

不丁地区においては、建物63棟、柵21列、築地基礎1基、区画溝5条、井戸15基、溝61条、土坑46基、溜まり・落込22基、採土遺構、瓦敷遺構、鑄造遺構など多くの遺構を検出した。以下、主要遺構の成果と課題について述べる。

[建 物]

不丁地区官衙跡で検出した建物は63棟で、掘立柱型式が殆どであるが、礎石型式の建物も1棟存在する。掘立柱建物の内訳は、四面廂建物1棟、両面廂建物1棟、片廂建物7棟、総柱建物2棟、側柱建物51棟である。不丁地区官衙においては、身舎の梁行が3間の大型建物7棟が存在し、日吉地区の9棟に次ぐ数であり、周辺官衙域においては際立っている点が指摘できる。

建物群は、当初より区域の北・中央・南側の3ヶ所に分散しているが、8世紀後半以降は東西方向の柵SA2451と築地基礎とみられる遺構SX4045とによって明確に分断され、それぞれのエリアでL字形或いはコ字形の配列をなしており、機能分化が図られる。

後述する南北溝SD2340からは、紫草に関する木簡が多数出土したことにより、以前から大宰府の所司の一つである貢上染物所の可能性が指摘されてきた。ただ、SD2340の存続期間は短く、8世紀前後～中頃の半世紀ほどであり、仮に当該時期が貢上染物所であったとしても、その後は官衙機能が変化したことも考えられよう。

礎石建物SB370は、大宰府政庁前面域においてただ1棟となる礎石型式の建物で、不丁地区官衙の主体となる建物といえる。しかし、礎石自体が抜き去られているため正確な規模は測り

得ないが、梁行2間、桁行7間規模のものともみられる。

もう一点注目されるのが、中央区域の南側に展開する梁行1間×桁行1間の小型建物4棟の存在で、SB4046・4047・4048はL字形に配列し、井戸を伴っている点である。これらの小型建物は、官衙建物の終焉後に築造されているとは言え、かつて官衙域であったこの場所には相応しくない建物である。そこに存在し得る理由として、10世紀中頃という時期と井戸を伴う居住施設である点を考慮するならば、天慶4年(941)藤原純友によって灰燼に帰した大宰府政庁の再建に関連する施設である可能性を指摘しておきたい。

これに関連して、10世紀後半とされる大宰府政庁Ⅲ期には、純友の乱によって焼失した政庁は再建されるものの、日吉地区の官衙建物は9世紀後半には終焉し、不丁地区の官衙建物も10世紀前半には終焉する。また、大楠地区の官衙建物は10世紀には終焉し、北半部は空地の様相を呈する。広丸地区の官衙建物も9世紀後半には終焉に至る。この様に、大宰府政庁Ⅲ期においては、これまで大宰府の職制を支えていた政庁前面域官衙が姿を消すという現象が起きる。官衙施設の前面域から別の場所への移動も考えられるが、純友の乱後の大宰府の職制はどの様に維持されていたのか、Ⅲ期大宰府政庁の性格も含めて検討し直す必要がある。

[区画施設]

区画施設としては、溝・柵(板塀)及び築地基礎とみられる遺構を検出している。境界溝として第一に挙げられるのが南北溝SD320とSD2340である。SD320は不丁地区官衙と西接する大楠地区官衙とを画し、SD2340は不丁地区官衙と東接する政庁前面広場とを画する。このSD320とSD2340に挟まれた両溝の心々距離で90m、溝肩部で76mの範囲が不丁地区官衙の東西域となる。ただ、SD2340は8世紀後半には埋没するので、その後の役割は板塀が担ったものと考えられる。一方、SD320は平安末の溝SD2010に切られており、11世紀後半代には完全に埋没したとみられ、大宰府政庁の終焉と軌を一にしている。

南北域に関しては、藏司地区官衙南端の築地SA1410の前面に想定されている東西溝から朱雀門礎出土地点を東西方向に延長した線(官衙域南端の区画施設)までの南北長約220mであるが、SA1410前面の東西溝及び朱雀門の位置が確定されていないため、南北の範囲に関しては今後の課題である。

地区の南半部に位置するSX4055は北縁と南縁に側溝を伴い、湿地部においては基部に礫を敷いている。両側溝間は2.6mを測り、東端部のSD2340と交差するヶ所にはSD2340埋没後に設置された石組暗渠SX2485を構築しており、道路或いは築地基礎とみられる。

不丁地区官衙内部を画する柵にはSA2451・2452があるが、構造的には一本柱の板塀と考えられる。SA2451は門建物SB2450に接続し、不丁官衙の中でも重要な役割を果たす。SA2452はSA2451のすぐ南側に位置し、東肩上がりで東西方向に走り、SA2451の建替えとみられる。SA2452に関しては、調査区内において出入り施設(門建物)を確認し得ていないが、東半部に存在していたか、或いは存在しなかった可能性もある。

ここで注目されるのが、SA2451・2452の東延長部にあたるSD2340上面には、SD2340埋没後に設置された石組溝SD2335と木樋暗渠SX2345が存在する点である。丁度、両者がSD2340を跨ぐ位置に暗渠SX2345が位置することから、板塀の南側に想定される通路の下部構造に関する施設と考えられる。このことは、SD2340の廃絶後にSA2451及びそれに直交す

る門建物SB2388南北延長線上に想定される板塀がその役割を担った証左となろう。

また、今回の報告書作成途中で気づいたことであるが、14次調査区の東端に位置する南北方向の柵SA2505の存在である。SA2505は柱穴6個の検出であるが、柱間間隔が2.28～2.47mで、土坑SK2508と重複するヶ所は4.8mと広がっていること。また、SA2505の南延長線とSA2451の西延長線が直交すること。さらに、SD320東肩と平行し、肩部までは4.2mの間隔を有する。この部分を通路とみなすと間口が4.8mと広がっているヶ所が大楠地区官衙から不丁地区官衙北区域への出入口となり、つまりSA2451は門建物及び板塀になる可能性を有する。なお、SA2505の南延長線とSB2388北延長線との間隔は92.2mを測る。

[井戸]

不丁地区においては、15基の井戸を検出した。その内訳は、14次3基、83次2基、84次3基、87次1基、98次1基、147次5基であった。その分布状況は北区域と中央区域に分散し、区画溝及び流路内に掘り込まれているもの、建物柱掘方と重複するもの、単独で存在するものなどがある。井戸水は厨における炊事用、工房での製品作成用としての利用が考えられるので、建物の用途を考えると重要な視点となる。しかし、時期が判然としないものが多いなか、SE4031・4032・4033は小型建物SB4046・4047・4048に伴う可能性が高い。

[採土遺構]

政庁前面域には、不丁地区を中心として広場地区にかけて暗紫色粘質土層が広がっている。暗紫色粘質土は瓦製作に用られたと考えられ、その粘質土を採掘した穴が採土遺構である。不丁地区では83・84・87次調査で確認されており、84次調査区の西半部においては不整形の掘削坑が蝟集している。SX2442からは土師器碗が、SX2514からは青磁合子が、SX2532からは緑釉陶器碗が出土しており、その掘削時期は11世紀以降とみられ、官衙機能が終焉した後の掘削である。また、広場地区でも11世紀後半以降の掘削が確認されている。

[流路]

流路としては、98次調査区から85次調査区にかけて検出したSX2480及び147次で検出したSX4050がある。なお、84次検出の溝SD2419はSX4050の10m北側に位置し、SX4050に接続する可能性がある。SX2480・4050とも南側の調査区へは伸びておらず、流末は不明ながら完結する様相をみせ、流路と言うよりは湧水遺構とした方が妥当かと思われる。

[その他の遺構]

その他に注目される遺構としては土坑SK388があり、須恵器平瓶を主体として口頸部を打ち欠いた土器45固体が据えられた状態で遺棄されていた。土器の内容物及び意図するところは明らかではないが、7世紀後半という時期からしてⅡ期大宰府政庁及び周辺官衙の造営に関わる遺物として捉えられよう。⁽¹⁾

(3) 出土遺物

不丁地区官衙の調査では、多量の瓦類・土器類及び木簡を初めとして墨書土器・刻書土器・硯等の文字関連資料が出土した。また、生産関連遺物としては、製塩土器・漆付着土器・白色物付着土器があり、製鉄及び鑄造関連の遺物には鞆羽口・鉄滓・鑄型・坩堝・鉍滓も多く出土している。さらに、服飾具として石帯、祭祀具として人形・齋串等の特殊品があり、項目ごとに概要を記しておく。

[瓦類]

遺構的には礎石建物SB370周辺、掘立柱建物SB2005・2355・2420・2530・4560・4577の柱掘方内及び境界溝SD320・2340、区画溝SD2015・2010・2335・2350・2470、井戸SE2414・2503・2510・4051（瓦積井戸）・4033、廃棄土坑SK4577から出土している。SB370は礎石型式であることから屋根は瓦葺きと考えられるが、他の建物は掘立柱型式であり、瓦類は柱掘方から出土していることから二次的な混入品とみられる。

注目されるのは、SD2340からの瓦類の出土状況で、下層は老司Ⅱ式ないし老司Ⅱ式に関わる型式に限定され、中層で鴻臚館式が登場し、上層では鴻臚館式が主体をなすという傾向が掴め、老司Ⅱ式と鴻臚館式との前後関係において傍証となり得よう。

[SD2340出土土器]

南北溝SD2340は延長141mが確認されており、堆積層は調査回数によって若干異なるが上・中・下層に分層され、各層位で遺物を取り上げられている。溝の開鑿は8世紀前後とみられ、堆積層中に構築された石組溝SD2335が8世紀後半であることから、8世紀中頃まで機能していたと考えられる。パンケース約30箱の土器が出土しており、須恵器坏蓋・有高台坏・坏・皿・高坏及び土師器坏蓋・有高台坏・坏・皿・高坏の供膳具、須恵器壺蓋・壺・鉢・甕の貯蔵具、須恵器播鉢・土師器甕・甑の炊事具がみられる。また、堆積層中からは、天平6(734)・8(736)年の紀年銘木簡が出土しており、土器編年上一つの定点となるものである。

[木簡]

不丁地区官衙跡の出土品において特に注目されるのがSD2340出土の木簡で、総数186点出土している。木簡には文書・記録・付札・習書があり、内容的には天平6・8年の紀年銘木簡、軍団に関する木簡、南島（掩美嶋・伊藍嶋）に関する木簡、紫草に関する木簡がある。南島に関する木簡は、大宰府の支配が遠く南島まで及んでいたことを示す貴重なものである。

また、木簡の出土状況は、付札木簡とそれ以外の文書木簡がまとまって出土しており、投棄された場所からあまり動いていないとみられ、紫草に関する木簡はSD2340の北側にあたる87・90次調査区の一隅及びSD2340の南側にあたる98次調査区南端から85次調査区北端にかけての2地点で出土しており、その近辺の建物が貢上染物所に関わる施設と考えられる。具体的には、87・90次SB2530及び98次SB2900は8世紀中頃の築造で、SD2340のすぐ西側に柱筋を揃えて位置し、梁行も同じ3間規模であることからその可能性を指摘しておきたい。

[墨書・刻書土器]

不丁地区官衙跡においては、183点の墨書土器と40点程の刻書土器が確認された。墨書土器の表記内容は、官職名（「主典」）・所司名（「政所」・「匠司」）・施設名（「厨」・「門」・「寺」）・地名（「上毛田」・「杉寺」）・人名（「勝万呂」・「果安」・「子人」）・干支・時期・数字・方角・用途を示すもの及び人面墨書・禁厭・記号・習書など様々であり、特定の文字が多いというわけではなかった。また、刻書土器で文字と認識できたのは24点で、残りは記号とみられる。内容的には所司（「細工」所）・人名（「宇治マ君□」・「春岑」）・その他がある。出土遺構ごとにとみると、墨書土器・刻書土器ともSD320とSD2340が主体を占める。

文字資料で特に注目されるのがSD2340出土の「政所」・「匠司」及びSD4566出土の「細工」で、「政所」・「匠司」は大宰府の役所名を記したものであり、政所は各役所をとりまとめ、行

政を処理した事務的官司で、匠司は武器・建造物の製作を担った工房的官司である。また、大宰府の官司として細工所はみえないが、官司としての可能性は排除できない。この様に、所司名を記した文字資料は、不丁地区に事務的官司と工房的官司が併存したことを裏付けるものと言えよう。

[硯]

不丁地区官衙跡においては、104点の定形硯と461点の転用硯を確認した。定形硯ではID類の圈足円面硯が79点（76.0%）と断然多く、次いでⅢA類の単面風字硯（10点・9.6%）、ⅢB類の二面風字硯（6点・5.8%）と続くが、他は一二点の出土であった。遺構的には、SD320が29点（27.9%）と最も多く、次いでSD2015とSD2340の4点（3.8%）で、大半は整地層或いは包含層からの出土である。定形硯には蹄脚円面硯2点及び獸脚円面硯1点が含まれ、104点という定形硯の点数は、周辺官衙でも際立っている。また、硯全体に占める定形硯の割合は18.4%であり、これまた周辺官衙の中でも群を抜いている。

転用硯では、坏蓋（324点・70.3%）が多用され、次いで甕（60点・13.0%）・皿（31点・6.7%）・坏（26点・5.6%）・壺（13点・2.8%）・鉢（3点・0.6%）の順となる。遺構では定形硯同様、SD320が105点（22.8%）と最も多く、次いでSD2340の76点（16.5%）であり、両者からは木簡・墨書土器が多く出土していることもあり、首肯できよう。また、転用硯の出土点数は政庁周辺官衙の中では群を抜いて多い。

[製塩土器]

不丁地区官衙からは、破片を含めた約1,400点もの製塩土器が出土しているが、その内訳はⅠ類の甕形土器151点（10.8%）、Ⅱ類の型作りによる円筒形の土器697点（49.9%）、Ⅲ類の型作りによる逆円錐形の土器549点（39.3%）である。遺構の上では、SD320（159点）、SD2015（130点）、SD2340（133点）が主立ったものであるが、129次調査の整地層SX3838からも244点が出土しており、西接する76次調査のSD320からは「厨」と判読した須恵器蓋が出土しており、SX3838付近の建物を厨施設とみなすことも可能であろう。

[漆附着土器]

漆附着土器は、その用途によりⅠ類：漆塗り製品を作成する際のパレット、Ⅱ類：漆の運搬容器、Ⅲ類：漆器模倣品、Ⅳ類：漆継ぎ土器に分けられ、総数485点確認された。出土点数が最も多いのはⅡAb類の須恵器平瓶261点・53.8%で、次いでⅠBa類の土師器坏53点・10.9%、3番目がⅠAc類の須恵器有高台坏32点・6.6%、以下ⅡAc類須恵器甕30点・6.2%、ⅠAa類須恵器蓋24点・4.9%、ⅡAa類須恵器長頸壺20点・4.1%、ⅡAd類須恵器壺19点・3.9%、ⅠAb類須恵器坏15点・3.1%、ⅠBb類土師器椀9点・1.8%と続き、他は1～2点の出土であった。

遺構的にはSD320が126点（26.0%）、SD2340が56点（11.5%）、SD2015が28点（5.8%）、SX2480が17点（3.5%）の出土で、全体の約5割を占める。87・90次調査区のSD2340からは木工・轆轤役に関する木簡及び漆が付着した木簡とともに漆附着土器が多く出土しており、付近に木工に関わる施設が存在が想定される。

[搗鉢]

不丁地区においては、7点の須恵器搗鉢が出土しているが、現在のところ大宰府史跡全体としても僅か8点しか確認されておらず、生産量自体が極めて少ない特殊な器種である。用途と

しては薬草となる草本類（葛根等）を搗りおろすための道具とみられる。

[鍛冶・鑄造関連遺物]

不丁地区で確認された炉跡には、SX2421・2422・2423のみであるが、冶金関連遺物としては坩堝・取瓶・鑄型・鞆羽口・炉壁・鉄滓・銅滓があり、鋳滓の出土量は約103kgを量る。7世紀後半のSX2480からは、漆付着土器とともに鍛冶・鑄造関連遺物が出土しており、Ⅱ期政庁造営に関わるものとみられる。また、SD320・2340からも鍛冶・鑄造関連遺物が出土しており、匠司の職務範疇には木工・漆製品製作・冶金が含まれていたと考えられる。

[腰 帯]

不丁地区では、7点の石帯と1点の銅鍔帯が出土している。その内訳は丸鞆2点、巡方4点、鉈尾2点である。他の特殊遺物に比して、点数的には少ない。

(4) おわりに

不丁地区官衙跡は周辺官衙の中でもとりわけ建物群が密集し、土器・瓦類の出土量も膨大であり、文字に関する木簡・墨書土器・刻書土器の点数も多く、それに相対して定形硯・転用硯も周辺官衙の中では群を抜いていた。さらに、製塩土器、漆付着土器、鍛冶・鑄造関連遺物も多量に出土しており、整理作業・実測作業に時間を費やす結果となった。

また、不丁地区官衙で検出された礎石建物SB370及び四面廂建物SB2425、桁行10間規模となる側柱建物SB2525・2530の性格、3群に分けられたそれぞれの建物群の変遷の検討を行ったが、不丁官衙のみの検討では勿論不十分であり、大宰府政庁及び他の周辺官衙、条坊遺構等を含めたところでの総合的な検討が必要である。しかし、今はまだその段階には至っておらず、官衙地区ごとの報告・検討が中心となるが、その点に関しては周辺官衙跡の最終本報告時点で総括的に考察を行う予定であることを記しておきたい。

ところで、平成26年には水城が築堤されて1350年となり、翌平成27年は大野城が築城されて1350年の節目を迎えることから、関係自治体が連携してシンポジウムを初めとして様々なイベントを展開する予定となっている。大宰府政庁及び周辺官衙は、築造年が明確ではないため同じ土俵に登れないが、周辺官衙の正式報告書を刊行し、大宰府関連の重要な遺構が存在しているという事実を、九州歴史資料館での展示・講座・現地説明会・ホームページ等を用い広く情報発信を行い、地権者及び地域住民に周知し、住宅の地下に残されている遺構が将来にわたり保存されていくよう理解・協力を求めている。

註

- (1) 『不丁地区遺構編』では、漆が付着していると報告していたが、『遺物編1』の報告に際し詳細に観察したところ、漆が付着した形跡は全く確認できなかったため、漆付着土器ではないと訂正する。
- (2) 大宰府史跡第41次調査（政庁跡北門地区）でⅢb類の須恵器播鉢が1点出土している。
九州歴史資料館 2001 『大宰府政庁跡』
小田和利 「須恵器播鉢について」『九州歴史資料館研究論集38』 2013 九州歴史資料館

**Administrative structures surrounding Kyushu's government headquarters
in the *Dazaifu* (大宰府) complex V
- the *Fuchyou* (不丁) area -**

Contents

Chapter III Specific finds

- (1) Written sources
 - 1) Wooden writing tablets
 - 2) Ink-inscribed pottery
 - 3) Inscribed pottery
 - 4) Inkslabs
- (2) Ornaments and Glassware
 - 1) Waist-cords
 - 2) Glassware
- (3) Finds related to production
 - 1) Salt-making pottery
 - 2) Pottery with lacquer
 - 3) Finds related to forging and casting
 - 4) Pottery with white materials
 - 5) Mortars

Chapter IV Supplementary materials: archaeological features and finds

- (1) Archaeological features
- (2) Archaeological finds
 - 1) Roof tiles and bricks
 - 2) Metallic objects
 - 3) Pottery from stratigraphic positions

Chapter V Physicochemical Analysis

- (1) Analysis of glassware
- (2) Physicochemical analysis of finds related to forging

Chapter VI Examinations of features and finds in the Fuchyou (不丁) area

- (1) Archaeological features and these changes
 - 1) Layouts and changes of buildings
 - 2) Compartmental institutions
 - 3) Other features
 - 4) Changes of the government offices
- (2) Examinations of finds and the nature of the government offices
 - 1) Roof tiles and bricks
 - 2) Pottery
 - 3) Finds related to production
 - 4) Written sources

Chapter VII Summary

Summary

This volume is the official excavation report of the government offices in the Fuchyou (不丁) area in the west front of the main government office of Dazaifu (大宰府). This includes 16 trenches excavated by the Kyushu Historical Museum, which has undertaken work since 1968.

The excavations unveiled 30 large-sized post-built structures from the 8th to the 9th centuries A.D. These structures could have been the important government offices surrounding the main government office.

The volume reports wooden writing tablets, ink-inscribed pottery, inscribed pottery and ink-slabs, which are important for considering the nature of the government offices. It also includes reports of salt-making pottery, pottery with lacquer and finds related to forging and casting, which are evidences of various production activities. In addition to these finds, roof tiles, bricks, pottery and porcelain are comprehensively examined and individual archaeological features are dated.

The government offices in the Fuchyou area changed through I to V stages between the beginning of the 8th century to the 11th century. In the late 8th century the eastern boundary ditch (SD2340) was filled with soil and buildings surrounded by roofed mud walls were constructed. These constructions were an epoch-making event for the government offices in the Fuchyou area which were important along with the main government office of Dazaifu (大宰府). The event is also important for considering the movements of the other government offices surrounding the main government office. The volume reveals a part of the nature of these offices.

報告書抄録

ふりがな	だざいふせいちょうしゅうへんかんがあと							
書名	大宰府政庁周辺官衙跡							
副書名	不丁地区 遺物編2							
巻次	V							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小田和利・杉原敏之(編集)・松川博一・酒井芳司・下原幸裕・岡田諭・小嶋 篤・比佐陽一郎・大澤正己							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3 Tel. 0942-75-9575							
発行年月日	平成26 (2014) 年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		(㎡)	
だざいふせいちょうしゅうへんかんがあと(ふちょうちく)	ふくおかけんだざいふしかんぜおんじ	40221	210316	33° 30' 45"	130° 30' 46"	1971.08.20 ～ 2004.12.17	12,944	学術調査 住宅建設
大宰府政庁周辺官衙跡(不丁地区)	福岡県太宰府市観世音寺2丁目7番地 他							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大宰府政庁周辺官衙跡(不丁地区)	官衙	奈良～平安時代	礎石建物・掘立柱建物・柵・溝・井戸・土坑・暗渠・粘土採掘遺構	土器・陶磁器・瓦類・木製品・金属製品・土製品・石製品・木簡		土器・瓦・木簡の多量出土		
概要	<p>本報告書は、昭和46年度から九州歴史資料館が進めてきた大宰府史跡の発掘調査の中で、大宰府政庁の周辺に広がる官衙地区のうち、不丁地区の出土遺物に関する正式報告書の第2分冊目である。出土遺物量は周辺官衙の中では最も多く、特に当地区を画する東西の溝からは極めて膨大な量の遺物が出土した。</p> <p>本書では、官衙の性格を考える上で重要となる木簡、墨書土器・刻書土器、硯等の文字関連資料や生産活動の痕跡である製塩土器、漆付着土器、鍛冶・铸造関連遺物等の特殊遺物について報告を行った。</p> <p>そして『遺物編1』で報告した、各遺構出土の瓦罎類や土器・陶磁器とあわせた検討によって、遺構の時期決定を行った。概ね大宰府政庁第Ⅰ～Ⅲ期にわたる遺構の変遷が理解されたが、第Ⅱ期の8世紀後半には東の境界溝(SD2340)を埋めて築地に囲まれた建物施設を造営し、9世紀後半頃までは段階的な建替えを行いながら変遷することを確認した。その後、小規模な建物が存続するものの、大宰府政庁Ⅲ期後半には遺構は廃絶し、施設が存在しない空閑地になっていったことを確認した。</p>							

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年号 25	登録番号 0016

大宰府政庁周辺官衙跡Ⅴ

一不丁地区 遺物編2-

平成26(2014)年3月31日発行

発行 九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢5208-3

印刷 株式会社 三光
福岡市博多区山王1丁目14-4